異世界転生の現実

るーみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界転生の現実

【Ｎコード】
Ｎ３３１６Ｖ

【作者名】
るーみ

【あらすじ】
転生先は、異世界エルフのお姫様。現実的なようで割りとそうでもない異世界転生です。基本主人公の一人称で進みます。異世界で送るホームドラマ的な物、になるかも？　Ｒ１５残酷描写は保険でつけておきます。恋愛要素は多分ありません。更新はできる間は毎日更新。

その1（前書き）

人物や背景の描写は必要な時に必要な分だけ書いていきます。
基本は全くありません。

人物のセリフは実際口に出したらこうなるんじゃないかな、と思って書いています。読み難い文章になっているかもしれません。

その1

「ほら、行くぞ。　大丈夫。そんなに緊張する事は無いさ」

「う、うん……」

そうは言っても、大勢の前に顔を出すのって恥ずかしいのよ。父様は慣れてるから気にならないんだろうけどさ。

「ははは、まったく可愛いな。何度も会った事のある顔ばかりだろう？　大丈夫、出てみれば意外に何とも無いものだ、と思う」

思う！？

ふう……。落ち着くのよ私。大丈夫！　父様も一緒なんだしね！

「うん、もう大丈夫。いこ、父様」

「ああ、手を繋いで行こうか」

答えて、父様は私の手を引いて歩き始める。

ドアを開け、外、バルコニーに出る。みんなが一斉にこちらを向いた。こっち見んな！

「……！！」

凄い歓声だ……。そこまで大人数ではないのだが……、なにこれこわい。固まっちゃったよ。

「ははは……」

父様は固まってしまった私を見て笑い、手を上に挙げる、まるで止めるように。

少しして、歓声がやんだ。父様凄いわ……

おっと……。父様に抱き上げられ、腕に座らせられる。これ、好きなのよね私。

「さ」

分かったわよう……。やーってやるさ！！

「し、しし、シラユキ・リーフエンド……です……。よ、よろしくお願いしま……す？」

何故そこで疑問系になるのよ私は！

そして二度目の歓声。うるさいよ！　怖いって！

今日は私の正式なお披露目。
父様母様に連れられて、結構会ってる人も多いんだけどね。それはそれ、これはこれ、緊張はするものさ。私まだ五歳なんだよ！

「手を振って」

えー？　どこのお姫様よそれ……。そう思いつつも手を振る。歓声がまた上がったような気がした。みんな元気だなぁ……

あ！　私お姫様だったわ……

私、シラユキ・リーフエンド。五歳です！　リーフエンドの国のお姫様よ。　姫よ姫？　羨ましいだろう？

元日本人の転生者、十六の女子高生だったのよ。色々あって、転

生する事になって、産まれた先が大国のお姫様だったのよ。運がいいね。

魔法有り、冒険有りのファンタジーな世界だけど、今の所あまり関係はないね。なんて言ったってお姫様だし、危険なんてものは一切無いよ。

お姫様だからこそ危険なんじゃないか、と思われるかもしれないが、この国の中にも外にも何かしようなんて考える馬鹿はいないよ。大陸最強の国だしね。最強であって最大ではない。

リーフエンドはエルフの国だ。そう、エルフ、ファンタジーよ？私はその王族、ハイエルフ。耳長いわー。

エルフとハイエルフは同じ種族っていう訳でもないんだけど、それはどうでもいいや。

エルフ。耳が長く、綺麗な容姿、魔法が得意で身体能力低め？植物と意思疎通？　無い無い、ゲームじゃないんだからさ。

確かに魔法は得意な種族だよ、耳も長いよ、美人も多い。でも身体能力が低めとかそんな変な種族いるわけ無いじゃん。いたとしても確実に滅んでるよ。植物と会話とか生暖かい目で見られるよ……畑仕事とか普通にしてるよ？　マッチョもいるよ？　マッチョエルフ……、新しいわ……。

エルフ、ハイエルフはこの世界では最強の種族と言われている。

魔法があるのよこの世界。魔法って凄い。それが得意な種族が最強になるのは当たり前だよね。

種族間の強さのバランスなんてゲーム的なものは無いの。それが現実よ。

お姫様なんだから政略結婚とか？　それも無いのよねー。ハイエルフはハイエルフ同士でしか子供作れないのよ、多分ね。

今現在ハイエルフは、この世界に七人しか確認されていない。みんな私の家族だ。

父様、母様、兄様、姉様。後、会ったことは無いけど、お爺様、お婆様ね。そして私の七人。

ん？　何かおかしい？　だよねー

お爺様、お婆様から産まれたのが、父様と母様。兄妹なのよ両親は、それが普通なのよハイエルフって。元日本人の私から見ちゃうから変に思えるだけ。結婚もしない。エルフは普通にしてるけどね。それは今は置いておこう。

将来私は、父様か兄様の子供を産むことになるだろう。実はそれは納得してるからいいのよ。だって、今は抵抗があるけど、百年二百年も生きれば考えも変わると思わない？

でも、恋だってしたいわ。他種族との子供ができないっていうのも絶対、とはまだ分かってないしね。

今はまだ五歳！　まだまだ子供！　深くは考えなくてもいいのよ！　寿命も不明な種族だしね。どうせなら長く太く欲張って生きたいものだ。

「うおおおおおおおお！！　姫えええええええええ！！　俺だ！！　結婚してくれーーーー！！！！」

あ、そのネタこっちにもあるのね。じゃないわ、本気で言ってるんだろう。あははは。

「誰がやるか阿呆！！　死ね！！　燃え尽きろ！！！」

声が飛んできた辺りに向かって、父様が火球を投げつける。

「ぎゃーーー！！　危ねえ！！！　殺す気かアンタは！！！！」

「お前が馬鹿なこと言うからだろうが！！　巻き添え受けるこっちの身にもなりやがれ！！！」

巻き添えを受けた人が文句を飛ばす。

「あははは……」

おおお……。馬鹿が一人周りから袋叩きにあっている。楽しそうだねみんな。

この程度の魔法じゃ誰も驚かないよ？　最強種族だよ？　軽くレジストするよ？　でも少し焦げてるね、アフロになればいいのに……

「シラユキを嫁に欲しくば、まずは俺を倒して見せろー！！！」

私をその場に下ろし、父様は民衆に突っ込んでいく。父様が暴走するのは、よくあることなので驚かない。

「無茶言うなこの親馬鹿が！！　やばい！　みんな逃げろーーー！！！　馬鹿親父が切れたぞーーー！！」

親馬鹿から馬鹿親父になったよ。意味合いが全然違うね……

「誰が馬鹿か！　ええい！　死ね！！！」

笑いながら逃げ惑う人々、とても、とても楽しそうだ。

王族とは言っても偉いって訳じゃない、ただの国の代表ってだけ。一応母様が女王ね。

エルフは人間や獣人に比べると、数が少なめな種族だからね、この国の国民はみんな家族のようなものなんだ。

「うーん、見えない」

今の私の身長だとバルコニーから下は見ることができない。

丁度よく、ここにはテーブルと椅子が用意されている。この椅子を拝借しよう。

ずるずると引きずり、上に乗る。お。見えた見えた。
とりあえず応援しておこうか。

「がんばってー、とーさまー！！」

手を振って元気よく父様を応援する。

「あ！　コラ！　やめろ！！！　姫それわざとだろ！！」

何をおっしゃるやら。もちろんわざとだよ。

「愛する娘の声援を受けた俺は無敵だ！！　よし！　ここは一つシラユキにいいところを……、大魔法でも見せてやるか！！」

私の応援を受け取った父様が、その場に止まりやばそうな魔法の詠唱を始める。大魔法、普通に死人が出るね。

出ないんだけどねー

「動きが止まった！　今だ！　囲め！！　畳んじまえ！！！」

「なっ！？　卑怯な！！　あっ！　やめっ……」

そりゃ足止めて詠唱始めれば隙だらけだしね。父様乙。

ふふふ。こんな感じの毎日よ？　身の危険も無いし、楽しいし、見る物全てが新しく、新鮮だ。

ありがとうね、女神様。私はこの世界で幸せになるわー！！！

その1（後書き）

主人公が転生した理由、経緯など、いきなり全ての説明はありません。
こちらも、必要な時に必要なだけ書いていきます。

その2（前書き）

ファンタジー設定という事で説明文が多めになるかと思います。
最低限必要な事のみでかなり省略はしてありますが、それでも少し長めになってしまうかもしれませんね。

その2

「くそう……、覚えてろ……」

父様ボロボロだ。何やってるんだかこの人は……

「はいはーい。それじゃ今日は解散よー！　みんなありがとねー！
仕事に戻っていいわよー」

おや、姉様だ。父様が潰されたから代わりにまとめに出て来たのかな。
人がバラけていき、ボロ雑巾になった父様がその場に残された。
ざんねん！！　とーさまの　ぼうけんは　ここで　おわってしまった！！

「ユー姉様ー！」

走り寄って姉様に飛びつく。

「シラユキもお疲れ様。可愛かったわよー。さすが私の可愛い妹！」

グリグリ撫でてくれる姉様、最高ね。私一人っ子だったしさー。
お兄ちゃんお姉ちゃんに憧れてたのよ。

ユーフェネリア姉様。私の大切な家族の一人、美人。綺麗と言うより可愛らしいと言った方が似合うか。見た目は高校生くらいだが、すでに百歳は過ぎている。エルフとしてはまだ若い方。

「見ていたなら助けないか、ユーネ」

あ、父様復活した。でも服はボロボロのままだ。

「あの人数に突っ込むお父様が悪いのよ」

正論だ。

「むう……、あれはシラユキの為の戦いであって、決してやつらがウザかったとか、そういう訳ではないんだぞ？」

嘘だよ、馬鹿にされて突っ込んで行った人が何を言うか。

「はいはい。そういうことにしておきましょう。それじゃ帰ろっか？　あ、お父様、シラユキが汚れるから離れてね？　お風呂入って着替えるまで触らないでね」

「そ、そんな……。シラユキを抱いて帰れないなんて……」

父様がっかり。私は気にしないんだけどねー

「私が抱き上げて行くから安心よ。さ、行こうか、シラユキ」

そう言って姉様は私を抱き上げ、頬擦りする。くすぐったいよ姉様。でも続けて！

「ふふふ。はーい。父様、また後でねー」

「そうだ！　シラユキも一緒に入ろう！　そうだそれがいい！」

「今日は私が一緒に入りますー！　お父様は殆ど毎日一緒に入ってるんだからいいじゃない。私だって、たまにはシラユキと一緒に入りたいわ」

「うおお……。夢も希望も無いのか……」

「大袈裟な……。行こ、シラユキ」

絶望する父様はとりあえず放置、お腹も空いたし家に入ろう。

私のお披露目から数日後。……暇だ。

さて、今日は何をしたものか。魔法の勉強はまださせてもらえないし、うーん……

私はまだ五歳。特に勉強とかもやれって言われてないのよね。言葉は通じるから、文字だけは覚えないといけなかったんだけど、それももう終わっちゃった。絵本を読む年でもないし。

あれ？　絵本読む年だよ！？　五歳だよ！　でも精神的には大人、じゃない、そこまで子供でもないのよねー

むう、普通の五歳なら、絵本読んだり、外で遊びまわったりするんだろうか？　外に遊びに行くのは家族の誰かか、護衛を付けないと駄目なのよね。護衛というか迷子対策の案内人なんだが。

勉強は全員一致で、「別にしなくてもいいんじゃない？」で終わった。必要になったら、その時々にやればいいっていう事らしい。寿命が長い分、どうしてものんびりとした性格になっちゃうのかな。

うーん、町の方に行ってみたいなー

リーフエンドは大きな森そのものが、一つの町であり、国だ。森の中にぽつぽつと集落がある感じかな。森の中の集落へは、許可を得たエルフのみしか入る事は許されてはいない。

森の入り口？　の方には大きな町がある。こちらはエルフ含め多種族が生活している。まだ行った事は無いが面白そうだ。

冒険者とかいるよね？　胸が熱くなるわ。

「ねえ、母様？」

近くにいる母様に聞いてみよう。結果は分かりきっているが。

「うん？　なあに？」

エネフェア母様。見た目二十歳程度、でも六百歳以上、超美人、巨乳、おっとこれはいいか。父様の妹で、私の大好きなお母様だ。家族の中で唯一私を叱ってくれる珍しい、じゃない、ありがたい存

在、なのかな？　このふくよかな胸に埋もれるのが私の密かな楽しみでもある。変態臭いな……。でも反省はしない。

「町に」

「駄目よ」

即答だった。まだ言い切ってもいないんですけど……

「まだダーメ。十歳になったら連れて行ってあげるって、いつも言ってるでしょう？　我侭言っちゃ駄目よ、もう」

やはり駄目かー。しかし後五年もあるのか……。この精神で子供生活を続けるのはちょっと辛いわ。

「はーい。ごめんなさい母様。嫌いにならないで、ね？」

「な、なるわけないでしょう！！　ごめんね？　厳しいお母様を許して！」

全力で抱き締められてしまった。

苦しいって母様。今のどこに厳しい要素があったのだろう？

こんな感じで、叱られるとは言っても、注意程度だ。私に対して激甘なのは変わらない。可愛くてごめんね？　……今のは無いわ、いや五歳なら有りか……

「ん？　町か？　俺は町はあんまり好きじゃないな。それよりコーラスんとこの花畑見に行こうぜ？　シラユキ花、好きだろ？」

本を読んでた兄様が顔を上げ、話に加わってきた。

「ルー兄様が見に行きたいんじゃないの？　主にコーラスさんを」

コーラスさんとは、かなり大きな花畑の管理をしている女性だ。母様以上の胸の持ち主の綺麗な人。エルフ美人多いのよねー

「なーに言ってるんだかコイツは。俺はユーネ一筋だって。あ、母さんとシラユキが嫌って訳じゃないぞ？　二人とも同じくらい好きさ。それに、あの胸は男なら誰でも惹かれるものだ。そこはしょうがないな、うん」

このおっぱい星人はルーディン兄様。見た目は姉様と同じくらいにしか見えない、でも実際は百五十歳以上だ、超イケメン。残念なイケメンか？　姉様のことを心から愛している。姉様も兄様一筋。よく二人の世界に入ってるのを見かけるわ。

胸云々言っているが、姉様は普通サイズだ。愛があれば胸のサイズなんて、ってやつだね。なにそれ。

姉様が生まれるまでは、母様一筋だったらしい。もしかしたら私の父様になっていたのかもね。複雑な家庭すぎるよ……

「ルーは本当に大きな胸が好きねぇ……。今夜は久しぶりに私としてみる？」

母様が何気に凄い事を言っている、ように見えるのは私だけなんだよね。

「いや、やめとくよ。母さんの事は好きだけどさ、俺はユーネを愛してるんだ。大丈夫、きっと母さんみたいに大きくなるさ。シラユキも大きく育てよー」

おいやめろ馬鹿。私はそういう話苦手なのよ、赤くなっちゃうのよ。五歳なのに今の会話で赤くなるのはやばいって。でも、できたら大きく育ちたい！

別にエルフが性に対しておおらか、とかそんな事は断じて無い。私の家族だけなのよ！　みんなエロフなのよ！！　うまいこと言ったよ私！

近親間の恋愛は、他種族でもそこまで珍しいという物でも無いんだけどね。でも人間種族だけは、それは無いわー、ありえないわー、と、完全否定している。

しかし、胸か……。確かに大きな胸には憧れるね。走ると揺れて痛い、とか、足元が見えない、とか言ってみたいよ。転生前の私なんて……、やめよう、死にたくなってくる。

「シラユキは将来美人になるわよー。ユーネも可愛かったけど、シラユキは、それを上回って有り余る才能を持っていると思うわ」

美人になる才能？　何それ欲しい。しかし、冗談でも嬉しいな。母様姉様くらいの美人になりたいものだ。後は、む、胸も欲しいな……

「うん？　どうしたシラユキ、黙り込んじゃって」

兄様が覗き込んでくる。イケメンのアップはくるものがあるわ……

「あう……」

「あらあら、照れちゃって。可愛いんだから」

「なんだ？　照れてるのか？　可愛いやつめ」

兄様が笑いながらわたしを抱き上げ、抱き締めてくる。だから苦しいよ！　アンタら力強いよ！　見た目細いのに何故だ！！　私が小さいからだよ！！　こら！　キスするなしまくるな！！！

「あー、本当に可愛いなシラユキは。ユーネの小さい頃を思い出すよ」

「ルーはユーネが生まれたとたん、私としなくなっちゃったのよね、寂しいわ。したくなったらいつでも言っていいのよ」

ああ！　やめて！　何で私の家族はナチュラルにこういう話できるんだろう。

「だからもうしないって……。ユーネとは、一目惚れ、かな？　運命ってやつさ」

カッコいい事言ってるけどゼロ歳児に惚れるなよ！　ロリコンってレベルじゃないよ！？

こんなエロフ家族だが、両親同士、兄姉同士、ちゃんと愛し合っている。父様兄様も他の女性を抱く気は無いらしい。

この言動からすると、母様はまだ兄様としたいみたいだし、姉様は姉様で父様には素直に甘えている。うーん、母様は怪しいな、エロフめ。

おっと、父様忘れてたよ。

父様の名前はウルギス。母様と同じように見た目は二十歳程度だが、千五百年以上生きているらしいね。ありえないわ千歳とか……私に激甘な家族の中で、さらに頭一つ出て私に甘い。とても優しくてカッコいい、大好きな父様だ。

今現在リーフエンド最強のハイエルフ。単騎で一国を滅ぼすとか余裕。怖いわそれ、人間兵器か、最終兵器お父さんか。先日のボコられ方を見ると、とてもそうは見えないんだけど……

お爺様お婆様に至っては、なんと三千歳以上！？　駄目だ、人間の常識で考えちゃ駄目だ。

二人はリーフエンドの建国者。今は冒険者として世界を巡ってい

るんですって。二人とも自然災害クラスの強さなので何も心配は要らない、との事。今もどこかでのんきに旅を続けているだろうと思う。

「ゆっくり、ゆっくり大人になればいいさ。急いで大きくなることも無いって。今はまだ好きなだけ遊んで、俺たちに甘えてればいい。町なんてすぐ行けるようになるし、行っても面白いものでもないしな」

「そうよ？　十歳二十歳、百歳なんてあっという間なんだから。子供は子供らしく、元気に遊びなさいね？」

子供かー、子供だよねー、五歳だしねー。しかし百歳があっという間か……

うん、童心に返って、と言うか、童心になって毎日好きに遊ぼうかな！

「うん！　ありがとう！　ルー兄様！　かーさまー！！」

子供時代は今しかないんだ！　精一杯子供らしく遊んでやる！！

「よし！　それじゃ早速コーラスの胸を、……花畑を見に行くか！」

「ルー兄様のえっちー」

「あははははっ！　男はエッチな生き物なのだ！！」

素敵な笑顔で言い切るな！！！

その２（後書き）

新作投稿開始です。

また一日一話を予定しています。

一話あたり２０００～４０００文字に収まる程度で書いていこうかなと。

以前の作品と似たようなタイトル、似たような本文ですが、よろしくお願いします。

その３（前書き）

一つのお話をいくつかに分けて投稿する場合が多くなると思います。
キリのよさそうなところで終わるようにはしていますが。

その3

兄様と一緒に花畑へやって来た。いろいろな花の香りが流れてくる、鼻がつんつんするわ。鼻がツンツンして、鼻水がデレっと出るわけね。なるほどこれが噂に聞く……、ふう。

意味不明な考えは思考の隅に追いやる。しばらくすると、魔法で水をまいているコーラスさんが見えてきた。遠目にも分かるあの巨乳は間違いない。

「コーラスさーん！」

手をふりふり大きな声で呼びかける。子供は元気が一番なのだ。よーし、このまま胸に飛び込むか。

コーラスさんは水をまく手をそのままに振り返る。え？　そのままに？

「きゃー！」

「冷たっ！　こらやめろ！　俺はともかくシラユキを濡らすんじゃない！！」

冷たい冷たい！　気持ち良いわ。兄様もこれくらいで怒らなくてもいいのに……

「あーらごめんなさい？　何か胸にいやらしい視線を感じたものだからつい」

気づかれてた！　しかしこれは見入ってしまうわ……、一挙一動

ごとにたゆんたゆん。

「ごめんなさーい。コーラスさんの胸大きくて、ついつい目がいっちゃうんですよねー」

「だよなぁ……。お詫びに揉ませうわやめろ！　かけるなかけるな冷たい！！」

おお、兄様だけ狙い撃ちになった。水をまく範囲も自由に変えられるって凄いなー

「まったくこの人は……。姫も姫よ？」

「うう……、だって大きいんだもん……。羨ましいなー」

わ、私もこれくらいになりたい！　拝んでおこうか。ありがたやありがたや。

「あ、そっちじゃなくてね」

「はい？」

「まだ敬語が出ちゃうのね、お姉さん悲しいわ。お友達に敬語を使われちゃうお姉さんかわいそう……。泣いちゃうんじゃないかしら、しくしく」

わざとらしい嘘泣きだ。しくしく声に出す人初めて見たよ。

「あれ？　また敬語出てました？　あ、出てるや……」

うーん、これはしょうがないよね。私中身子供じゃないし、いくらお友達と言っても、年上の人には敬語出ちゃうのよね。これも日本人のサガか……

「こーんな小さな頃から敬語なんて使わなくていいのよ。どうせこっちのと同じで外交とか出ないんでしょ？」

「こっちのとか言うなよ……。まぁ、あってるんだが」

兄様はいつまでもそのままの兄様でいてください。あんまりカッコよくなられると色々と困っちゃうわ……

「うーん？　私は分からないかなー？　大きくなったらやりたくなるかもしれないし」

首をかしげる。もっと子供っぽく話してみるかね。敬語はなかなか抜けないや。

「何この子可愛い……。でも、礼儀正しいのはいい事だと思うわよ？　こっちのはもうあきらかに駄目っぽいしね」

「ぬう、反論できない……」

「あははは」

「凄いですよねー、お花畑。あ……」

おっとまた敬語が出ちゃってるよ、難しいねなかなか。

「姫はそれでいいのかもね。無理に変える事もないかな……」

「可愛ければ何でも良いんじゃないか？」

そう思うのは兄様だけで、……違うな。私の家族はみんなそうか……

「なるほどね。敬語幼女に興奮する変態兄か……。ここで亡き者にしておいたほうがよくない？」

敬語幼女萌えであるか。うん、有りなんじゃないかな。

「ごめんなさい、コーラスさん。ルー兄様はもう治らないの、手遅れなの……。でも、見捨てないで上げて！」

「そうよね……。こんなのでも姫のお兄さんだし、こんなのでもこの国の王子だしね……」

そう、こんな兄様でも王子なのよ。それに、コーラスさんの手を汚させるわけにはいかないわ。

「こんなのこんなの言うなよ……。シラユキも何気にひどいぞ？」

「あ……、ごめんなさい、ルー兄様……。ごめんなさい……」

しまった、ついつい言い過ぎちゃった。コーラスさんと一緒にいると、なんでか調子に乗っちゃうのよね……

「あ！　怒ってない、怒ってないぞ！　あ、あ、あ！　泣くな！泣かないでくれ！！」

この程度で泣かないのに、もう……。あれ？　泣いてるわ私、子供だなー

「うっわ、妹泣かしてるわこの王子。これはエネフェア様に言った方がいいよね？」

「うお！　やめろ！！　母さんに言うのはやめてくれ！！　泣いたり笑ったりできなくされる！！！」

母様ひどい言われようだ。あんなに優しい母様なのに、何が怖いんだろう兄様は……

「泣かすつもりは無かったんだよ本当に。ごめんなー？　お兄ちゃん怖かったなー？」

兄様は私を抱き上げて優しくあやしてくれている。私はまだスンスンぐずっているが……。体と精神の違いか、ずれか、たまに暴走するのよね。難儀な体だわ。

「しっかりしてもまだ五歳なのよ。姫は多分、私の真似しちゃってるだけだから、怒るなら私を怒りなさいって。処罰でも何でも受けるからさ」

処罰!?

「わ、わるいのはわたしなの。コーラスさんはわるくないのー……」

「ああ、分かった、じゃない。……誰も悪くないから、怒ってないから、安心しな?」

「か、可愛い……。皆が甘やかすの理解できるわねホントに」

「こら、原因が」

「あっと、ごめんなさい。どうしようかしらね? 罰する? 一応不敬罪よね? この国でその罪で罰された人いないんだけどさ……。姫泣かした原因となるとさすがにね」

隣人皆家族を地で行ってる国だからね。不敬罪なんてあって無いような物だ。しかし、私を泣かすくらいが何だと言うんだろう?

「不敬罪って……、国民は家族だぞ? 誰がんなことするかよ。それに、泣かしたのは俺だよ」

さすが兄様、普段は軽いけど実際はちゃんとしてるのよね。ホントよ?

「ふ、ふたりとも、えーと……」

「どうしたシラユキ。誰もお前の事怒ったり、嫌いになったりなんてしてないからな? 大丈夫だぞ?」

あれ？　なんて言うんだっけ……？　言葉が出てこないや。たまにあるのよねこれも。

「えーと、えーと……。だいすき……」

オウフ。はっ、はっ、恥ずかしい！！　何言ってるのよ私はー！！　やばい、顔真っ赤じゃないかな今！？　とりあえず兄様にしがみ付いてごまかそう。

「ぐはっ！！　なんという破壊力だ……」

「くっ！！　この私がっ！！　あ、私にも抱かせてよルーディン」

あー、駄目だ。体のほうが落ち着くまで黙って抱きついておくか……

「駄目だ抱かせん！　お前への罰はそれでいいだろう？」

「そんな！　私に死ねと言うの！！　胸揉んでもいいから！　今なら三分揉み放題！！」

「よし、好きなだけ抱くがいい！！」

楽しいなぁ……。落ち着いたらお花見ようね、兄様。

その4

「可愛い……、可愛すぎるううぅ……。私も子供欲しくなっちゃう」

私は今、ベンチに腰掛けたコーラスさんにひざ抱きにされている。
目の前には巨大な双峰がある、これは同姓でも触りたくなるわ……

やっと心と体が安定してきたようだ、涙も止まり、落ち着いた。
勝手に子供らしい行動になってくれるのは、ありがたいものなのかもしれない。

うーむ、しかし、この胸はまことにけしからんなぁ……。これを三分揉み放題ですか兄様。しかし私が易々と思いどうりにさせるわけは無い。

「あの、コーラスさん、ルー兄様?」

「うん? どうしたの姫」

「もう平気か? 今度町で苺買ってきてやるからな? 許してくれな?」

苺!? haい! 許すます!!

「ありがとうルー兄様! 大好き!!」

「!? 目の前でこの笑顔……。これはくるわ……」

コーラスさんも私の可愛さにメロメロですね。しかし可愛いのも子供のうちだけ、今のうちに存分に可愛がってもらっておこう。

おっと話が逸れてる、戻さなければ。

「えーとね？　もう、三分以上経ったんじゃないかな？」

「三分？　何の事だ？」

「えー……、三分と言わず、もうちょっと抱かせてよー」

おや、いつものコーラスさんなら気づきそうなものだが。恐るべき私の魅力。

「ルー兄様がコーラスさんの胸を触れる時間は三分間、だったよねー？」

「え？」

「あ！」

コーラスさんがナイスだ、とばかりにニヤリとする。

「そうよね、もう三分は軽く経ってるわよね。まさか三分の間、一度も触ってこないとはねー。どうしちゃったのよルーディン？」

「お、おいおい。まだ開始も何も言って無いだろう？　後でだよ、後で。シラユキの前で揉めるか！」

姉様とのキスは誰の前でも平気でしてるのに……。方向性が違うか？

「開始時間なんて誰も決めて無いでしょう？　あなたは三分間、私は好きなだけ、よ？」

いい流れになってきた、さすがコーラスさん。

「そうだよルー兄様？　触らなかった兄様が悪いんだよ？」

「え？　俺が悪いの？　何でだよ！　いやしかし、シラユキの言う事だ、俺が悪いんだろう……。くそう、夢の三分間が……」

そう！　私の言う事は正しいのだ！！　がっくりと項垂れる兄様。ふふふ、兄様には姉様がいるんだから、他の人に手なんて出しちゃだめなんだから。

その後も軽い雑談を続けていた。

「そういえば、あの花、どこでも見かけるよな本当に」

あの花？　ああ、あの白い花か。

「あれはまったく手入れしてないんだけどね、さすがに女神様の花なだけあるわよねー」

「これだけ好き勝手に咲く花だと、どこでも女神に見られているようなもんだよな。誰も悪さなんてできないだろうな、これは」

二人の話す女神様の花とは、小さな白い花を咲かせる雑草に近い種。雑草などという草は無い、と怒られそうだ。

この花は世界中どこでも、どんな厳しい環境でも、そしてどんな季節にも花をつける、珍しい花のようだ。

まるで神様のように、どこにいても見られている、という意味なんだろう。女神草、女神様の花と呼ばれている。

実はこの世界の神様、私をこの世界に招いてくれた女神様は、この想像から生まれたらしい。らしい、というか本人がそう言っていた。

女神様が世界を創ったわけではなく、この世界の住人が女神様を創ってしまったのだ。

小さな花＝女神様でよかったよ。巨大な蔓系の植物でなかったことを神に感謝だ。神って誰よ。

そして、この花の本当の名前は、白雪草（しらゆきそう）。この世界でそれを知っているのは恐らく私だけ。

私の今の名前の元だね、この名前は女神様が付けてくれたんだ。前世の名前は女神様と対面した時点ですでに覚えていなかった。消されていたのか？

家族にどうやってその名前を伝えたか、というのは分からないが、神様的なパワーなんだろう。頭の中に電波送信？　怖いわ。

女神様からの干渉はそれで最後。もう死ぬまで、死んでも無いと

思う。

本来は、見守る、見張る、という役割の神様なのかもしれないね。

私は……、何と言うか、特別だったんだ。

そんな事を考えていたら、私のお腹から可愛い自己主張が鳴った。

うわ恥ずかしいな……

「あらら、お腹空いた？　どうするルーディン？　うちで食べてく？」

「お、いいのか？　それじゃありがたくご馳走になるか。な？　シラユキ」

「うん！　コーラスさんありがとー！」

わーいご飯だ！　……やばい、子供か私は。っと、子供でいいんだった。考えない考えない。

「姫は私がこのまま抱いて行くわね？」

「いやいや俺が」

「いえいえ私が」

「おなかすいたー……」

みんな笑顔の楽しい毎日。ずっとこんな日が続くといいな。

その４（後書き）

こんな感じの説明をはさんだ日常話が主になります。
特に大きなイベントとかは無く、だらだらゆるゆると続けていこうかな、と思っています。

その5

「魔法ねえ……。確かに便利と言えば便利だけど、まだ早いんじゃない？　シラユキまだ五歳よ？」

「でもな、ユーネ。シラユキが勉強したいって言ってるんだ、この俺に教えてくれと言ってるんだ！　叶えてあげたいと思うのが当然だろう？　なあ？」

さすが父様、あっさり味方に付く。姉様も私には甘いが、甘いからこそ危険な事はさせてくれないのだろう。

そう、魔法よ、魔法。何か一個くらいは使えるようになりたいじゃない？　私が女神様に貰った能力は一応魔法なんだけど、ちょっと違うのよね。それは今はいいか。

魔法の先生として私が選んだのは父様と姉様だ。兄様は何となく教えるの下手そうだし、母様はこの国の代表者、忙しい時もあるだろう。邪魔にはなりたくない。

その点、父様と姉様はいつも暇そうに、と言うか、いつも私と遊んでくれているからね。ちょっと教えてもらおうかと思って聞いてみたのだ。

「簡単なもの一つでいい、と、シラユキも言っているだろう？　本格的に始めるまでの予習くらいに見ておけばいいさ」

本格的に始めるのは十歳以降、という事らしい。

エルフ、ハイエルフの成長は、十歳までは他の種族と同じで、後は百歳くらいまでゆっくりと成長していく。百歳で成人。二十歳幼女とかもありえるわけだ。

うーん、違和感が凄いな……。人間的な考えは早めに捨てなければ、とは思うのだが、なかなか難しいね。最低でも前世の倍くらい生きなければ無理か。

「駄目よ、やっぱり駄目。この子に魔法をを教えるにはまだ早いと思う。十歳でも早いかも……」

あれー？　姉様の中で、私の評価は意外に低いんだ、結構ショックだよ。確かに甘えまくってるからね……

「十歳以降なら何も問題は無いだろう？　俺たちが付いて教えるんだ、それから十年も経てば、どんな魔法でも使えるようになるんじゃないか？　シラユキは天才だからな、俺の子だからな！」

父様は現在最強の魔法使いだからね、先生としては申し分ない。他の家族もみんなそうだ、魔法の修行に専念している訳でもないのに、この国のトップクラス、いや、トップ集団になっている。それだけハイエルフは凄い。

エルフが最強種族なら、ハイエルフは超最強種族、かな。どこかの戦闘民族のようだ……

魔法使い、という職業があるわけじゃないよ。剣を使うから剣士とか、そんな職分けがあるのはゲームだけだ。大抵は冒険者、の人括りでまとめられる。魔法がある程度は使えないと冒険者としてやっていけないと思うしね。魔法のみでも駄目だよね、きっと。

冒険者は肉体的にも魔法的にも、それなり以上に使えないといけないだろう。脳筋タイプの獣人や、竜人は別かな。

前衛、後衛に分かれるとかあるんだろうか？　いや、それって一人じゃ戦えないって事か……

姉様はため息を一つ、説明をする。

「あのねお父様、シラユキに魔法を教える、それはいいのよ、私も教えてあげたいもん。でもね、今は絶対甘やかしちゃうと思うのよ。厳しく教えるなんて、私には絶対無理だわ、無理無理。十歳になってもそう、今よりもっと、もっと可愛くなるわよこの子？　何でも許しちゃうわよ？　広範囲無差別破壊魔法とか平気で教えちゃうわよ？」

おお、よかった、そんな理由だったのか。甘ったれに教える魔法は無え！　とか言われたら絶対泣いてたよ。……広範囲無差別破壊魔法！？　広範囲を無差別に破壊する魔法か。なにそれこわい！！

「う……、た、確かにそうだ。絶対甘やかしてしまうに決まっている！　自分の事だからよく分かる！　そうか……、うーむむむ……」

なにやら話の雲行きが怪しくなってきてないかなこれ。このままだと十歳どころか、五十歳からにしようか、とか言われてしまいそ

うだ。

「でしょ？　だからね、私は成人からでも遅くは無いと思うの。成人までには日常使う魔法を一通り覚えておくべきだとは思うんだけど……、シラユキだからいいじゃない。百になってからにしましょうよ。ねえ、お父様」

成人！　百歳!?　それは先過ぎるでしょう!!　姉様だって、まだつい最近成人したばかりじゃない！

「そうだな……。どうせ嫁どころかこの国から出す気も無い。ゆっくり、ゆっくりでいいな。それでいいだろう、シラユキ？　魔法は確かに便利だが、生きていく上で必ず必要、と言うほどの物でもないんだ。たまに暴れてる俺やユーネは怖いだろう？　魔法は怖いものなんだぞ？」

まずい！　どんどんまずい方向に話が進んでるよ!!　成人で習い始めではなく、一生使えなくてもいいんじゃね？　的な話になってきてないかこれ!?

こうなったら手段は選んでられないね。……こちらも少しは退いて、しかし落とす!!

「ううう……、魔法使ってみたいよ……。お願い、父様、ユー姉様。十歳まで我慢するから、もう我侭言わないから、教えて？　お願い……」

ここで女の武器、涙でも流せればいいんだが、潤ませるのが限界か……。しかし十分効いているはずだ！

「あああああああ！　ごめんねシラユキ！！　意地悪したわけじゃないの！！　教えてあげる！　超広範囲無差別殲滅魔法でも何でも教えてあげるから！　泣かないでお願い！！！！」

「俺は……、俺は何ということを……。娘可愛さに自分の愛を、エゴを押し付ける所だった！　すまんシラユキ！！　十歳と言わず今からでも全て教えよう！！　集束型直線蹂躙魔法でも何でもな！！」

「怖い！　例えに出す魔法が怖いよ二人とも！！」

しまった！　つい突っ込んじゃったよ！！

だって超広い範囲を無差別に殲滅する魔法と、直線範囲を束ねられた魔法で蹂躙する魔法よ？　物騒を通り越して怖いわ！　引くわ！！　姉様無差別魔法好きだな！！

結局、小さな光の玉で辺りを照らす魔法を教えてもらえることで落ち着いた、夜に便利そうだ。

攻撃魔法とか多分一生使わないよ……、花に水をまくような可愛い魔法でいいのよ……

コーラスさんに教えてもらうべきだったか？　真っ先に最悪な部類の攻撃魔法が出てくる辺り、師事する人選を誤ったかもしれない。

後で聞いたことだが、父様は、一人で一つの国の首都、大きな町を、単独で、散歩気分で、簡単に潰せるほど強さ、なのは聞いていたのだが……、実際過去にやったらしい。

母様もそこまでいかないが、頑張れば同程度の事はできるとか。兄様姉様も、エルフから見れば若い方なのに、強さだけなら、冒険者でも上の上、もっと上でも通じるのよねきっと。

私の家族怖っ！　怖すぎるわ！！　でもみんな大好き！！！

その5（後書き）

魔法修行開始？

異世界っぽい！

その6

「ほれ、こんな感じだ、やってみろ」

兄様が自分の前に、握りこぶし大の光の球体を出す。

あれ？　手から出す、とかじゃないの？　ノーモーションなのか。魔法スゲー……。……？　やってみろ？　まさか見ただけでできるのが普通なのか？

「いくらシラユキが天才で可愛いからって、見ただけでできる訳無いでしょう……。まったくルーは……」

呆れたように言う母様。ですよねー。後、可愛い事は関係ないよ。

「シラユキならできるかも、と、ちょっと思ってしまった……」

「私も……」

父様姉様もですか。私そんなに頭よく見えるのかな？　あ、そうだったそうだった、私、五歳だったね。でも中身は元十六歳、五歳の言動じゃないよね。

あの後、どこから聞きつけて来たのか、母様兄様も私の魔法の勉強に参加する事になった。多分使用人の誰かが即伝えに行ったんだろう。メイドさんよメイドさん、あの服着てみたいわ……

使用人とは言っても仕えてくれているわけじゃない、そういうお仕事なだけね。一応私たちは王族だから様付けで呼ばれるんだが、普通に笑いながら砕けたしゃべりで会話したり、誰かがボケたらツッコミを入れてくれたりもする。素晴らしいなメイドさん、実に素晴らしいな。

「冗談だって。……実はシラユキなら、とも思ってたが。ま、基礎からかね」

兄様もかい！　これは、何と言うか、私、期待されてない！？やばい、これで魔法の才能全く無しとかだったら……

ががが頑張ろう！　しまったなー、早まったかなー……。十歳まで待てばよかったか。ええい！　考えるのは後だ、まずは基礎とやらをしっかり聞こう。

「はいはーい！　私説明したい。いいよねお兄様？」

姉様が可愛く挙手。姉様もまだ成人したてだ、家族の前では、まだまだ見た目相応の子供に見える。妹のセリフじゃないねこれ。私が一番子供だよ！！

「おう、俺の説明じゃ分かり難いだろうし、任せるわ」

「ルーは俺と同じで直感型だからなぁ……。教えるのには向かんな」

え、父様も感覚で理解しちゃうタイプなのか、意外だ……。兄様は納得、ひどいね私。

「それじゃ、私は足りない所の補足説明に回りましょうか」

魔法を教えてもらうのは、母様、姉様の二人がメインになりそうだ。母様は忙しいとして、主に姉様か。これは甘やかされそうだねまた……

「はーい！　おねがいしまーす！！」

さあ、魔法使いへの第一歩だ！　現代日本人だった私には、魔法は憧れの様な物、空飛んだりできるといいな……

「まぁ、説明って言っても数分も掛からないんだけどね。魔法は感覚で使うものだし」

ん？　数分も掛からない？　感覚で使う？　何やらいきなり怪しくなってきたな……

「シラユキは、自分の魔力、分かる？」

ま、魔力？　自分の中の力的なナニカですか。うん、全く分かりません！　首を振って答える。

「分かんない。どういうのなの？」

「普通分かんないよねー。むしろ分かったら怖いわ」

ひどい！　嘘ついて分かるとか言わなくてよかった！　普通は分

からないものなんだね。
駄目だ、私まだ、小説とか漫画のお約束設定が頭から抜けきってないよ。まずいなー、感覚で使う魔法って、変な固定概念持ちの私には難しいんじゃないだろうか？

「先に説明だけしちゃいましょう？　すぐに終わるし、その方がいいわ」

「あ、うん。そうだよね、魔力なんて、ただそういう名前付いてるだけの単なる謎パワーだし」

謎パワーなんかい！！　アンタたち魔法最強種族のハイエルフだろう？　それでいいのか……

「簡単に説明しちゃうね？　魔法っていうのは、魔力って言う謎の体内エネルギーを、現象に変換する技術の事よ。説明終わり」

はやっ！！　早いよ短いよ分かんないよ！！！
へ、変換？　現象に？　謎エネルギーの魔力は、分からなくても変換には使えるの？

「うわ、可愛いなコイツ。全然分からないって顔してるぞ」

「短すぎるわよユーネ。でも、その通りなのよね。変換にはイメージが大切っていうくらいかしら、補足は」

うるさいよ兄様。くそう、兄様みたいな、直感で動くタイプ向きの技術なのか魔法は……

簡単に、すでに超簡単だが、まとめると。

「一言で言うと、イメージを力に変える技術、だな」

父様にまとめられた。

どうしよう……、全く分からない……。イメージを現実にするんだよね、多分。うん？　魔法の詠唱は？

「父様が、大きな魔法使うときに話してる言葉はいらないの？」

イメージのみで結果を出すなら、詠唱なんていらないよね？

「ああ、詠唱か。基本はいらないな」

いらないんかい！！　カッコつけか、カッコつけてただけなのか！？

「あれはな、イメージの底上げに必要なんだよ。詠唱有りと無しとじゃ、実際の発動効果に大きく差が出るんだ」

大きな魔法の場合はね、と、母様が付け足す。

「さっきルーが見せたくらいの魔法じゃ、詠唱なんて必要ないわ。でも、初めは何か口に出したほうがイメージしやすいからね、自分で何か考えるといいわよ」

自分で勝手に考えていいんだ……。あー、なるほどね、なんとなく分かってきたよ。

「それにな、あったほうがカッコいいだろう！？」

やっぱりカッコつけだったか。

父様クラスの使い手になると、大魔法と呼ばれる物でも、詠唱無しで連発とかできちゃうんだろうね。詠唱有りなら効果アップか……。改めて怖いわっ！！

「だよな？　さすが父さん、分かってる」

うん、兄様もそうだろうとは思ってたよ。

うーん……。体内の謎エネルギー、魔力については完全無視でよさそうだ。実際に使う時の事を考えてみようか。

小さな光の玉を出す、という魔法。名前は、あ、名前。

「ねえ、ルー兄様？　さっきの光る魔法って名前はあるの？」

「名前か？　俺はライトボールって呼んでるが……」

分かりやすい名前だなぁ……、英語っぽいのは翻訳機能のおかげか。……俺は？

「おっと、そこもか。ユーネ頼んだ」

「はいはい。いい？　シラユキ。魔法に名前なんて無いの、あくまで現象を起こすだけのものだからね。例えばライトボールなら『光の球体を出す魔法』、かしら？　名前があるのなら、だけどね？」

「そのまますぎるー！」

おっと突っ込み入れちゃった。しかし、ホントにそのままだな……

「だってね、一々現象一つ一つに名前なんて付けてたら、キリが無いでしょう？　全部一纏めで『魔法』でいいのよ」

そうなのかな？　よく分かんないや……

「もう、シラユキはまだ五歳なのよ？　ちゃんと分かりやすく教えてあげなさいね」

「あ、ごめんなさい、母様。この子大体なんでもすぐ理解しちゃうから、ついついね……。シラユキもごめんね？」

「んーん？　大丈夫だよ姉様。みんな優しく教えてくれてるもん」

「きゃー！　この子良い子すぎる！！　可愛すぎる！！！」

姉様は私を抱き上げてクルクル回りだす。

「わわわわわ」

うわ、漫画とかでよく見るけど、これ実際やられるとかなり怖いわ……

「ごめんなさい、取り乱しました。お見苦しい姿を見せた事を心から反省します」

回る怖さに泣き出しかけた私、慌てて止めるみんな、怒る母様、謝る姉様。い、色々な意味で怖かったわ……。特に母様が。

その7

魔法に名前が無い理由はこうだ。

ライトボールを例に考えてみよう。

ライトボールは『光の玉を出す魔法』、だね。それなら、その光の玉を、歩くのに合わせて動かしたり、その場から遠くへ飛ばしたりする魔法は？　『光の玉を自由に動かす魔法』、かな？　さらに光の玉に熱を持たせたり、その光量、熱量を上げたり、サイズを変えてみたり、点滅させてみたり……、キリが無いねホントに。

これは、この光の玉に関する魔法はひとまとめで『ライトボール』、と、兄様が勝手に呼んでいるだけだ。起こる現象一つ一つに名前なんて付けられるものじゃない。

勝手に呼んでいるのはイメージがしやすいから、なんだろう。兄様の場合はカッコつけが大部分を占めるんだろうが……

確かに、これは感覚で使うものだね。ライトボールの言葉一つで、恐らく全部の効果を使い分けているんだろう。ますます私には難しくなってきちゃったぞ。

私は頭脳タイプの人間だ、だった、今はエルフか。動くよりまず、頭で先に考えるタイプ、面倒くさがりとも言う。言うか？　私だけだよそれは！

魔法一つ一つに名前が無いのが一番痛いな。全てイメージで補わないといけないのか。考えるのが得意な私には、合っているのかそうじゃないのか、難しいところだね。

兄様みたいにライトボールの一言で、光の玉関係全般を操る、な

んて事はとてもできそうにないぞ……。うーむ、困った。

感覚、感覚で使う、か。実際魔法を目の前で見て、イメージは断然しやすくなった。光の玉を出す、と言う事は恐らくできるだろう。しかし、それを自由に動かしたり、熱を持たせたりか……

これは……、難しいな……

「シラユキー？　聞いてるー？　シラユキったら」

「あ、え？　ごめんなさい姉様、考え事しちゃってた」

姉様が話しかけてきていたようだ。駄目だねもう、私ったら、こんな時こそ家族に頼るべきだろう。

「どう？　できそう？」

「うん！　全然できそうに無い！」

できなくても元気に答えよう、私はまだ五歳なんだ！

「あはは……、それじゃアドバイスを一つ、ね？」

「うん！」

姉様大好き！　言葉に出すと話が進みそうにないので心の中でね。

「深く考えない事、よ。魔法なんて適当でいいのよ、適当で。初心者は、パッと考えて、カカッと名前付けて、ポーンと出しちゃうのよ」

考えないって難しいいいいいいい！！！

「ううううう……」

「あららら。ルーもユーネもこの説明でできちゃったのよねー。懐かしいわ」

「うむ。我ながらかなり的を得ていると思う」

父様が考えた説明かそれ。くそう、アンタらみんな天才なんだよきっと……

「考えるなって、まずはやってみな。ほれこんな感じ」

兄様がライトボールを五個くらい出現させて、自分の周りを自由に動かし、って！　なにそれ凄い！！！

「凄い！　きれい！！　ルー兄様すごい！！」

「お、おお！？　大喜びだなオイ。よーし見てろよ」

さらに十個程追加し、今度は私の前にまで飛ばす。そして、私の

周りをくるくると回りだす光の玉。

「うわ！　うわあ！！　きれい！　でもまぶしい！！　でもすごい！！　やっぱりまぶしいよ！！」

あまりの綺麗さに暴走状態に入ってしまった。落ち着くまでもう勉強はできなさそうだ。

「ずるいぞルー！　一旦消せ！　シラユキ、今度は父様の魔法を見せてやろう」

父様が張り切ってる。しかし暴走状態の私には止める事はできない。大丈夫なのかこれは……

広い部屋全体に、沢山の光の玉が、出、た……

「うわっ！　オイやめろよ父さん！！」

「眩しっ！　目がチカチカするわよ！」

「あら、綺麗ね」

赤、青、黄色、緑、その他いろいろな色の光の玉が、点滅しながら部屋中を縦横無尽に動き回っている。目に悪いよこれ！　部屋を明るくして離れて見てね！　部屋の中が明る過ぎるんだよ！！　逃げ場無いよ！！！

「父様すごいすごーい！！　でもめがいたくなってくるよ！　目がー！　めがーーー！！！」

暴走状態でもお約束は忘れない私、褒めてもいいのよ?

「うう、まだ目がチラつくわ」

「この程度で軟弱な」

「無茶言うなよ父さん。でも、何で父さん母さんは平気なんだ?」

「あ、そうだよね、ふしぎー」

まだ目の中に光の残滓が残ってるよ、丸い玉の残像がいっぱい見えて、視界が嫌な感じだ。

「目に入る光を抑える魔法を使えばいいでしょう? 咄嗟に使っちゃうのよね、私たちは。昔の癖はそう簡単に抜けないわ」

「そっか、でも態々こんな事程度で魔法使うのもな……」

「だよね。私は実戦なんてした事無いし、まだまだそこまで考えられないや」

姉様よく父様とドカンドカン撃ち合いやってるじゃん。あれうまく防がなければ死んでるよ! 実戦だよ殆ど!! この天才どもめ!!!

おっと、それより今は。

「母様、凄い……」

うん、今の一言はとても良い勉強になった。暴走状態も落ち着いたようだね。

大袈裟に言うなら、瞬間的に防御魔法を展開したんだろう。

凄いわ、運がよかったよ私。今のお遊びでとても重要な事に気づかされた。ありがとう母様。

父様も同じような魔法で、目に入る光を和らげていたはずだ。『光の玉を出し、自由に動かす魔法』と『目に入る光を和らげる魔法』か。もしかしたら他にも複数使っていたのかもしれない。

魔法の複数同時発動か？　いやいや違う。言うなれば『光の玉を出し、自由に動かし、目に入る光を和らげる魔法』と言ったところか。他にもあるならもっと名前が長くなるだろう。

さらに母様の咄嗟の判断力、こちらも別の意味で勉強になった。イメージが即防御にもなる。眩しいと思った、思う前にノーアクションで防御が可能なのか。日差しが眩しい時に、反射でまぶたを閉じるような感覚で防御魔法を使ったのだ。

これは……、冗談抜きで凄い。凄まじいな、魔法ってやつは。本当にイメージが全てなんだ！

目の前に道ができたような気がするよ。これは、私にも何とかなりそう！

「ふふふ。何か掴んだみたいね」

「え？　今ので？」

姉様が何で？　と驚く。そうだよね、今ので何か分かるとは思えないだろう。

「やっぱりシラユキは天才だな！　さすが俺の、俺たちの娘だ！家族だ！！」

「ああ！　……そうだ！　父さんやるぞ！　明日は祭りだ！！　宴会だ！！！」

「まだ一個も魔法使えて無いってば。でも、お祭りか、いいわね！」

「うん？　しちゃう？　それじゃ明日はお祭りね。あ、手配お願いね」

母様が早速メイドさんに指示を出す。

え？　何のお祭り？　この前も私が文字を覚えきった記念、とか言ってお祭りしたばかりじゃない。

「え？　え？　何の？」

「ん？　何だっていいじゃないか」

よくないよ兄様！　よく分からない理由でお祭り開催しちゃ駄目だよ！！

「そうだな……。シラユキが魔法について何か掴んだ記念祭、でいいか」

「何か掴んだだけで！？　普通は使えるようになったら、じゃないの！？」

最近私ツッコミ役に回ってるな……。メイドさんたちも手伝ってよ！　ボケが三人もいるんだよ！？　あ、あれは駄目だ！　すでにお祭りを楽しみにしてる顔だ！！　エルフはみんなこんなのばっかりなのか！！！

「細かいなお前は……。お？　それなら、魔法使えた記念祭も開けるんじゃないか！？」

「そうね！　それもいいわね！　さすが私の愛するお兄様！！」

「よーし！　そうと決まれば勉強なんぞもう終わりだ！！　酒買いに行くぞ酒！！　後は肉もか！！」

「おう！　俺も手伝うよ父さん！！」

二人とも早速窓から飛び出していく。おいおい、王族が買出しに行くのかい。……窓！？　ここ四階だよ！？

私の住んでる家は、森の中心にある大木をくりぬいて住居に改造してある。メルヘンすぎる。木が死んじゃうんじゃないか？　と思うが、これも魔法的なナニカが働いているんだろう。考えないのが一番だ。慣れるんだよ私。

「うわ！！　飛んでる！？　あれも魔法なの！？」

飛んでる！　飛んでるよ！？　いいな、いいな！！！

「あれは、飛んでると言うより、高く斜めにジャンプしてるって感じかしら？　まったく、二人とも子供っぽいわね」

姉様呆れ声。でも姉様も人の事言えないんじゃ……？

「飛ぶ事ももちろんできるわよ？　でもね、スピード出して飛ぶのは疲れるから、蹴って跳んだほうが楽なのよ。シラユキは女の子なんだから、あれは真似しちゃ駄目よ？　スカートの中見られちゃうからね」

はっ！？　そんな問題があるんだ！　スカートで空を飛ぶ、っていうのも漫画の中だけの話なのか……。ズボンは嫌だからスパッツを穿こうかな。パンツじゃないから恥ずかしくないもん。

今のは跳躍魔法とでも呼ぼうか。走ったら疲れるが、蹴り飛んで落ちるのは瞬発力と慣性の力か。風圧をどうにかする魔法、姿勢を制御する魔法、それに。蹴る時に窓枠を傷つけないようにする魔法も使っていたんじゃないかな？　他にもきっと色々、全部感覚で使

ってるんだ！

なるほどなるほど、なるほどなー。カチリカチリとパズルのピースがはまっていくような感じ。

ふふ、ふふふふ……

これはいける！　できるわ！　私にもできそうだわーーー！！！

まずはスパッツの用意だ！　じゃないよ！！　まずは光の玉だけだよ……、他の魔法は十歳までお預けだよ……

その7（後書き）

なにこれイミフという方はお気軽に感想で質問してください。
分かり易い説明はできないかもしれませんが。

ここちょっとおかしくね？　という所もあったら是非お願いします。

その8

初心者の私は、パッと考えて、カカッと名前付けて、ポポポポーンと出すんだよね？

母様、姉様の二人もお祭りの準備へ行ってしまった。残りは私だけ、ではなく、いつも側にいるメイドさんたちもいる。

先生がいなくなっちゃった事だし、勉強はここまで、と言う事にはしたくない。折角なのでメイドさんたちに聞いてみることにしよう。

「メアさん、シアさん、フランさーん？」

「はーい。なーに、姫？」

メイドさんその一、メアリーさん。見た目中学生くらいに見える。性格も見た目通り。でも胸がおかしいサイズ。体に合ってないよそれ！！

「何か御用でしょうか、姫様？」

メイドさんそのニ、バレンシアさん。超美人なのよこの人。大人のできる女性って感じがいいわ。シアさんも大きめサイズ。

「どうしたのシラユキ？　お腹空いた？」

メイドさんその三、フラ……この人名前超長いのよね、覚えてな

いわ。略してフランさんと呼んでいる。見た目大人の女性だが、結構軽い性格だ。こちらも胸がおかしいサイズ。

美人巨乳エルフメイド三人組であるか。他にも家には沢山メイドさんがいるが、私に常についていてくれるのはこの三人だ。私の呼び方も三者三様だね。私付きは仕事が少なくていい、と喜ばれている。そういえば男性の使用人って見かけないな……

ちなみに、三人とも当たり前に成人しているので年齢は百歳以上だ。年齢って誰も気にしてないのよね、百歳で成人してからは、結構どうでもいい事らしい。

いやしかし、目の保養になるわ三人とも。おっとオヤジ臭いよ……

「三人とも、魔法使えるよね？　教えて欲しいな」

「え？　うーん……。あー……、どうしよっか？　シア」

「私は構いませんが、私たちの意見は多分参考にはならないかと」

「だよねえ。さっきの説明で使える人は極一部だけだと思うよ？　あ、シラユキは問題ないと思うけどね」

やっぱり天才向けの説明だったのか！！　あれ？　少し理解しちゃった私は天才なのか？　まっさかー

「シアシア、説明してあげて。私もフランもこういう説明には向い

てないのよ」

「そうそう、私たちは胸に栄養行っちゃってるからね。レンにお任せしちゃおう」

レン、とはバレンシアさんの事ね。みんな結構呼び方がまちまちなのよ。統一しろ！！　ごめんなさい私も愛称で呼んでます。フランさんに至っては名前覚え切ってすらいません……

「遠まわしに私の胸が小さいと言いたいんですね、分かりました。お相手しましょう……」

シアさんが纏う空気が変わる。おっとやばいよやばい。シアさんだって大きめなはずなのに、この二人がねぇ……。

「シアさんの胸のどこが小さいの……。私も大きくなったらそれくらいは欲しいなーって思ってるのに」

「あら？　そうですか？　うふふ。命拾いしましたね二人とも。姫様に感謝しなさい。その後もげろ」

「もげろとか怖いよ！」

胸を押さえフランさんが下がる。もげろは実際言われると怖いわ。……あれ？　怖いかな？　あ！　胸無いから分かんないや！　もげろ！！！

なんかエルフって巨乳多いな……、漫画はアテにならないよホントに。弓使うからだっけ？　魔法の説明聞いた限りじゃ、弓とかあまり意味無さそうだよね……

「しかし、私たちがお教えしていい物なのでしょうか？　やはり、ある程度使えるようになってからの方がいい、と思うのですが」

「確かに。姫って考え込んじゃうタイプだよね」

「うんうん。やっぱりやめとこっか？　ごめんねシラユキ」

「え？　えー」

急に何よ三人して。気になる！　気になるわーー！！

「いいじゃない、いいじゃないそんな事は。あ、そだ。シア、クッキー焼いてあったよね？」

「え？　ええ」

これまた急な問いにシアさんが頷く。ほう？　クッキーとな？

「お？　おやつにする？　それじゃ私はジャム取って来るわ。メアは紅茶お願い」

「苺ジャムで！！」

苺ジャムこそ至高。私のせいか、我が家の苺の在庫は切れることは無い。

「はいはい、分かってるって」

「それでは私も、用意して参ります」

「紅茶かー。シアやってよ、私クッキー取ってくるからさ」

「いいですよ？　場所、分かります？」

「大丈夫！　適当に探すからーー！」

メアさんは言いながら走って行ってしまった。そして揺れる胸、もげろ。

「フランはエネフェア様に今回の事を伝えてもらえます？　ジャムも私が用意しますから。姫様に魔法を、ご家族の方たち以外はお教えしないようにしましょう、と」

そんなー……。うん？　ああ！　危ないからか！

確かに私の家族なら、私がどんな失敗しても大丈夫そうだよね。笑顔で広範囲破壊魔法とか押さえ込みそうだよね。普通に想像できちゃうわ……

「りょうかーい！　伝えたらすぐ戻るから、シラユキちょっとだけ待っててねー！」

フランさんも走って……、もげろ！！

「まったくあの二人は……、本当にもいでやろうかしら……」

「シアさん怖い！！　一応言っておくけど、シアさん普通に大きいからね？　私から見たらもげろ対象だからね！？」

「それは、姫様はまだ五歳ですし……。エネフェア様を見ていると、将来姫様もああなっておしまいになられるんじゃないかと、もう、戦々恐々の毎日です。そうですか……、私も対象に入りますか……」

あ、少し嬉しそうだ。まさか、この世界シアさんサイズが小さめって事無いよね……？

「ユー姉様くらいが普通だよね？　そうだよね？　そうって言ってよ！！」

「え！？　ええ！　ユーフェネリア様くらいのサイズが普通ですよね！　ふう、最近周りに山脈ができてしまって自信を無くしていたようです。お恥ずかしい。お見苦しいところをお見せしました。申し訳ありません」

深々と頭を下げるシアさん。小心者の私に頭を下げないで！　困っちゃう！　でもね？

「シアさんも立派な山脈の一角だからね！？　ユー姉様の前でそれ言っちゃ駄目だよ……？」

姉様も小さくはないのだが、周りの山脈が高すぎて見劣りしてしまう。本人気にしているようには見えないんだけどね、気をつけることに越した事は無いだろう。うんうん。

「それでは、私も紅茶とジャムの用意へ行って参ります」

「うん！　いってらっしゃーい」

ペコリと丁寧なお辞儀一つ。シアさんも出て行ってしまった。

クッキーと紅茶、おやつは楽しみだ。苺ジャムを乗せてー、っと？

ああ、私、おやつでごまかされたのか！　気づくんじゃなかった！！　ま、五歳だし、しょうがないよねー？

その8（後書き）

各キャラの容姿などの描写は、また必要なときに。胸のサイズは必要。

キャラ紹介でも別に作ろうかなとも思っています。

その9

「えいっ！　えいえいっ！　出ろっ！　出てっ！　光れ！　光ってよー！！」

くそう！　出ない！　そもそも光の玉って何なのよ！！　熱を持ってない発光体とか想像できないって！

「ああ……。姫様可愛い……」

「こりゃ、無理そうだねー」

「考えすぎだよねぇ、もっと肩の力抜けばいいのに」

うるさいうるさーい！　肩の力ってどう抜くのよ！　誰か説明してー！！

おやつ休憩の後、早速光の玉、兄様命名ライトボールの魔法の練習を始めた。母様が言うには、この程度の魔法ならメイドさんズがいる時なら練習してもいいそうだ。この三人が側にいないときなんて滅多に無いんだけど。

「姫ってまだ五歳なんだよ？　普通始めるのって十歳からだしさー、できなくても普通なんじゃないの？」

「そうそう、いいじゃん後五年後で。五年なんてあっという間だよ」

「私は見ていて楽しいので止めません」

三人とも好き勝手言ってくれる……。能力を使えばこれくらい軽くできるのよ！　ライトボールじゃなくて、ライトボールっぽい何かを出す魔法になってしまうんだが……

「みんなはどれくらい使えるの？　魔法」

この三人はどの程度の使い手なんだろう？　私の家族がおかしすぎて普通っていうのがよく分からないのよね。

「日常生活で困らない程度？」

「だよね」

「私はそれなりに、でしょうか？」

「分かんないよ！！」

駄目だ！！　そうだよね、普通って説明できないんだよね……

「う、うーん……。父様たちみたいにドカンドカンできたりするの？」

「あ、そう言う事。無理無理。あの人たちみたいに、あの威力の攻撃魔法を詠唱破棄で撃つ事自体」

「メアッ！！」

「おっと、ごめんごめん」

ビックリした。シアさんが大声を出すところなんて初めて見た。やっぱシアさんは怖いわー。でも好き。

「ど、どうしたの？」

「ああ……、すみません姫様、驚かせてしまったようで……。ええと……、メアが王族の方々をあの人たち呼ばわりしていたので、つい……」

「そんな事気にしなくてもいいのにー。フランさんなんて私の事呼び捨てだよ？」

「レンは外から来たからしょうがないって。ね？」

「え、ええ。私はこの二人とは違ってリーフエンド生まれ、という訳ではないんです」

「え？　そうなの？」

知らなかった。この国の外でもちゃんとエルフは生活してるんだよね。

冒険者になったり、他種族の人と結婚したりで、国の外に出て行ってしまうエルフも多い。そうなると、長寿命のエルフが世界に溢れかえるんじゃないかと思うが、なかなかそうはいかない。

冒険者は常に死が付きまとう職業だし、子供も生まれにくい種族だしね。増える量と減る量が大体同じなのかな？　怖い考えだが、よく分からないや。

エルフは同種族以外だと、人間のみと子供を作ることができる。ハーフエルフだね。ハーフエルフには、人間寄りとエルフ寄りの二パターンがあって、耳の長さで見分ける事ができる。

人間寄りの場合はほぼ人間と変わらない、寿命が、通常長く生きて百程度が、百五十程度に伸びるくらいだ。人間からすると結構違うのかもね。

エルフ寄りの場合。こちらもほぼエルフと変わらない。寿命が減る、という話もあるらしいが、ハーフエルフ自体数が少ないらしいので、あまり分かっていない。

エルフの子供は、エルフ同士、人間との間、ハーフエルフとの間、の順で生まれにくくなる。エルフ同士の時点で百～ニ百年に一人生まれるかどうか、と言われている。人間寄りのハーフエルフは子供ができないまま寿命を迎えるのが当たり前状態だ。ちょっと悲しいねそれは……

私たち家族、ハイエルフの場合はもっと生まれにくい。千年に一人、といった感じか？　両親がそうだね、約千歳差。

母様は二百年も経たずに三人の子を生む、という奇跡的なことをしてしまっていて、エルフの間では子宝の神として崇められている。いやだよ母親が子宝の神って……

ハイエルフは生まれやすいんじゃない？　と思うが、お爺様、お婆様がそう言っていたらしく、間違いは無いだろう、との事。

「シアさんはどこから来たの？　冒険者？　それともただの移住者？　それとも犯罪を犯して逃げてきたとか……」

「シアならありそうで怖いよ……」

「失礼な……。え、と、一応元冒険者、だったのですが」

お、おお！　ぼ、冒険者！！　シアさんが元冒険者だったとは！……？

「うん？　シアさんが冒険者ってちょっと想像できない……」

物腰穏やか、丁寧な言葉遣い。メイドになるべくして生まれてきた人に思えるんだが……

「え？　ぴったりじゃない？　レン強いよ？」

「そうそう！　シア怖いよ？」

「そうだよね！　シアさん強くて怖いよね！」

「……分かりました。私の強さ、その一端を軽くお見せしましょう」

きゃーー！！　言い過ぎた！　逃げて！　二人とも逃げてーー！！

「でもシアさんってさ、まさにメイドっていう感じだよね。冒険者なんて荒事できる様には見えないなー」

逃げ出した二人は帰っては来なかった。なむ。

「冒険者、と一口に言っても、色々とありますからね。私のような変わり者も、少なからずいるとは思いますよ」

「そっか、そうだよねー」

なるほど、種族もさまざまなこの世界、私の知らない事ばかりなこの世界だ。冒険者一つ取ったとしても想像とは全然違うものなのかもねー……

「シアさんの冒険者時代のお話、聞きたいなー」

「冒険者の話など、聞いていて面白いものではないと思いますが」

う……、それもそうかも？　人の生き死にの話もあるよね……

「あ、明るい話ってないの？」

「明るい冒険話、ですか？　うーん……」

悩んでる！　冒険者は明るい話も無いのか！　命を懸けて富と名声を求めるのみなのかっ！！

「何か楽しかったお話は無いのー？」

「そうですね、では……。ある商隊の護衛中に、大規模な魔物の群れに襲われ、全てが終わった後、立っていたのは私だけだった、というお話はどうでしょう？」

「楽しくないよそれ！　怖いよ！！　なんでシアさんだけ生き残れたの！？　他の人全滅！？」

「ある意味、楽しそうじゃないですか？」

「どんな意味！？　やっぱりシアさんこーわーいー！！」

この日は結局、一回も魔法を成功させる事ができずに終わってしまった。

明日から頑張る。明日から本気出す！！

その１０（前書き）

ちょっとストックが貯まりすぎちゃってるので、少し放出します。

その10

「皆！　今日はよく集まってくれた！！　昨日、我が愛する娘、シラユキが……」

凄い！　父様凄いわ！　誰一人話聞いて無いわ！！

今日はお祭りだ。私が魔法について何かを掴んだ記念のお祭り、だ……

なんだかなぁ、もう。みんな過保護すぎるよ、嬉しいけどさ。月に一回は私のせいでお祭りしてる気がするよ……

きっと、これから毎日お祭りをしようぜ？　的な感じでまだまだ開催されると思う。

広場に集まった国の暇な人たちは、まだ演説を続ける父様を完全に、最初っから無視し、料理を食べ、お酒を飲み、楽しんで騒いでいる。

みんな楽しそうだし、いっか。

「シラユキー、食べてるかー？」

お酒を片手に兄様がやって来た。もう既に出来上がっているようだ。

「あ、こら！　お酒飲んでる時はシラユキに近づかないでって、いつも言ってるでしょ？　まったくもう、お兄様は……」

「ユーネも飲めばいいじゃないか。シラユキもどうだ？　飲んでみるか？」

「うーん、お酒かー……」

「駄目よ！　駄目！！　お酒は十歳になってから！！！」

そう、お酒は十歳からでいいのだ。人間の二十歳はエルフだと百歳なので、てっきり百からだと思っていたのだが、意外すぎる。ちなみにこの世界の人間種族の成人は十六歳だ。

「ユーネは真面目だな。そこも好きなんだが」

「もう……」

はいそこ見つめ合わない。

二人の世界に入ってしまった兄様たちは放っておこう。他に誰か話せる人はいないかな？

父様は未だ演説中。お酒飲みながらだし、まだまだ、もしかしたらお開きになるまで続けるかもしれない。内容が全部私についてっ

ていうのがまた凄い。もうこの気恥ずかしさにも慣れてきちゃったよ。

母様は奥様方に囲まれてるね、さすが子宝の神？　なにやら危険な会話をしていそうなので近付かないようにしよう。

あれ？　一人で話しに行ける人、誰もいなくね？　め、メイドさんズは……、駄目だ、三人とも微妙な距離を保っている。私だけのときはあまり、と言うかまったく気にして無いが、家族が近くにいると控え目になっちゃうのよね……

フランさんと目が合った。私たちのことは気にしないで、兄様姉様に甘えなさい、と目で訴えてくる。無茶言うな！　言ってないけど。

仕方ない、二人がラブラブ状態を解くまで料理をパクついていよう。でも、すーぐお腹いっぱいになるのよねー

うーん、人は周りにいっぱいいるのにさ、なんか寂しいな。もっと気軽に、積極的に話しに行かないと駄目だよね。

や、やってみる？　他の人に一人で話しかけてみる？　昨日、明日から本気出すって言ったよね私。

よよよよ、よし！　やってみよう！　大丈夫、私はお姫様よ！！

いじめられることなんて無いわ！

だ、誰がいるかな？　話しかけやすそうな人は……

家族に連れられて、結構国の人とも会ってはいる、話も少しはしている。だけど、一人で問題なく話せる人は少ないんだ。なんか恥ずかしいのよ。

だってみんな全力で子ども扱いだしさ、いや実際子供なんだけど。まるで自分の娘、孫が来たような反応をされてしまう。猫可愛がりかな？

贅沢な悩みだね、うん。でも精神的に五歳児扱いはちょっとつらいのよねー

コーラスさんは……、来てないか。うーむ……

変に構えないで普通に話しにいけばいい、っていうのは分かってるのよ。でもできない、このジレンマ。ぐぬぬぬ……

「そして俺は思った!!　シラユキに近付くものは全て焼き払っ、!?　シラユキ!!　どうした!?」

え？　何父様？　うわっ!!　視線が！　みんなの視線が!!

父様は、演説をしていた高台から飛び降り、一瞬で私の近くにやって来た。はやっ！　怖いよ今の速さは!!

「何だ？　どうした？　一体何があった？　誰かに何かされたのか!?　心配するな、どんな輩か知らんが、俺の愛するシラユキを害する存在は消し去ってやるからな？」

言う事も怖いよ！　消し去るって物理的に、塵一つ残さずってやつ！？　この人なら実際できちゃうのがさらに怖いよ！

でも父様はなんで急にこっち飛んできたんだろう？

「どうしたの父様？　私、変な顔してた？」

「変な顔だと！？　シラユキはどんな顔をしてても可愛いに決まっているだろう！？」

ええい、話を聞かない人だな、もう。

「別に何も無かったよな？　なあ？　ユーネ」

「そうよね……。確かに少し目を離しちゃってたけど、ずっと近くにいたわよ？」

兄様姉様が二人の世界から帰ってきた。だよねー？　何も無いよね。

「遠目だったが間違いはない。少し、泣きそうになってただろう？」

「え？　そう、なの？」

父様が頷く。

「え？　嘘！　ご、ごめんねシラユキ？　お姉ちゃん気づかなかった……」

「マジか……。俺とした事が、すまん……」

あ、謝らないでよ。泣きそうになってたって？　なんでだろう……

「私、泣きそうだった？　自分だと分かんないんだけど」

確かにちょっと寂しかったが、あ、寂しそうにしてたからか！

「た、多分ね、寂しかったんじゃないかな、私。一人で他の人と話せる勇気も出なかった、し……？」

やばい、これはやばい。三人の顔色がヤバイ！！

「し、シラユキに」

「寂しい思いを」

「させていた、だと……」

息ぴったりだな！　さすが親子だよ！！

「俺は、俺はなんということを……。シラユキを愛するがあまり、演説なんぞに力をいれ、そのシラユキ本人を寂しがらせてしまっていたとは……」

「私なんてもっと酷いわ！　いくら愛するお兄様と二人で話していたからって、シラユキの相手をしてあげてなかったのよ！？　決し

て許される事ではないわ！！」

「だな……。ユーネ、こうなってしまっては仕方がない。お互い辛いが、わかれ、あ痛てっ！　こら、シラユキ、蹴るなよ」

「二人の冗談はちょっと冗談にならないのよ！　もう！　馬鹿！　嫌いになっちゃうから！！」

冗談でも別れるなどと言って欲しくはない。本気で怒るよ！

「うわしまった！！　ごめん！　もうしないから嫌いにならないでくれ！！　シラユキに嫌われたら生きて行けん！！」

「ごごごごめんシラユキ！　怒らないで！　嫌いにならないでー！！」

「まったくもうー」

二人を嫌いになるなんて、まさに地がひっくり返ろうともないのだけれど。

「くうっ！　これは死んで詫びるしかないか……。すまんなエネフェア、先に逝くよ」

「父様もそろそろやめて！！」

母様はこちらを見てにこにこしていたよ。

「んで、どうしたん？」

「んー。寂しかったのかな？　寂しかったから、他の人とお話しに行こうと思ったんだけどね？　なんかちょっと恥ずかしくて……」

「相変わらず恥ずかしがり屋なのね。それじゃお父様」

「ん？　なんだいユーネ」

「シラユキ抱えて全員と話しに行ってきて」

「お？　それいいな。行って来いシラユキ」

「へ？」

全員？　どこの？　ここの？　ここの！？

「抱き抱えてないとこの子逃げちゃいそうだし、逃げないにしても、後ろに隠れちゃうでしょ？　お父様よろしくね」

「なんという役得。ほーらシラユキ、行くぞー」

父様に軽々抱き上げられてしまう。そして、定位置の腕に座る。

しまった、急すぎて逃げられなかった！

「え？　え？　ホントに行くの？」

「ああ、モチロン。ま、精々百人ちょっとだ、すぐ終わるさ」

「たまには荒治療も必要よね。お姉ちゃんは心をオーガにして見送るわ」

オーガ!?　鬼か？　面白いなその言い回し！　いや、オーガも人に分類される種族だよ!!　温厚な種族らしいよ!!　失礼すぎるよ姉様!!!

「俺ちょっと行って人集めてくるわ。シラユキとの談話会とでも言えばもっと人来るだろ」

兄様なに余計なことしようとして、ああっ！　速い!!　もう見えない!!

「ふふふ、楽しそうだなこれは。面白い事になってきたな。なあ？シラユキ」

「うー！　ううー！　やってやるわー!!」

どうせやろうとは思っていたことよ！　それが相手が百人以上になっただけよ！　どうしてこうなった!!

「そうそう、その意気だ。大丈夫、何も怖い事、恥ずかしい事なんて無いからな？　いつも、俺たちにして見せてるように、普通に話し、素直に可愛く笑っていればいいだけの事さ」

「うん！　頑張る！！」

「ははは。頑張る事もないんだ、いつも通り、いつも通りでいいんだよ」

父様カッコいいわ素敵だわ。なんていい、素晴らしい父親なんだろう。

その後、母様、さらに後、兄様姉様も一行に加わり、夜遅くまで私の対話訓練は続いた。

すっごく疲れたけど、なんか……、そう、楽しかったよ。

その11

で、できない！　簡単な魔法のはずなのに……！！　ううううう……、なんでよー、なんでできないのよー

ライトボール、光の玉。光の？　光って何よ？　光、光ねぇ……。電気？　蛍光灯？　電球？　あ、火も明るいわよね。全部熱を持ってる、うん。

火の玉？　炎を固定？　何を燃やすの？　空気？　酸素？　駄目よ、火は駄目、危ないわ。子供が火遊びをするのはいけないと思う。魔法は遊びじゃないよ！！

やはり光か。あ、そうだ！　ゲーム的に考えてみよう。何か手がかりが掴めるかもしれない。

ゲームで言うと光属性とか聖属性とか、そんな感じのよね。うん？　光属性って何よ？　聖属性って何よ？　駄目だ！　ゲームは頼りにならない！！！　ゲームを頼りにしちゃ駄目だよ私……

属性、なんて分け方は無いもんね。火を出す魔法も、水を操る魔法も、全部同じ『魔法』だ。何かを出したり操ったりで得意不得意は出そうだが、それもイメージ力の違いでしかないんだろう。

イメージ力、想像力か……。光のイメージか……。ん？

また振り出しに戻ったよ！　光のイメージって何よ！！

「考え込んでるなー。感覚で使う物だって言ってるのに」

「しょ、しょうがないですよ！　姫って頭で考えてから動くタイプみたいですから！」

メアさんが兄様と話してる。メアさん何か緊張してない？　私以外の王族にはこんな感じなんだろうか。今日はシアさんフランさんもいないしね。

今日の魔法の練習は兄様が先生、メアさんは付き添いだ。他のメイドさんズは別件でここにはいない。

「メアリーはどんな感じで使ってる？　俺は感覚で、としか説明できないんだよ」

「そ、そうですね……。私の場合は……、心で念じる感じ、でしょうか？　それが一般的だと思いますよ」

敬語のメアさんに凄い違和感を感じるわ……。心で念じる？　光になれー！　とかかね。

「やっぱ感覚だよなぁ。魔法なんて、無意識で組み立てて発動できるのが当たり前だし」

「そんな簡単にできるのは、王族の方たちだけだと思いますけど……」

「そっか？　コーラスだって、俺並かそれ以上に使えるだろう？」

「え？　コーラスさんそんなに凄い人だったの？」

意外だ、意外すぎる。お花畑でほのぼの水まいてる所しか、魔法使ってるの見た事無いよ。

「ああ。コーラスは戦争時代を、ん。まぁ、凄い奴だよ」

「ルーディン様……」

せ、戦争！？　そういえば七百年位前に戦争あったんだっけ？という事は、コーラスさん七百歳以上！？

「あー、しまったな。今のは失言だった」

「そう？」

コーラスさんに口止めされてるとかかな？

「そうなんだよ。戦争時代の事なんて、進んで聞きたいとも、話したいとも思わないだろ。特にお前には聞かせたくないよ」

ああ、そっちの事か。

そっか、そうだよね。戦争、戦争か……。怖いな……

「姫？　大丈夫？」

メアさんが、黙り込んだ私を心配して話しかけてきてくれる。七

百年前はこの国も平和じゃなかったのかな？

「ルー兄様」

「何だ？」

「ちょっと、甘えたい」

「聞くな聞くな。ほれ、来い来い」

兄様の膝の上に座らせてもらう。安心できるねこれは。しかし、戦争かー……

「うーん……。できないー」

兄様の膝の上に座りながら練習を続ける私。うまくいかないなー

「はは。今はできなくてもいいんだって。今だけじゃないぞ？　別に一生使えなくてもいいんだ。俺が、俺たちが、この国のみんながいれば、魔法なんて無くても生きていけるだろ？」

生きてはいける。でもね、魔法は使えるようになりたいのよ！

そういう問題じゃないの！

「ほれほれ。こんな感じこんな感じ」

私の目の前にライトボールを出す兄様。近いよ眩しいよ。

「あ、ルー兄様。ちょっとそのまま、出したままにしておいて？」

丁度いい、目の前にあるんだ、存分に観察させてもらおう。

「あ？　ああ、いいぞ」

「目に悪いからあまり見続けちゃ駄目だよ、ですよ、姫」

メアさん黙ってると思ったら超話しにくそうだ。面白いな。

さて、これは……、ふよふよと浮く光の玉、浮く？　うん？　これって質量はあるんだろうか？　触れたりするのかな？

「ねえ、ルー兄様？　これって触っても大丈夫なの？」

「ああ、熱かったりしないから大丈夫だ、触ってみな。触れるならな」

触れるなら？　どれどれ……。　！？　す、すり抜け！？　え？　ええ！？

いくら触ろうとしても、すかすかと手がすり抜けてしまう。何かに触ったという感覚も無い。凄いなこれは、本当に光の、光だけでできた玉なんだ。

「ふっ、ふふふっ……」

「う？」

「あ、ごめっ、ふふっ、あはははっ」

メアさんが急に笑い始めた。私何か変な事したかな？

「ごめんごめん。姫の反応が可愛くてさ。はー、やっぱり子供だよね」

「むう……、どうせ子供だもーん。まだ五歳だもーんだ」

「うお可愛い！　よくやったメアリー！」

褒めるな兄様！！

「見た目は子供なんだけど、たまに話し方も考え方も、全然子供に見えない時あるのよ、姫ってさ。私たちお世話係なのに仕事ほっとんど無いから、ちょっと心配してたんだよね」

「確かになあ、ユーネが五歳の頃なんて、我侭で甘えん坊で……、でも可愛かったなぁ……。今でも可愛いけどさ」

はいはい、お熱いことで。

「我侭で甘えん坊なのは私も同じだと思うよ？」

「これだよ」

「これですよね」

な、何？　また私変な事言った？

「本当に我侭で甘えん坊な奴は、自分の事を我侭だの甘えん坊だの言わないって」

「こういうところが子供らしくないのよねー、じゃない、ですよね」

「むむむ……。そうなのかな……、分かんない」

中身十六歳相当だけど、外見に引っ張られているのか、今は年相応の子供っぽい行動してると思うんだけどね。

「よっし。やめだ、やめ！　外行くぞ！　遊びに行くぞ！！」

私を抱えたまま椅子から勢いよく立ち上がる。

「え？　え？」

「はい、いってらっしゃいませ。エネフェア様には私から伝えておきますね」

「ああ、頼む。メアリーも早く敬語抜けよ？　誰も気にしてないんだし、何より普通に話してた方が可愛い」

「は、ははは、はいっ！　が、頑張ります！」

元日本人の私からすると、メアさんの気持ちはよく分かるよ。いくら気さくな人といっても、偉い人には敬語を使っちゃうものだ。しかし、この兄様は……

「ルー兄様はメアさんの胸を狙ってるだけだからね。気をつけてね？　揉まれちゃうよ？」

「ど、どうぞ！　こここんな胸でよかったら、どうぞ！！」

「わ、脱いじゃ駄目！　ルー兄様も嬉しそうにしーなーいー！」

「止めるなシラユキ、もったいない！！」

兄様は無理矢理、とか権力で、とか、そういうことをする人じゃないから大丈夫だけどさ。もうちょっと王族としての自覚を持とうよ……

私？　私はもちろんそんな自覚無いよ！　そんなの成人してからでいいのさ！

その１１（後書き）

またいつものように０時にも投稿します。

その12

「うー……。トイレトイレ……」

夜中、トイレに行きたくなって目が覚めた。明かりをつけてベッドから降りる。うーん、眠いわ……

「姫様？　おトイレで、……？」

廊下に出るとシアさんがいた。私お付のメイドさんズは、夜の間も交代で、私の側に必ず一人はいる。

そんなお姫様扱いしなくてもいいのに、と思ったのだが……、私お姫様だよ！　という脳内ツッコミが炸裂しただけで終わった。

お仕事とはいえ、夜中中寝たり起きたりは大変なんじゃないだろうか……。ん？　シアさん何か固まってない？

「ふわ……。うん……」

あー、眠いわ。最近魔法の練習ばかりしてて、精神的に疲れが出てるのかもね。さっさと用を足してまた寝よう。シアさんを抱き枕にするのもありかな……

「ええと……、姫様？　それは……？」

シアさんにしては、珍しく歯切れの悪い話し方だな。それ？　それってなんだろ？

「それって……？」

「あ、やっぱり無意識なのですね。ふふ、さすが姫様。っと、失礼しました」

無意識？　ちょっと吹き出しちゃったくらいで失礼も何も無いのに。まったくシアさんは真面目なんだから。

「ええとですね、その、姫様が手に持っているといいますか、出しているといいますか」

手？　右手を見る。

ああ、これね。明かりじゃん、明かり、ライトボールの魔法だよ。便利だよねこれ。ああ、廊下は少し明るめだし、必要無いか。

夜、廊下の壁に飾られているお花が薄く光るのよ。ファンタジーよファンタジー、幻想的だわ、綺麗だわー

パッと光の玉を消す。さ、トイレトイレ。

「廊下だと要らなかったね。それじゃ、行こう？」

「ふふっ、ふふふふ。は、はいっ。ふっ、ふふっ」

何よもう、さっきから……

おトイレを済まし、部屋の前まで戻ってきた。すっきり。

「あ、姫様。お部屋の中は暗いままですよね？　また明かりをつけたほうがよろしいかと」

ドアを開けると中は真っ暗だ。光るお花を一輪くらい置いておいてもいいかと思うんだけどね、寝る時はやっぱり暗くないと。

「うん、そうだね、ベッドに入るまでに躓くのやだし」

右手を少し前に出し、手のひらを上に向け、その上に小さな光の玉を魔法で出現させる。

「！？　この年で詠唱破棄ですか……。さすが王族、いえ、さすが姫様と言うべきでしょうね、これは」

これくらい誰だってやってるじゃない。まったくみんな過保護というか、過剰に持ち上げるんだから、いい気になっちゃうよ？

「シアさんおやすみなさーい。あ、一緒に寝る？」

「！　……いえ、とても魅力的なお申し出なのですが、私は姫様の警護、というお仕事を続けなくてはならないので。申し訳ありません」

おっと、謝らせてしまった。気軽に変な提案するもんじゃないね。

「これくらいで謝らなくてもいいのにー」

そう言ってドアを閉め、ベッドまで歩き出す。

いやこれホントに便利だわ、元の世界でも欲しかったね。重さも無いし、これくらいの魔法じゃ疲れることも無さそうだし。ああ、駄目だね。魔法は人を堕落させていくような気がするよ……

ベッドに入り、明かりの魔法を消す。明日もまた練習しなきゃね、せめてライトボールくらいは使えるようにならないと。これ実際使ってみて超便利だし。

一気に眠気が戻ってきた、寝よう。

おやすみなさーい。

じゃないよっ！！！！

がばっと起き上がる。

右手を前に！　手のひらを上に！　……点け！！

パッと光の玉が出る。うおっ、まぶしっ。

消えて！

パッと消える、真っ暗。

え、え？

もう一度出し直し、ベッドから飛び降りドアまで走り、廊下に飛び出す！

「あら？　どうされました？　姫様」

光の玉をシアさんに突きつけるように見せる。

「言ってよ!!　教えてよ!!!!　もうシアさん嫌いきらーい!!!!」

何で言ってくれないのよ!　あれ?　言ってた?　遠まわしだけど言ってたね。

「言ってたよ!　でもストレートに聞いてよ!!!　後嫌いじゃないよ大好きだよ!!!!」

「ああ……、よかった。姫様に嫌われてしまったら、もう死を選ぶしか道は残されていませんでした」

簡単に死のうとしないで!　怖い冗談だなぁホントに。

「できた!　できてたよ!　普通に使っちゃってたよ!!!　使えるようになっちゃったよ!!!　達成感も何も無いよ!!!!」

「落ち着いてください、姫様可愛すぎます。今にも押し倒してしまいそうなので、もう少し抑えてもらえると大変助かるのですが……。どうしましょう?　ご家族の方、起こして参りましょうか?」

押し倒す!?　おっと、落ち着こう。

「ふう……。うーん、いいや。明日起きて使えなくなってたら意味無いしね。明日にしよう」

「一度でも成功させさえすれば大丈夫かと。でも、そうですね、姫様の仰せの通りに」

さて、寝なおそう。成功に興奮して寝られないとか無さそうだよ。なんだかなあ……

その13

「皆！　今日はよく集まってくれた！！　昨日、ついに、我が愛する娘、シラユキが……」

凄い！　父様凄いわ！　やっぱり誰一人話聞いて無いわ！！　ふう……

次の日、朝からお祭りだった。何故だ！！

どうやらシアさんがこっそり伝えていたらしい。多分夜中のうちに用意やら人集めやらしていたのだろう。いきなりの開催でも前回より人が集まっている、みんな暇なのか……

朝起きたら魔法が使えなくなっていた、なんて事は無かった。むしろ、起きて頭がはっきりしている分使いやすくなった感じもする。着替え、身だしなみを整え、部屋の外に出た瞬間、父様に攫われて今に至る。

今日も近くに兄様姉様。周りの人たちは、私の側に家族がいるときは遠慮しているようで、あまり近づいては来ない。それでも何人かはやってくるのだが、前の荒治療のおかげか、結構普通に話せるようになっていた。

「だから言ったろ？　シラユキならすぐ使えるようになるって」

「うんうん。おめでとう、シラユキ！」

「ありがとう、ルー兄様ユー姉様。でも、いつの間にかできるようになっちゃってたんだよね……」

二人ともまるで自分の事のように嬉しそうだ。私もできるようになって嬉しい、はずなのだが、なんとなくすっきりしない気持ちだね。

「そんなもんだって、魔法なんてさ」

「そうそう、そうよ。あ、でもね？　他の魔法を使ってみたいとか思っちゃ駄目よ？　一つだけっていう約束だったもんね。熱を持たせるのも、私たちの前以外では絶対に試しちゃ駄目よ」

「うん！　大丈夫、約束は絶対守るから！　一度に何個か出す練習とかはいいの？」

父様兄様が見せてくれたように、複数個を自由に動かせるようになりたい。あれは綺麗だったなー

「うーん……、いいけど、一人でやらない事。約束できる？」

「うん！！　ありがとうユー姉様！」

姉様大好き！　抱きつく。

「あ、こら、ずるいぞユーネ」

「ふふふ、かーわいい」

姉様にほっぺをグニグニされる。うにゅにゅ……

その後また何人か話に来ていた、父様の演説はまだ続いている。

「お、あの胸は……。コーラスじゃん。珍しいな」

「胸で人を判断しないの。お兄様は本当に大きな胸が好きなんだから……。でも、確かに珍しいわね」

コーラスさんってあんまり、と言うか、滅多にお祭りに来ないよね。花畑周辺からあまり動かない人らしい。あれだけの大きさの花畑だ、管理も大変なんだろう。

目が合った。おや？

「こっち、来るのかな？」

「うん、そうみたいね。お兄様？」

「分かってるよ、何もしないって、信用無いなー俺」

普段の行いだよ兄様。

「こんにちは、ルーディン。ユーは久しぶりね。それとシラユキはおめでとう、かな？」

「おう」

「うん、久しぶりね、コーラス。相変わらず羨ましいわ、ソレ」

ソレ、胸。確かに羨ましいわ……

「ありがとう！　コーラスさんがお祭りに出てくるのって、なんか珍しいね」

「結構な頻度で会ってるしね、私も来るつもりは無かったんだけど。どうせ花畑で話せばすむ事だし？　今日来たのはウルギス様に引っ張られてね」

ああ、なるほど。私と仲がいい人は強制参加でしたか父様。

「ごめんねコーラスさん。父様が勝手なことして……」

「ふふふ、シラユキが謝る事じゃないわよ。私も気にしてないし、別にいいって」

「まったく、お父様は……」

「それよりさ、見せてみてよシラユキ」

「あ、うん！」

さっきから来る人来る人にせがまれるな。これくらい疲れないからいいんだけどさ。もう出しっぱなしにしておこうか？

「うっわ、あらあら、これはこれは……」

そしてみんなこんな微妙な反応なんだよ……。いいじゃんいいじゃん！　初めてできたんだからさー！

多分、質、が悪いのかもしれない。見た感じは分からないんだけどね、きっと何かが足りなかったりするんだろう。

これからもっと練習して、もっと綺麗に？　作り出せるようになってやる！

「この子、五歳、よね？」

「うんうん。面白いでしょ？　本人には内緒よ？」

「ネタばらしが今から楽しみでしょうがないんだよ。あと五年か……。すぐなんだが、早く来て欲しいぜ」

「なるほど、そういう事ね。珍しく緘口令なんて敷かれてると思ったら……。確かに楽しみね。その時は呼んでよ？」

「おう！　どんな顔して驚くか……。あー！　楽しみだ！」

もっと綺麗にか、綺麗？　うーん……、うん？　何の話だろう？
縅口令ってなんだっけ？　口止めさせるんだっけ？　何を？

「ねえ？　何のお話？」

「ふふふふふ。秘密よ！」

コーラスさんは教えてくれない。くそう、今度揉みまくってやる！

「ねえ？」

コーラスさんが駄目なら兄様姉様だ。

「だーめ。シラユキにはまだ早いわ」

「そうだな、まだ早いな。具体的に言うとあと四年ちょっと早いな」

「えー、気になるよー！」

珍しい、この二人までもが教えてくれないとは。
私にはまだ早いって言ってるし、本当に、まだ聞くには早い話なんだろうね。仕方ない、諦めるか。

「そして俺は思った！！　シラユキに近付くものは全て消し去っ、
！？　シラユキ！！　どうした！？」

またこの流れか！！　視線が！　視線がーー！！

その14

明かりの魔法を一つ出す、消す。二つ出す、消す。三つ出す、消す。四つ五つ……

「な、なんだろう、この異常なまでの達成感の無さは……」

「簡単な魔法だからねー。もうそれ、練習いらないんじゃない？」

「まあ、いらんわな。っと、程々にしとけよ？　そんなんでも魔力は消費されてるんだからな」

カラフル点滅ボールで遊びだしたところで止められた。おっと、そうだったよ。魔力とかいう謎パワーを消費してるんだった。でも体感なにも感じないのよね。疲れも無いし、何か減っていくような気すらしない。

今日の先生も兄様。付き添いはメイドさんズだ。

「その程度の魔法なら、一日中使っていても大丈夫そうですが。姫様はまだ五歳、無理をしてはいけませんよ？」

「はーい。少し休憩しようかな？　今日のおやつは？」

はっ！　減ってる感じはするよ！　お腹減ってる！！　まさか魔力を消費するとお腹が空くとは……。無いわ、いや、でも、あながち的外れな考えでも……？

「ふふ、今日はアップルパイを焼いてあります。姫様が昨日、食べたいなー、うへへへ、と言われていましたので、用意してみました」

ほう！　ほうほう！　アップルパイであるか。うへへへ？

うーん素晴らしいねメイドさんズは。私、自分がどんどん駄目人間、じゃない、駄目エルフになっていってる気がするよ。でもやめられないの、十歳までは甘えさせて！　十歳以降、もっとだらけたエルフになりそうな気もするけど……

「ありがとうシアさん！」

「いえいえ、一メイドなどに、そこまで感謝してはいけませんよ」

メイドの鑑だ、素晴らしいな、さすがシアさん素晴らしい。だが。

「シアさんも、もう家族なんだよ？　そんなに畏まらないでいいのに」

「バレンシアもメアリーもさ、もっと気、抜けって。王族なんて言っても俺達まだ二百も生きてないんだぜ？　シラユキなんて五歳だぞ五歳」

はーい子供でーす。

メアさんはずっと黙ってるよね。私以外の王族とはやっぱり話しにくいのかなー

シアさんは誰にだって親切丁寧だし、これは性分なのかもね。

フランさんみたいに軽い性格なシアさんは想像できない。

それにしても、二百年が、まだ、か。兄様は百六十くらいだっけ？　みんな百超えると、自分の年齢も大体くらいにしか把握してないんだよね。

成人までは指折り数えるような感じなんだろう。成人したら色々な権利が認められるからね。国の外に出たりとか、結婚とかね。もうその後は本当にどうでもよくなるんだろうね。

「年、と言えば。三人とも何歳くらいなの？」

なので、女性の年齢を聞くのも特に失礼な事ではない、はずだ、よね？

「ん？　私は二百ちょいだね。まだやっと大人って感じかな」

フランさん二百！　兄様より年上なんだ。

「わ、私はまだ百三十になったばかりよ」

メアさんは百三十か、姉様より年上なんだ。

二百年でやっと大人って……。成人はあくまで認められるだけなのね。なるほどなるほど。人間で言うと二十代後半くらい？

「シアさんは？」

「そういや、バレンシアの年って俺も知らないな」

さすが謎のメイドさんだ、おっぱい星人の兄様も知らないとは……

「姫様？　リーフエンドでは、いえ、エルフの間では問題無いのですが、他の種族の方の、特に女性の年齢は気軽に聞くものではありませんよ？」

「そうだぞ？　エルフの俺たちからすると、年とかどうでもいい事なんだけどな。町でさ、他種族の女にうかつに聞くと、急に機嫌悪くなるからな？」

兄様実際やったんだ、確かに普通に聞いちゃいそうだよね。……え？　シアさんまさかエルフじゃないのか？　でも耳長いよね。

「ああ、申し訳ありません。誤解させてしまったようですね。私はエルフですよ、安心してください」

「あ、やっぱりエルフであってるんだね。ちょっとビックリしちゃった。それで、何歳なの？」

エルフなら気軽に聞いても大丈夫だよね！

「ここは秘密、と言いたいところですが、ほかならぬ姫様の問いでは答えるしかありませんね。……？　え、ええと、確か今年で……？」

「あ、覚えてないんだ……。大体でいいよ大体で」

シアさんたまにしぐさが可愛い時あるね。これがギャップ萌えと言う物か！

「すみません。私も自分の年齢は、割とどうでもいい部類に入るもので。そうですね、大体五百近く、ですね」

「ごひゃく!?　フランさんの方が年上だと思ってた！」

五百って……、見えないよ。いや、見た目で年齢分かる人なんて、今は子供の私くらいしかいないんだけどね。五百かー……

「それはどういう意味かなー？　シラユキ？」

フランさんがにこやかに聞いてくる。にこやかなのにちょっと怖いのは何故だろう。

「え？　いや、違うよ？　別にフランさんが老けて見えるとかそういう意味じゃないよ？　だってフランさん見た目大人の綺麗な人でも、中身はメアさんと同じくらいに……」

「つまり私は、見たまま子供っぽく見えるわけね？　姫」

しまったつい口が！　フォローするつもりが敵を増やしてしまった！！

「なるほど、私は子供っぽく見えると。ふむふむ」

そしてフランさんもフォローになってなかった！　いいじゃん、年七十くらいしか変わらないんだしさ！！　お？　今のエルフっぽい考えじゃない？

「ううー……」

「とりあえず謝っとけ。女は怒らせると怖いぞ」

さすが兄様。きっと今まで何人も怒らせてきたんだろう。こういう状況の打開は慣れていそうだ……

「もう……、姫様をいじめては駄目ですよ、二人とも。明日の朝日を拝めなく、失礼。ひっそりと人生に幕を閉じることになりますよ？　閉じますよ？」

言い直しても怖いよ！　味方だけど怖いよ！

「や、やだなーシア。私が姫をいじめるなんて、するわけないじゃない」

「そ、そうそう！　ちょっとからかっただけだって！　うわ！！　ナイフ出さない！！！」

ナイフ！？　どこから出したの今！？

いつの間にか、シアさんの左手には装飾用っぽいナイフが握られていた。なにこの人こわい。

「落ち着け、バレンシア」

「あら、失礼しました」

さっとナイフをどこかにしまう。どこに！？　あ、魔法か、魔法凄いわマジで。後兄様ナイスだ。

「シラユキを大事に思ってくれているのはありがたいが、周りに過剰に反応するなよ？」

うん？　兄様人のこと言えるか？　父様も普通に攻撃魔法とか撃ってるよ。

「ご安心を、ただのおど、……冗談です」

「脅し！？」

「怖いよレン！！」

「ふふ、冗談ですよ」

「たちの悪い冗談やめろって……」

「ところで、アップルパーイ」

お腹空いたのよー。魔力の補充が必要なのよー

「あ、そうでしたね。ではご用意を」

「うん。また私が取ってくるから、シア紅茶おねがーい」

メアさんは返事を待たずに走り出していく。揺れるわ……

「ふむ……」

「ルー兄様……」

ブレないなさすがだ。

「それでは、私も紅茶の用意へ……」

「ああ、待て、バレンシア」

出て行こうとしたシアさんを兄様が引きとめた。

「はい？　何か？」

「ちょっとここにいろ。フラニー、紅茶頼む」

「うん？　お説教？　私たちは気にして無いからさ、別にいいよ？　いつものことだし」

え？　お説教？　今日は確かに、ナイフ出すのはやりすぎだったかな……

「違うんだ、ちょっと個人的な用事がな……」

「そう？　それじゃ行って来るね」

フランさんも紅茶の用意へ走り出す。揺れる。もげろ。

「ふむ……」

「ルー兄様？」

「あ、ああ。つい、な。しかしあの二人は素晴らしいな……」

ええい、このおっぱい星人め。

「さて、バレンシア」

「はい」

あ、あれ？　まじめモード？　私ここにいていいのかな……

「ソレ、の事だ」

「！？」

兄様はシアさんの胸の辺りを指差す。……胸！？

「ルー兄様の変態！！」

何する気よ！　シアさん残して何する気だったのよ！！　しかも私の前でー！！！

「変態！？　あ！　違う！　違うぞ！！　胸の事なんだが、今回は違うぞ！　あれ、違うか……？」

シアさんは胸を両手で隠し、後ずさる。

「いつから……、お分かりで……？」

え？　シアさんやばめなオーラ纏ってない？　え、え？　ここでガチバトルとかないよね？　ね？

「最初からだ。一目見て、な。俺くらいにしか分からんとは思うが……」

「くっ！　さすがルーディン様……、欺ける、欺いているという自信はあったのですが」

「確かに他の皆は騙されていただろう、魔法も併用しているんだろう？　だがな、俺は一目見て違和感を感じたんだよ」

「仰るとおりです。通常の物に、私独自の魔法を加え完成させた、と思っていたのですけど……」

「外せ、外して来い。丁度いい機会だろう？　それとも、このままずっとシラユキを欺いていくつもりだったのか？」

「……！！」

え？　私？　ごめんなさい見入ってました、空気になってました。何？　私何か騙されてたの？　シアさんが私を……？

「そう、ですね……。いつかは話すべき、とは思っていたんです。しかし、その勇気が持てなかった、出せなかったんです……！」

うわあ、シリアスだ。多分生まれて初めてのシリアスな空気だよ。ちょっとお菓子食べながら観戦したいわ……。ラブロマンス映画的な感じで。

「大丈夫さ、シラユキがそんな事を気にすると思うのか？　確かに俺に似て、大きめな胸が好きだがな」

……むね？

「はずし、ます。外してきます。それで姫様に何を言われようと、どんな仕打ちを受けようと、き、嫌われようとも！　甘んじて受け入れます……」

失礼します、と言い残し、シアさんは部屋から出て行ってしまった。

「シラユキ、お前なら大丈夫だ、バレンシアがどう変わろうとも受け入れられるな？」

「え？　さっきから何の話なの？　変わるって？　シアさん何か変わっちゃうの？」

「何も変わらないさ。そう、何もさ……」

窓から空を見上げ、呟く兄様。

「……ルー兄様楽しい？」

「実はちょっと楽しかったりする。バレンシアもノリがいいよな」

「シアさんは真剣だったように見えるんだけどな。じゃないや、何の話なのー？」

「あ、ああ、見れば分かるさ、ほら」

顎で部屋の入り口を指す。シアさんが戻ってきたようだ。

「これが、これが本当の私の姿です。今まで姫様のお目を欺いてきた事を、深くお詫びします。どうか罰を。死ねと命じられれば、喜んでこの命」

「待って待って！！　死ぬとか怖いよ！　そんな事言わないからね！？　うーん？　どこが変わったのー……？」

そう、見た感じ何も変わっていないのだ。

「え……？」

シアさんはかなり驚いたようで兄様のほうを見る。

「え？　分からないのか？　お前が？」

「うん、さっぱり」

兄様とシアさんの反応からすると、私には絶対に分かると思っていたようだね。

う、うーん……、うーん……、うん？

「もしかして、胸、少し小さくなった？」

注視しないと分からないくらいだが、確かに小さくなっている。

ああ、なるほどね……、これ毎日見てる私でも気づけないレベルの間違い探しだよ……。少し大き目が普通サイズになっただけだよ、転生前の私に比べたら全然大きいよ……

「そんな事でさっきのやりとり！？　予想外すぎるよ！！」

「そんな事……だと……」

「姫様は大きな胸が大好きなのでは……？」

「ルー兄様と一緒にしないで！！　将来的には分からないけど、現段階では大きな胸は、どちらかと言うと敵よ！！！」

母様以外の巨乳はもげろ対象よ！！！

「は……、姫様……」

シアさんは、はらはらと涙を流す。

「泣かないでよ！　泣きたいのはこっちよ！！　シアさんいなくな

っちゃうと思ったんだからね！！」

「ああ……、すみません。あまりの嬉しさに涙が……」

「ああ、泣いていいんだ、今は好きなだけ泣くといい。でも、次にシラユキに見せるのは笑顔で、な」

「はい……、はいっ！」

ああもう！　一々芝居がかったやり取りしてくれちゃって！

「はーい、そろそろいいかなー？　紅茶並べちゃうよー？　レン手伝ってー」

フランさんいつの間にいたの！？

「はい、分かりました」

切り替え早っ！　駄目だ、ツッコミはもう追いつかないや……

「メアリーはまだなのか？　結構経ってると思うんだが」

「まだ探しているのでしょうか？　フラン、見てきてもらえます？」

「おっけー。それじゃ紅茶はよろしくー」

「ええ、急いでくださいね。でもあまり走らないように」

「はいはい、分かってるってー」

こうして、姫様巨乳大好き説は消えたのであった。しょーもないな……

ちなみにメアさんは、つまみ食いをしていたところを御用となった。おやつ抜きの刑だ。

その15

「うーむ……」

私を膝の上に乗せ、撫でながら唸る父様。

六歳になりました。例年のごとく盛大なお祭りが開かれました。

いやー、凄かった凄かった。荒れ狂う嵐、爆ぜる大地、吹き飛ぶ人々……。お祭り？　何のお祭りだよ、戦争だよあれは！

それでも軽い怪我人程度ですんじゃうのが、ここの国民の凄いところだ。

中には魔法の苦手な人もいるだろうが、そういった人は離れて観戦できる位置に最初から固まっている。いいお酒の肴になるみたいだ。

父様の演説台の周りにいる人たちは、父様と魔法の撃ち合いができる人たち、という事なのか？　それにしては人数多いような……

しかも、比較的若い人たち、なのだ。

エルフは年を重ねれば重ねるほど、あまり人前には出なくなる、らしい。コーラスさんも結構なお年らしいしね、そういう人が多い、という事だろう。

若い人たちは私たちの家、森の中心の大木から、そう離れてはいない辺りで生活している。

約七百年前の戦争を経験してる人は殆どいない。みんな森の中に散らばって、思い思い、好き好きに生活しているようだ。

若い人たちでこれか。長く生きているエルフの強さは一体どれほどのものに……

この国が大陸最強なのもなんとなく頷けるよ。大陸どころか世界最強なんじゃないか？　まあ、大陸越えて戦争しようなんて国は無いと思うが。

「なあ、シラユキ」

「なあに、父様？」

父様が私を撫でる手を止め、私の長い髪を少し持ち上げて言う。

「髪、また伸びたな。切らないのか？」

「やだ！　絶対切らない！！」

「おっと。切らない、切らないよ。怒らないでくれ」

まったく、急に何を言い出すんだかこの父様は。

今私の髪は腰に届くまでに伸ばしている、膝下辺りまで伸ばす予定だ。

今の髪の長さでも十分いろいろな髪型が試せるのだが、どうせならもっと伸ばしたいな、とね。転生前も長かったし。

手入れは大変だが、今はメイドさんズがいる。お世話になってま

す。

着々と、メイドさん抜きでは何もできない、駄目エルフお姫様が完成しつつあります。あっれ、やばいなこれ。まだ六歳だし、いいか……、いいのか？

「父様ー」

「ん？　なんだいシラユキ」

「父様は、私の髪の色、嫌い？」

そう、私の髪って真っ白なのよ。他の家族みんな、濃い薄いはあるけど、青髪に青い瞳だった。

あ、瞳は青だったよ、少し薄めだけど。ハイエルフは、青い髪に青い瞳が特徴らしい

多分女神様の趣味だろう。白雪草は花弁が白いからね……。葯の部分は青だ、間違いないだろう。

家族に合わせてよ！　青髪とか憧れるよ！

「ふむ……、ここは、怒るべきところなんだろう。だがっ！　シラユキを叱る事などできんっ！！」

あ、怒ってるっぽい。言うんじゃなかったな、失敗失敗。

私の髪と目の色なんて家族も、国民も、誰一人気にしていない。

それはもう分かっていた事じゃないか。

「ごめんなさい父様。今のは私が悪かったよね」

「お、怒ってない、怒ってないぞ！　シラユキがどんな髪の色、髪型をしていようが、嫌いになる事など無いからな。俺が言いたいのは、そんな事気にするな、と言う事だけだ」

うん、大丈夫よ父様、私も気にして無いから。いやあ失言だったよ。

「ありがとうとーさまー！」

とりあえず抱きつく。ああ、ホントに大好きだ。

毎朝、私の着替えと、髪形を決めてくれるのはシアさんだ。この仕事だけは誰にも譲れないと息巻いていた。

本当に毎朝楽しみにしているようで、終始笑顔で身支度をしてくれる。シアさん妹か娘、欲しかったのかもね。

その１５（後書き）

ちょっとだけ見た目の描写を。髪と瞳だけですが……

シラユキは六歳時点でまだ１００ｃｍちょっと、超低身長です。

その16

ライトボール飽きた。
もう、懐中電灯をつけたり消したりしてるだけの感覚なんだよこれ。魔法の練習、イメージ力の強化にはなるんだろうけどさ。

と、いう訳で、そろそろ新魔法の許可を貰おうかな。他の魔法は今まで試そうとすらしていない。そういう約束だったからね。

簡単に言えば、我慢の限界、そして暇。子供の探究心は止められないのよ！

「新しい魔法、おーしーえてー？」

「駄目よ」

母様にっこり。

やはり駄目だった！！　まぁ、分かってた。

「いいじゃないか。何か安全で、簡単そうなのを一つくらい教えてやっても」

父様が援軍に来てくれた。よーし、頑張って父様。

「駄目よ、駄目。決めたでしょう？　今後シラユキには一切魔法を

教えないって。……あ」

「え……？」

一切教えない？

ああ、そっか、私、我侭すぎたかな……、甘えすぎちゃってたかな……。こんな甘えん坊で我侭な子供に、魔法なんて教えられる訳ないよね……

「違う！　違うのよシラユキ！　ああ、泣かないで……」

「エネフェア。この子は何気ない言葉でも深く考えてしまうんだ。もう少し、な」

「ごめんなさい、ウル。ごめんなさい、シラユキ……」

泣き出してしまった私を、優しく抱きしめてくれる母様。

よし、魔法は諦めよう、私には能力もあるしね。いや、こうなると能力も駄目か？　私の能力、魔法だからね。

それなら、今日から頑張って認めてもらうしかない。我侭な、甘えん坊な子供は卒業するんだ。

「ごめんなさいね、私の言い方が悪かったわ。あなたに魔法を使わせない、っていう意味じゃないのよ」

え？　使ってもいいの？　教えてくれないんじゃ？　どういう事？

「魔法は教えようとしても、教えれるようなものじゃないんだ。何回も言ってるだろう？　感覚で使うもの、だと」

「そうなの、あなたの魔法はね、シラユキ。あなたが創るのよ？私たちに教えられる事は、もう殆ど無いのよ」

私の魔法は、私が創る？　それって、え？　私の、能力の事、じゃないよね？

私が女神様から貰った能力は、魔法を創ることができる、と言う能力だ。詳しい説明は今は必要ないね。

家族の誰も、この世界の誰も知らないはずだ。一人の時に一度だけ使った事があるのみで、その後ずっと使用を控えている。

あまりに便利すぎる能力なので、通常の、この世界の魔法が使えなくなりそう、使わなくなりそう、だったからだ。

この世界の魔法と、私の能力で創る魔法はとても似ている。この世界の魔法でできない事を、能力で補う程度にしていこうと思っている。

なので、まずはこの世界の魔法を、色々と教えてもらわなければいけないのだが？

「ルーが見せた、ライトボールか。あの魔法、中々使えなかっただろう？　今では簡単に使えるのに」

「う、うん」

「それはね、あれは、ルーのイメージの形、だからよ。シラユキが同じ様に使おうとしても、できる物ではないわ」

「あ……、ああ！　そういう事だったんだ！！」

なるほど、そういう事か！

パズルのピースが、全てそろった。後は形にしていくだけだ。

「お？　もう理解しちゃったのか！？　さすがシラユキ！！　やっぱり天才だな！！！」

「本当に凄いわねこの子は……。もうちょっと甘やかせて欲しいわ」

兄様の魔法と同じものを出そうとしていたから、全くできなかったんだね。あれは私のイメージで作られたものじゃないから。

寝ぼけている時にあっさり成功したのは、恐らく、無意識に電気をつけようとしたんだろう。それが私のあの魔法に対しての、一番近いイメージだったんだ。

あの魔法、っていうのも違うな。兄様の魔法は兄様のライトボール。私の出した明かりの魔法は、ライトボールと見た目は同じだが、全く別物と言っていいんだろう。

改めて思う。魔法って凄いわ！！　もう能力なんて要らないんじゃないかな！！　女神様ごめんね？

「ああ、もう、凄い可愛い笑顔ね。さっきまであんな顔して泣いてたのに」

「だな。さすがに俺も焦った。あんな泣き顔は初めて見た……」

「ううー、恥ずかしい事言わないでー」

私の魔法は、私が創る。私のイメージが、私だけの魔法になる。なるほど、これはもう一切教えようが無いね。納得納得。

「私たちが後教えられる事は、ヒント程度のものよ。シラユキが使いたい魔法に近いものを、実際に目の前で使って見せるくらいかしら？」

「それを自分なりにイメージして、魔法という形にするんだ」

「うん！　私、頑張るからね！　父様よりすごい魔法使いになるんだから！！」

「ふふふ、頑張りなさい。でも、お父様以上は、無理かもね？」

「はっはっはっ。そりゃ無理だ」

「むー！」

そこはいつものように持ち上げるところでしょ！

「でもね、駄目なものは駄目なのよ？　本格的に始めるのは十歳になってからね？」

「えー！」

「そうだぞー？　今はまだ駄目だな。色々な物を見て、聞いて、感じて、思う。自分で、自分なりの思いをな。それが今、シラユキができる一番の魔法の修行だな」

「分かりやすく言うと、もっと外に出て遊びなさい、って事よ。転んだっていいわ。怪我したっていいわ。泣いたって……、あんまり泣いては欲しくはないわね。……こほん。その経験全てが、あなたの、シラユキだけの魔法に繋がるのよ」

な、な、何この素敵過ぎる両親！！！　私、この二人の子供で本当によかった！

「うん！　はーい！！　また約束するね！　十歳まではもう魔法は使わない！！」

魔法なんて使えなくたってもいいや！　父様母様が、家族が、みんながいればいいや！！

あ、今はね？　今だけよ？　十歳になったらがんがん使うよ？
ライトボールは今でも使うよ？　あれ夜中便利だしね。他の魔法

は、って事さ。

「ははは、素直でいい子だ。よし！　早速どこか遊びに行くか！！
エネフェアも行くぞ！」

「そうね、最近はあまりシラユキと外に出かけてないし。それじゃ、お昼も外で食べましょう？　用意してもらえる？」

「あ！　はい！　直ぐに！！」

メアさん。何か嬉しそうだ。家族ドラマを見られてしまった。

「サンドイッチでよろしいですね。五分、いえ、三分ほどお待ちください」

シアさん。三分でできるの！？　五分でも早すぎるからね！？

「あ、ごめん、泣いちゃってました」

フランさん。感動されてしまった。い、意外に涙もろいのね……

その17

こんにちわ。シラユキ・リーフエンド、ついに十歳になりました！！

今回は一区切りの年、というだけあって。かなり盛大なお祭りになった。多分今までで最多の参加者数だよ。

以下ちょっと国民とのやりとりでも。

「姫様、おめでとーーー！！」

ありがとう。

「これで酒も飲めるな」

お酒か、ちょっと飲んでみたいね。

「早速飲ませてみるか？」

お？　どれどれ？

「やめとけ、馬鹿親父に殺されるぞ」

えー？

「今日から魔法解禁よね？」

そう、今日から魔法使いよ！

「うっは、そうだった。あんまり強くなって欲しくないよな」

強くはならないと思うよ。攻撃魔法なんてどうでもいいしー

「強くなんてならなくてもいいのよ、姫？」

うんうん。

「そうだ！　姫は俺が守る！！」

あはは、ありがとね。

「俺たちが、だろ」

うーん、みんないい人たちだ。

「あ、ああ、うん……」

何その煮え切らない反応は。

「おい、変な反応するなよ。ウルギス様が来ちまう」

え？　今は私がいるんだから爆発とかやめてよ？

「最近は、ルーディン様の過保護っぷりも拍車がかかってきてるからなあ。そっちも気をつけないと」

そうかな？　別にいつもと変わらないと思うんだけど。

「姫様また可愛くなったんじゃない？」

まぁ、まだ子供だしね。

「だよね、この可愛さは異常だわ。ねえ、私も子供欲しい」

うわ凄いセリフ。

「オイやめろ。皆の前で言うなよ……」

そう！　その反応が普通なのよ！

「おー、熱いねぇ」

だよねぇ。羨ましいわ。

「お前ももう三百だろ、早く結婚しろって」

三百か。意外にいってるんだな。

「相手がいればな……」

イキロ。

「姫ってさ、何か、小さいよね」

痛っ！　やはり来たか！

「普通十歳って言ったらな、もうちょっと、あるような気がするんだけどな」

そ、そうだよね。ちょっと低めだよね……

「別にいいんじゃね？　可愛いし」

う、うん。

「それもそっか。大きい姫様っていうのも想像できないし、可愛いからいいか」

私だって百歳にもなれば、もっとドーンと伸びて、バーンと出るのよ！　どこが、とは言わない。

「そうそう。可愛ければ何だっていいんだって」

毎回それで落ち着くね。いいんだけどさ。

「そういえば、町の方、行くんだっけ？」

うんうん。早速明日行くのよ。いろんなお店とか、いろんな種族の人とか、後、冒険者を見てみたいの！

「町なんてそんな面白いものでもないと思うよ？　危険だってあるし」

大丈夫よ。ルー兄様とシアさんが一緒に行ってくれるんだし。この二人をどうにかするのは、どこかの国の軍隊とか必要なんじゃな

い？

「姫、可愛いしなあ、誘拐されるぞ？」

誘拐とか怖い事言わないでよ……

「あ、オイ、馬鹿、やめろ！　姫泣くだろ！　死ぬぞ俺たち！！」

そんな簡単に泣かないって。前世年齢込みだともうもう二十六よ？　二十六！？　自分で考えてちょっとショックだわ……

「あ、あ、あ、あ！　泣く！　やばい！　止めろ！　ほ、ほら、姫？　パイあるぞアップルパイ！」

うはあ、二十六か私。でも完全に子供よね、見た目も行動も。おっと、いまだに人間基準で考えちゃってるよ。

「だ、駄目だ！　アップルパイでも釣られないだと！？　俺達死んだ……」

そうよ！　私エルフじゃない！　ハイエルフよ！！　二十六なんてまだまだ子供でいいのよ！！！

「あ、アップルパイちょうだい」

「や、やった！　生き残ったぞ俺達！！　まだ食べ物に釣られる子

供でよかった！」

「さっきから子供子供と失礼な。でも子供でいっかー」

「ははは、俺達からみればずっと子供だよ、姫様はさ。大きくなっても、何百歳になってもさ」

「ねー？　もうずっと小さいままいてね？」

「あ、姫様コレコレ、オレンジジュース。好きだろ？」

「うん。もらうもらう。ありがとねー」

「うっわー、可愛い……。あ！　こっちも食べてこっちも」

「ほれ、これも飲め！」

「わ！　一度に持ってこないでよ！」

もう国のみんなともすっかり家族同然よ。家族そのものよ！

さて、明日はついに初めての町体験！　冒険者見てみたいわ！

獣人の人見てみたいわ！　ネコミミ見てみたいわーー！！！

その１７（後書き）

十歳編開始です。
少しだけ成長したシラユキの異世界生活。引き続きお楽しみください。

その18

「おーい、まだ準備してるのかよ？　俺もう、ずっと待ってるんだけど」

兄様が私の部屋まで急かしに来た。ごめんね兄様。

「す、すみません。質素で、それでいて可愛さを損なわない、そんなチョイスに悩んでおりました」

シアさんが服決めてくれないのよ。いつもの服でいいって言うのに。

「いつものでいいだろ、いつもので。無理に質素な感じにすることなんて無いぞ？　狙われようが何されようが、俺一人いりゃ事足りる」

さすが兄様凄い自信だ。それにシアさんもいるしね、危険は全くない、と言っていいだろう。

「あんまり時間かけると飛ばなきゃいけなくなるぞ？　シラユキ抱えて飛ぶのはいいが、泣きそうなんだよな……」

飛ぶ？　ああ、あの跳躍魔法ね。あの速度は、生身でジェットコースターを体験するようなものか……、泣くわ。

「申し訳ありません。すぐにご用意致します。もう暫くお待ちください、後は髪型を……」

これは長くなりそうだ、シアさん気合入れすぎだよ。

「準備できた？　あら、可愛いわね」

「結局、いつにも増して可愛くなってるんじゃねえか」

「自信作です」

シアさんは、どうだ、とばかりだ。いいんだけどね、動きやすいしさ。

制服のブレザーのようなジャケット、胸元にリボン。後は、短いマントのような、ケープか？

そしてちょっと短めのミニスカート。足が露出するのでオーバーニーを穿いている。これは私の動きを制限するためのものだと思う。

全体的な色は白と黒を基調としている。白い髪が必要以上に目立たないように、でも栄えて見えるように。職人芸だ。

ちょっと恥ずかしいねこれは……。いつもワンピースばかりだし……

「うーん、やっぱり心配だなー。私も行こうかな」

姉様凄く心配そうだ。大丈夫だって、もう。

「一応各ギルドには通達してあるんだけどね。さすがに一般の人たちはどうしようもできないわ」

ギルド？　冒険者ギルドとかあるんだっけ？　おおお！　行ってみたい！！！

「駄目よ？」

「顔に出てた！？」

「おいおい、冒険者とはかかわらないようにするって言ってるだろ？　精々話しかけられたら少し返すくらいだ」

「ギ、ギルドに通達ってどんな？」

は、話を逸らせるんだ！　町に行くのを止められてしまいそうだ！

「ああ、それはな」

おや、父様。

「シラユキに毛筋ほどの傷でも付けたら……、平らにするぞ、とな」

たいら？　平ら？　平面？　どこを？　町を？　あ、町をね、平らに……

「怖いよ！　それ脅しだよ！！　そういうところで権力振るっちゃ駄目！！！」

「冗談だ冗談」

はっはっはっ、と笑う父様。でも……

「目が笑ってないよ！　絶対本気で伝えちゃってるよ！！」

「当たり前だろう！！　シラユキは国の、いや、全世界の宝なんだぞ！？」

「開き直った！　もう私十歳だよ！　もうお酒だって飲めるんだよ！　飲めないけどさ！！　過保護過ぎるよー！」

お酒は無理だった。一口で真っ赤。慣れて飲めるようになってみせるさ、きっとね。

「いや、十歳はまだまだ子供だからね？」

そうだった！　でもそうじゃないよ！！　私に何かあったら町一つ滅ぶんだよ！？

「あー、面白可愛いわこの子。大丈夫よ。いくらお父様でもそんな事するわけないでしょ」

なんだ……、本気で冗談だったのか。ええい、まったく……。？

「う、うむ。冗談だぞ？　そんな通達入れてないぞ？　お父様を信じなさい」

目が泳いでるよこの人！

「父さん嘘が下手だよな……」

「お兄様に言われたくないと思う」

それは確かにね。それは姉様にも母様にも……、私にも言える事かな……。全員かい！

「ええい、うるさいっ！　お前がしっかり守ればすむ事だろう！？」

「それもそうよね。お兄様がいれば安心よ」

「それにシアさんもいるからね。だーいじょうぶ」

「はい。全身全霊、まさに命をかけてお守りしますのでご安心を。姫様の半径１ｍに近づく輩は全て肉片に変えて見せます」

「シアさんも怖い！　肉片！？　１ｍとか目の前だよ！？　無差別なの！？」

人選誤りすぎじゃね？　母様と姉様がよかったかー

「さ、冗談はこれくらいにして、そろそろ出発しないと。飛んでいくの？　シラユキ大丈夫？」

「大丈夫だろ。目瞑ってしがみ付いてりゃいいさ」

悠々としてるのはそういう事だ。生身ジェットコースターが決定

しているのだ。

「だ、大丈夫！　泣かない！」

「泣いたら帰りますからね？　ああ……、でも怖がって泣く姫様も見てみたい……」

「遅くなったのはシアさんのせいなのにー」

あの後、髪型も悩みに悩み、準備が整ったのは約一時間後だった。ツインテールだ。

ちなみにシアさんはいつものメイド服。アンタが一番目立ってるよ！

「ふふふ。何度も言うけど気をつけてね？」

「ルー、バレンシア、頼んだぞ。怪しきは消せ、責任は俺が」

「もうそれはいいよ！　いってきますー！！」

母様に出発の挨拶をし。つ、ついに、生身ジェットのお時間だ。

「大丈夫だぞ？　ちょっと景色がすっ飛ぶだけだ。細心の注意を払って飛ぶ。風圧も無いからな？」

「ううううん。だだ大丈夫、ルー兄様を信じてるから」

兄様に全力でしがみ付く。首に抱きつく感じだ。
怖いものは怖いのよ。しまったなー、前にでも一度、抱えて飛んでもらえばよかったよ。

「よし。バレンシア、あそこ、あの木、行けるか？」

しっかりと私を抱きしめて、兄様がシアさんに話しかけている。

「王族の方のように一瞬、という訳にはいきませんが、一秒ほど溜めの時間をいただければ……」

え？　何？　あの木？　何の木？　気になる木？

「ちょっと目、瞑ってな」

「え？　もう行っちゃうの？　わ、分かった！」

ギュッと目を閉じる。そして……、浮遊感？　ちょっとして着地？　の感覚。

「ほら、目開けてみな。慌てずに、落ち着いてな。怖かったらすぐ閉じろ」

恐る恐る目を開くと……

「高っ！　高いよ！！　怖いよこれ！！　怖すぎるって！！！　え？　さっきの一瞬でここまで！？」

一瞬で、一瞬でさっき言っていた高い木の、上のほうの枝まで飛んだ、ようだ……

な、何mあるのよここ！　１０m？　もっと？　高いわ！！　壁！　家と違って壁も床もないのよ！！

「意外に平気そうですね。さすがは姫様」

シアさんも横にいるようだっ！？

「シアさん手！　どこか手、ついてよ！！　見ててこーわーいー！！」

いつものように両手を揃え腰の前に、メイドさん立ちをしているシアさん。木の枝の上で。兄様は片手を木の幹につけている。

「大丈夫ですよ姫様。この程度の高さから落ちたところで傷一つ付きませんから」

「そういう問題じゃ、！？　シアさん何で出来てるにょ！？　噛んだ！！！」

「やばいなこれ、反応が面白すぎるわ。もっと前にやっときゃよかったか。ユーネにも見せたかったな」

「ええ、本当に。本当に可愛らしいです。姫様もう一度、にょ、と、お願いします。是非これからは語尾に、にょ、を付けましょう」

「付けないよ！！！　何そのネコミミ付いてて目からビーム出しそうな語尾は！」

「!?　姫様のネコミミ姿……、おっと」

想像して衝撃を受けたのか、シアさんが枝から、落ちた!?

「シアさん落ちた!!　うわ!　うわ!!　兄様!!!」

「だーから大丈夫だって。見てみな?」

音も立てずに華麗に着地するシアさん。スカートも乱れない、まさに一流のメイドさんだ。メイドさんは高所の枝から落ちないよ!

「おーい!　このまま行くぞー!!　遅れても先に行っててていいからなー!!」

シアさんはぺこりとお辞儀一つ。飛んだ!　はやっ!　人が単体で跳ね飛んで行ったよ!!　すすす、凄い!　魔法って凄い!!

「それじゃ、俺達も行くぞ。まだ怖かったら目瞑ってな」

「うん、行こ。多分大丈夫。でも、最初はゆっくり目にお願い」

色々立て続けに起こりすぎて、恐怖感はどこかへ行ってしまったようだ。シアさんこれも考えてたんじゃ、それはさすがに無いか。

「おう、任せとけ」

景色が横に流れていく。車並の速度？　これでゆっくりなんだろうか。生身だからもっと早く感じているのかもね。

高く、斜めに跳び上がっては降り、また跳ぶ。時には木の枝に乗り、そこからも跳ぶ。まるで忍者だ。蹴り跳んだ枝、木は殆ど揺れていない。

「凄い！　ルー兄様凄いわ！」

「はは、さっきからそればっかだな。気に入ったか？」

会話も問題なく出来る。魔法的な力か？　風圧も全く受けないしね。

「私もこれ、使ってみたい！」

「結構危ないんだぞこれ？　今度説明してやるから、勝手に使おうとするんじゃないぞ？」

「はーい！！　ふふっ、ふふふっ。楽しい！！！」

「よっし！　飛ばすぞ！！　しっかり掴まっとけ！」

「うん！」

さらにスピードを上げる兄様。すぐにシアさんに追いついた。速いわー、凄いわー、憧れちゃうわー

うん？　シアさんスカートだよね？　ミニって言ってもいいスカートだよね。　え？

「ルー兄様だめっ！　シアさんスカート！！」

「うおっ！！　危ねえ！！！　コラ！　目！　目押さえるな！！！」

「大丈夫ですよ姫様、ご心配なく。メイドたるもの、スカートの中をいかにして見せないように、という技術も心得ているものです」

「いつの間にか真横に！？」

「前方にご注意を」

「シラユキ！　放せって！！　危ないって！！！」

「わ！　そうだった！　ごめんなさいルー兄様！」

二人とも危なげなく着地する。

「あー、さすがに今のは焦ったわ。シラユキ？」

「ご、ごめんなさい……」

危なかった、兄様に怪我をさせてしまうところだったよ……

「バレンシアもいたし、大丈夫だったとは思うが……」

「あう、ごめんなさい、ルー兄様……」

「ルーディン様、今の状況で悪い者がいたとしたら、それは私です。スカートのまま飛んだ私が、姫様に説明を怠った私が悪いのです。どうか……」

「ん、ああ。そこまで怒っちゃいないよ。でもな、シラユキがもし、万が一大怪我でも、と思ってな。そうなったら自分自身が一番許せん」

テンション上げ過ぎて、周りが見えなくなってた私が悪いのに……

「おっと、何暗くなってるんだか。行くぞ？　着いたらもう昼だろ。飯屋行くぞ飯屋。腹減ったんだよ」

「うん……」

「ははっ。怒ってないって言ってるだろ？　ちゃんと謝ったしな。バレンシアにも特に思うことは無いぞ？　ま、スカートの中が見れなかったの惜しかったが」

うわ！　泣きそうだ！　兄様カッコよすぎる！！

「うん！！　ユー姉様に言い付けるね！」

「オイやめろ馬鹿」

「申し訳ありませんが、私のスカートの中を見る事ができるのは、姫様だけですので……」

「見ないよ！　見ないからね！？」

でもちょっと見てみたいと思ったのは内緒だ。

その１８（後書き）

更新がまちまちな時間で申し訳ありませんでした。
これからはまた０時のみで予約投稿していきます。

その19

「あんだけ来たがってた割には、なんか、大人しいよな？」

怖い怖い人多い怖い獣人の人体大きいよ怖いよ。

あ、見られてる？　私今見られてる？　視線集めちゃってる？

「あわわわわわわ」

「ど、どうした？　オイ隠れるなよ」

兄様の腰にしがみついて後ろに隠れる。

「姫様」

「あわわわわ、わ？　な、何？」

「もちろん後ろにも、人はいますよ？」

！？

後ろを見る。い、いるね、いっぱい歩いてるね……

「わわわわわわわわわわ……」

「何というテンパり具合」

「姫様可愛いです。まさか到着すぐ、このような可愛らしいお姿を

拝見できるとは」

「とりあえず、飯、行くか。バレンシアはどこかオススメはあるか？」

「はい、お任せください。ケーキ、パイ、紅茶を出す、なかなかのお店が」

「け、ケーキか。いや、シラユキのためだ、そこにするか。案内してくれ」

「はい。では……」

わ……、に、人間だよねみんな。じゅ、十年ぶりに見た……。現世だと初めてだね。

のほほん美形種族、エルフを見慣れていたせいか、他の種族の人が怖く見えてしまう。なんかみんな、さっさか歩いてるし。

何でそんなに急いでるの？　それともそれが普通なの？　もっとのんびり歩いてよー……

獣人の人は凄いね、体大きいね。ごっつい男の人にネコミミっぽいの生えてるよ。怖いって！　あ、でも女性はしなやかそうな？

ネコミミっぽい、イヌミミっぽい人が多目かな？　獣人族でも種によって特徴が変わるんだっけ？　あれ？　尻尾は出てないね？

無いのかな？

な、何かチラチラ見られてない？　私。え？　変かなこの格好……

そ、それとも、か、可愛い？　え？　狙われちゃう？　誘拐されちゃう！？

！　目が合った！　わわわわ！
兄様を挟んで反対側に逃げ、抱き付く。

！？　こ、こっちでも！？
反対側に逃げたのに、こちらでも別の人と目が会ってしまった。
また兄様を挟み、反対側へ。

「ちょっ、シラユキ！　回るなよ、歩きにくい……」

だだだだだだって！　み、見られて！　ううう……、もう駄目だ、帰りたい！！！

「落ち着いたかー？」

「う、うん。何とか……」

いつの間にかお店に入り、席に付いていた。飲み物、オレンジジュースを一口、やっと一息つけたよ。

「ちょっと人、が多くて、びっくりしちゃったみたい」

「姫様、こちらもどうぞ。この店のアップルパイは中々のものですよ」

アップルパイを一口大に切り分け、私の前に出してくるシアさん。

わー、おいしそうだねこれは。うん？

「シアさんなんで座ってないの？　ここお店だよ、ね？」

ちょっと自信がなかったので、兄様にも問いかけるようにして聞く。

「ああ、合ってるから安心しろ」

だよね。

「俺もそうしろって言ったんだけどな、バレンシアだし？　諦めた」

シアさんだし、で納得か。しかしこれは……

「メイドですから」

「目立つよ！　既に目立ってるよ！！」

一組だけ専用の給仕とか悪目立ちしすぎだってば。

「ああ、何か生暖かい視線を感じるよ……」

なんか視線が……。おいおいどこの貴族様だよ、っていう視線が！　ごめんなさい王族なんです。

「姫様申し訳ありません。気が利かなく」

あ、やっと座ってくれるんだ。

「周りの視線が気になるのでしたら、お任せください。この程度の人数、二分と経たずに全て抉り出してご覧に」

「怖いよシアさん、こーわーいー！！」

「ふふふ、ご安心を。ただの本音、……いえ、冗談です」

すっと目を逸らすシアさん。

本気だこの人ーーー！！！

「さて、程よく緊張は解けたようですね。この後のご予定は？」

出されたパイを食べ切り。一休憩。

「うん。なんかさ、違う意味で緊張しちゃったんだけどね？　でも、肩の力は抜けたかな。ありがとう、シアさん。ルー兄様もね」

さすがシアさん一流メイド。緊張していた私をあっさりと素の状

態に戻すとは……。だよね？　本気でやってたわけじゃないよね？

「シラユキは、何か見たいものでもあるのか？　って言っても何があるのかなんて全く知らないか」

「あのね？」

「駄目だ」

「うー……」

まだ何も言ってないのに……

「冒険者ギルドですか……。姫様が、何故そこまで冒険者に惹かれるのか、正直全く分からないのですが。何か理由がおありなのですか？」

「え？　うん。冒険者ってさカッコよさそうじゃない？　シアさんも元冒険者だったんでしょ？」

「なるほど、カッコよさそうね。ふむ……」

「小さな子供特有の憧れ、のような物でしょうか？」

ハイそこ小さな子供言わない。でも。

「あ、そんな感じかも」

身一つで生計立てて生きてるんだよね？　何か依頼受けたりとかさ。冒険だよ冒険、遺跡の調査とかもあるんじゃない？　新しい土

地、生き物の発見とかさ。

「ん。外、見てみな。あれ、あそこのあいつ。黒髪の、黒っぽい服着てるやつ」

「うん？　どこどこ？　あ、あの人？」

その人は、人間種族、かな。年は二十くらい？　黒い短い髪、上下黒目の服、胸と手の甲辺りに、防具だろうか？　何か固そうな素材の防具を着けているのが見える。腰には剣、剣だよねあれ。腰から下げるように一本の剣の鞘を下げている。背中は見えない、こっちもまた黒っぽい、長めの外套をかけている。

ああ、うん、いかにもな人だね。冒険者っていう感じ。ちょっと全体的に黒っぽいが。絵本で見た冒険者って鎧を着込んでたりしてたんだけど、実際は随分と軽装なんだね。

少し見物していたら、その人は歩いてどこかへ行ってしまった。よく見ると似たような感じの人も何人か見かける。でもそこまで数は多くないね。

「今の人が、何？」

兄様の言いたいことが分からない。さっきの人を見て何を感じろというんだろう。

「バレンシア、今の男、どれくらいだ、ランク」

ランク？　冒険者ランクってやつ？　ファンタジーだわ、ゲームっぽいわ。

「E、でしょうか？　恐らく上がってもD止まりでしょう」

「そんなもんだよな。さてシラユキ」

「は、はい！」

空気重っ！　お説教っぽい？　何で？

「おっと、構えるな、怒ってるわけじゃない。さっきのあいつ、な。楽しそうに見えたか？　カッコよく見えたか？」

カッコよく、は無いかも？　何か黒いし。楽しそうかなんて分かんないよ、ただ歩いてただけだよ？

「お前、冒険者は楽しい、とか思ってるんじゃないか？　いや、ちゃんと楽しい事ばかりじゃない、と分かってるだろうな」

「うん。楽しいばかり、じゃないよね」

冒険者というのは、常に死が付きまとう職業。それが常識だよね。命を懸けてロマンを求める感じなのだろうか。

「逆だ」

「え？」

「考え方が逆なんだよシラユキは。あいつらは、冒険がしたくて冒険者をしているわけじゃない。仕事だからやってるんだ。まあ、中にはそんな奇特な奴も、それなりにはいるがな」

お仕事？　冒険者としての依頼の事？

それじゃ、何で冒険者に？　他のお仕事もあるんじゃ？

「あいつらにはそれしか道が無いんだよ。いや、今のは言い過ぎか。選べる道が、極端に少なかった、っていう事だな」

「ルーディン様、それくらいで……。姫様が知るには、理解するには、まだ、早すぎます」

「ん。そうだな……」

え、全然分かんないよ……。道がそれしかなかった？　冒険者になるしかなかった？　でも、なりたくはなかった？

「俺達は王族だ。周りの皆、国民は家族だ。土地も家もある。だが、あいつらにはそれが無い。今はそれだけ、……？　しまった……！」

「ルーディン様っ！！　姫様！　考えないで！　姫様！！」

「あ、ごめんなさい、二人とも。分かっちゃった……」

「姫様！！　忘れてください！　考えないで下さい！！！」

「ああ！　シラユキごめん！　言い過ぎた！　話し過ぎた！！　何

でこんな簡単に全部理解しちゃうんだよコイツは！　何で話しちまうんだよ俺は！！」

「う、うん……。大丈夫だよ、ちょっと私、子供過ぎたなー、と思ってるだけだから」

「お前まだ十歳だろう！！！」

「ルーディン様！！」

ああ、十歳でこれ理解するのは無いわ。兄様が怒鳴ってるのも、自分自身に対して怒ってるのが分かっちゃうのも無いわ。私、こんなに頭良かったっけ？　中身十六と実年齢十の、二十六か。

人間の考え方、だね、これは。私はエルフ、ハイエルフ。百歳でやっと成人するエルフなのよ。それでもまだ大人扱いされない、のほほん種族なのよ。もっと、のんびり、知っていけば良かった……

あの人たちは、生きていくために、冒険者をやっているんだ。

住む家も無い、頼る家族もいない。自分ひとりで生きていくには冒険者になるしかなかったのか……

「ごめんなさい、私、馬鹿だね。みんなちゃんと止めてくれてたのにさ」

「あー、シラユキは悪くは、無い、だろう？　ちょっと頭が良すぎるだけさ。ユーネと同じ、他の皆の子供の頃と同じように扱ってた俺達が悪いんだ」

「うん。ありがとうルー兄様。シアさんもありがとう」

「いえ、私は何も……、できませんでした」

「ふふ、今日の事じゃないよ。いつも、ありがとう」

「姫様……」

「お前って、あれだよな。何か、母さんにすっげー似てるよな」

「そう？　それは嬉しいな」

「それじゃ、この後、どうするよ？」

「姫様のお召し物を、買占めに参りますか」

「買い占めちゃうんだ……」

「ええ」

「ははっ、そうだな。どうせなら店ごとでも買ってやるぞ？」

「ふふふ、そうだね。それもいいかもね。でもね？」

「ん？　他に行きたい所、あるのか？」

「今日は、もう、帰りたい……。みんなに会いたい……」

我慢の限界。ごめんなさい、ちょっと、子供みたいに大泣きするね。ごめんね、二人とも。子供だからいいよね……

その１９（後書き）

初めての町体験はアップルパイを食べて終了。どうしてこうなった。

今回の最後は、ちょっとシラユキの心情が分かりにくいかもですね、すみません。
でも私にも説明できない、できにくい！

その２０

さあ大変です。

私がここまで泣いたのは初めての事。

あたしって、ほんとバカ。という泣きだったんだが。後は急に出てきた寂しさかな。あの時、家族に、みんなに、どうしても会いたくなっちゃったんだ。

大泣きする私を抱き上げて帰ってきた兄様とシアさん。

静かに理由を聞く父様。怒り狂って町を破壊に向かうかと思ったよ。やっぱり冗談だったか。

私を必死で泣き止ませようとする姉様。知らせを聞いて飛んで来てくれた母様。

あ、これはシアさん死んだな、と、かなり本気で思ってるメアさんフランさん。

ゆっくりと説明する兄様。

そして、説明が終わり。

「こいつ多分、申し訳なく思っちまったんだろ、顔も知らない冒険者にさ。優しすぎる、相手の事を思いやりすぎる、ってのかな。後は、あれか、俺とバレンシアしか近くにいなかったからな。急に寂しくなったんだろ」

「私の、私の配慮、思慮が足りませんでした。浮かれていた、いえ、言い訳のしようもありません。どうか、厳しい罰を」

「バレンシアのせいじゃ無えよ。誰のせいでも無い。何かが悪いならそれは、タイミングが悪かったんだろ。色々とな」

「話を聞いてると、そうかもね。シラユキの頭の良さ、物分りの早さを少し軽く見ていたかしら」

「ああ、具体的では無く、遠まわしにでもいいから、まずは教えておくべきだったな」

今の説明でここまで理解されちゃうものなのか。やっぱり家族って凄いな……

「ごめんねシラユキ？　私も、もう成人してるんだけどさ、いい言葉が浮かばないや。まだまだだね、私、お姉ちゃんなのにさ」

「ううん。ユー姉様、大好き」

抱きつく、甘える。今は全力でみんなに甘えたい気分なんだ。

「しばらくは町に、いや、どうするか」

「そうね、ちゃんと色々と知ってからなら、何も問題は無いと思うわ」

「そうなると、だ」

父様がこちらを向く。そしてにっこりと笑い。

「必要になったな。だが、シラユキが決めていいぞ？」

私が決める？

「うん？　何を？」

「前に皆で決めたろう？　勉強なんて必要になったらやればいい、と」

あー、決めたね、そういえば。五、六年前か。

「今回は、シラユキに何も予備知識を与えていなかった事が一番の原因だろう」

「だから、先に色々教えてあげちゃえば、知っておけばいいのよ」

「そうよね、もっと早く冒険者について、少しくらいは教えてあげればよかった。うーん、ごめんねシラユキー」

ほっぺグニグニされた。

勉強、勉強かー……。確かに、この世界の事、この世界での当たり前のことを、もっと知っておかないと。

先にある程度情報を入れておけば、憧れ、楽しみが、目の前であっさり砕けた。何て事にはなりにくいだろう。

今の私は、知識と頭の良さのバランスが取れていないんだ。

「これからは書庫を自由に使うといい。だが、必ず家族の誰かか、ふむ、バレンシアと一緒にな。本の知識を自分の中だけで完結させちゃいかんぞ？」

「そうよ？　本はあくまで本、あなたが得るのはその本に書かれた情報を、自分なりの知識に変えたもの。それだけではいけないわ」

うわー、この二人の言葉はなんか深いわー、さすがだわ……。これ聞いてなかったら、私、絶対一人で読んで納得しちゃってたよ。

「私、ですか？」

「ああ、バレンシアは五百年近く外で生きてきた、生き抜いてきた、本物の冒険者だ。これ以上の適任はいないだろう？」

「そんなっ！　ウルギス様、エネフェア様との誓いも守れなかった私に今さら、何が……」

誓い？　え？　シアさん泣いてる！？

「それなら罰よ。あなたはこれからも、今までと変わらずシラユキのご、側にいるように」

ご？　ご……、私のご、護衛か？　え！？　シアさん私の護衛だったのかまさか！　どう見てもメイドさんが本職だよ！！

「はいっ！　ありがとうございます！　改めて今日、ここに誓います。……あ、やはり後にしましょう」

ちょ、それは無いよ！　今いいところだったじゃん！！

「やめちゃうの？」

「ええ、姫様の前では少々、都合の悪い内容も含まれますので？」

「気になるよそれ！　何か怖いこと誓ってそうだよ！」

「いえいえそんなまさかうふふふふ」

「目！　目を合わせて！　ああ、もう！　すっかり元のシアさんだよ！　よかったよ！！」

「いっやー、さすがに今回は死んだかと思ったよ、レン」

「そうですね、私も死んで償うつもりでしたし」

「またさらっと怖いことを！　駄目だよ、絶対！」

この人はちゃんと見ておかなきゃ。色々な、色々な意味で怖いよ……

「あはは。ま、何も変わらなくて良かったよ。私、紅茶入れるの苦手だしさ、シアがいなくなると困るのよねー」

「シアさんのいれる紅茶っておいしいよねー。同じ茶葉なのにどうしてそこまで違いが出せるんだろ」

本当に不思議だね。何で私の護衛役の、元冒険者の人が、ここまでメイドさんの仕事を、しかも完璧にこなせるんだろう？

「メイドですから」

「いや、私たちも一応メイドだよ」

「やっぱり私らはあれだね、胸に栄養が、いっちゃ、って……」

「姫様？　少し目を瞑っていて頂けますか？　できたら耳も押さえておいてもらえると、大変助かります」

やばい！　シアさんが戦闘用オーラを纏っている！

「だからシアさん小さくないって！　私から見たら大きいよ！！」

「姫、子供じゃん？」

メアさんフォローを潰さないで！　それより早く逃げて！　ナイフ出る！　出た！！！

その２０（後書き）

次に町へ行くのはいつになるやら。
それはつまり、それまで新キャラが出ないという事に……？

その２１

十歳になれば町に行ける。それにいきなり躓いた私は、次の楽しみへ移行しようとしていた。

町には行けるのよ？　でもちょっと怖いかな。

そう、もう一つの楽しみ、魔法の作成だ。今日から私の、大魔法使いへの道が……？　別に大魔法使いに興味は無いな……

とにかく、それなりに凄い魔法使いへの道のスタートラインに立ったのだ。締まらないわ……

その事をシアさんに話してみたら。

「ああ、そのような事もありましたね。すっかり忘れていました。姫様は最近魔法の話すらしていませんでしたし……。それでは、暫くお待ちくださいね」

待つ？　何か大掛かりな用意でもあるんだろうか。確かに魔法は、暴走でもしたら危険だしね。何かしら対策を立ててから練習するんだろう。

獣人の種類の書かれた本を読んで待っていたら、シアさんが戻ってきた。やっぱり尻尾あるよね。今度獣人の人に会ったら聞いてみよう。

シアさんにしてはやけに時間がかかったね。やっぱりそれだけ危

険なんだろう。これは気を引き締めないとね。

戻ってきたシアさんと一緒に、父様、母様、兄様、姉様、ん？
それに何故かコーラスさんまで、みんな部屋に入ってきた。コーラスさん何か、髪乱れてない？

「いやあ、忘れてた忘れてた。魔法、うん、魔法な」

「そうよね。魔法よね」

「ど、どうしよっか？」

「バラすしか無いだろ？　このまま自由に使わせてたら、多分そう遠くないうちに暴走するぞ」

「なるほど、急に連行されたと思ったらあの話ね。私もすっかり忘れてたわ」

なんだろう、みんなの様子がおかしい。

「で、誰が言うよ？」

「お父様お願い」

「何！？　いや、確かにシラユキの反応は楽しみだが、言った本人には、一番多く怒りが向けられそうなんだよな……」

「ふふ、シラユキがこんな事で怒るわけ無いじゃない」

「そうですよ。ウルギス様気にし過ぎですって」

「うむ、そうだな。それじゃあ、コーラス、頼んだ」

「何でそうなるんですか！」

「それでしたら、僭越ながら私が」

「バレンシアか、余計な事は言うんじゃないぞ」

「はい、約束します」

どうやらシアさんが何かの説明をしてくれるみたいだ。一体魔法の練習はどれだけ大変な事なんだろう。

「さて、まずはどこから説明しましょうか……。そうですね、説明に入る前にまずは一つだけ。ここにいる私たち、いえ、リーフエンドの国民全てが、姫様にある隠し事をしていたんです」

「隠し事？」

それが魔法と何の関係があるんだろう？　まさか今まで見てきた魔法は偽者よー、とか言うんじゃないだろうな。それは無いか、私も使ってるし。

「その隠し事に付いてですが、悪意の無い物、と、まずはそれだけを述べておきます。全て、姫様のためを思っての行動でした。それを、信じてください」

私を思っての隠し事か……。まったくみんな過保護なんだから。

「うん、信じるよ。続けて？」

「はい、続けます。それでは、まずは見てもらいましょう。メア、こちらへ来てもらえます？」

「ちょっと！　私を巻き込まないでよ！」

「ここで例になれるのは、あなただけですからね」

「ううん……。分かったよう」

メアさんが、嫌々といった感じにシアさんの横に並ぶ。

「では、明かりの魔法、姫様が使える物と同じがいいですね。出してみてください。ああ、身振りは無しでお願いします」

「うん、それじゃいくよ。ライト！」

メアさんが元気よく魔法名を叫び、頭の少し上に光の玉を出す。わざわざ魔法の名前言わなくても……

「消してください」

「うん」

魔法が消える。

「もう一度」

「はいはい。ライト！」

もう一度メアさんがを出す。うん？　何か今引っかかったぞ？

「それでは消して、次は詠唱破棄でお願いします」

「詠唱破棄ね……」

詠唱破棄。全くの無言の状態で魔法を行使する技術、だよね。魔法は心で撃つのよ。

私もこの魔法程度なら、身振り手振り無しで使える。それでも数個が限界だが、手振りも合わせればほぼ詠唱有りと変わりなく使えるくらいだ。ちなみに詠唱はその場その場で適当。光れー、とか、点けー、とかね。イメージしやすいものなら何だっていい。

メアさんは右手を前に出し、手のひらの上にライトの魔法を出した。

あれ？　身振り無しじゃ？　あ、ついやっちゃったのね。分かる分かる。つい体が動いちゃうんだー

「その手の動き、無しでいけます？」

「無茶言わないでよ。私には無理よ」

「え！？」

「という事なのでした。隠していて申し訳ありませんでした」

シアさんがペコリとお辞儀を……、え？

え？　だって、これ簡単な魔法よ？　私程度でもポンポン出せちゃうのよ？　あ、そっかそっか。

「メアさんって、魔法苦手なんだ？」

「ううん？　苦手って程でもないよ？　そこまで練習やら勉強やらはしてないんだけどさ。言ったでしょ？　日常生活に困らないくらいは使えるって。ま、普通、かな？」

普通？　メアさんくらいが普通ってこと？　家族＋コーラスさんの方へ目をやると、みんなニヤニヤしていた。露骨に目を逸らすな！

「ありがとう、メア。元の位置へ戻ってもいいですよ」

「うん。あー、よかった。姫が爆発する前に離れれるわ」

メアさんは元いた辺りにに戻る。

言いたいことはなんとなく分かったが。ここらでひとつ、所謂、トドメ、というものが欲しい。

「シ、シアさん。簡単にまとめて。で、できるだけ簡潔にね」

「はい、少しだけお待ちください。言葉を選びます」

1・2・3・4・たっぷり五秒。

「姫様天才じゃね？」

素敵な笑顔で、素敵にお辞儀されてしまった。

その２１（後書き）

その２２（前書き）

今回は二話投稿です。
こっちを先に開いてしまった人は、先にその２１の方へどうぞ。

分かりにくいタイトルですみません。

その22

「素晴らしい説明だった！　さすがはバレンシアだ。シラユキの反応の可愛い事可愛い事……」

「ええ、特に最後の一言の後のポカーンとした表情。いい物を見せてくれたわ」

「お褒めに預かり光栄でございます」

みんなからシアさんに、盛大な拍手が送られる。

このほほん軍団は後回しだ！　頭の中を整理しよう。爆発するのはそれからでも遅くはない。

私が気軽に詠唱破棄で使っていた明かりの魔法は、いや、詠唱破棄で魔法を使う、という事は、通常難しいものなのか？

家族のみんなは普通に、全く普通に使ってるよね。お祭りの時とか、広場で父様と暴れてる人たちだってそうだ。

メアさんは得意、という訳ではないけど、別段苦手、という事でもないらしい。メイドさんだしね、あれくらいが普通、なんだろう。

その詠唱破棄、さらにノーモーションで使っていた私は、五歳で使いこなしていた私は、なるほど、天才か。

ほうほう、なるほどなるほど。まとまった。

「説明は分かった、けど、どうしてこういう事に、内緒にしてたかも教えて欲しいな」

「あら？　随分落ち着いてるわね。もっと慌ててくれると思ったのに」

「この子ホント頭良いわよね。十歳とは思えないわ」

コーラスさんと母様は仲良さそうだな。年が近かったりするんだろうか？

「あー、あれだよ。お前のためだ」

兄様が答える。

「私のため？」

天狗にしないためかね。わざわざ緘口令まで敷いていたんだっけ？　大袈裟な……

「ああ。あの夜さ、お前が初めて魔法を成功させた夜。シアに聞いて驚いたぜ？」

「そうそう。珍しくシアも慌ててたもんね」

あの時の事か、懐かしい。ホントに無意識で成功させちゃって、

達成感も何もあったものじゃなかったよ。

「そこで俺たちは思ったわけだ。これを、五歳で詠唱破棄という異常さを、すまん、異常は言い過ぎた。五歳で詠唱破棄が使えるという事を、普通、だと思い込ませよう、ってな？」

普通に、思い込ませる？　私に？　ちょっと分からないな。もう少し大人しく聞くか。

「ちなみに、俺、たち、などと仰っておりますが、発案者はもちろん、緘口令も全てウルギス様の仕業です」

「な！？　余計な事は言わないと約束したろう！？」

いきなり名前を出され慌てだす父様。ほほう……

「はい。余計な事ではなく、必要な事、ですから」

「しまった！　言い様で何とでもできたか！！」

犯人は父様。なるほど、覚えたぞ……

しかし、ちょっと話が逸れそうだな。修正しなきゃ。

「それで、私に内緒にしておくと、どうなるの？　どうなったの？」

「うん？　分かりにくかったか？」

「分かりにくいと言うか、全然分かんないんだけど……」

「あれ？　珍しいな。いつもならちょっとした言葉からも全部理解しちまうってのに」

それは今までの経験と言うか、元日本人としての常識と照らし合わせてただけだからね。

「そうよねー。よし、それじゃお姉ちゃんが説明してあげましょうか」

「うん。お願いユー姉様」

さて、どんな理由があったんだろう。

えっとね？　全部シラユキのためだったのよ、さっきも言ったけどね？　そのレベルを普通だと思い込ませようとしたの、これもさっき言ったわね。

酷い事言うみたいだから嫌なんだけどね、五歳で詠唱破棄とか本当に異常よ？　あ！　お母様ごめんなさい！　シラユキも泣かないで！！

ふう……、続けるね？

私もお兄様も、天才って呼ばれる部類に入るんだけどね。私が詠唱破棄を初めて成功させたのなんて四十歳くらいの時よ？　もちろん身振り手振りあっての事。ノーアクションで発動なんて今でも一部の魔法しかできないわ。

あの日、あの夜、お父様に、シアに、全員集められて言われたのよ。シラユキが初めて魔法を成功させました。ってね？

それにしては、お父様もお母様もシアも浮かない顔してるな、って思ったのよ。そしたらね？　初めて発動させたのが詠唱破棄でって言うじゃない？　みんな固まっちゃったわよ。

五歳で魔法を成功させるのも凄いのに、さらに詠唱破棄よ？　天才とかそういう一言で済ませられるレベルじゃないって。

シアが言うにはね、お兄様が詠唱破棄で手本を見せていたのが原因じゃないかって。それを普通レベルと思い込んじゃってるんじゃないかって。

そこで、お父様が思いついたのよ。もう一回言うわね。お父様！が！　思いついたのよ。はいお父様逃げようとしなーい。

このまま思い込ませていたら、勘違いさせたままなら、どうなるか？　ってね。どうなると、どうなったと思う？

あれ？　分かんない？　おかしいな……

シラユキの今のレベルが普通なら、練習すればもっと、もっと上のレベルになると思わない？　それこそ世界一、くらいのね。お父様越えも夢ではないわ！

あー、そういうことね。普通のレベルを思い込みで上げて、伸びしろを伸ばした感じか。

エルフの四十歳は人間に換算すると……、十三歳くらいか？　ほうほう。兄様姉様は天才少年少女だったと。

でも、それってさ？

「それ、今言っちゃったら駄目なんじゃないの？　私もうこれが普通じゃないって分かっちゃったよ？」

元に戻っちゃうんじゃないの？　元、と言うか、普通にさ。

「ないない。魔法っていうのはイメージが全て。もうシラユキには、詠唱破棄が普通だって言うイメージが根付いてるはずよ。それに……、あ、こっちの理由はいいか」

「そのためにわざわざ緘口令まで敷いて、お前の前では詠唱なんてしないように気をつけていたんだよ。国民全員でな」

「はー」

過保護ってレベルじゃねーぞ！！　……失礼。

「む、娘の魔法のために国一つがかりとか！　父様やりすぎよ！！　五年もみんなに迷惑掛けて！！」

「やりすぎではない！　普通だ！！」

「娘の教育のために緘口令敷く普通がどこにあるのよ！！　ここに

あるぞ！　とかは無しね！」

「ここに、うお！　心を読まれた！？」

お約束よ！

「まあまあ、お前にとっては五年も、だけどな。俺たちにとっちゃ、たった五年、だもんなー」

「そうよ？　まさか、内緒にしてた事じゃなくて、国民に迷惑を掛けていた事の方を怒るのは、さすがに予想外だったわ」

「ああ。なんて優しい、なんていい子なんだシラユキは……」

そんな事で褒めたってごまかされないわよ！

「本当、いい子に育ってくれて嬉しいわ」

「ユーネより大人なんじゃないか？　もう」

「うう……、お姉ちゃんとしての威厳が……。そうね！　そうかもね！」

「ホントホント、十歳には見えないって。さすが姫。やっぱり私も子供欲しくなったわ」

そ、そうかな……。なによ、もう、みんなして。えへへ……

「ちなみに、姫様がホイホイと詠唱破棄で使っている明かりの魔法ですが、それなりに難易度の高い魔法だったりします。熱も質量も持たない光源、と考えれば姫様にならお分かりになられるかと」

!?

全員超反応。

なんですって!?

「こ、こら！　バレンシア！　いま折角ごまかされかけてたのに！！」

「何でそれを、しかも今のタイミングでバラす!?」

「申し訳ありません。メイドの勘が、今だ、ここでバラせ、と告げていましたので……。それと、この件については、ウルギス様、ルーディン様の共謀、と、付け加え説明しておきます」

「や、やめろ!!」

「それ以上言うなバレンシア!!　はっ!?　いや！　もう無いぞ？　もう何も秘密になどしていないぞ!!」

「ねーさまねーさまー」

「な、なあに?」

「前に言ってた魔法、教えて欲しいなー」

「え？　ど、どんな、魔法だったかな？」

「超広範囲を？　無差別に？　殲滅する？　魔法？」

「逃げて！！！　お父様お兄様全力で逃げて！　今のこの子なら教えなくても成功させちゃいそうだから！！」

なあに、教えられなくても今なら簡単にできそうさ。父様がお祭りの時に暴れてるのは、記憶に強く残ってるからね……

父様兄様は一瞬で窓から飛び出して行ってしまった。速いなー、あれ。私もやってみたいな。

何か、何でもできそうな気になってきちゃったよ。でも焦っちゃ駄目、まだ十歳になったばかり、ちょっと前に町で感じた、思ってしまったことを思い出そう。

ゆっくり、ゆっくりね。のんびりと、のほほんと進んで行こう。

その２３

「はいドーン！」

「わひゃあ！」

いつもの様に読書をしていたら、兄様がドアを開け……？　破壊して入ってきた。

「何でドア壊すの！？」

「破片が当たったらどうするおつもりです？　ルーディン様」

「お前が止めるだろ、全部」

「それもそうですね」

「納得しちゃ駄目！！」

なんか少しズレてるよ二人とも！

「お兄様は大変怒っています」

「ルー兄様気持ち悪い」

「馬鹿な！　あ、いや、普通に話そう」

最初からそうしてよ……

「お前引きこもりすぎだろ、外出ろ、外」

「あ、言われてみれば」

そういえば、ここ数日外出てないね。魔法の練習も全くしてないし。

だってねえ、本、面白いのよ。書いてある事のほぼ全てが未知の物なのよ。

「なんだ無意識か。そんなに気に入ったのか？　書庫の本」

「うん。色々な本があっていいね。シアさんに教えてもらいながら読んでたの」

最近は人種についての本かな。獣人の種類の本を、実際会った事のあるシアさんの感想を聞きながら読んでいる。

「すみません。私も言おう言おうとは思っていたのですが。姫様との二人きりの、至福の時間を失いたくはありませんでしたので、黙っていました」

「そこは言っとけ。ほれ、魔法見てやるから、外行こうぜ？　あんまりこもってると伸びる背も伸びなくなるぞ？」

「行こう！　すぐ行きましょう！！」

背！　今でも小さめなのに、さらに伸びなくなるとか嫌だ！

「いえ、是非このままで。背など伸ばす必要はありません。決してありません！」

「何でそこで力説！？　シアさんも行こうよー」

「分かりました。姫様のお願いを私が断れるわけもありません。大丈夫です、いつも祈ってますよ。姫様の背がこれ以上伸びないように、と」

「私が小さいのってシアさんのせいなの！？」

何その祈り！　呪いでしょ！！

「んなわけあるか。バレンシアもあんまりからかうなって。見てて面白いからいいんだが……」

「ふふ。では、参りましょうか？」

「否定してよ！！！」

いつもお祭りをしている広場までやって来た。何かをするにはここは、確かに丁度いいスペースだ。

「シラユキはどんな魔法が使ってみたいんだ？」

「うーん？　急に聞かれても……」

私が使いたい魔法？　魔法、魔法ね。

攻撃魔法？　要らないよねそんなの。うーん、うーん……。まずいな、特に何もいらなくね？　夜中使ってる明かりの魔法は便利だけどさ、それくらいだよね。

魔法と言えばやっぱり、攻撃系の魔法だろう。炎を出したり、水を出し、……水？　水って出せるの？

コーラスさんが使っていたのは、溜めてあった水をまく魔法、だからね。あれは水を自由に動かす魔法なんだろう。

ふむ、考えてみると、何か物理的な物を出す、っていうのは魔法で可能なのかな？　無から有をっていう感じの魔法。

あ、シアさんナイフ出したり仕舞ったりしてるよね。ちょっと聞いてみようか。

「ねえねえ、シアさん」

「はい？　なんでしょう？」

「シアさんがたまに出すナイフって、あれも魔法で作ってるの？

魔法で作って魔法で消してるのかな？」

「いいえ？」

「え？」

あれ？　違うんだ。それじゃあのナイフはどこから？

「もう忘れたのか？　魔法はイメージを現象に変える技術だって教わったろ」

「あ、そっか。それじゃシアさんのナイフはどこから出してるの？」

現象、そうだったね。イメージが全てとはいえ、物理法則をそこまで無視はできないのだろう。軽めには無視してる気がするけど……。いいか、魔法だし。

「これですか？」

パっと左手にナイフを出すシアさん。嘘だッ！！！　それ絶対魔法だろ！

「確かに魔法、と言えば魔法なのかもしれませんね。しかし、申し訳ありません。これは私にしかできないメイド技術、お教えすることはできないんですよ」

「世の中にはな、こういう一個人のみしか使えない、魔法のようなスキルがあるんだよ。バレンシアだからいいが、他の奴には聞くんじゃないぞ？　特に冒険者にはな」

「うん……」

固有スキルってやつ？　か、カッコいい……。シアさんカッコいいよ！　ナイフ出せるとか、絶対にメイドさんの技術じゃないよ！！！

「シラユキ、見てみな」

兄様はそう言うと、地面に手のひらをつける。何するんだろう？

「こういう事ならできる」

立ち上がった兄様の手には、いつの間にかナイフが。刃の部分は１５ｃｍ程だろうか。うん？　全体的に茶色いな？　兄様の足元を見ると、小さな穴が開いていた。

「それって、土？　で作ったの？」

「うーん。理解が早いのは助かるが、もう少し驚いて欲しいな」

「うわーすごーいどうやったのー？」

「すごいですねー？　どうやったんでしょうねー？」

「くそう、こいつら……。ほい、持ってみろ。刃は潰してあるが、柄の部分を持てよ。あ、あと少し重いからな。気をつけろよ？　落とすなよ？　振り回すなよ？　人に向けるんじゃないぞ？　後は……」

中々渡してくれない兄様。なんという注意事項の数。なんだかなあ……

「どうしたの、ルー兄様？」

「んー、刃を落としてあるとはいえな？　シラユキに刃物は持たせたく無いんだよな……」

またこんなところで過保護発動させて……。

「大丈夫だよそれくらい、偽者なんでしょ？　貸して貸してー」

「あ、ああ。バレンシア、目、離すなよ」

「承知しております」

「まったくもう……。そこまで子供扱いしなくても……」

ゆっくりとナイフを手渡された。

想像していたよりずっと重い。凄いねこれ、これを土から作ったんだ。重さからすると結構な量を固めてあるのかな？

こんな魔法もあるんだ。これは、力が強い人が大きさを変えて自由に作れるなら、立派な武器になるだろうね。

……武器？

「！」

「わ、っと……」

シアさんが急に私からナイフを取り上げた。どうしたんだろ？

「何も言わず取り上げなどしてすみません。ですが、姫様、ご自分が震えているの、分かります？」

「え？　あ……」

震えてるね、何でだろう。いや、理由は分かるんだけどさ。

「果物とかさ、パイを切ってるナイフとは全然違うだろ？　それは人を、生き物を傷つけるための武器の形状だからな」

「うん、だよね。怖い、ね。これも、魔法、なんだよね」

「こういった魔法は、あまり一般的に使われてはいません。魔力の消費の大きさ、維持できる時間の短さ、使用者の熟練が必要、と、かなりの上級な魔法の部類に入ります。冒険者で難なく、それも実戦で使うような者はいないと思いますよ。初めから武器を用意した方が……、すみません」

ちょっと続きが聞きたかったけど、いいか。焦らない、必要になったらまた話してくれるはずだ。

「ふう……。また泣き出すんじゃないかと思ってたが、大丈夫そうだな」

「うん。ルー兄様、ありがとね。父様の言葉、思い出せた」

魔法は、怖いもの。

その２４（前書き）

今回も二話投稿です。
先にその２３の方へどうぞ。

繋げた方がいいのかなこれは……

その２４

父様の言葉。

そうだな……。どうせ嫁どころかこの国から出す気も無い。
魔法は確かに便利だが、生きていく上で必ず必要、と言うほどの物でもないんだ。
たまに暴れてる俺やユーネは怖いだろう？
魔法は怖いものなんだぞ？

嫁どころかこの国から出す気も無い！？

そ、そこじゃないよ私！　でも思い出しちゃった！　な、何さらりと言ってるのよ父様は！！！

はっ！　今はそっちは考えちゃ駄目だ。魔法は怖いもの、の方だよ！

簡単に言えば魔法は武器にもなるって事なんだろう。当たり前だ。
でも、当たり前すぎて、理解したつもりになっていただけなんだね。
父様が暴れているときも笑いながらだったし、逃げているみんなも楽しそうだった。そのせいもあるのかな？

当たったら怪我をする、運が悪ければ死んじゃう魔法なんだよねあれ。

別に父様が、本気で殺すつもりで魔法を撃っているわけじゃないのは分かってる。あの人たちならこの程度難なく防ぐだろうという信用の元、万が一すら起こることは無いという信頼の元の行動だろう。

あー、あれだ。元いた世界での科学と同じだね。便利なものもあれば危険なものもある。うんうん。

そうなると答えは簡単だね。

銃と同じだ。

「うーん、なんだかな」

兄様がちょっと不満そうだ。あれ？　違ったかな？

「その顔は、全部理解しちゃったって顔だな。もう少し説明、俺に話しさせてくれよ……。俺、ナイフ見せて怯えさせただけに見えるぞこれ」

あはは、ごめんね兄様、私って天才らしいし？

「それじゃ、最後のまとめ。ルー兄様、お願い」

「え？　私が説明したかったのですが……」

シアさん説明好きだよね。メイドさんだからかな？　いや、説明

の最中に私をからかうのが好きなんだ！

「駄目だ。俺にさせてくれ。このままじゃ妹いじめただけだよ……」

「ふう、少し不安もありますが、お譲りしますね」

「ふふふ」

「ま、あれだな。一言で言えば、使う者次第って事だな」

うんうん。魔法は力、力を使うのは人だ。よくある話だけど、実際にこうやって体験するとはね。

「コーラスが水をまいていた魔法だってそうだ。細く圧縮して撃ちだせば、人の体くらい簡単に」

「例えが怖いっ！」

「おっと悪い悪い。水を操る魔法だなあれは。動かせるのはもちろん水だけじゃないぞ？　地面、見てみな。土だって動かそうと思えば自由に操れるもんだ」

ナイフを作ったのは、ナイフの形状に土を集めて、圧縮して固める、その形状を一定時間維持する。っていう感じの魔法かな？

「炎や風と違い、水や土は質量があります。炎や風にも実際はあるのかもしれませんが、イメージできませんよね？　簡単に言えば軽い、でしょうか。水や土は見たまま、多くなればなるほど重くなりますよね」

「ええい、この説明好きめ、俺にさせろ。重いものほど操るのが難しく、魔力の消費が多くなる、とでも言えばいいかな。本人のイメージと訓練次第でそれも結構変わってくるんだが。コーラスは水を操る事にかけては、多分この国、いや、大陸一だろう」

コーラスさんってホントに凄い人だったんだ……

水か、流体を操る魔法、ね。難しそうだね、水は掴んだりできないし。炎を飛ばすっていう魔法の方が確かに簡単そうだよ。

「風も難しくない？　イメージとしてさ」

風って目に見えないしね、どうイメージしたものか。

「一番簡単じゃねえか。手でちょっと自分あおいでみな」

うん？　ぱたぱた涼し、い？

「風だよこれ！」

「炎の熱さ、水の流れなんかより、はるかに分かりやすいだろ？　ちょっと速く走ったりとかな、体で風を切ったり受けたり、多分一番多く接しているのが風だと思うぞ」

言われてみれば、のオンパレードか。
みんなと外で遊んだりした事を思い出せばいい、私は既にいろいろな事を経験している。そうだ、それが私だけの魔法に繋がるって、母様が言ってたじゃん！

「ルー兄様もシアさんも凄い！　大好き！！」

ちゃんと私が答えを導き出せるような、自分で考える部分を残したヒントをくれる。あれ？　兄様ってもしかして結構どころか、かなり頭いい？

「何だよ急に、嬉しいな」

「私も大好きですよ、姫様」

告白された！！

「よーし勉強終わりっ。シラユキにもっと風を感じさせてやろう」

魔法一個も、一回も使ってないけどね。風を感じる？　あれか！
跳躍魔法か！！　今度はちょっと風圧も入れるのか！！！

ちょっと怖い気もするが、この二人がいれば安心だね。風を切って飛ぶ経験ができるのかー……

「それは素晴らしいお考えです。できましたらその役は私めに」

「だーめだ。バレンシアだとそのまま攫って逃げそうな気がするんだよな……」

「分かりました。とても残念ですが、諦める事にしましょう」

「攫って逃げるのところを否定して！！」

「安心してください姫様。この先チャンスはいくらでも、ええ、いくらでもありますとも」

「何のチャンスよ！！！」

その２４（後書き）

今日、お気に入り登録が一気に増えていて驚きました。何かあったのかな……？
登録ありがとうございます！

こんな日常ほのぼのだらだら系のお話ですが、今後もよろしくお願いします。

簡単な感想も貰えるとさらに嬉しいです。
質問疑問等もお気軽にどうぞ。

その25

さあ今日も読書読書ーっと。今日は何を読もうかな。
兄様一押しの世界の巨乳シリーズは、昨日全巻焼き払ったばかりだし。兄様何で泣いてたんだろうね、不思議だね。
今日も竜人についての本でいいか。巨大な竜の姿になれる種族らしいねー。何それカッコいい。

魔法の実践は、実はまだ一度もしていない。夜中に使う明かりの魔法だけだ。ネタばらしをされた後も特に問題も無く使えている。
何故かあんまり新しい魔法覚える気にならないのよね。

跳躍魔法は使ってみたいが、私にはまだ危険すぎる。あの速度で飛び回るのは、慣れた土地、覚えた地形だからこそできる事みたいだ。今の私ができるとしたら、精々高い木の枝に飛び乗るくらいだろう。
飛び乗った後も問題だ。木の枝の上でバランスを保てるのか？落ちた場合の対処は？　そもそもちゃんと狙った所へ飛べるのか？
着地はどうする？

あの魔法は一体いくつの魔法を複合して使っているんだろう。
おっといけないいけない。感覚で使うんだったね。ついつい先に考えちゃうね、悪い癖だ。
ポーンとジャンプしてスタっと着地すればいいのよ。あれ？　できそうじゃねこれ？

ちょっと部屋の窓を開けてみる。ここはいつもの談話室、四階だ。
ふむ、高いな……
ここから飛び降りて軽く着地、できそうな気がするな。ふむふむ
ふむ。

「よし」

足、はかけれないか。それなら飛び上がって……

「姫!?」

「姫様!?」

「シラユキ!!」

「だだだだ駄目よ!!」

みんなに全力で止められてしまった。姉様に抱きとめられ、そのままずるずると、元いた椅子へ運ばれる。やばいな、怒られるなこれは。

「多分、高所からの着地の練習をしようと思ったんだと思うけど、ね?」

「は、はいっ」

「初めてがいきなり四階の高さからは無いでしょう!?　お姉ちゃ

んびっくりしたわよ！　後スカートなのよ！　ヒラヒラなのよ！　可愛いのよ！」

これは怒ってるのか？　びっくりさせ過ぎてしまった様だ。

「ご、ごめんなさい。なんか今ね？　ちょっと考えたらできるんじゃないかなって思っちゃったの」

「シラユキならできちゃうと思うんだけどさ、せめて一言言ってからにしてね？　下で誰か待たせるとかしないと……」

「私たちもいるんだからさ、気軽に言いつけてよ。私たち結構暇なのよ？」

「そうそう。別に畏まらなくてもいいから、楽でいいんだけどね」

そういえばそうだね、何故か失敗する事が完全に頭から抜けてたよ。考える事を少なくしすぎたね、いやいや、お恥ずかしい事で。

「どうする？　その本読む？　着地の衝撃を和らげる魔法だっけ、練習する？」

「練習ってどんな風にやればいいの？」

二階辺りから飛び降りるのかな？　あれ？　二階でも失敗したらやばくね？

「シラユキくらいの子なら、そうね。そのテーブルから飛び降りてみれば？」

「ですね、それくらいの高さがまずは妥当かと」

テーブルからって、これ、１mも無いよ？

「あ、これは駄目だ。絶対に失敗するわこの子。わ、私たちがいてよかった、気づいて止めれてよかった……」

姉様は、へなへなとその場に脱力して座り込み、え、え？　な、泣いちゃった！？

「ごめんなさい！　ごめんなさいユー姉様！！　もう絶対しないから、絶対一人でやろうとしないから！！」

どうやら私、今さっき、死に掛けたようだ……

「はい、飛び降りてみて。魔法を使おうとか考えなくてもいいからね？　そのままでいいから」

「私たちが見ていますからね。安心して降りてみてください」

テーブルの上に乗せられてしまった。く、靴のままだよ？　お行儀悪いわー

「クロスを換えればいいだけだから、気にしなくていいよ」

「シラユキは結構細かい事気にするよね」

何故分かったし。そんなに考えが顔に出やすいのかな私は。

「はい、とても分かりやすいです」

「シアさんは返答が具体的過ぎるよ！？」

「それじゃ降りてみるねー」

ま、これくらい軽く降りれるって。ひょいっと。

スタッと華麗に着地、はできなかった。ドスンって感じ？

足に痛みがじーんと広がっていく。

「あ、足痛い……」

「はいはいこっちおいで？　お姉ちゃんの膝の上、来なさい」

よろよろと姉様に抱きつく、い、痛かったよう……

「あれ？　思った以上にダメージ受けてません？　姫」

「そ、そうね。ちょっと高すぎたかしら？」

「実は、まずは椅子からの方が良かったんです。ですが、やはり一度、痛みを味わっていただかないと」

ううう、シアさんが怒ってる。

「大丈夫ですよ、姫様。説明の後、私の両足を自由にしてくださって結構です。へし折るなり切り落とすなり石臼に掛けるなりご自由に」

「表現が怖っ！　しないよ!?　怒ったままでいいから！　自分を責めなくていいから!!」

「相変わらず姫の突っ込みはキレがいいね」

「見てて飽きないわホント」

「さて、それじゃ恒例の説明タイムよ。あ、シアは黙っててね？」

「ユーフェネリア様!?」

姉様も説明好きだからね、先手を打ったのか。

「その高さから飛び降りればね？　私たちだって普通に痛いわよ？　自分の全体重に、飛び降りた勢いを加えて足にかかるのよ。特にシラユキは細いからね、ひ弱だからね」

「姫って結構走り回ったりしてたけど、全然体力無いよね？　ひ弱だよね」

「うん、ひ弱だねシラユキは」

「シアさんみんながいじめるー！」

申し訳ありません喋れません、という意思表示の綺麗なお辞儀をされてしまった。み、味方がいない！？

「シラユキ。実際その高さからどころか、あんまり自分で跳ねたりした事すらないでしょう？」

あ、姉様真剣だ。最近私怒られてばっかりだな。怒られている、という事では無いかもしれない。甘やかすだけじゃなくなっただけか。ありがたい事だね。

「うん。運動は軽く走るくらいしか……」

「軽く走っただけですぐ力尽きるのよね。ひーよわー」

フランさん酷い！　でも全く言い返せない！　事実です……

「本当に、本当に止めれて良かったわ。高い所から降りた衝撃も分からないのに、経験した事もないのに、それをどう和らげるつもりだったの……」

「あう、ごめんなさい……」

「甘やかしすぎた私たちも悪いのよね。シラユキ小さいから、可愛いから、ついつい抱っこしちゃうのよね」

「これからは運動の時間、作ろっか？　私たち姫が本読んでる間、暇で暇でさー」

え！　それはできれば遠慮したいと言うか、勘弁してもらいたい。私の読書時間を削らないでー！

「そこまでしなくてもいいわよ。でも、毎日散歩くらいする事、もっと外にも遊びに行く事、約束しなさい。お兄様とシアの三人で、魔法の練習に広場行くでしょ？　そこにちょっとした高さの台作ってあげるから」

「椅子くらいの高さなら、私たちがいれば十分そうだしね」

「他の魔法を使いたい場合は、ちゃんと王族の人の誰か連れて行かなきゃ駄目よ？　レンがいれば大丈夫そうだけどね」

あれ？　激甘じゃない？　この人たち。つまり、今まではもっと甘やかされていたって事か。

うわあ、駄目だよ私、甘やかされるのに慣れ切ってた！　もっと頑張らなきゃ！　頑張らなくてもせめて普通にならなきゃ！！　なんという志の低さ。

「うん！　ごめんなさい、ありがとう、みんな」

「かっ可愛すぎる！　やっぱり毎日読書でもいいわ！　お姉ちゃんが読んであげるから！！」

「ユーネ様台無しだよ……」

「あはは。みんな大好きー！」

本当に私に甘すぎる、優しすぎるね、みんな。

「ま、しょーがないわよね、姫だし」

「しょうがないっか、シラユキだし」

「あ、シア、もう喋っていいわよ。ごめん忘れ」

「姫様愛してます！！！」

また告白された！！

この後シアさんに構い倒されてしまった。我慢させると反動が凄いねこの人は、き、気をつけなきゃ……

その２５（後書き）

まだまだ増えるお気に入りとユニーク……

何があったか気にはなりますが、嬉しいですね。

その２６

「はーい、シラユキ行きまーす」

「駄目だ！　足を挫きでもしたらどうする！　ほら、降りなさい。お父様が抱き上げてあげるからな？」

「父様邪魔しないでー！」

最速で父様に阻止されてしまった。まったく、この人の過保護っぷりは衰えると言う事を知らないな。

今日から私の新魔法、『着地の衝撃を和らげる魔法』の練習が始まった。付き添いは父様と姉様、少し離れた位置にメイドさんズが待機している。

今私が乗っていた台は、高さ４０ｃｍ程だろうか？　今の私の身長から見ると少し高く感じるね。でも、この程度の高さなら全く問題は無い。無いよね？

だ、大丈夫だよね？　父様の反応を見てると、私まで不安になってくるのよ。

「もう……。いくらシラユキがひ弱だからって、この程度の高さから降りたくらいで、どうにかなる訳ないでしょ」

「いや、しかし、しかしだな。もし、もし怪我でもしたら、もし、

骨が折れたりしたら……」

折れるかーい！　父様の中では私はどれだけ虚弱体質なんだろう……

「この子昨日テーブルから降りたのよ？　今さらこの高さ」

「テーブルだと!?　どこのだ！　談話室のか!?　一体何故そんな無茶を!!　ああ、理由は分かってるんだ、着地の衝撃を知るため、だったんだろう？　だが何故最初にそんな高さからなんだ!?」

「ひみつ！」

昨日のことは言えないね。言ったら父様の事だ、向こう千年は新しい魔法の使用を禁止しかねない。数字は決して大袈裟な物ではないはずだ。

「秘密……だと……？　シラユキが、俺に、秘密……だと？」

「秘密くらい誰にだってあるわよ……」

そうそう、色々あるって。元日本人とか、女神様に会ってるとか、実は能力持ちとか。昨日父様の分のプリンを食べたのは実は私だったとかね。兄様は犠牲になったのだ。

「ま、ままま、まさか！　反抗期なのか!?　いや違う！　シラユキに限って反抗期などある訳が無い!!」

「確かにシラユキには反抗期なんて無さそうよね……」

「あ、そこは同意しちゃうんだユー姉様……」

確かに、実際無さそうだね。多分一生縁の無い言葉だよ。
私が、この人たち、この素晴らしい家族のどこに反抗することがあると言うんだろう。

「大丈夫だよ父様、私、みーんな大好きだよ」

「やはりシラユキは良い子だった！！！」

「うん！　シラユキは世界一良い子よ！！！」

この二人似てるなー。
姉様は、見た目母様似なのに、性格は父様に似てるよね。ふふふ、面白い。

「それじゃ、改めて。シラユキ飛びまーす」

はらはらしている父様は無視しつつジャンプ。スタっと着地。
おお、この程度の高さでも結構衝撃は来るね。なるほどなるほど……

「どうしたシラユキ？　急に黙って……、まさか！！」

「何とも無いよ！　ちょっと考え事してたの。このくらいの衝撃なんだなーってね」

「ふふふ、それじゃ、次、行ってみましょうか」

もう次なの！？

「シアー！　ちょっとあそこの木から降りてみてくれるー？」

あ、なるほど、実演してくれるのね。これはしっかりと見ておかなきゃ。

シアさんはお辞儀を一つ、少しだけひざを曲げ、飛んだ！！

凄い速さで、木の上のほうの枝まで一気に到着、そして安定のメイド立ち。だからそれ怖いよ！　どこかに手ついてよ！！

少し間をおいて、飛び降りた。飛び降りたと言うより、スッと落ちた感じだろうか。

落ちるシアさん、はためくスカート、しかし捲れ上がらない。そして、重力を感じさせない、ふわりとした、音も無い着地。

凄い……

「シアさんこっちこっちー」

シアさんをこちらへ呼ぶ。

「シアさん凄いすごーい！」

「さすがシアよね、綺麗」

「どうしてスカートは捲れないの？　なんで何も音がしないの？」

「メイドですから」

「なるほどな」

「父様はそれで納得しちゃうんだ！？」

さて、冗談は置いておいて、シアさん本当に凄いわ。兄様とはまた違った着地の仕方だったね。

兄様の場合は、ジャンプの時も着地の時も音がしてたし、あんなふわりとした着地の仕方じゃなかった。普通に降りてた感じだったよね。スタッてさ。

私もシアさんみたいな綺麗な降り方がしてみたいな。私、女の子だし？　あのふわりとした着地、あれには憧れちゃう。

あれは風を操ってるんだろうか？　自分の周りに風を纏う感じ？　風というより空気か？　難しいな。

兄様の場合は、衝撃を消すために、着地の瞬間足と地面をガードしているんだろうか？　そうするともっと凄い音が出るな……

いやー、難しいわこれ。もう少しヒントを貰わなきゃ。

「私もシアさんみたいに綺麗に着地してみたい！」

「ふふ、無理よ」

「姉様ひどーい！」

「ははは。シラユキにはまだ少し難しいかもな」

「むー……」

どうやら今の実演は、超がつくほどの高等技術みたいだね。

ふわりと着地、ふわり？　浮く？　一瞬浮いてた？　そういえばシアさんのジャンプって、飛んでるというより浮いてる感じだよね。ふわっと、飛ん、で？

重力を感じさせない着地？　重力？　まさか、重力を操ってるのか！？　ちょっとそれは高等技術すぎるでしょう！？

いやいやそれは無いよ！　でも、あのジャンプってどこかで見たような？　ああ、重力で思い出した。月面を歩く人の映像。なんかポンポーンって歩いてたよね。あれに近いわ。

そうなるとやはり重力なんだろうか？　さすがに重力を操るとか、私の能力でも難しいと思うし。おっと駄目だ、考えを止めるな。

重力、下に、地面に、星の中心に引っ張られる力だよね。引力？　うん？　引っ張られる力？　それなら飛ぶ場合はその反対の力か？　押し上げる力？　飛ぶ力？　浮く力？　浮く！？

浮力か！！！　考え付く簡単なものは水に押し上げられて浮く力！　水は何？　水は流体！！　空気も流体！！！

ああ！　できる！　できそうだ！！　風を、空気を纏って飛ぶ。できそうじゃないか！！！

あれ？　着地じゃなくね？　ま、いいか。

その２６（後書き）

魔法の練習回になるとシラユキの脳内会議が凄い事に……
これでもかなり短めにしているんですが、長いですね。
飛ばし読み程度で全然大丈夫です。

その２７（前書き）

今回また二話投稿です。
先にその２６の方をお願いします。

その27

イメージは、水底から水面へ蹴り泳ぐ感じか。ああ、これはできてしまいそうだ。

水と違い空気の抵抗なんて少ないものだろう。だけどイメージで浮力を持たせることはできると思う。

斜めに力を入れれば、飛び進む事はできそうな気がしてきた。ふよふよと浮く感じ、イメージね。

あれ？　着地はどうする？　ゆっくり落ちるようにしたとしても、高さがあればそれだけ加速度がつく。

だ、駄目だ！　飛べるかもしれないけど、着地ができない！　危ないよ、気づいてよかったよ……

「シラユキ、深く考えるよりやってみるの。その高さなら危険もないし、疲れないでしょ？　ますは何回も飛び降りてみなさいって」

おっと、かなり長く考え込んじゃってたみたいだね。

考えるより慣れろ、か。魔法は感覚で使うもの、また忘れるところだったよ。

「うん。まずはこの高さから、衝撃無しで降りられるようになればいいよね」

「ああ。だが、無理はするんじゃないぞ？　足が痛くなったり、疲れたら、ちゃんと言うんだぞ？」

「はーい！」

だからこれくらい大丈夫だってば。いや、でも私って相当ひ弱なのかもね、油断は禁物だ。

台の後ろ側は階段状に段差がついている。と言ってもたかが４０ｃｍ程度、一段あるだけだが。

トントン、と上がり、ひょいっと降りる。そしてスタッと着地。

ふむ……

とりあえず、重力、浮力は頭から外しておこう。まずは兄様のように軽く着地できるようにならなければ。

ふわり着地は当分無理だろう。飛ぶこともまだ考えない。きっとやりたくなって、怪我をしかけて、みんなに余計な心配を掛けるだけだ。

そんな感じで、色々と考えながら昇り降りを繰り返していると……

「ぷっ、くっっ、ふふふっ」

「ちょっと、駄目だよフラン、笑っちゃ」

うん？　フランさんが笑いを堪えている。何かあったのかな？

「どうしたの？　みん、な？」

「あ、ああ！　な、何でもないぞ。くっ、なんでもな」

「か、可愛い、何この子可愛すぎる……」

「フラン！　笑っちゃ駄目だって……、ふふっ」

「ふふっ、あははは！　もう駄目！　お、面白過ぎるわよこの子！」

「さすが姫様です」

な、何よこの反応は？　シアさんはいつも通りとして、他のみんなは、何がそこまでおかしいのか、笑いを堪えている。と言うかフランさんは既に限界が来たようで、笑っている。

「はーい！　シアさん！　説明を求めます！！」

「ぶふっ！」

父様も決壊したか。一体何なのよ……

「それでは、姫様からのご指名です。私から説明をさせて頂きますが、よろしいですね？」

姉様に確認を取る。私が説明するから黙ってろ、と。シアさん昨日のこと根に持ってるなー

「う、うん、お願い。私はちょっと、このシラユキの愛らしさを他の皆にどう伝えようか、考えないといけないの」

「何それ！？　やっぱり私、またなにか変な事しちゃってたの？」

「変な事などではありませんよ？　ご安心ください」

「そうそう。面白い事はしてたけどね……、ふふふ」

「まあ、姫はやっぱり姫だった、っていう事かな」

私は私だった？　うーん、わけがわからないよ。

「姫様。後もう何度か、先程の練習を繰り返してもらってもいいでしょうか」

「え？　うん、いいよ」

またトントン上がり、ひょいっと降りる。そしてポンと着地。

トントン、ひょい、ポン。トントン、ひょい、ポン。数度繰り返す。

「ぶっ！　ふふっ、くくくっ。気づいてない、気づいてないよこの子！！！」

またフランさんが盛大に笑い出してしまった。何？　何なの？

なんかさ、馬鹿にされてるみたいでさ……、悲しくなってきちゃった……

「うわっ！　やばっ！　ごめ、シラユキごめん！！！」

「何姫様を泣かせているのですかあなたは……！」

「シラユキ！　な、泣かないで！　シアも落ち着いて！　ナイフ仕舞って！！」

「あちゃー。やりすぎだよみんな……」

「メアリーだって笑っていただろう！？　ああ……、娘を泣かす父親か、もう生きていてはいけないんじゃないか……？」

「お父様も馬鹿な事言ってないで、慰めてあげてよ。まさかこんなにショック受けるなんて……」

くすんくすんとぐずる私。

「申し訳ありません姫様。もう少し早く説明に移るべきでした。姫様の愛らしいお姿を少しでも長く、いえ、何でもありません」

「結局悪いのレンじゃん！」

「全員よ、フラン」

「あ、そうだよね……。すみませんユーネ様。シラユキもごめんね？　悪気は無かったのよ。ほんとに可愛くて、面白くて笑ってただけなの。あー、面白くて笑ってたのが駄目なのよね……」

悪気がないのは分かってるよ。でもあんな風に笑われるのはちょっとね……

「うん……。なんか、馬鹿にされてるように、思っちゃって……」

「!?　す、凄い罪悪感が！　ごめん！　ごめんね!!　だ、誰か私に罰をー!!」

「すみません、今、私にも凄まじい罪悪感の嵐が……」

「いいから説明してあげて？　許してもらうのはそれからよ」

「大丈夫ですか？　姫様。その、説明を続けても……」

「う、うん。お願い」

別に怒ってるわけじゃないんだけど、いいか。後で何か、我侭一つくらい聞いてもらっちゃおう。

「回りくどい説明は省きます。姫様、着地の衝撃を和らげる魔法、成功していましたよ？　それも無意識に、詠唱破棄で」

「え……、え!?」

な、なぬ！？　またか！　また無意識か私！！　さらに詠唱破棄か！！

そうだよ詠唱だよ！　私無言でやってたよ！　声に出せばよかったんだよ！　もう遅いよ！！！

確認のために、もう一度台に上がる。そしてちょっと勢いをつけて飛び降りる！　今度はちゃんと意識して！

トンッと華麗に着地。

できた、できてたね今。衝撃なんて殆ど無かった。軽く走ってる時にかかるくらいの負担か？　それか！　無意識にそれを再現して見せたのか私は……

「父様！　テーブルくらいの高さ、出して！　出してくれないと絶対許さないから！」

「わ、分かった。少し待て」

少し離れた地面に手をかざす父様。みるみる地面が盛り上がり、テーブル大の高さの飛び降り台が完成する。７０ｃｍちょっとくらいか？　周りの地面、へこんでるな。なるほど、周りの土を使ってるんだもんね。

「結構疲れるんだよなこ」

「父様凄い！！！」

「うお！　こんなところでポイントが稼げるとは！　よし、見てろシラユキ。次はもっと大きな」

「いらない！」

父様に言って私は走り出す。止められそうだが、無視だ！

「シラユキ！？」

「姫様！」

「大丈夫！　……多分ね！」

そのまま走って階段を上り、その勢いのまま踏み切って、ジャンプ！　うわ！　怖いわこれ！！　でもいける、できる！！

トトトンッと。勢いは全て殺せなかったが、問題なく着地。足にかかる負担もさっきと同じくらいだ。三歩分に分かれたからだねきっと。

「はい拍手ー！」

くるっとみんなの方を向いて、笑顔で決める。

「何かするなら、まずは一言言いなさいって言ったでしょう！」

「怪我でもしたらどうするんだ……。今のはしてもおかしくない勢いだったぞ？」

「あれ！？　怒られた！！」

メイドさんズは拍手してくれていたよ。

私の使った魔法は、着地の衝撃を和らげる、では無く。落下の勢いを抑える魔法、だったようだ。見ていた人たちからすると、少しはふわっと浮いていたように見えた、らしい。そういえば、飛距離が伸びていたような？

後は、着地の瞬間のみ、適度な力で発動させる事ができれば、兄様のように自然に、歩いているような着地ができるみたい。兄様やっぱり凄いわ……

シアさんのふわりと着地は、瞬間ではなく、直前に使っていた、という事か。

しかし、最初から『落下の勢いを抑える魔法』だと教えてくれればよかったのに。私が『着地の衝撃を和らげる魔法』を使いたいって言っちゃったのがいけないのか。

答えを教えないで、自分で気づくようにしてくれたんだろうか？

意味合いは同じようなものだから、どっちでも良かったのかもしれない。使う私が名前を付ければいいんだったね。

魔法に名前なんて無い。私の、私だけの魔法を創る。

難しいね。言葉遊びのようだ。

「勢いをつけて飛ぶことは絶対にしない事。約束よ？」

「はーい、ユー姉様」

勢いをつけると、思わぬ飛距離が出て慌てて失敗するんじゃないか、という理由だ。頑張ればもう高く飛び上がれるかもしれないしね。

これからはもっともっと、深く考えないようにしよう。感覚、感覚で使うんだ。もっと気楽に、力を抜いて、それでいて、頑張ろう！

その27（後書き）

ど、どんどん増えるお気に入り件数とユニーク……
今までの約三倍になってしまいました。

毎日増えてる数を見て驚き喜んでいます。

その28

さあ、今日も楽しい読書の時間だ。お相手は、最近やけに私の側にいることが多い姉様と、メイドさんズだ。

私の飛び降り未遂は相当肝が冷えたらしく、しばらく私から目を離すつもりは無いらしい。ごめんね姉様。

「うーん。最近、毎日本読んでばっかよね」

「うん。魔法も止められちゃったしね」

魔法の練習は一旦中止になってしまった。たまたま広場に顔を出した、コーラスさんの一言でそれは決まってしまったのだ。

「それ、十歳で使おうとする魔法じゃ無くない？」

あの時の全員の顔、凄かったよ。言われてみれば！　とか、その発想は無かった！　といった感じかな。

そういえばあの魔法って、超が付く程の高等技術だっけ？　それをホイホイと練習する私、にこやかに見守るみんな。

「そんなの成人したエルフでもそうそう使える人いないって。その魔法の他に何か使えたっけ？　明かりだけだよね？」

そのままズルズルと、終始無言のまま母様の前まで引きずられ、連れて行かれた。

「さすがは王族かなー、と思ったんだけどね？　十歳は無いわ十歳は！　まずはもっと普通に！　そよ風を起こすみたいな可愛い魔法にしなさい！　十歳の子に無理させて、取り返しの付かない事になったらどうするの！！！」

びっくりしたよ！　母様が怒られてたんだよ!?　コーラスさん実は母様よりも、もっと年上らしい。一体何歳なんだこの人は……

母様半泣き。私は全泣き。

泣き出した私に驚いたのか、落ち着いてくれたんだけど。本気で怒ったコーラスさんは本当に怖かった。

甘やかされて育った私の周りには、今まで私の前で本気で怒るような人はいなかったんだよね。それが、私に関する事に対してでもね。

「簡単な魔法なら良いのよ？　コーラスの言う様な、そよ風を起こす魔法とかね」

ほらほらこんな感じ、と、姉様は私を手で扇いでくる。

「あ、涼しい。いいね、この魔法」

扇風機ほどの強さは無いが、団扇で強く扇いだくらいの風が流れ

てきた。
涼しいわこれ、最近ちょっと暑くなってきたし、覚えておくのもいいかもしれない。
「でしょ？　こういう簡単な、基礎的なことを、まず教えてあげないといけなかったのよね」
ちょっとやってみるか。手で扇ぐ、姉様に向かって、風を、送る。
「え？」
姉様の髪が揺れ、流れる。ちょっと強かったかな？　もう少し弱めに、っと。
「あ、できたできた。ユー姉様涼しい？」
「そうよね、この子だもんね、シラユキだもんね。みんなああなっちゃうわよね……」
「ユー姉様？」
あれ？　何か反応がおかしいぞ。まさか生暖かい風でも送ってしまったんだろうか？　漠然と風というイメージしかしてなかったしなー
「ううん。シラユキは悪くないのよ。五歳で詠唱破棄なんて物を簡単にこなせちゃうこの子を見て、私たちが調子に乗っちゃったんでしょうね……」

「ど、どうしたのユー姉様？　今の、何か変だった？」

「ふふふっ、ごめんね？　シラユキ。大丈夫、涼しかったわよ。ありがとうね」

姉様は私を抱きしめて、優しく撫でてくれた。

よく分かんないけど、褒められた？　のかな。

その後すぐ姉様は、私のことをメイドさんズに任せて、どこかへ行ってしまった。

「みんなー、私また何かしちゃったー？」

あああ……。多分また何かやらかしてしまったようだ……

「言ってもいいよね、シア」

「ええ、今まで、からかい半分に内緒にしていたのが一番いけませんでしたね。今のユーフェネリア様のお言葉で全て理解しました。自分がどれ程愚かだった、という事が」

「ねね？　シラユキ？」

「何？　フランさん教えてー？」

どうやら三人とも分かっているようだ。さすが私自慢のメイドさ

んズ。

「今、風起こしてた魔法。また無意識に、しかも一発で成功、さらに詠唱破棄でやっちゃってたよ」

「うんうん。もう天才とかじゃ片付けられないよね姫は。凄い凄い」

え、あ、そうだね。また言われてみれば、だよ。もしかして、それが何かいけなかったのかな？

少しの沈黙の後、シアさんが何かを決意したように話し出した。

「その、天才などという言葉では到底測り切れない姫様のお力を見て、私たち、王族の方を含め、この家に住まう全員が……」

「全員が？」

シアさんは一呼吸ついて。

「ひ、姫様を、十歳の子供としてあ……、扱っていなかったのでしょう」

あれ？　シアさんなにか、辛そう？

「レン……」

「姫様のことを、天才だ、神童だなどと言い、そして、あ、あの……、で、できて」

「レン、私が言おうか？　アンタにそれは、何となくだけど、言って欲しくないな……」

どうしちゃったんだろうシアさん。まるで、私が初めて町に行ったとき、大泣きして帰ってきたときのようだ。また自殺とか考えてるんじゃ……？

それだけの事を、シアさんの中ではそれだけ許せない事を、してしまったんだろうか？

「ごめん、言っちゃうね？　あのさ、私たちってさ、多分だけどシラユキのことを、さ……、軽く見ちゃってたんだよ」

「軽く？　私の事を？」

いやー、無いよそれは。あれだけ過保護な家族は早々いないと思うよ？

「うまく言えないんだけどね。シラユキなら当たり前、できて当然、天才だからね、ってね」

うわ、フランさんも泣きそうだ。わ、分かんないよ！　全部良いことじゃないの？

「フラン。分かってないよ、姫」

「うん、ごめん。全然分かんない。私が悪いんじゃないの？　簡単にできちゃった私が」

「シアもフランも辛そうだし、私が説明、するね。うまく伝えられないかもだけど。分かりにくかったらウルギス様に聞いてもらえるかな、この二人、もう限界っぽいからさ」

「う、うん……」

メアさんも今日は真剣だ。どうしよう、私も泣きそうだ。この空気嫌だよ……

「魔法を使う、違うか、習うかな？　魔法を習う人に対してのことよ。家族として姫を大事にしてる、大切にしてるのみんな、もちろん私もそう、溺愛してるって言ってもいい。でもね、その反面、魔法使いとしての姫には、そ、相当冷たく当たってたんじゃないかなと思うの。この子ならできて当たり前だって。……た、多分他の人から見たらさ、とりあえず使い方だけ教えて、後は勝手にやれ、って言ってるような、ものよ、ね……。ごめん、私も限界。泣いていい？」

メアさんが泣き出す。それにつられるように、フランさんも泣き出してしまう。シアさんはとても悔しそうだ。

「コーラスさんが怒ったのは、そういう事？　あれだけ大切にしておきながら、碌な魔法も教えていない、失敗したら怪我しちゃう、し、死んじゃうような魔法を、好き勝手に使わせてるって」

「はい。それも無自覚に、です……」

うーん？　本人からすると全然そんな感じしないんだけどなー……だってあれだよ？　私の家族だよみんな。あの激甘家族だよ？これは、違うんじゃないかな。

なるほど、さっきの姉様の急な変わりようはそういう事だったのか。という事は、今は母様の所にみんなを集めているかな？

よし、それなら、やるなら今しかないな。

「母様の所、行こう。もちろん四人で」

三人ともハッとこちらを見る。そして何かを決意した、諦めた様な顔。ん？　何その表情。

「うん……、でも、その前に一つだけいい？」

「何？　急ぎの用事でもあった？」

フランさんは用事あるのか、できたら急いで行きたいんだけど……。行って、いなかったらまた集めればいいか。

「旦那に、会って来ていい？　今生の別れになりそうだし、ね。こんな事言える立場じゃないと分かってるけど、お願い……！」

「今生の別れって何!?　フランさん死んじゃうの?　フランさんの旦那さんが死んじゃうの?　旦那さん!?　フランさん結婚してるの!?　初耳だよ!!!」

いいいいいつのまに結婚とか!!!　あ、フランさん二百歳以上だった!　私が生まれる前だねきっと……、なんだなんだ、なるほどなるほど。

何か驚く所が多すぎて、変なところを納得してる気がする。

「あれ?」

「え?」

「私たち、処罰されるんじゃないの?　極刑モノじゃないの?」

処罰?　何で?　極刑って死刑?　死刑!?

「怖い!　珍しくフランさんの発言が怖いよ!?　死刑とかあるのこの国!?」

「森の中に無断で入り、国民を傷付けようものなら、その場で即処刑されると思いますよ」

シアさんが何を当然な、という感じに言う。

「聞きたくなかった!　知りたくなかった!!　やはり最強種族だった!!　のほほんとしてても外敵には容赦無かった!!!」

「家族を傷つけられたら、当たり前の行動じゃない?」

メアさんもか！　ん？　家族？

「あ、そっか。私もこの国の誰かを傷付けられたら、絶対許せないと思う。みんな大切な家族だもんね」

うん、話が盛大に逸れてるね、分かってるよ。

でもさ、みんなの調子が戻ったみたいだしさ、怖い話だったけど、結果よければよし、だよ！

「さて、その大切な、私の大切な家族のメイドさんたち、母様の所に行こっか？　多分みんなして暗い顔して、見当違いの思い込みしてると思うからさ」

「姫様……！」

「姫が言うなら、そうなのかな？　でもまだちょっと、自分を許せそうに無いな……」

「あー、結婚してる事バラしちゃったよ。もっと別の所で驚かせてからかおうと思ってたのに。もったいない……」

危なかった！　逆に後で、からかいながら追求しまくってやる！！

「私本人が言うから間違いないの。誰も悪くないよ？　みんな本当に優しいよ？　丁寧に教えてくれてたよ？」

「行きましょう。今のお言葉を、早くあの方々にも……」

多分これも、一種の過保護から出た結果なんだろうね。なんだかなーホントに。もっと自信を持ってよ、私の自慢の家族なんだからさ！

その２８（後書き）

少しまじめなお話に……ならない！？

その29

私たちは母様のいる部屋の前までやってきた。この国の女王の、と言っても、王座の間のような物があってそこに座っているわけではない。執務室みたいな感じかな。

本棚に大量の本や資料、書類。やっぱりのほほんとはしてても国は国、こういうところはちゃんとしている。

母様は大抵はこの部屋でお仕事をしている。もっと一緒に遊びたいんだけどね。おっと、子供みたいな考えが出てしまった。

まずはシアさんがノック。

「バレンシアです。少し、お話しする時間を頂いてもよろしいでしょうか」

「入ってくれ」

ん、父様いるね。これはみんないるかな。

部屋の中に入る。相変わらずこの部屋は、この国に合わないと言うか、ちゃんとしすぎて違和感が凄いね。

中には家族四人ともそろっていた。母様お付のメイドさんズも二人控えている。紹介は省く。

みんな、ぞろぞろと部屋の中に入ってきた私たちに、少し驚いて

いるようだ。

「お忙しい中、申し訳ありません。ですが、どうしても早急に伝えなければ、片付けなければならない用件がございまして」

「ど、どうしたの？　し、シラユキ、何かあったの？」

姉様が心配して話しかけてくる。何も無いから来たんだよ、姉様。

「どうぞ、姫様。私たちは控えています」

「うん。ありがとうシアさん」

さて、でも何から話した物かね。私こういうの苦手だよ……

「ゆ、ユー姉様が、みんながね？　変な勘違いしてるんじゃないかなーと思って来てみたの」

「勘違い？」

「俺たちもか？」

姉様と兄様が不思議に思い問い返す。

「うん。ちょっと説明しにくいなー。いっか、説明なんて無くても」

いいや、一言で表してしまおう。この一言で伝わるとは思えないけど、うまく言葉にできないんだからしょうがない。

「あのね、私ね。みんなのこと、家族みんな、大好きだよ。怒ってもいないし、嫌いになんてなるわけ無いよ」

だから変な事考えないでね？　と、笑顔で言ってやる。

「シラユキ……！」

母様が泣き出して、私を強く抱きしめてきた。

「俺たちの勘違い、なのか？　ユーネに言われて初めて、お前に酷い事をしていたと思ってな……。反省と話し合いをしていたんだが」

おお、よかった、やっぱり話し合いしてたみたいだね。これでしていなかったら、私変な子だよ。

「うん。だから、今まで通りでいいよ？　あんまりからかって欲しくは無いけどね」

からかわれるのも、私が可愛いからなんだしね。

「やっぱりこいつ、十歳の考え方じゃないよなあ……」

「それはそうだよ。私前世の記憶も少しはあるもん。もう、薄っすらとしかないけど」

一部の記憶を保護する代わりに、大半の記憶は引き出しの奥に詰め込まれちゃった感じなのよね。知識はあるが、どう生活していた、とかは、実は殆ど思い出せない。

「お、そうなのか？　なるほどな、前世の記憶か、なるほどな……」

「そうだったの？　あらあら。あ、何歳だったのかしら？」

「うん？　十六だったよ。ここことは別の世界で人間してたんだー……」

「十六か、それでもまだまだ子供だろう？」

「人間種族は十六で成人よ、ウル」

「ああ、そうだったな……。人間で十六か。エルフにすると……、六十過ぎか？」

「それくらいねきっと。子供ではないけど、大人でもないわ。やっぱりこの子は天才ね。ふふふ」

「みみみ、みんな。華麗にスルーしてるけどいいの？」

「うん？　ああ、もう少し情報を引き出しておきたかったからな。もう十分か？」

「おう。俺もう限界」

「私も、まだ色々と聞きたいことはあるけど、後からでもいいわね」

「う、うん。そそ、そうだよね？　あ、私、言う」

何か姉様大慌てだな。私また何か変な事……？　言ってるよ！？

「前世の記憶って何よ！！！　初めて聞いたわよそんなこと！！！
私たち今、今後のシラユキについてのお話してたのに、考えてたのに！　それ全部吹き飛んじゃったわよ！！！」

「え？　聞き間違いじゃないかな？　あ、私ちょっとお腹空いたから、おやつ食べてくるね」

い、一度撤退しよう。か、考えるんだ、うまい言い訳を……
振り返ると、ドアを塞ぐように並ぶメイドさんズが。しまった！
逃げられない！！

「シラユキ？　こっち来なさい、こっちこっち」

母様が自分の膝の上を叩く。
メイドさんズはともかく、大魔王からは逃げられない。観念しよう……

「ご安心を姫様。私もですから」

え！？　シアさんもって……？

「それも初耳よ！！！　ああもう！！　今日は何なのよ！！！」

「一人慌ててると、他の皆は冷静になれるよな」

「う、うん。そうだね」

確かに姉様以外のみんなは落ち着いてる。私もだ。

「よく見ておけよシラユキ。あれがいつものお前の役割だったんだ」

「うわ！　ホントだよ！！　私いつもあんな感じで突っ込んでたよ！」

いやいや、これはこれは。見てると面白いわ。私いつもこんな感じだったんだね……

その３０（前書き）

また二話投稿です。度々すみません。
先にその２９の方へお願いします。

その３０

「ま、まずはシアさんのお話、聞きたいな？」

母様の膝の上に完全に捕まってしまった。全部話すまで逃げられそうも無い。

「別の世界の人間種族、だったか？　話してくれるか？　シラユキ」

「スルーされたよ……。うん、話しちゃおっか。でも前世の記憶って言っても、知識ばかりだからね。どうやって生きてきたか、とかは覚えてないんだ」

これは嘘、覚えてはいるが、思い出すのが難しいだけだ。

「な、なるほどね、シラユキがよく考え込んでるのって、そういう事だったんだ」

姉様も少しは落ち着いた様で、話に参加してくる。

「すごーく簡単に説明しちゃうね。私って女神様にこの世界に招いてもらったんだ」

「あ、それは知ってるわ」

あ、知ってるんだ。さすが母様。　え？

「知ってるの！？」

「あ、ごめんね？　知ってるって言っても、女神様が授けてくれた子供、って言うことだけよ？　でも安心してね、私たちの子供であることは間違いないわ」

さすが母様だ、私が変なことを考えてしまう前に説明してくれたよ。

「あなたを授かったと思うその日にね、夢に見たの。そこで名前をシラユキと名付けてくださってね？　それだけの事よ。あなたは私とウルの愛のこう、愛の結晶よ」

愛の行為のって言おうとしてた！　エロフめ！！

「それは俺も初耳なんだが……。頑としてその名前以外認めなかったのはそういう事だったのか」

父様も知らなかったとは。母様も、もしかしたら悩んでいたのかな。

「う、うーん。みんな全然驚いてくれないなー……。驚いて欲しいわけじゃ無いんだけど」

普通、普通過ぎる。大慌てで追求されたいとは思わないが、もう少し、ねえ？

「驚くのはいつでもできるのよ。まずは聞かせて頂戴？」

やっぱりみんな凄いや。さすが最強のほほん種族だね。

「聞かせるって言っても、もう無いかも？」

転生した経緯とか話したって意味無いしね。本当にもう話すことは無いや。

「あら？　もう無いのね」

「いやいや！　まだあるでしょ！？　女神様に招いてもらったとか、別の世界とか……」

日本の知識はあっても、それを見てどう思った、とかまではなかなか思い出せないのよねー

「ま、その辺はどうでもよくね？」

「だな、女神のことは確かに気になるが、うむ。どうでもいいか」

「そうね、どうでもいいわよね」

「あっれー？　私がおかしいの？」

「ユー姉様の反応が普通だと思うよ……」

「気になったらその都度聞くわ。今日はなんかもう、もういいや……」

そして姉様は考えるのをやめた。

「はい、結論を出します。シラユキはシラユキ、見たままの子供、私たちの愛する娘、大切な家族よ。前世の十六年分の記憶、なら少し変わっていたのかもしれないけれど、知識、だからね。ま、それでも私は気にしないけどね？　見た目が子供で中身が大人って言うのも、面白そうだし」

「うむ。そうでなければ俺と一緒に風呂などとても入れんだろう。俺はシラユキが成人しても一緒に入るつもりだが」

父様とは未だにほぼ毎日一緒に入ってます。もうアレも見慣れたよ。最近は姉様とが多かったけどね。多分私も、成人しても一緒に入ってると思う……

「なるほど、知識過多の子供なのね。たまに子供っぽく見えないときもあるけど、基本は子供よねこの子」

「たまに見た目以上に子供だよな」

「子供子供言わないでよ。子供だけどさー」

あはは、と笑いが起こる。結構重要なお話しの筈が、あっさり終わってしまったよ……

「それじゃ、次はシアね」

「覚えていましたか」

そうだ！　シアさんも同じだったんだっけ。私と同じ、前世の記憶持ちなのかな？　まさか同類の転生者？

「シアさんも、女神様に連れてきてもらった、とか？」

「いいえ？」

「あ、それじゃ、この世界の人が普通に生まれ変わ……、うん？」

女神様は言っていた。生まれ変わり何ていうものは無い、と。人は死んだらそこで終わりなんだった。

「それも残念ながら違いますね。ただ私も、皆様には決して自分からは言えない重大な秘密、という物を持っている、という訳でして」

「シアさん殆ど謎じゃない！　謎メイドじゃない！！」

「メイドですから」

そして綺麗なお辞儀。

「聞きたい聞きたーい！」

「ほら見ろ、子供だ子供」

「兄様うるさーい！」

「子供ね」

「子供よね」

「可愛いなあシラユキは……」

「あー、っと、ごめん。盛り上がってるところ悪いんだけどさ、どうしても気になっちゃった事があって。シラユキ、まじめな話、していい？」

「フラン！？」

急に話しに入ってきたフランさんに驚くメアさん。王族の談話中に割って入るとか！　とか思ってるんだろう。誰も気にしないってそんな事。

「うん。なあに？」

「前世が十六までっていうことはさ……、その、さ、あれよ」

ああ、それの事ね。

「大丈夫、死んじゃったわけじゃないよ。だから安心してね？　ありがとうフランさん」

「よよよよかったー！　さすがに、一度死を経験してる、とか言われたら。私泣くわよ」

超安心された。確かにそこは気になるよね。

「ありがとうね、フラン。私も気になってはいたんだけど、聞く勇気までは持てなかったわ」

「すみません、エネフェア様……」

全くみんな、優しいなあ……。今のは本当なんだけど、嘘でもあるの。ごめんね？

「さ、おやつにしよ？　今日はみんなで食べよー？」

「あ、こいつ今話逸らそうとしたぞオイ」

「あっさりバレた！？」

その３０（後書き）

続きます。
続きはまた明日の０時に。

３０話にしてやっと転生のお話、のんびりすぎる……

このお話の後も十歳編はまだまだ続きます。

その３１

「シラユキ、隠してる事、話して？　今聞いておかないと、絶対に私たち、あなたも、後悔する事になる。かもね？」

「どっちだよ……」

「エネフェアの勘は当たる、話すんだシラユキ」

「うん、いいよ？」

「あれ？　軽い！？」

今日は姉様がツッコミ担当だ。楽しいわこれ。

「私、実は六回死んじゃってるらしいの」

「え？　死ん、六回！？」

姉様いい反応だ。っと、母様の私を抱きしめる力が強くなった、早く続けなきゃ。

「って言ってもね、記憶は一切無いの。これは説明難しいな……」

凄く簡単に説明できる言葉があるんだけど、こっちじゃ通じない

しなあ……

「私ね、十六歳の、ある時点、その時点の状態を保存？　されていたのかな？　それで」

「どこのどいつだ！！！　女神か！？　叩き潰す！！！　行くぞエネフェア！！」

うわあ！　父様一瞬で理解して一瞬で切れたよ！　凄いわこの人……、！？　母様痛い！　抱きしめる力が強いよ！！！

「違う！　違うからね！？　女神様は助けてくれたんだからね！？私で遊んでた人はもう死んじゃってるからね！？」

「何？　そうなのか……。すまん、取り乱した。申し訳ない女神よ。そして礼を言う」

執務室に飾ってある白雪草に向かい、謝罪とお礼を言う父様。

「お父様とお母様は今ので全部分かったの？　その反応からすると、私たちは聞かない方がいいのかな……」

「大丈夫だよ？　碌でもない話だけど。私自身は全く覚えてない事だしね」

「俺も詳しく聞いたら多分切れそうだな……。シラユキに何かしてた奴はもう死んでるんだな？」

「うん。女神様がね、やっつけてくれたの」

「そ、っか……。ありがとう、女神様」

「女神ってやっぱ凄いな。神様だもんな。ありがとう」

二人とも花に向かってお礼を言う。なんかシュールだね。

私は通算すると、六回死んでいる、らしい。らしい、なのは女神様に聞いただけだからだ。記憶は全く無い。

十六歳の普通の女子高生だった私は、ある存在の暇つぶしに選ばれた。私がいた世界の神様、カミサマのような存在だろうか？

女神様が言うように、世界問わず、生まれ変わりという物は無い。死んだ人はそこまでで終わりだ。先など無い。

ならば、どうする？　私、というおもちゃで何回でも遊ぶためには？

おもちゃ、遊ぶ、ゲーム。セーブ&ロード。

十六歳時点でセーブ、死んだらロード、だ。私の住んでいた世界のカミサマはそういう力が使えた。使えてしまったらしい。

神様は世界によって創られるものだ。その世界の住人のイメージ

で。カミサマなんて言うモノは、漫画や小説、アニメ、それにゲームでは割とよく登場する。そこから力を得たんじゃないか、という話だ。

こっちの話はもういいか、ここまでにする。

そして、異世界トリップ、という概念。自分の世界に住まう人々を、異世界に飛ばす、という力も得てしまっていたようだ。

後は簡単だ、セーブしてから異世界に飛ばす。死ぬまで観察して楽しむ。死んだらロード、また別の世界へ。

時には自分に与える事ができる能力を与え、普通ではない生活を送らせ、また楽しむ。

セーブ後になら何を与えようが、ロードし直してしまえば、また新しい能力を与えて、違う人生を観察できるからね。

そして七度目のロード、今のこの世界に飛ばされようとしていたとき、女神様に見つかった。

私は覚えていないが、カミサマを消滅させてしまったらしい。女神様凄いわマジで、超強いんじゃね？

私を元いた場所へ戻す事はできないが、自分の世界になら迎え入れることができる。六度の死を経験した私にはそれが可能らしい。そこの意味は全くよく分からない。経験はして無いんじゃないのかな？　ロードされた体だし。

後は簡単でいいか、能力を貰い、能力使用のためのアニメや漫画、

ゲームの記憶の保護。その代償としてその他の記憶を奥底に送られた。送られただけで封印や抹消はされていない。取り出そうにもできないんだから同じ事なんだが、消してしまうと折角保護した部分の記憶が理解できなくなるらしい。それもそうか。

幸せになりなさい。という最後の一言の後、私はシラユキとしてこの世界、この家族の下に生まれた。

なりなさい、という意味は、後は自分で頑張れって言う事だね。これ以上のサポートは無しよ？　と。

充分すぎる程色々なものをもらってしまったのだが。

この激甘な家族とか、ね？

能力云々以降の話はしていない。話す意味も無いし、何より最後のは、ちょっと恥ずかしい。

「改めて礼を言う。女神よ、本当に、本当に感謝している。この子を救ってくれた事を、シラユキを私たちに授けてくれた事を、心から、感謝する」

うひゃー。父様が感動してる？　こうしてるとちゃんと王族って感じよねー

「危ねえ、聞いてて切れそうになったわ。でも切れる相手ももういないんだよな。イライラするな……」

「落ち着いて、お兄様。その分シラユキを可愛がればいいのよ」

「そうよ、ルー。これまで以上に可愛がってあげなさい。もちろん皆もね？」

激甘家族が、超激甘家族に進化しました。

「六回の人生か、ちょっと気になるよな。想像もできん」

兄様が言う。エルフだしね、人間の生きる時間はあまり理解できそうにないか。

あ、今の今まで忘れてたよ。アレがあったね。

「兄様、これ、読める？」

私は六冊の本を、何も無いところから取り出す。

「本か……、今どこから出した！？」

「ひみつ。読める？」

六冊とも手渡す。兄様はそのうちの一冊を開き……

「何だこれ？　白紙じゃないか」

「あ、やっぱり読めないんだ」

「ルー、閉じろ。早く閉じろ。それは恐らく、シラユキの生きてきた六回の人生の本だ。そうだろう？」

兄様は慌てて本を閉じる。あんまり乱暴に扱わないでよ。それただの本なんだからさ。破れたりも普通にするんだよ。

「何てもん見せやがる！　いや、読めなかったんだけどさ」

「うん、そうだよ父様。私の六回の人生録。その本は五百年以上生きてないと読めないらしいの。父様と母様には読めるんじゃないかな？」

五百年以上生きてから読まないと、心が持たない、らしい。一体どれだけ酷い人生送ってきたんだろうね私は……

「そっちの赤っぽい二冊は読んでも大丈夫らしいんだけどね？　黒っぽい方の四冊は、例え千年生きたとしても読まないほうがいいんだ、って、ええ！？」

父様が黒っぽい本の一冊をパラパラとめくり、顔をしかめ……、しかめ、というか歪め、かな？

四冊とも焼いた。

「父さん、どうした？」

「ウル？」

父様のいきなりの行動にみんな困惑している。元々読む気は無かったが、ちょっと内容が気になってしまう。

「すまん、暴れてくる」

「え？」

「あ、お父様！？」

明らかに普段の父様とは違う空気を纏い、窓から飛び出して行ってしまった。

「どれだけ凄惨な内容だったんだよそれ……」

兄様が、足元に落ちた灰に目を落としながら言う。

「千六百年以上生きてきたウルでさえあの反応よ。五百年生きたシラユキが読んでいたら……」

「読むつもりは無かったんだけどね、焼いちゃって正解だったかな？」

想像したくないね。前世と合わせて二十六年程度の知識じゃ、想像もできない内容なんだろうが……

「お母様、シラユキちょっと抱かせて」

「ふふふ、いいわよ。シラユキ、ちょっと降りてね」

母様の膝の上から降ろされ、今度は姉様に抱き締められる。

「この事はもう話さない、聞かない。みんな、それでいい？」

「ああ、さっきも言ったが、必要になったらその都度、その時、話してくれればいい」

「うん。別に、気になったら聞いてもいいよ？　もう隠すような事は何も無いし」

後は能力くらいか？　これも別段隠しておく様な事でもないね。

「ここにいる皆、今日の事は他言無用。いいわね？　問題は無いと思うけど、変な噂は立って欲しくないからね。破っても特に罰は無いわ、そこは安心して頂戴」

こう言われた方が、進んで喋ろうと思う人は少なくなると思う。母様うまいな。

むしろ、飛んで行った父様を含め、十人の内緒話だ、と喜んでいそうだ。

考えてみれば、結構重い話をしていたと思うんだが、この世界の住人はみんな凄いね。

私の家族が凄いのか？

その３１（後書き）

シラユキの転生の経緯や理由はこんな感じでした。能力の説明はまた次の機会に。
シラユキ本人が全く能力を必要としてませんから、説明回を書くことができない……

何だコレ全然分からないぞコラー、と言う方はお気軽に感想で質問をどうぞ。
通常の感想も書いて貰えると嬉しいです。

お、お願いします……

その32

「ねえシラユキ、町、行ってみない？」

『三百歳から始めるダイエット』、という本を読んでいたら姉様に誘われた。

町、町かー……。アップルパイ食べて泣いた記憶しかないわ。味に感動したわけじゃないよ？

「何しに行くの？」

「まったくこの子は……。最近また読書ばっかりよ？　運動もホントに散歩程度しかしてないし……」

なるほど、特に理由はないようだ。折角だから運動も兼ねて町まで行ってみるか、くらいの気持ちだろう。

「別にいいけど、今から？　前みたいに通達とか入れなくていいの？」

実は、前回町に冒険者が少なかったのは、あの通達という名の脅迫のせいだった。

兄様が言うように、一部の冒険者は、冒険者という事を楽しんで行動している者も勿論もいる。

そういう類の、冒険心、好奇心旺盛な人たちは、その日一日、宿

とギルドに缶詰になっていたらしい。問題を起こすな、あの三人に関わるな、と。

ごめんなさい、冒険者の人たち……

「いらないってもう。あの時はシラユキに、冒険者の現実を見せたくなかっただけだからね？」

「ああ、なるほどー」

か、過保護だね……。結構な数の人に迷惑を掛けてたんじゃないだろうか？

「他には誰が行くの？　シアさんは行くんだよね？」

「はい、姫様が向かわれる場所へはどこへでも、必ず。ご安心ください、姫様の半径２ｍ以内に」

「それはいいから！　肉片とか嫌過ぎるから！！　しかも２ｍに増えてる！？」

だ、駄目だこの人……早く何とかしないと……

「後は、お兄様も行くわよ？　私、飛んで移動は、できるけどあんまり得意じゃないのよ。スカートで行きたいし、お兄様にお姫様抱っこで飛んでもらうのよ。ふふふ」

久しぶりにお熱い仲が見れそうだ。ラブラブで羨ましいわ……

「そうなると私はシアさんに？　シアさんには私、重くないかな？」

重いって言っても３０ｋｇも無いんだけどさ、女性の腕には十分重いよね。

あれ？　でもみんなひょいひょいと私を抱き上げてるな……

「姫様は羽根のように軽いです。お任せください」

すっごく嬉しそうな笑顔だ！　ま、弄られたりしないよね……？

「よーし、今日は最初っから飛ばすぞ、昼までには着く。んでもってまずは飯だ」

軽く準備運動をしながら兄様が言う。

取る物取らず、そのままの足で、なんだけど、財布くらい持ってるよね？　不安になっちゃう……

「お兄様お願いね」

「ああ、しっかり掴まってろよ？」

姉様を抱き上げる兄様。

まるで映画のワンシーンの様だ。すでに二人の世界に入ってしまっている。って速っ！

ものの数秒で全く見えなくなってしまった。
木が多いからって言うものあるとは思うんだけど、ちょっと速過ぎでしょうあれは。

「シアさん追いかけて！　置いて行かれちゃう！」

「分かりました。たまには軽く、本気を出してみましょうか」

シアさんも私をお姫様抱っこ。
首に手を回してしっかりと抱き付く。……本気？

「え？　ちょ、あ、待って！　やっぱりゆっく」

ドンッと凄い音がして、景色が真横に高速で流れていく。

こ、これってまさか！　走ってるの！？
斜めに大きくジャンプするのではなくて、極限まで低く跳んでいるんだろう。一歩一歩の歩幅が異常に広い。
これはまさに生身ジェットコースター。まるで線路が引かれている様に木を避けて進んで行く。

凄い……、こんな移動方法もあるんだ……

「喋っても大丈夫ですよ？　揺れはあまりありませんよね？」

「速い！　速いよ！　凄いよシアさん！！　後これ酔いそうだよ？　人酔い？　人酔いなの！？　あ！　前見て前！！　大丈夫なんだろうと思うけど怖い！！！」

「ああ……、なんという可愛らしさ。し、幸せすぎます。姫様、このまま遠くへ、一緒に逃げてもらえませんか？」

「また告白！？　ぷ、プロポーズ！？　駆け落ち！？」

そうこうしてる間に町の近くに着いてしまった。

城壁、とまでは言えないけれど、それなりの高さの壁が見える。

ここまでどれくらいの距離があるか、抱き上げられていただけの私には分からないが、そうとうな早さで着いたのは間違いない。兄様たちも途中で追い抜いてしまったようだ。

「少し急ぎ過ぎてしまった様ですね、お二人はもう少し掛かりそうです。それでも後十分も掛からないとは思いますが」

あ、分かるんだ。もう突っ込む気も起きないよ……

「こちら側、森へ抜ける側の方へはあまり人も多くは来ませんし、少し休憩しましょうか」

やっぱりあれは疲れるんだよね、ちょっと無茶させちゃったかな……

森へ向かう側の入り口は人通りが少ない。この辺りは既にエルフ

の監視区域に入っているんだろうか？

シアさんは、魔法で地面から椅子を作り出し、座る。そして両手をこちらへ広げ。

「姫様もどうぞ」

「あ、一緒に座るんだ」

多分全然疲れてないよこの人！　私だけ座るわけにはいかないし、いいんだけどね……

素直にシアさんの膝の上に座らせてもらう。あれ？　シアさんとこうするのは、もしかして初めて？

「ほ、本当に座って頂けるとは……」

感動してるね。

たまにはいいかもね、こんなのもね。

「あ、いらっしゃったみたいですね」

「うん？」

やばい、シアさんの膝の上やばいわ、超和むわ、これがメイドス

キルか！

「よ、っと。悪い、待たせたな。バレンシアお前速過ぎだろ」

少し離れた所へ着地した兄様が、姉様を地面へ降ろしながら言う。

急に上から人が降って来たように見えたよ。親方！　空から美形カップルが！！

「ありがとうお兄様。シア、凄いわね、あの速度で木とか全部避けていくんだもん。一体どうやってるのよあれは」

「メイドですので」

「またそれか！！」

上から見るとそういう風に見えたんだね。木と木の間を縫うように高速で移動か……。さすがメイドさん。

「それで、何してるんだお前らは。休憩か？　仲良いな……、俺に代われ」

「至福の一時です。私たちはここで待っていますので、お二人は存分に楽しんで来てくださって結構ですよ」

「こらこら。二人が来ないと意味ないでしょ。まずはお昼、食べましょ？」

「ふふ、冗談です。さ、姫様。参りましょうか」

「うん！」

残念そうだ。多分さっきの本気で言ってたな……

その３２（後書き）

二度目の町訪問。シラユキは泣かずに帰って来ることができるのか！？

保護者三人付きのはじめてのおつかいのようだ……

その３３

リーフエンドの森に隣接する様に存在する大きな町、リーフサイド。初めてその名前を聞いた時は、そのまますぎて吹き出したわ。

大きな町と言っても他の町なんて見たことも無いんだけどね。

他の国、他の町に比べ、エルフの数が多く。目の保養に訪れる冒険者も多いとか。エルフ美人多いもんねー

その反面、森の周辺の魔物と呼ばれる野生動物が強めらしい。魔物、と書くと何か危なそうな気もするが、人を襲う生き物の総称だ。危ない事には代わり無いか……

日本で言うと熊とかそんな感じかな？　こっちに出るのはそんなに生易しい類の生き物ではないのだが。

そうなると、冒険者も強い人ぞろいなのかと言うと、そうでもない。前回例にされた人のランクはE。下から二番目、実質の最低ランクなのだ。人間種族の冒険者は殆どがDランク、上がってもC止まりらしい、Bランクの人間も僅かだがいるとか。中にはおかしい強さの人もいるにはいて、Aランクに上がってしまうような人もいるらしい。

全部シアさんに聞いた話だ、ランクでどれくらい強さに差が出るかは分からないが、なんとなくは理解した。

Aのもう一つ上にはSランクがある。お爺様とお婆様が確かSランク扱いだったね。しかも最低でもSランク。実際はCのまま放置しているらしい。

自然災害クラスの人がSか、その下のAも凶悪な強さなんじゃないか？　シアさんくらいの。シアさんの強さは知らないけどね。冒

険者時代のランクは教えてはもらえなかった。

詳しい理由は分からないが、魔物の強さ＝その町の冒険者のレベル、という事にはならないのか。

「またパイとケーキかよ。肉食おうぜ肉」

「ミートパイならありますよ。注文しましょうか？」

お昼からお肉料理はちょっと……。胃もたれで歩けなくなっちゃうわ。

私はやっぱりアップルパイ。大好きなのよねこれ。

「あるなら先に言えよ！　もう甘いの頼んじまったじゃねえか……」

「もちろんわざと、です」

「あはは」

シアさんは相変わらず椅子に座ってくれない。目立つよ！　また周りからの視線がー！！

「どうぞ姫様」

シアさんは私だけお世話をしてくれている。でも、できたら一緒に座って食べて欲しいものだ。

「シアさんも一緒に食べようよー」

「食べてますよ？　誰の目にも留まっていないだけです」

なにそれこわい。

「マジか」

「マジです」

「普通に食べましょうよ……。と言うかどうやって食べてるのよ？」

「メイドですから」

「最近その答えに納得してしまう自分がいるんだが」

「私も……」

大丈夫よ姉様、私もよ……

「服にアクセサリ、本か、食べ物、お菓子か。シラユキなら菓子か？」

「また子ども扱いして……。ルー兄様服なんて一緒に見に行きたくないでしょ？」

だがお菓子は是非見に行きたいと思う。後でさり気なーく提案してみよう。

「よく分かったな。ユーネにたまに連れて行かされて選ばされるんだが、あれは中々きついものがあるな」

男の人は女性の服選びとか苦手そうだよね。私も兄様に選んでもらいたいんだけどな……

「お兄様は何を着ても似合ってる、可愛い、綺麗だ、しか言わないのよね」

それは実際、何着ても似合ってて可愛くて綺麗なんだよ！！

「ユーネはどんな服を着ても似合うからな」

「もう、お兄様ったら……」

見つめ合う二人。

はいはい、二人の世界に入らなーい！

「シラユキもきっとそうだな、何を着ても似合うさ。見立ててやろうか？」

「え？　えへへ」

な、何よもう！　褒めても何もでないんだからねっ！
兄様に言われるとやっぱり嬉しいわ。姉様の気持ちがよく分かるよ。

「照れちゃって、ホントに可愛いんだからシラユキは」

うりうりと頬を揉まれる。あれちょっと痛い？　や、やきもちか！？　妹相手にやきもち焼かないでよ……

「ん？　げ、目が合った。入ってくるなよ……」

外を眺めていた兄様が呟いた。知ってる人でもいたのかな？

お店の入り口のドアが勢いよく開き、ドアベルが凄い音を鳴らす。うるさいな、誰よ？　もう少し静かに開けれないかな。

他のお客さん、ウエイトレスの人たちも、驚いてドアの方を向いている。

「来ちまったよ……。バレンシア、シラユキに何かしようものなら遠慮はいらん。肉片に変えてやれ」

「だ、誰なの！？　誰でもすぐ肉片に変えようとしちゃ駄目だからね！？」

「心得ております。それでは早速」

「まだ何もされて無いよ！！！」

念のために肉片に変えておこうっていう事か！　その発想は無かったわ！！！

「おっ前相変わらず美人ばかり侍らせやがって！　俺にも誰か紹介しろよ！！　そっちのメイドの人！！　結婚しよう！！！」

「申し訳ありませんが、死んで頂けますか？」

「美人なのに言う事が怖い！！」

おお、早足で近づいてきて求婚だよ。凄いよこの人。シアさんも断り方が怖いよ！

そして分かる、絶対兄様のお友達だ。

人間種族だよね？　耳は長くは無い。黒髪短髪、年は、結構若い？　二十はいってないように見える。

黒っぽい上下。胸と腕に防具、足にも脛当てっぽく付いてるな。そして大き目の外套。ここまでは前に見た冒険者と同じ感じだね。黒っぽい服着てる人が多いのは何でだろう？　今度シアさんに聞いてみよっと。

他の人と明らかに違うのは、背中の長い剣。あれ、２ｍくらいあるんじゃない？　シアさん言ってたけど、大きい武器を振り回すなんて馬鹿はいないんじゃなかったかな……

お肉を上手に焼くゲームの様な幅が広い大剣ではなく、細い。ツヴァイハンダー、とかそんな名前だっけ？　意味はそのまま両手剣。ゲームだと大剣ってもっと重厚なイメージがあるんだよね。

「話の前にまず武器をどこかへ置いて来い。シラユキが怯える」

冒険者の人の武器を見つめていた私が怯えていると思ったのか、兄様が言う。

「そっちの子は初めて見るな。誰だ？　お前とユーネの娘か？　お前ら子供いたっけ？　名前はシラユキって言うのか」

それを完全に無視かこの人。かなり仲が良いのかな？　もしかして失礼な人？

「へ？　あ、はじめまし」

「ルーディン様は武器を置いて来い、と仰っていましたが？　今この場で肉片に変わるか、装備一式店に預けてきてから私に殺されるか選びなさい」

シアさんが私の言葉を遮るように立ち、言い放つ。

「どっち選んでも死ぬの！？　俺！！」

こ、この人は、まさか。

「失礼しました。つい本音が」

「本音!!　冗談ですとか言い直しもしないのかよ!?」

間違いない。

「ほらほら、早く置いてきた方がいいわよ。どっち道殺される事は決まっちゃったんだからね」

「もう決定なのか!!　ユーネがそう言うなんて本気でやばいのか!?　だ、誰か!　俺に新たな道を!　まだ死にたくなーい!!!」

この人ツッコミだ!!

ツッコミ役が増えるよ!　やったね私。

その３３（後書き）

ちょっと中途半端なところで切れます。
明日はまた二話投稿予定です。

ついに新キャラが……？
出て来て早々死にそうですが。

その３４

「装備一式預けてきたけど……、俺、殺されないよね？」

「短い付き合いだったなラルフ」

「何ｃｍ間隔で刻みましょうか？」

「駄目よ、シア。シラユキに血は見せたくないもの。刃物は無しでね？」

何で三人ともこの人にこんなに冷たいんだろう。姉様の事を愛称で呼んでるし、結構仲の良い友達なんじゃないのかな？

ああ、友達としての冗談か。シアさんはシアさんだからしょうがないね。

「だ、誰も止めてくれる人がいない！？　あ、シラユキちゃんだっけ？　助けて！！」

「え？　わ、私ですか？」

いきなり話振らないでよ……。でも、兄様たちのお友達っぽいし、普通に話せるかな？　私何故か、エルフ以外の種族は何となく怖いんだけど。

「え、と……、ごめんなさい！」

「この世に神はいないのか！？」

ああ、この人面白いわ。大丈夫そうだ。

装備一式を預けてきたラルフさん、だっけ？　黒っぽい上下の服で、見た目は普通の町の人のようだ。

「へー、妹なのか。おっと、俺はラルフファード、見ての通り冒険者だ、年は十九。よろしくな、シラユキちゃん」

「姫様に気安く話しかけないでもらえますか？　病気が移るので」

「何の病気!?　話しただけで移るの!?」

「シアさん話が続かないよー」

「すみません、姫様」

シアさんピリピリしてるなー……

見てて面白いからいいんだけど、もう少し話した後でね。

「は、はじめまして。えと、シラユキ・リーフエンド、十歳です。よろしくお願いします、ラル、ファードさん？」

「おう、よろしく！　ラルファード、な。ラルフでいいよ」

ファーじゃなくてファーか。ラルフさんでいいね。

「十歳か、何で今まで教えてくれなかったんだ？」

「そりゃ、お前に会わせたくなかったからに決まってるだろ？　何当たり前な事聞いてるんだよお前は」

「当たり前なのか！？　あれ？　俺達親友じゃね？」

「親友だからこそ、っていうのもあるかもな」

親友、兄様の親友かー

他の種族のお友達いるんだ。私、考えた事もなかったよ。

「そうだ。おい、ラルフ。ミートパイ追加で頼むからお前も食え」

「お？　奢りか？　それならありがたく食わせてもらうが」

「お前たちはまだ食べれるか？　この残ったの頼むよ、甘くってさ」

兄様が頼んだのはカスタードクリームのパイ。甘い物はそこまで好きじゃないのに、多分私に少しくれるつもりで頼んだんだろう。このさりげない配慮、やるな。

「いいわよ。私たちは三人で二個だから。シアもいつの間にか結構食べてるみたいだし」

ホントにいつの間にかだよ。多分、一秒にも満たないよそ見の間に、食べてしまっていたんだろう。なにそれこわい。

「こっちのメイドさんも初めて会うよな？　おい、ルード、紹介しろよ」

「いいけど、死ぬぞ？」

「紹介だけで死ぬ覚悟！？」

いいわー、この人いいわー。

今まで周りにいなかったタイプの人だ。普通にいい人、好青年っぽい。

「シラユキ以外はぶっちゃけ有象無象にしか見てないからな。シラユキがいなかったらさっきの求婚で、よくて即死、悪いと半殺しだったな」

よくて即死！？

「よくて即死！？　即死の方がいいのかよ！！」

ツッコミしなくていいのは楽でいいわ。しかし、シアさんの紹介が酷いな。でも納得しちゃうんだけど……

「はぁ……。バレンシア、と申します、姓はありません。姫様お付のメイドをさせて頂いています。よろしくして頂く必要は一切ありません。次に私の前に出たら肉片になるつもりでどうぞお付き合いください」

「もっと遠まわしに言ってあげて！！！　次に会ったら肉片って、会ったら死んじゃうよ！？」

「!?」

うん？　ラルフさんが私見てびっくりしてる？　あ、急に大声出しちゃったからだ。恥ずかしい……

「あ、あう……」

「この子ツッコミできるのかっ!?」

「えっ」

「姫様に向かって叫ばないで下さい。抉りますよ?」

「どこを!?」「どこを!?」

見事にハモッた。

「いやー、森のエルフにも、ちゃんとツッコミできる子がいたんだな。会う人会う人全員ボケだからな」

「そうなんですよね。あ、でも、ちゃんと突っ込める人もいますよ？　ボケに対して人数がかなり少ないですけど」

「この町に住んでる人はそうでもないんだけどな？　森から出てくる人ってみんなボケだったんだよ。ボケにボケを重ねて突っ込まないまま話進めるんだよ。もう、辛くて辛くてさ」

「あー、分かります分かります。でも私も結構慣れてきちゃったんですよね。慣れって怖いですよね……」

パイをつつきながら話が進む。この人は、アレだ、私と同じタイプの人と見た。

「駄目だぞツッコミを放棄しちゃ！　それは負けだ！　逃げだ！！　シラユキちゃんが、森の中のエルフに、ツッコミの役割の大切さを皆に説くんだ！！」

「あ、それは無理です」

「無理なのかよ!?　即答か！！」

「私調べによると、国内のボケ担当エルフの数は、全体の９７％にも上ります」

「９７％……だと……」

「ええ。もう、私一人の手には負えないんです……」

「そんな……。外の人間の俺からは頑張れという言葉しか贈れない……、負けちゃ、駄目だ……」

「分かっています。例え無理だと分かっていても……、ううう……」

「あれ？　どうしたシラユキちゃん？」

急に黙り込んでしまった私を不思議に思い、聞いてくるラルフさ

ん。

は、話しすぎた！　変な事言いまくってた！　途中からついノリノリに……

「正気に戻りましたね。饒舌な姫様も大変可愛らしかったのですが、残念です」

「お、終わったか？　よく分からん話だったが、こんなにペラペラと話すシラユキは珍しいな」

「敬語で話すのも久しぶりじゃない？　最近はもう誰にだって普通に話してたし」

三人とも止めてよ！　まさかシアさんまでもが、初めて会う男の人との会話を止めようとしないとは。

「多分、久しぶりに同種の人に会って、一時的にテンションが上がったんだろ」

「この子が、初めて会う人とこんなに話すなんて、凄い事なのよ？　ラルフは運がいいわ」

「そうなのか……。黙り込んじゃったな、結構恥ずかしがり屋なのか？」

「ああ。最初はメイドたちとも話せなかったんだよ」

「そうそう。ガチガチに固まって何故か敬語で話してたのよね。私たちの後ろに常にくっ付いててさ」

「懐かしいですね。私が初めて姫様とお逢いして、早八年、もうすぐ九年になりますか」

「シアが来たのって二歳の頃だっけ？　ほんの八年前の事なのに懐かしく感じるわね」

やめて！　やめてください！　人の小さい頃の話とかやめて！！！　今も小さいけどさ！

うおおお……。止める、止めるんだ！　話を逸らすんだ！　すり替えろ！！

いい話題はないか？　……ラルフさん、ラルフさんは、冒険者！

これで行こう！

「あ、あの……。ラルフさんは冒険者の人、なんですよね？」

「詳しく聞きたいなそれ、主にメイドさんのことについて、っと、何かな？　一応冒険者だぞ？」

危ない！　話をもっと掘り下げられるところだった！！

「冒険者の人って、どんなお仕事してるんですか？」

冒険者の人たちは実際どんなお仕事をしてるんだろう。これはシアさんからもまだ聞いてないし、丁度いい話題だろう。

「仕事か、うーん……、色々だなぁ」

「聞かない方がいいかと、姫様、また憧れを壊しますよ？」

「あ、もしかして凄く酷いお仕事とかなの？　ご、ごめんなさい……」

そ、そうだよね、危ない仕事ばかりなんだよね。それこそ毎日人が死んでいくような過酷な……

「おいシア、聞かせてやれよ。また勘違いしてるぞこいつ」

「は、はい……。申し訳ありません、姫様……」

「ラルフ、最近どんな仕事したよ？」

わわわ！　ちょっと心の準備をさせて欲しいな……

「あん？　あーっと、昨日は芋掘りだな。その前は薬草採りの護衛、という名の荷物持ち、だな」

芋掘りと荷物持ち？　一応護衛だけど荷物持ちが主ってこと？　え？　お芋？

「お？　またいい顔してるな。よくやったラルフ、ジュースを奢ってやろう」

！？　い、今のセリフを素で聞く事になるとは！　さすが異世界だ！！

おっと、現実逃避はやめよう。

「お芋堀り、ですか？　魔物と戦ったりするんじゃ？」

「勿論そういった依頼もありますよ。ですが、人一人にこなせる様な簡単な物ではないんです。どんなに難易度の低い討伐依頼でも、複数人数で当たるのが基本なんですよ？」

「そうそう、このメイドさんはよく分かってるんだな。魔物の討伐依頼を受けるのなんて、多くても月に一度あるか無いか、くらいさ」

「一般のその他大勢の冒険者はその様な感じですね。大抵は町の住民からの雑務依頼をする毎日ですよ。中には、討伐依頼をメインとして活動している集団もいるにはいます、クランやチームなどと呼ばれていますね。ですが、この町には一組もいない様です」

「ちなみに俺のランクはD。一人で討伐依頼なんて受けさせてももらえないさ」

「ストレイドッグの討伐依頼でさえ単独で受けるのは最低でもCランク以上からです。ああ、ラルフさん？　貴方ならCランクも夢ではないと思いますよ？」

「マジか！？　ってこのメイドさん何者なんだ？」

ストレイドッグ？　野良犬？　野犬か！　群れの規模や体の大きさが違うんだろうけど、犬かー……

そ、そうだよね、失敗したら死んじゃうかもしれないのに、ポンポン依頼振り分けてたらあっという間に死体の山だよ。

「姫様の夢を壊すようで心苦しいのですが、冒険者より何でも屋、という名が一番近いかと」

「あ、スルーするんだ？　メイドさんやっぱり俺の事嫌い？」

その３５（前書き）

今回は二話投稿です。
先にその３４の方へお願いします。

その35

「なるほど、冒険者の仕事に憧れか……。絵本で読んだのをそのまま信じちゃってたのか」

「そうみたいだな。もっと華のある、夢のある仕事だと思ってたんだろう」

ちょっと漫画とかアニメの冒険者のイメージが強かっただけだよ。絵本の中の物語に憧れるとか無いわ。

「何か悪い事しちまったな。まあ、でも、いずれは知る事だろうし、ちょっとそれが早まっただけだよな」

「ですね。気にしてないから大丈夫ですよ」

現実の冒険者事情を知る事が出来て、逆に感謝しているくらいだ。

「俺はDランクだからって事もあるぞ？　CとかBの奴らならそれなりに、面白くて夢のあるような冒険話もあるんじゃないか？」

「おい、やめろ。変な興味を持たせるな」

ほほう？　兄様シアさん知ってて黙ってたね？

「ありがとう、ラルフさん」

「ん？　どういたしまして？」

「シラユキ？」

姉様が、いきなりにお礼を言った私を不思議に思い、私を覗き込んでくる。

兄様は、やっちまったー、と言う顔。ふふふ、残念でした。

「それじゃ、次は、冒険者ギルド、行ってみたいな」

「駄目だ」

「駄目よ」

「駄目です」

やはり駄目だった！　しかし今日はラルフさんという同士が……

「ギルドなんて何しに行くんだ？　見て面白いモンなんて何も無いぞ？」

空気読め！！

「私たちから離れない事、絶対、に、離れない事！　誰かと常に手を繋いでるのよ？　約束よ？」

「うん！　姉様大好き！！」

「私も大好きよ！」

そして抱き合う二人。

「ユーネメロメロだなおい。気持ちは分かるが……」

「ユーネだけじゃないぞ？　俺もだ、いや、国民全員だ」

「国民全員骨抜きか。エルフだからって事もあるが……、それを抜きにしてもちょっと可愛すぎるよな。将来が心配だろ？」

「そこは私がいますから、問題はありません」

「まさか近づく者は全部肉片に！？」

「基本です」

「基本なの！？」

「その点に関しては俺も止めない。存分にやれ、バレンシア」

「お任せください」

綺麗にメイドお辞儀。

「そこは止めろよ！！　止めとけよ！！」

まったく……、可愛いのは子供の内だけだってば。この美形軍団が何を言うか。

ラルフさんは、普通？　エルフを見慣れた私には、他種族のカッ

コよさとかよく分からなくなっちゃったよ。

店を出る時に、ラルフさんが装備一式預けた事を忘れて出る、というハプニングがあったが……。ボケではなく素で忘れていただけなので割愛。

冒険者ギルド、見た目は普通の建物だね。他の建物と同じように、木、石、土、で作られている。建築に詳しくない私にはそれくらいしか分からない。

他と違うのは、ドアの無い入り口。入り口すぐ横にある大きな木製のボード、小さな紙が沢山貼られている。

恐らくあれが依頼なんだろう、見ている人が多い。貼りに来てる人もちらほらいるね。ドアが無いのは二十四時間営業だからか？

おや？　ボードから紙をはがした人、中に入らずそのまま、多分仕事先に行っちゃってるな。なんでだろう？

「あれは雑務依頼用の掲示板ですね。実は雑務依頼はギルドにあまり関係が無いんですよ。ギルドは掲示板と場所を提供しているだけ、という事ですね」

ボードを見つめて考え込んでた私に、シアさんが説明を入れてくれる。

そうだった、本職と元本職、二人もいるんだ、聞けばよかったん

だったよ。

「このメイドさんホントによく知ってるな。そう、これが雑務依頼。勝手に受けて報酬も出先で貰うんだよ」

ああ、なるほど、あれか、職業安定所か、アルバイト情報誌か。た、確かに夢が無いわこれは……

「近くで見てみてもいい？　どんな依頼があるか見たいな」

「ああ、いいんじゃないか？　いいよな？　ルード」

「ああ。バレンシア、手を離すなよ。周りに気を配れ、怪しきは消せ。責任は父さんが持つ」

「お前じゃないのかよ!?」

「冗談だ」

「冗談っていう顔じゃないぞそれ!!!」

やめて！　大声はやめて!!　ツッコミはありがたいけど、目立つのよ!!　視線が視線がーー!!!!

「さ、姫様」

「う、うん……」

「ラルフも行け。俺たちは、何かあったらすぐ動けるように待機し

ておく」

「何も無えよ……。過保護な奴らだな……、？　ユーネもかっ！？可愛い顔して殺気を撒き散らすな！！！」

「あら失礼、ついつい漏れていたみたいね。ちゃんと隠さなきゃ」

「怖い！！　この兄妹怖いわ！！！　シラユキちゃんは優しい子に育って！！」

掲示板を見ていた人たちが、ほぼ全員こっち見てるよ……

「ラルフさん、あんまり叫ばないでください……」

「おっと。本当に恥ずかしがり屋なんだな。悪い悪い」

近づく前から注目を浴びてしまった。

おいおい、お貴族様がこんな所に何の用だよ。という視線を感じる。確かに、遊びで来るような所ではなかったか？

「あ、近くで見ると結構高いねこれ。見えないや」

依頼の紙は上の方から順に貼られているようだ。私の背だと届かない。

「やっぱそうか。それじゃ俺が抱き上げて」

えっ！　ちょ……

「捻り切りますよ」

「どこを！？」「どこを！？」

また見事にハモッてしまった。

シアさんに抱き上げられ、依頼の紙を覗いて見る。どれどれ。

『護衛兼荷物持ち募集　期間３日　森の採取場　男女ランク武器その他不問　最低２名募集　力自慢歓迎　報酬２名で４ｓ」

『ウエイトレス募集　期間２ヶ月　昼～夕方まで　女性のみ　種族不問エルフ歓迎　体毛の多い種の獣人は相談　制服貸し出し　賄い２食あり　報酬１週間３ｓ５０ｃ　週末払い　完遂ボーナスあり』

『収穫の手伝い募集　期間１日　男女不問　数名募集　力仕事　報酬５０ｃ　応募人数が多い時は先着』

『一晩のお相手募集　期間夜　精力が尽きるまで　女性のみ　こちらは獣人男　普通サイズ　エルフ大歓迎　報酬最低４ｓ　エルフ追加報酬あり』

後は依頼人と会える日時、場所が書かれている。

最後のは見なかったことにしよう……。サイズ？

しかし、エルフ人気だな……。あ、ウエイトレスの依頼、剥がされた、やっぱり長期間安定して稼げるのは人気なのかな。

この世界の通過は、金貨、銀貨、銅貨、後もう一つ、しゃっ貨、と呼ばれているものがある。最後のはよく分からない。

通貨価値は分かりやすかった。三桁ごとに次の貨幣に変わるだけで、日本円とほぼ同じような感じだった。

gが金貨、読みはゴルド。sが銀貨、シルブ。cが銅貨、クウプ。そしてtがしゃっ貨、読みはティンかテン。ウエイトレスの報酬は一週間で３ｓ５０ｃ００ｔ。３５０００円位になるのだろう。

「一晩の相手募集の男用の依頼来ないかな……」

見なかったことにしたのに！！！

「そ、そんな仕事もあるんだ……」

「え？　この子意味分かっちゃってる！？　メイドさん離れるぞ！」

「は、はい！」

全力で兄様たちの位置に戻った。ちなみに抱き上げられたままだ。

「ど、どうした？　何か変な依頼でもあったのか？」

「誰だよ教えたの！？　あ、でも、メイドさんも知らなかったんだ

よな？」

「え、ええ……。ああ！　そういえばそうでしたね。すっかり忘れていました」

私が転生者だってこと既に頭から抜けてたね？　気にしないでくれているのは嬉しいね。

「何だ？　どういう意味？　しかし、十歳であの意味分かっちゃうのはちょっとな……」

「おい、ラルフ。何の依頼だったんだ？」

「もったいぶらずに教えて？　この辺り一帯更地にしちゃいそうよ？」

「ユー姉様怖い！　駄目だよ！？」

「わ、分かった！！　言うから落ち着け！！！」

危なかった！　姉様は意外に切れやすいのか？　ああ、父様似だもんね……

「ああ、なるほど。確かに分かっちゃうわよね……」

「確かに、なのか？　そういう教育してた訳じゃ無いんだよな？」

「秘密です。次に同じ事を尋ねたら、引き抜きますよ？」

「何を！？」「どこを！？」

「息ぴったりだなお前ら。……思い返してみると、俺、母さんと結構際どい会話してたと思うんだが……。シラユキ？」

「全部意味分かってました。ごめんね？」

「うおおおお……、忘れてくれえええええ……」

よかった！　エロフじゃ無かった！！　どうせ子供だから意味分からないだろう、っていう事だったのね。

違うわ！　エロフはエロフだった！！　目の前で話すか話さないかの違いでしかなかった！！！

その３５（後書き）

通貨設定は、多分この先あまり使われる事はないです。
忘れてもらっても大丈夫だと思います。

やっと新キャラを出せたわけですが、ツッコミが二人もいるとどっちに突っ込ませるか悩みますね……

次回やっとギルドの中へ。
展開が遅くてすみません……

その３６

「外はもういいだろ。中入ろうぜ」

確かにそうだね。

色々な依頼があって見てて面白いのだけど、こっちはギルドとあまり関係が無かったんだったね。

「もう十分だろ。他行こうぜ？　なあシラユキ」

「中見てみたーい」

折角ここまで来たんだ、少しくらい見て行きたい。

「ううー……。実は私も中に入るのは初めてなのよね」

姉様も入ったことは無いみたいだ。ちょっと緊張してるね。

当たり前か。姉様だって王族だよ、お姫様だよ。冒険者ギルドに来たがるお姫様は、世界で私一人くらいしかいないよ……

「俺は何度かあるが……。そうだな、見た目は酒場だな」

「あ、ルー兄様言わないで！」

「おっと。ホントに楽しみなんだな……」

危ない危ない。自分で見て、知る事ができる物が目の前にあるのに、直前で説明されてしまうところだった。

「それでは、姫様、お手を」

「うん。やっぱり手繋がないと駄目なんだ？」

シアさんと手を繋ぐ。私と手繋ぐとシアさん凄く嬉しそうなんだよね。もっと妹みたいに扱ってくれてもいいんだけどね。

「駄目よ？　何があるか分からないんだから」

ここだって町の施設のうちの一つなんでしょ？　大丈夫だと思うんだけどなあ……

「そうだぞ？　何か珍しい物見かけたら、走って見に行くに決まってるからな」

信用が無いだけだった！

しかしさすがみんな、私の事をよく分かっていらっしゃる。絶対何かあったら走り寄って行くよ私……

「その辺は見たままの子供なんだな。好奇心旺盛ってやつか」

ラルフさんも笑う。冒険者がみんなこんな人たちなら、話しやすくていいんだけど……

ちょっと怖いが、この三人がいれば大丈夫だ、問題ない。

ラルフさんは数には含まれない。ごめんねー

中に入ってくるりと一回し。なるほど、酒場だね。
広いスペースに複数の丸テーブルと椅子、奥にはカウンター。カウンターの中には大きな棚と、奥へ続いているのか、ドアが一つ。棚にはお酒などの代わりに書類がある。
壁には、外にあったような大きなボードが一つあるね。あれがギルド本来の依頼の掲示板か。外の物に比べると、大きさはこっちの方が大きいが、貼ってある紙の数が少ないな……
テーブルには、何組かの冒険者の人たちが座って、何かを飲みながら話をしている。人間と獣人の人しかいないね、女性も少ないが、いる。飲んでいる物はお酒だろうか？

うん？　やっぱりみんな全体的に、服装が黒っぽい。流行ってる、訳じゃないよね。
見渡してみると、殆ど黒一色。何人かは、赤だったり白だったり、他の色の人もいるんだが。なにか決まりでもあるのかな？

「FからDランクまでの冒険者は、服装を黒系統で統一しなければならないんですよ。自由な色の服装が許されるのはCランク以上必要なんです。さすがに私生活では自由ですが、その場合もいくつかの決まりがありますね。こちらの説明は必要ないでしょう」

シアさんが答えてくれる。やっぱり決まりがあったんだね。……？

「あれ？　私口に出してた？　また顔に出てたかな……」

「メイドですので」

「メイドさんって心読めるのか！？」

「わ！　ラルフさんまた大声！」

「悪い！　ついついツッコミ入れちまうんだよ……」

ああ！　視線が！！　何だようるせぇなあ、っていう視線が！！！

エルフの冒険者か？　珍しいな。

違うだろよく見ろ。まだ子供じゃねえか。

メイド？　どっかのいいとこのお坊ちゃんたちかね？

それがこんな所に何の用があるってんだ？　依頼か？

可愛いなあの子……

うっわ、引くわ。アンタそんな趣味あったの？　ちょっと今後の付き合いを考えなきゃ。

ちっげぇよ！　青髪の子だって。エルフだからって可愛すぎるだろあれ。

おお！　言われて見ればそうだな。メイドの方もかなり美人じゃね？

あの白い髪の小さい子も将来が楽しみだよな。何か反則的な可愛さじゃん、あれ。

どこのお姫様よあれ……。だ、抱きしめに行きたいんだけど、大丈夫かな？

お？　一緒に入って来たのってラルフの奴じゃねーか！　よし！　おい、行くぞ、美人エルフとお近づきに……

「よし、死にたい奴から前に出ろ」

兄様怖いよ！！！

確かにちょっと、いや、かなり怖いんだけどさ。兄様じゃないよ周りの人たちだよ。

私と、特に姉様に集まる視線のせいで、兄様はもう切れる直前だ。

「ストップストーップ！！　落ち着けルード！　お前らも来るな！！　この辺り一体が更地に変えられちまう！！！」

更地？　おいおい大物かよ。何モンだ？

馬鹿かお前ら、王族だぞあの青髪二人。ハイエルフだ。

王族？　ハイエルフ！？　ホントにお姫様！？

マジか！　よく知ってんなアンタ。

ラルフ！　お前何て連中を連れて来るんだよ！？

「はいはい、悪い悪い。俺も止めたんだけどなー」

ちょっと前にギルドから布告があったろ？　メイドを連れた身なりのいいエルフには絶対に話しかけるなっつー奴。

ああ、あったなそんな事も。もうだいぶ前の話じゃないか？　それ。

あったあった。確かC以上の連中は全員缶詰だったんだっけ？

ああ。何の説明もなしに、町入ってすぐ強制的に宿に押し込められたな俺。

そうそう。普段暇してるギルド員連中がすっげえ顔して焦ってんの。あれは笑ったわ。

な、撫でたーい！　抱きしめたーい！！

王族かー。くっそ、可愛いな。何とかお近づきに……

「やめて！！！」

あ！　ちょっと面白くなってきてたのに！　誰よ止めたのは？

カウンターの中から一人の女性が出て来て、こちらに駆け足でやってきた。

「またいきなり連れて来て！　事前に連絡入れなさいっていつも言ってるでしょう！　今日はギルド長もいないのに……。何かあったら私の責任！？」

パタパタとこちらにやってきたのは、見た目二十歳くらいの大人のエルフ。ギルドの受付嬢？

背はシアさんと姉様より少し高いくらいかな？　薄いオレンジ色の肩まである髪がとても綺麗。

美人だが、可愛いという言葉の方が合っているね。

「ああ、悪い、ミランさん。こいつらがどうしてもギルドに行ってみたいってな？」

ミランさん？　見た目通り可愛らしい名前だな……。ふむ、胸は普通サイズか。よし。

「王族の方をこいつら！？　いい加減にしなさい毎回毎回！！！」

うおう！　びっくりした！　外だとこういう反応が普通なんだ？

「いや、いいよ、ミラン。気にしてない。だってラルフだしな」

「おう！　俺とお前の仲だしな！」

やっぱり兄様とラルフさんはかなり仲がいいみたいだね。親友より悪友？　そんな感じだ。

「どうしてこんな奴がルーディン様のご友人に……」

「ラルフさん意外に評価低いんだね」

ホントに意外だ。社交的で明るい性格は好かれると思うんだが。

「俺って、何でか知らないけどエルフの女の人に嫌われてんだよ。見た目はそんな悪く無いよなぁ」

「どうなんだろう？　私、人間の人と話すのってラルフさんが初めてですし」

「そこまででお願いします。姫様には少し早い内容が含まれますので」

「え？　やっぱり俺なんかあるのか！？」

少し早い？　でも、シアさんが言う事だ、これ以上はやめておこう。

「姫様……？　そちらの方はユーフェネリア様ですよね？」

「ええ。はじめまして、ユーフェネリアよ。貴女はミラン、でいいのかしら？」

姉様が王族っぽい！　これは貴重なシーンだ、しっかりと見ておいて、後でからかおう。多分母様の真似だよね？

「は、はい！　はじめまして！　ミーラン・スケイロといいます！　こっここ、ここで受付件冒険者として働いています！！」

ミランさんガッチガチだね。

そうよ！　これが普通の反応なのよ！　ラルフさんも自然すぎて、この世界王族とか意味ないんじゃね？　とか思い始めてたよ！

「そ、そちらのお小さい方は……、白い髪の……？　！？　世界一愛らしい姫様！？」

「何その恥ずかしい呼び名！？」

「すすすすすみません！！　王族の方からの通達にそう書かれていたもので……」

父様か！　何書いてるのよもう！！！

「すみませんすみませんごめんなさい！！！　ああ……、私もここまでか……。結婚したかったな……」

不機嫌になった私に勘違いしたのか、盛大に謝り、そして死の覚悟をしてしまった様だ。

や、やっぱり面白いなこの人……

「相変わらず大袈裟だなあ外の連中は。この程度の事で誰も怒らないって」

「あ、うん！　大丈夫、怒ってないですよ？」

「シラユキが世界一愛らしいのは事実だし、いいじゃない」

よくないよ！

おっとと、私も自己紹介しなきゃ。

「はじめまして、シラユキ・リーフエンドです。今日は急に来ちゃってごめんなさい」

「いえいえいえいえいえいえ！！　ど！　ど、どうぞ！！　毎日でもお越しくださいい！！！」

ミランさんの反応は新鮮で面白いな……。慣れられるまで毎日来るものいいかもしれない。

「ミランさんって、ルード連れて来る度こんな反応するんだよ。でも今日は一段と面白いな」

「こいつは早く死ねばいいのに……」

「なんという辛辣な言葉！！」

「王族の方たちの前で大声出さない！　ランク下げるわよ！！」

「職権乱用！？　公私混同！？　ミランさんも叫んでるじゃん！！！」

あ！　これか！　ツッコミが嫌われるのか！？　まさかね……

一応王族らしく大人しくしておいた方がいいかな？

その３６（後書き）

新キャラが一人だけかと思ったか？　もう一人いたんだよ！！

この小説初の常識人が登場？　いやいや、まさか……

その37

「きょ、今日は一体何の御用で……？　コラ！　アンタ達こっち見るな！　聞き耳を立てるな！」

私たちはカウンターに近いテーブルに案内された。元々座っていた人たちはミランさんが駆逐した。ごめんなさい、罪無き冒険者の人たち……。もちろんシアさんは立ったまま、もう突っ込まないぞ。

「んー、特に用と言う程のものは無いのよ。この子が一度、冒険者ギルドを見てみたい、って前から言っててね？」

「そうだったんですか……。シラユキ様は、確か十歳になられたんでしたよね？」

し、シラユキ様！？　様！？　姫様には慣れたけど、名前に様付けは慣れない！　でも言ったらまた慌てるんだろうな……

「どうしましょうか姫様。強制させます？」

「強制！？　な、何をですか！？　はっ！　私何か粗相を……！」

「だからシアさんは何で分かるの！？」

「メイドですから」

「安定の返答だよ！！！」

「では、姫、か、姫様、もしくは世界一愛らしい姫様の三択でお願いします。選んでください。私のオススメは、世界一愛らしい姫様です」

そんなの選ぶ人いないよ……。しまった！　フラグだ！！

「ははは！　世界一愛らしい姫様！」

「やめて！！！」

ミランさんの性格から、オススメ以外は選ばないだろうと言う確信があったのか。さすがシアさんださすが。

「おもしれーなー……。いつもこんな感じなのか？　ルード」

「ああ、いじられるのは主にシラユキだがな」

「今日はシラユキもミランさんも同時にいじってる感じよね。さすがシアだわ」

「冗談ですよ。私としては、姫、と呼んでもらいたいですね」

私とミランさんをからかうのに満足したのか、やっと普通に話を進める。

「呼び捨てでもいいのに」

自分が姫様って呼んでるから被るのが嫌なのかな？

「よ、呼び捨て！？　王族の方をそんな！！　姫で！　いえ！　姫様でお願いします！！」

様付けは譲れないわけね……。ま、いっか。私が名前に様付けに慣れればいいんだし。

「好きに呼んでもらって大丈夫ですよ。もちろん名前でも」

「はい！　シラユキ様！」

慣れぬぇーーー！！！　はっ、失礼。

「それでは、えーと……。簡単に冒険者ギルドについて説明します？」

「いえ、結構です」

「シアさん！？」

「メイドさん！？　それじゃ何しに来たの！？」

「説明は私の仕事です」

ああ、なるほどね。説明好きだな……

「姫様の質問に私が答え、ミランさんには補足をお願いしましょうか。私も元冒険者とは言え、現役を退いてから暫く経ちますからね」

「え？　貴女も冒険者、だったんですか？　すみませんがお名前は……、シアさん、ですか？」

「すみません、一メイドの名前など、どうかお気になさらず」

「バレンシアだ、姓は無いらしい。シラユキにも言ってないし、本当に無いんだろう」

「ルーディン様……」

どうしたんだろう兄様。シアさんは言いたくないから名乗らなかったんだと思うけど……

「俺たちはお前の冒険者時代の事を全く、うん？　ミラン、どうした？」

ミランさんはあんぐりと口を開けて固まっている。まさかシアさんって有名人？

「薄い紫がかった銀色の髪？　そして灰色の瞳、バレンシア……！　あなた、もも、もしかしてせんけ」

カッ！　と、ミランさんの目の前にナイフが刺さる。

うわあ！　投げた！　ついに投げたよナイフ！！　威力ありすぎて刃の部分がテーブル貫いちゃってるよ！！　しかも投げた瞬間が

全く見えなかった……。

シアさんこーわーいー！！！

「申し訳ありません……。手が、滑りました」

ミランさんは完全に固まってしまった。

多分シアさんは冒険者としては結構有名だったんだろう。その人を怒らせてしまったんだ、動けなくもなるよ。

でもラルフさんは知らないのか。シアさんが冒険者を辞めたのはかなり昔の事なのかな？

全員が静まり返ってしまった。

他の冒険者の人たちも何事かと、こちらを見て緊張している。

「恐らく、いえ、確実に人違いでしょう。ただのメイドである私の話などやめて、姫様の質問にお答えしましょうか」

シアさんは、音も立てずに軽くナイフを引き抜き、話を元に戻す。

ナイフは左手に持ったままだ、これ以上聞くな、話すな、と言う事なんだろうと思う。

……思うが。

「こ、ここで私がシアさんの事を聞いたら？」

「し、シラユキ様！？」

怖い！　怖いが気になる！　ミランさん何か二つ名っぽいの言おうとしてたよね？　せん？　千？　尖？　穿？　殲？　物騒な文字ばかり浮かんでしまう……

「また、手が滑ってしまうかもしれませんね。恐らくミランさんかラルフさんの……、どこかへ」

「どこへ！？」「どこへ！？　何で俺に！？」

「それじゃ聞くか？」

「やめろアホ！！！」

「やめてください！　！？　ルーディン様にアホ！？　アンタ本当にいい加減にしなさいよ！！！」

あ、ミランさんの調子も戻ったのかな？　元気になったね。
さすがシアさん、ここまで考えてたんだ。……だよね？

「聞きたい事、聞きたい事かー……。やっぱりまずは少し説明してもらった方がいいかな。気になった事があったらその後に聞くから。それじゃ、ミランさん。お願いしてもいいですか？」

「はい！　……あの、シラユキ様？　できたら敬語をやめて欲しいんですが……」

むう、初対面の人とそんなに気軽に……、できるんだけどさ。ミランさんエルフだし。

ラルフさんは無理、人間でさらに男の人だし。でも何度か話せば自然に話せそうだ。

「そうですよ姫様。もっと高圧的に命令してあげてください」

「しないよ!?　もう……。ミランさん、お願い」

「はい、分かりました。えーと、まずは何から話しましょうか……」

そっか。私の敬語のせいでミランさん恐縮してたんだ、悪い事しちゃったな。次に他のエルフの人に会ったときは気をつけよう。

まずはここ、冒険者ギルドについて、ですね。ここの主な役割は、冒険者の登録と、依頼の斡旋です。

依頼は、魔物の討伐、魔物が出る地域への護衛や採取が主ですね。他にもいくつかありますが、遠征と護衛、大体はこの二種類です。

外の掲示板の雑務依頼は、ギルドは関与していません。掲示板の提供のみですね。

関与事態はしていませんが、失敗はもちろんこちらの能力査定に響きます。簡単な仕事ばかりのはずです、あの程度軽くこなしてもらわないといけませんしね。

中には冗談半分に危険な仕事の依頼もありますが、誰も受けない

ままか、高ランクの方が気まぐれに受けたりもします。

ランクは知っていますよね？　FからAまでの六段階あります。Aの上にSランクもありますが、世界に五人、今は四人しかいません。あってないような物ですね。

Fランクの状態ではギルドの優遇を一切受ける事が出来ません。これは、登録だけしておいて権利のみ使う、という事の防止のためです。

一度でも依頼を成功させ、ある条件を満たせば、晴れてEランク。ここでやっと冒険者ギルドの一員として認められ、様々な優遇を受ける事が出来ます。

そうですね……。分かりやすいのは、武具店での割引や、宿で出される水桶の無料化などでしょうか？　この町は元々水は無料なんですけどね。他の町では有料の所もあるんです。

あ、もちろん雑務依頼は、成功しても特に何もありませんよ。雑務依頼を受けるためだけに登録、という事もありませんね。こちらの説明は省きます、すみません。

FからDランクまでは衣類の黒系統での統一。Cランク以上になると色の自由が認められます。

これは、一目で実力者が分かるようにするためと、低ランクの冒険者の自衛のためですね。

後は……、冒険者の戦争への参加の禁止。参戦時には勝ち負けを問わず、登録抹消、再登録不可のペナルティがある。くらいでしょうか？

すごいなミランさん……。さすが受付嬢、説明し慣れてるわ。

「ありがとう、ミランさん。凄く分かりやすかった！」

「い、いえ……」

「照れるな照れるな」

「アンタは黙ってなさい！」

「この扱いの差！　ひどい！！」

ラルフさんが茶化し、ミランさんが怒る、それに対してラルフさんが反応する。なるほど、いい流れだ。

でもこの程度で嫌われるとは思えないんだけどな……。帰ったらシアさんに駄目元で聞いてみよう。

「あ、すみません。何か質問はありますか？」

「質問には私が答えます。遠慮なくどうぞ」

おっと、説明大好きシアさんが出てきたよ。うずうずしてたもんね。

その３７（後書き）

まだまだ続く説明回。さらに次回へ続きます。

いつの間にか月間ランキングにまで入っていました。
ありがとうございます！

その３８（前書き）

ちょっと説明回が長すぎるので、残りの二話を投稿してしまいます。

その３８

ふむ、質疑応答のお時間か、何から聞こうかな。
聞きたい事はいくつかある、特にシアさんの事とかね。でも、それは多分ラルフさんが大変な事になるのでやめておこう。ミランさんには何となく当てないと思うけど。

「やっぱり気になってるのは黒い服かな。他の色じゃ駄目なの？何か暗いよ？」

別に白でもいいよね？　清潔っぽくていいんじゃないかな、と思う。

「暗色系なら何でもいいとは思いますが、やはり黒でしょうね」

「あ、やっぱり色にも理由がるんだ。ミランさんは自衛のためって言ってたよね？」

Ｃランク以上の人と一目で見分けるのと、自衛が目的、だったはずだ。

「はい。ええと」

「一言での説明は難しいですね。簡単な例を挙げていきましょうか。まずは……、誰か目の前で、知らない冒険者が見たことも無い魔物に襲われているとします。冒険者は苦戦している、としましょう。」

「ああ！　その人がCランク以上の人なら助けに入っても邪魔になっちゃうんだ。　同じ黒っぽい服なら一緒に戦うか、協力して逃げたりするんだね」

あ、シアさん超不満顔。ごめんね理解が早くって。

「理解が早くて大変残念です。さすが姫様。……それが一番の理由、と言う訳でもありませんけどね。未確認の魔物などそうそう出会うものではありませんから。様々な理由を含め、一目で見分けができるというのが総合的に一番でしょう。次点で夜間目立たない、でしょうか」

「あ、でも、冒険者以外の人が戦ってたら分からないよね？」

普通の服を着ているからCランク以上、だと思ったら超強い旅人でした、とかね。

「面白い事言うわねシラユキは」

「え？　面白い？」

姉様に笑われてしまった。

何か的外れな事言ったかな……

「普通の旅人が、魔物と戦う？　護衛も付けずに一人旅ができる実力があるなら、冒険者、するでしょ？」

「あ」

当たり前の事だった！！！

「町の外で武器を持っている。それだけで一目で冒険者だと分かるんです。町中での武器の携帯が認められるのは、各町の自警団、兵士、それと冒険者のみです。もちろん例外もありますが」

シアさんはよくナイフ出してるし、多分例外に入るんだろう。武器の携帯を認められるメイドさんか……

「他にも色々と理由があるんですけど……」

「ええ、挙げていったらキリがありませんね。逆に言えば、Cランク以上の冒険者は一目で分かるような服装をしなければならない、という言い方もありますね」

黒い色が好きな人は分かりやすくしないと駄目なんだね。

「黒を着続ける方はそうはいませんよ。やっとCランクになれたと言うのに、いつまでも低ランクのカラーである黒を着ていたくは無いでしょうからね」

また表情を読まれたよ……

「後はアレだな、返り血が目立たないんだよ黒って。血って時間経つと黒くなるんだぜ？」

「人が敢えて説明をしなかったところをこの人は……。手が滑ってしまいそうです」

「ごめんなさい！！！」

ラルフさんがテーブルに突っ伏して謝る。
返り血か……。血って、時間が経つと酸化して黒くなるんだっけ。
Cランク以上の人は、返り血もあんまり受けないのかな。

「次はランクかな。やっぱりSランクにもなると二つ名が付いたりするの？　カッコいいよね二つ名って」

「ああ！　カッコいいよな？　でも言われる本人たちは恥ずかしそうなんだよ。何でだろうなあ……」

シアさんにもあったっぽいしね、やっぱり気になるわー。中ニっぽくていいじゃない？　二つ名。

「Aランクの冒険者の一部と、Sランクの全員が二つ名持ちでしょうか？　今はどうなんでしょう？」

「あ、はい。今もそんな感じですよ。Bランクでも極々一部、目立った働きをした者には二つ名で呼ばれている冒険者もいるらしいです、けど、会った事はありませんね」

という事は、シアさんは最低でもAランクだったと。なるほどね。

「し、シアさんの冒険者時代の……、何でもない！　ナイフ仕舞って！！」

「やめろシラユキちゃん！！　多分俺に来ちゃうから！！！　あんなの避けるとか無理だから！！！」

「ご、ごめんねラルフさん。さりげなく聞けば、ついつい答えちゃうんじゃないかと思ったんだけど……」

シアさんがそんな油断するわけも無いか……

「二つ名ってどんなのがあるんだろう？」

「大抵は、本人の戦闘スタイルがそのまま二つ名に反映されますね。私の現役時代と変わっていなければ、今もSランクの四人は、エルフニ人、獣人、竜人、の四名でしょうか。竜人の方の二つ名が分かりやすいですね」

エルフが二人も入ってるとは、さすがの最強種族？

長寿なのがやっぱり大きいのかな……。獣人の人も種によっては長生きするみたいだし、多分そういう事なんだろう。

「『閃光』か。Sランクなんてのは化け物扱いだもんな……。強さは羨ましいが、複雑だな」

閃光？　光るのかな？　全身を光らせながら戦うとか？　なにそれこわい。

それと、化け物扱いかあ……。強くなりすぎるのも問題なんだね。

「エルフ二人ってまさか、父様母様じゃないよね？」

あの二人なら納得の強さなんだが……。実際本気で戦ってるところなんて見たこと無いけどね。

「違うわよ、何言ってるのシラユキは……」

姉様に呆れられてしまった。
だよねー。王族が冒険者なんて……してるよっ！？

「お、お爺様とお婆様？」

「いや、そっちも違うな。爺さん婆さんは二人ともCランクだ。前に話さなかったか？」

「あ、そうだったね。確か最低でもSランク扱いはされるんだっけ？」

登録だけしておいて、ギルドの優遇だけ受けてるんだったかな。
登録が消されないのは、その分見えないところで何か大きな働きをしてたりするんだろう。

「百年ほど前、Sランクが五人いた時代は、もう一人の方もエルフだったんですよ」

ミランさんが補足を付け足す。
エルフすげー。ホントに最強種族なんだなー……。
でも、Sランクの人が一人いなくなってるんだ、なんでだろう？
やっぱり死んじゃったり？　それとも……、結婚退職とか？　それは無いか……

「し、シラユキ様っ、後は何か聞きたいことはありませんか？」

まだ緊張してるのかなミランさん。さっきまですらすら喋ってたのに、またどもってるよ。

「登録は何歳からできるの？」

「基本は成人したら、ですね。年齢は種族によって変わります。エルフなら百歳以上ですね」

人間なら十六からか。獣人は種で様々なんだよね。

「でも俺十五で登録できたな」

「え？　不正？　裏口取引？」

「人聞きの悪い事言うな！！！　あっとごめん！　ナイフ投げないで下さい！！」

またいつの間にかナイフを取り出してたシアさん。全力で謝るラルフさん。

び、びっくりした……。ツッコミって結構怖いわ、泣きそうだった……

「次は当てます。手足が１０点、胴体が２０点、頭部は３０点、額が４０点、眉間が５０点ですね。高得点を狙います」

「怖い！！　ゲーム感覚で人にナイフを投げるメイドさん怖い！！！」

「と、登録は、本人の能力次第でもっと早くできたりするんですよ」

さすがにギルド内で死人は出したくないのか、ミランさんが話を元に戻す。

能力次第か……。

いい人材は早めに育てたいし、無茶して勝手に潰れても困るしね。後は他の組織に入られたり、か。

「という事は、俺って実は評価高い？」

「さあ？　それは、登録したギルドの人に聞いてみないことにはね。でも、そろそろCランクでも通じるんじゃないかっていう実力だし、そうなのかもね」

「マジか！　メイドさんの言ったとおりだな」

「どうせC止まりよ。それにすぐ降格されそうだし」

「自分でもそんな気がするぜ……」

能力的にはちゃんと評価されてるんだ。個人的には嫌われてるっぽいけど。

「ですが、戦闘能力だけの評価でCランクなら、中々のものだと思いますよ」

「戦闘能力だけ？　ラルフさん強いんだ？」

「そうなの？　私たちから見ると、ただの人間に見えるんだけど」

「だよなあ。だってラルフだし？」

「お前らと一緒にするなって……。二人とも、登録したら最低でもAランクだろ、きっと」

Aランクは人外レベルだっけ？　こわっ！　うちの兄姉怖いわ！！

「そうなると、お父様お母様は、間違いなくS行っちゃうわね」

Sランクは化け物レベル。こわっ！　うちの両親怖いわ！！

ふう……

「その両手剣、飾りではありませんよね？　そのサイズの武器を問題なく使いこなせているのなら、やはりCランクには余裕で届くでしょう」

「ああ、これか。ちゃんと使えてるぜ？　魔法の補助込みだが」

魔法の補助？

「その質量の武器を魔法の補助で動かしているとすると、それは才能によるものが大きいでしょう。貴方の手札を曝してしまいますからこれ以上は説明しませんけど、もっと自信を持っていいと思いますよ？」

「何か、今日始めてちゃんとした扱い受けた気がするよ……。ありがとうなメイドさん！　俺もっと自信持つよ！！　そしてCランクに上がったら結婚しよう！！！」

また求婚だよ。まったくラルフさんは……

「５０点を狙います。皆さんお静かにお願いします」

「駄目！　シアさん駄目だからね！？」

「５０点！？　眉間！？　即死じゃん！？」

「ルー兄様たちも止めてよ！　シアさん怒ってるみたいだよ！」

ナイフを仕舞う気配がない！　５０点取っちゃう！！

「おっと、バレンシア、その辺でやめておけ。ラルフ、いつも言ってるだろう？　エルフに気軽に求婚なんてするな、と」

「そうですね。姫様の前ではやめておきましょうか」

「許される気配がない！！　俺なんでエルフの女の人には嫌われるんだろう……」

ホントになんでだろう？　エルフに嫌われるフェロモンでも出してるのかな？　何か嫌だなそれは……

「止めなくてもいいのよシラユキ？　人間がエルフに求婚する意味をよく考えてないからねラルフは。シアの行動が正しいの。私もラルフじゃなかったら殺して、こほん。ドカンとしてるわ」

「そうですよね。自分で気づくか、他のエルフに殺されて欲しくて放っておいてるんですが、教えた方がいいんでしょうか？　その意

味を」

姉様怖い！　言い直しても、それ、死んじゃってるから！
ミランさんもさりげなく怖い事言ってた！

意味、エルフに求婚する意味か。何か、殺されても文句が言えないような理由がありそうだね。

その３９（前書き）

またまた二話投稿です。
先にその３８の方へお願いします。

その39

「他に質問はありますか？　さあさあ、どんどんどうぞ」

シアさんが、まだ全然説明したり無いぞと要求してくる。

「シアさん本当に説明大好きだね……」

「メイドですから」

「なるほど」

「納得なの！？」

だってシアさんだし。

「それじゃ、冒険者とは関係ないけど、いいかな。エルフに求婚する意味について」

気になるよね。ラルフさん嫌われたままなのは可哀想だし。

しーん、と静まり返ってしまった。

あれ？　何か地雷踏んだ！？

「どうしましょう？　私には、姫様にはまだ、まだまだ早すぎる問題かと思うのですが……」

「そうよね……。せめて五十……。やっぱり成人してからでもいいかしら」

「俺はいいとは思うが……。やっぱ駄目だ、こいつ絶対泣くわ」

泣く？　あ、これは聞かない方がいい気がする！　止めよう！

「あ、あ！　今のは無しで！　聞かない！！」

「うん。ごめんねシラユキ？　意地悪してるわけじゃないの、分かってね？」

「もう少し大人になってからな？　やっぱりお前にはまだ早いよ」

「うん。変な事聞いちゃってごめんなさい……」

「いえ、姫様ならご自分で気づかれると思いますよ。ただ、本当に今はまだ早い、と言うだけです」

子供にはまだ早い。何か重要な、とても大切な、何かがあるんだろう。

「俺ってさ、もしかして、結構最悪な事してる？」

ラルフさんが言う。

理由を聞けない、エルフでもまだ気づけない私にはなんとも……

「お前にもそろそろ教えてやるよ。痛い目に遭ってからがよかったんだが、これ以上評判下げるのもな」

「今日はシラユキがいるし、また今度ね。それまで、今までみたいにエルフを見かけたら即求婚、とかはやめる事。いいわね？」

そんな事してたんかい。という事は……

「ミランさんも？」

「は、はい。初めてこのギルドに来たその日に。その場で切り刻んでやろうかと……、な！　なんでもないです！」

「み、ミランさんも結構怖い人？」

その場で切り刻むとか……。

「いえいえそんな事は決して！　ただ、それだけ大切な事、なんです」

こんな温厚そうなミランさんを怒らせるんだからね、相当だ。人間同士なら半分以上冗談でも済むんだろうが、エルフには１００％真摯な態度で臨まないといけないんだ。

うん、そうなると。

「ラルフさんもう死んじゃった方がいいんじゃない？」

「ついに唯一の味方がいなくなった！！！　シラユキちゃん結構言

うね……」

「姫様の許可が出たところで、早速５０点を目指そうかと思うのですが」

「駄目よ、シア。４０点で許してあげて？」

「４０点でも即死だからね！？　額だからね！？」

「両手両足に一本ずつ、っていうのもあるよ？」

「シラユキちゃん！？　駄目だよ！　君は優しい子のままでいて！！！」

「ふふふ、冗談ですよ。でも、それだけ嫌われる事を今までしてきたんですから、これからは気をつけないと、ですね」

私にはまだよく分からないが、ラルフさんには反省してもらおう。
理由が分かったら私もやっぱり許せないのかな……

「それでは姫様のご要望通りに、両手両足で４０点を狙いたいと思います。皆様、一本当たる度に拍手をお願いします」

「冗談だからね！？　シアさん止まってー！！」

「もうそこまで気になる事はないかな。後は気になった時に、またシアさんに聞くね。ここにもまだまだ来ると思うし」

Cランク以上の人とお友達にでもならないと、冒険話は聞けそうに無いしね。今日はここまでにしておこう。

「はい、お疲れ様でした。次はどこへ参りましょう？　結構時間を使ってしまいましたが……」

「そうね……、お菓子、お土産を買って帰りましょうか」

お菓子！　ほうほう、ほうほう！

「ぶっ。すっげえ目キラキラさせてるよこの子」

はっ！　見られてた！　笑われた！　くそう！

「なんで言っちゃうかなコイツは……」

「やはり今ここで消しておきましょうか？　私たちの楽しみをこうも簡単に奪うとは、到底許せるものではありませんね」

「何でだよ!!　確かに可愛いけどさ、見慣れてるだろう？」

ピタッと、兄様姉様シアさんが固まった。

い、一体何が起こるんです？

「あ、あー、もう駄目ね。ごめんなさいラルフ、あなたはいい友人だったわ」

「ふむ、思えばお前が十六の時からの付き合いか。たった三年だったが、いい友人だったよ」

「私は今日初めてお会いしましたので、何の抵抗もありませんね。さようなら、とだけ」

「あ、あれ？　俺変なこと言った？　し、死ぬの！？」

「冗談ですよ。ちょっと冗談に見えませんけど……。そうだよね三人とも？」

「シラユキの可愛さが」

「この子の愛らしい言動が」

「世界一愛らしい姫様の、世界一愛らしい笑顔が」

「見慣れるわけ無いでしょう！？」「見慣れるわけ無いだろう！？」

「見慣れる筈がありません！」

「息ぴったりだな」

「うん。父様と母様もこんな感じですよ？」

でもこの過保護と言うか、可愛がりには未だに慣れないよ……

「し、シラユキちゃん、強く生きるんだぞ。俺はここで死ぬようだ……。だが、覚えておいて欲しい、俺と言う馬鹿な男が生きていたという事を」

「ら、ラルフさーん！！」

「わ、私はどちらにどう参加したら……」

「き、気にしなくてもいいんじゃないかな……」

ミランさんは普通の人だった。

「では、私はまだ受付の仕事が残ってますので。できたら帰られるまで護衛として同行したいんですが……」

「ミランさん百人いてもルード一人の方が強そうだしな」

実際そうなんじゃないかなと思ってしま……、ん？

「ミランさんって、もしかして結構強い人なの？」

でなければ護衛に付くだなんて言い出すはず無いよね。

「あ、はい。あ、いいえ！」

「どっちだよ。ミランさんは確かBランクだろ？　でも今は受付メインにしてるんだっけ」

「ええ、たまに高難易度の依頼の消化に出向いたりは、まだしていますね」

Bランク！　凄い、一流レベルの冒険者だ！
という事は。色々な冒険のお話が聞けそうかも？

「ミランさんミランさん」

「はい！　なんですか？　シラユキ様」

「私とお友達になって欲しいな。それで今までしてきたお仕事のお話、聞かせて欲しいなー」

「お友達ですか！？　そそそそんな！　恐れ多い……」

恐れ多いとか初めて聞いたよ！！
やっぱり王族とお友達は厳しいかー……。ちょっと悲しいな。

「あ、コラ、シラユキ！　結構血生臭い話もあるんだからな？　分かってるのか？　あれ？　泣いてるのか？」

泣かないよ！　ちょっとだけ悲しいけどさ……

「え！？　すすすすすみません！！！　お友達でも何でも！！
遊び道具でも奴隷でも何でもなりますから！！！」

「それは素晴らしいですね。姫様の魔法の練習にはもってこい、ですね」

「しないしないしないよ！　奴隷とか怖いよ！　遊び道具とかいやらしいよ！！」

ちょっとアレすぎるよ！　いやーんなアレすぎる表現だよ！！

「なるほど。ミランはいやらしいのね」

「なるほどな。大人しい顔してても中身はいやらしい、と」

「なるほど。だがもう少し胸が欲しい」

「わかりました。ミランさんはいやらしい。そう皆様にお伝えしておきましょう」

「えええええええ！？」

からかえる対象を見つけたらすぐこれだよ！　楽しそうだな四人とも……

ごめんなさいミランさん。私の不用意な一言でいやらしい人として認識されちゃったよ……

「もう、みんなしてからかっちゃ駄目だよ！　ほら、お菓子屋さん行くよ！！　ミランさんまた冒険のお話聞かせてねー！！」

「は、はい！　いつでも来てくださいね！」

手を振って離れる私に、明るく答えてくれるミランさん。
いいお友達ができてよかった。向こうはそうは思ってくれないだろうけどね。
でも、今はそれでもいいや。ゆっくりお友達になっていこうと思う。

次はいつ会えるか、とても楽しみだ。

「勝手に行くなシラユキ！！　ちなみに菓子屋はそっちじゃないぞ」

「もっと早く言ってよ！　恥ずかしいいいいい！！」

「あはは。シラユキ様可愛い」

走り戻る私に微笑むミランさん。

もう会っちゃったよ！！！

その３９（後書き）

ちょっと冒険者ギルドの話が長かったですね。
ほのぼの話を楽しみにしてくれていた方にはつまらない内容だったんじゃないかなと。

またちょくちょくこんな内容のお話が何話か続く事があると思いますが、今後もよろしくお願いします。

その４０

うーん、今日は楽しかった！　新しいお友達？　が二人もできたし、冒険者の事を色々と知る事もできた。
後は気になった時にシアさんに聞けばいいし、またギルドへ行ってミランさんに会って聞くのもいい。
お菓子もいっぱい買ってもらえたし、っとこれは別にいいか。
駄目だ口がにんまりしてしまう。本当に楽しい、素晴らしい一日だった。

「そんなにお菓子買ってもらったのが嬉しいんだこの子……、可愛いわ」

「違うよ！　まあ、それも多分に含まれるんだけどね」

兄様はラルフさんと町に残るらしく、私たち三人はのんびりと歩いて帰っている。
多分エルフに求婚する、という意味を教えているんだろう。

「すみません。私がお二人を抱えて飛べればよかったんですが……」

「荷物もあるし、しょうがないわよ。疲れたら近くの家で休めばいいから大丈夫よ。気にしないで、シア」

近くの家って……

ちょっと疲れたから休ませてもらうわー、と、ズカズカ上がり込んで行くんだろうか。

確かにそれもありかな。みんな家族だし、嫌な顔をされるっていう事は想像もできない。

「ごめんね？　つい嬉しすぎていっぱい買っちゃって……」

「いえ、姫様の久しぶりの……、？　ほぼ初めての我侭……？　あれは我侭ではないかも……。おっと失礼しました。店ごと買い占めてもよかったんですよ？」

私、我侭言ったの初めてなのか……？　いやいやまさかそんな。

荷物を持っているのはシアさんだけなんだけど、ちょっと買いすぎたかな、抱えるように持っている。

何度も、少しは持つよ、って言ってはいるんだけど、シアさんが私たちに荷物を持たせる訳が無いよね……

ちなみに兄様には、この倍くらいの量を預かってもらっている。か、買いすぎた！

「ううう……。みんな止めてくれてもいいのに……」

お菓子の山を見てテンションが上がりすぎた私は、あれも欲しい、これも欲しい、と、全く止まる気配も無く、この量になってしまったのだ。

ああ、確かに我侭じゃないや。また全力で甘やかされただけだった。

シアさんから見ると、私って我侭なんて言った事が無い様に見え

るのかな。いつも言ってる気がするんだけどなー……

「姫様？」

私の異変にシアさんが真っ先に気づく。

「シラユキ？　大丈夫？　ああ、どうしよう。疲れちゃった？」

情けない事に、一時間と歩けずに疲れきって立ち止まってしまった。

家まで後どれくらいなんだろう……

「ご、ごめんね二人とも、私ひ弱で……。今どれくらいまで来たの？」

「うーん。まだ半分も来てないのよね。シアはそのまま荷物お願い。私が背負っていくわ」

「え？　姉様も疲れてるよね？　大丈夫、少し休めばまた歩けるよ」

そう言ってはみたものの、多分無理だ。少し歩いては休憩、を繰り返していたら、家に着く頃には真っ暗になってしまいそうだ。

「私がこの程度で疲れるわけ……、あ！　そっか、ごめん、そうだったわね」

な、なんだろ？　最近、こうやって急に納得される事が多い気がする。

「私、魔法使って歩いてるのよ、体に負担をかけないように。長時間歩く時はさすがに、ね」

「そ、そんな魔法があるんだ……。先に教えて欲しかったー……」

そういう事か！　やけに二人ともスイスイ歩いて行ってると思ったよ……

しかし、魔法はそんな事もできるのか、便利だなー

「でもごめんね？　これは成人しないと使っちゃいけないの。シラユキはまだ子供、まだ体が育ちきってないからね。使えそうでも絶対に使っちゃ駄目よ？」

小さい頃から魔法に頼りすぎると、大人になっても、必要な筋肉が作られていなかったりするんだろう。それはちょっと怖いね。

「うん。やっぱり二人とも凄いね。私、駄目駄目だ……、もっと運動もしなきゃね」

このままでは、魔法に頼ってるわけでもないのに、大人になってもひ弱なままな気がしてきた。

「いいから、今日は私に甘えなさい。お姉ちゃん命令よ」

おっと、お姉ちゃん命令だ。これは逆らえないね。ふふふ。

「うん！　ありがとうユー姉様！　大好き！！」

「か、可愛い……。まったく、急に元気になっちゃって、もう……」

姉様の背中にもたれかかって、首に手を回す。

いつも思うんだけど、姉様も、みんなも、何でこんなにいい匂いなんだろう……

「し、幸せ……。抱っこもいいけどオンブもいいものね。この密着感が何とも言えないわ」

「う、羨ましい……。帰ったら私にもお願いします、姫様」

「ユー姉様、何となくその発言はやーらしいよ」

兄様といつも一緒にいるからね、伝染ったんだろう。

「そ、そう？　気をつけなきゃ……。それにしても……、毎回思うんだけどさ、シラユキって軽すぎない？　ちゃんと食べてる？　今さら不安になってきちゃったわお姉ちゃんは」

「うん？　食べてるよ？　私ってそんなに軽い？」

「うんうん。ちょーっと軽すぎるんじゃないかしらこれは」

「元々姫様は小食ですし、運動も散歩程度しかされていないですから。通常の十歳頃のエルフと比べると一回り以上小さいですよね。だ…そ……い…」

やぱり小さいよね私って。
周りに同年代の子供がいないからさ、そういうの全く分からないのよね。

ん？

「シアさん最後、何か言った？」

「いいえ？　何か聞こえました？」

私のログには何も無いな、気のせいか。

そのまましばらく、他愛も無いおしゃべりを続けながら歩いていた。
そろそろ半分くらい？　姉様とシアさんは全然平気っぽい。魔法の補助があるとはいえ凄いな、二人とも荷物持ってるのにね。

「うん、決めた。明日からもっと魔法の練習、しましょ？　シラユキはもっと運動もしなきゃね」

魔法の練習かー……
最近はもう、明かりの魔法さえあればいいや的な感じなんだよね。

「そう、ですね。姫様に魔法、というのが、実はかなり不安だったりするんですが」

「そうよね、この子ホントに何でもできちゃいそうだからね……。とりあえず基礎の基礎からやり直しましょうか」

「はい。私も考えておきます。厳しくなく、きつくもなく、それでいて存分に甘やかせる事のできる練習メニューを」

「お願いね。お父様お母様には私から言っておくわ」

スルーかい！　甘やかす気満々だよこの二人は！

体力作りのついでに魔法の練習くらいの考えでいいか……

「少しくらい厳しくしてくれた方がいいのに……」

もう私完全に甘え癖がついちゃってるよ……。

少し厳しくされたら泣き出しそうだ。これはいけない！

「厳しく？　無理無理。それでシラユキが泣いちゃったりしたら、私、死んじゃうかも」

「無理です。姫様に厳しく当たるくらいなら死を選びます」

「なんで二人とも死んじゃうの！？」

ええい、この過保護家族め。

ま、いっか。基礎の基礎からゆっくりと、甘やかされながら頑張ろっと。

まだ十一歳までですら何ヶ月もあるんだ、五十歳、百歳なんて想像もできない長さだよ。

ゆっくりだらだらやっていこうー

「ふわ……」

おっと、欠伸が。

初めて長時間歩き回った疲れと、姉様の背中という安心で眠気が凄い。でも自分だけ眠るわけには……

「あ、眠い？　寝ちゃっていいわよ」

「着いたら起こ、いえ、着替えなど全て私にお任せを。ぐっすりと眠って頂いて結構ですよ」

「う、うーん……。ごめんなふぁいふたりともー、おやふみ……」

しかしあっという間に限界だ。二人には後で改めて謝ろう。

「く、くすぐったい！　息が！　シラユキの吐息が首に！」

「ユーフェネリア様代わってください！　お願いします！！　お願いします！！！」

「何その真剣な目！？　だ、駄目よ！　落ち着きなさい！！！」

うるさいなー二人とも。静かに寝かせてー……

その４０（後書き）

二度目の町訪問は泣き出すことなく無事終了。
次話からはまた魔法の練習になる、かも？

その41

「う……ん……。？」

私、寝てた？　うーん、暗いな、ベッドで寝てる、ね。あれ？　いつ寝たんだっけ……

この感触は、何となく自分のベッド、だね。ここは私の部屋か。目を凝らすと薄っすらと見える。うん、自分の部屋だ。

ああ！　今日町に行ったんだった。帰る途中に疲れて歩けなくなっちゃって、姉様にオンブしてもらったんだった。その後すぐ眠くなって、寝てしまって、それで、夜までぐっすりか。今何時だろう……

体を起こし、明かりの魔法を点けようとしたが、何か体が重い。起き上がれない？　あ、あれあれ？

何か、頭もぼーっとするね……

寝すぎたのかもしれないね、やけに体がだるい。うーむ、寝なおそうかな。

もういいや寝てしまえと目を瞑り、二度寝を慣行しようとした丁度そのとき、ドアが控えめにノックされた。

「姫様？　お目覚めになられました？」

ん、シアさんか……。何で私が起きた気配に気づけるんだろうこの人は。ああ、メイドスキルだね、納得納得。

「ああ……、うん……。起き、たよー……」

声を出してみて驚いた、何というか細い声。今のは自分の声だよね？　今のでちゃんと聞こえたかな……

何でこんなに体が重く感じるんだろう？　喋るのも辛いとは。今口に出した分だけでかなりの体力を使った気さえもする。

「ひ、姫様！？　すみません入ります！」

シアさんが返事も聞かずに部屋に入って来た。珍しいね。何かあったのかな？　いつもなら私の許可無く勝手に入るなんて絶対しないのに。

どうやら相当慌てているらしい、部屋の明かりではなく、魔法で明かりを出しつつ駆け寄ってくる。

「姫様……！　失礼します」

そう言って、シアさんは私の額と頬に手を当てる。

つ、冷たいわー、気持ちいいわー。シアさん何でこんなに手が冷たくなってるんだろ。

「何てこと……！　ひ、姫様、すぐに戻ります。少しだけお待ちくださいい」

いつもより少し強めな言い方でそう言うと、すぐに部屋から出て行ってしまった。明かりは消えないままだ、まぶしくて寝れないよ……

さっきのシアさんの手、冷たくて気持ちよかったなー

先ほどの冷たい手の心地よさを思い出したらなにか、また更にだるくなってきた気がする。そんなに疲れたのかな私、でも、姉様の背中で寝てただけだよね。

「シラユキ！！！」

「馬鹿、ユーネ、声が大きい。静かにしろ」

急に勢いよくドアが開き、兄様と姉様が部屋に入ってきた。何かに慌てている姉様を兄様が窘めている。

うー……、寝かせてよー、眠いのよー、だるいのよー

「ご、ごめんなさいお兄様……。シラユキ、大丈夫？」

姉様はさっきのシアさんと同じ様に、私の額に手を当てて、顔を覗き込んでくる。何という気持ちのよさだこれは。頬に手を当ててくれれば頬擦りするところなのだが……

「ん……」

多分疲れてるだけだから寝かせてー、と言いたかったのだけれど、あれ？　何故か声を出す気が起こらない、起こせない？

「うわ、辛そうだな……。今、フラニーが氷用意してるからな？もう少し我慢するんだぞ」

氷？　おお、いいねそれ、何か熱っぽいし、ありがたいよ。……？

ああ、熱があるのか、私。

「うひゃー、気持ちいー……」

額にタオル、その上に氷水の入った、多分皮製の袋を乗せられた。
何これ気持ちよすぎでしょう。
前世で使った額にピタッと張るだけのシートとは違い、この刺す様な冷たさがいいね。たまに外さないと痛くなってきてしまうのが氷袋の面倒さか。

五分と待たずに、フランさん、メアさん、シアさん。メイドさんズが全力で介抱をしにやって来てくれた。
続いて父様、母様も。ちょっと来すぎじゃね？　私の部屋そこまで広くないよ。

「具合はどうだ？　ああ、辛そうだな……。代わってやれればいいんだが……」

「シラユキが熱を出すなんて初めてで、本当に焦ったわ。今までは女神様の加護のおかげか、健康そのものだったしね。ああ……、本当に辛そう……」

父様は悲痛な表情。母様は半泣きの状態だ。

二人とも心配しすぎだよ。多分ただの疲れだって……、疲れ？

「もしかして、私、って、あれ、だけ……」

おっと、喋るのはまだまだ無理そうか……

もしかして私って、たったあれだけ歩いただけの疲れで熱を出してしまったんだろうか？

「ひ、姫様！　喋らなくても結構ですから！　ああ……、どうしたら……、ああ……！」

「ちょ、ちょっとシア！　さすがにウルギス様とエネフェア様の邪魔はまずいって！」

珍しくシアさんがテンパっている、メアさんに注意されちゃってるよ。

ごめんねー。いつもの完璧メイドスタイルが、見る影も無いほど混乱させちゃったみたい。

「し、シア、落ち着いて。シラユキ、お話しは元気になってから聞くからね？　今日はもう寝よ？　明日、また元気な顔を見せてね」

うん、多分明日になれば全快だよ。

「病気も怪我も、魔法じゃ治せないからな、十歳じゃ魔法薬も使えないし、さすがにバレンシアも焦るか。大丈夫、ただの疲れだろ？　心配なら付いていてやればいい」

「は、はい！　勿論です！」

落ち着いたかな？　兄様姉様凄いわ、慌てるシアさんを……？
え？

怪我って魔法で治せないの！？

嘘！？　回復魔法って無いの！？　そ、そんな！　冒険には必須じゃないの！？
魔法薬って確か、普通に、飲むタイプ塗るタイプのお薬だよね？
五十歳までは体に負担がかかり過ぎて使えないっていう。
え？　魔法でパッと治るんじゃないの？　お薬塗って包帯巻くの？

え、え？　えええええええー……

「姫様？」

私を呼ぶシアさんの声に、意識が完全に覚醒する。

「ん……、あ、いつの間にか寝てた？」

シアさんが光量が弱めの明かりの魔法をつけてくれる。
知らないうちに寝てしまっていたみたいだ、残っているのはシアさんだけか。
窓の外はもう白んでるね、まだ少し暗いが。体も結構楽になってるかな、動き回るには辛そうだけど……
「シアさん、もしかして徹夜？」
うん、声を出すのも問題無さそうだ。
「ええ、あ、いえ。メアとフランと交代でしたよ？」
話しながらも、テキパキと私の熱を測ってみたり、見える部分の汗を拭ってくれたりしている。
これは、嘘だね。
メイドスキルなのかクマはできてないけど、シアさんがあの状況で、私をほかの誰かに任せて仮眠を取るなんて、まずありえないだろう。
でも、いいや、隠したいのなら聞かないでおこっと。
「体、起こせますか？　汗を拭いて、着替えをしなければ。少しでも辛かったらすぐに仰ってくださいね」
言われて見ると、かなり汗をかいてしまっているようだ。このまま寝たら風邪をひいてしまうかもしれないね。それに、肌に張り付いて気持ちが悪い。
一度そう感じると、どんどん不快感が増してきた。起き上がって

着替えるくらいならそこまで負担になる事も無いだろうし、さっさと脱いでしまおう。

「うん、それくらいなら大丈夫そう。お願いするね」

優しく手で支えられながら体を起こし、服も脱がせて貰う。そういえば、ちゃんと寝巻きを着てるね私。着替えさせられてる間、全く起きなかったのか……

「ひゃっ」

濡れたタオルの冷たさとくすぐったさに思わず声が出てしまった。

「す、すみません。冷たすぎましたか？」

「大丈夫、少しくらい冷たいほうがいいな」

体を丁寧に拭いてくれるシアさん。まるでお姫様だね私。あ、お姫様だった……

着替えの時、お風呂の時に、裸なんて毎日見られているから慣れているはずなんだけど、こういう状況だとちょっと恥ずかしさが出ちゃうね。

実は下着から何から何までシアさん任せなんだよね。下くらいは自分で穿かせて欲しいんだけど……

自分一人で着替えができなくなってしまいそうだ。本当にどこのお姫様……、だったね、あはは。

「そうだ、シアさん。ちょっと気になったんだけど、傷、怪我を治す魔法って無いの？」

「え？　ええ、ありませんよ？　怪我を治す魔法は無くとも、癒しの力を持つ者は僅かですが存在します。癒しの力が確認された者は即国に召抱えられ、結構な地位を与えられる事になります。平民が会う事は難しいでしょうね……。そうでした、リーフエンドにも一人いる筈ですよ。人前にはもう滅多に出てこないらしいので、そういった方がいる、という話を聞いただけなのですが」

癒しの力。シアさんのナイフを出す能力みたいな、個人専用の魔法かな？

そんな貴重な人材を一般庶民のまま、ましてや冒険者とかにするわけも無いか、国がさっさと引っ張って行ってしまうんだね。

王族にもしもの事があってはいけないからね、即時治療の能力を持つ者が近くにいるという事は、相当安心できるんじゃないだろうか。

「それなら一般の人、冒険者の人はどうしてるの？」

「魔法薬も高価な物ならかなりの性能を持ちますよ。手足を切り落とされたくらいの傷でも、傷口にかければ即出血が止まり、あとは包帯を巻いておく程度でいい、というレベルの物まであります。さすがに欠損までは治せませんがね。そこまでの物は一般の方も、冒険者も使うことは無いですね。どちらも傷薬程度の効果の物しか使っていないですよ。冒険者は一応高い効果のある物を一つは常備しておくのが基本なのですが、そこまでの傷を受けるという事は、その、アレですので、実際に使われることは稀ですね」

ああ、なるほどね。治療は魔法薬が基本なんだ。魔法で傷を治し、そのまま戦線復帰、なんていうのは無いのか。

即時治療の手段がないって事は、冒険者って本当に一撃もらったらアレだ、一発アウトの世界なんだ……

新しい寝巻きに代え、シーツを代えたベッドに寝なおす。冷たくなったベッドが気持ちよすぎる。

「姫様の前世、以前の姫様がいらっしゃった世界には存在していたのですか？　その、治療の魔法、でしょうか」

あ、シアさんこれはかなり疲れてるな。前世の私の事を聞くなんて大ミスやっちゃうとは。でも、いいか、特に隠してるわけじゃないしね。母様には内緒にしておいてあげよう。

「ううん、治療の魔法どころか魔法自体無かったよ、魔法なんてお話の中でだけの物だったんだ。だから、魔法って何でもできちゃうってイメージがあったんだよねー……」

魔法は現象を起こすだけだったね。傷が治っていく現象？　そんなのイメージできるわけ無いか……。細胞分裂とかだっけ、全然分からないや。

シアさんは少し考えて、ゆっくりと話し始めた。

「魔法はただの、人の使う技術の一つです。姫様にもすぐに理解できる日が来ますよ。自分の無力さ、魔法という物の手の短さに。決

して人の手では届かない領域、という物が」

この、話し方。やっぱりシアさんも、……私と同じ、なのかな？

「シアさんは、いつ気づけたの？」

「昔、昔の事です。まだ百にも満たない年齢だったでしょうか。才能が私にはあった、あってしまったんです。何でもできる、自分にできないことは無い。魔法とは何て素晴らしい物なんだろう、と」

シアさんはまだ続ける。

「旅の仲間、冒険者の仲間、私たち四人はいつも一緒でした。皆、それぞれがとても強かった、私たち四人が組めば倒せない者など無い、例え最強種と謳われるハイエルフであろうとも」

「シアさんストップ」

「……姫様？」

やっぱり、聞いちゃ駄目だよね。過去形ばかりだし、きっとその三人の仲間の人はもう……

「シアさん大丈夫？　いつもならそんな話、絶対してくれないよ？」

「ええ、分かっていますよ。今日ばかりは、姫様の問いに全てお答えしようかと」

そういう事か……。ああもう！　何で自分を責めるのかな！！

「シアさん責任感じすぎだよ。体力の無さ過ぎた私が悪いんだよ？」

私が疲れて熱を出した事のどこにシアさんの責任があるというんだろう？

「姫様を甘やかせていた私の責任、という事にもなりますよね」

また表情を読んだ！？

「な、ならないんじゃないかなー？　なる訳無いよ！　もう！」

「ですよねー。あ、大きな声は出さないようにお願いしますね。まだ無理をしてはいけませんよ？」

ふふふ。何となくだけどいつものシアさんに戻ってくれたかな。

「それでは、最後に一つだけ、姫様の質問にお答えしましょう、包み隠さず、どんな問いにもお答えします。それが私への罰。どうか、お願いします」

「ホントに変な方向にまじめなんだからシアさんは……。ちょっと待ってね」

一つだけ、一つだけか……

さっきの話は駄目だ、私が聞くには重過ぎる。多分私が耐えられない、鬱になっちゃうんじゃないかな？　さっきは危なかった！！

それならどうする？　冒険者時代の事？　二つ名のこと？　生ま

れ？　育ち？　恋愛？

うん、これしかないね、やっぱり。シアさんもきっと、私と同じ……

「シアさんは……、私と同じ、転生者、なんだよね？　多分私と同じ世界の」

以前は否定したが、間違いないだろう。さっきの魔法の話といい、シアさんも魔法に万能感を持っていたはずだ。

私の表情から色々と先読みし、理解するのも、恐らく自分も経験してきた事だから、なんだろうと思う。

冒険者ギルドの時もそうだ。私が興味本位で近づき、傷つくのを阻止するのも、シアさん自身が以前に同じように傷ついた事があるんだ、きっと。

これで、もっと、いろんな話ができるようになると思う。嬉しいね。

シアさんもこの質問が来ることが分かってて一つだけ、と提案してきたんじゃないのかな。

「違いますよ？　あの、質問の意味がよく……。それでよかったんですか？　一つなら何でも答えたんですよ？」

「嘘だッ！！！」

包み隠さず答えるって言ったのに！

「本当ですよ。私はこの世界生まれ、この世界育ちの、どこにでもいるエルフのメイドです。そうですね……、もし嘘を吐いていた、という確認が取れたら、ううむ……。あ、ラルフさんと結婚しましょうか」

あ、これは絶対嘘ついてないや。だってラルフさんだしね。

シアさんも、まさかこんな馬鹿な質問をされるとは思っても見なかったようだ。困惑気味に説明をしてくれる。

しまったあああああああああ！　もったいない！！　せっかくのチャンスが！！！　でも、どこにでもいるメイドっていうのは嘘だ！

「ううう……、恥ずかしい、ずっとそうだって思い込んでたよ。今

日ついに確信が持てたと思ったのにー！」

やっぱりこの人は謎だよ！！　謎メイドだよ！！！

「ああ！　以前皆様と、姫様の前世について話したときの事ですか」

やっと合点がいった、と、爽やかな笑顔になるシアさん。

「そうそう！　あんな思わせぶりな言い方されたら誰だってそう思っちゃうよ……」

「あれは、本当にあれ以上の意味は無いですよ。ただ、誰にも話せない秘密など誰にでもあるものです、と、姫様の心を軽くしようという気持ちから出てしまった言葉で、全く深い意味はありませんでしたよ？」

「は、恥ずかしすぎる……。結構思い悩んでたのよ私。それが、本人ですら忘れていた、ただの気休めの言葉だったなんて……」

「もしそうだったとしたら、以前の姫様のいた世界の事など聞きませんよ。……あ！」

「あ、それもそうか……。私って、ほんとバカ……」

「申し訳ありません！　いくら徹夜で疲れていたとはいえ、誰も聞かないと決めた事をこの私が聞いてしまうなんて！」

やっぱり徹夜してたよこの人は。

「それじゃ、罰としてもう一つ質問、とか」

「それは駄目です。一つだけ、と約束しましたからね。罰は他にお願いします」

罰を受ける人の態度じゃないよ！　ええい！　何をさせてやろうか！！　何か、何か無いかな……

ああもう！　決めた！！

「シアさん今から一緒に寝よ！　それが罰ね！」

「え？　ご褒美ですか？」

「やっぱり駄目！！！」

「それでは早速」

「脱いじゃ駄目！　うわ！　せめて下着は付けたままで！　ぜ、全裸！？　！？　明かり消さないで！！　ちょ、まっ！　きゃーーー！！！」

「姫様可愛い……。大声はいけませんよ？　お体に障ります。私は、寝る時は全裸派なだけですからご安心ください。さすがに女性と、どうのこうの……、という趣味はありませんので」

「先に言ってよ！　十歳で初体験かと思っちゃったじゃない。ああ、まだドキドキしてる……」

「姫様が望むのであれば、精一杯お世話させていただく所存ですが？　……ごくり」

「ひい！　望みません！！！　シアさんホントにそっちの趣味の人じゃないよね……？」

「おやすみなさい、可愛らしい姫様」

「答えてよ！　……あれ？　シアさーん？　こ、これって、先に寝ちゃったらアウト！？」

当たり前の事だが、特に何もされず、二人してお昼過ぎまでぐっすり寝てしまった。

目が覚めたとき、全裸のシアさんに抱き枕にされていて、つい叫んでしまい、また一悶着あったが、割愛する。

その４１（後書き）

今までで最高の文字数？　ちょっと長かったでしょうか？
人物同士の会話がメインなので、そこまで長くは感じないと思うのですが……

補足。シアさんの下着の色は何故か分からなかったようです。

その４２（前書き）

最近自然と文字数が増えてしまいます。
当初は２０００～４０００文字の予定が、毎回５０００文字超えてしまう……

前作は毎話２０００文字以下だったのに、どうしてこうなった！
まあ、悪い事ではありませんよね。

その４２

「今までの事を振り返って考えてみて、みんなはどう思う？」

今日はいつもの談話室ではなく、私の部屋でお話だ。大事を取って一日外出禁止になってしまったのだ。

お話のメンバーは、母様、姉様、そしてメイドさんズの三人。ちょっと狭いね。メイドさんズは椅子に座らずに立っているから、そこまで狭く感じないのだが……

「どう思うって、何を思えばいいの？」

「ごめんねシラユキ。もうちょっと詳しく説明してもらえる？」

姉様母様には分からないか……。メイドさんズは名指しで聞かない限り、あまり積極的には発言はしてくれない。

「話を聞く限り、私の事のように思えますが……」

「うん。シアさんのことだよ」

昨日、今日の朝か？　ちょっと身の危険を感じたんだよね。冗談だとは言ってはいたけど、寝てる間に何かされてたりしてるんじゃないかと、変な考えをしてしまう。

今までは妹か娘が欲しかったんじゃないかな、と思ってたんだけど……

シアさんって女の子が好きなんじゃないのか？

「ああ、なるほど。そうなんじゃないの？　見てれば分かるわよ」

「ええ、そうよね。シラユキみたいな小さくて可愛い子が好きなのよね、多分」

あれ！？　反応が薄いよ？　小さくて可愛い子？　え？　シアさんロリコン？

「し、シアさん……？」

やばい！　私今幼女だよ！　どストライクだよ！　これからシアさんとどう接していけばいいんだー！

「はあ、そういう事でしたか。今朝も言った通り、私は女性とどうこう、性的な関係を持ちたいとは思いませんよ。恋愛をするなら普通に男性、ですね」

性的！　ストレートな表現はやめて！

シアさんが男の人と恋愛……？　想像できないよ……。小さな女の子と手を繋いでニコニコしてるところなら、いくらでも鮮明に思い浮かべられるんだけど……

「え？　そうなの？　シアって可愛い女の子以外興味ないと思って

た」

「うんうん。レンが男の人とー、って言うのはちょっと想像できないなー」

メアさんフランさんもそう思うよね？

でも、母様姉様の前でシアさんがこんな嘘をつくとは思えないし……。うーん、信用しよう。

多分私が一番慌てるのがああいう冗談だから、つい多目にやってしまって、私以外の人の目にもシアさんはそういう人なんだ、と誤解させてしまっているんだろう。

なるほどなるほど、安心した。

「バレンシアはもう五百近いんでしょう？　今まで恋愛の一つや二つ、してきてるんじゃないのかしら」

シアさんそういえばそんな年だったね。これはちょっと聞いてみたいな。シアさん自分の事は全然話してくれない、聞いても教えてくれない謎メイドさんだしね。

「そうなの？　シアさん」

「う……。ええと、ノーコメントでお願いします」

黙秘だ！　この反応……、これは絶対してきてるね！

シアさんの恋愛話かー、恋人とかいたのかな？　ぜんっぜん想像できないんだけど……

「いいじゃない、教えてよ。私もお兄様との話、してあげるから、ね？」

「私も聞きたいわ。貴女の経歴は知ってはいるんだけれど、あまり個人的なお話はしてくれなかったからね」

母様は結構色々聞いてるんだな。雇い主みたいなものだし、それもそうか。いいな、ちょっと羨ましいなー

「シーアさーん。きーきたーいなー？」

「か、可愛い……！　はっ！　駄目です。いくら愛する姫様のお願いでも、言えません、話せません」

むう、駄目か。ちょっと可愛く聞けばコロッといくと思ったのに……

「そうね、無理に聞くことも無いわね。ごめんなさいね、バレンシア」

「い、いえ……」

おや？　母様はあっさり諦めちゃった。もっとにこやかに追求すると思ったんだけどな。仕方ない、私も諦めよう……

だが、まだもう一人いることを忘れてもらってはいけない！

「フランさんは結婚してるんだよね？　お話聞きたいなー」

「やっぱりこっちに来た！　来るんじゃないかって思ったよ……」

いつか聞き出してからかおうと思っていたのよ。丁度いい話の流れだし、今がいいよね。

「あー……、うーん……。別に、そんな特別な話なんて無いよ？普通の恋愛結婚だからねー」

頬を人差し指で掻きながら、照れ照れと話すフランさん。

「うんうん！　そういうのが聞きたいの！」

れ、恋愛結婚！　こういう話はぜひぜひ聞いておかなければ。今後の参考にするためにね！

「私も聞きたいね。結婚してるっていうのは知ってたんだけどね」

「私は口止めされてただけだけど。シラユキをからかういい材料になるからって」

「私もそうね。特に口止めはされてなかったのだけれど、そのほうが面白そうだったからね？　黙ってたのよ。ふふふ」

「すみません。私は特に興味ありませんでした」

「レンひどいっ！」

母様姉様はさすがに知ってたんだ。シアさんは何と言うか、シアさんらしいね。

「ふふっ。それじゃフランさん、どうぞー！」

「どうぞー！　って、もう……、可愛いなこの子。別に面白い話でも何でもないよ？」

フランさんは観念したのか、過去を思い出しながら話し出した。

「んー、まずは出会いからかな。実はその彼ね、初めは姉さんのことが好きだったのよ」

「お姉さん？」

フランさんのお姉さん？　お姉さんいたんだ、なんで教えてくれないかなー

どうせ文句を言っても、聞かれなかったから、とか、どこかの魔法少女勧誘獣みたいな返答をされるだけか、やめておこう。

「うん？　あ、言ってなかったっけ？　いるよ、姉さんが一人ね。ま、それは今はいいじゃない。彼、姉さんに告白しては振られてたのよね。私もよく相談に乗ってたのよ。彼も私の事、妹みたいに見てくれてたしね、話しやすかったんじゃないかな」

言ってたつもりだったのか、それならそれでもいいや。

その人はフランさんのお姉さんのことが好きだったのか。しかし、妹さんに相談するとか……、まあ、一番の近道ではあるね。

「その相談を繰り返してるうちに、お互い好きになっちゃったのかな？」

「え、あ、うん。そんな感じかな……。それで、結婚したの。……ね？　面白くも何とも無い話でしょ？」

何かよくある話だ……。よくありそうな話だけに、確かに面白くないな。でも。

「肝心なところが抜けてない？　告白とかさ、結婚に踏み切った時の事とかさ」

そう。ここが一番大事なところだ！

相談を繰り返すうちに惹かれあっていく二人。そしてその二人はある日……。そのある日に何が起こったのか聞きたいのよ！

「子供のくせに……。でも、いいか、シラユキだし。そんなに聞きたい？」

「うん！　聞きたーい！　ごめんね？　話したくない内容だったら話さなくてもいいよ」

本人が話したくないことを、無理に聞き出さなければならない内容でもないからね。駄目ならパッと諦めるさ。

「よしよし！　それじゃ、他ならぬシラユキ姫様のお頼み、お話し

てあげましょうか！　ふふふふふ……」

あれ？　何か態度が急変したよ？　そういえばこの話って、私をからかうためにとって置いたんだっけ？　い、嫌な予感が……

いつものように相談に乗ってたのよ。相談って言っても半分以上愚痴の様な物だったんだけど。なんであの人は振り向いてくれないんだーってね？　姉さんは彼のこと弟か息子にしか見てなかったのよね。年の差も凄いし……。ま、それは置いときましょうか。

シラユキの聞きたいって言うその日ね、お互いちょーっと、飲みすぎてたのよね、っと！　逃げなーい！　シラユキが聞きたいって言ったんだからね？　ちゃんと最後まで聞いてね？　この子勘いいわね……。エネフェア様、捕まえててくださいね。ふふふ……

その時ね、ふ、と思ったのよ。何で姉さんは、こんないい人を受け入れないんだろう？「もったいないな」ってね。

完全に脈無しなのは分かってたしね、私の姉さんの事だし。この先何百年アタックし続けてもこりゃ無理なんじゃないか？　ああ、「もったいない」。

お酒が入った頭だったからかな、あんまり深く考えなかったのかもね。もったいない、うん、もったいない。それならさ、私が取っちゃえばいいんじゃない？　って。

ふふふふふ。はいはい耳塞がないの。これからがいいところなん

だから。

彼もかなりお酒入ってたしね、今なら、ヤっちゃえるんじゃないか？　って頭の中で誰かがささやくのよ。ほらさ、私、姉さんに似て胸大きいでしょ？　ちょっと掴ませてやれば彼も理性飛んじゃうだろうと思ったのよ。

まずは無言で脱いだわ、そして、急な事に驚く彼を押し倒したの。それから……、シラユキ？　あれ？

「うわ！　シラユキ真っ赤！　な、泣きそう！？　やめようか？　あれ？　やりすぎちゃった？」

りゃ、略奪愛！？　ち、違うか！　そ、それって、既成事実、ってやつ？　どこが普通の恋愛結婚なのよ！！！　ううううう……

自分の長い耳を両手で掴んで押さえ、頭をブンブンと振って、想像してしまったいやらしい考えを飛ばす。

「フラン、続けて？」

「続けなくていいよ！！」

母様こういう話大好きなんだから！　もう！　エロフめ！！

「私にはまだ早いよー……」

「そうかもね。フラン、それくらいにしてあげて？　シラユキ泣いちゃいそう。お母様、私たちは後で聞かせてもらいましょ？」

姉様まで！　このエロフ！！！

ふう、やっと顔の熱が引いてきたかな。

ホントに私の家族は何でこういう話が大好きなんだろう……、聞いてて、自分で話してて恥ずかしくならないのかな……。す、凄いわ……

「それじゃ次よ、これは絶対に聞いておかないとね。ねえ？　シラユキ？」

「うん？　なあに母様？」

次？　私？　……え？

「あなた、こっちで生まれるまで、十六年人間してたのよね？　人間で十六年ならもう成人の年齢よ。それなら恋愛の一つくらいしてると思うのだけれど、どうなの？」

こ、ここでこう来るか！！！　向こうでは二十で成人なんだけど、特に言う必要も無いか……

「そのお話には私も大変興味があります。さ、姫様」

シアさんがとても真剣な顔つきで、話せ話せと圧力をかけてくる。

「話さないよ！　と言うより話せないよ！　れれれ、恋愛なんて……、したこと……」

恋愛なんてしたことないのよーーー！！！

「あらら。生まれ変わる前でも、成人してても、やっぱりシラユキはシラユキか。でも、安心しちゃった」

「男性とまともに話せなかったんじゃないかしら？　この子、今でもそうよね？　バレンシアが隣にいないとお話しできないのよね、確か」

「姫って、一人だと男の人と目が合っただけでも逃げそうだよね」

「そういう子に限って、自分がモテてる事に気づいてなかったりするのよね。うんうん」

「安心しました。もし何かあったのなら、異世界へ行く方法を探さなければいけないところでした」

みんな好き勝手言ってー！　でも合ってる！　悔しい！　……うん？

「も、モテてたのかな私……？」

「え？　まさか本当に？　冗談で言ったんだけど……。ちょっと、シラユキ？　答えなさい」

「姫様？　そこのところ詳しくお願いします」

「う、うーん？　前にも言ったけど、もう薄っすらとしか記憶に出てこないんだよね……。そのときの私が何を思っていたか、とかはもう全く分からないし……。確かに何となくだけど、学校で男子にはよく話しかけられていたような？　駄目だ、思い出せないや」

クラスの男子とは結構普通に話してた気がするね。カラオケにも何人かで行ってたような……？　中学の頃から結構仲のいい男の子もいたっけ？　むう、記憶が曖昧すぎる。

んー？　でも、直接告白とかはされた事は無かったな……。ラブレターなんて古風な物も貰った覚えは無い。うん、やっぱり気のせいかな。

前世の私って、背、かなり低めだったしなー。妹とかマスコット扱いされてたんだろうね、多分。

「その世界、滅ぼしましょうか」

「シアさん！？」

「いくら生まれ変わる前とはいえ、姫様を狙い、気安く話しかけるような男がいる世界など。滅んでしまえばいいでしょう？」

「私が許可するわ。異世界への扉を開く魔法の研究、始めましょうか……」

「母様も！？　前世の私まで保護対象になるの！？」

「冗談に決まってるでしょ。慌てすぎよシラユキは……。ねえ？お母様、シア」

「ふふふ、可愛いわこの子……」

「さすがに冗談です、ご安心を」

「分かりにくいよ！　後母様は否定して！！！」

その４３

「まず最初に言っておくわね。疲れたらちゃんと言う事、また熱出して倒れちゃったりでもしたら私たちの心が持たないからね。あの時は本当に心配したんだから……」

姉様本当に心配してたからね……。もちろんほかのみんなもね。

私のあまりの体力の無さに、なるべく外に出るようにする事になった。読書もまだまだしたいので、一日おきくらいかな。もちろん読書の日も散歩程度はする。

魔法は使うと疲れるものらしい。魔力という謎パワーを消費しているみたいなんだけど、明かりの魔法をそれなりの時間出し続けても全く疲れは出た事は無い。本当に消費されてるんだろうか？

疲れが出るとは言っても、それで体力が付くとは思えない。しかし、広場で動き回りながら練習する事になる筈、それなりの運動量になるだろうと思う。

まだ体感した事は無いんだけど、魔力疲れはどんな感覚なんだろう？

気だるくなったり？　やる気が起きなくなったり？　鬱のような気持ちになるのだとしたら嫌過ぎるね。大きな魔法を使うたびに鬱になってたら……。それはそれで、見ている分には面白そうだ。

分からないなら聞いてみる。
今日の先生は姉様とシアさん、メアさんとフランさんはお留守番だ。
熱を出した日から、姉様はまた私からあまり離れようとしない。姉様とシアさんという甘やかしの二大巨頭のもとでどんな魔法の練習になるのか、期待半分不安半分、複雑な心境だね。

「ユー姉様、魔力疲れって、どんな感じなの？　やっぱり精神的に疲れるのかな？」

「それもあるわね。普通に息が切れてきたりするのよ、走った後みたいな感じにね。それに精神的な疲れって言うのかな？　これはちょっと言葉では説明できないわね……」

なるほど、体力と精神力、両方使う感じなのか。精神的な疲れは確かに言葉にはしにくいね、ちょっと怖いが、その内に私も体験する事になるだろうし、今は詳しくは聞かなくても大丈夫かな。
もしかしたら、使う魔法によっては魔力の減りに差が出るのかもしれないね。そういう事を調べてみるのも面白そうだ。
兄様が前に見せてくれた、土でナイフを作る魔法。あれも消費が大きいんだっけ？　父様が飛び降り台を作ったときも結構疲れるとか言っていた様な気がする。土関係は消費が激しいのか？

「とりあえずはね、ええと……。火は駄目ね、火傷しちゃったら怖いし。物の操作も駄目、魔力の消費が大きいから、シラユキには多分まだ早いわ」

いきなり答えが出てしまった。物体を操作する魔法は魔力の消費

が大きいんだね。私にはまだ早い？

「父様たちはポンポン使ってるけど……、あ、年齢的に？」

「そうよ。子供のうち、シラユキは特に体力無いしね、重そうな物じゃなくても、何か動かしたらすぐに疲れちゃうんじゃないかな。大人になれば自然と魔力は増えていくみたいだから、そっちはいいんだけどね」

「そっかー。魔法って体力も重要なんだねー」

もしかしたら、魔法を日常的に使い続ける事で体力が付いていくんじゃないだろうか？　だとしたら……、楽できるかも？

「疲れるまで魔法使えば体力付くんじゃないか？　うへへへ。というお顔をしています」

また表情を読まれたよ……

うへへへって何よ！　前にも聞いたなこれ……

「あ！　駄目よ？　魔力疲れは休めばすぐに回復するっていう訳じゃないからね？」

シアさんは、何で私の考えてる事がこんなに具体的に分かるんだろう……。確かに私って、考えが表情に出やすいみたいなんだけどさ。

ん？　休んでもすぐには回復しないんだ？　ゲームだと一晩寝れば全快っていうイメージだよね。

「魔力はどう回復していくの？　魔力補充的なお薬があったりするのかな？」

魔力回復の薬は必須のアイテムだよねー

「さすがにそんな物は無いわね。んー……、いっぱい食べて、いっぱい寝るしかないんじゃない？」

「そうですね。通常の運動での疲れとは違い、魔力疲れは一定の量回復するまで疲れている状態が続きますから辛いですよ。少しでも疲れを感じたら仰ってくださいね」

うわー、怖いなそれは。回復するまでずっと息切れや精神的な疲れが続くんだ……

魔力補給の手段も探さないとね。私の能力でどうにかできそうな気もするけど、まずは実際魔力疲れを体験してみないことにはね……

私予想だと、何となくジュースとお菓子は回復量が多い気がするね！

魔法の練習の後はおやつを食べる。素晴らしい流れじゃないか……

「それじゃまずは、うーん、何から使ってみようか？　風は結構起こせるようになったよね。シアは何がいいと思う？」

風は結構な強さで吹かせることができるようになった、メイドさんズのスカートを捲るというセクハラ魔法としてしか使ってはいないんだけどね。もっと慣れればいくらでも強くできそうだ、が、シ

アさんのスカートは一度も捲れた事は無い。別に手で押さえているわけでもないのに何故だ……

「日常的に使う魔法と言えば、やはり火、ではないでしょうか」

火？　火かー。多分簡単にできると思う。ライターのイメージで指先にともせば……、危ない！　指先燃える！

指先から少しはなれたところに出すイメージか、それでも結構熱そうだね。そう考えるとちょっと難しいのかも？

指先が燃えないように保護しながら使うとかどうだろう？　問題はどう保護するかだが……、冷やす？

「ねえねえ。物を冷やす事はできるの？」

「冷やす？　水を氷にしたり？」

「うんうん、そんな感じ」

氷は魔法で作ってるはずだよね、冷凍庫なんてあるわけ無いし。前に私が熱を出した時にフランさんが用意してくれた氷だって、魔法で用意していたんだと思う。

「それはいいお考えかもしれませんね。まだまだ暑さも続きますし、ご自分の周りの空気を冷やして冷をとる、という事もできるようになりますよ」

「寒い時は逆に暖めたりとかね」

何その素敵魔法！　人間エアコンか。あまりにも暑い時は、メイ

ドさんズが風を送ってくれるんだけどね。面白がって強めに吹かせてして遊ばれるのもよくある。私は髪が長いからかなり面白いらしい。私もお返しにスカート捲りの魔法で逆襲するのだが、多勢に無勢で反対に捲られてしまう毎日だ。あの楽しさは異常。

「ああ……、ですが、魔法に頼りすぎるとどうなるか、分かりますよね？」

「うん。多分魔法無しじゃ、ちょっとした暑さ寒さに耐えられなくなっちゃいそうだね」

エアコンが無いと生きていけなくなるか。便利すぎるのも考え物だね。

「我慢できない時にちょっと使うくらいでいいのよ。シラユキなら大丈夫、そんな事になるはずが無いわ。心配するだけ無駄よ」

「それもそうですね、失言でした。暑い時には脱いで、寒い時には着込めばいいんです。全裸でも耐えられない時に使うのがいいのでしょうか」

「暑くても全裸にはならないからね！？」

「それは残念です」

本当に残念そうに言うシアさん。

そんな事ばっかり言ってるから勘違いされるんだよ。もう……

「うん。冷やす魔法にしようか。どう練習したらいいかな……」

次の魔法は、『物を冷やす魔法』に決まった。温くなったジュースをその場で冷やしなおして飲めるとか、最高じゃない？

まてよ……、ジュースを凍らせる事ができれば……、ごくり。

「水に手を浸けるのが一番簡単で分かりやすいかと」

「ああ！　そうだったわね。私もそれでできる様になったんだった。懐かしいわー」

おっと、いけないいけない、ちゃんと話は聞かなければ。

水に手を浸ける？　体温が下がっていく感じかな？　なるほどねー

「それでは、水桶を用意して参ります」

綺麗なお辞儀をしながらそう言うと、シアさんは家の方へ戻って行った。

あ、考えてみたら。

「家でやればいいんじゃないの？」

「あ」

「あはは」

やっぱり姉様も気づいてなかったか。

「シアには言っちゃ駄目よ？」

「はーい！」

「あ、来た来た、ってやけに大きいわね」

「うん……」

シアさんが広場に戻ってくるのが見えた。直径１ｍ、高さは３０ｃｍくらいはありそうな水桶を頭の上に載せて……。！？

「シアさん手使ってないよ！？」

「え！？　あ！　本当だ！　な、なにあれ……」

姉様も私もびっくりだよ！　手で支える事もしないで頭の上に載せて、普通にスタスタ歩いてくるよ！！

シアさんが目の前まで来た。私たちは絶句。

「大変お待たせしました。申し訳ありません」

そしてお辞儀……！

「こ、こぼれる！　落ちる！　あぶぶぶぶ！！！」

「し、シア！　やめて！　見てて怖いからそれ！！」

「ああ、これは失礼を……」

軽く手を添えて、音も無く水桶を下に降ろす。もちろん水はなみなみと入っている。１００ｋｇ以上あるんじゃないかこれは……

「そ、それも魔法で？　シア」

「あ、ああ！　魔法で載せてたんだ？」

「ええ。喜んで頂けたようで、なによりです」

シアさんいい笑顔。この人は人をからかうのが好きだなホントに……

今のも物を動かす魔法の応用なんだろうか？　あれ？　物を動かす魔法って魔力の消費が大きいんじゃなかったっけ？

シアさんを見つめてみると、何か？　という表情を返されてしまった。全く疲れている気配すら感じさせないねこの人は……

うん、深く考えないようにしよう。シアさんだから、メイドさんだからで納得しておこうね。うんうん。

「では、姫様。水に手を浸けてみてください。片手だけで結構ですよ」

早速練習開始。まずは水の温度を見るんだね。

「うん。冷たくて気持ちいいねこれ」

さすような冷たさは無いが、程よい冷たさで気持ちがいい。服を脱いで中に入ってしまおうかと一瞬考えてしまった。

「しばらくそのままでお願いします」

そう言うと、シアさんも水に手を浸ける。

「さすがにこのサイズは時間が……。大きすぎましたね」

「え？　あ、あれ？　冷たくなってきた？」

気のせいなんかじゃない。水温がどんどん下がってきている！

「冷たっ！」

あまりの冷たさに、反射的に手を引き抜いてしまった。引き抜いた手は少し赤くなっている。

何度まで下がったのこれ！　す、凄い！　シアさん凄い！

「下げすぎましたか？　すみません、ユーフェネリア様。姫様のお手を……」

「あ、なるほど。ナイスよシア」

姉様が私の手を両手で温めてくれる。うわぁ…姉様の手…すごくあったかいナリぃ……

「ありがとうユー姉様ー」

嬉しさを表現するために姉様に抱き付く。

「か、可愛い……。シア、よくやったわ！」

「お褒めに預かり、光栄でございます」

水に手を浸けたまま軽くお辞儀するシアさん。

浸けたまま？　ああ、水温を戻してるのかな？

姉様に抱きついたまま暫く待つと、なにやらパキパキと小さな音が。

次第に音は大きくなり……

「シア？」

「もしかしてそれ、凍ってる？」

「はい。近くでどうぞ。あ、触らないようにお願いしますね」

姉様から離れ、二人で近づいて水桶の中を覗き込んでみる。

うわ、シアさんが手を浸けている辺りからどんどん凍っていって

るよ。実際目の前で見てみると、ホントに魔法って凄いな……

さらに少し待つと、水桶の中の水は完全に凍ってしまった。

そしてまた、全く疲れる気配を見せないシアさん。

か、考えちゃ駄目だ……、メイドさんだからいいんだよ……

「ここまでできる必要は無いとは思いますが、コップ一杯程度の水を瞬時に凍らせるくらいなら、姫様でしたらすぐできるようになりますよ」

「え、えー……」

できると思う、じゃなくて、できるようになります、って断言しちゃうんだ。

「大丈夫。シラユキならできるって」

そうかなー？　でも、できたら便利だろうなー……

「ああ、後、注意事項が一つ。手を浸けたまま凍らせると」

そう言ってシアさんはゆっくりと立ち上がる。水桶を左手に付けたままで。

「手が抜けなくなりますから、気をつけてくださいね？」

そう言って左手をフリフリ。水桶も一緒にブオンブオン。

「シアさん怖い！　冗談だって分かってるけど、その大きさのを軽く片手で持ち上げるのは怖いよ！！」

「私もできるわよ？　これくらいなら余裕だってば」

「ユー姉様も！？　二人ともこわーい！！！」

「あ、いたいた。おーい、シアー！　用意してきたよー！　ってなにそれ！？」

「何やってるのよレン……。ああ、シラユキで遊んでたのね」

メアさんがやって来て驚いている。そうだよね？　驚くよね普通は……。？　私、で？

声のした方に目を向けると、二人とも結構な荷物を持ってきている。

折り畳みのテーブルと椅子に、大き目のバスケット？　一体何を始める気だろう？

「さて、それではおやつの時間にしましょうか。今日はかき氷です」

水桶を下に下ろして普通に手を抜く。簡単に抜けるんじゃん！！

「手の周りの氷だけを少し溶かしたんです」

「あ、なるほど。シアさんやっぱり凄いや……」

え？　かき氷用の水だったのこれ……

メアさんフランさんが、椅子にテーブル、器にシロップ。次々と並べて行く。さすがメイドさんだ。

シアさんはというと……

「な、ナイフ！？　ナイフで削るの！？」

「ええ、もちろんそうですよ。砕いた氷より削った氷の方が、味も食感もはるかに上ですからね」

「そういう意味じゃないよ！　うわ！　何その切れ味！　手、速っ！　凄い！　でもちょっと怖い！　シアさん怖い凄いこわーい！！！」

「シラユキ大喜びね。夏場はたまにお願いしようかな。ああ、あのはしゃぎ様、頬が緩んじゃう……」

「ちょっと氷の量が多いね……。私ちょっとウルギス様たちも呼んで来るわ。メア、後お願い」

「追加の器とスプーン、後は椅子もお願いね。あ、姫は苺のシロップがいい？」

「うん！！！」

結局家族全員集まり、そして何故か次々と人が集まっていき、かき氷祭りは夜遅くまで続いた。途中でお酒に切り替わり、いつもの宴会になっていたが……

あれ？　私の魔法の練習は？

その４３（後書き）

かき氷いいですよねー

市販のシロップは匂いを変えてるだけで全て同じ味の様ですが、この世界のシロップは全て本物の素材から作られています。

どうでもいい補足でした。

その４４

今日は読書メイン。エルフ以外の種族については、これで一通りは読み終わったかな。人間以外に人と呼ばれる種族が他にあるのはさすがに異世界だね。こういう本を読むだけでもかなりの面白さがある。

この世界の、人と呼ばれている種族を簡単にまとめてみよう。

特に何の特徴もないのが特徴の、人間。

色々な種の動物の特徴を体に持っている、獣人。

美形が多く、耳が長い。魔法が得意な種族の、エルフ。

外見はエルフと同じだが、魔法能力を含め、全ての能力が高いと言われている、エルフの王族、ハイエルフ。

頭に角、背には出し入れ可能な翼を持つ。魔法の行使は不可能らしいが、個人個人全てに特殊な能力があり、さらには巨大なドラゴンに姿を変えることができるという、竜人。

その他、ゴブリン、オーガ等、理性ある人型の種族は人として扱われている。

獣人と一括りにしてあるが、種は様々。動物的な特徴を持つ種は全て獣人と呼ばれている。人魚や有翼人などがそうだ。

さらに精霊と呼ばれる種族もいるそうだが、根本的な考え方が人とは違うらしく、意思の疎通は難しいらしい。

数の違いはあるけれど、特に人種の差別も無く、種族間の争いなどは無いみたいだ。

たぶん昔はあったんだと思うけど、まあ、どっちかが滅んで終わってるよね。もしかしたら昔は、他にも種族分けされている種があったのかもしれない。

一番数の多いのはやっぱり人間かな、その次は獣人、獣人は全ての種を含めての話だが。エルフは多分三番目。世界中のどこの町でも見かけるが、やはり数はそこまで多くはないらしい。

後の種は町中では滅多に見かけることは無く、多分自分たちの種族の住処から出てくることがないんだろうと思う。

この中で気になるのは、やっぱり竜人だろうか。

「シアさんは竜人の人に会った事はあるの？」

「ええ、ありますよ。冒険者時代に何度か会った事がある程度で、友人と呼べるような方はいませんでしたね」

「やっぱり数が少ないんだ？　私たちくらい？」

「いえ、ハイエルフに比べればはるかに多いですよ。竜人たちは、自分たちの集落から滅多に出る事がないだけなんです」

なるほど、やはり引き篭もり種族か。他種族とあまり交流を持たないのかな。

それでも冒険者になっている人もいるらしいし、竜人でもそれぞれ考え方の違いがある人もいるんだろう。

詳しく聞こうとするなら、竜人の人本人に聞くしか無さそうだ。

「俺は一度だけ見た事はあるな。見ただけで話してはいないんだが」

「冒険者の人なのかな？　町で、だよね」

「ああ、角も目立たないし、外見は人間と同じだな。もしかしたら、知らずにすれ違った事もあるかもしれないな」

なるほどね、尻尾があるなら判りやすいと思うんだけど。

あ、尻尾。忘れてた。

「町に行ったとき、獣人の人何人も見たんだけどね？　尻尾がみんな見えなかったんだけど、あるんだよね？　本にも書いてあったし」

あれから何度か町に行っている。獣人の人たちと話すことは、まだできいてはいないのだ。

獣人の人とすれ違うたびにお尻、と言うか腰の辺りを観察してみてはいるんだけどね。今のところ一人も尻尾をフリフリさせてるような人はいなかった。

「もちろんありますよ。ですが、普段は服の中に隠している事が殆どですね。町中でも外でも、出している人はいないと思いますよ」

よかった、ちゃんと尻尾はある様だ、服の中に隠してるんだね。でも、どうして？

「そうなんだ？　見てみたかったなー。それにも何か理由はあるの？」

「考えてみろって、邪魔だろ尻尾なんて。すれ違う時に相手に当たったりとか、地面に座ってたら踏まれるとか、戦闘時なんか特にな。掴まれでもしたらそこで動けなくなって終わりだろ」

「獣人の冒険者の中には邪魔だから、と自分で切り落としてしまう人もいるんですよ。相当な激痛らしいですが、私たちにはどうやっても分かりませんね」

「え、えー……、もったいない」

ゆ、夢が無いな……。種族の特徴である尻尾が、邪魔な物でしかないなんて……

あ、エルフの耳もそうなのかな？　音が少しだけよく聞こえる、っていうくらいだよね。

現実はホントに夢が無い……

「こうして比べてみるとさ、エルフが優遇されてる、って言うのかな、何か、うーん……。うまく言えないや」

「個人個人で見るとそうなのかもな。でもエルフはそこまで数が多くないからなぁ。リーフエンドが最強の国って言われてるのも、ここにエルフが多く集まっているからだろ？　全体で見れば狭い範囲での事さ」

あー、そうなのかな。攻め入られても負けることはまず無いが、こちらから攻め込んでいく人もいないのか。

「この国が最強と言われる理由は他にもいくつかありますが、姫様がお知りになるには少し早いですね。できましたらその辺りで……」

「おっと。ちょっと話題が悪かったな。シラユキはこんな事考えなくてもいいからな？」

「う、うん。戦争とか、考えたくもないね……」

それでも七百年くらい前には戦争があったんだよね。関連の本は全部仕舞われてしまってるんだけど……

「強さで言うなら竜人だってそうじゃないか？　魔法が一切使えないって言うけど、空飛んだり、ブレス吐いたり、個別で能力を持ってたりするんだろ？」

「確かに強めの種族ですね。身体能力は群を抜いてます。ですが、やはり魔法が使えないというペナルティは相当な重さですよ。能力だけで補え切れるものでは無いかと思います」

「変身できるんじゃないの？　ドラゴンとか凄く強そうだよ？」

巨大なドラゴンに比べたら、人なんて蟻の様なものなんじゃないのかな。

「あ、ああ。やっぱり可愛いなシラユキは」

「ええ、本当に可愛らしい。まだ絵本の物語を信じているんですね」

「え!?　私何かおかしい事言った?」

え?　ドラゴンって強いんじゃないの?　強いモンスターの代表格じゃないの?

「確かに攻撃能力は高いでしょうね。ですが、大きいことがそのまま強さに繋がる訳ではありませんよ?」

「実際見てみないと何とも言えないが、多分、いい的だろ」

「的!?　それはさすがに無いんじゃ……」

「目を潰されたらそこまでですから」

「あ」

そっか、つくづく夢の無い話だなぁ……

蟻が象に勝てないのは当たり前の話だけど、蟻がもし、象を倒せる攻撃方法を持っていたら話は別か。

小さくて小回りの聞く蟻にちくちくと削られて倒されてしまうんだろう。

ドラゴンも同じ、いや、こっちの方がひどいかも。同程度の知恵を持つ同士の戦いだからね。まず、真っ先に目や翼を狙われて、後は袋叩きか。一対一の状況でも、見渡す限りの平原、とかでもなければ簡単に逃げおおせるだろう。

正々堂々真正面から、なんて馬鹿のすることか。

「竜人は人の形態だからこそ強いんです。一撃当てれば勝ち、という状況でも、実際当てられなければ意味はありませんからね」

「ドラゴンの形態って荷物の運搬くらいにしか使われてないんだったか？」

「ええ、そうらしいですね。変身後の大きさと同じか、それ以上の大きさの魔物でもいればまた違ってくるんでしょうけど。そんな生物がいるとは思えませんしね」

ど、ドラゴンが運搬ですか。なんて贅沢な？

群がる敵を、薙ぎ払えー！　とかできないんだろうか。大人数で攻め入れば……、ああ！　エルフと同じか！

自分たちから攻めて行こうなんて思いもしないし、攻められても負けることが無い。竜人も長寿なのほほん種族だったねそういえば……

「なんだかなー……」

「あー、しまったな。また夢を壊しちまったか……。ごめんなシラユキ」

兄様はすまなそうに私を抱き上げ、抱きしめてくれる。

「ううん？　これはこれで面白いよ。やっぱり本だけじゃ全然駄目だね」

シアさんがいてくれて本当によかった。さすがに外で五百年も生きてきただけはあるね。

「後は、実際見て触って話しをして、と。まだまだできること、知る事ができるものは沢山ありますよ。本に載っている事など極一部にしか過ぎませんから」

「獣人の人の尻尾は確かに触ってみたいかも。二人は獣人のお友達はいないの？」

失礼になるかも知ないが、あの耳にも触ってみたいものだ。特にネコミミ。

「私はまだこの国に来て日が浅いですし、それ以前に、他種族の友人は正直作りたくはありませんね」

「い、いるにはいるんだけどな、ラルフとはまた違った意味でシラユキには会わせたくないと言うか……」

「変わった人なんだね……。シアさんはどうして？」

「いえ、失言でした。忘れてください」

「え？　あ、うん……」

もしかしてシアさんってエルフ以外は嫌い？　そういえばラルフさんに対しても凄く冷たい対応だったしなー

「まあ、いいか。話を戻すが、会わせてやってもいいとは思うんだけどな。う、うーん」

「ど、どんな人なの？」

兄様がここまで私に合わせることを渋るとは……もの凄く凶暴な人だったり？　怖い人なのかな？　でも兄様のお友達なんだよね。

「そいつ、女なんだがな、一言で言い表すと」

「表すと？」

「エロイ」

「会いたくない！！！」

「だろ？」

その人も間違いなく兄様のお友達だよ！　きっと親友クラスのお友達だよ！　さらにきっと巨乳だよ！　もげろ！

「ラルフの奴が運良く受けれた、一晩の相手募集依頼の依頼主でな」

「きーきたーくなーいー！！」

ラルフさん何受けてるのよ！　何で友達に……。！？

「る、ルー兄様……、ま、まさか……、嘘！？」

「お、おい。どうしたシラユキ。俺がどうした？」

「う、浮気相手！？　そ、そんな！　あ、あ、ユー姉様に知らせないと！！」

「はあ！？　何でそうなるんだよ！」

「シアさんお願い！」

「お任せください！！　私は面白くなる方へ付きます！」

「待て！！　うお！？　速え！　もういねえ！！」

「ルー兄様が浮気なんて……」

「追いかけようにもシラユキをこのままにして行くわけには……。俺はどうしたらいいんだー！！！」

シアさんが連れてきた姉様は、特にいつもと変わらず落ち着いていた。兄様を信じきっているからね、愛だね。シアさんはつまらなそうにしていたよ。

襲われかけた事は何度もあるが、全部断っているらしい。それでもやっぱり兄様は兄様、胸には触ったことはあるみたい。やはり巨乳だったか……

その４４（後書き）

今回は今さらではありますが、簡単な種族紹介でした。
また説明回ばかりが続いている気がする……

その45

「ごめんなさい、ルー兄様。えへへ……」

「何で怒られてるのに嬉しそうなんだこいつは……」

兄様に怒られてしまった。別に私、Mじゃないよ？

私の早とちりのせいで、兄様姉様には迷惑を掛けてしまった。ちゃんと考えてみたら、兄様が浮気なんてするわけも無いね。姉様一筋、本当に心から愛している。熱いわ。

「そんなに怒らないであげて、お兄様。シラユキだって私のためを思ってしてくれた事なんだし」

「ん、そうだな。俺たちに限って、この程度の事で大事になるなんて無いし、これくらいにしておくか。シラユキも、もう少し落ち着いて考えるようにな？」

あっさり許されてしまった。もう少し怒られてみたかったが、相変わらず甘いなー

「うん。ごめんねルー兄様。ユー姉様も」

「私は怒ってないわよ。心配してくれてありがとね？」

ほっぺグニグニ。姉様これ好きだな……

「にゅにゅにゅ……。えへへ」

「さっきからどうした？　やけに嬉しそうじゃないか」

ずっとにやついている私を不思議に思ったのか、兄様が聞いてきた。

「私、ちゃんと怒られた事ってあんまり無いから。まだ二回目？」

一度目は例の飛び降り未遂。あの時は、姉様が慌てていただけで怒られた内には入らないかもしれないが。

「だってシラユキって、我侭言わないし、言われた事は素直に聞くし、約束も絶対守る子だからね。怒る事自体ないのよ」

「だよなー。ユーネが小さい時なんて、母さんに怒られまくってたのになあ……」

え？　姉様が怒られまくる？　母様に？　どっちも想像しにくいな……

「こ、子供だったからね。今は全然大丈夫よ？　私の場合はお兄様に甘やかされて育ったからね、ちょっと、我侭だったのよ」

「ユー姉様が我侭？　う、うーん……？」

子供の頃からラブラブな二人しか思い浮かばない。兄様にもロリコン疑惑が出てしまうのでやめておこう。

「そうそう。ちょっと魔法教えたらすぐにガンガン使い始めたりなー。しかも主に攻撃魔法なんだよ」

攻撃魔法を乱射する子供魔法使いですか。なにそれこわい。

「それは、お父様とお兄様が攻撃魔法ばっかり教えてくれてたからでしょ？」

「お前が教えて欲しいって言ったんだよ。最初に使えるようになった魔法が火炎放射だしな。あの頃は毎日火事ばかりだったよ」

森の中で一番使っちゃいけない魔法を真っ先に教えるとは、何を考えてるんだ。

「教えちゃう父様とルー兄様がいけないんじゃないかな……」

子供に攻撃魔法とか教えちゃ駄目だよ、もう……

「言ったろ？　我侭だったって。一つ教えたらもう終わりさ。次を教えなければ家が燃えてなくなっちまう」

「あはは……」

計画通り、にやり。ってやつか！

さすが姉様、まず森と家を人質にとれる魔法を教えてもらうとは、子供の頃から頭良かったのね。

「うう……。お兄様が私を甘やかしすぎたのがそもそもの原因なのよ？」

「シラユキなんて、家族全員どころか国民全員に甘やかされている訳だが？」

「もう！　いじわる言わないでお兄様！！」

おお！　姉様可愛い！　これって単にイチャイチャしてるだけなんじゃないのか？

「ははは、悪い悪い、もう言わないよ。ごめんなユーネ。お前が可愛すぎるからいけないんだぞ？」

怒る姉様を抱き寄せて、優しくささやく兄様。

「そ、そんな……。お兄様の……バカ……」

一瞬で、兄様にしなだれかかる様に大人しくなる姉様。

抱き合う二人、見つめ合う二人。そして近づく唇……

「あー、何か暑いね？　風送ろうか？　ルー兄様、ユー姉様」

ぱたぱたと手で扇ぎ、魔法で冷風を二人に向かって送る。クーラーの魔法とでも命名しようか。

まったく……。二人の世界に入ると私がいることをすぐ忘れるんだからこの二人は……

「さ、寒い！　こらやめろ！　っていつの間にこんな魔法を！？」

「寒い！　お兄様暖めて！！！」

さらに抱きつき、体の接する面積を増やそうとする姉様。気分は北風と太陽の北風だ。

何となくやってみたらできてしまったんだが、これは便利そうだね。いい魔法が出来てしまった。

「シラユキストップ！　寒い！　じゃない！　いきなり教えてもいない魔法を使うんじゃない！！」

「あっ！」

言われてすぐに魔法を止める。や、やっちゃった……

「あ、ご、ごめんなさい……。う……。ごめんなさいぃ……」

勝手に魔法を試さない事って毎日言われてたのに……

「え？　シラユキ？　ちょ、泣かないで！　お兄様言い過ぎよ！！」

「し、しまった……。ちょっと言葉が強かったな。怒ってないぞシラユキー？」

こういう時はもっと怒ってよ！　でも、もっと甘やかして欲しいとも思ってしまう。

「ああ……、久しぶりに泣かせちゃった……」

姉様が落ち込んでいる。私が悪いんだから気にする事無いのに……

「うーん……。いまのはちょっと過剰反応しすぎたか。あれくらいの魔法なら、いや、シラユキに魔法の程度なんて分からないか……」

「うん。止めようにもこの子、一発で成功させちゃうし、詠唱破棄が基本になっちゃってるから、何を試そうとしてるかも全く分からないのよね」

「ご、ごめんなさい……。もう絶対に勝手に使ったりしません……」

もう駄目だ。何が駄目か分からないけどもう駄目だ。

「うわ、敬語だよ。お、怒ってないからな？　落ち込むなよ？　気にするなって言っても難しいと思うけど」

「この子結構気にしちゃうタイプだからね。ま、魔法使うのやめちゃいそう？」

あ、その手があった。

うん。魔法なんて、もう使うのやめればいいんだ。これで無駄に心配させる事も無いよ。よかったよかった。

「魔法を使うのをやめよう。そうすればお二人にもう心配は掛から

ない、というお顔をしています」

ここまで黙ってたシアさんが急に口に出す。だから何でそこまで具体的に分かるのよ！？

「シラユキ！？」

「お、落ち込みすぎだろ！？　どうしたんだよ！？」

そりゃ落ち込むよ。だってさ……

「だって、二人とも大好きなんだもん……。迷惑なんて、心配なんて掛けたくないもん……」

ああ、せっかく治まった涙がまた出てきちゃったよ。

「じゅ、重症だなこれは……。一体どうした？　子供なんだから迷惑なんて気にするなよ」

「恐らく、約束を破ってしまった事、ではないでしょうか？」

「ええ！？　一回、それも、あんな程度の事で！？　ま、まじめ過ぎるわよ！」

一回とか、程度の問題じゃ無いんだよ、姉様。

「それだけお二人、いえ、皆様の事を思っている、という事ですね」

説明しないでよ恥ずかしい。

「うん。大好きなみんなに心配なんて掛けたくないよ……」

「何この子、心優しすぎる。天使なの？」

危ない！　吹くところだった！！　この空気で拭いたら台無しだよ！

ごつん、と、私の頭に拳骨が落とされた。

「え……？　痛い……」

い、今の？　兄様が？

「お兄様！？」

「ルーディン様！？」

「こ、心が痛え……。じゃなくてだな、シラユキ。お前が抑えてどうするよ？　違うな、お前だけが、か」

叩いた兄様本人が一番ダメージを受けているようだ。

うん？　私だけ？

「そんなの優しさじゃねえぞ、ユーネ。ただの自己犠牲だろ。シラユキだけに我慢させろって？　それが俺たちのためになると？」

「うん、そうね……。ちょっとシラユキが可愛すぎて考えが浅かったわ」

姉様は私に向き直り。

「ねえ、シラユキ。これからはもっと、もっと私たちに甘えなさい。我慢なんてされるより、我侭放題された方が嬉しいのよ？　お姉ちゃん命令！」

「我慢なんてされたら逆に悲しくなるわ。お前になら分かるだろ？もっと好き放題やれって。やりすぎたらちゃんと叱ってやるからさ。お兄ちゃん命令だ」

「私が常にお側にいます。誰にも心配など掛かりませんよ？」

「ユー姉様……、ルー兄様……、シアさんも……。ありがとう……。大好き！！！」

とりあえず一番近くにいた兄様に飛びつく。

ああ、もう！　大好きだこの家族！！！

「あ、お兄様ずるい！　私も！」

「その次は是非私にもお願いします」

「よかった、丸く収まったみたいだよ。シアもすっかりお姉さんだね。でも、姫が我侭って、全く想像もできないんだけど。ねえ、フラ、ン？」

「ううううう……、いい話ね……。私もシラユキ抱きしめに行きたい……」

「ああ、フランってこういうのに弱いよね」

その４５（後書き）

予想通り、ピックアップ圏外へと落ちていました。
み、短い夢だったなあ……

その４６

「ねえ、三人とも。ちょっと聞いてもいいかな？」

疑問は聞いて解決するに限る。メイドさんズに聞くことにしよう。

「ん？　どうしたの、姫」

「え？　何？　この前の続き、聞きたくなっちゃった？」

「はい。何なりとどうぞ。フランのお話はその後聞きましょうか」

「聞かないよ！？」

ホントはちょっと聞きたいんだけどさ、十歳にはまだ早いよ……

「我侭ってどう言ったらいいの？」

「ど、どうって……、姫？」

どこまでが我侭になるんだろう？　大抵のお願いは聞いてもらえちゃうしなー

「簡単よ。やりたい事、欲しい物を遠慮しないで言えばいいのよ」

おお、さすがフランさんだ。旦那さんの前では我侭言ってたりするのかもしれない。

「聞き入れられない場合でも、諦めずに何度も言ってみたり、ですかね」

なるほどなるほど。

「それで、何て言えばいいかな？」

「駄目だこの子、根本的にズレちゃってるよ。シラユキのやりたい事、欲しい物だってば」

あ、そうだよね、あはは。

やりたい事……、欲しい物……。

「う、う？　うーん……」

「え？　もしかして、無い？」

「いやいや、さすがに何かあるでしょ」

「何でも言ってくださいね」

あ、あれ？　特に無いぞ……？

「どうしよう……、無い、かも……」

「えー！？　な、何かあるでしょ？　してみたいけど危険な事とか、食べてみたいけど高いものとかさ。ああ、逆にまずい物を残したいとか、今まで無かった？」

「危険な事なんてしたくないよ。食べ物だって毎日おいしいものばかりだし……」

考えてみたら本当に無い。跳躍魔法は本当に危険だから我慢以前の問題だし、食べたい物と言われても……、苺くらいか？

「甘やかされすぎてそれが普通になっちゃってるとか？」

はっ！　それか！　うわ！　まずいよそれ！
このまま外に出たら、私って超我侭姫なんじゃ……

「甘える甘やかすを抜きとして、姫様が私たちに我侭を言った事、あります？」

「そりゃあ、あるんじゃない？　例えばさ……。……？　フラン、ある？」

「ちょっとまって思い出す……。……？　レン、ある？」

「ありませんね」

即答！？　メアさんもフランさんも無いの！？

「わ、私って、我侭放題のお姫様じゃなかったの？　ちょ、ちょっと待って！　私も何か思い出してみるから！」

何か、何かあるはずよ。我侭を我侭と感じないほどに甘やかされてたのよきっと……

魔法を覚えたいって言った時はどうだったかな。五歳だったよね。ああ、父様と姉様が、簡単な物一つだけならいいって教えてくれたんだっけ。超便利魔法ライトボールだ。

確か、魔法なんて使えなくてもよくね？　って言う流れになっちゃって、十歳からでもいいから教えて欲しいってお願いしたんだよね。それで一つだけは教えてもらえたんだった。

あれ？　元々父様が一つだけなら教えるって話だったかな？　こ、これは我侭じゃないのか……

つ、次！　そうだ！　しつこく冒険者と冒険者ギルドの事聞いてたじゃない。これは我侭だよ！

「あった！　あったよ我侭！」

「そんなに考え込まないと出てこないんだね……。それで？」

あれ、反応が……？　この話、すでに飽きられてる！？

「冒険者に会ってみたいとか、冒険者ギルド行ってみたいって、何回も言ってたよ、ね？」

ふ、不安になってきた……。これが我侭じゃないとか言われたら、

もう無いよ……

「あー、確かに言ってたね。姫って冒険者に憧れを持ってたんだっけ？」

「憧れというか……、何かさ、カッコいいイメージがあったんだ。ロマンを、冒険を追い求める者、みたいな感じでね？」

実際のところは、家も家族も無い、その日を必死に生きてる人たちだったんだが……

「そういえば、大泣きして帰って来てたよねー」

それは忘れて！！

「でも、そんなに言ってたっけ？　我侭って言うほどさ」

「え？」

「そうですね、我侭と言える程何度もせがんでいた覚えはありませんね」

「だよねー。シラユキってさ、相手の事を思いやりすぎてた子だったからね。遠慮気味と言うか、一回駄目って言われたら、次に話題に上るまで自分から言い出した事って無いんじゃない？」

「ああ！　そんな感じよね。思い出したかの様に自然に言ってたのかも。多分実際思い出したから言ってみた、とかなんじゃないの？」

これも我侭じゃなかった！　むしろ遠慮してると思われてた！！

あっれー、おかしいな……

「ふふ。ホントにいい子だよね、この子。私もこんな子供欲しいな……。エッチはあんまり好きじゃないんだけどね、頑張ってみようかな」

フランさんに抱きしめられる。何かいつにも増して優しい抱きしめ方……

何か凄いこと言ってる、けど、フランさんはエロフじゃなかったのか！！！

「あれ？　フランって前に好きって言ってなかった？」

「うん。口でしてあげるのは好きなのよ。挿れられるのはちょっとね。何か、あんまり気持ちよくなれないし」

「そうなんだ？　私はまだだから分かんないなー。相手もいないしね……」

や、やはりエロフだった！　私の前でそういう話やめてよう……

「二人とも姫様の前で……」

「え？　あ！　シラユキ真っ赤になってる。可愛いわー、ホント」

「姫も意味は分かるんでしょ？　こういう話、慣れておいた方がい

いって」

ガールズトークってやつだよね。分かってるんだよ。私だって、その、大人になれば、その、ごにょごにょ……

「姫様にはまだまだ早いと思いますよ。五十程になってからでも遅くは無いです。興味を持たせすぎてしまって。その、そういう事を始められでもしたら……」

そ、そういう事って何!?

ふう……、確か、五十歳くらいで初潮くるんだよね。ホントにのんびりとした種族だよ。

うーん、エッチか。私は父様か兄様とすることになるのかな……。

!?　な、何考えてるんだ私はー!!

「レンも実はこういう話好きなんだよね」

「ええ!?」

「ちょ、ちょっと、フラン!」

い、意外すぎる!　シアさんはそういう事と縁の無さそうな人に見えるのに!　可愛い女の子とならいくらでもありそうに見えるが……

「ユーフェネリア様も入れて四人で結構話してるんだよ?　姫も早く参加できるといいね」

あ、それはちょっと羨ましいな。でもこういう話はねぇ……

「やっぱりまだ恥ずかしいよ……。でも、うん、興味は、あるかな」

「姫様!?　いけません!　姫様はいつまでも清いままでいてください!!!」

「固い事言わない。姫って好きな人、とか、考えたりしないの？」

「えっ！　好きな人？」

「え？　姫様のお好きな方、ですか？」

「いるよね、シラユキ？」

「えっ！　えっ!?」

私の好きな人？　え？　フランさんの様子からするといるのかな。

え？　自分で気づいてない？

「だっ、誰ですか！　姫様!!」

「だっ、誰なの!?　フランさん!!」

「誰だと思う？　メア？」

何この伝言ゲーム。

「何で私？　ま、いいか。ルーディン様じゃないの？」

「へ？　ルー兄様？　ルー兄様は兄様だよ？」

兄様のことはそれは、好きだよ。大好きと言ってもいいね。でもそれって家族としてじゃない？　さすがに異性としてなん、て……

私ハイエルフじゃん！　さっきも考えたじゃん！　身内恋愛ＯＫ、と言うか推奨の種族だよ！！

「だよねー。シラユキのルード様見る目って、恋する乙女の目だよね」

「うんうん。将来はユーネ様と取り合いになるの？　それとも三人で仲良く？」

「ああ、よかった……。ルーディン様でしたら安心してお任せできますね」

姉様と兄様を取り合う？　それは嫌だな。恋する乙女の目？　そんな目で兄様のこと見てたんだ私……。いや、好きだけどさー、大好きだけどさー……

私は兄様が好き。兄様は姉様が好き。姉様は兄様が好き。私お邪魔じゃないかなー。でも、兄様の事だから、二人とも愛してくれそうだよね。姉様が正妻、私が愛人、とかね。

でも異性として好きとか自分じゃ分からないね。確かに兄様は、強いし、カッコいいし、優しいし、実は頭もいいし……。完璧超人？　おっぱい星人はマイナス要素か。

兄様姉様はいつもラブラブでいいよね。私もあんな風に兄様と見つめ合ったりしたら……

「シラユキってお兄様の事、好きだったのね……」

！？

「ユー姉様！？」

い、いつのまに！？　き、聞かれちゃった？　どどどどうしよう……

「何慌ててるの？　結構前からいたんだけど……。フランが口ですぐのは好き、とか言ってる辺りから」

それっていつから！？　結構最初の方だっていうのは分かる。全部聞かれてるー！！！

「私は口でするのはあんまり好きじゃないのよね。お兄様のでもね。でもしてくれって言われると、断れないのよねー」

ひゃあ！　姉様まで！　このエロフどもめ！！　そんないい笑顔で言っても説得力無いよ！

「それで、どう？　お兄様の事、好きになっちゃった？」

「しゅ、修羅場よ！」

「フラン！　下がりなさいって！　こういう話好きなんだから、もう……」

「うーん……、よく分かんない。ルー兄様のことは好きだけど、それは家族としてなんじゃないのかな」

「ふふ。まだそれでいいんじゃない？　まだ十歳なんだし。子供を産める体になってからでも遅くは無いわ。成人してもしょ、こほん。男性経験のない人の方が多いのよ？」

何か、姉様、普通だな……。いつも通りというか、全く動揺すらしていないね。

「私がルー兄様のこと好きになっちゃったら、ユー姉様、怒らないの？　嫌じゃないの？」

「え？　どうして!?　あれ？　もしかして私のこと嫌い!?　ちょ、ちょっとそれは、ええ!?」

「まままま待って！　落ち着いて！　大丈夫！　私、ユー姉様のこと大好きだよ!」

「あー……、焦ったわ。このまえの飛び降り未遂以上に焦ったわ……。あら、涙が」

半泣きだよ。私に嫌われてるかも、という事の方が重要なのか？

「お兄様を好きになってもいいと思うわよ？　いいじゃない、三人

で恋人同士っていうのも。一人の男性に恋人は一人だけ、なんて決まりは無いのよ？」

さすが姉様だ……。私はまだ人間としての考えが抜けてないよね。いや、エルフでも普通一人には一人だろう。ハイエルフだけの考え方、でもないよね？　ハイエロフの考え方か！！

「お兄様も私もシラユキも、みんな好き同士ならいいのよ？　私はもう兄様以外とは絶対にしないんだけど、シラユキはお父様とだってしてもいいのよ？」

「と、父様と？　さ、さすがに……」

「一緒にお風呂入ってれば、自然とそうなっちゃうと思うけどね。私とお兄様もそうだったし」

「え？　え？」

「私、初潮来てすぐお兄様に襲われたのよ？　まだ五十前だったかな」

「え？　わ、わ！　や、やめ」

「私が生まれてからはずっと誰ともしてなかったみたいだしね。私がもうできる体と分かった時にはもう、凄かったわ……」

「や、やめてー……」

「あ、でも勘違いしないでね？　私もずっとお兄様としたかったんだからね？　誘ったのは私からだし。ああ、思い出したらお兄様と

したくなってきちゃった……」

「はぅぅ……」

「初めての時の事、聞きたい？　ホントに凄かったのよお兄様」

「あ、あの……。ユーフェネリア様、その辺りで。姫様が倒れてしまいそうです」

「あ！　ご、ごめんね？　シラユキにはまだちょっとだけ早かったかな？　でも後四十年くらいよね。その時になったら、お兄様に優しくしてもらいなさいね？」

ルー兄様、に、優しく、して、もら、う？

「よ……四人ともエロフよ！！！」

「あら、嬉しい」

「うん。ありがと」

「わ、私も？」

「ありがとうございます」

「あれえ！？」

「姫様、エロフは普通に褒め言葉ですよ？　女性らしい、素敵な、魅力的な、エルフ。といった意味ですね」

「褒め言葉！？　い、いやらしいって意味じゃないの！？」

「エルフの女性にいやらしいは褒め言葉よ？」

「それは嘘だっ！！！」

その４６（後書き）

エロフは……、褒め言葉だ！！

こんな会話をさせるつもりは全く無かったのに、どうしてこうなった！

その47

「うーん……。うーむむむ……」

「何かシラユキがこっち見て唸ってるんだが……。俺、何かしたか？」

「ふふ。そうね、お兄様が素敵過ぎるのが原因かもね」

「何だよそれ……。ユーネに言われると嬉しいな」

「お兄様……」

ええい！　いつもいつも目の前でイチャイチャしてー！　はっ！？　まさかこれは、やきもちなのか！？

なんか違う気がするよ……

「ルー兄様ー」

「どうしたシラユキ？　何かあったのか？　悩みなら俺たちが聞くぞ？」

「ちょっと抱っこしてほしいな」

「あらあら」

ちょっと試しに甘えてみるか。しかし、姉様は嬉し楽しそうだな……

「何だ、甘えたいのか？　ほれ、来い来い」

「うん！」

兄様に駆け寄り抱きつく。そのまま抱き上げてくれる兄様。

やっぱりこれはいいわー。兄様大好きだわー。でも、やっぱり違うね、これは家族としての好き、だ。

「ルー兄様、大好きー！」

疑問は解決した、後は全力で甘えよう。とりあえず首に抱きついて頬擦りする。

「おいおい、どうしたんだ？　急に。今日はやけに甘えん坊だな」

「か、可愛い、可愛すぎる……。後で私もね？　シラユキ」

「うん！」

兄様も姉様も大好き！！

「昨日話してたんだけどね、シラユキってお兄様の事好きみたいなのよ。それを確かめてたんじゃないかな？」

「うんうん。やっぱり家族としての好き、だねー」

そうでなければ抱きついたりなんて無理無理。

でも、兄様ならいいな、とも思ってしまう。だって本当に大好きなお兄ちゃんだもんね。

「ああ、なるほどな。でも、ごめんなシラユキ、俺はユーネ一筋なのさ」

告白もしてないのにふられてしまった。カナシイワー

「うわーん、ふられちゃったよ姉様ー！」

「おいでおいで、お姉ちゃんが慰めてあげるわね」

「姉様大好きー！」

さっきと同じように姉様に抱き上げられる。

この二人はずっとこのままでいて欲しいな……。二人に子供ができるまでは甘えさせてもらおっと。

「あーあ、あっさり終わっちゃったよ……」

「姫の初恋はまだまだかー……」

「私としては、このままルーディン様に決めて欲しいものなのですけど」

フランさんはとても残念そうだ。

やっぱりからかってたんだね。まったくこのメイドさんたちは……

「後百年もしたら考えも変わるかもね。好きになっちゃったらちゃんと言うのよ？　私もお兄様説得してあげるから」

「本人の前で言うなよ……。でも、そうだな。本気で俺の事を好きになってしまったんなら、その時は覚悟するか」

百年先のことなんて想像も出来ない。でも、その可能性は充分あるね、兄様ホントにカッコいいし。

「父様の事好きになるかもしれないしねー。もしかしたら他種族の人とだって」

「それは駄目よ」

「え？」

みんなから笑顔が消えた？　わ、私また何かやっちゃった……？

「父様の事？　他の種族の人の事？」

この沈黙には耐えられない！　勇気を出して聞いてみた。

「教えちまうか。でも、言葉を慎重に選ばないとな……」

「そうね……。ね、シラユキ。他の種族の人だけはやめなさい」

さっきまでの優しい笑顔はどこへやら、みんな真剣な表情になってしまった。

「ど、どうして？」

どうしてだろう？　私が好きになった人なら、みんな応援してくれそうなものなんだけど……

「エルフはね、ええと、うーん……」

「エルフ、ハイエルフは寿命が長い。人間、獣人は長く生きても百程度です」

「シア！　そんなストレートに！」

いい淀んでいた姉様の代わりに、シアさんがはっきりと、ストレートに答えてくれた。

「ああ、うん、知ってるよ。もちろんその意味も分かってる。だからラルフさんはエルフの女の人に嫌われてるんだよね？」

人間は先に死んでしまう。エルフが成人を迎えるくらいの時間も生きてはいられない。

気軽に求婚なんてしていい訳が無い。残される人の絶望は、一体

どれ程のものになるんだろう……

「シラユキ？　じ、自分の年、ちょっと言ってみて」

姉様が、信じられない、とでも言うように私の年を再確認する。

「うん？　十歳だよ？」

あはは。十歳でこれはさすがに無いか。でも分かっちゃったんだからしょうがない。

町から戻った後、どうしても気になったから考えたんだけど、意外にすぐ答えは出た。

「十歳でそんな答えだすんじゃねえよ……」

「あってるよね？」

「ちょっとこっち、こっち来なさい」

姉様は自分の腿をポンポンと叩く。

「うん」

姉様の膝の上に座る。優しく抱きしめてくれる姉様。

「答えが出ちゃった時、泣かなかった？　悲しくなかった？」

「ううん？　確かに悲しい話だとは思うけどね。私、多分まだ子供だからさ、そこまで理解できてないんだと思う」

その相手が死ぬまでの数十年。その数十年を精一杯愛し合えばいいんじゃないかな？

「そっか……、まだ分かってないのね。……シア、ひどい役、お願いしていい？」

「はい。お任せください」

シアさんがゆっくりと話し出した。

「エルフは他種族では人間種族のみと子を成すことができます。これは姫様も知っていますね？」

「うん。ハーフエルフが生まれることが稀にあるんだよね」

大抵は生まれる前に相手が死んでしまうのだが。

「まずは子供ができない、できにくい、という問題。これだけでも充分絶望できる問題です。他の種族とは生まれる可能性すらありません」

「好きな相手が一緒なら子供なんて、っていう考えは駄目？」

「駄目ではありませんよ。実際に他の種族と結婚するエルフは、その覚悟をしています」

そうだよね。好きになっちゃったら、愛してしまったのなら、全部覚悟して一緒になるんだよね。

「姫様、先に謝っておきます。泣かせます。申し訳ありません」

「え？　ええ！？」

お、怒られる！？

「ご、ご家族の方が全て、自分より先に亡くなってしまったら……」

うん？　家族がみんな、私より先に……？

体を横にして、姉様の顔を見る。

姉様が、死……？

「し、シラユキ？　あ、あ、ちょ、待って、泣かないで！」

「姉様死んじゃやだーーー！！！」

ああ、甘く考えてたね。み、身内の死、か……

だ、駄目だ。絶対に耐えられない。百年生きようが、千年生きようが、絶対に耐えられない。

姉様に全力で抱き付く。抱き付くというよりしがみ付くと言った方が近いか。

この温もりは絶対に、絶対に失いたくない！！！

「あ、わ！　ちょっと！　シラユキ？　大丈夫よ？　お姉ちゃんはシラユキを置いて死ぬなんて事はしないわ。絶対よ。だから泣き止んで……」

「お、おい、大丈夫か？　泣き方がいつもと全然違うぞ……」

「やだ！　みんな死んじゃやだ！！！　シラユキを置いて行かないで！！！」

約五年ぶりの暴走か、懐かしいな。ごめんねみんな。落ち着くまで思いっきり泣かせて……

「自分の事名前で呼んでる……？　懐かしいわね……。四歳までは自分の事名前で呼んでたのよね」

姉様が優しく、とても優しく撫でてくれながら話している。

「ああ。たった六年前なのにな。やけに懐かしく感じるよ……」

兄様も優しく撫でてくれる。

ああ、分かった。本当の意味を理解したよ。

エルフが世界中に増えていかない理由が。

「落ち着いた？　ああ、まだ泣いてる……」

「ふっ、ううう……、ごめんなさい姉様。もうちょっと抱きついてたい……」

みんなが私より先に死ぬなんてありえないとは思う。でも絶対じゃない。怖いよ……

「それでは続きを。ああ、ご心配なく。その後、涙も吹き飛ぶ面白話もしますから」

「何話すつもりだよ……。だが、まあ、頼んだ。二百も生きていない俺たちには無理だ」

面白話？　き、気になる！　まずはシアさんのお話を全部聞こう。

「姫様には多分お分かりになられたと思います。伴侶を亡くしたエルフのほぼ全てが、自ら死を選びます」

「ま、またそんなストレートな！　もうちょっと言い方、あるでしょ！？」

「お、落ち着けユーネ。分かるなシラユキ。愛する人に先立たれる絶望が、どれ程のものか」

「もし人間寄りのハーフエルフが生まれたら、生まれてしまったら。その子供にも」

「シア！！！」

「！　す、すみません……」

「だ、大丈夫だよユー姉様。大丈夫じゃないけど、大丈夫」

「どっちだよ。まあ、バレンシア、その辺にしとくか」

「は、はい、話しすぎました……」

人間寄りのハーフエルフの寿命は約百五十程度。愛する伴侶の次に、またすぐ愛する子供まで亡くしてしまうのか。ハーフエルフはまず子供は作れない、孫もできないんだ。

それは、死にたくなるわ……

「そ、それでは、姫様の涙を吹き飛ばすような面白話、を……」

「あ、面白くないんだその話……」

「どうする？　聞くか？」

嫌な予感はするけど気になる、ここは聞いておこう。それでまた泣かされそうだが……

「うん。シアさんお願い」

「ああ……、言うんじゃなかった……。姫様を泣かせてしまった懺悔のつもりの告白なのですが、また泣いてしまわれるんじゃないかと……」

「いいから言ってみろ。まだ半泣きだしな、全泣きに戻るだけだ」

そういう問題じゃないよ兄様。

「はい、実はですね。私も、その、若い頃に人間の方と、その……」

「人間と……？　ええ!?　し、シアが!?」

「え!?　シアさん結婚してたの!?」

涙吹き飛んだ!!!

「お、ホントに泣き止んだな。相手は人間か……」

「え、ええ。すぐに先立たれてしまったのですが。冒険者仲間のうちの一人でしたからね……、共に過ごした期間は十年もありませんでしたよ。もちろん子供もできませんでした」

シアさんが赤くなってる!?　珍しいってレベルじゃない!!!

カメラが無い事が悔やまれる。

「し、シア？　それ結構どころか、かなり重い話じゃない？　だ、大丈夫？」

「そ、そうだよシアさん。大丈夫なの？　思い出しちゃったんじゃ……」

ああああ、、また泣きそうだ私。悲しすぎるよ……

「以前にも一度言いましたよね、姫様、私は変わり者なんです。確かに当時は絶望したものですが、死を選ぶ、という考えは出ませんでしたね。そもそもその方を愛している、という訳ではありませんでしたし。ただお互い寂しさを埋め……、ここまでにしましょうか」

「あ、うん！　もう聞かないわね！　何か凄い暗い話なんじゃないそれって？　ああ！　答えなくてもいいのよ！！」

「そうなの？　私泣いちゃう？」

「ええ、泣き出して、一週間は私にぴったりとくっ付き離れないのでは、あ、いいですねそれ、詳しく話しましょうか」

「やめて！」「やめて！」

シアさんは凄いね、強いね。

リーフエンドで、のほほんと五百年生きていくのと訳が違うね。

外での五百年、か……

その４７（後書き）

人に歴史あり、とはよく言ったものですが、実際に数百年も生きる種族がいたら、その人の歴史は凄い事になりそうですね。

前回のエロフからこんな話の流れになるとは……

その４８

「シーアさん！　また町に行こ？　今日はラルフさんが試験から帰ってくるんだって」

「生きていれば、ですね」

「相変わらずラルフさんには冷たい！」

十二歳になりました！　背は全く伸びていません！　泣けるわ……

十一歳になって少し経った頃から、シアさんと二人だけでも町に行ってもいい事になった。二人だけの方が行き帰りが早いからね。それに、シアさんさえいれば私の身の安全は確約された様なもの、護衛対象が一人の方が守りやすい、と言う事もあるかも。

買い物した商品などは二人では持って帰るのが大変なので、後日国の者が取りに伺います、と、ちょっと王族っぽいことをしている。これは慣れないね。片手に提げれるくらいの荷物なら持って帰れるんだが……

そういえばお金も後払いなんだよね。でも、無駄遣いして怒られるような事はしていない、と思う。相変わらず小市民感覚は抜け切って無いね。抜けるとも思えない。

冒険者ギルドにもあれからよく通っている。顔見知りの冒険者の人も何人かできてしまった。獣人の人の耳と尻尾にも触らせてもらったよ。

少し前、ラルフさんがCランクに上がる試験を受ける事になった。Cランクから先は全て試験が必要らしい。EからDに上がる場合は受付の人が適当に付けてしまうみたいだ。それでいいのか冒険者……

試験の内容は、単独での討伐依頼の成功。実際の依頼ではなくギルドの用意した物らしいが、野生動物を依頼も無く殺してしまうのはどうなんだろう？　気になって聞いてみたら全員から撫で回された。何故だ。確かに放っておいては危険なのかもしれないが……

今日は試験が終わり、帰って来る予定日だ。順調に行けば、の話だけどね。

「もし、死んでしまっていたとしてもあまり気を落とさずに。ラルフさんですし」

「不安になるような事言わないでよ、もう！」

でも、不安は不安だ。ラルフさんは初めて会った当時、すでにCランクでも通じる実力があったらしいんだけど、絶対大丈夫という保障は無いよね。

何が起こるか分からないのが現実だ。討伐の対象以外に、絶対に勝てないような、出会ってしまったら終わり級の魔物に出くわす可

能性もゼロではない。

「よし！　行くのやめようか！」

やっぱり怖いわ。死んでたらその情報だけ後で聞かせてー！

「姫様は強くなられたのか、弱くなられたのか……」

「好奇心だけで動く様なことが無くなっただけだよ。でも弱くなったのかもね」

正直このままみんなと付き合っていけるか不安だ。だってみんな、私の成人前に、きっと、死んでしまう。

「いえ、きっとお強くなられたのだと思いますよ。十歳のころ、あの話をしておいてよかったと思います」

「あの話？　……ああ、寿命の違いで起こる悲劇ね」

「私としては、できたらあまり、他種族の方と深い関わりを持って欲しくは無いのですけれどね」

「うん、ありがとね。でも、生きていれば絶対通る道なんだしさ、早い遅いは関係ないよ。いっぱい泣いて、いっぱい後悔して、それからまた考えるよ」

もう二度と、森から出たいとも思わなくなるかもしれない。そうなったらそうなったでいいかもね。そこからまた百年も生きれば、考えがまた変わるかもしれない。

私は、ハイエルフ。エルフの王族よ！　人間じゃないからね、考えだって違うさ！！

「姫様まだ十二歳なんですから……」

「あはは。老けて見える？」

「大人びて見える、くらいにしておきましょう。でも、本当にお強くなられましたね」

自分でもそう思うよ。でも、ちょっと早すぎるのかもね。まだ十二だったよ私。人間換算十歳ちょっとだよ。

「お願いします。まだまだ可愛らしい、子供らしい姫様でいてくださいね。できたら一生」

「シアさんってやっぱり小さい子好きなんだよね？　私はストライク？」

最近はシアさんともお風呂に入るようになった、んだけどね。触りまくってくるのよこの人！　まあ、いやらしい手つきではないんだけどね。

「いえいえ、誤解です。姫様の反応が可愛らしすぎてつい……」

多分年々からかいのレパートリーを増やしているんだと思うけど

……

「シアさん、ホントに本当に、その、そっちの趣味の人じゃないんだよね？」

「ええ、姫様以外の女性には全く興味ありませんよ？」

「私にはあるの！？」

それならそれでもいいやと思ってしまう私も、きっと駄目なんだろう。

シアさんのことは、私はいいお姉さん、頼りになるお姉さんとしか見てないんだけどね。これは本当のことよ？

もしかしたら、シアさんに押し負けそうな気もしてしまうが。ふ、不安だ……

エルフは一応同性婚も認められている。でも数は少ない、と言うか殆どいないので、特に決まりなどは無い感じだ。女性同士で子供が欲しい場合は、男の人を襲えばいいらしい。凄い話だよホント……

お爺様お婆様はかなりアバウトな性格らしく、決まりなんて勝手に作れ、の一言だったらしい。でも大丈夫だ、問題ない。みんな家族だしね。

今は母様がちゃんとしているからかもしれない……

「それでは、参りましょうか？」

「また否定しないし……」

「性的な意味ではありませんからご安心を」

「う、うん、信じるよ？　それじゃ、私、まだ速く走ると危ないし。早めに出ようか」

跳躍魔法はできるようにはなった。兄様やシアさんみたいに高く飛び上がって落ちるのは怖いので、低く、短く、でも速く飛ぶ感じにアレンジを加えている。他の人から見ると高速で走っているように見えているんじゃないかな。使い始めの頃は何度も木にぶつかったよ。風を纏ってるからびっくりする程度で済むんだけどね、全力でぶつかると逆に木の方が折れてしまうのがちょっと怖い。人には絶対にぶつからないようにしなくては……

その他の魔法も、日常使う程度の魔法は全て使えるようになった。あまりの覚えのよさ、使いこなす早さに呆れられてしまったよ。目の前で使って見せてもらった魔法を再現してみせただけなのに、みんな驚きすぎだよね。

父様と兄様は、そろそろ自衛のために攻撃魔法を覚えさせようとしているみたいだが、攻撃魔法は怖い。火を灯すのも実はまだ怖いのよ。情け無いね私は……

「お気になさらずに。攻撃魔法など使えるようにならなくとも、姫様は私が一生お守りしますので安心してくださいね」

「また表情を読まれた！？　どうやったらそんな具体的に読めるの

!?」

「メイドですから」

「なるほど！　もういいよ！！」

言い切って走り出す。木にぶつからない様に、避けて避けて、でも速度は維持して、っと。これは集中力がかなり必要なんだよね。

そういえばさっきのシアさんの言葉って、プロポーズみたいじゃない？　できたら男の人に言われたいよ……、男の人と一対一で話す勇気も無いんだけどね。話しかけられても全力で逃げ出す自信がある。

まずいなこれは……。このまま行くと……、シアさんと結婚か！？

「あいたっ！」

他事を考えていたら、木にぶつかってしまった。恥ずかしい！

痛みは無いからいいんだけどね。急に止まっちゃうからびっくりするのよこれ。

「大丈夫ですか姫様？　ふふふ、早速一回目ですね。今日は後何回ぶつかるでしょう？」

「ううう……。目指せ十回以内！！」

「はい！　頑張りましょう！」

始めの内は毎回大慌てだったシアさんだが、もう慣れたものだ。
今では逆にぶつかったときの反応を楽しみにさえしている。ひどいわひどいわ。

その４８（後書き）

今回はちょっと短めですが、十二歳編開始です。
前回から約一年後のお話になります。

その４９

「いたっ！　痛くないけど」

「ニ回目です」

「わぷっ！」

「三回目」

「あうち！」

「よ、四回目ですね」

「わひゃ！」

「可愛い五回目です」

可愛い五回目！？

シアさんは常に笑顔。楽しそうだなー。完全によそ見しながら併走してるよ……

どうやったらよそ見しながら走れるのか、と聞いたことはあるのだが、メイドだからの一言で済まされてしまった。どうやらこれは慣れるしかないみたいだね、練習あるのみだ。

「さあ！　次は私へどうぞ！」

「何で前にいるの！？」

今回の衝突事故回数は十五回。多くも少なくも無いね、微妙だ。

シアさんは数には含まれない。

途中ちょっとした買い物をし、冒険者ギルドに到着。

入り口横の掲示板に目をやると、相変わらず雑務依頼の数は凄い、子供の世話から魔物退治まで、内容は本当に何でもある。何でも屋だなぁ……

町に住んでいる大抵の大人は職に就いているので、アルバイト的なものはやはり冒険者に頼むしかないらしい。大きな町であればあるほど雑務依頼は増えていく。リーフサイドも結構大きめの町だが、これでも少ない方だとシアさんは言っていた。王都と呼ばれるような町になると、同じギルドが複数あったりして、掲示板もそれぞれ二枚ずつあったりするらしい。

中に入ってまず目標を確認、全力で安心する。両手剣は目立っていいね。

「こんにちわー！　ラルフさんの訃報を聞きに来ましたー！」

「この度は、大変面白い結果になりまして……」

「生きてるよ！？　死んでないよ！！！」

いいツッコミだ。元気そうだね、さらに安心。

ミランさんは受付の仕事。今日はいつもより人が多いみたいで、受付に列ができている。何度もギルドには来ているけど、こんなに受付に人が並ぶところなんて初めて見たよ。とりあえず後でテーブルに来てと誘っておく。

ラルフさんを連れて、いつものカウンター近くのテーブルに着く。元々そこに座っていた人たちはシアさんの一睨みで駆逐された。これもいつものことだ。シアさんに睨まれるためにこの席に座っている奇特な人もたまにいるから面白い。でも命は大事にしようね。

「元気出してくださいね」

「片腕くらい無くして帰って来れば箔もついたものを……」

「なんで失敗した事が前提なんだよ！　成功したよちゃんと！　もう俺Cランクだぜ！？」

初めはこのツッコミも怖かったが慣れるとやっぱり面白い。みんなが私をいじるのが好きなのがよく分かるよ。

「ふふふ、ごめんなさーい。それと、おめでとう！　ラルフさん」

「オメデトウゴザイマス」

「おお、ありがとなシラユキちゃん。しかし、メイドさんは相変わらずだなぁ……。ちゃんと土下座して謝ったじゃん、俺」

そう、兄様に理由を聞いたラルフさんは、何と全員に土下座で謝って回った。何というドゲザー。

人間からエルフ、エルフから人間にもそうだが、寿命の差が有る種族の求婚は、本来の意味ともう一つ。

『私と一緒に死んでください』という意味があるのだ。

そんな事を会う人会う人に言ってれば、嫌われて当然だよね。

「お気になさらずに。個人的に嫌いなだけですから」

「気にするよ!?　何でそんなに嫌いなんだよ……。まあ、第一印象が最悪すぎたか」

「シアさんは、他の種族の人はあんまり好きじゃないみたいですからね。別にラルフさんだから、っていう訳じゃないと思いますよ」

やっぱり先に死なれちゃうのは悲しいし、怖いよね。あまり仲良くしておきたくは無いんだろう。

私もきっと、友達の死を経験してしまったら、友達を作ることが怖くなりそうだ。

「個人的に、嫌いなだけですから」

シアさんが個人的に、を強調して言い直した。

フォローをあっさり潰すシアさん、さすがだ。

「メイドさんが個人的にじゃなくて、俺個人が嫌いなのか！？」

「ええ、ですが、お気になさらずに」

「だから気にするよ！！　理由を教えてくれよ理由を……。直せる所は直すからさ」

ラルフさんは相変わらずエルフ大好きらしい、人の好みは早々変わらないものか。シアさんはボケもツッコミもできる貴重なエルフ、じゃなくて、エルフの中でも特に美人さんだからね、なるべく仲良くしたいんだろうと思う。

「そうですか？　では、生まれ直してから来てください。話はそれから、という事で」

「俺全否定！！　く、くそう……」

多分、小さな女の子に生まれ変われば相手してもらえるよ。生まれ変わりなんて無いんだけどね……

受付のお仕事はまだ一区切りつかないみたいだ、もう少しお話を続けよう。

「試験ってどんなのでした？　魔物の単独討伐ですよね？　どんな魔物で、あ、大丈夫だったんですか？」

ラルフさんの生死と試験の内容に気をとられすぎて、怪我の有無の確認はしてなかった。いけないいけない……

「おっと、質問攻めだな。目キラキラさせて可愛いやつめ」

「残念ながら、試験の内容は明かせないんですよ。その土地土地、季節によって変わりますし」

「ああ、プレベアだったよ。Dランクん時に何度かやった相手だし、楽勝、じゃあなかったけど、大きな怪我は無かったぜ。心配してくれてたみたいだな」

シアさんの説明が……。明かしていいんかい。

プレベア？　何故か平地に生息する熊の様な魔物だっけ？　た、単独で熊撃破!?　ラルフさんホントに強いんだ……

「はあ……。明かしても特に罰則はありません。その地域からいくつかの候補から選ばれるだけですしね。生息している魔物の種類がそう簡単に変わる事はありませんから」

「あはは。……うん？　そうなると、簡単そうな試験の町で受ける人が増えちゃうんじゃないの？」

比較的簡単そうな町で、試験だけ受ける人が出るんじゃないだろ

うか？　Cランク相当で、プレベアより狩りやすい魔物だっているんじゃないかな。

「簡単な試験なんて無いよ、ちゃんと考えられてるさ」

「簡単な試験があったとしても、いきなり試験を受けさせる受付はどのギルドにもいないと思いますよ？」

「ああ、その人の人柄や、他の冒険者からの評価、町の人からの反応。実際自分が見て感じて、大丈夫だ、と思わない限り試験なんて受けさせてもらえないんだよ。ミランさんいつもボケーっとしてる様にしか見えないけどな、見るところはちゃんと見てるんだぜ？」

「ギルドの書類の情報だけでは、個人の人柄、本当の実力までは分かる訳もありませんしね」

「あー……。確かに……？」

町の人、先住冒険者からの評判、受付から見た実際の人物像。実力だけではランクアップはできないのか。信頼と実績が必要、と。ふむふむ……

ん？　という事は、ランクアップのためには一定期間、まずは試験を受ける予定の町に留まらないといけないのか？

「試験を受けるのは、大体自分が拠点としている町になりますね」

疑問に思った次の瞬間にシアさんが答えを出してくれた。

「また顔を読まれたよ……」

「もう職人芸の域だな……。俺は十六からこの町を拠点にしてるな。護衛の依頼で他の町まで行く事もあるけど、またこの町までの護衛や配達の依頼があったら、それ受けて帰って来るんだよ」

五年もいれば確かに大丈夫そうだよね。ラルフさん好青年だし、エルフに土下座で謝って回った事もよかったのかもしれないね。それが無ければ試験は受けさせてもらえなかったんじゃないかなと思う。

「す、すみませんでしたシラユキ様。今日に限って依頼の受付が多くて……」

お仕事に一段落ついたミランさんがお話に参加してくる。確かに今日は多かったね、本当に珍しい。

「ミランさんお疲れ様。それじゃ、シアさん。あ、ミランさん、グラス四つお願いしていいかな？」

「はい。少し前を失礼しますね」

シアさんがテーブルにクロスを敷く。

「は、はい！　すぐに用意しますね！」

しまったー！！　もしかして今、命令しちゃった？

つい、いつもメイドさんズにお願いする感じでミランさんに言っ

てしまった。ミランさんはお友達なのにいぃぃぃ……

「ん？　何だ？」

おっと、気をしっかり持とう。私は王族、人に指示を出す事に、な、慣れるんだ……

そうだ！　ミランさんも私の家のメイドささんになれば問題ないよ！　うんうん。

「ラルフさんのランクアップのお祝いです。ここに来る前にちょっと寄り道して、ケーキを買ってきたんですよ」

苺のショート、チョコ、モンブラン、オレンジジャム。私はもちろん苺！

「け、ケーキか、ありがとな。気、使わせちゃったか」

ラルフさんは甘いの苦手だったよね。でも、男性一人、女性三人だ、ここは我慢してもらおう。自分のお祝いの席で我慢？　ひ、ひどい事してるな私は……

「残念ながらお祝いになってしまいましたが」

「残念じゃないよ！？」

「ふふ。相変わらず仲がい、！？　すみませんっ！　な、ナイフは！！！」

仲がいいように見えるよね。でも、結構本気で嫌ってるんだよね……。しょうがないか、ラルフさんだし？　シアさんだし。

私は苺、ミランさんにはチョコ、そしてシアさんの前にはモンブラン。

あれ？　シアさんはオレンジジャムのケーキじゃなかったっけ？

モンブランはラルフさんのじゃなかったかな……

「こちらは姫様のオススメのオレンジジュースです。買って少し経ちますので、ご自分で冷やし直してお飲みくださいね」

自分で冷やす。物を冷やす魔法だね。

この魔法本気で便利で最高なんだよ？　自分の好きな温度に調節できるからね。私ももう慣れた物で、これくらいのサイズなら一瞬で氷にもできる。シャーベットも作り放題だ。自分の趣味に合った魔法は、慣れるのも成長するのも早いもんだね。魔法の練習には食べ物を絡ませるといいのか……？

セッティングが完了したようだ。シアさんが私の隣、定位置に戻ってくる。

「あれ？」

「シア、さん？　オレンジのは？」

「お、俺のは？」

「私の分は、ここまで来る間に頂いてしまいました。大変おいしかったです」

い、いつのまに!?　一緒に横歩いてたよね?　荷物持ってさ!!」

「あ、え?　それじゃそれ、俺のなんじゃないのか?」

「な……、三個しか無いんですよ?　ここは遠慮しておくところでしょう?　まったく、これだから……」

「あ、そうか……、って違うよね!?　メイドさんもう食べたんだよね!?」

「ええ、それが何か?」

しれっと言うシアさん。

シアさんはやっぱり最高だなー、面白いなー、憧れちゃうなー。

ここは私も乗っておくべきか。

「変なこと言うねラルフさんは」

「女性三人からケーキを奪うとか、降格ものじゃない?」

ミランさんも理解して乗ってくれたようだ。この人も慣れたね……

「え!?　俺がおかしいの!?　いや、ケーキは別にいいんだけどさ……。降格!?　ランクアップの祝いの席で降格されるの!?」

「うるせえよさっきから!」「ラルフうるせえ!」「一々叫ぶな!」

「美人に囲まれやがって!　爆発しろ!!」「メイドさん、そいつ殺っちゃって!」「シラユキちゃんこっち向いて!」

「悪いの俺なの！？」

ラルフさんには後日ちゃんとお祝いを贈ったよ。魔法で強化された銀で作られた胸当てと手甲、ミスリルなのかな？　ふぁ、ファンタジーだわ……

その４９（後書き）

現実の裏話
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３４４ｗ／

こちらも投稿を始めました。
最新話までのネタバレ、キャラ崩壊、メタ発言を多分に含みますのでご注意ください……

その５０

「シラユキ、そろそろ攻撃系の魔法も覚えようぜ？」

最近父様と兄様は、私に攻撃系の魔法を覚えるように勧めてくる。

「えー、まだ早いよ……」

「よしやめるか！」

あっさり諦める父様。

「またこの流れだよ……」

「二人で町に行ってるのがどうも心配なんだよな。バレンシアの実力を疑うわけじゃないが、やっぱり最低限自分の身を守る方法を持たないとな」

「シアさんがいれば大丈夫だよ。ルー兄様は心配しすぎ」

シアさんをどうにかできる人がいるなんてとても思えない。元二つ名持ちの冒険者だよ？　兄様姉様クラスの戦闘力だよきっと。どんなメイドさんなのよ……

「お前、町は安全だ、とか思ってるんじゃないだろうな」

「安全なんじゃないの？　中にはその、怖い人とかもいるとは思うけど」

みんながみんないい人達ばかりじゃないよね。今のところは怖そうな人には会った事は無いんだけど、きっといるんだろう。

「明るいうちに帰って来てるから言える事だな。悪い奴ってのは暗くなってから増えるんだよ。あの町にだって多くはないが、いるだろうな」

「悪い奴？」

泥棒とか？　強盗？

「人攫いとかな、その、アレだ。言えねえよ！」

「ルー、シラユキに聞かせるには早いぞ」

ひ、人攫い？　え？　この世界だと身代金とかじゃないよね。身代金目的でなければ、攫った人を売り飛ばしたりするんだろうか。奴隷？　あ、売り飛ばすとか、奴隷とか、あ、アレか。

「うわ、半泣きだよ。あっさり答え出したなまた……。そういうこった、子供だから大丈夫、とか思うんじゃないぞ？　子供のエルフが一番、んん、やめとくか……」

子供のエルフが一番……？

「ふぇ……。にーさまー」

やだ……、聞きたくなかった、考えたくなかった。怖い、怖いよ……

「あああ……、脅かしすぎた……。ほらこっち来い」

「泣かすなよ、ルー。だが、よく言ってくれた」

兄様に抱き付く。な、泣かないよ！　半泣きだけど！

「俺はな、できたら町になんて行って欲しく無いんだよ。でも、お前に色々見せてやりたいとも思う」

「自衛の手段は持っておいて損はない。と言うより、持っておいて欲しいんだ。もし、万が一、のためにな」

自衛の手段、攻撃魔法、か……

確かにいくつか覚えておけば、瞬間的に昏倒させられる、とかでもなければ大抵どうにかできそうだよね……

「どうせならもっと脅しておこうか？　もう二度と国から外に出たいとも思わなくなるくらいにさ」

「うーむ……。それもいいかもしれないな……」

「やだー！　聞きたくなーい！」

でも、つまり、そういう怖いことが、町には多くは無いがある、

という事だね。

「ルー兄様のいじわるー……。町が怖くなってきちゃったよ……」

「ははは、それでいいんだよ。国の外は怖い事だらけなんだ、それは本当の事だぞ？」

「この国は安全さ。父さんと俺がいるからな。一生守ってやるさ」

父様のいる所が多分世界で一番安全だよね。それに加えて、私の家族、国民みんな。例え世界を敵に回してもどうとでもなりそうな気がするよ。……うん？

「父様父様。今、兄様にプロポーズされたよ？」

一生守ってやるさ、だって！　なにその恋人に言われたいセリフの上位に入りそうな言葉。

「おお！　やるな、ルー」

「何でだよ。シラユキはまず、もっと大きくなってから言え。背も、胸もな」

「な、なるさ、きっと……、信じれば……」

「な、なるかな……」

身長さ……、伸びる気配すらないんだよね……

今の身長は１２０くらいか、普通はもっとあるよね？　将来がかなり不安になってきてしまった。

最近は白雪草に向かってお願いする毎日だ。あの優しい女神様の事だから、もしかしたら叶えてくれるかもしれない。そう信じたい。

「攻撃魔法かー。例えばどんなのがあるの？　主に火系だよね？」

「ああ、そうだな。火は一番分かりやすい破壊の力だろう。魔力の消費やコントロールも楽な部類に入る」

「燃やす、爆発させる、だな。これはよく見てるだろうし、多分シラユキにならすぐにできると思うぞ。小さな火はだせるだろ？　基本はできてるからな」

父様と姉様はよく魔法の撃ち合いしてるもんね。私もあれに参加、か……。無理じゃね？

小さな火を出す魔法が基本？　ああ、後はそれを大きくしたり、飛ばしたりするだけか。爆発はどうやるんだろ……

「火の次に多く使われてるのは風かな。突風で足止めしたり、吹き飛ばしたり、圧縮した風で切り裂いたり。これはミランが得意なはずだから、今度聞いてみな」

風をぶつけるのは分かるけど、切り裂く？　カマイタチって理論上ありえないんだよね？　圧縮した風だっけ？　な、なにそれ……

「こいつの悩んでる顔可愛すぎだろ。今は聞くだけにしとけ、そう

多くもないからな」

「ええ、説明は私が」

さすがシアさん、説明できそうなところは逃さない。

しかし、可愛いって言われるのが、恥ずかしいじゃなくて嬉しいに変わってきてるわ……。身長があまり伸びないのなら一生言われ続けるかもしれないね……。開き直って可愛い系の美少女でも目指すか？　無いわー

「後は操作系の魔法か。こっちはまだちょっと難しいかもな。攻撃するための実物が必要だし、前に説明したとおり魔力の消費が多いんだよ。実戦で使うのはエルフくらいじゃないのか？」

「いや、そうでもないぞ？　人間にだって、獣人にだって魔法の得意な者もいる。人魚は水を操るのが上手かったしな」

獣人の人が魔法得意ってあんまり想像できなかったけど、人魚なら納得だね……。？

「父様人魚族に会った事あるの！？」

「すげえな父さん。俺も本でしか見たこと無いよ」

兄様も驚く。人魚族は住んでいる場所すら分からない幻の種族なのだ。

「伊達に約千年世界を回って来たわけじゃないさ。母上がエネフェアを身ごもってからは、もう国に落ち着いたんだがな」

父様は成人してすぐに国を飛び出したんだっけ。ふふ、母上だって。どこの王族……、だから私たちは王族だよ……

今では最高に優しい父様だが、昔は超怖い人だったらしい。気になるが、あまり詳しくは教えてはもらえない。

「私も実際に会ってみたいなー」

人魚かー。綺麗そうだよね。

「確か種族的にみんな胸大きいんだろ？　会ってみたいよなー。なあ？」

「そんな理由に同意を求めないでよ……」

さすが兄様、その発想は無かったわ。このおっぱい星人め……

「胸は確かに皆大きかったな。でもな、結構凶暴な種族だったんだぞ？　平気で生魚を頭からボリボリ、巨大な魚にも群れでまとわりついてボリボリ食べてたし。一度集落らしき所の水の中に入ってみたんだがな、問答無用で襲ってきたんだ。まあ、全て返り討ちにしてやったんだが」

「父様に夢を壊された！！　それ獣人じゃなくて魔物なんじゃないの！？」

ピラニアしか思い浮かばなかったよ！　人魚族はピラニアの獣人なんだー！！

「コラ、ひどいことを言うんじゃない。あの時は、あー……、縄張りにいきなり入った俺が悪かったんだろう」

「父さん何してんだよ……」

ホントだよ……。侵入者撃退しようとしただけなんじゃないの？それで全部返り討ちか、怖かっただろうに……

水の中に入ってる時はどんな魔法を使ったんだろう？　火は使えないよね。風も無理そうだ。水を操作？　人魚族の方が得意そうだよね……

ゲーム的に考えると……、水系には雷か？　こうかはばつぐんか？

「ねえ？　雷の魔法ってあるの？」

「雷だあ？　あれか、空から落ちる」

「うんうん。ゴロゴロドカーンって感じのあれ」

火と氷と雷はゲームで有名な属性だよね。氷は実際に水が無いと無理そうだけど、雷ならいけるんじゃないかな？

「やっぱりシラユキは可愛いなあ。落ちる所は見たこと無いんだな、嵐の日は外に出ないから当たり前か。あれは一回見れば、これは無理だ！　って分かるぞ？」

兄様にグリグリと撫でられながら言われる。

「ああ。そもそもあれが何なのかすら分からん。見たところ雲から発生してるようだがな、あれを魔法で再現となると、難しいどころか無理だな」

「何って、電気だよ？」

「デンキ？」「デンキ？」

うわ、電気通じないよ！　雷っていう名前は翻訳機能でそう聞こえるだけか、なるほど。

「おい、父さん、まさかコイツ……」

「シラユキ？　まさか、分かるのか？　使えるのかあれを」

「ふふふ……」

多分使えるよ。電気なんていう物は日常的に使ってきた、電気が無いと生きていけない時代の人間だったからね。

「あれ？　やばくねこいつ？　父さん以上の魔法使えるようになるのか？」

「あんなものポンポン落とされてみろ。俺ですらどうしようもないぞ……」

「さすがに雷までは無理かなー。でも小規模のなら使えると思うよ」

うーん。物は試しだ、ちょっとやってみるか……

「何？」

「おい、シラユキ？　ちょっと待て」

雷を落とす、なんていうのはどう考えても無理だろう。雷は電気、それさえ分かっているのならやりようはいくらでもある。

イメージは電気。簡単だよ、スタンガンだ。静電気を何倍にも……

右手にパチッと電気がはし

「あいたっ！　痛い！　えっ！？　なんで、　あっ！？　自分の手の保護忘れてた！！」

痛みに驚いて、一瞬発動しただけで止まってしまった。

「出しやがった！？　すげえ！　すげえけどアホだ！」

「くっ！　すまん！　笑ってしまった！！」

「いたた……。火傷はしてないね。もう一回やってみよ……」

「大丈夫か？　見た目は何も無さそうだな……」

父様が心配そうに右手を覗きこんで来た。

い、痛かった……

痛みとはほぼ無縁な生活してただけに、痛みに対する耐性も低く

なってそうだね……

「無理すんなよ？　お前が痛がると、俺たちはその何倍も痛いんだ」

またそういう恥ずかしいセリフを平気で言う……

「うん、大丈夫。ごめんね兄様」

右手を保護！　イメージは……、何だ？　絶縁体？　ゴム？　ゴムゴムの？

ゴムは無理だ！　これは能力で補おう。

とりあえずゴムのイメージでやってみる、電気の威力は最小限で。

パチパチッと小さな電気が右手に走っている。

ふむ……、痛みは無い、成功か。

能力の魔法は駄目だね、何でもあっさりできてしまう。でも、電気はしょうがないかな……

もう少し出力を上げるか。ちょっと痛いくらいに。……よし。

右手バチバチ。ビリビリ少女です。

「できた。うわー、凄いなこれ……。目に悪そう」

『スタンガン』とでも名付けよう。そのまますぎるけど最高にイメージしやすいだろう。

「何だよその魔法。ってかそれ魔法なのか？」

「確かにな。ちょっと違和感というか、なんとも言えない感じがするな……」

何この二人、鋭すぎ……

人前では能力使用は控えた方がいいか……？

「そうだ、ルー兄様、握手しよ？」

「父さん、妹が怖いです」

「俺がやってみるか？　体感できれば使えるようになるかもしれん」

「父様ならもうちょっと威力抑えるね。……うん、いいよ」

静電気程度の威力まで落とす。それでも充分痛いんだよね。

「え？　俺の時は？」

父様は許す！　ただし兄様、テメーはダメだ……

父様と握手。威力は静電気程度だ、が、持続するので結構痛いと思う。

「つっ！　これは凄まじいな。最小威力でこの痛みなのか……。これに耐えられる生物はいないんじゃないか？」

一瞬触れただけで手を離してしまった。静電気ってそうだよね、反射で手を引いちゃうんだよね。

覚悟して触っても無駄だ、断続的に痛みが続く。人間とエルフは恐らく耐えられないだろう。

「それってまさか、シラユキに触れたらアウトか？　身を守るのには適していそうだな。いい魔法だと思う」

「ああ。シラユキ、これは飛ばせるのか？　雷か、きっとできるんだろうな。防ぎようが無いぞこれは……。シラユキはどうやって手を保護しているんだ？」

「え？　あー、うーん……？　これはちょっと説明できないや……。ごめんね父様……」

「自分で使っている魔法が何故説明できんのだ……」

能力の魔法は感覚でしか使えないのよ、理解とか一切必要ないんだよねこれ。

この後家族全員から質問攻めにあった。能力のことは伏せたが、近いうちに話した方がいいかな。

これは多分、世界で私一人にしかできない魔法だろう。私の攻撃魔法は雷をメインにしていこうか。防御不能で近遠どちらでも使える、全身に纏って体当たりでもいい。

あれ？　私無敵じゃね？　あとは防御系の魔法さえあればよくね？

パシン、と乾いた音が一つ。

「お、できたできた。手に纏わせる事は痛くてできんが、飛ばすだけなら問題ないな」

「父様だいっきらい！！！！！」

「何故だ！？」

静電気レベルの電撃を、矢の様に飛ばすことはできてしまったみたいだ。出力は上げれないみたいだが、多分時間の問題だろう。

ああ……、これは家族全員使えるようになっちゃいそうだね。何よこの天才一家は！！！

私もなんだけどね！　世界で私だけが防げる、っていう事で。何か一気にしょぼくなった気がするよ……

その５０（後書き）

今回の魔法の話ではないですが、今まで分かりにくかった言葉の表現について、『裏話』の方でちょっとした補足説明を入れる事にしました。

一度目を通してもらえると助かります。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３４４ｗ／３／

読まなくても特に問題はないとは思うのですが、一応の説明という事で。

その51

「やっぱりさ、何か名前付けないとな、これ」

パシュン

「そうよねー。お兄様は何かいい案は無いの？」

パシュン

「うーん……。雷、落雷、稲妻。何かカッコいいのにしたいよな。シラユキも何か……、何いじけてるんだ？」

雷の矢で木に焦げ跡を作りまくる兄様と姉様。いじけもするよ……

三日も経つと、兄様姉様も詠唱破棄でがんがん撃てる様になってしまった。

これ多分この世界で初めて発見された新魔法だよ！？　軽く使いこなさないでよ！！！

父様に至ってはもう完全に落雷そのものだった。音が凄いから防御しろよー、と、軽く大きめの木を丸焦げにしていた。

私の事天才天才言ってるくせに、自分たちはそれ以上の天才だって言う事を自覚して欲しい。

まあ、家族の自慢できる所がまた増えただけなので、そこまで悔しくも無いのだが……

「これって、地面に吸収されるんだな。土壁の生成が一瞬でできる種族になら防がれそうだが……。いや、見てから防御は間に合わないなこれ。弾速が速過ぎる」

ああ、土竜族だっけ？　確かもぐらの獣人だ。

地面の下、地下に穴を掘り、住居を作っているんだっけ。人前には滅多に顔を出さない種族。これも人魚族と同じで、本の挿絵でしか見た事は無いね。

「撃った瞬間には当たってるって、反則よね。でも威力上げるとちょっとした溜めが必要だし、もしかしたらその間に作られちゃうかもね」

「いやいや、まずは弱いの一発当てて怯ませればいいんだよ。一対一ならもう俺たちに敵う奴っていないんじゃないか？　ちょっとこれ強すぎるだろ……」

やめてー……。私の作った魔法で戦う話しないでー……。さらにヘコむわー

「一応、金属に引き寄せられる、高い所に落ちるっていう性質はあるよ。水でも防げちゃう。あんまり威力上げても、足から地面に流れて行っちゃう事もありそうだね。あ、地面に剣を突き立てたら多分無傷で防げるよ」

「そうなのか？　この雷の矢程度じゃ剣か胸当てに吸収されちまうのか」

「うん？　それって逆に当てやすいって事じゃない？」

え？　あ、そうか！　軽く狙いつけて撃てば自動的に剣に当たるのか……

「そうかも。広範囲にばら撒ければ多分、吸収とか関係ないと思う。後、電気、じゃない、雷に弱い？　耐性が低め？　の人は軽い威力でも心臓が止まっちゃうんだったかな」

「何だよそれ！！　心臓を止める！？」

私も自分で言ってびっくりだよ。電気って、身近にありすぎて分からなかったけど、かなり怖いね。

「え？　即死魔法なのこれ？　ちょ、ちょっとシラユキ？　そういう大事な事はもっと先に……」

即死魔法！？　そういうのもあるのか……。無いわ。

「大丈夫、そんな人滅多にいないから。と言うかいるのかな？　逆に止まった心臓を無理矢理動かす、とかもできると思うよ。一時的だけどね」

「無茶苦茶な話だな……。後でまとめておいてくれよ、分かる範囲でいいからさ」

どれくらいの出力が必要かは分からないけど、ＡＥＤ的なこともできるようになるかもしれないね。

「その矢くらいならいいと思うけど、あんまり使わないほうがいいのかも？　私は多少性質を知ってるし、自分には効かない様にできるからいいんだけど、それ、自爆したら多分終わりだよ。でん、雷っていろいろな物に流れやすいから」

「なるほどなあ、使いこなせるのは、性質を理解してるシラユキか、父さんくらいか」

「母様もね。私たちはここまでにしておいた方がいいのかも」

できたらそうして欲しい。別に私だけの魔法にしたいわけじゃないよ？

私の作った、考えた魔法で、家族にもしもの事が会ったら……

「ねえ？　シラユキ。きょ、今日は何でそんなに暗いの？」

私の態度をスルーするのに限界が来たのか、姉様がちょっと心配そうに聞いてくる。

「何か淡々と話してるんだよな。ほら、そんな所でいじけてないでこっち来いって」

私まだ雷の矢作れないのよ……。大雑把な方向に放電させる事はできるんだけどね。完全に前方無差別魔法だよ。

「姫様がご自分で考え、作り上げた魔法を、お二人にあっさりと真似されて、いえ、姫様以上に使いこなしてしまっていますね。そこに拗ねてしまっているのではないかと。拗ねる姫様も可愛らしいです」

笑顔で説明を入れるシアさん。

表情を読まれたのか、それとも私の考えを理解しきっているのか、相変わらず正確に私の心境を言い当ててくるなあ……

「馬鹿だな。そんなにあっさり俺たちと同じ様に使えるわけ無いだろ？　まずは小さな火の矢とか試してみるもんだよ」

「今の私たちでもこれ、結構難しいのよ？　もっと段階を踏んでいかないと……」

「へ？　そうなの？」

「まずは魔法で矢を作るっていうイメージの慣れが必要でしょ？　いきなりこんな、桁外れの難易度の魔法でできる訳無いわよ」

あ、そうなんだ。まずは火の矢か……、火の矢ねえ……

「火はこわーい……。前に使ったらなんでか知らないけど、的に当たった瞬間大爆発したし……」

あれは怖かったわ。小さな火の矢を作って、飛ばしてみたら爆発だもんね。近くにいた兄様ちょっと焦げたし……、ちょっと漏らしちゃったし……。完全にトラウマ。

「ああ、あれね、あれは凄かったわ。あれは圧縮しすぎって教えた

でしょ？　どうやったらあんな小さな矢に圧縮できるのか不思議でしょうがないわ」

多分爆弾でもイメージしちゃったんだろう。いや、ミサイルか？
火を矢の形状に固めて飛ばす、っていうのがそもそもの間違いなのよ。
火を飛ばすイメージは、放射状に出し続けるか、炎の塊をそのまま投げるくらいしか思い浮かばないのよ。
火炎放射とファイアボールか。まんま攻撃魔法だねぇ……。あれ？　ファイアボール？　何かちょっと引っかかるな……
ファイアボールって……

「そんな座り方してるとパンツみえるぞ？」

「え？　きゃあ！」

兄様の言葉に勢いよく立ち上がる。
しまったああ！　ミニスカートで体育座りしてた！　あれ？　パンツ？

「スパッツだったよ！　もう！　兄様のエッチ！」

スパッツ穿いててもスカートの中を見られることは恥ずかしいんだが。お風呂で裸を見られたりはしてるけど、それはそれ、これはこれ、だ。

「お？　やっと元気でたな。そうやって元気でいてくれよ」

「そうよ？　シラユキに元気がないと、私たちも辛いわ」

あ、わざとか。いけないいけない、家族の前で暗い顔なんてしちゃ駄目だ！

「ごめんね？　ちょっと悩んでちゃってた。やっぱり攻撃魔法って怖いよ」

「大爆発起こしたり、雷で即死させるような魔法じゃなくてもいいんだよ。風で吹っ飛ばしたり、炎で怯ませたり、やり方は色々あるだろ？」

「戦うっていう事自体して欲しくないしね。逃げに専念する魔法を主に覚えていけばいいかしら？」

逃げに専念？　雷の矢を当てて、怯んでる隙に逃げるとかかな？

「一対一ならな。多対一だったり、どうしても逃げられない時は、やるしかないんだぞ、って泣くなよ？」

「怖いけど泣かないよ。そうだね、頑張らないとね……」

私も戦う時って来るんだろうか。姉様は今まで実際に、命のやり取りのような事はした事は無いみたいだけど……

私も成人して、国の外に出たくなったら、そのときは戦う力は絶対に必要だよね。

「あのー、ちょっといいかなー？」

「ふ、フラン!?　また口挟んで!!」

また急に話しかけてきたフランさんに、メアさんが驚いて注意する。

もっと話しかけてきてもいいって、毎回言ってるのになー

「まあまあ、いいからいいから。あのね、お二人とも、シラユキ、まだ十二よ?」

「あ」「あ」「あ」

しーん……

「そうだよ!　こいつまだ子供だよ!?　なんでこんな強力な魔法使わせてるんだよ!?」

「戦う事前提にしてた!　私だって実戦なんて未経験なのに!!」

二人とも今気づきました、っていう反応だね。私もそうなんだけど。

「そ、そうだね、十二で戦うとか無いよ……。でも姉様、あれ、ほぼ実戦だよ?」

あれ、とはいつもの撃ち合いね。

「ぶっちゃけ私がいれば、本気で一生安全です。国の外だろうが、

どこであろうが」

「シア、ぶっちゃけちゃ駄目！　ここ最近のやりとりが全部台無しだよ！！」

十二歳で戦い方なんて知らなくても、習おうとしなくてもいいよね。父様だって最低限身を守る魔法って言ってたじゃないか。

それに、シアさんがいてくれる。危険なんて無いよね！！

「もうこうなったら、父さんクラスの実力目指そうぜ？　目指すは最強か」

「嫌だよ！　歩く災害にはなりたくないよ！！」

「歩く災害……、言い得て妙ね。でも、シラユキならなれちゃうんじゃないかな？　ふふふ」

とりあえず、もっと速く走れるようになろう。後は、何でも防げるような防御魔法かな。

攻撃魔法はもういいや！

その５１（後書き）

裏話をまた一話追加しました。同じ時間の投稿です。何故か向こうも毎日更新になってるぞ・・・

疑問質問を毎日頂ければ毎日更新になるかもしれませんね。大変だ！

その52

「話を戻すぞ？　シラユキは魔法のレベルが高すぎるから、ついつい話が逸れて行っちゃうんだよ」

「何の話だっけ？」

「雷の事？」

私も姉様ももう完全に覚えてない。何の話してたんだっけ……

「名前だよ名前。シラユキにも考えてもらおうと思ったんだよ」

「名前？　誰の？　子供？　ルー兄様とユー姉様の子供？　え？　子供できたの！？」

い、いつのまに！？　何で教えてくれないのよ！！！

「ちげえよ……、いや、欲しいけどさ。そうじゃなくて、魔法の名前だって。雷の矢じゃちょっとインパクトに欠ける」

あ、そういえばそんな事を話していたような？　ちょっと焦ったよ……

「あー！　してたしてた！　そうね、私たちには全く馴染みが無い系統の魔法だからね、これ。シラユキ、何か無い？」

「うーん？　名前かー……。雷の矢ね、うん。『ライトニングボルト』、とか？」

ボルト系の魔法は一般的だよね。ゲームでお馴染み。サンダーよりライトニングの方が、何となくカッコいい気もする。

「ライトニング……」

兄様が固まる。

「お兄様？」

「ルー兄様？」

変だったかな？　でも、兄様の付ける名前って全部まんまじゃない。ライトボールとかさ。

「シラユキ、やっぱりお前は……、天才か！！！」

どうやらお気に召したようだ。やっぱりゲームで使われてる名前はいいね、安定してるね。

「ファイトニング、ボルトーーー！！！」

大声で叫び、雷の矢、矢！？　槍か！？　雷の槍を木に投げつける兄様。

投げつけるとは言っても動作の事だ。実際手に持って投げているわけじゃない。

直撃した木はへし折れてしまった。もっと自然を大切にしようよ……

「うん、さすがシラユキの命名した魔法だ。威力のノリが違う。しかし、当たったら即死だなこれは」

「ええ。この威力でこの速度。遠距離戦なら敵無しじゃない？　お兄様素敵……」

素敵、って言うか怖いんですけど!?

「い、今の威力なら、『ライトニングスピア』でもいいんじゃない？　矢って言うか槍だよあれ」

「し、シラユキ？　え？　お前天才過ぎないか!?　『ライトニングスピア』！　よし！　それに決定しよう！　した！　よーし、早速」

兄様がライトニングボルト改め、ライトニングスピアの投擲準備に入る。

「駄目だよ！　また木折る気なの!?　さっきの木だって、多分育つのに十年以上はかかってるんでしょ？　ひどいよルー兄様!!」

いくら木が大量に生えているといっても、無駄に切り倒していいはずが無い。漫画とか小説に出るエルフを見習おうよ……

「おっと。シラユキは優しい子だな」

「確かにそうね。おいでシラユキ、撫でさせて？」

「え？　うん。えへへ……」

わーい褒められ……？　当たり前の事だよ！？　でももっと撫でて！

「ねえねえルー兄様。さっきちょっと思いついた魔法があるんだけど、試してみてもいい？」

「ん？　どんな物かによるな。あんまり危険そうなのは駄目だぞ？」

「うん！　ルー兄様の『ファイアボール』って炎の塊だよね？　それなら雷の塊も作れるんじゃないのかなって」

さっきファイアボールを思い浮かべた時に感じた引っかかりはこれだった。

炎の爆発が起きる玉ではなく、着弾したら電撃を撒き散らす様な魔法が作れるんじゃないだろうか？

「何？　え？　できるのかそんな事？」

「ちょーっと無理じゃないかな……」

やっぱりそうかなー。

でも、私は雷一切効かなくできるのよ。だから雷を発生させながら、その場に留めておく事もできるんじゃないのかな？　試しに、

なんて気軽にできるのはきっと世界で私だけだ。

「やってみていい？　私、雷効かないから大丈夫だと思うんだけど……」

「あ、そうか。ちょっとやってみるか？」

「ちょっと、お兄様、危なくない？　もし怪我でもしたら……」

姉様は心配そうだね。さっき即死魔法だって驚いてたし、不安にさせてしまったかな。

「大丈夫だろ。俺たちもいるし、バレンシアもいる。どれくらいの威力になるか分からんが、土壁で覆ってやればいいさ」

「土で覆う場合は少し壁を厚めにした方がいいかもしれませんね。姫様のお使いになられる魔法の威力によっては崩れ飛んでしまいそうです」

雷は物理的な威力もあるんだけどね。地面とか普通に穴開けちゃうよ。一瞬で水蒸気爆発が起こるんだっけ？　うろ覚えだ。規模によっては音の衝撃も凄そうだよね。とんでもない魔法を作ってしまったかもしれない。

「それじゃ少し離れててねー。当たったら多分死んじゃうから……。やっぱりやめるね！！」

自分で言って怖かったわ今の！！　無理無理、やっぱりやめやめ！！

「何だそりゃ！　いいからやってみろって、俺たちのほうに投げなければ大丈夫さ」

「無理しないでね？　怖くなったら言うのよ？　すぐに止めてあげるからね？」

すでに怖いです！　姉様が超心配顔だ……。パッと試してしまおう。

ふむ。とりあえず能力で全身を絶縁コート、両手をボールを持つように前に出す。そしてこの中に、電気を放電。押し留め固定するイメージ……

難しいな……、どうしても固定がうまく行かない。これじゃただ両手の間で放電しているだけだ。

さらに集中して出力を上げてみると、両手の間だけではなく、腕、体、そして地面にまで届くほどの放電になってしまった。か、髪が広がる！！！

「おー！　すげえなありゃ……。近づいたら死ぬんじゃね？」

「あ、あれを止められるのはお兄様とシアくらいかしら？　私にはちょっと無理そうなんだけど……」

「うん？　埋めりゃいいんだよ、簡単だろ？」

「あ、そっか。でも可哀想よ……」

失敗したら埋められる!?　まずい！　しっかり制御しなければ!!!!

出力を維持したまま両手の間に押し留める感じで、球状に……？

球状？　うーむ、電気の玉か。ん？　ああ、その手があったよ。

一旦放電を止める、そして少し大きめ、直径１５ｃｍくらいの光の玉を一つ作り出す。

「できた、かな？」

「できた？　ただのライトボール、じゃねえなそれ!!　何だそれ!?」

「ちょっと!　早く消して消して!!!　何それ!?」

私の作り出した魔法を見た二人が驚いている。まあ、驚くよねこれは……

プラズマ球です。中心から絶え間なく放電しているが、球体の外には漏れない。電気の科学館っぽい所で見た物をイメージで再現してみただけの物なので、実際のプラズマ球とは違う、電気を封じ込めた玉の魔法、になるのかな。

しかしやばいわこれ、爆発させたらどれだけの範囲に電撃を撒き散らすんだろう？　ちょっと試してみたくもあるが、森林火災決定なので仕方ない、消そう。

暴走させないようにしっかりと消す。

ふう、ちょっと……、疲れたね。あれ？　これって……
駄目だ、立っていられない、力が、全く入らない。

「魔力使いすぎだ阿呆！！　バレンシア、椅子！　メアリーとフラニーは飲みモン出せ！　何か持って来てるだろう！」

倒れる私を抱きとめ、メイドさんたちに指示を出す兄様。か、カッコよすぎる……

「はい！」

「え？　あ、はい！　すぐに！」

「ちょっと頑張りすぎちゃったかな、ちょっと待っててねシラユキ」

シアさんが即座に椅子を作り出し、メアさんフランさんは持って来ていたバスケットを開く。

「シラユキ？　大丈夫？」

姉様が心配そうに撫でてくれる。

「うん……。ちょっと疲れちゃった……」

姉様に抱きつきに行こうとしたのだが……。か、体が動かせない！　これが魔力疲れなのか……！

シアさんが即席で作った椅子に姉様が座り、その上に私が抱き締められるように座る。
メアさんとフランさんが用意してくれたジュースを飲んで、落ちつ、かない。
これが魔力疲れなんだね。やばい、全く息が整わない！　た、確かに辛いわこれは……

「まったくお前は……。いや、止めなかった俺が悪いか。さっさと埋めるんだった」

「埋めるとか……、怖いこと……、言わ、ないでよ……」

あっれー？　魔力どれだけ消費したのよあのプラズマ球。放電させる程度じゃ何とも無かったのに……

「いいから、無理しないで休みなさい。無理しないでって言ったのに……」

う……、姉様半泣きだ。悪い事しちゃったなー

「ごめんね……、姉様……」

「ううん。まだ十二歳の子供に使わせる魔法じゃなかったわ……。ごめんねー……」

姉様はぎゅっと抱き締めてくれる。

疲れたけど、疲れてるけど、何か幸せだ。

「先ほどの雷の球体、ですか。あれをそのまま投げ、着弾、炸裂したとすると……。恐らく直径５０ｍほどの範囲に雷を撒き散らしていたでしょう。あ、姫様は喋らなくて結構ですよ。表情を読みますから」

私が疲れ切ってるのに、シアさんが冷静だ。多分怒ってるなこれは……？　５０ｍ？　広すぎない？

「怒ってなどいませんよ？　着弾、もしくは爆破位置から離れるほど威力は下がるとは思いますが。中心位置なら恐らく、ウルギス様でさえなすすべ無しでしょう。風の鎧、土壁など無意味。地面を抉り、小規模のクレーターができる威力かと」

風の鎧か……。空気の圧縮層を作れば威力の軽減はできそうだね。５０ｍくらい離れれば軽い痺れくらいの威力まで落ちそうだ。

５０ｍかー。シアさんはどうにかできそう？

「一撃なら何とか、と言ったところでしょうか？　魔力をナイフに変えて、防御に回せば恐らくは……」

やっぱりシアさんって凄い。個人専用の能力って有ると無いとじゃ全然違うんだ。

「私の場合は能力の相性がいい、という事ですね。どちらにしても、あれをノーモーションで撃たれれば誰でも同じ結果になりますよ」

なるほど、でも一回出しただけでこれかー。魔力疲れってきついね……。どうにかできない？

「無理です。沢山食べて、充分にお休みください」

そっかー。ごめんねシアさん、すっごい心配かけちゃったみたい。みんなにもね。

「いえいえ。ゆっくりお休みくださいね。数日は続くと思いますから」

うん、ありがとう……。数日？　一日休んだくらいじゃ治らないの？

「ええ。その間は私がしっかりとお世話させて頂きますので、ご安心を」

シアさんはにっこりと笑って綺麗にお辞儀をする。

ああ……、怒ってないと思ったらそういう事か……。全力で私のお世話できるのが楽しみなんだね……

「まあ、その、なんだ。これは嫉妬すら覚えるぞ。バレンシア、後でコツを教えろ」

「私にも教えて？　何かすっごく羨ましいんだけど……」

「では、お二人とも、まずはメイドにならなければいけませんね。話はそれからです」

「メイドになればできるのか？　メアリー」

「できる？　フラン」

「無理ですよ！　そんなのシアにしかできませんって！」

「私は何となくなら。ルーディン様もユーネ様も、何となくは分かるんじゃないのかな？」

「何となくならな。やはり、さすがはバレンシア、という事か」

「私も何となくは確かに分かるわね。シラユキは表情に出やすいし」

姉様大好きー！

「あ、分かる分かる。私も大好きよ」

マジで！？

「マジです」

シアさんは絶対心読んでるだろ！！！

その52（後書き）

本文中に出てくる「雷」という言葉は雷そのものを指して使われる以外では、「電気」の意味で使われています。
分かり難い表現だったかもしれませんね。日本語って難しい……

その５３（前書き）

今回はかなり短めです。

その53

「はい、シラユキ、リンゴ。あーんして？」

「あーん……、んっ」

「ふふふ」

なにこれ幸せすぎる。

一晩寝たくらいでは魔力疲れは治らなかった。少し楽にはなったかな？　程度には回復してるんだけど。まだまだかかりそうだね。

一度は経験させるつもりだったらしく、あまり怒られる事は無かった。

シアさんが大喜びで、私の身の回りの世話をしてくれている。トイレくらい一人で入らせて欲しかったが、昨日の夜は無理だった。あまりの恥ずかしさ、情けなさに泣き出してしまった。

さすがに泣き出してしまったのはショックだったのか、お風呂では特に何事も無かったのだけれど……。まだ数日はシアさんだよりになりそうだね。

今日は朝から母様が付きっ切りで世話を焼いてくれている。

母様はお仕事があって、あまり一緒に遊んだり、出かけたりできない。たまに暇を見ては私の所に来てくれるんだけど、私はそれが

嬉しくてしょうがない。子供だね……

その忙しい母様が、今日は朝から一緒にいてくれる。あまりの幸せに泣きそうだ。

今は膝の上に座らせてもらっている状態、それだけで自然に頬が緩んでしまう。

「えへへ。母様大好きー」

「ふふ。まだまだ甘えん坊ね、シラユキは」

「母様は特別だよ。もっと甘えさせてねー」

体を横に向け、母様に抱きついて頬擦りする。

「可愛い……。ごめんね？　いつもあまり構ってあげられなくて」

「んーん。母様は女王様だし、忙しいから。たまにこうやって甘えさせてくれるだけで十分だよ。凄く嬉しい」

「シラユキが一言、もっと構って、って言ってくれれば、女王なんてその場で辞めちゃうのに……」

ホントに辞めそうだから怖い。そうなると次の女王は姉様か？

無理じゃね？　私か！？　もっと無理じゃね？

「大丈夫。父様も、ルー兄様もユー姉様も、メイドさんたちもみん

な優しいよ。寂しいなんて思う暇もないくらい構ってくれてるから」

「まだ十二歳なのに……。もっとゆっくり大人になってね？　もっと一緒にいたいって我侭言ってもいいのよ？」

「今日はずっといてくれるんだよね？　それだけで十分すぎるくらい嬉しいよ。我侭言って困らせるなんて絶対イヤ」

「もう……。お母様をもっと困らせて欲しいわ……」

ああ、駄目だ。嬉しい、幸せ。私ってこんなに母様のこと大好きだったんだね。

「あまりの姫様の幸せそうな笑顔に浄化、いえ、癒されます」

「浄化！？」

「あ、大きな声出さないの。ほら、こっちもたれなさい」

シアさんの一言に突っ込んでしまった私を、優しく抱き寄せてくれる母様。

「こらこら、シア。邪魔しないの」

メアさんが笑顔で注意をする。

「そうそう。こんなにふにゃけたシラユキは滅多に見れないんだからさ」

ふにゃけた？　面白い表現だね……

「私の前でも、いつもあんな表情をしてもらいたいものです」

シアさんも笑顔だが、ちょっと複雑そうだ。

「無理じゃない？　レンってばシラユキのことからかい過ぎだよ」

「姫の反応は面白可愛いからねー。しょうがないよ」

「ですね。これぱかりはやめる訳にはいきませんね」

やめようよ！　まあ嫌って訳でもないんだけど。

「三人とも、いつもありがとうね。貴女たちがいてくれるから私も安心してお仕事できるのよ」

「へ？　はっはい！　ありがとうございます！」

「これからも遠慮なくお任せください。一生」

「一生!?　まったくレンは……。私もシラユキのお世話は楽でいいからいいんですよ。外さないで下さいね」

三人とも相変わらずだなー。ずっと私の専属メイドさんでいて欲しいな。

「今日はまだまだ構い倒しちゃうからね、覚悟しなさい。ご飯だって食べさせてあげるし、お風呂も一緒に入りましょ？　寝る時も一緒だからね」

「えー。私、幸せすぎて死んじゃうかも……」

「姫は本当にエネフェア様のこと、好きだよね」

「当たり前でしょ？　シラユキまだ十二なんだから、これが普通なのよ」

「ですね。今日の姫様は年相応に見えますね」

「母様大好きー！」

「ふふふ。私もよ、愛してるわ、私の可愛いシラユキ」

その５３（後書き）

『トリップ』は毎回これくらいの文字数でしたね。何故かもの凄く少なく感じてしまう……

その５４

昨日は幸せすぎた。まだにやけ顔が直らないよ。

今日は母様もまたお仕事、少し寂しさはあるが通常に戻っただけだ。

もう一人で歩きまわれるくらいには回復したのだが、まだちょっとだけ気だるさが残ってる感じかな？　やる気が出ない感じ、魔力疲れは精神的に来て面白いな……

どうせ今日も一日部屋に缶詰だ、魔力の消費と回復について考えてみよう。

魔力は誰も理解できていない謎の力。実際魔力疲れを起こしてみても、何がどう減って疲れが出たのか全く分からないね。まあ、一瞬の出来事だったし、長時間魔法を使っていけば感じ方もはっきりと分かるかもしれない。

回復の速さはどうなんだろう？　ゲームでは宿屋に一泊しただけで全快するイメージが強いね。あれは怪我も全部治るただのゲームシステムなんだけど……

「ねえシアさん。魔力の消費とか、回復の早さって、分かったりするの？」

考えても答えは出そうに無い、分からないならシアさんたちに聞

けばいい。

「はい。消費は、大きな魔法を使えば何となく分かりますね、気だるさや疲れが感じ取れます。回復は大体寝て起きてみると楽になっている様に感じる、くらいでしょうか？　こちらは殆ど分かりませんね」

回復はやっぱり分からないのか。それだけ回復速度が遅いのか、もしかしたら眠っている間にしか回復しないのかもしれないねー

「私たちは普段疲れるほど魔法使わないから、魔力疲れなんて起こった事も無いんだよね」

「明かりと火を点けるくらい？　後はたまに風を送るときがあるかな。魔法なんて無くても生きていけるし、あんまり気にしなくてもいいと思うよ？」

メアさんフランさんはあんまり魔法は使わないのか。私も、生活するだけなら明かりの魔法だけあれば充分だと思うけどね。

「そうなんだ。よく分からないよねホントに。結構連続して色々と使ってても疲れは出ないのに、昨日は最後の一個だけであれだもんね」

それだけ消費が多かったんだろうか？　プラズマ球を出現させた時はそこまで、あっ！

「シアさんシアさん！　もしかして、魔法を消すときにも魔力って消費されてるの？」

「さ、さすが姫様。お願いですから説明させてください……」

「あ、ごめんね？」

プラズマ球っぽいのを作り出すのは、そこまで魔力消費が多くなかったんだ、多分。

シアさん言っていたよね、直径５０ｍくらいに雷を撒き散らす魔法だったって。それを無理矢理、力ずくで消した感じになるのだろう。そりゃ疲れるよ……

作る魔力消費＜消す魔力消費、になるのだろうか？　数字的に同じ量か全く消費無しだと思ってたよ。

「姫様が普段お使いになられている魔法は、消す、と言うより、自然に消えている感じですからね。昨日の雷の塊も、投げて発動させていればここまでの魔力疲れは出なかった筈ですよ」

その場合は辺り一面やばい事になっていたかもだけど……

なるほどねー。火は止めれば自然に消えるし、冷やすのもやめればそこまで。風を纏う魔法も、魔力の供給を止めれば霧散していくんだろう。

物の操作の魔法もそうだね。動かしたら動かした分だけ消費される感じか。手を放すのに力はいらないね、なるほどね。

ん？　ああ！　『魔法を消す魔法』なのか！　そっちの方が分かり易いね。

でも、そうなると気になる事が一つ出てくるね。

「他の人が出した魔法を無理矢理消す、っていう事はできるの？雷の玉が爆発する前に消しちゃうとかさ」

「それはさすがに無理ですね。他人のイメージを完全に理解できるのなら可能でしょうけど」

それもそうか、あれは私のイメージで作った魔法。パッと消せるのも私本人だからか。

「もちろん消す方法はありますよ。炎なら水で、というのが一番分かりやすいですね」

「うん。だから攻撃魔法は火がメインになってるんだね」

「姫様……」

「あはは。ごめんごめん」

理解が早くてごめんねー

「ふう……。一応説明させて頂きますね。火は水で消える、これは常識ですが、大きな炎を消せる程の大量の水をいつも持ち運んでいる人はいませんからね。風の鎧、土の壁で防ぐのが一般的な防御方法でしょうか。私たちの場合は大きく避ければいいですね。その時の地形、同行人の状況にもよりますが、自分一人の場合はそれが確実でしょう」

私は能力を使えば、直接出す事も大量に持って行く事もできるんだけどね。これは言わない方がいいか……

もし水を持ち運べたとしても、操作系の魔法は魔力消費が大きいからね。距離を取って、風の鎧で余波を防ぐ、というのが一般的な防ぎ方になるのかな。

一般的？　でも魔法が不得意の人も冒険者してるよね？　ラルフさんは、両手剣を振り回す？　操作する？　という魔法は天才的らしいけど、その他は全然っぽいし。

「あのー、シアさん。普通の、Ｄランクくらいまでの冒険者の人たちはどうやって戦ってるの？」

さすがに戦い方までは答えてもらえないかな……。でも、気になっちゃったのよ。

「それは……、対人戦闘、という意味でしょうか？」

室温が下がった気がする。
ひゃあ怖い！　シアさんが怒ってる！？

「あ、ごめんなさい！　もう聞きません！！」

「いえ、こちらこそ申し訳ありません、大人気ありませんでしたね。答えは、姫様にはまだまだ早い、という事でいいでしょうか？」

「うん！　うんうん！　ありがとうシアさん先生！！」

危なかった！　十二歳の子供が人との戦い方、人の倒し方、殺し

方か。そんな事聞いちゃいけないよね。

「では、姫様。Dランク以下の冒険者が……、そうですね。プレベアを一体相手取るにはどうすると思います？　人数は三、四人くらいですね、適正は」

「ラルフさんそんな凄いの一人でやっつけちゃったんだ……」

大きめの熊だよね。え？　三人四人で勝てちゃうものなの？　ラルフさんはそれを一人で？　Cランク以上って本当に凄いんだ……

「安心しました。さすがにこれを簡単に答えられてしまったら……。ふむ、考えたくはありませんね」

十二歳の子供が戦術指南とかしてたら怖いどころじゃないよね。

「うん、全然分かんない。私たちがポンポン使ってる攻撃魔法なんて、Cランク以上の人くらいだよね、実戦で使えるのは」

「ええ。Cランクでもエルフ以外の種族は即座には使えないと思います。足を止めての集中、詠唱が必要になりますね。実戦で焦りも無く詠唱破棄で魔法を行使する、というのは中々難しいものなのですよ」

魔法がそこまで得意でもない人たちが三、四人でか……。駄目だ、全く分からないよ。

「うーん……。ヒント！」

「か、可愛いらしい……。失礼しました。……ヒント、ですか。ヒントと言うよりは答えに近くなってしまいますが、身の安全を確保する、で、どうでしょう？」

身の安全を確保？　攻撃されても大丈夫なように？　重くて固い防具は駄目なんだよね。動きが鈍くなっていい的になるだけだ。魔法が即座に使えないとなると、風の鎧も使えないね。

だ、駄目だ、まだ分からないや……

「罠を張る、とか？」

「あ！　それか！　メア頭いいね」

メアさんとフランさんも回答者席に入ってきたみたいだ。

よし、一緒に考えてもらおうか。女三人寄ればっていう言葉も……、なんか違くね？

「遭遇戦、という物もありますよ？　出会ってから罠を張れます？」

「あー、駄目か。むう……」

おっと、変な事を考えていたら既に否定されていた。

「罠ももちろん効果的ですよ。行動ルートなどの下調べ、誘い込みなどが必須になりますが」

ゲームじゃあるまいし即座に設置できる罠なんて無いか。入念な

下準備が必要なんだよね、きっと。

「プレベアの攻撃なんて、一発貰ったら終わりだよね？　あ、実際見た事は無いよ？　図鑑で見たくらいだけど、３ｍくらいあるんだよねあれって」

「実際目の前で見たら、腰を抜かしてしまいますよ。姫様ならさらに漏らしてしまいますね」

「ひどい！　でも否定できない！！」

「あはは。とりあえずさ、攻撃を受けないようにするんだよね？全然思いつかないんだけど、シラユキはどう？」

「罠が駄目なら……、うーん……。分かんない」

「あらら」

メアさんフランさんは普通のメイドさんだからね、戦うなんて絶対に無理そうだ。

シアさんは普通のメイドさんじゃないからいい。熊をナイフ捌いているイメージしか沸いてこない。どんなメイドさんよ！！

「もう少しヒントを出しましょうか。攻撃を受けないようにするのも確かにいい考えです、ですが、それ以前に攻撃自体させなければいいと思いません？」

「え？　そんな事できるの？」

ずっと俺のターン！！　ってやつか？

「ええ、確実、ではありませんが。先制で決めれば後はほぼ安全に、一方的に狩る事ができますね」

狩る？　なにか狩人みたいだね。狩猟？　あ、ひと狩り行こうぜ？　か！　あれも確か熊いたね！

「目を狙うの？　強い光の魔法とかでさ。あ、魔法は即撃てるものでもないんだっけ」

私とシアさんには軽くできちゃうんだけどな。普通の冒険者に、目を焼くほどの強い光なんて即作り出せる訳、あ。

「撃ててもあまり意味はありませんね、仲間の目も眩ませてしまいますから。それに、光から目を逸らすという事は、敵対する相手からも目を逸らす事になってしまうんですよ。それは実戦では致命的ですね」

目を閉じて光の魔法を使って、次に目を開いたら敵が目の前にいました、なんて笑い話にもならないか。

「そうだよねー。難しいよ……」

あれもゲームだからこそか。うーむ……

「シア、答え教えてー。私たち普通のメイドだよ？　メイドに姫だよ？　分かる訳ないって」

「シラユキは結構いい線いってたんじゃないかなと思うんだけど。私たちはさっぱりだね」

「私ももう駄目、わかんなーい！」

ギブアーップ！

「ふふふ、大変可愛らしい反応が見れて満足です。では、最終ヒントを」

まだヒント？　焦らすのが好きだなシアさんは。

「塩、コショウ、赤コショウ、ニンニク、タマネギなどなど。赤コショウとニンニクが一般的に多く使われていますね」

「へ？　味付け？　何の料理？　匂いと辛さが凄い事になりそうだけど」

うわあ……。そういう事ですか……

フランさんお料理好きだもんね、そういう反応になっちゃうよ。赤コショウはトウガラシの事。何故かトウガラシでも普通に通じる。翻訳機能バンザイだ。

「えげつなーい！　シアさんえげつなーい！！」

「ふふ、さすが姫様。ですが、これが一般的なのですよ？　魔物相手に正々堂々なんて、馬鹿のやることです」

「あれ！？　姫は分かったんだ？」

メアさんも分からなかったようだ。

「うん。多分まとめて小さな袋に入れておくんじゃないかな？　乾かして粉末状にしてさ。後は、鼻先にでも投げつけて、袋から出れば……」

「ああ！　なるほど！　シアえげつなーい！」

「出会ってすぐ目と鼻を潰すんだ……。レンえげつなーい！」

何故かシアさんに対して起こるえげつないコール。二人とも楽しそうだ……

「頭がいい、ずる賢い、と言ってください。一般の冒険者には必須のアイテムですよ。普通に調薬ギルドで作られ、売られています。魔物とは言っても野生の生き物、目と、特に鼻を頼りに動いていますからね。初弾が決まれば後はもう勝ったも同然。遠距離から集中、詠唱ありの魔法を叩き込むなり、弓矢で狙撃するなり、距離を取って一方的に攻撃する事が可能になりますね。そしてある程度弱らせたら……、ブスリと」

能力でナイフを作り出し、笑顔で刺す動作をする。

「シアさんこわーい！」「シアこわーい！」「レンえげつなーい！」

「冒険者というものは、怖くてえげつない方法を取らなければ生きていけないんです」

「なるほど、レンの性格はそうして出来上がった物なのかごめんな

さい！」

ナイフをチラ見せするシアさん。全力で謝るフランさん。

何か、結構怖い会話のはずなのに、楽しいね。これもシアさんの話し方のおかげか。

うーん。やっぱりシアさんは凄いや！

「今のシアならプレベアはどうやって倒すの？」

メアさんが、多分聞いてはいけないことを聞いてしまった。

「真正面から素手でいけますよ？　あの程度、片手でも三秒あれば充分ですね、お釣りが来ます。プレベアの攻撃など掠らせる事もありませんよ」

「シアさん怖い！」「シア怖い！」「レンこわっ！！」

「メイドですから」

綺麗なお辞儀で閉めるシアさん。

メイドさんって怖いんだね！！

その５４（後書き）

「メイドさん最強」タグが必要な気がしてきた……

その55

「姫様ビクビクしすぎです。私がいますから大丈夫ですよ？」

「う、うん。分かってるんだけどね。ううう……、ルー兄様の馬鹿……」

今日はシアさんと町へ出て来ている。今は適当にふらふらと、シアさんの右腕にしがみついて歩いている状態だ。

兄様に脅かされてから、実は周りには、そうは見えないだけで、怖い人が一杯いるんじゃないか、という変な脅迫概念に囚われてしまった。

「私は幸せなのでいいのですが、怖がる姫様をこのままにしておくのも……。複雑です」

「うわーん。何か怖いよー……」

「誰かに話しかけられたり、怪しい人物を見かけたら、とりあえず魔法を打ち込みましょう。死んだらそこまで、生き残ったら尋問するか、止めを刺せばいいんです」

な、なるほど、さすがシアさんだ。

「うん！　分かった！」

うーん、魔法か。

いきなり電撃は駄目かな。風の塊をぶつけるくらいにしておいた方がよさそうだ……

「はい、頑張りましょう」

「何を頑張るんだよ！！　物騒なこと話しながら歩いてる奴等がいると思ったら、やっぱりメイドさんか……」

「ひゃあ！！」

びっくりした！！　あ、ラルフさんか、脅かさないでよ、もう！

「早速怪しい人物の登場ですね。さ、姫様。とりあえず撃っておきましょうか」

「え？　あ、うん。ラルフさん死なないでね」

「やめて！！　シラユキちゃんどうしたんだよ今日は！？」

怖いのよー！　何だか分からないけど怖いのよー！

あれ？　ラルフさんの隣に見たこと無い女の人が……

「へえ……。この子がラルフの言ってたシラユキちゃん？　ルーディンさんの妹の。か、可愛すぎない？」

だ、誰だろう。見たところ、猫科の獣人かな？　背はメアさんと同じか少し高いくらいか、１５０ちょっとくらいだろう。結構小柄

の可愛らしい人だ。やはり猫族の人はいいね、ショートの赤茶っぽい髪、同じ毛色のネコミミが見える。ネコミミは最高だね。

武器は、ナイフ、と言うには少し大きめの、変わった形状の剣が二振り両腰に。服の色は黒じゃない、けど、やけに露出が多いね。下はズボンだけど、上は胸しか隠れてないよ。……小さめか、よしよし。お友達になれそうだ。

ラルフさんは前と変わらず黒を基調とした服装のままだ。ランクアップ祝いに贈った胸当てが綺麗に光って目立っている。

外套の色だけは青に変わっているね。こっちは兄様と姉様からのお祝いだ、多分どちらもかなりの値段なんじゃないかな？　金額は聞くと後悔しそうなので、聞いていない。

「あれ？　会うの初めてだっけ？　何年もこの町にいて、俺とよくつるんでるんだがな……。おっと、可愛いからってうかつに近づくなよ？　そこのメイドさんに殺される」

私に近付こうとしたネコミミの人を止めるラルフさん。

「むっちゃくちゃ睨まれてるんだけど……。あたし、何かしたっけ？　どっかで会った？」

「何かしなくても近づいたらアウトなんだよ。最低でもＡランク並の強さらしいから気をつけろよマジで」

「近づいたらアウト！？　ああ！　肉片に変えられるって言うアレか！　バレンシアさんだっけ？　この人が最低でもＡランクの怖いメイドさんかー……」

シアさんの情報が独り歩きして……、あれ？　大体あってるな。

素手で熊倒せちゃうメイドさんだしね。

二人は少しはなれてひそひそと……、大きい声だし全然ひそひそとはしてないか、二人で相談をしている。女の人ならシアさんは何もしないと思うんだけどね。

このままではシアさんの印象がどんどん悪くなってしまいそうだ。いきなり私からというのはちょっと怖いが、勇気を出して話しかけてみよう。話しかけるだけで勇気がいる私って……

「あの……、えーと、ラルフさん。その人は……？」

あ、まさか恋人とか？　違うか、つるんでるって言ってたし、冒険者仲間かな。

「ああ、悪い悪い。ほら、自己紹介しろよ」

「え？　ちょ、ちょっと！　あたしまだ死にたくないよ！！」

軽く背中を押して自己紹介を勧めるラルフさんだが、ネコミミの人は露骨に怯えた様に前に出てこない。い。一体どんな説明をしたんだろう？

「だ、大丈夫ですよ？　シアさんは、そう簡単に誰かを傷つけるような人じゃありませんから」

「そ、そう？　それじゃ、自己紹介ね。……！？　ナイフ出してる！　どこから！？」

シアさんはいつの間にかナイフを作り出していた。

「シアさん？」

「冗談です」

冗談なら早くナイフ仕舞って！！

「え？　自己紹介していいの？　駄目なの？　それともあたしって、ここで死ぬの？」

「そうなると連鎖的に俺も死ぬんだが？　助けてシラユキちゃん！！」

は、話が続かない！　私が頑張るしかないか……

「あはは……、本当に大丈夫ですよ、シアさんは優しい人ですから。ちょっと怖い時もありますけどね」

「照れますね……」

あ、ホントに照れてる。珍しいものを見たわ。

「あたしは、ナナシ・イェル。名前が無いから名無しね、姓は貰い物。見ての通り冒険者、Ｃランクだよ。年は、二十四。武器は……、っと、見せないほうがいいか、子供に見せびらかすモンじゃないね」

「名無し、さん？」

名前が無い？　どういう意味だろう？

「捨て子だったんだあたしって。その辺は気、使わなくてもいいよ。あたしも全く気にしてないからさ」

おっと、深く聞かないほうが良さそうだ。本人全然気にしてないっぽいけど、私が気にしてしまいそう。

それにしても、二十四か……、全然そうは見えないなー。まだ十代前半でも通じるよ。

「はい、ごめんなさい。あ、ええと、私はシラユキです。シラユキ・リーフエンド、十二歳です。よろしくお願いしますね」

軽くお辞儀。礼儀作法とかは一切習ってないけど、これくらいはね。

「うわー、リアルお姫様だよ、ちょっと感動。お姫様にお付のメイドさんかー。女の子の夢がここにあるね」

女の子の夢？　そうなのかな……？

５０ｍの範囲に雷を撒き散らすお姫様と、最低でもＡランクの強さのメイドさんが？

他の国ではきっとそうなんだろう……。無いわ！

「そっちの、ええと、バレンシアさんは……」

「メイドの事などお気になさらずに」

「はい！　気にしません！！」

自己紹介拒否!?

シアさんホントに他種族の人嫌いなんだ……。どうしてなんだろう？

「あ、そうだ。二人とも今お暇ですか？　よかったら一緒にケーキでも……」

「お？　いつもの店か。奢りなら行くよ」

「いいですよ。ふふ、ラルフさん一回も払った事無いじゃないですか」

毎回私、と言うか、国持ちだよ。

ラルフさんとは町中で会うたびに、色々なお話を聞かせてくれたり、お買い物にも付き合ってもらってるからね。これくらいは当然のお返しというものだ。

「何やってんのアンタは!?　お、お姫様だよ!?　お姫様に集るな！　アンタが払いなさいよ！！」

「だって、ケーキとか甘いものばっかりだしなあの店。自分の金で食う気にはならないって」

男の人ってそんな感じだよね。私も肉料理とかは進んで食べようとは思わないし。

「そういう問題じゃない！　な、何で今まで生きていられてるんだろうコイツは……。い、いいのこれ、シラユキ様」

ナナシさんは普通の人っぽいね、お友達になれそうだ。そのためにはまず……

「呼び捨てでいいですよ。できたらお友達になってくれると嬉しいです。ナナシさんも一緒に行きませんか？　お代は持ちますから」

兄様のこともさん付けだしね。きっとお友達のはずだ。

うん？　兄様のお友達で、獣人の女の人？　何か覚えが……

「よ、呼び捨ては……。ラルフはちゃん付けだっけ？」

「ああ、お姫様って言ってもまだ子供だしな、それにルードの妹だぜ？　様付けすると逆に怒るぞ」

「その辺りはルーディンさんと同じなんだね。それじゃ、あたしもシラユキちゃん、でお願いしようかな」

「はい！　敬語とかもやめてくださいね！　やった！　お友達が増えた！！」

獣人の人のお友達だ！　これでモフれる！！！　後でお願いしてみよう。

「うはー、何この可愛さ、ありえないわ……」

「姫様の可愛らしい笑顔が見れたので良しとしますか。消すのはいつでもできますしね。と、失礼」

シアさんも納得？してくれた様だ。……消す？

「バレンシアさんは……」

「メイドさんにしとけ、俺も名前しか教えてもらってない」

「うん……」

二人ともお店に装備を預け、お店の奥、窓から外が見えるテーブルに案内される、定位置だね。なんで毎回この席は空いてるんだろう……

席に着いてメニューを開く、シアさんはもちろん私の横に立ったままだ。

ナナシさんが何か言いたそうにしているが、気にしないでおこう。大丈夫、すぐに慣れるよ……

「好きなもの、好きなだけ頼んでいいですよ。その代わりと言ってはなんですけど、お話を色々と聞かせて欲しいです」

Cランクの冒険者だ、きっと何か、面白い話の一つ二つある筈。
楽しみだー！

「え？　この店めっちゃ高いよ？　いいの？」

「え？」

「え？」

なにそれこわい。

「高い、のかな？　そうなの？　シアさん」

ケーキ一つが大体５ｃくらいからだね。５００円くらいだ。

「普通だと思いますよ？」

「だよね？　どうぞどうぞー」

「お姫様だよ、お姫様がいるよ……。きっと金銭感覚とか違うんだね……」

「ここは俺たちみたいな貧乏冒険者が来る様な店じゃないしなあ……。あの胸当ても幾らしたのか怖くて聞け無いんだよ」

「遠慮なんてしたら逆に失礼だね。思いっきり頼もうか」

十個二十個とかはさすがに私が怒られそうだけどね。五個くらいまでなら大丈夫だろう、多分。

「太りますよ」

シアさんの冷たい一言。

「一つにします……」

「もう、シアさんはー……」

私は苺のタルト、シアさんはオレンジパイ、ラルフさんはコーヒーだけ、ナナシさんは、チョコか苺のショートか悩んでいたので、私が二つとも頼んだ。

「これが格差社会か。ケーキ二つに飲み物一つで１５ｃだよ。私たちが一日働いた分の三分の一くらいだね……」

「ナナシは結構稼いでる方だろ、これくらい普通に払えるんじゃないか？」

「うん、払えるんだけどね、中々そうはいかないもんだよ。稼いだ分使っちゃってる感じだからね、あんまり貯まっていかないんだよねー」

うーん……？　何やら反応が……？

あ、丁度いいや、お仕事の報酬の話でもしてもらおうかな。

「冒険者の人にとっては１５ｃって大金なんですか？　お仕事一つで結構報酬貰ってそうな感じがするんですけど」

大体一日５０ｃくらいかな？　大変そうな依頼ならもっと貰ってると思うんだけど。

「大金と言えば大金だよ。あたしたちは家無しだからね、宿代もかかるし、毎日の食事代だってあるからね」

「後は、装備の手入れや修理買い替え、外で必要なモンやら色々買わないといけないしな。あまり無駄遣いは……、やべえ……」

「ごめんなさい……。私、嫌味なことしてましたよね……」

二人の明るさに忘れてたよ。私はお姫様だから何もしなくても生きていけるんだった……

「いやっ、ちがっ！　別に嫌味とか思ってないって！　やばい！今日はルードいないし、マジでヤバイ！！！」

「き、気にしすぎだってシラユキちゃん！　お姫様は嫌味なくらいで丁度いいんだよ！」

「フォローになってないぞそれ！！！　この子無茶苦茶自分責めるからやめろって！」

「なんと言うか、聞いてた以上に優しくて繊細な子なんだね。ホントお姫様って感じだよ」

二人が全然気にしてないのは分かるんだけどね。あー、やっちゃったなー

私は金額だけ見てたんだ。二人は労働の対価として報酬を貰ってるんだよね。生きていくためのお金を。

「だ、大丈夫です。ごめんなさい、暗い空気にしちゃって」

「よかった……、焦ったー！」

「メイドさんも何も言ってこなかったし、そこまで焦る事も無かったかな？　ラルフが大袈裟すぎたんじゃないの？」

「そう言えばそうだな……。どうしたんだメイドさん？　いつもなら既にナイフが飛んで来てると思うんだが」

さすがにこのお店の中じゃ投げないよ、冒険者ギルドの中だと投げまくってるけどね。

おかげでギルドのテーブルは穴だらけだ、そのうち弁償しよう……

「姫様も日々成長されているんです。私もこれくらいの事で動じてはいけませんからね」

シアさんが過保護卒業！？　そ、それはちょっと寂しいな……

「まあ、暗い夜道は気をつけた方がいいと思いますよ？　深い意味はありませんが」

にっこりと笑って言い放つ、しかし目は笑ってない。やはりシアさんだった！

「ごめんな、ナナシ。俺たち死んだわ……」

「ええ！？　ちょっ！　死ぬならラルフだけで死んでよ！！　……ああ！　あたしのせいか！！」

「シアさーん？」

「もちろん冗談です」

何かシアさん機嫌がいいね？　なんとなくだけど。

その５５（後書き）

続きます。
十二歳編一人目の新キャラ登場です。ネコミミは素晴らしいな……

今回から人物描写もある程度は入れていく事にしました。
これ以前のキャラはその内に『裏話』の方で書こうと思います。

その５６

「ウマっ、あ、失礼。な、何これ、美味しすぎるんですけど……」

「ナナシは結構甘いの好きだよな、俺はこの店だとミートパイくらいしか食えるもん無いんだよなー」

「姫様御用達、それはつまり、リーフエンド王家御用達という事です」

ここってシアさんのオススメのお店じゃなかったっけ？　王家のメイドさん御用達なんじゃないのか？　まあ、いいか、私が好きなお店には変わりはない。

私が冒険者ギルドでこのお店の事を結構話しているので、最近は冒険者の人もそれなりに来店しているらしい。

お店の人も最初のうちは対応に困ってはいたが、今では装備を預けておける棚まで用意してある。客層が増えた事に喜んでいたよ。

王家御用達？　という事もあって、一般の人のお客さんもかなり増えたみたい。たまに王族の談話風景を見る事のできるお店として評判だ。

何故か苺とアップルパイとオレンジジュースは絶対に切らさない、素晴らしいお店、だ。

ごめんなさい私のせいです！！

「あのー……、し、シラユキちゃん？」

ナナシさんが遠慮がちに話しかけて来た。

可愛いなこの人……。猫っぽいのがさらにいいね！　家のメイドさんになってくれないかな……

後で尻尾をモフらせてもらおう。

「いいですよ。あんまり沢山だと私が怒られちゃいますけど、後三、四個くらいなら。いいよね？　シアさん」

テイクアウトで頼んでもらってもいいくらいだ。冷やす魔法が一般化しているので、持ち帰りもしやすいんだね。

「ええ、これが最期のお食事になるでしょうし、どうぞどうぞ」

「やっぱり死んじゃうんだあたしたち！！！」

「俺もかよ！？　え？　俺の最期の食事ってコーヒー一杯？」

「あ、ミートパイ追加します？」

うんうん。最期の晩餐がコーヒーだけは悲しいよね。む、晩餐は夕食か。最期のおやつ？

「最期っていうのをまず否定して！！！」

「姫様、どうぞ」

追加で頼んだアップルパイを切り分け、私の前に出してくれるシアさん。

「うん。ありがと」

「はぇー」

ん？　なにやらナナシさんから視線が？

「あ、ごめん。お姫様だなーって思ってさ」

お姫様ですから！　でも、そうなのかな？

「そう、ですか？　私はあんまり、自分がお姫様だって言う自覚は無いんですけど……」

「一般人にメイドさんは付かないから！　やっぱこの子何かズレてるんだよな。面白いわ」

ボケたつもりは無かったんだけど、ラルフさんに突っ込まれてしまった。

「ああ！　言われて見れば……」

おお……、私全力でお姫様だった！　もうこれが当たり前すぎてなんの違和感も感じて無かったよ……

まずいね。もしかして、世間様との認識のズレが凄い事になってるんじゃないだろうか。今さら不安になってきてしまったよ。

「あたしも昔は女の子だったしね、そういう生活に憧れもしたものだけど……。今はこれでよかったと思えるんだよね。何をするにも自分の責任って言うのはあるけど、自由ってのはいいもんだよ。なにより、楽しいんだ、今」

「ナナシさん……」

冒険者は自由、か。その分責任が重いが、それ以上のよさがあるんだろうね。

「ナナシの子供の頃って確か……、おっと」

あ、ナナシさん自分の事捨て子だったって言ってたっけ。いくら本人が気にしてないとはいえ、あまり突っ込んで聞くことでもないよね。さっさと話を変えよう。

「それじゃそろそろ、お仕事のお話、聞かせてもらえますか？」

「何この心遣い。この子ホントに十二？」

「ああ、さすがお姫様だよな。でも、基本は見たままの子供だよ。変に構えず、その辺にいる子供と同じ感覚で話せばいいさ」

あっさりバレちゃったよ。さすがに不自然すぎたね。私もシアさんみたいに上手な話し方ができるといいんだけどなー……

「仕事の話って言ってもさ、どんなのがいい？　あたしらまだCランクなりたてだし、そんな冒険話とか無いよ？」

おや？　ナナシさん何か自然体と言うか、緊張が解けたっぽいね。ラルフさんもたまにはいい仕事するもんだ。

ナナシさんもラルフさんと同じで、Cランクに上がりたてなんだね、やっぱり一人で熊も倒せちゃう強さなんだろうか……。全然そうは見えないよ。

「最近した仕事の話でいいか。ギルドの方のが聞きたいんだよな？」

「はい！　ど、どんなお仕事したんですか？」

「ちょ！　可愛い！　メイドさん！　この子抱きしめてもいいですか！！」

何急に！？　お、お仕事のお話は……

「死ぬ覚悟でどうぞ？」

「諦めます！　しっかし、ホントに可愛いわ……。さっきのキラキラした目、やばいねありゃ」

どうやらまた、好奇心全開の子供の目をしていたようだ。恥ずかしい……

「一番新しいのだと、プレベアの肉採りだね。頼まれた分の量以外

は食べちゃっていいから、あれ、いい依頼なのよ」

「ああ、美味いよなあれは。余った分は売れるし、ホントいい依頼だよ」

熊肉かー、ちょっと食べてみたいな。

危険な動物の素材、と言うかお肉か。そういう依頼もあるんだね。

私はギルド内の依頼掲示板見せてもらえないから、どんな依頼があるのか自体知らないんだよねー

あ、素材と言えば、爪とか牙は何かに使えるんだろうか？　武器防具の素材にしたりできるのかな？

「お肉以外に爪とか、魔物の素材って言うのかな？　そういう物はどうするんですか？」

「うん？　捨てるよ？」

「爪なんて何に使うんだ？」

あっるぇー？　またこの反応だよ！　お前は何を言ってるんだ？的な反応だよ！

「えと、その……。魔物の部位って、武器とか、そういう物に使えるんじゃないかなーって思って……」

「普通に鉄でいいだろ？　態々そんなモン使わなくったってさ」

えー……。鉄より軽くて丈夫そうな気がするんだけどなー

「ああ、違うよラルフ。シラユキちゃんが言ってるのは、鉄以上の強度がある魔物の爪とかあるんじゃないか、って事じゃない？　だよね？」

「あ、はい。それで軽かったりしたら、装備に使えるんじゃないですか？」

そうすれば、重い鉄装備より早く動けるようになるだろうし、安全にも繋がるんじゃないのかな？

「軽かったら武器にならないよ？　それに、そんな固かったら加工できないんじゃない？　まあ、考えは面白いと思うけどねー」

「一応そういった物も無いことも無いのですが、やはり一般的ではありませんね。錬金ギルドの作っている金属以上の物は早々ありませんしね」

シアさんが補足を入れてくれる。

錬金ギルドとは、金属の製造、効果の研究、新素材の開発等など、金属全般に関わっているギルドだ。錬金術とは一切関係はない、錬金術という技術自体あるのかどうかも不明だ。

そうか、軽い武器って何の意味も無いか……。仮に加工ができたとしても、その加工に使った金属とかそういうのがあるなら、そっち使ったほうがいいよね……

げ、現実的だなぁ……。って言うか、これが現実か。

よし！　この話は忘れよう！　忘れてもらおう！　絶対からかわれるよこれ……

「ぷ、プレベアって大きな熊なんですよね？　それを一人で倒しちゃうんですか？　ラルフさんも試験で一人でやっつけちゃったんですよね？」

「お？　また話逸らしたな」

言わないで！　なんで簡単に気づかれちゃうのかな、もう……

「気づいても言っちゃ駄目だってば。ごめんねシラユキちゃん。いくらCランクになって一人で受けれるようになってもね、そんな何でも一人でやるなんて危ない真似はしないよ。試験だけ」

「一人だけで町の外に出る、っていうのがそもそも危険だしな。さっきの話のプレベアだって、俺とナナシの二人でやったんだよ」

二人でも凄いわ……。やっぱり先制目潰しがあっても一人はきついかー

「し、シアさん。どうやって戦ったか聞いてもいい？」

一応確認を取っておこう。血生臭い話かもしれないしね。

「ええ。相手は魔物ですからね、聞いておいて損は無いと思いますよ」

「よかった。ラルフさん、ナナシさん、聞いても大丈夫ですか？」

一応二人にも確認を。個人専用能力を使った、とかなら聞いてはいけないと思うし。

「いいよいいよ。別に隠すことなんて何にも無いし、一般的な方法、でもないか……」

「とりあえず俺らがやったやり方を話せばいいよな」

「うん。お願いします」

た、楽しみだ、ちょっと怖いけど。実際のCランク以上の冒険者の戦い方か……

「プレベアの縄張りは分かりやすいからね、探し出すのはそんなに難しく無いのよ。これは後で図鑑でも読んでね」

「奴等って勘がやけに鋭いと言うか、縄張りに何か入ると穴倉から出て来るんだよ。んで、見つかったら全力で襲い掛かってくる。結構早いんだぜあれ、でかいのにさ」

「でっかくて早いって言っても、馬鹿正直に真っ直ぐ突っ込んでくるからね、まずはしっかり落ち着いて目潰し。外しても慌てずに確実に当てるんだよ。あたしは器用な方だから大抵は一発成功だけどね」

あのえげつない目潰しだね。

真っ直ぐ来てる相手でも、走って突っ込んでくる熊の顔に命中させるって、結構凄い事なんじゃないのかな？

「外しちゃったら、どうなるんですか？」

目の前まで来たら、まさか、終わり？　うわ、怖い……

「死んじゃうんじゃない？　その程度もできない奴が冒険者になって、さらにプレベア討伐に参加する事があるとは思えないけど」

あ、そうだね。自分の命が掛かってるんだ、そういうスキルは全力で磨くはずだよね。それが最低限必要なレベルか……、冒険者って凄いね。

失敗は視野に入れない。９９％成功する状況で行動するのが普通か。残り１％は運だね。

「当てたら全力で逃げて、まずは様子見だね。暴れだすし、まだ近づかない。足り無そうならもう何個かぶつけるね。目潰し袋安いし」

「えげつなーい！」

声に出してしまった！

「あはは。お姫様、じゃないや、エルフからするとそうかもねー」

「ああ、エルフの冒険者ってすげえよな。一人いるだけでもう安全は決まったようなもんだし」

「え？」

いくらエルフが最強種族でも、一人いるくらいでそんな変わらないでしょ。

「あれ？　シラユキちゃんは知らないのか。エルフの冒険者って、登録してすぐCランクから始まるんだぜ？」

いきなりCランクから！？　何その破格の高待遇は！

「ぶっちゃけエルフが一人いればさ、プレベアなんて見てるだけでいいんだよね。いやー、マジで凄いわエルフ」

「メンバーに一人いたら俺たちのやる仕事なんて夜間警備くらいだよ。普通は交代で寝るんだけど、エルフはちょっと特別に扱っちゃうよな」

「そうそう、それ以上に楽させてもらえるしね。もっとエルフの冒険者増えればいいのに……」

「この町エルフは確かに多いんだけど、冒険者のエルフって一人もいないよな。たまに他の町から来て、滞在ついでに何か仕事やる人はいるんだが……。あ、一人いたわ」

ミランさんを指差して言うラルフさん。

あ！　ミランさん冒険者だった！！

え、え？　えー？　駄目だ、全く想像できないんですけど！　今もぼーっと暇そうにお菓子つまんでるよ？　なんという怠惰な受付だ！

「み、ミランさんは確かBランクですよね。どれくらい強いんですか？」

「ラルフ百人いても勝てないよ。ミランさんめっちゃくちゃ強いか

らね、プレベアとか十秒も掛からないって」

ミランさん怖いわー！　そ、そんなに強いんだBランクって……

今まで通り話せるかな……。敬語が出てしまいそうだ。

「姫様でも余裕で倒せると思いますよ。と言うか倒せます。プレベアを前に落ち着ければ、という前提がありますが」

「その前提からして絶対無理だよね……」

落ち着いて少し強めの電撃の槍で貫けば即死、かな？　私怖いわー……

「シラユキちゃんは戦うなんてしないでくれよ？」

「ふふ。そんな怖い事しませんよー」

しない、したくない、考えたくも無いね。

「話戻すよー。それでさ、ひいひい苦しむわけよ。目に入る、鼻に入る、口に入る。口に入ったら喉にも行くしね。あれ？　確かに言われて見ればえげつないね……」

あはは、えげつなーい！

「あ、俺食らったことあるぜ？　すぐ洗っても一週間くらい痛み続くし、味も感じないし、辛いのなんのって」

何やってるんだか……、自爆でもしたのかな？　風向きにも注意しないといけないよね。

「取り扱いには気をつけないといけないんですね。ラルフさんはどうして当たっちゃったんですか？」

「エルフの冒険者に求婚」

「そ、その程度で済んでよかったですね……」

危ないよ！　その場で殺されなくてよかったよ本当に……

「暴れるのが収まったら後は、遠距離から弓でも射るのが定石なんだけど、今回はラルフがいたからね」

「おう。一撃で首飛ばして終わりさ！　すげえだろ？」

「く、首……？」

一撃で首を飛ばす？　剣で切り飛ばしたんだよね。あのサイズの剣ならそれも可能なのかな。

そ、想像しちゃった……

「あ、あれ？　ここは、ラルフさんすごーい！　とか褒められるところだと思うんだが」

「アンタねえ、もうちょっとマイルドな表現にしなさいよ。お姫様なんだよ？」

確かに凄いよ、熊の首を一撃か。それもかなり大きめなんだよね。3、4m？

「あ、大丈夫ですよ。ちょっと想像しちゃっただけで。や、やっぱり血が噴出したりするのかな……」

「噴出すって程でも無いけどな。ピュッ、ピュッ、てさ。心臓が動いてるうちはその間隔で出るんだよ」

また想像しちゃったあああああああ！！

「だからアンタの表現は生々しいんだって！　シラユキちゃんもそんな事聞くモンじゃないよ？」

「は、はーい……」

「あらら、すっかり元気無くしちゃったよ……」

「元気の無い姫様も可愛いです。あ、ラルフさんは後で、そのプレベアと同じ目に遭わせて差し上げますね」

「やめて！！」「やめてあげテ！！」

「あっはは。楽しいねこれ、いい友達ができたよ」

ナナシさん楽しいし、面白いし、可愛らしいし、何よりいい人だねー。

本当にいいお友達ができちゃった！

その５６（後書き）

まだ続きます。

これくらいは残酷描写に入らないですよね？　ちょっと基準が分からないです。

Ｒ１５はどうなんだろう……、エロフですしね。

その57

「ギルドの依頼話なんて面白くもなんとも無いだろ？　多分雑務依頼の方が、仕事が色々ある分面白い話も多いと思うぜ？」

「うんうん。ギルドの依頼は報酬が多いけど危険だからね。日数も掛かるし、即金作るならやっぱ雑務依頼だよね」

「そうなんですか？」

「俺たち軽く話してるけどな。あー、言っていい？　メイドさん」

「姫様、ギルドの依頼は命がけなんですよ？　それだけは忘れないでくださいね」

ラルフさんの代わりにシアさんが答えてくれた。

「あ、私また……。うう……、ごめんなさい」

「子供だからしょうがないって。あたしらも怒ってないよ。でも、あんまり血生臭い話はきかせたくないかな。ギルドの依頼ってのはそんなモンばっかだよ」

二人は軽く話しているが、実際は一つのミスが死に繋がる状況の筈だよね。

それに、ギルドの依頼の殆どは討伐系、生き物の命を奪うお仕事か……

またやっちゃったよ。何か、どうも、駄目だね。私はやっぱり世

間知らずのお姫様なんだなー……

「お、そうだそうだ。昨日やった依頼でルードに会ったんだよ」

「え!?　何でルー兄様が?」

兄様が依頼を出したとか?　それはないよね……

「る、るーにいさま……。可愛い……」

子供っぽい呼び方でごめんなさいね!　でももうこの呼び方が普通になっちゃってるし、多分一生直らないよ。

「森の中の採取場までの護衛、と言うか荷物持ちの依頼だったんだけどな?　採取場ってエルフが管理してるんだよ」

うん。森の中だもんね。

森の中にはエルフしか入ってはいけない、という訳でもない。集落の方へ近づかなければいいのだ。

結構アバウトな表現だが、見回りが常に回っているので奥に迷い込む人も出ない。

あからさまに故意の進入だった場合でも、あっさり見つかってあっさり捕縛されてしまうらしい。

森の中には動物も普通に住んでいる。中にはそれなりに危険なものもね。

でも、何故かエルフを襲うような事は決して無い。逆に、エルフが狩るような事も無い。

他種族は普通に襲われてしまうのだが、採取場までに出会う事は殆どないらしい。絶対会わない、という保障はないので、やっぱり護衛は必要なのだ。

護衛だけだと、ただ着いて行くだけの仕事になってしまう。それなら、最初から荷物持ちも仕事に入れての募集にしてしまえ、という感じかな。

「何でか知らないけどさ、ルードが採取場の見張りしてたんだよ。王族だろ？　あいつ。もう依頼主がビクビクしちゃってさ。護衛が俺でよかったよマジで」

何やってるんだ兄様は……

昨日、昨日ね、何があったっけ？　そういえば昨日の兄様はやけに機嫌がよかった様な……

兄様の機嫌がいい時は、えーと。私といる時は大体機嫌いいね……

「その依頼主って、あの人？　魔法薬のさ」

「ああ。よく分かったな」

「有名な人なんですか？」

魔法薬？　森に採取って、薬草とかかな？

調薬ギルドの人なのかもしれないね。一回は覗きに行ってみたい

な。

「ある意味有名。あたしはあんまり好きじゃないな、いい人なんだけど」

「ひがむなひがむな。生まれ持った物はどうしようもないさ」

生まれ持った物？　ひがむ？

「胸？」

「おう、あれは凄いぞ。一回でいいからもん、おっと、何でもない……」

「なるほど、敵ですか」

「敵ですね」

「敵だね」

「何で敵！？」

なるほど。兄様は事前にその情報をどこからか仕入れて、待ち伏せしていたと言うわけか。王族が何してるのよ！！

「ねえラルフさん？　ルー兄様はその人に何かしちゃったり、してませんでした？」

多分、いや、絶対揉んでるよ！　姉様に言いつけてやるんだから

！！

「いんや？　特に何も無かったな。問答無用で揉みに行くと思ってたんだけどなー」

「ええ！？」

そんな馬鹿な！　どんな人か知らないけど、兄様が何もしないなんて……

「え？　ルーディンさんがあの胸見て何もしなかったの？」

あ、やっぱりナナシさんも兄様の趣味は知ってるのね。

「じっと見つめてはいたけどな。そのせいでまた余計にビクついちゃってさ、面白かったぜ？」

な、なるほど。たぶんそれ、楽しんでたんじゃないかな……

ビクッとする度に揺れる胸を眺めて、ニヤついてたんだよきっと。

ホントに何してるのよ兄様は……

「胸ならあたしがいくらでも揉ませてあげるのにさ。何回誘っても触る程度しかしてこないのよねあの人。それだけユーネさんの事が好きなんだろうけどさー」

誘う？　触る？　獣人の女の人？　兄様のお友達？　何か忘れてるような……

「ここですね。ナナシさんは最近どんな雑務依頼を受けたんです？」

「シアさん？　何その笑顔？」

シアさんが笑顔でナナシさんに質問する。ここ？
ナナシさんはどんな依頼を受けてるんだろうね。女性の冒険者が受ける依頼、確かに気になるね。

「あたし？　一晩のお相手だね。その前もそう、あ、その前もか」

え？　一晩のお相手募集の依頼って、アレのお相手募集の……、思い出した！！！

「あれ報酬いいんだけどね。アタシも大体すぐ後にさ、そのお金で同じ依頼出しちゃうのよ。ラルフ相手でもいいんだけど、あんまり回数持たないからねこいつ。一晩どころか三回出した」

「オイやめろ！　メイドさん知ってて聞いたなこれ！！」

「ナンノコトヤラ」

棒読みだ！　ナナシさんがどういう人か知ってたなシアさん！！

「何焦ってんのよ？　シラユキちゃんの事？　十二だよこの子、分かる訳ない……って……？」

エロイ人だこの人！　思い出したよ！　兄様の友達でエロイ獣人の女の人！！

「え？　赤くなってる……？　意味分かるの！？　え？　や、やっ

ちゃった？」

「初めての獣人の人のお友達が……エロイ人……」

「何で分かるの！？　エルフの十二って言ったら全然子供じゃん！？　あ、違うよ？　あたしエロくないよー？　ただちょっとエッチが大好きなだけで……」

！！？

エッチ！　が！　大好き！？

「ナナシさんのエッチ！！　私の周りの女の人って何でみんな……」

家族はエロフ、お友達はエロイ人。はっ！？

「ミランさんは！？　ミランさんは普通だよね！？　聞きに行かなくちゃ！　行こう！」

「ええ、行きましょうか。ふふふ」

シアさんが凄く楽しそうだけど気にしていられない！　早速冒険者ギルドへ！

所は変わり、冒険者ギルド受付前。

「みみみ、ミランさん！！」

「わ！　シラユキ様こんにちは。どうしました？　慌てて」

「ミランさんもエロ……、エッチな人なの！？」

「ななな何をいきなり聞いてるんですかーーー！！！」

怒られました……

ミランさんは、エロフどころか男の人とお付き合いもしたことが無いとか。よかったよ……

ドタバタしたせいか町の怖さが薄れた、と言うか、あまり気にならなくなった気がする。

これもシアさんの策略か？　ホントに頼りになるメイドさんだよ。

その57（後書き）

ちょっと短めですが、今回の新キャラの顔見せ回はこれで終わりです。
次回からまたほのぼのーと……できるといいな……

その58

今日は色々と大恥をかいてしまった。私もああいう、い、いやらしい会話に慣れないといけないね……

じ、自分で考えるのは平気なのよ？　でも、周りで直接口に出して話されると、自分の事でもないのに恥ずかしくて恥ずかしくて。

こんなので男の人と恋愛とかできるのかな私……

「いいや、シアさんに貰ってもらおう、ですか。なるほど、お任せください。必ず幸せにします」

「そんな事考えてないからね！！！」

今はシアさんとお風呂。髪、体を洗ってもらい、湯船にゆったりと浸かって今日の反省をしていたところだ。

始めは恥ずかしくてタオルで隠していたが、今はもう全くと言っていいほど気にならない。二人とも全開状態だ。嫌な表現だね……

少し前から何故か、シアさんは私と、ほぼ毎日お風呂に一緒に入るようになった。父様ともまだたまには一緒に入ってるんだけどね。

それまでは、服を脱がせてもらったり、上がった後に拭いてもらったり、着替えさせてもらったりしてただけなんだけど……

ん？　あれ？　私、お姫様すぎない？

子供の頃、今も子供か。もっと小さい頃からからずっとそうだったもんね……。全く疑問も違和感も覚えなかったよ。

うーん……。ま、いいか。私はお姫様だし、それでいいや。

「シアさんって肌綺麗だよねー。お仕事してるのに指先までホントに綺麗」

「姫様、ご自分の肌の方がはるかに綺麗だという事は自覚されてないんですか……」

私の肌が綺麗？　こんな真っ白なのが？

「綺麗かなあ……。髪も肌も真っ白で、なんかさ、病弱な感じしない？」

「確かにそういった感じもしますね。体の弱い、深窓の令嬢のようですよ、もっと自信を持ってください」

「何その自身を持てそうな、持てなさそうなイメージは……」

自宅のベッドで、ずっと療養生活しているお嬢様的なイメージか。

「私って、実際体はそこまで弱くないよね？　それとも過保護にされてるからかな、今まで大きな病気も無かったのは。ちょっと不安になってきちゃったよ」

「ええ、健康そのものですよ。少し小さめではありますが……、素

晴らしい事です。ずっとそのままでお願いしますね。いつも祈っていますよ」

「まだ呪いかけてるの！？　せめて１５０！　できたらもう少し！　後胸も欲しい！」

女神様お願いします！　後これだけ！　これだけでいいですから叶えてー！！

「私が絶対に阻止して見せます、ご安心を。」

「何の安心よ！　ううー……。このまま生理来ちゃったらどうなるんだろう……。シアさん、襲わないよね？　ね？」

「襲いますよ？」

「え……？」

え？　襲う？　やっぱりシアさんそっちの趣味でロリコンの人なんだ……

「ひ、姫様！　冗談ですよ！　そんな絶望した顔しないで下さい……」

「うん……。冗談、なんだよね？」

シアさんは無言で横を向く。

「やはりロリコンだった！！　ああ、もう駄目だ、私襲われちゃうんだ……。シアさん強いし、抵抗なんてできないよねきっと……」

「ふふ、からかいすぎましたか。何度も言いますが、大丈夫ですよ？　私は至ってノーマル。それが真実です」

怖いよー、どっちが本気なのよー！　まあ、本気だったら今の体勢がすでにやばいか。

私は座高も低いから、湯船に浸かるシアさんの膝の上に座ってる感じなのよね。もたれると二つの膨らみがはっきり分かる。

シアさんは普通サイズだ。しかし私はこの普通サイズにすら到達できるかも怪しい……。泣きたい。

「シアさんはいいな。背もあるし、胸もあるし、超が付くほどの美人だし。さらに強いし、何でもできちゃうし……？　あれ？　シアさんって凄すぎない？」

か、完璧超人じゃん……

私の理想の女性像は母様だけど、シアさんも凄いね。あ、違うか、シアさんロリコンだった。このマイナス要素は相殺できないよ絶対に。

「さ、さすがにそこまで褒めて頂けると、照れてしまいますね。姫様も成人すれば、きっと素敵な女性になると思いますよ」

美人にそう言われると、ちょっとだけ自信が出てくるね。えへへ……

「シアさんの子供の頃ってどんな人だったのかなー」

言ってから、しまった、と気づいた。前、冒険者時代に増長して痛い目に遭った、的な話、しかけてたよね。

「子供の頃ですか？　実は、子供の頃の記憶は無いんですよね、気づいたら森に倒れていたのが最初の記憶です。その後すぐ生理、多分初潮が来たので、恐らく五十位だろうという事になりましたが」

「またそんな重そうな話を簡単に……」

記憶喪失？　シアさん今五百くらいだし、人生の一割の記憶が無いって事？

それに、子供時代の思い出って結構大切な物なんじゃないかなと思う。

「なので、自分の年齢は約五百、としか分からないんですよね。あ、お気になさらずに。軽い話ですよ？」

「軽くないよう……」

という事は、両親の記憶も無いんだ。森に倒れていたっていう事だから、そんなにいい理由じゃないよね。

「ああ……、泣かないでください。本当に、何も問題は無いんですよ？　気にすらなりません。記憶が無いという事は、悲しくなるような思い出も無い、という訳でして……」

思い出が無い？　何よそれ、怖い、怖すぎるよ……

「何てお優しい……。姫様が悲しく思われるのは、それだけ今、姫様ご自身が幸せという事なのでしょう。私も本当に今、幸せなんで

すよ？」

「幸せ？　ロリコンだから？」

私みたいな小さい女の子を、しかも裸で抱き締められる体勢だから？

「ふふふ。詳しいお話はもう少し大人になってから、今は信じてください。私は、この国に来て本当によかった。本当に、本当に幸せですよ？　過去なんてどうでもいい事です」

振り向いて、シアさんの顔を見てみると、とても嬉しそうな、素敵な笑顔だった。

「し、シアさんって、凄くモテてたんじゃない？　外でさ」

「ええ、告白、求婚はそれこそ毎日のように。その全てを蹴散らし、いえ、自分自身の程度を理解させて差し上げましたが」

うわあ、やっぱりか、そりゃモテるよね。でも蹴散らしちゃ駄目だと思うな！

シアさんって、同じ女性の私から見ても凄く魅力的、と言うか、普通に憧れるよ。私お姫様なのに……

「あはは……。シアさんと釣り合いが取れる人なんているのかな？　父様くらい？」

「私と釣り合うお方は姫様だけではないかと。いえ、私程度ではと

ても姫様と釣り合いはとれそうにありませんね。ああ……、本当に可愛らしい……」

「もう！　またそういう、！　な、何そのいやらしい手つきは！？ひゃあ！　やめやめ！！」

「そういえば胸は揉まれると大きくなるという伝承が」

「よく聞く話だけどある訳無いよ……。胸だけ触るのを許可します！！！」

「駄目です」

「何で！？」

それでも一回は結婚してるんだよね、それも人間の人とさ。
その話も、私が大人になって、泣かずに聞けれるようになったら話してもらおうかな……

その５８（後書き）

お風呂回でした。細かい描写は必要ありませんよね？
胸は揉み過ぎると逆に小さくなってしまうらしいですね。恐ろしい……

その59

「あれでよくね？　追いかけっこ」

「ルー兄様を追いかければいいの？」

「それだと練習にはなるけど、修行にはならんなー」

「姫様が逃げ、私が追いかける、でどうでしょう？」

「お？　それで行くか」

「う、うん！　面白そうだね！」

うふふ、捕まえてごらんなさーい、だね。

浜辺を走る恋人同士が思い浮かべられる。が、実際あんなのはいるのかな……

今日は跳躍魔法の練習。町までの道は何度か往復して大体の道筋は記憶したので、もっと速く、もっと安全に走れるように特訓するのだ。

道、と言っても実際の道を走るわけじゃない。そんな事をしたら、普通に歩いてる人にぶつかってしまう。

私たちがとるのは、家から町までの直線経路。木を避け、段差を飛び越え、真っ直ぐに進む。

まずは私が先行し、しばらくしたら、シアさんが追いかけてくる。
捕まったら、ん？

「捕まった時は何かあるの？」

「そうだな、何かペナルティがないと張り合いが無いよな」

しまった、言うんじゃなかったかな……

「おやつ抜きは如何ですか？」

「それはイヤ！！」

おやつ抜きとか！　それは私に死ねと言ってるも同じなんだよ？

「ふふ、姫様にはそれは辛すぎる罰でしたね。他には何かありませんか？」

うーん、何か程々に辛い、それでいて甘いペナルティはないものか……

「あんまり全力で逃げさせるのも危なそうだしな……。駄目だ、シラユキに何かするとか、させるとか、考えられん」

「苦手な物を食べて頂く、というのも良さそうなのですが、姫様は苦手な食材は特にありませんよね」

嫌いな食べ物とか特に無いしね。好き嫌いなんてしてたら、大きく育てなさそうじゃない？

「ああ！　考えてみたら、町まで逃げ切るとか無理じゃね？」

「あ、そっか。シアさんだもんね」

シアさん分かってて黙ってたね？　そんなに私に罰ゲームさせたかったのか……

「むう……。それでは、逃げ切れたらご褒美。捕まっても特に罰は無し、でいきましょう」

「うん！　それでいいね！」

やる気が出てきたよ、絶対に逃げ切ってみせる！　無理だけどね！！

「んじゃ、どうせ逃げ切れないだろうから、ご褒美も決めずに始めるぞ。準備いいか？」

「いつでもいいよー！」

さーて、何分逃げ切れるかな……

「シラユキが出た三分後にバレンシアもスタートな。……いくぞ、……3、2、1、行け！」

瞬間風を纏って走り出す。集中して木を避ける、足元もよく見て、とにかく速く走る！
前に進むこと以外何も考えない。避ける、走る、避ける、走る……

うん？　そろそろ三分の一くらいだね。早い早い、集中しすぎてたみたいだ。
さすがに三分以上経ったよね？　五分くらい？　ちょっとスピードを落として後ろを……、ってこのスピードでも危ないな、一旦止まろう。

一旦足を止めて風を解く。ふう……
体を動かした分の疲れはあるが、息が少し切れた程度、数分で治まるだろう。
私も随分と人間離れしてしまったものだ、でもエルフだからいいや、と一秒で自己完結しつつ振り向くと。

「姫さ」

「きゃあああああああああああああ！！！」

「姫様！？」

真後ろにシアさんが立っていた。

「あああ、まさか泣かれてしまうとは、よ、予想外でした」

「びっくりしたよう……。怖かったよう……」

兄様に抱きついて慰めてもらう。

怖かった、本気で怖かった……。多分気配を完全に消して、私の真後ろを追走してたんだよきっと。

「バレンシア、さすがに趣味が悪いぞ？」

「も、申し訳ありません！　必死で走る姫様が可愛らしくて、話しかけ、止める事を忘れていました……」

この話し方からすると、結構前からもう追いつかれてた？

「シアさんいつの間に追いついてたの……？」

「私がスタートして一分程度、ですね。久しぶりに全力を出してみました」

私が四分かけて走った距離を一分でって事？　なにそれこわい。

「ど、どうやったの？　ルー兄様、シアさんはちゃんと三分待ってたんだよね？」

「ああ、それは間違いない。しかし、早過ぎないかそれ。お前何モンなんだよ一体……」

「メイドですから」

綺麗なお辞儀で答えるシアさん。

「なるほど」「なるほど」

メイドさんってすごいねー、にーさまー

「姫様は後方の確認が全くできていない様ですね。もう少しスピードを落として、後ろもたまに確認しつつ走れるようになれるといいと思いますよ」

「そうだよねー。前に集中しすぎてたかも。もっと普通に走る感覚で使えないといけないね」

前だけを見て走る分には、もう問題も特に無さそうだね。これはもっと慣れるしかないかな。

「俺みたいに高く飛べばいいんだけどな、シラユキにはまだちょっと早いか」

高く飛ぶのもできるにはできるんだけどね、あの落ちる感覚はどうしても怖くて慣れないのよねー

そうだ、思い出した……

「ルー兄様！　シアさん！　空って飛べるの？　ジャンプじゃなく

てさ！」

「あ、ああ、飛べるぞ？　どうしたんだ急に？」

「飛んでみたいのですか？　ですが、こればかりは姫様にはさすがに早過ぎます、多分数秒で魔力が尽きますよ」

「え？　そんなに消費激しいんだ……」

うーむ、残念。

そういえば母様が言ってたね、速く飛ぶと疲れるから、蹴って跳んだ方が楽だって。

そこまで魔力を消費してしまう魔法なのか。実際に使ってる人はあんまりいないのかもね。

「見せて差し上げるくらいなら……、構いませんか？」

「ん、やって見せてやってくれ、少し高めに飛んでな」

「ルー兄様のエッチ……」

「ルーディン様……」

「う……、どうして分かった！？」

男の人ってそうだよねー。パンチラとか大好きなんだよねー

姉様と、その、エッチな事はしてるんだから、そういうのも見慣れてる筈なんだけど……。あ、別腹ってやつ？　違うか……

「下着くらい、私が飛べるようになったらいくらでもみせてあげるから。シアさんのはだーめ！」

お風呂で裸だって見られてるしね、不意打ちでもなければそこまで恥ずかしい事も無いだろう。

「分かった分かった。楽しみにしてるよ……」

とても残念そうだ。

た、確かにさ、メイド服のシアさんのスカートの中身だから見てみたいんだよね。

シアさんってメイドスキルで、ジャンプしてもまったく見えないしさ。私も見てみたいよ。変な意味でなくてね？

「それでは……」

メイド立ちのままシアさんが浮かび上がる。

「す、凄い！　凄いけど何か違う！」

「え？　飛んでますよ？」

「飛んでるよな？」

う、うん、飛んでるね、飛んでるんだけどね。何なのよこの安定感は！

シアさんは微動だにしないまま浮いていた。

「もっとさ、ふよふよ浮く感じって言うのかな。うまく言えないや……」

「仰りたい事は分かりますよ。確かに浮いている、飛んでいる、と言うよりは、空中に立っている状態に近いですよね」

そうそう！　見えない足場があって、そこに乗って、いる……

イメージは見えない板！　足場を作る！

うん、無理だった！　能力で作る！　できた！　楽すぎるでしょうこれ……

能力で膝の高さ辺りに透明な板を出して、空中に固定する。

「姫様？」

「何かやったか今？　何かそこに違和感が……」

二人とも鋭いな……。

いいや、とりあえずはできた。次は乗ってみよう。

「よ、っと……」

まずは右足を乗せる。

自分で作り出したものだから、大体の位置、大きさは分かるんだけど、やっぱり目に見えないとちょっと怖いね。

よし、ちゃんと乗れるね、しっかりした作りだ、揺れたりへこん

だりもしない。続いて左足、乗り上がる。

「おいおい……」

「ひ、姫様……？」

「できた……。飛んでるように見える？」

自分からすると、ただ台の上に乗っている感じだね。ちょっと身長が高くなったみたいで視界が新鮮だ。

他の人から見たら、きっと飛んでいるように見えるはずだ。

「あー、まったくコイツは……」

「まさか、透明な足場、ですか……？」

「うん。さすがシアさん、あっさり分かっちゃったね」

「説明は後でいい、早く降りろ、消せ、魔力は大丈夫なのか？」

「うん？　全然平気だよ？」

さすがにこの程度じゃ全く減った感じはしないよ。心配性なんだから兄様は……

とりあえず下に降りてっと。足場も消そう。

「姫様、お忘れですか？　魔法を消す場合にも魔力は消費されるという事を。一体何をお作りになられたのか分かりませんが、その、大丈夫、なのですか？」

シアさんもかなりの心配顔だ。あ！

「わ、忘れてた……。た、多分大丈夫だと思うんだけど、どうしよう。これ、自然には消えないと思う」

「これ、って、それ、何なんだよ？」

何なんだよって言われても、何なんだろうね……

力が抜けてもいいように、シアさんと手を繋ぎ、足場を消してみる。特に大きな疲れは無い、ね。

「ふう……。大丈夫だった」

「よかった……。姫様、まさか、ご自分で何を作られたのか分からないのではないでしょうね？」

あれ？　もしかして、シアさん怒ってる？

「バレンシア、全員集めろ。シラユキ、いい加減お前の能力話せ。バレンシアみたいに何か特別な魔法、持っているんだろう？」

「はい、失礼します」

シアさんは即座に家に戻って行った。

「ごめんなさい！　怒らないでルー兄様……」

兄様も怒ってる!?　は、話さなきゃ！　ど、どこから？　自分

でもこれ、よく分からない能力なのに！！

「何焦ってるんだか……。怒ってなんかいないから安心しろ、と言うかな、俺たちに安心させてくれ」

私の頭をポンポンと軽く叩きながら優しく言う兄様。

よ、よかった、怒ってる訳じゃないんだ……。やっぱり絶縁シールドの時からバレてるっぽいね。

私も自分の能力を完全に把握してる訳じゃないし、そろそろ家族のみんなに話すべきだね。

何より、余計な心配は掛けたくないからね。

「うん。帰ってみんなの前で話すね。私もそこまでこの能力については、よく分かってないんだけど……」

「そうなのか？　それはまた、お前らしいと言うか何と言うか……。まあ、俺から言えることはな」

「うん？」

「自分でもよく分かってない能力を気軽に使うんじゃねえよ！！」

「ごめんなさい！！」

やっぱり怒ってた！

でも怒られるのはちょっと嬉しい私。駄目お姫様です。

その５９（後書き）

やっと能力説明に入ります、六十話でやっと……。お待たせしました。

シラユキがどれくらいの速さで走っていたのか、というのはあまり深く考えていません。
普通に走るよりはるかに速いよ、くらいの認識でお願いします。

その60

談話室にみんなが集められた、前回と同じく秘密共有仲間の十人だ。

みんな、やっと聞けるのか、と嬉しそうだ。隠していた訳でもなかったんだけど、やっぱりバレバレだったみたいだね。

兄様が言っていた様に、みんなを安心させるためにしっかりと説明しよう。

でも、言葉にして説明するのって苦手だし、難しいんだよねー

私は今、母様の膝の上に座らせられている。逃げないから大丈夫だって何回も言ったのに……

「使いこなせているように見えていたからな、シラユキが話す気になるまでは聞かないつもりだったんだが……。自分でもよく分からない能力だと？」

「ああ、自分で作り出した物が何なのか分からないみたいだったんだよ。さすがにもう放っておけないな」

うう、危険は無さそうだし大丈夫だと思うんだけどなあ……

あ、自分の能力だからこそ言えるセリフか、みんなには分かる訳無いよね。心配されちゃうかー

「シラユキ、二人とも怒ってないから大丈夫よ？　ゆっくりでいいから、落ち着いてあなたの言葉で説明して頂戴？」

「あの雷を防いでる魔法よね？　他にも何かできたの？」

「そういや、前ん時は何も無い所から本出してたよなコイツ」

私の前世の話をした時だね。兄様にちょっと突っ込まれたけど、秘密って言って流しちゃったんだっけ……

「あの時はそれどころじゃなかったから忘れてたわ……。確かその後も、何事も無かったかの様にまたどこかに仕舞ってたわよね。シラユキ、お姉ちゃんに教えて？」

な、何から話せばいいんだろう……。あの本を出したり仕舞ったりのも、能力を使った魔法だね、これから？

ああ、違う、まずは私の能力そのものについてだね。

「ええと、私の能力、と言うか、魔法なんだけどねこれ。うーん……、何て言ったらいいんだろう。魔法を作る魔法、かな？」

一言で表すならこれだ、魔法を作る魔法。

「何だその馬鹿げた力は……。シラユキ、大丈夫なのか？　人が持つような力では無いぞそれは……」

父様凄いな、あっさり理解されてしまった。ありがたいわー

「父さんすげえな……。俺にはさっぱり分からないんだが、魔法を作るって、普通の事だろ？　何が違うんだ？」

「うん、私にも分かんない。お母様は？」

「何となくなら……。でも、考えたくないわ……。ウル、お願い」

母様に強く抱きしめられる。

兄様姉様は分かっていないみたいだが、父様と母様は心配顔だ。

そんなに危険な能力だとは思えないんだけどね。

「そんなに危ない能力なのかなこれ。便利すぎるから全く使ってなかったんだけど」

「魔法はイメージを現象に変える技術、だと教えたろう？　魔法を作る魔法、全く新しい現象を作ってしまう能力なんじゃないのか？　それは、世界を変えてしまう程の力だ、人が持つには大き過ぎる」

うん？

「現象を作る？　駄目だ、分からん」

私も分かんない。

「物が落ちる、木は燃える、火は水で消える。分かり易く言うと、新しい常識を作ってしまうんじゃないのかしら？」

え？

「なん、だよそれ……。それじゃ、さっきのあの足場は、空気に乗

ることができるっていう常識？　現象を作っちまったってのか？」

なにそれこわい。

「違うよ？　多分全然違う。そんな事はできないよ」

「何？」

「シラユキ？」

「理解したら即否定された！　不安にさせてくれるなよな……」

「理解する前に否定された！　私ってもしかして、この中で一番頭悪いんじゃ……」

姉様は一番年下なんだししょうがないんじゃないかな……

多分メイドさんズも誰も理解してないよ。シアさんは除く。

いくら女神様から貰った能力とは言え、世界の理を創るなんていうのは無理だ。それは多分、女神様にも無理だろう。

「とりあえず、分かる事、分かる範囲で説明しちゃうね。私の能力でできること、できない事を」

「あ、ああ、それがいいだろうな。ユーネにも分かるように説明してやってくれ」

「お父様ひどい！！　私ももっと勉強しなきゃ駄目かな……、お姉ちゃんとしての威厳が……」

私の能力、『魔法を創る能力』。程度の、を付けるか？　それっぽく見えそうだ。

この世界の魔法はあくまで現象を起こすだけの物。だけど、前世の私の世界の魔法はそうじゃない。魔法なんていう物がそもそも無かったんだが、それはまず置いておこう、話が進まない。

魔法は何でもできる。空を飛んだり、雷を落としたり、怪我を治したり、死んでしまった人間を生き返らせたりと様々、まさに魔法だね。

人の想像の数だけ魔法はあった。その発想は無かったわ、っていう魔法も色々あるよね。

もちろんその全てができるわけじゃない。そんな事ができてしまったら、それはもうカミサマって奴になってしまう。ちゃんと制限がいくつかあるのだ。

一つは、魔力の消費。大きな効果を出せば出すほど、比例して消費量も増える。

これはこっちの魔法と変わらないね。最大魔力量を超える消費の魔法は使えない。使ったらどうなるんだろう、怖くて試せないね。

二つめ、生き物に関する魔法は作れない。

人間を含め、生き物を作り出す、死んだ生き物を生き返らせる、なんて事は不可能だ。生き物に関係している事だが、怪我を治す程度の事はできる。しかし、手足を追加したり、身長を伸ばしたり…

…、胸を大きくする、なんていう肉体改造的な事はできない……！！
絶望した！！！　……失礼、取り乱しました。

最後の三つめ。私の想像を超える事はできない。
これが一番大きいね。簡単に言えば、知らない事はできない。当たり前か。逆に言えば、想像できる大抵の事ができてしまう。

一つめ二つめには例外もある。魔力が無くなったら、回復したらいいじゃない？
これは、魔力というものを理解してしまえばできてしまうだろう。謎パワーとしか分かってないのは予想外だったわ……。現状は、いや、今後も無理そうだ。

次に生き物、これは私の常識内での生き物になる、という事。
木だって花だって生きてるんだよ？　それなら切り倒せば死ぬんじゃね？　という考えで、木材状態の物は作れるのだ。
金属だって作れるよ。シアさんみたいにナイフを作り出すこともできる筈だ。あれ？　金貨を増やせば……？　やめよう。
できるというだけで、まだ実際に能力で何かを作り出した事は一度も無い。物を作り出すのは必要性をあまり感じない魔法だね。私の知ってる物しか作れないし、欲しい物も特に無い。

話を戻そうか。
ゲームに出るようなホムンクルスは生き物だよね、作れないと思う。私の常識的に、意思があって、それを表現できる者を作り出す事は無理だろう。
それなら人工知能のように、予め応答パターンを作ればいいんじゃないか？　と思ったが、私の想像を超えてしまう、理解できないので無理だ。

私の記憶、ゲームやアニメ、小説などの記憶は保護してもらっている。この記憶があれば、ゲーム内の魔法の再現も可能だろう。大体はこっちの世界の魔法でできてしまうので、あまり役に立ってはいないのが現状なんだけどね……。

回復魔法の再現は能力のみでしかできなさそうだ。役に立ちそうなのはこれくらいしかないんじゃないかな？

「さっき二人の前で使った、ええと、『見えない足場を作る魔法』もね、透明度が高くて、丈夫なガラスを作り出した感じかな？　あ！　歩いてる人の足元に設置しておけば……、ふふ、悪戯に使えそうだね？」

今度早速兄様に仕掛けてみよう。

「悪戯に魔法を使うなよ……。やるときは俺も呼べ！」

さすが兄様！　でも仕掛けられるのは兄様なんだよ？

「お父様は分かった？　私には、凄いっていうのは何となく分かるんだけど、危険にはとても思えないわ」

だよね？　全然危なくないよね？　何でもできるって言っても、私の常識内での何でも、だしね。

「なるほどな、少し深く考えすぎていたか……。危険には変わり無いが、大丈夫だな」

「ええ、シラユキだもの、絶対大丈夫よ」

「悪戯くらいしか思い浮かばないだろ。大丈夫だ」

これでみんな安心かな？　なんか遠まわしに子供だから大丈夫って言われてる気もするが……

いいや、気にしない！

「うん！　大丈夫、危なくないよユー姉様！！」

母様の膝から降り、姉様に抱き付く。

「ふふふ。もう……、急に全員集められるから、焦っちゃって構えすぎてたみたいね。でも、便利そうだけどそれに頼りすぎちゃ駄目よ？」

姉様が私のほっぺをグニグニしながら言う。

「わはっへる。はだはんこひかふかってはいひへ」

分かってる。まだ三個しか使ってないしね。

「三個？　っと、ごめんね」

もっとグニって欲しかった……、後で全力で甘えよう。

「雷防ぐのと、見えない足場と、後は何だ？　言え、俺たちに隠して何か使ってやがったなこいつめ」

「最初に話してた、本を出し入れする魔法じゃないの？　そうでしょシラユキ」

さすが母様。

「おっと、また忘れてたな。あれはどんな魔法なんだ？　物をどこかへ仕舞っておけるのか？」

「うん。『収納と保存の魔法』だよ。名前の通り、仕舞う魔法と、それをその状態のまま保存しておく魔法。実はこれ、女神様に作ってもらったんだけどね。原理はよく分かんないんだけど、便利そうだよねー」

某未来から来た青いロボットのポケットに近いかな。私の影になった部分から出し入れする事ができる。本を取り出して見せた日より前に一度だけ、暗闇状態で使ったらどうなるかの実験をしたっきり、全く使っていなかった。

ちなみに結果は取り出せたよ。完全な暗闇なんていうものはありえないしね。手のひらをちょっと下に向けて影にすれば、どんな状態でも取り出すことができた。

私の影以上の大きさの物も出し入れする事ができる。実際手の影から本を一気に六冊出す、なんていう事ができたからね。

この魔法も例に漏れず、生き物関係、つまり、生きているものは入れる事ができない。死体ならＯＫよ。……怖い。

「本を仕舞っておきなさいって、頭に中に使い方を書き込まれた感

じかな。それを自分の能力で作ったの」

「め、女神の作った魔法か、なんと言うか……、スケールが大き過ぎて何とも言えんな」

能力の説明より、女神様が作った魔法っていう事を驚かれてしまった……

まあ、神様だし当たり前か。あれ？　もしかしてこの魔法、凄いのか？

そういえばあの時はまだ転生前だったなー……。その時に仕舞った本が出せたっていう事は、多分魂的な物に収納されるんだろうか？　それはちょっと怖いな……

「さすが私の可愛い妹！　女神様もメロメロだったのねきっと」

「やはりそうか！　女神ですら陥落する愛らしさ、シラユキはこの世界の宝だという事が証明されたな！！」

「ええ、そうね。私たちも鼻が高いわ」

多分違うと思うけど……、もっと褒めて！！

「何かよく分からんが、楽しいな！　よっしゃ！　祭りだ！　祭りするぞ！！　今からな！！！」

「よし！　やるぞ！！　ルー！　手当たり次第誘いに行くぞ！！」

また二人とも、止める間もなく窓から飛び出していってしまった。
もうこの流れにも慣れたよ……

「シラユキって天才だし、可愛いし、あんまり必要なさそうね、その能力」

「だよねー。今は子供だからしょうがないけど、大人になれば普通の魔法で充分だよねー」

絶縁シールドだって、雷の魔法を使わなければ必要ないしね……。
天才で可愛いから必要無い？　しまった！　普通に返事をしてしまったよ。

「ふふふ、でも残念ね？　背を伸ばす事はできないんでしょ？　ふっふふふ」

「そうなの！　何でできないのよー！」

肉体改造？　の能力をくれればよかったのに！！　女神様の……、うん、女神様は大好きだ、悪口は出てこないね……

「練習するのよ！　開発するのよ！！　完成したら私の胸もお願いよ！！！」

「分かった！！　頑張るよユー姉様！！！」

やっぱり姉様も気にしてたんだね。でも、私から見たら充分大きいんだよ？　それ。

「二人でお兄様のを挟んであげるのよ！」

「うん！　……！？　ユー姉様のエッチ！！！」

「二人とも可愛いわ……。あ、その時は呼んでね？　三人でしてあげましょ？」

「ええ！？　お母様はダーメ！　私たち二人でしてあげましょうねー？」

「しないよ！　しないからね！？　二人ともエッチエッチー！！」

まったく、このエロフどもめ……、あ、エロフは褒め言葉だった……

何か他に、ダメージが出そうな言葉を考えなければ……！

その６０（後書き）

チートの部類に入ると思われる能力ですが、シラユキからしてみるとあんまり意味ないですね……。女神様涙目。

次回からまたほのぼの話に、なるといいな……

その61

「ねねね、シラユキの能力でさ、食べ物って作れないの？」

能力説明から開放されたと思ったら、早速今度は私付きのメイドさんズからの質問攻めの様だ。メアさんが楽しそうに質問して来る。

「作れると思うよ？　私が実際に見て、実際に食べたものなら、だけどね」

「うわすっご、なにその便利魔法……。もう姫がいれば何もいらないんじゃないかな……」

自分の魔力を食べてる感じがして、なんか嫌な感じもするけどね……

「何か作ってもらっちゃおうかなー。服とか、宝石とか？」

「食べたい時にアップルパイとか出せるの？　う、羨ましい……」

私の能力発表の後も、別段誰も何も変わらなかった。まあ、当たり前か。

多分世界を変えてしまう程の力を持ってたとしても、この森の住人なら、「ふーん、凄いね」程度で済ませてしまいそうだ。

「調理済みの料理は恐らく無理でしょう。姫様ご自身が、全ての食材をどのように使って、どう調理しているかを完全に理解しているのなら話は別だとは思いますが」

あー、確かに。

使っている全部の素材、細かい調味料、隠し味等など……、全部知ってなきゃ駄目なのかもしれないね。これは要実験かな。味と見た目さえ分かってればポンと出しちゃえる気もするけど……

「そうなるのかな？　それでも多分、リンゴをそのまま一個、とかなら出せると思うよ。でも、物を直接作っちゃうのは魔力の消費が凄そうなんだよね。まだ使わない方がいいのかな」

見えない足場は空気を固めるイメージで、直接何かを出した訳じゃなかったからね。多分だけど……

リンゴを一個作ったら魔力疲れを起こしました、とか何の意味もないよね。そうなったら使い道の無い能力になっちゃうと思うよ。

「私もそう思います。最低でも成人するまでは試すのもお控えになった方がよろしいかと。私の能力と違いナイフだけではなく、どんな物でも作れてしまうという事は魔力運用の効率化も不可能に近いと思われますから」

ま、魔力運用の効率化？　なにそれ？

やばい、今の説明はさっぱり分からないや。後でしっかり教えてもらおう。

「うーん、分かった。まだまだ試すのもやめておくね」

とりあえず分かったのは、物を作り出すのはまだやめておいた方がよさそうっていう事だね。

「そっか、残念、成人したらお願いねシラユキ。それまでに欲しいものをリストアップしておこうかな」

「うん、本当にできるかどうかは分からないけどねー」

「姫ならきっと何でもできちゃうって。でも、無理はしないでよ？シアの言うとおり、まだ使っちゃ駄目だからね」

「さすが私、信用無いね！」

「あははは、ごめんごめん。んー、姫には能力なんてあっても無くてもいいよね。可愛いし」

またそれか！　可愛ければ何でもいいという考えはいい加減捨てて欲しいものだ……

「ふむ……。例えば、アップルパイを収納、保存しておいて、食べたくなったら出して食べる、という方法をとればいいですね。予め作って用意しておけばいいんです」

おお！　シアさん凄い……。私の魔法なのに、シアさんの方がよく理解しちゃってるよ。

黙ってると思ったら色々考えてくれてたみたいだね。た、頼りになりすぎるよこのメイドさんは……。ありがたいね。

「あ！　じゃあさ、シラユキに悪くなりやすい食材とかさ」

「やだよ！」

「ふふ、冗談冗談。怒らないでね」

人を冷蔵庫扱いしないでよ！　ん？　冷蔵庫より凄いな、収納した状態のまま保存されるんだから絶対腐る事も無いし……

あれ？　この魔法凄くね？

「グラスと、後はオレンジジュースを大量に収納しておけば……、ごくり」

グラス出して、指先の影からでも注げば……。すすすす素晴らしい！

「ぷっ、いくら女神様作の凄い魔法でも、姫の使い方はそれくらいだよね」

「ええ、安心ですね。全く不安に思う事すらありません。さすがは姫様、素晴らしいお考えです」

え？　今の褒められたの？　違うか！　また子供だって言ってるなこれは……。もう！

「うーん……、それなら、重い物を大量に運ぶ時もさ、シラユキに仕舞って運べばいいんじゃない？　今度頼んでいい？」

「イーヤ！！　フランさんは楽する事ばっかり考えて！」

冷蔵庫の次は台車代わりか！　私便利だな！！

「技術の進歩と言うものは、楽をしたい、という欲求から進むことが多いんですよ」

「そういう問題じゃないよ！」

「冗談です。しかし……、重い物の代わりに姫様を抱き上げて運べばいいんですよね……。ふむ……」

「シアさんまで！？　しないからねー！！」

「勿論冗談です」

露骨に目を逸らすシアさん。

「目を合わせて！」

「そんな！　私に石になれと仰るのですか？」

「私何者よ！！」

「ホント仲良いよね二人とも。仲良し姉妹って感じ。シア、ちょっとからかい過ぎだよ」

「おっと、これは失礼を。すみません姫様」

「うんうん。ねえ、レン。いい加減その馬鹿丁寧な言葉遣いやめた

ら？　もっと砕けた喋り方できないの？」

私から見るとメイドさんズ三人の方が仲の良い姉妹に見えるんだけど……、うん？

「え？　砕けた喋り方するシアさん？」

「そう言われましても……。確かに昔は、多少荒めな言葉遣いでしたけどね、今はもうこの話し方が普通なんです。直そうにも直せませんよ？」

荒めな言葉遣い？　シアさんが？　ちょっと想像してみようか……？

「駄目だ、想像もできないや……」

「そんなものなのかな。丁寧な喋り方以外のシアは、私も想像できないなー」

「今でも敵と判明している者にはこんな言葉遣いはしませんよ。それでも姫様の前では抑えるとは思いますが」

「面白そうだねそれ。ちょっと試しに」

「フランさん駄目！　私多分泣いちゃう！！」

この優しすぎるシアさんが、荒い言葉遣いなんて……。しかも敵対者に、だよね。いやだー、想像もしたくないよ……

「あらら、お姉さんの怖い顔は見たくないか。ごめんねシラユキ」

「まったくフランはー。私が言いたかったのはね、シアって妹か誰か、そういう関係の子がいたんじゃないかなーってね。妹扱いが上手いって言うか、そんな感じかな」

妹？　シアさん五百歳くらいだし、いてもおかしくは無いよね。子供の頃の記憶は無いみたいだから、実際は妹と言うか、その、そういう子、とか？

「レンの場合だと、妹って言うより、恋人とか愛人とか、奴隷とか？」

そう、そういう子。最後のは聞かなかったことにしよう。まったくこのエロエルフめ……。言い難いなこれ、改良の余地ありか……

「失礼な。ですが、確かに弟子の様な子はいましたよ。様な、と言うより弟子そのものでしたね」

弟子？　さ、さすが元冒険者……

シアさんのお弟子さんかー。一体どんな人だったんだろう？

「女の人？」

「ええ、エルフの女性でしたよ」

あ、笑顔。まさか……

「小さくて可愛い？」

「え？　ええ、会ってすぐの頃は子供でしたしね……。姫様？」

ふむふむ、それはそれは。小さくて可愛い女の子エルフか……

という事はさ……

「手、出しちゃった？」

「え？」

「シア？」

「レン？　まさか師匠命令で無理矢理、なんていう事は……」

「いえ、まさかそんな、無理矢理なんて事は決して。あ、何もしてません！　手なんて出してませんよ！」

「出しちゃってる！　絶対手、出しちゃってるよ！！」

ややややっぱりシアさんはそっちの人だったんだー！！！

「ひ、姫様！？　誤解です！　私はノーマルだと何度も申し上げているじゃないですか！？」

「レンは絶対ノーマルじゃないよ……」

「だよねー……。誰も信じないってそんな事」

「ふ、二人とも何を！　私は姫様をからかうのが好きなだけであって、女性の体に性的な興味などありません！！」

「わ！　シアさん怒らないで！　信じるから！　大丈夫、私は信じてるよ」

「姫様……！！」

私の言葉に感動して、半泣き状態で私を抱きしめるシアさん。

でも、からかうのが好きとかひどいよ……

「シラユキー、襲われるよー？」

「何とでも言いなさい。私は姫様にさえ信じて頂ければ、それでいいんです」

「駄目か、折角レンをからかえると思ったのに、残念」

うん。ちょっと残念だね。

「シアさんのお弟子さんかー……。どんな人か気になるね」

んー……、メイドさんじゃないよね？

「今でも生きているとは思いますが、どこで何をしているやら。別れてから二百年近く会う事も連絡をとる事もしていませんでしたからね。恐らく国外で冒険者を続けているとは思いますが……」

シアさんの言う国外とは、森の外、の意味ではなく、リーフエン

ドの管理圏内の外、と言う意味。
統治じゃなくて管理なのがこの国らしいね。ぶっちゃけ管理しているのは各ギルドらしいのだが……

「ギルドに頼んでみたら？　リーフサイドのギルドに来るように伝言してもらうとかさ」

メアさんがナイス提案をする。そんな事できるんだね。

「安否は正直どうでもいいんです、そこまでする必要は無いですよ。特に会いたいとも思いませんし」

ど、どうでもいいんだ……、冷たいなー。ああ、あれか、大きくなっちゃった子には興味無しなのか！！

「何？　仲違いしたとか？　確かにレンに付いて行くのは大変そうだからね」

「また失礼な……。仲は悪くなかったと思いますよ、むしろ良かったのではないかと。理由はただの独り立ちですよ」

冒険者としての独り立ちかー。私は大人になっても、シアさんにはずっと側にいて欲しいのにな。

お互い悪く思っては無いんだよね。それならば……

「よかった。それじゃ、ギルドの人に頼んでもいいよね？　その人の名前は？」

「ひ、姫様？」

二人を会わせてあげたい。そして、その人に私も会ってみたい。
それで、冒険者時代のシアさんの話をこっそりと聞かせてもらいたいな。

「いくらエルフとは言え、冒険者ですよ？　王族に敬意を払う者が全てではありません。お考え直しを」

「あ、そっか、ごめんねシアさん。エルフだから大丈夫って思い込んじゃってた。反省しなきゃ……」

エルフ＝のほほん種族でいい人ばかり、って無条件に思い込んでしまっていた。
この国だから言える事であって、他の国に住んでいるエルフは、性格が荒い人もいるかもしれないんだよね。想像が難しいので、かもしれない、になってしまうんだが。

「レンの弟子なら私は大丈夫だと思うけどね。二百年も経ってれば分からないかな……」

「私は逆にシアの弟子だから危ないと思うんだけど……」

ど、どっちもありえる！！

「まあ、折角の姫様のお心遣いですし、一度会ってみるのもいいかもしれませんね」

「え！？」

「私一人で、の話ですよ？　勘違いしないでくださいね？」

何か今のツンデレっぽいな。それはつまり……

「あ、そうだよね。うん！　いいよ！　国の名前出しちゃっていいから、呼んでもらっちゃおう！」

いい流れじゃないか！　安全の確認さえ取れれば私にだって会わせてくれる筈だ。

シアさんのお弟子さん！　さらに、国外の冒険者！　お、面白くなってきたわー！！

「姫様には会わせませんよ？」

「何で！？」

デレなど無かった！！

その６１（後書き）

これで能力説明は一応終わりです。
今回はメイドさんとキャッキャウフフしてただけとも言いますが……

その62

善は急げ、の言葉どおり、シアさんは早速次の日に冒険者ギルドへ伝言を頼みに行った。何故か私はお留守番させられたのだが……、苺飴をお土産に買って来てくれたのでよしとしよう。シアさん大好きだ！！　……こほん。リンゴ飴も欲しいな……

リーフサイドのギルドへの到着日、無いとは思うが来訪の拒否、詳しい事が分かり次第連絡をもらえるそうだ。

しかし、大陸中の全てのギルドがある町への伝言だ。どれくらいの時間が掛かる事やら。私はリーフエンド以外の国の地理は全く勉強してないからね、さっぱりだ。

さらにそこからの返答の伝言も逆にあるね。これは、年単位で待たされるかもしれないんじゃないだろうか。

「シアさんはどれくらい掛かると思う？　返事来るまでさ。結構掛かりそうだよねー」

シアさんはギルドを通じての連絡とかした事ありそうだよね。

「そうでもありませんよ？　冒険者ならば町にいる間は、特別な事が無ければギルドにはほぼ毎日顔を出すでしょうし。……ああ、なるほど、姫様は精霊通信を知りませんでしたね。申し訳ありません」

「精霊通信？　な、なにそれカッコいい……」

まさか、謎の種族の精霊に伝言を頼むのか？　謎の種族の割りにお仕事はちゃんとしてるのか……？

しかし、精霊との意思の疎通は、難しいと言うより不可能に近いんじゃなかったかな？　ギルドの受付はそれができないとなれないとかあるのかな。謎だ。

「ふふふ、カッコよくはありませんよ？　見た目はただの青い水晶です。その水晶に話しかければ、はるか遠くへと音を届ける事ができるんですよ」

音を届けるって、え？　電話？　精霊を電話に使うの？　それとも水晶に録音した音を精霊に運んでもらう？　水晶に録音って何よ！

「だ、駄目だ、全然想像もできないよ……。詳しく教えてもらえるかな、シアさんに分かる範囲でいいから」

分からない時のシアさん頼み。あんまり頼りにしすぎるのも駄目かな……

「ええ、構いませんよ。姫様のお願いは私には嬉しいものです、ご安心を。精霊について私の知っている範囲など高が知れています。ですが、種族図鑑よりは詳しく分かっていると自負しておりますよ」

「あ、それは私も聞きたい！　精霊なんてどう使うの？　あれただの光ってる玉じゃん」

種族図鑑には、ぶっちゃけ何も分からないよとしか書いてなかったからね。

うん？　メアさんは見たことあるんだ。

光の玉か……。何か、人魂っぽくてやだな……。　？　私は今精霊の正体に一歩近付いたんじゃないだろうか？　そんな訳無いか……

「シラユキの知ってる範囲じゃ、精霊と関わりがあるのって姉さんだけだもんね」

「フランさんのお姉さん？　私会った事あるの？」

「ふふ、シラユキひどーい。お友達なんじゃないの？」

え？　私のお友達にフランさんのお姉さんが？　だ、誰だろう……

「コーラスさんだよ、姫。もう、フランは意地が悪いよ」

「えええ！？」

「いい反応！　黙っててよかった！　うーん、ちょっと意地悪しちゃったかな？」

「あ、う、ううん？　こ、コーラスさんかー……」

コーラスさんがフランさんのお姉さんだったのか！！　身近な人過ぎて逆に思いつかなかったよ。

そういえば、言われて見れば似てる、かな？　髪の色も綺麗な緑色で同じだし、何より、その、あれが……

「さすがに姉さん程じゃないけどね、似てるでしょ。ほらほら」

私の目線に気づいてか、フランさんが自分の胸を寄せて上げて……

「もぎとりますよ」

「レン怖いよ！」

もげてしまえ！！

「さて、話を戻しましょうか。まず、精霊というものは謎の生き物、本当に生き物なのかすら分かっていません。これからもその謎は解明される事は無いでしょう」

うん、そうだよね。図鑑によると、明確な意思を持って行動しているらしいんだけど、生態とか言葉とか一切分かっていないんだよね。

「ですが、極一部の精霊のみの話なのですが、その特性が判明しているものもいるんです。その一つが、失礼、その一種がギルド間等の通信に使われている精霊ですね。これは、人が勝手に付けた名前ですが、送音の精霊と呼ばれています。この精霊について、簡単にしかできませんがお話しましょうか」

説明じゃなくてお話なんだ。当たり前の事だけど、シアさんでも知らない事がいっぱいあるんだね。

しかし……、送音ってさ、聞こえが騒音みたいでなんか嫌だね……

「うんうん。お願いします！！」

「可愛らしい……。では、疑問質問はその都度遠慮無くどうぞ。何故かこの送音の精霊、とある地域のある場所で採取された青い水晶をどこか人の住処へと置いておくと、いつの間にかその水晶の中に住み着いているらしいんです。理由は分かりません。あ、いえ、理由は分かっているのですが、そうだろう、という可能性が高いというだけですね」

「とある地域のある場所っていうのは、やっぱり伏せられてるのかな？」

「ええ。乱獲され、良からぬ事に利用しようとする輩が必ず出てきますからね。勿論私も知りませんよ。興味が無いのもありますが、調査したところでも捕縛されるのが落ちです」

そんな事に使えるのかな？　良からぬ、悪い事？　精霊だって生き物なんだし、使う人を選びそうなものなんだけど。

「住み着いた後は簡単です、ある一定以上の大きさに砕きます。あまり小さく砕くと効果はなくなってしまうらしいのですが、これも分かりませんね。砕いた水晶は、その後音のみですが、通信が可能になるんです。十の数に砕いたとしたら、その内の一つに話しかければ残りの九つから声が聞こえる、という事ですね。原理は一切不明です、最初に誰が気づいたんでしょうね？」

「く、砕いちゃうの？　中の精霊さん、死んじゃったりしないの？」

ば、バラバラに引き裂いてやろうか？　な状態になっちゃうんじゃ……

「せ、精霊さん……。ちょっとメア、シラユキ可愛いすぎるんだけ

ど……」

フランさんうるさい！

「私も今のは衝撃を受けちゃったよ……。姫、ちょっと可愛がっていい？」

メアさんもうるさーい！！　でも可愛がるのは許可しようじゃないか。

「後にしてください。精霊に死、という概念は無いらしいですよ？　例えその身を百に分けられようとも、在り様は変わらないと言われています」

「な、何それ……、精霊ってホントに理解不能な生き物なんだ……。んー、でもさ、その水晶から出て行っちゃったりは？　人に使われることを嫌がったりするんじゃないのかな？」

さっきも言ってた事だけど、悪い事には使われたくないよね。

「精霊の考えは人には想像もできませんよ、そもそも精霊に何か考えがあるのかどうかも分かっていませんからね。本能のみで生きているのか、それとも人にはとても及びつかないような深い思慮の下での行動なのか……。話を戻します。精霊について分かっている事はもう一つあります、それは、役割を好む、という事。実際のところはそれが真実かは誰にも分かりませんが、通信、という役割がある限りはその水晶に居続けるらしいですよ」

「あー、何となくだけど分かったよ」

音を送ったり受けたりが楽しいんだね。その水晶にいれば、人が音を送りに来てくれる。全く誰も来なくならない限りは、出て行く気が起こらないのかな、多分ね。

「さ、さすが姫。何となく分かるだけでも凄いよ……。よし撫でよう」

「私は姉さんに色々聞いてるから少しは分かるんだけどね。うん、撫でようか」

そんなに難しい事でも無いと思うけど……。まあ、普通に生活して行く分には、確かに必要無さそうな知識だね。

よし、撫でて！！

「姫様、ギルドの依頼の成功と失敗、ギルド員はどうやって把握していると思います？　町中での雑務依頼と違いギルドの依頼は町の外が主、一組に一人監視を付ける訳にはいきませんよね？」

シアさんが急に話を変える様に話し始めた。

「自己申告、はありえないか……。話の流れからすると、精霊が関係してるの？」

私が喋りだすと同時に二人の撫でる手は止まってしまった。ちょっと残念。

町の外で数日過ごして、やってきたぜー、じゃ誰も信用しないよ

ね。それが本当でも信じさせるのは難しそうだ。
考えた事もなかったね。面白そう！

「教えて教えて！　今日のシアさんはサービス精神旺盛だね！」

こういうファンタジーなお話は大歓迎だ！

「な、何という可愛らしさ……、は、失礼しました。ええ、その通りです。こちらは契約の精霊、と呼ばれるものが関わっていますね」

契約の精霊！　カッコいい！　ファンタジーだわ！

「ふふふ。フラン、姫の目見てよ、可愛すぎる……」

「今日はいつもよりさらに可愛いわよねー」

「メアさんうるさーい！」

「おっと、ごめんごめん。怒らないのー」

メアさんにまたグリグリと撫でられる。許した！

「続けますよ？　こちらはもっと簡単ですね、依頼受領時のサイン、その行動が精霊を体に宿らせてしまうんです。体に宿らせるとは言っても外から見て分かるものではないのですが」

「見て分からないのに分かるの？」

「ええ。これは、実際依頼を受けてみれば簡単に感じ取る事ができるのですが……。つまり、姫様には一生分かりませんね」

た、確かに……。受けた本人なら、宿られたぜ！　って分かるんだね。

「そしてその精霊の好む役割とは、契約。正確には約束を守る事、でしょうか。いえ、もしかしたら約束を破る事かもしれませんね」

「うわー、ホントに簡単だー……」

「ふふ。依頼が終わり、ギルドへ戻っての報告のサイン。何も言わずとも、そのサインだけで成否が分かるのです。簡単でしょう？　成功した場合は何も起こらず、失敗の場合はサインしてすぐ用紙が燃え上がってしまいます。精霊の分け身を監視に付ける感じですね」

なるほど、用紙が燃えるっていうのは分かりやすいね。精霊の考えは分からないけど、その行動原理だけは少しだけ分かってるんだ。失敗を嫌ってか、もしかしたら好きなのか、失敗した場合のみ何かしらの行動をとるんだね。これは面白いや。

「きっと約束事が沢山あるギルドに住んでるんだね。でも、私は見た事無いなー」

ギルドには結構行ってるんだけど、精霊っぽい光の玉なんて一度も見たことは無いね。

「冒険者の登録を済ませれば見えるようになりますよ。恐らく依頼を受けない者には全く興味が無いんでしょう。姿を隠しているのかもしれませんね」

よ、よくできてるなホントに……。シアさんにももう見えてない

のかな？

「そうそう、ギルドの登録にも精霊が使われているんですよ？　こちらは私にも詳しい事は全く分かりませんが」

登録にもか……。登録の精霊とかかな？　さすがにそのまますぎるか。

んー、もしかすると……

「精霊さんってさ、結構私の知らない所で色々と使われちゃったりしてるの？　この家の中でも使われてる所があったりするのかな？」

電化製品の代わりに厨房とかにいそうで怖いよ。冷やすのが好きな精霊がいれば、冷蔵庫とかも作れるんじゃないのかな。

「いえいえ、さすがに一般の家庭で使われる事はありませんよ。この館内でしたら、エネフェア様の執務室には多くいると思います」

「え！？　見た事無いんだけど……。ああ！　私に興味が無いから姿を見せてくれないんだ」

「その通りです、さすが姫様。しかし、姫様に興味が無いとは……。その精霊、滅んでしまえばいいのに……」

「もう！　人と一緒にしちゃ駄目だよ！　でも精霊さんかー……。会ってお話してみたいな……」

精霊って可愛らしいイメージあるよね。妖精みたいに小さくて、羽生えてたりとかさ。

「かかかか可愛い！　シラユキ可愛い！　この子たまに凄く子供っぽい事言うんだよね」

「うんうん！　今日はちょっと、いつにも増して子供っぽくて可愛いね」

「姫様はいつでも、常に、子供らしくて可愛らしいんです。何を今さら……」

「何よ三人して子供扱いしてー！！」

精霊には、ついついさん付けしちゃうだけじゃない！

ああ！　確かに子供っぽいわ……。でもこれは直せそうに無いぞ……、困った。

その６２（後書き）

また説明の多い話が少し続きそうです。
設定色々は飛ばし読みで、そんなものもいるんだー、程度に思ってもらえれば問題ありません。

その６３

シアさんに精霊の話を聞いた日からどうしても気になる事が一つあった。

それは、女神様から貰った異世界言語翻訳機能だ。

この機能、能力か？　これは、ある一定以上の知性を持つ生き物と会話ができる、という能力だ。さらに、私の認識に沿って翻訳されるのが凄い。

ラルフさんに贈った、魔法で強化された銀。私がミスリルなんじゃないかな、と思ったら、ミスリルで通じるようになったのだ。トウガラシもそうだったね、凄すぎるわこれ……

これって、精霊ともお話できるんじゃないか？

この国で精霊と言えば、何故かコーラスさんが詳しいらしい。でも一番身近な母様の執務室にもいるらしいので、まずはそちらから行ってみようと思い、こうして来てみた訳なのだが……

執務室に入り、キョロキョロと見回す。

「見えなーい！　母様ー、精霊さんはどこー？」

「何この子可愛い……。どうしたのシラユキ？　精霊を見てみたいのかしら」

この部屋には多くいるという話だったが、やはり全く見えなかった。

だよね、この部屋何回も入ってるんだけど、一度も見たこと無いし。精霊は自分が興味の無い人の前には、姿を現す事すらしてくれないのか……

「うん！　見てみたーい。それでね、お話しするんだ！」

「せ、精霊とお話？　バレンシア、説明して頂戴。何なのこの可愛らしさは」

「そっちを！？」

「も、申し訳ありません。私が姫様の好奇心を刺激してしまったようで……。小さな子供特有の、何でも知りたい病でしょうか。あまりの可愛らしさに意識を保つのがやっとなのです」

二人とも言い過ぎだよ！　でも、母様に言われるのは最高に嬉しいね！

「なるほどね……。ふふふ、本当に可愛すぎるわこの子……。それじゃ、ちょっと見せてあげましょうか」

やった！　どんなのかな？　って見せようと思えば見せれるものなのかな？　精霊に興味を持ってもらうとかできるんだろうか？

母様は引き出しから小さな木の箱を取り出した。箱を開くと中には青い水晶、形は縦に細長い。

小さいな……、５ｃｍくらいかな？　簡単に折れてしまいそう。箱の中には柔らかそうな布が敷き詰められているし、もしかしたら案外脆いのかもしれないね。

しかし、実物をこうして見てみるとただの水晶の破片にしか見えないね……

「それが精霊通信用の水晶、だっけ？　中に送音の精霊さんが住んでるんだよね？」

またついさん付けしてしまった。な、直さなければ。

今日は私が口を開くたびに、みんながニヤニヤしている気がする。

「ええ、そうよ、よく知っているわね、偉いわ。バレンシアに聞いたのかしら。ふふ、もっと近くで見てもいいわよ、動いたりしないから安心しなさい。あ、触っちゃ駄目よ？　通信始めちゃうからね」

「はーい！」

なるほど、人が触ると精霊が反応して音のやり取りを始めるんだね。凄いや。

音を送る事が好きなんじゃなくて、人が出す声を送る事が好きなのかな？

母様に近寄って箱の中を見せてもらう。

見たところ、やっぱりただの水晶だねこれ、青いけど。中に何かいるようには見えない。

「うーん？　何も見えないよ？　母様には精霊さんが見えるの？」

形状は光の玉に見えるんだっけ。あ、精霊が私に興味を持ってくれていないのかな？

「ふふふ。これはね、触らないと見えないの。実際手に持ってみると分かるんだけど、どうしようかしら……。シラユキのためだし、いいわよね」

「エネフェア様！？」

びっくりした！　カイナさんか……、声久しぶりに聞いたよ。

今のは、母様お付のメイドさんズの一人、カイナさんだ。

母様お付のメイドさんは二人いる。もう一人はクレアさん。本当はクレーアさんだが、みんなクレアさんと呼んでいる。

二人とも背が高く胸も大きい、う、羨ましすぎる……

この二人は執務室以外でも一緒にいる事を見かけるね。二人並んでどこかへ出かけて行くのをよく見るよ。でも表情が分かり難く、仲が良いのかどうかが分からない。

「いいじゃない、ちょっと冒険者ギルドに繋ぐだけよ。ミーランがいたら出してもらいましょうか。ね、シラユキ、話してみたいでしょ？」

母様は別段何でも無い事の様に言う。

「う、うん……。カイナさん、大丈夫なの？」

絶対大丈夫じゃない筈だこれ……

「え？　あ、はい！　あ、いえ！　大丈夫じゃないです！」

何でカイナさんは私と話す時はいつもガッチガチなんだろう……

まあ、私に何かあったらみんな怒るしね。家族なんだから気にしなくてもいいのにさー

「ぎ、ギルドとの精霊通信は特別な事が無い限り控えた方が……。また何かあるんじゃないかと思われますよ？」

「前にこちらから通信入れたのは……、シラユキが初めて町に行った時ね。ウルが脅しをかけた。確かにあの時通信に出た子の慌て様は面白かったわ。またあの子が出ないかしら」

そう言って、母様は水晶を手に取る。

あれ！？　カイナさん駄目だって言ってるよ！？　無視か！　母様自由すぎる！！

カイナさんも止めるだけ無駄なのは分かっていたんだろう。また無口お控えモードに戻ってしまった。

カイナさんクレアさんとも、もう少しお話してみたいのだが……

「こんにちは。そちら、誰かいるかしら？」

（ははははは！　います！　えええエネフェア様、ほほ、本日は、一体な、なんのご用件で！？）

間を置かず、水晶から男の人の大きな声が聞こえた。
いきなりの大声での返答にに母様が顔を顰める。

凄いよ、水晶から声が聞こえるよ……。どうなってるんだろう……
魔法には慣れたが、こういう想像した事もない様なファンタジー
さは実際目の前で見てみても今ひとつ、何と言うか、要領を得るこ
とができない。

「そんなに大声出さなくても大丈夫よ。ちょっとね、ミーランはい
る？　出してもらってもいいかしら？」

（はは、はい！　少々お待ちください！！　一旦通信を終わります
！）

凄い慌てようだ……。まあ、その国の女王様からいきなり、しか
も直接通信が来たら誰だって焦るか。当番制かどうかは分からない
が、運が悪かったと思って諦めてもらおう。

「母様、それって、片方の人が持てばいいの？」

「うん？　ああ、違うわよ。声を送れるのは持ってる時だけ、向こ
うでもこれと同じ水晶の欠片を手に持って話してるの。でないと一
方的に音を送るのみね」

なるほどねー、手に持たなければ音が聞こえるだけか。
電話みたいに呼び出し音も無いし、夜中急に聞こえてきたらそう
とうビックリするんじゃないだろうかこれは。不便さは色々とあり
そうだね。

「見せて見せて！　精霊さん、見えるの？」

「ふふふ。持ってみてもいいわよ、落とさない様にね？」

母様に水晶を手渡された。

ほんのりと暖かい、あ、これは母様の体温が移っただけか。

んー？　見た感じは弱く光ってるだけだね。こ、この中に送音の精霊が？

「この光ってるのが」

（す、すみません！　お待たせしました！　ミーランです！！）

「ひゃあ！！！」

母様に確認を取ろうと思ったら水晶から大声が聞こえた。

（え？　今の可愛らしい声……、シラユキ様？　な、何があったんですか！？　シラユキ様！！）

「な、何でもない！　ちょっと驚いちゃっただけ……」

び、びっくりしたー……。まだ心臓がドキドキ言ってるよ……

「ふふふ……。可愛い……」

母様に笑われてしまった。くそう、ミランさんめ！

よく見ると、シアさんも笑ってるね。カイナさんもか！

クレアさんは相変わらずの無表情だね……。この無表情には小さ

い頃何度泣かされた事か……

「こほん。えーと、ミランさんだよね？」

（はい、ミランですよー。どうしたんですか姫様？　そちらから精霊通信なんて珍しい）

よく見ると、相手側の声にあわせて光が強弱しているね。

今のミランさんの言い方だと、ギルドからの通信はそれなりにあるっぽい？

「うん。えーとね、その、ね？　特に用事は無いんだ……。ごめんね？」

（え？　えー……。だ、大丈夫なんですかそれ、エネフェア様に怒られ、って、エネフェア様からの通信でしたねこれ）

そう、だから怒られるとしたらそれは母様だけなのだ。母様を怒れる存在なんて誰もいないね……

「精霊さんが見てみたかったんだけどね、母様に話したらギルドに繋いじゃって……」

（あー、なるほど……、安心しました。精霊ですか？　光っているのがそうですよ）

あ、やっぱりこの光ってるのが精霊なんだ。うーん……。光ってるだけで、形とか分からないなー

「光ってるだけだね……。形、とか、見えないの？」

（はい、他の精霊も光っている球体にしか見えませんね。シラユキ様、精霊に興味があるんですか？）

「そうなの、精霊とお話したいんですって。ふふふ、可愛いでしょう？」

母様が会話に割り込んできた。

（せ、精霊とお話、ですか？　確かに可愛らしい考え、じゃなくて、できるんでしょうか、そんな事）

「試してみようか。精霊さーん、お話して欲しいな？」

（な！　か、可愛い！　はっ！？　すみません！　黙ってます！！）

しまった！　ミランさんにも聞こえてるんだった！！　大恥だーー！！

当たり前だけど、特に何も聞こえない。変わった反応も無い。

「やっぱり無理よね。シラユキなら、と思ったんだけど……。さすがに無理があったわね」

「むう……。音の精霊さんだから、なのかも。向こうへ音を送る事を優先しちゃってるんだよ、多分。そうだよねー？」

また何も反応は無し。

（ふふふ。精霊との会話、できたら面白そうですね）

「シラユキ、そろそろ終わりましょう。ミーランもお仕事中にごめんなさいね？　ついシラユキを甘やかせ過ぎちゃって……」

そうだね、ミランさんはまだお仕事の途中だっただろうし、あまり長い時間拘束しちゃ駄目だよね。

（いえいえ！　シラユキ様との通信ならいつでも大歓迎です！　またいつでも呼んでくださいね！）

「うん！　ミランさんありがとね。また遊びに行くからねー」

（はい！　お待ちしています！　それでは、通信終わります）

「はい、母様」

母様に水晶を返す。手を放すだけでいいと思うんだけど、通信を終わらせるのは母様に任せよう。

「それじゃ、こちらも通信終わるわね」

言って、水晶を箱に戻し、蓋を閉じる。

通信を終わる、と宣言するのが別れの挨拶の様な物かな？　それなら通信始めにも何かありそうなものなんだけど……、無いと毎回ビックリしちゃうよね。また今度聞いてみるか。

「どうだった？　便利でしょう？　これ」

箱を元の引き出しに仕舞い、感想を聞いてくる母様。

「うん。便利そうだけど、向こうで誰に聞かれてるか分からないのがちょっと怖いね」

ミランさんも、こちらにシアさんとカイナさん、クレアさんの三人が他にいた事は気づけなかっただろう。

「そういう事をパッと考え付いちゃうのがシラユキの凄いところよね。確かに、向こうにも何人かいたんじゃないかしら？」

「やっぱりそうだよねー。映像を送る精霊さんもいればいいのにね」

テレビ電話。あれも、カメラの範囲外にいる人までは分からないのだが。

わたしの驚きっぷりが他の誰かに聞かれてしまったのか。恥ずかしいわ……

「精霊さんとお話はやっぱり無理なのかなー……。ううん、諦めない！　母様ー、他の精霊さん見せてー？」

「え？　もうシラユキに見せてあげれる精霊はいないの。ごめんね？」

やる気を出したところでこれだよ！

「コーラスなら他にも色々と精霊を知っていると思うんだけど……。

明日にでも見せてもらいなさい」

「うん！　絶対にお話してみせるんだから！」

「今日のシラユキはホントに可愛いわ……。いつも可愛いんだけどね、いつまでも可愛いんだけれどもね！」

「ええ、本当に……。未知の存在の精霊への興味、そしてエネフェア様への甘えが加わり最強に見えますね」

うるさいなもう！　可愛いがゲシュタルト崩壊しそうだ！！

ふう……、精霊との会話を夢見る子供に見えるんだろうね。今日の私ってそんなに子供っぽかったのかな……

その６３（後書き）

精霊の話はもうちょっとだけ続きます。

今回ついにエネフェアお付のメイドさんズの名前が判明！　今さら過ぎましたね……

その６４

「さあ姫様！　今日は一体どんな可愛らしいお姿とお言葉を聞かせて頂けるのですか！！　ああ、もう楽しみで楽しみで昨夜は興奮のあまり寝付けなかった、事は無いですが、まあ、それくらい楽しみなのです！！」

母様に言われたとおり、コーラスさんに精霊の事に付いて詳しく聞きに来たのだが……。シアさんのテンションがおかしいことになっている。

話し方こそいつものそれだが、何か、やけにノリがいいというか……。面白そうだからいいか。

「無理でしょ」

「開始一秒で！？」

早くもこの話題は終了ですね。

「いくらシラユキでも無理なものは無理だって。ホントに可愛いんだから、もう……」

コーラスさんの私に対しての呼び方が、いつの間にか姫からシラユキに変わっていた。親密度が上がったんだねきっと。

「やっぱりそうなのかな？　それならそれでいいんだけどね、精霊さんを見てみたいなーと思って来てみたの」

「せ、精霊さん……。やっぱり私も子供作ろうかしら……。でも、相手がいないのよね」

フランさんに取られちゃったんだよね……

「コーラスさん美人だし胸大きいし、凄くモテるんじゃないの？」

「そうでもないわよ？　確かに若い頃はモテすぎて困るくらいだったんだけどね、私、もう結構な年だし、みんな弟か子供にしか見えないのよねー。前に求婚しまくって来てた子も、いつの間にかフラニーとくっついちゃったし……、今は全然よ。はあ……」

やっぱりコーラスさんって結構なお年なんだ。でも、言動は若いんだよね。

そういえば、母様より年上なんだったかな？　一体何歳なんだろう……。女性でもエルフなら聞いても問題ないよね。

「コーラスさんって幾つなの？　母様より年上なんだよね」

「うん。あー、幾つだったかな……。結構前に千になったんだけど、正確には、えーと……」

「千！？」

「びっくりした……。もう、急に大きな声出さないでよ。まあ、千歳って言っても国から出る事は殆ど無いし、特に大きな経験もしてきて無いからね。ただ長く生きてるだけよ？」

千歳以上とは予想外だった……
大きな経験って、戦争とかあったんじゃ……？　それは聞かない方がいいか。

「千歳ですか……、私の倍以上とは。まだ十二歳の姫様には想像もできそうにありませんね」

「うんうん。コーラスさんすごーい！」

「ウルギス様なんて千六百くらいよ？　バレンシアの三倍以上よ？」

それはそれ、これはこれ、なのだ。
父様や母様の年を初めて聞いたときは確かに驚いたが、エルフならこれくらいが普通なのかって思っちゃってたんだよね。
考えてみたら、五百歳以上の人って身近に全然いないな……

んー……、いいや。十二歳の子供がいくら考えても無駄だね。今日は今日の目的をまずは片付けてしまおう。

「ほら、こっちおいで、ため池の中見て御覧なさい。光ってる丸いの見えるでしょ？」

コーラスさんに手を引かれ、ため池の方へ連れて行かれる。
ちょっとちょっと！　池は怖いんですけど！　私泳げないのよ！！

「ああ、見えますね。あの精霊はどんな役割が……、？　姫様、どうしました？」

「な、何でもないよ！？」

そう言いながらも及び腰になってしまう情けない私。

「そんなにがっしり掴まって……、ああ……、なるほどね。ねえバレンシア、泳げないの？　この子」

何故バレたし！

「そう言われてみればそうですね、泳ぎの練習などしたこともありませんし……。ふむ、今度沢の方へ泳ぎに行きましょうか？」

沢？　川かな？　川泳ぎ！？　こ、怖いわー。野性的だわー……

「う、うん、機会があったらね！　多分無いけど！」

「機会というものは、出来る物ではなく作るものです。早速明日行きましょうね。まだ程いい暑さが続きますし、本当にいい機会かと思いますよ」

「あはは。頑張ってねシラユキ。今年の夏の間に泳げるようになっちゃいなさい」

「そんなー……」

くう、シアさんの素敵な笑顔での提案は断れない！　断りにくい！！

不用意な発言で墓穴を掘ってしまったようだ、大人しく諦めよう。
川とか少し楽しみではあるしね。
ん？　水着とかあるのかな？　シアさんだけなら全裸でもいいか……。それは無いわ！　野外露出は無いわ！！

池の中を見てみる。透き通った綺麗な水だね、どこか、川からでも引いて来てるのかな？
でも、ため池って流れていかないから、水が濁っていきそうな気がするんだけど……、やけに綺麗だね。

水の中には小さな光の玉がいくつも見える、あれが精霊かな？
それほど大きくない、１０ｃｍくらいだろう。５ｍ程のため池に、えーと……、十はいるね。数の数え方は一体二体だったかな？
大きくないと言っても深さは私の背以上にあるんだが……。落ちたら溺れるねこれは。

「あの精霊、だよね？　何してるの？」

「何をしてるかまでは分からないのよ。でもね、あの子達が住み着いている池の水はずっと綺麗なままなのよ、何年経ってもね。普通は藻が生えたりして濁っていっちゃうんだけどね」

「水を綺麗にしてるって事？　どんな行動原理なんだろ……。世界中の池に棲んでるわけじゃないよね？」

それなら世界中綺麗な水だらけでいいと思うんだけど、さすがにそれは無いだろう。

「ううん、この辺りじゃここだけよ。シラユキは、精霊は自分の好みで動くっていうのは聞いた？」

「うん。やっぱりこの場所に何かあるのかな……」

精霊に何か役割を与えるのではなく、勝手に働いてもらってる感じかな。精霊が生息しやすい環境を作り上手く利用している、と言うと聞こえがちょっと悪いかな。

そうすると、ここの池の水を綺麗にする事に何か理由があると見た。

この池の役割は、お花への水やりか？　多分それくらいしか用途は無さそうだね。

「まさか、お花が好きなの？」

「世界中の精霊学者が必死になって出した答えをあっさり出さないの。ま、ここは分かりやすいんだけどね。花の水まきにしか使ってないし」

精霊学者なんているんだ。精霊の事を日夜研究してるのかな？

なるほどね。そういう人たちがいるからこそ、ギルドでの使用や、こういった場所にいきなり精霊が棲み着いてしまった場合の安全性、危険性が分かるんだね。

「花その物が好きなのか、花にまく水のため池の水質保持が楽しいのか、完全な回答はどうやったところで分かりませんね。やはり精霊との会話、意思の疎通、それができないと……」

「ふふふ。シラユキ、話しかけてみたら？　答えてくれるかもよー？」

そ、そうだよね。そのために来たんだった！　よし！　とにかくやってみよう！！

池の淵にしゃがみ込む、右手はコーラスさんと繋いだままだ。落ちそうになったら引っ張ってもらおう。それか道連れね。

「精霊さーん？　こっち来て欲しいなー？　あ、この精霊さんって名前あるの？」

またさんを付けてしまった！　もういいや、直らないやこれ……

「名前？　人が勝手に付けたのならね。治水の精霊って呼ばれ……、バレンシア」

治水？　何かイメージと違うな……。ああ、池だから合ってると言えば合ってるのか？

考えていたら、繋いでいた右手を急に引っ張られ、コーラスさんの後ろに下がらせられた。

「わ！　っと……。どうしたの？　コーラスさん」

「冗談でしょう？　まさか、精霊が答えたとでも？」

シアさんが私とコーラスさんを庇う様に前に出る。

どうしたんだろう？　全力で警戒してるね。……へ？

「え！？　こっち来てたの？」

やっぱりこの翻訳能力は精霊にも効果があるのか！？

「いえ、こちらへ来たという訳ではありませんが……、動きが止まりました。それも全てが、です……」

「止まった？　全部の精霊が？　ねね、コーラスさん？　見せて欲しいな」

私の壁になるように前に立っている二人のおかげで、池の中は全く見ることが出来ない。

「駄目、絶対に駄目。精霊はお友達なんかじゃないわよ？　ただ、そう在るがままに存在しているだけ。この精霊だって、花にまく水を綺麗にするって事しか分かってないのよ？　他に危険な行動を取る事だって充分にありえるの」

えー？　大丈夫だと思うんだけどなあ……

「私が見ています、お二人は離れてください。コーラスさん、姫様をお願いします」

シアさんはそう、池から一瞬も目を放さずに言う。

おっと、話しかけるだけ話しかけて逃げ出すとか、それこそ失礼者のする事だよ。

「精霊さーん！　私の言ってる事分かるのー？　分かってたら何か

してくださーい！！」

姿は見えなくても声は届くのよ？　二人とも。

「シラユキ！？」

「姫様、何を！？」

「二人とも黙って！　大丈夫だよ、……多分」

「多分って……、！？　嘘……」

「まさか、本当に……？　こ、こんな事が……」

二人とも池の方を見て固まってしまった、どうやら何かしてくれたみたいだね。

やっぱり、さすがは女神様のくれた翻訳機能だ。どんな行動をとってくれたんだろう……

コーラスさんの手を放し、池に向かい歩き、出せなかった。

「コーラスさん、手、放してよー」

「え！？　ああ、ごめんね？　私も、行くわ……」

コーラスさんと二人で池に近づく。シアさんも一緒だ。

二人ともまだまだ警戒してるね。そんな危険な存在には絶対に思えないんだけどなー

どれどれ池の中は……、と、あれ？　特に変わりないね……

さっきと変わらず、精霊がふよふよと漂っているだけだった。

「何も変わっていないように見えるんだけど……。何か変わってるの？　それとも、もう戻っちゃったの？」

「はい……。ほんの数秒の事でしたが、精霊が池の中を激しく動き回っていたんです……」

相変わらず池から全く目を逸らさずに、シアさんが答えてくれた。

うーむ、それは見てみたかったな。もう一回お願いしてみるか？　でも、何度もお願いするのも何だよね……

「あはは……。二人ともごめんね？　私、色々と規定外で」

「ホントよもう……。あんまり驚かせないでね？」

「精霊に興味を持たれると、稀にこういった現象が起こるらしいとは聞いてはいたのですが……。まさかこの目で見ることになろうとは、さすが姫様、なのでしょうか。すみません、まだ、落ち着いていませんね」

さすがのシアさんも大興奮か。

どうやらこちらからの言葉に少し反応するくらいみたいだね。何を言っているか意味までは通じてはいないようだ。精霊から見たら、何か変な感じがするくらいの感覚なのかもしれない。

恐らく精霊に向けて、という明確な意思を持っての言葉だったか

らだと思う。翻訳機能が働いてしまったんだろうね。これがこの機能の限界か？

残念だけど、会話、意思の疎通は無理か。治水の精霊は大丈夫でも、コーラスさんの言うとおり、他の精霊にはどんな危険があるか分からない。

本当に残念だけど、諦めるしかないだろう……

「うーん、悔しいな。できそうな気がしたんだけどなー」

「姫様が何かを失敗するのって何気に初めての事じゃないですか？」

「え？　何それ？　どこまで天才なのよこの子。うちの子に欲しいわ……」

「あはは。コーラスさんも家に住めばいいんだよ。そうしちゃおう？」

コーラスさんは大好きだ。一緒に住んで、甘えるのもいいかも？悪い事をしたらちゃんと叱ってくれそうだしね。

「それは難しいですよ姫様。館にはルーディン様という魔物がいらっしゃる事をお忘れなきようお願いしますね」

「そうね、ありがたい申し出だけど……。襲われる、とまでは行かないにしても、日常的に揉まれそうだし、さすがにそれはちょっとね……」

そうだった！　家にはおっぱい星人が住んでたんだったよ！
兄様め！　こんなところで私の邪魔をするとは……！！

「今まで何度か揉まれてるんだけどね、ちょっと一回、その、危なかったのよ」

「やっぱり揉まれ、え……？」

嘘……、まさか、無理矢理……？

「ちょ、違うわよ！　危なかったのは私！！　ルーディンに初めてをあげちゃってもいいかなーって思っちゃってね？　ああ……、私は子供に何を言ってるんだか……」

よ、よかった！　兄様は優しい人だからね、揉んでも揉まれないんだよきっと！　何それ！！

「初めて？　コーラスさんは、男性経験は無いのですか？」

「シアさん！？　そんなストレートな聞き方は！！」

「ううー……。そうなのよ、まだなのよね……。最初のうちは律儀に守ってたんだけどね、好きな人が出来たらあげようって。でもね、そのまま千年も生きて、どうでもよくなっちゃってさ、ルーディンに揉まれてた時に、このまま抱いてもらっちゃおうかと思ったのよ。でもさ、土下座して断られちゃってさ……、泣けるわよあれは……。揉んできたのは向こうからなのに酷いと思わない？」

「ルー兄様ひどい……！！」

さすがにそれはひどい！　これぱっかりは姉様に言い付けるわ！！
まあ、その、でも、コーラスさんとしていいっていう訳でも無いんだけどね。

「ウルギス様に抱いて頂く、とかどうでしょう？」

「何勝手に人の父様薦めてるの！？」

「あ、いいわねそれ。やっぱそういうのは年上でないとね。エネフェアも私なら許してくれるでしょ。おっと、様忘れた」

「駄目！！　絶対駄目ーー！！！」

やっぱりみんなエロフ、じゃない、エロエロフ！　いやらしいエルフなんだから！　もう！！

その６４（後書き）

エロエロフ。エロエロっぽくていい感じに？

毎回何故か自然にこんな話を始めてしまう登場キャラ達……、どうしてこうなった！

その65

泳ぎの練習か。嫌だね……

そもそもこの世界って泳げる必要はあるんだろうか？　いいや、無いね！

花畑のため池とか、川に落ちでもしない限りは必要無いはずだ。

そうだそうだ、必要無いね。

「という訳で、泳ぎの練習は中止。今日は何をしようかな」

「分かりました。では、水辺で使える魔法の練習にしましょう。ため池の上流でいいですね、水が冷たくて気持ちがいいと思いますよ。ルーディン様、ユーフェネリア様もお誘いしましょう」

「くっ！　私の興味を最大限に引き出す提案。でもきっと、やる事は泳ぎの練習になるはずだ！　行かない！」

「水中に、濡れずに潜って行ける魔法もあるんですよ？」

「それじゃ、行こうか。水着の用意はできてる？」

「はい、昨日の間に準備は全て整え終えております」

「絶対騙されてるよあいつ……」

「いいじゃない、楽しそうよ、お兄様」

ため池の上流の川へやってきた。こうやって話ながら歩いて行くのもピクニック気分でいいね。普段はシアさんの後ろについて走るか、兄様にお姫様抱っこされての移動だからね。

メンバーは、私、兄様、姉様、シアさんの四人。メアさんフランさんはあまり遠出には着いては来ない。そこまで遠出って言うほどの距離でもなかったんだけど、メイドさんだし当たり前だよね……。最近シアさんをメイドさんの基準にしてしまっている自分がいる。

川幅は結構狭いね、５ｍも無いんじゃないかな。私から見れば充分広いんだけど、深さはどれくらいだろう？

透明で綺麗な水だが、ここは川。所々に深い場所もあると思う。流れは穏やか、安全そうに見えるが……

「シアさん、ここって急に深くなってたりするところはあるの？」

「そういった箇所は埋めておきましたのでご安心ください。あそこに張られているロープの間の深さなら、姫様の腰から胸の辺りまでしかありませんよ」

確かにロープが、上流の方と、少し離れた下流の方に張られている。

なるほど、流れるプールのような感じか。後は足元の石などに気をつければ本当に危険はなさそうだね。さすがシアさんだ。

……埋めた？

「ここって、まさか、シアさんが作った、とか？」

「ええ、暇を見つけては少しずつ。できてからも手入れを欠かさず、いつ姫様が遊びに行こうと思われても大丈夫なよ」

「言ってよ！　そこは言おうよ！　毎年楽しみにしてたんじゃないの！？」

「そこはメイドの勤め。お気になさらずに」

「何でよう……、楽しみにしてたんじゃないの……？」

うう、泣きそうだ。毎年楽しみにせっせと作業するシアさんを想像してしまった……

「あ、あれ？　姫様？　ここは驚くところで、決して悲しむところでは……」

「言ってくれれば毎年でも遊びに来たのに……」

ロープの間だけとは言え、何ｍあるんだろこれ。２０ｍくらい？普通に小さなプール並みの面積だよね。

これを、たった一人で……？

一体何年前からなんだろう……。一年二年じゃないよねきっと……

「何かいきなり空気が重いんだが」

「う、うん。シア、シラユキは相手の立場になって考えちゃう子な

んだから、あんまり影で苦労するような事しちゃだめよ？　してもいいけど言っちゃ駄目」

暗くなってしまった私を見て、シアさんを注意する姉様。

「す、すみません……。姫様の驚く顔を楽しみに作っていたのですが、まさかこんな……」

は！　駄目だ！　私のせいで空気が重くなってる。

「シアさん、いっぱい遊ぼ？　泳ぐ練習もちゃんとするから」

「ひ、姫様……！　はい！　精一杯お相手させてください！」

抱き合う私たち。

しまった、泳ぐ練習はしたくない！

「それでは早速、水着にお着替えしましょうか」

切り替え早いな相変わらず。既に笑顔だ。

まさか、泳ぐ練習をする、という言質が取りたかったんじゃ……？　さすがに考えすぎか。

「水着なんていらんだろ。裸でいいよ裸で」

そう言って脱ぎだす兄様。

「わ、私は三人になら見られてもいいんだけど、シラユキ大丈夫？

お兄様とはあんまり一緒にお風呂入って無いでしょう？」

姉様も脱ぎだす。

恥ずかしくないのかな二人とも……

「う、うん。ルー兄様に見られるのは別にいいんだけど、ルー兄様の裸と言うか、その、アレを明るい所で見るのはちょっと……」

一応見慣れてはいるんだけどね。ここ、お風呂じゃないし、やっぱり恥ずかしいよ。

「子供がそんな事気にするなよ。風呂だとじーっと見つめてるじゃねえか」

言わないで！　私だってちょっとくらい興味あるのよ！

しかし、そんなに見つめてたっけ？　これからは気をつけなければ……

「お兄様の大きいもんね、シラユキも見入っちゃうか。お兄様？まさか触らせたり、とか握らせたり、とかしてないわよね？」

「するかっ！！　まだ十二だぞコイツ。せめて五十になってから」

「五十になっても触らないからね！？」

駄目だ！　早く修正しないと、どんどんいやらしい会話になっていってしまう……！

「シアさんも止めてよ！　あ！　もう水着着てる！？　いつの間に……」

シアさんは黒のビキニか……。何この人、綺麗過ぎる。

「すみません姫様。今の会話は私も興味が……」

「え？　シア、まさかお兄様の事を……」

「何？　そうなのか……。悪いな、俺にはユーネという」

「早く着替えようよ！！　シアさんお願い！」

「何だよノリが悪いな……」

兄様とシアさんはよく、その場その場で結託して私をからかおうとして来るんだよね。なんという息の合った連携プレイだ……

「はい。ふふふ、では、あちらの木の影で。ユーフェネリア様はどうされます？」

姉様も王族だもんね、やっぱり着替えの手伝いは必要かな？

「お兄様と着替えるからいいわ。あの、その、二人でどこかに行っちゃっても探さないでね？」

「もうそういうのはいいよ！！！」

ありえる話だけに怖い！　でも外ではやめて！！！

兄様は青いトランクスタイプ、姉様はお揃いの青いビキニ。私服といい、青が似合うねこの二人は、羨ましい。
私は白のワンピースタイプ、スカート付だ。見事な凹凸無しの素晴らしい体。泣きたい……

「シラユキ可愛い……。こっちおいで？　撫でさせて？　何この可愛さ……」

「ホントに可愛いよな……。バレンシア、よくやった」

「いえいえ、当然の事をしたまでです」

二人とも大絶賛でグリグリと撫でて来る。
水着はちょっと恥ずかしいけど、元は取れた気がするよ。

しかし、白い水着か、大丈夫かな……？

「ねえシアさん、これって、透けちゃったりしない？」

「あ、白って透けちゃうわよね。でも、いいんじゃない？　どうせ見てるのは私たちだけだし」

あ、それもそうか。この三人にならいくら見られても平気だよ。

「しませんよ、ご安心ください。私渾身の作ですから、透けるなどありえません」

「シアさんが作ったんだこの水着。逆に心配になってきたんだけど

……」

「水に入ったら溶けたりしてな」

兄様が笑いながら不安になることを言う。

「その手が……！」

「無いよ！！」

兄様と手を繋いで、ゆっくりと足を水につける。

「冷たっ！」

お、思ってた以上に冷たいね。慣れるまではこの辺りで足をつけるだけにしておこう。

「おー！　冷たくて気持ちいいな！　ユーネも来いよ。バレンシアもな」

「わ！　待って！　私はまだこの辺りまでがいいよ！」

私と手を繋いだまま、どんどんと川へ入って行こうとする兄様を慌てて止める。

兄様にとっては浅い川でも私から見ると充分深いのよ！　胸辺りまであるってシアさんも言ってたし、あれ？　怖いぞ……

「おっと、そうか。それじゃバレンシア、コイツ頼む。俺はユーネと遊んで来るわ。シラユキも早く慣れて来いよ」

「はい、お任せください」

「シア、お願いね。シラユキ、疲れたらシアにちゃんと言うのよ？」

「う、うん！　気をつけてねー！」

私をシアさんに預け、今度は姉様の手を取る兄様。

兄様と姉様はキャッキャウフフと二人の世界に入ってしまった。

あれにどう割り込めと！？

「さて、姫様。今日は、泳ぎの練習も魔法の練習も無しです。その、私と遊びましょう？」

シアさんは、少し照れたように頬を染めて言う。

「はー……、はっ！？」

今の表情はやばかった！　なにこの美人さん。今のは同性でも落ちるよ……、落ちそうだったよ……。

夏は開放的になる、か。危ないね。

その後、シアさんが水面を歩いたり、シアさんが水中をすごい速度で泳いだり、シアさんが両手に魚を捕まえて戻ってきたり、その魚をささっと串焼きにしたり……

シアさんの凄さを再確認した。兄様姉様も大喜びだ、何か、一番上のお姉さんみたいだよね。今度シア姉様とでも呼んでみようか？　む、襲われるか？　やめよう……

うーん、またまた、さらに大好きになったよ！

その66

まだ暑さも続く日、いつもの談話室。
書庫から持ってきた本を読みながら、冷房の魔法を使うか使わないか地味に悩んでいた時、珍しい来客があった。

「失礼します姫様。バレンシア、エネフェア様がお呼びだ」

来客はクレアさんだった。
珍しいとは言っても、いつも母様に付いているメイドさんだから、何度もこの部屋にも来てるんだけどね。一人でこんな、伝言のような事をしに来るのは本当に珍しかった。

「エネフェア様が？　分かりました、すぐに伺いますね」

「私も行っていいのかな？」

母様がシアさんに何の用があるのか気になるね。それに、母様にちょっと甘えたいのもある。私最近さらに子供っぽくなってないか……？

「すみません、姫様。バレンシア一人で来るように、との事です」

「そうなんだ、残念……」

むう、なにやら秘密のお話っぽいね。気になるわー

「それでは姫様、行って参りますね。……ああ、クレア？　私が戻るまで姫様のお相手をお願いします」

「何……？」

「姫様、質問はクレアが答えてくれますから、どうぞ読書の続きを」

「う、うん。クレアさんよろしくね？」

「はい……」

うわあ……。面倒な事を押し付けられたぞっていう空気を醸し出している。

全くの無表情だけど、何となく声に覇気が無い。

クレアさんと二人きり、部屋に残される。メアさんとフランさんはおやつを作りに。汗をかくので体も流してくるだろう。まだまだ時間は掛かりそうだ。

ううん、沈黙が痛いわ……。とりあえず本を読もう、疑問が出たら普通にクレアさんに聞いてみようか。ちょっと怖いんだけどね……

クレアさんが怖い人じゃないのは分かっている。でも、小さい頃にこの無表情には何度も泣かされていたので、ちょっと苦手意識がある。失礼な事だよ。

シアさんと同じくらい、もっとかも？　本当に怖いくらいの美人で、さらに背も高い、１７０はあると思う。胸も大きめ。もげろ。

こんな長身美人が無表情で見つめてくるのよ？　泣くってマジで。

まあ、いいや。読書読書。

「姫様、その本は……？」

「はぇ！　あ、これ？」

珍しい事もあるものだ、クレアさんの方から話しかけて来るとは……。びっくりして変な声が出てしまったじゃないか。

今日の本は、『世界の刃物大全　巻の一』、武器の本だね。果物ナイフからラルフさんの担いでるような両手剣などなど、いろいろな刃物が分かりやすく挿絵付で紹介されている、物騒極まりない本だ。

シリーズは何冊あるんだろう？　武器、刃物ってそんなに種類が多いのか？

「武器にご興味が？」

「そ、そういう訳じゃないんだけどね、何となくかな。シアさんは元冒険者だし、武器のこと色々知ってると思って、ね」

まあ、今日に限ってはただの暇つぶしかな。

シアさんは基本ナイフしか使わないみたいだけど、知識として大体の武器の事はは把握しているらしい。

「なるほど。お邪魔してしまってすみません。続きをどうぞ」

か、固い！　カイナさんとはまた違った方向で固い！　お堅いってやつかな……

子供がこんな本を読むんじゃない、って怒られるかと思ったよ。

武器の解説、説明を読みつつ、パラパラとページを捲っていく。

結構面白いねこれ、ゲームの攻略本を読んでいる感じに近いかもしれない。

うん？　これは……

目に入ってきたのは、反りのついた細い方刃の剣。

刀、かな？

今まで物々しい、大きめ、太めの武器しかなかったけど、これは細いね。

魔物との戦いに、こんな細い剣が役に立つんだろうか？　魔物なんていう大型の生き物を相手取るには重さと硬さが重要なんだよね。さっきシアさんがそう言っていた。

こんな細い剣で斬り掛かっても簡単に折れてしまうんじゃないのかな？

うーん……、クレアさんに聞いてみるか？　でも母様お付のメイドさんだしなー。きっと武器なんて、持った事はおろか見たことさえ無いと思う。

「く、クレアさん。これって……」

恐る恐る話しかけてみる。

怖いのよ！　刷り込まれた怖さはそう簡単には消せないのよ！

「はい？　ああ、サーベルですね。これが何か？」

あれ？　パッと見ただけで名前が出てきたぞ？

本に目を戻す。うん、サーベルって書いてあるね……

こういう武器の名前って、誰でも知ってるものなのかな？

おっと、質問を忘れる所だったよ。

「えとね、こんな細い武器で魔物と戦えるの？　折れちゃうんじゃないかなーって思っちゃって……」

「サーベルは儀礼用として使われることが多いですね。この館にも何振りかあります。確かにこの絵のような簡単な造りの物では難しいですね、三合と持たずに折れてしまうでしょう。ですが、実際の武器の出来と使い手の腕が合わされば、大きな魔物相手でも十分以上に渡り合える武器となります。鋭さで急所を、目や間接の裏側、さらには心臓を直接狙っていくのです。どんな大きな魔物でも心臓を一突きされれば終わりですから。勿論剣、刃物として斬る、という戦い方もできます。通常の武器の叩き斬るという振るい方ではなく……、包丁のように綺麗に切断してしまうんです。これは、武器の性能、使い手共に、相当な物が求められます。……姫様？」

「ふぇ？　あ！　うん、ありがとうクレアさん！」

え？　誰これ？　クレアさんだよね？　もう今のサーベルの説明だけで、これまで聞いた以上の声を聞いたんじゃない？

いやいや、それはいいのよ。そんな事より……、何でこんなに詳しいのよ！？

「も、もしかして、クレアさんってこういうの、武器、好きだったりするの？」

「好きか嫌いかで言えば、好きですね。私もいくつか持っていますよ」

あれ？　この人メイドさんだよね？　どこからどう見ても綺麗なメイドさんだよね？

あ！　趣味か！　武器のコレクターとかなのかな？　それもメイドさんの趣味じゃないよ！！！

「ど、どうして？　クレアさんって、メイドさん、だよね？」

「メイド、と言えばメイドでしょうか。私の役割はエネフェア様の、いえ、皆様の護衛が主なのですが」

「ご、護衛？　クレアさんって強いの？」

な、なるほど。目立たないようにメイド服着てるのかな？　目立たないと言うか、あれか、私が怖がらないようにか……

それでも怖がってた私……。ごめんね！！

「ええ。さすがにウルギス様エネフェア様には及びもつきませんが……。冒険者で例えるならＡランク上位、Ｓランクには届かないと思います」

Ａランクの上位！？　まさか、兄様より強いのかクレアさんって！

「る、ルー兄様よりも強かったりするの？」

「今ではそうです、私が勝つでしょう。実力はルーディン様のほうが上でも、やはり、実戦経験の数で私に分があります。経験の差で力の差を埋めるのです」

「凄い！　クレアさん凄い！！」

多分この国で三番目の強さ？　凄い！　普段表に出てこない人たちにもっと強い人もいるかもだけど、兄様より強いなんて、凄すぎる！！

「あ、ありがとうございます……」

そして照れた！！　何？　今日は何の日なの！？
クレアさんとこんなにお話できたのも初めてだし、こんな表情を見たのも初めてだ。

その後も、武器の説明がメインだったが、軽い雑談のようなお話もできた。

「クレアさんって、ちょっと怖い人かと思ってたんだ、ごめんね？　こうやって普通に話せば、綺麗ないい人だよねー」

「いえ！　私の方こそ、お小さい頃の姫様を何度も怖がらせてしまい……」

「あはは。あれは私が勝手に怖がってただけだからね。クレアさん無表情で美人過ぎて、背も高いし……。でも、もう大丈夫！　これからはちゃんと話せるよ！」

話してる内に、僅かな表情の変化が分かるようになっていた。たまの笑顔が綺麗過ぎるんだけどこの人……。私、最近やばくね？

「表情が出にくいんです、私は。姫様に泣かれてしまった時、実は内心大慌てでした。私も姫様を撫でたりして、可愛がりたかっただけだったんですが……」

「ふふふ。そうだったんだね。ごめんねー、怖がりで」

やっぱり優しい人なんだよね、悪い事しちゃったよ。

「とんでもありません。これからはもっと会話に参加できるよう頑張ります。……そうだ、カイナも私と同じなんです」

「カイナさんも？」

同じ？　どういう事だろう。

「カイナは姫様の前では、極度に緊張してしまうんです。姫様のことを可愛がりたい、甘やかしたいとは、本人も思っているのですが……、もし、泣かせてしまったり、嫌われてしまったり、と思うと、体が固まってしまうらしいんです」

な、なるほどね。カイナさんが私の前でガチガチになっちゃうのは、そういう理由があったのか。

「私も無表情で姫様を泣かせてばかりでしたから、よくお互い相談を……。相談と言うより愚痴でしょうか、お恥ずかしい」

ふふ、これはいいことを教えてもらっちゃったわ。

「うん！　ありがとねクレアさん。これでカイナさんとも話しやすくなったと思う」

「カイナは本当に姫様のことが大好きですから、喜びますよ」

うわ、また素敵な微笑み……

私、大丈夫かな……、このまま女の人のこと好きになっちゃいそうで怖いよ。

みんな美人過ぎるのが悪いんだーー！！！

クレアさん、カイナさんも大事な家族の一員。何年も掛かってしまったけど、これからはがんがん話し掛けるようにしよっと。

「あ、そうだ」

いい事を思いついた。私にいい考えがある。

まずは椅子から降りて、クレアさんの方へ向く。

「クレアさん座って座って。武器、好きなんだよね？　一緒に読も？」

「え？　あ、はい」

何がなんだか分からない、と言った感じで、私の座っていた椅子

へ座るクレアさん。

「はい、お願い」

クレアさんに近付き、背を向ける。

「なるほど、分かりました。では遠慮なく。……失礼します」

クレアさんは、私の脇の辺りを手で支え、持ち上げ、膝の上へ降ろす。

や、やばい。この人も凄まじい程に高いメイドスキルを持っている。落ち着くわー……

ちょっと甘えすぎちゃったかな？　今日くらいはいいか、クレアさんと普通に話せて甘えれるようになった記念、という事で。

「まさかこんな日が来るとは夢にも思いませんでした……。感激です」

喜びに打ち震えるクレアさん。

「ふふ、大袈裟だねー。母様に言っていつでも遊びに来てもいいよ。私も嬉しいから」

「ありがとうございます。機会は少ないとは思いますが……、是非」

さあ、読書の続きだ。物騒な本だけど楽しいや！

「では、私が実際振るった感覚も合わせて説明していきましょう」

「うん！　……実際振るった？」

「この本に載っている武器なら大抵は持っています。もちろん全て実際に使った事があります。私は魔法より近接戦が得意ですから」

「え？　……え？」

「今も武器を携帯していますが……、ご覧になりますか？」

「え、ええ！？　どこに！？」

「髪留めに始まり、両腕と背、腰、両腿、靴。靴はこれ自体が武器となっていますから除くとして、最低でも十は持ち歩いています」

そう言って右手の袖口から剣を伸ばし、手の甲側へ固定させる。結構長いな……。ああ、肘までと同じくらいの長さの武器なら袖に隠せるのか。だからクレアさんはいつでも長袖なんだね。

ち、違うよ！！　そういう感想じゃ無いんだよ！！　頭がついていかない……！！

「普段主に使う武器はこれです。暗器の様な使い方もできます。収納したまま相手の剣を受ける事もでき、便利です。これだけの長さがあれば、相手が人であれば心臓を軽く一突きにできます。魔物相手には心許無いですが、対人では本当に優れた武器の一つです。姫様も如何ですか？　護身用に一つ。腕のいい職人の知り合いが錬金

ギルドにいますから、頼みましょうか」

素敵な微笑で武器の説明を始めるクレアさん。

ふんふん、暗殺用の武器であるか。それを私にもですか。ふむふむ……

「い、いらないよ武器なんて！！　やっぱりクレアさん怖い人なんだーー！！！」

「ええ！？　すみません！　怖がらせるつもりは……！」

クレアさんは護衛と言うより、戦闘メイドさんだね……

武器が好きなんじゃなくて、多分戦うのが好きなんじゃないのかな？

メイドさんの基準がどんどん崩れていくよ……

その６６（後書き）

五歳編から出ていたメイドさんズの一人、クレアの登場回？でした。
カイナはまた次の機会に……

その67

クレアさんこわーい。

私は怖くないです。武器が怖いんです。

そんな意外に楽しいやり取りをしていたとき。

「ただいま戻りまし楽しそうですね」

シアさんがノックをしつつ戻って来た。

ノックと言ってもこの部屋のドアは開けっ放し。開けてあるドアを叩いただけだが。

帰還の挨拶と、私たちの状況を見た感想が重なって面白いな。

「シアさんおかえりー」

「バレンシア、丁度いいところに来た。お前からも言って差し上げてくれ。私が怖いのではなく武器が怖いのだと」

「なるほど、把握しました。姫様、クレアは怖いですよ?」

「やっぱりクレアさん怖いんだ!」

喋り方からしてきっと武人タイプの人だよ!

「な! 私は怖くなどありません! バレンシア、お前という奴は

……！」

「私ですら数回しかさせて頂いた事がない姫様の膝抱きをこうも易々と……。残念ながら貴女に加勢する訳にはいきませんね。妬ましい」

シアさんがぱるぱるしている。

シアさんも読書の時にやればいいじゃん。多分私がからかい難くなるからしないだけなんだろう……

「ふふ、シアさんもする？」

「す、すみません！　私などよりバレンシアの方がいいですね……」

クレアさんは慌てて私を降ろそうとする。

「ああ、そのままで結構です。もう暫く姫様の椅子でいられる事を堪能するといいですよ。それと、姫様が本当に怖がっているのなら、大人しく可愛らしく座っている訳はないでしょう？　ただの冗談、安心してくださいね」

「そ、そうなのですか？　姫様」

「あれ？　うん。武器は確かに怖いけど、クレアさんはもう怖くないよ」

まさか、クレアさんホントに私が怖がってると思ってた？

「姫様、クレアは姫様以上に冗談が通じないのです。あまりからか

ってはいけませんよ」

「はーい。ごめんねクレアさん」

「いえ……。安心しました」

恐る恐る私の頭を撫で、安堵の溜息をつくクレアさん。凄く嬉しそうだ。

なるほど、正直な、素直な人なんだね。ついつい、いつも通りの感覚でやっちゃってたよ。危ない危ない、反省しよう。

しかし、私以上に冗談が通じないってどういう意味だろう……

「武器についての会話で仲良くですか……。クレアらしいと言うか何と言うか……。姫様を怖がらせるような説明はしてないでしょうね？」

「ああ、そんな説明はしていない。そうでしょう？　姫様」

「普通に怖かったよ！　表現が生々しかったよ！」

「そんな……、気をつけていたつもりなんですが……」

あれで気をつけてたのか！？　この武器はここを狙えば効果的とか、使う事前提の説明だったじゃない！

武器は使ってこその武器なんだっていうのは分かるけどさ、武器の説明の間間で、返り血を浴びないようにする動き方とか、実際の戦い方の説明まで始めちゃうのは怖かったよ！　しかも笑顔でっていうのがまた怖さを増大させていたね。

クレアさんは本当に戦うことが好きなんじゃないだろうか……。体を動かす事が好きっていう事にしておこう。うんうん、そうしよう。

「武器など姫様には一生縁の無い物。果物ナイフや包丁の使い方すら覚える必要はありませんからね。一生私にお任せください」

それってつまり、料理は教えないぞって事？

「うーん、簡単な料理くらいはできるようになりたいな。誰かに作ってあげて喜んでもらうって、いいよね」

私がおいしいおいしいって食べてると、三人とも凄く嬉しそうだしさー

「ええ、そうですね……」

うん？　その言い方その表情、まさか！

「クレア？」

「クレアさん？　料理作ってあげるような人、いるの？」

「しまっ！　い、いません！」

言ってしまった！　という顔で手で口を塞ぐクレアさん。

分かりやすい人だ……。これは突っ込んで聞くほか無いね！

「いるんだ！　恋人？　それとも結婚してるの？」

「結婚！？　ま、まだしていな……、あ、いいえ！　いません！！」

ふふふ、何て可愛い反応だ！

クレアさん美人だもんね、恋人もちゃんといるのかー

「どんな人？　会ってみた」

！？

く、苦しい！？　クレアさん力強いよ！！

「くくく苦しい、よ……」

「姫様！？　クレア、放しなさい！　強く抱き締めすぎです！」

シアさんの声に反応してバッと手を放すクレアさん。

「いたたた……」

「も、申し訳ありません！！　私は何ということを……」

クレアさんは、私を自分の膝に乗せたときの様に、脇に手を入れ軽く持ち上げながら自分は席を立ち、私を椅子に優しく降ろし直す。

「自分の力の強さと姫様の華奢さを考えて行動してくださいね。姫

様も、からかいが過ぎましたね」

クレアさんに注意をしつつ、私の体に異常が無いか調べ始めるシアさん。

く、苦しかった……。

普段まじめな人はからかっちゃ駄目だ。

うーん、もうちょっとあのままでもよかったんだけどな。まあ、しょうがないか、今のは私が悪いね。

「ごめんねクレアさん。内緒にしておいた方がいいのかな？」

「はい、お願いしま……、いません！　恋人などいませんから！！」

あはは。どうしても隠しておきたいみたいだね。気になるけど、これ以上聞いたら色々と危険そうだし……

「うん、分かった。いないんだね、シアさんも、これ以上は聞かないようにしようね」

「私は元から何も聞いてはいませんが……、分かりました」

「あ……、あはは、ごめんね？」

そうだった。こう言う時真っ先に動くのがシアさんだからさ、ついついね。

「それでは、バレンシアも戻って来た事ですので、そろそろ私もエネフェア様の所へ戻ります」

「うん！　また一緒に本読もうね！」

「は、はい。必ず」

何か、感涙といった感じでクレアさんは母様の所へ戻って行った。

シアさんと二人、談話室に残される。

メアさんとフランさんもまだ掛かりそうだ。ちょっとお腹も空いてきたんだけど……

とりあえずシアさんとお話しながら待とうかな。

「ふふ、クレアさんといっぱいお話出来ちゃった。もう怖くないよ！」

「よかったですね、姫様。この調子でカイナも落としてしまいましょう」

シアさんは私を持ち上げ、椅子に座り、膝の上へ私を降ろす。何故か横抱きの体勢だ。

これって、自然と向き合う形になっちゃうから恥ずかしいんだよね、顔も近いし。母様にはいつもしてもらってるんだけど……

「落とすって……。でも、カイナさんとも、もっと自然に話せるようになりたいね」

「カイナはクレアに比べれば容易い方かと思いますよ、完全に姫様

の愛らしさにやられてしまっていますから。あの緊張癖が治るには時間が掛かりそうですけどね」

そうだよね、あそこまでガチガチになられると、こっちも緊張しちゃうんだよね。

よし、頑張ろう！　家族なのにお話できないとか、悲しいもんね！

「でも、できたら、私だけを見てくれると嬉しいのですが……」

「やめて！！　その妖艶な眼差し！　怖い！　落とされちゃいそうで怖い！！」

絶対この人ノーマルじゃないよ！！

最近シアさんのアタックが強烈になってきてないか？　これは、一回ちゃんとした話し合いの席をを設けるべきだね！

二人きりだと襲われそうだけど、本心を話してもらわなきゃ……

「シアさんシアさん。今日は寝る前に大事なお話があります。私のお部屋へ来るように！」

「ひ、姫様にはまだ早いです！！　せめて初潮を迎えられてから……。しかし、姫様のお誘い……。分かりました、精一杯努めさせていた」

「違うから！　違うからね！？　お話！　お話だけだから！！」

「告白ですか？　では、キスまでくらいなら？」

「怒るよ？」

「す、すみません！　調子に乗りすぎました！！」

謝りながらも私を撫で回す手を止めないシアさん。

早まったか……！？

その67（後書き）

ついに次回シアさんと……
お楽しみに？

その68

寝る準備は完了。
寝巻きで、さらに髪袋を付けたままというのはちょっと情けなく見えるが、しょうがない。通常のナイトキャップではこの髪の量はどうしようもないからね。
小さめのテーブルに二つの椅子を用意、片方に座る。
後は、シアさんの明日の準備？　が終わり、部屋に来るのを待つだけだ。

ちょっとドキドキするが多分大丈夫だろう。
シアさんは何度も自分の事をノーマルだと言っていた。人間の男の人と結婚だってしてたんだし、その人と、その、そういう事もしてたみたいだからね。未だに想像もできないんだけど……

まじめに聞いて、まじめに答えてもらおう。いつものようにノーマルですよ、と言われて終わるはずだ。うんうん。
しかし、本気だったらどうしようか……。それも少しありえそうだから怖いんだよね。

最近のシアさんはやけに積極的だ。
お風呂にも殆ど毎日一緒に入るようになったし、いやらしい手つきではないが、ベタベタ触ってくる。
際どい表現もしてくるようになったんだよね。大抵は、冗談です、で終わってるんだけど。あれ？　怪しいどころか完全アウト？

シアさんと初めて会ったのは二歳の頃か。さすがに覚えてないね。
メアさんとフランさんは、私が生まれてすぐお世話係になったらし

い。

それまで外で冒険者してたのかな？　そのシアさんがなんで私の専属メイドさんに？　メイドさんと言うか、護衛だっけ。

そうだよ護衛だったよ、また忘れてた。

はっきりとそう聞いた訳じゃないが、ご、の付く従者的なものだし護衛しか無いだろう。

うーん……。何から何まで謎なメイドさんだね……

とりあえずは一番の問題。シアさんは女の子が好きなのか、という最大の問題を解決してしまおう。

その後はまた、その後だ。

少し控えめなノックが聞こえた。

「バレンシアです。入ってもよろしいですか？」

来たね……。決戦の時が来た！　何の？

「うん。入っていいよー」

緊張する事など何も無い。いつも通り、気楽に聞こう。それでまた明日から楽しくからかわれればいいんだ。

失礼します、と一言、シアさんは音も立てずにドアを開け、私の部屋に入って来た。相変わらず丁寧な人だよ。

服装はいつものメイド服、当たり前か。

「早速ですが、その、お話とは……？　お叱りでしょうか？」

あ、ちょっと緊張してるみたいだね。珍しいわ……

「ううん？　まずは座って欲しいな。緊張しなくてもいいよ？　少しまじめなお話だけど、簡単に終わると思うから」

「姫様と一緒の席へ、ですか？　私は立ったままでも……」

何と言うメイドさん根性。いいか、シアさんだし、座ってもらうのは無理そうだね。

「ああ、姫様を膝抱きにしてもいいのなら……、す、すみません！　ついいつもの軽口が。まじめなお話の席でしたね、申し訳ありません」

「そ、そこまで畏まらなくてもいいよ、私も緊張しちゃう……。ただね、一つだけ教えて欲しいことがあるの。嘘をつかずに、シアさんの本心で答えて欲しいな」

「姫様……？　わ、分かりました。私に誓えるもの全てを懸け、誓います。嘘は吐きません。もし、姫様が少しでもお疑いになるような言動でしたらどうぞ、即座にこの首を」

「重い！　重いよ！　普通に嘘つかずに答えてくれるだけでいいから！！」

き、気軽に命まで懸けないでよ、怖いなあ……

いいか、それだけ真剣に答えてくれるって言う事だ。

「それじゃ聞くね？　もう何回も聞いてるんだけどさ」

「は、はい。……何回も？」

真剣な表情から一転、首をかしげるシアさん。

可愛い！　たまに見るこういう仕草がいいね！　おっと……

「笑わないで答えてね？　結構悩んでるんだから」

「お悩みですか？　私にお答えできるのでしょうか……」

真剣な顔に戻る。

「うん、シアさんにしか答えられないから大丈夫。シアさんは、えーと……ね。やっぱりさ、男の人、じゃなくて、あの……、お、女の人が好き、なの？」

「……はい？　え？　は？　あの……、姫様？」

何言ってるのこの子頭大丈夫なのか、っていう顔だね……。やっちゃったか！　馬鹿なこと聞いちゃったか！

「こ、答えて！　嘘は駄目だよ！　真！　剣！　に！」

もう勢いに任せるしかない。恥ずかしい、恥ずかしすぎる……

「な、なるほど、やりすぎましたか、申し訳ありません。正直に、真剣にお答えします。女性に恋愛的な興味はありません。加えるなら、男性にもありません。恋愛などもう、するつもりはありませんから。嘘偽りの無い、本心からの答えです。からかいが過ぎたようで本当に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げるシアさん。やめて！　罪悪感が……！

シアさんはノーマル！　喉の奥に刺さった骨が取れたような気分だよ。刺さった事無いけど。

でも、ちょっと気になる事言ってたね。恋愛は、もうする気は無い？

「ふう……。ありがとう、シアさん。後、ごめんね？　変な事聞いちゃってさ。わ、私なりにかなり悩んでたの……」

「まさかそこまでお悩みになっていたとは……。これからはなるべく控えるようにしますね。……つ、辛いです……！！」

本気で辛そうだよこの人は！

「いいよ、今まで通りで。でも、うん、ちょっとだけ控え目にしてくれると嬉しいかな」

「はい！　今まで通りですね、分かりました！」

控える気ゼロ！？　うーむ、ま、いいか。

「もう一ついいかな？」

「はい？　どうぞ、何なりと」

シアさんは紅茶の用意をしてくれている。超が付くほどの上機嫌だ。これ飲んだらまた歯磨きしなきゃ……

「聞いちゃいけないことだと思うんだけど、やっぱり気になっちゃって。恋愛はもうするつもりが無い、って、どういう意味か聞いてもいい？」

「そうですね……、申し訳ありませんが今はお答えできません。お話できるのは、早くても姫様が成人されたら、ですね」

私が知るにはまだ早いのか……

よし、気にしないでおこう、悲しい事なのかもしれない。シアさんが話してくれるのを気長に待とう。

「うん。ありがとシアさん！」

「いえいえ。お一人で考え込まず、どんどん私たちを頼ってくださいね。……これは外してしまいましょうか、また寝る前に、私が巻いて差し上げます」

そう言うとシアさんは髪袋を外してしまう。折角苦労して一人で巻いたのに！！

「むう、変だった？」

「少しだけ……。あまり雑に巻かれると、反対に髪を傷めてしまいますよ。そうなっては国の、いえ、世界にとっての大損失です」

「言い過ぎだよ！　もう……」

冗談を言いながら髪を梳いてくれる。

シアさんはホントにお姉ちゃんみたいだなー。兄様姉様よりもう一つ上のね。

「シアさんってお姉さんみたいだよね。もっと私の事、妹みたいに扱ってもいいんだよ？」

「妹のように、ですか？　それは中々難しい提案ですね。できましたら、恋人のように……、でお願いしたい所なのですけど」

髪を一房持ち上げ、口付けをしながら言う。

「にゃ！　な、何を!?　あ！　冗談だ!!　くそう！　慣れないよこれ!!!」

「あ、姫様！　くそう、などと言ってはいけません！　にゃ、でしたら何回でもどうぞ！　是非に!!」

「シアさんのせいじゃない！　早速またからかって!!　後言わないよ!」

「からかってなどいません！　本心です!!」

「どっちなの!?　今日のお話は嘘なの!?　私の悩みは結局解決

してないの！？」

「いえいえ何を仰っているのやら皆目見当もつきませんねうふふふ」

「露骨に目を逸らさないで！！！」

楽しいからいいんだけどね……

シアさんはノーマル、これが分かっただけでも充分だよ。

その６８（後書き）

シアさんの謎が一つ明かされ……てない……
この二人のやり取りを書くのが一番楽しいです。

また次回から説明多目の続き話に入ります。
あまりと言うか、ほのぼの要素は少なくなるかもしれませんね。

その69

「こんにち、わ？　あれ？」

今日も冒険者ギルドへ遊びにやってきた。

冒険者ギルドに遊びに来るお姫様……。いいんだろうか？　いいや、深く考えない。私は私だ。

世の中に一人くらい、そんな変わったお姫様がいてもいいじゃない？

駄目なんじゃないかな……

いつもなら入ってすぐ、カウンターにミランさんが見えるのだが、今日はいないね。お休みかな？

うーん、どうしよう、とギルド内を見回してみる。

ラルフさんもナナシさんもいないね。見知った顔も無い。うん？　全体的に人が少ない？

いつもなら十人以上、多いときは二十人くらい座って、お酒を飲んだり、笑いながらお話してたりするんだが。

お酒は酒場で飲もうよ、と言ってみた事はあるが、町の酒場は一般のお客さん用のお店らしい。武器を持った冒険者が座っていたら、営業妨害になってしまうのだ。

意外だった、意外すぎた。冒険者と言えば酒場っていうイメージがあっただけにね。

なので、冒険者ギルドはこんな、一見酒場の様な作りをしているらしい。

なるほどね、これも現実か。もちろん宿に武器を置いて酒場に飲みに行けば問題は無いので、そうする人も多い。
ギルドはお酒もおつまみも自分で持ち込まないといけないからね。酒場の営業が夕方以降っていうのもあるかな。昼間から堂々とお酒を飲んで騒げる場所は貴重なんだろうと思う。

昼間、明るい内からお酒を飲んでるのはどうかと思い、実際に聞いてみた事はあるが……
自分たちのお酒は私で言うオレンジジュースの様な物だと言われて納得してしまった。
家に帰ってからなんか違うな、と思ったけど、まあいいやとこれ以上何も言わない事にした。

その話はもう置いておこう。この人数の少なさは何だ？　ひのふのみっと、六人しかいないね。
カウンターも無人。いつもはミランさんがぼけーっと暇そうにしているんだけど……

「何かあったのかな？」

「ええ、恐らくは。どんな事情かまでは予想もできませんが、何か起こり、皆外へ出て行ったのでしょう。それでも何人か残っている様ですし緊急事態、という訳ではないと思いますよ」

何か重大な事件では無さそうだけど、さすがに何があったまでは分からないか。ふむ、どうしたものか……

「聞いてみよっか。とりあえず、……あそこの人、一人だけだし話し掛けやすそうだよね」

分からなければ人に聞く！

丁度よく、一人ぽつーんと寂しく座ってる冒険者の人がいる。服の色からするとDランク以下の人っぽいね。黒い。

男の人、人間かな？　ここから見た限りじゃ動物的な特徴は見えない。年は若そうだね、成人したて？　初心者冒険者だろうか。

「では私が。姫様は少し後を付いて来てくださいね。あ、やはりお手を」

「うん。初めて話す人だしね、ちょっと緊張」

シアさんの右手を取り、少し後ろに隠れる様について行く。

「こんにちは、私は通りすがりのメイドです。唐突で申し訳ないのですが、少々お尋ねしたい件がございまして。今日は何か特別な事情でもあったのでしょうか？　随分とギルド内の人数が少ない様に思えるのですが」

通りすがりのメイドですの所で吹き出しそうになった。

やるな！　さすがシアさんだ。

「へ？　あ、俺？　メイドさんって通りすがるものなのか……、さすが冒険者ギルドだな……」

やばい！　笑わせないでよ！　今のは危なかった！！

声が若いね。やっぱり十六、十七くらいだろう。

「ええ、冒険者ギルドですからね。それで、何かご存知でしたらお教え頂きたいのですけれど」

「あ、ああ、悪いけど俺も詳しい事は知らないよ、っと、知りませんよ。Aランクの冒険者が二人も来たって言うんで、多分皆見物じゃないかな。あっと、だと思います」

何故に敬語に直す？　ああ……、シアさん美人だからね……

「充分です、ありがとうございます。言葉遣いはお気になさらずに、楽にしてください。Aランク二人ですか……。それで見物となるとどちらかが二つ名持ちでしょうね。……姫様、お席へどうぞ」

シアさんが、冒険者の人と向かい合う位置の椅子を少し横へずらし、勧めてくれる。

なるほど、シアさんが冒険者の人の正面に立つ訳ね。私は大人しく聞きに徹しよう。

Aランクの冒険者が二人か……。二つ名持ちっていうのはやっぱり有名人なのかな、まさか大勢で見物に行くとは……

ん？　まさか、ミランさんも？　意外にミーハーなのね。

「エルフの子供……？　あ、二人ともって話だよ。俺はそんな有名人に興味無いし、そもそも誰かも知らないし。冒険者にだってつい最近なったばかりなんだ。仲間、って言うか、師匠が見に行っちまってさ、俺は留守番みたいなモン。それに、ついて行ってその有名人に変に目でも付けられちゃたまったモンじゃない」

「なるほど確かに。それに、冒険者ならギルドへ来るでしょうしね、暫くしたらここへ来そうですね。恐らく残った皆さんも同じ考えでしょう。どうしましょう姫様、今日は他の場所へ？　それとも少し待ってみましょうか」

「え？　うん。Ａランクの人には興味あるね。人通りが多い所に見に行くのもなんだし、少し待ってみようか？」

「姫様？　エルフで姫様って、え？」

「お気になさらずに。……ああ、そうですね、そうしましょう。私はバレンシア、見ての通りメイドです。こちらのお方はリーフエンド国の至宝、シラユキ姫様です。少し、姫様の退屈しのぎのお相手をお願いしてもよろしいでしょうか？　ちなみに貴方に拒否権はありません。承諾か死か、お選びください」

ひ、ひどい！　人間扱いしてあげて！　暇つぶしのおもちゃ扱いですか！！　拒否は死って……

でも初対面の人の前じゃツッコミができない！　ごめんなさい、新人冒険者の人……

「ええ！？　あ！　はい！　え？　マジで？　お姫様！？」

「は、はい……」

ううう……、そんなに見つめないで……

「あまりジロジロと見るものではありませんよ？　目が潰れますよ？　物理的に」

「す、すんません！！　だ、誰か……！」

オロオロと他の冒険者たちに助けを求めようとするが、この町の冒険者の人には、この状態のシアさんの前に進んで立つような人はいないのだ。諦めてもらうしかない。

「だ、誰も目を合わせてくれない……。二人とも、早く帰ってきてくれよ……」

「大丈夫ですよ。あ、あの、名前を教えてもらってもいいですか？」

お話するにもまずは名前から。もしかしたらお友達が増えるかも？

「はい！　俺は、エディ・ヴァッセルです！　と、年は十六です！　ちょっと前に冒険者になったばかりで、え、ええと……」

ガチガチだなあ……

お姫様の前じゃしょうがないか。後五、六年も経てばラルフさんや他の冒険者の人たちの様に馴れ馴れしく……、なってほしくは無いね。

「あ、敬語はいいですよ。さっきまでシアさんと話してたみたいに普通に、楽にしてください」

「え？　いいの？　じゃない、いいんですか？」

何故かシアさんに顔を向けて聞くエディさん。まあ、そうなるよね。

「姫様のご好意を無下にするおつもりなら、わかりますね？」

「分かりました！　お言葉に甘えます！！」

普通は、一見ただのメイドさんに、ここまで緊張する事も無いんだけどね。シアさんって何か怖いんだよね、やっぱり。

「それで、ええと、俺は何をしたらいいんです、いいのかな？」

「退屈しのぎとは言っても、特にこれといってお話するような話題があるわけでもないのですが……。姫様の魔法の的にでもなってもらいますか？」

「ひい！　やっぱり王族って庶民は家畜の様ににしか見てないんだ！！」

何ていう事を！　一般の人から見た王族のイメージってそうなの！？

「しません！　思ってません！！　もう！　シアさん！　初対面の人なんだから冗談も程ほどにね？」

「すみません、からかい易そうな方だったので、つい……」

「か、からかわれてたのか……。大丈夫なのかな俺……」

胃に穴が開かないように祈ってますね。

「エディさんは成人したばかりなんですよね？　それで一人は大変なんじゃないですか？」

家を追い出された、とかならしょうがないけどさ。十六で一人で生きていくのは相当辛いんじゃないのかな。

「あ、うん。一人じゃないから大丈夫です、よ。は、話しにくい……！　ちゃんと師匠って言うか、先輩冒険者と一緒に行動してるんだ。今はちょっと外に行っちゃってるけど」

「あ、そういえばさっきそう言ってましたね。それならもう一緒にギルドの依頼を受けたりしてるんですか？」

「そんなのまだまだ。まずは師匠が受けた雑務依頼の手伝いしたり、簡単そうなの探して自分で受けてみたりだな。まだ依頼の無い休みの日や夜に色々と教えてもらってる段階さ。勉強と武器の訓練の毎日だよ、投擲技術ももっともっと磨かないとな」

なるほどねー。師匠か、なんかカッコいいね。

考えてみたらそっか、十六でいきなり冒険者になっても、一人でEランクに上がるための依頼をどうにかするなんて無理だよね。

多分子供の頃から訓練はしていたんだろうね。でも、実戦なんて経験できる訳無いしね……

「まずは基礎、体は出来ていても動かし方が分からなければ意味はありません。町中で生活していくのではなく、町の外で生き残るための動かし方ですね。ギルドの依頼にも何度か連れて行ってもらえるとは思いますが、師匠の許可、同行者の同意がなければEランクに上がる事はできません。焦る事はありませんよ。十六ですぐ冒険者になった方がEランクへと上がるのは最低でも一年は見ておいた

ほうがいいです。焦りは自分のみではなく、師匠も危険に晒してしまいますから」

「バレンシアさん凄いな……。分かったよ、ありがとう！　俺の師匠ってこういう細かい説明してくれないんだよな……」

「考えるより感じろタイプですね、大抵の冒険者はその様な感じですよ。疑問に思うことがあればその都度自分から聞くしかありませんね。面倒だと答えてくれない場合は他の冒険者の方に聞いてみるのもいいです。Cランク以上の方であればそう邪険にもされないと思いますよ。とにかく疑問を疑問のままにしておかない事です」

おお……、シアさんが人間の人に優しい……！？　やっぱりラルフさんは個人的に嫌いなんだね……

「それじゃ、質問してもいいかな？　メイドさんに聞くっていうのも変な話だけど、バレンシアさん色々知ってそうだし、何か的確に答えてくれそうな気がするんだ」

メイドさんに冒険者の知識を頼るという事を疑問に思おうよ……。でも気持ちは分かる。

「ええ、どうぞ。その前に飲み物でもご用意しましょうか。姫様、バスケットをお願いします」

「うん。はい」

収納の魔法で仕舞っておいたバスケットを取り出し、シアさんへ

渡す。中身はテーブルクロスとグラスが数個、オレンジジュースの入った瓶、さらに少量のお菓子と、それを盛るお皿、取り分ける小皿。お菓子はシアさんお手製のクッキーだ。

これが、最近の冒険者ギルド行きの日の必須アイテムだ。ほかにもピクニック用、川遊び用など色々とある。

あれ？　私アイテムボックスになってないか？

「少しだけ前を失礼します」

ものの数秒でお茶会の準備が整う。飲み物はオレンジジュースだが。

「は、早っ！　ええ!?　ど、どこから!?」

ふふふ、いい反応だ。

「遠慮なさらずどうぞ。冷えているとは思いますが、ご自分でお好みの温度に直してお飲みくださいね」

保存の効果で冷たいまま、最高に便利な魔法だ。

シアさんはこの魔法の使い方を色々と考えてくれる。主に食べ物的な方向になってしまうのは、私のせいかな。

「あ、ありがとう……。お、王族って凄いんだなホントに……。っと、聞きたい事はそれなんだ、魔法がどうしても苦手でさ……、特に冷やすっていうのができないんだよ」

冷やす？　水に手をつけて、体温が下がっていくのを感じ取れば

簡単にできると思うんだけどな……

「詠唱は教えてもらいました？　集中して効果をイメージし、詠唱を正確に、ですね。私にはその程度しかアドバイスはできそうにありませんね」

詠唱を教えてもらう？　正確に？　どういう事？　詠唱なんてその場その場で適当に作るんじゃないの？

「それでも難しいのなら……、一度、氷水にでも裸で飛び込んでみるといいですね、一生忘れられない経験になるでしょう。イメージ力も上がる事間違い無しです」

「す、スパルタすぎる！　せめて氷水に腕を浸けるくらいにしてあげて！」

へ、下手したらそれ死んじゃうから！

「な、なるほど、やっぱエルフは違うな……。魔法の使い方って言うか威力、ホント凄いもんな。それもそういう苦労があってこそのモノなのか……」

勘違いされてるーー！！！

「やはり慣れですね。一度成功して、後は慣れてしまえばこの通り」

そう言ってエディさんのグラスを手に取り、一瞬で中のジュースを凍らせる。

「すげえ！　一瞬で氷に！？　しかも今のって無詠唱だよな！？

すげえ！！」

おお、大喜びだね。私にもそれくらいできるんだよ？　スプーンも無いし、やらないけどさ……、ん？

「無詠唱って、詠唱破棄の事ですか？」

「詠唱破棄は詠唱破棄だよ。無詠唱は無詠唱」

だからその意味を、違いを聞いてるんだってば！

「姫様には特に必要の無い知識なのですが……。しかし、いい暇つぶしになりそうですね。では、私から分かり易く説明致しましょうか」

シアさんウキウキしてるよ。説明大好きなんだからもう……

詠唱破棄と無詠唱か……。何が違うんだろうね？

その６９（後書き）

続きます。

書き溜めている物を、その日に読み直しながら修正して投稿しているのですが、何故か１０００文字くらい増えてしまう……
ちょっと長めの説明回になってしまいますが、魔法に関しての最後？の補足説明になると思います。

その70

「詠唱破棄、それと無詠唱。似たような意味の名前ですが、少し違います。エディさんは違いは分かりますよね。ですが姫様には、と言うより、エルフには馴染みの無い、いえ、必要の無い言葉なのです」

シアさんの説明が始まった。

エディさんはどうやら違いも意味も理解しているらしい。エルフには必要が無い？　どういうことだろう……

「違いは分かるけどさ、エルフには必要無い言葉って？　無詠唱が？」

「それでは、まずはエディさんに分かる様説明します。殆ど必要の無い知識だとは思いますが、知っておいて損はありませんよ。とりあえず一言、エルフが使う魔法は、基本的に全て詠唱破棄です」

え？　詠唱破棄って難しいんじゃ？　みんな普通に詠唱してるよ？

「そうなんだよな。エルフの人って大抵一言だけで発動させちゃうんだよな。羨ましいよ」

「一言って、詠唱じゃないの？」

「はい。そこがエルフと他種族の魔法の使い方の違い、詠唱という物の認識の違いです」

エルフと他の種族って魔法の使い方が違うの!?　だ、誰も教え

てくれなかったよそんな事……

「魔法の使い方は同じですよ、ご安心を。違うのは詠唱、という言葉の使い方、認識の違いでしょうか。紛らわしい言い方をしてしまったようですね、すみません」

「あ、いいよ、続けて。何か面白くなってきたしね」

詠唱の違いか……。シアさんはこういう人を楽しませる説明の仕方がうまいよね。人をじゃなくて、私を、か。

「では、簡単な例を挙げて、実際に見ていきましょうか。エディさん、明かりの魔法は使えますか？」

「お、俺？　うん、できるけど、熱いよ、あれ」

熱い？　熱を持たせなければいいのに。

「それで構いません。その魔法、詠唱破棄、無詠唱で発動できますか？」

「無詠唱は無理無理。詠唱破棄でも集中しないとできないし、失敗もするよ。確実に発動させるなら集中して詠唱しないといけないな」

ど、どういう事？　詠唱っていう言葉がゲシュタルト崩壊しそうだよ。

「それでは実演をお願いします。姫様、光と熱にご注意を」

「え？　う、うん……」

考えるのはやめよう、今は見なきゃね。シアさんが言うんだから何かしら意味がある行動なんだよね。ちょっとワクワクしてきたぞ。

エディさんは手のひらを上に向け、胸の前辺りに出す。目を閉じ集中しているようだ。

そういえば、他の種族の人が魔法使うところって始めて見るね。

「もっと力を抜いて、いつも通りの使い方でいいですよ」

「わ、悪い、緊張しちゃってさ」

ははは、と頭を掻きながら言う。

「それじゃやるよ。明かりを灯せ、ライト！」

手のひらの上に小さな光の玉が出現する。うん、普通の明かりの魔法だね。

明かりを灯せって言うのは、エディさんがイメージしやすいセリフなのかな。ゲームの魔法みたいでカッコいいね。

「な、夏場使うにはちょっと熱いな……。消していい？」

「はい、どうぞ。……次は、詠唱破棄でお願いしてもいいですか？」

何かあのネタバラシの日のメアさんを思い出すね。

「ええ？　ま、やってみるか。それじゃ……。……ライト！」

しかしなにもおこらなかった！

あれ？　出ないね。失敗かな？　って詠唱してたじゃん今。まあ、つい言っちゃうよね。

……？　ホントにメアさんの時と同じ様な引っ掛かりを感じるな……

「失敗した！　恥ずかしい！！　もう一回いい？」

「いえ、もう結構ですよ、お疲れ様でした。姫様も何となくお分かりになって来ているでしょうし。ありがとうございます」

まだ分かんないかなー。でも、何となく、違和感があるね。

「では、次は姫様にお願いしますね。同じ魔法を詠唱あり、は逆に難しいですか。詠唱破棄でお願いします」

うん。詠唱とか一々考えるのめんどくさいよ、と考えつつジュースを飲みながら明かりの魔法を頭の少し上に出す。

もちろん熱も無いよ。あっついもんね。

「す、っげえ……。こんな小さな子が無詠唱かよ……、しかもジュース飲みながらだよ、自信無くすわ……」

ごめんなさい。私はちょーっと特別らしいのよ。……無詠唱？

「無詠唱？　詠唱破棄じゃ……、え？　シアさん？」

「お分かり頂けました？　詠唱という物の認識の違いを。では、少し早いですがまとめに入ります」

「うん。まだはっきりとは分からないけど、何となくは……。シアさんお願い」

「何か俺、全然分かんないんだけど……、いいや、とりあえず聞こう。バレンシアさん凄いし」

シアさん凄いよね？　いいだろー？　私のメイドさんなんだよ？　ふふふ。

「エディさんが言葉に出していた、明かりを灯せ、ライト。この『明かりを灯せ』の部分が他の種族で言う詠唱になります。『ライト』は魔法名ですね」

うん。魔法に名前付けてるんだね。兄様みたいにカッコ付けじゃなくて、実際の運用に必要なんだろう。

「他種族の詠唱破棄とは、明かりを灯せ、の部分を省略する事を指します。完全に無言での発動の場合は無詠唱、と呼ばれますね。姫様に馴染み易い名で呼ぶならば、詠唱魔法名破棄でしょうか」

「ああ！　やっと分かったよ。確かに無詠唱って言うの、何か変だよな。詠唱魔法名破棄の方が言葉的に分かりやすい、けど長いし言い辛いな」

無詠唱の方が言いやすいし、カッコいいよね。詠唱魔法名破棄とか舌噛みそうだよ。

「私たちは魔法に名前付けないから、出る言葉は全部詠唱っていう扱いになっちゃうんだね」

長い詠唱はよほど大きな魔法じゃないと必要ないんだよね。大抵は一言で済んじゃうし、その一言も毎回適当だしね。魔法名を付けたほうがカッコいい、分かりやすいって言う人は多いんだろうけどね。

……魔法名を付ける？　分かりやすい？

「無詠唱で統一しておけば、と私は思うのですけどね、エルフと他種族の方の魔法にはもう一つ違いがありまして……。お分かりになりますか？」

あ、また表情を読んだな今……

「もしかして、その詠唱って決まってるの？　明かりを灯せ、っていう詠唱」

「はい、正解です。さすがは姫様」

「ああ、俺はそう教わったよ。魔法名もだな。自分で考えてもいいらしいんだけど、やっぱり実際目の前で使ってもらったのって頭に残るからさ」

ええ！？　私は逆にそのせいで使えなかったんだけどな。

うーん、これが種族の差かな？　魔法という物の認識の違いが大きい気がする。

「エルフと他種族、実際同様の魔法を使っているんですよ？　しかし、同じ様には見えませんね。詠唱一つとっても認識のズレが大きいんです。面白いですよね」

「うん、面白いね。確かに必要の無い知識だったかもしれないけど、面白いよ。私も詠唱考えようかな？」

「ウルギス様ルーディン様の様にですか？　おやめください……」

そ、それもそうか……。同じエルフの人から見たらただのカッコつけだったよ……

「エディさん、凍らせる魔法は？」

「ん？　ああ、詠唱か。凍らせる場合は、冷えて固まれ、だな。魔法名はアイス」

「分かりやすい！」

冷えて固まれとかカッコよくないよ！　もっとカッコよく、もう少し長めにできないかなー

「ええ、分かり易いですが少し短すぎますね。その詠唱は師匠の方が？」

「そうだけど、変かな？　二人とも、ああ、俺の師匠二人いるんだけど、どっちもこれで使ってるからさ」

「その詠唱、魔法名だと、完全に凍らせる事しかできないのでは？」

「え？　そうだけど……、冷やす魔法も別にあるよ。そっちはクールって言うんだけど、どうしてもできないんだよなあ……」

そっか。詠唱と魔法名でイメージが完全に固定化されちゃうんだね。

なるほどなるほど、確かにそっちの方が使いやすいのかもしれない。

「分かりやすい人なんだねー……。私もそれで使ってみようかな？」

兄様やラルフさんといいお友達になれそうな人と見た。

そうだ！　今度ラルフさんにも魔法使ってみてもらおうかな。

「絶対におやめください。姫様には、もっと優美で格調高い詠唱と魔法名を私が考えて差し上げます」

「なんか覚えるの大変そうだからいいや」

「そんなっ！　……そうですね、姫様の詠唱有りの魔法となりますと……、無意識に威力が上がってしまい、この部屋程度の広さなら一瞬で氷付けにできてしまいそうですからね」

「え！？　この子そんな事できるのか！？　す、すげえ……」

「できないって言いたいけど多分できちゃう……。でも、シアさん

もできるんじゃないの？」

「ええ、できますよ。ご覧になりますか？　六体ほど氷の彫像ができてしまいますが……」

「彫像？　六体？　……！？」

エディさんが激しく動揺する。

「やめて！！」

ガタタッ　と他のテーブルに着いている冒険者の人たちも反応した。みんな暇そうだし、聞き耳立ててたな……

「冗談ですよ。あ、よかったら姫様がどうぞ？」

「しないってば！！！」

「なんか楽しそうだと思ったらシラユキちゃんとメイドさんか。納得した」

「おやホント、どうしたのシラユキちゃん？　あたしに会いにに来てくれたの？」

むむ、ラルフさんとナナシさんが戻ってきたようだ。他にも続々とギルドの中へ人が入ってくる。

どうやら見物も終わったようだね。Ａランクの人二人は一緒じゃないみたいだけど……

「ラルフさんナナシさん、おかえりなさーい」

「あ、ラルフさん、ナナシさん、おかえり。このメイドさん凄いけど怖かったよ……。え？」

え？

「あれ？　エディ、何でお前がこの二人と一緒に？　ってかよく生きてたな」

「メイドさんもさすがに若い男は躊躇したんじゃない？　運がよかったねエディ」

この話し方、まさか！！！

「エディさんの師匠二人って、ラルフさんとナナシさんなの！？」

「何だ？　聞いてなかったのか。そうだぜ？　カルルエラで拾ってきたんだよコイツ」

カルルエラってここから一番近い町だっけ？　え？　拾って？

「ま、紹介の手間が省けてよかったね。護衛の依頼でエラ行ったんだけどね、そこのギルドで冒険者の師匠探してたからさ、拉致してみた。あ、安心してね？　まだ手は出してないから。でも、結構いいモノ持ってるのよこの子」

拉致って……。も、モノって……

しかしナナシさんは相変わらずエロイ。エディさんが襲われるのも時間の問題だね。

「先ほどの詠唱の件といい、説明不足のまま修行させる事といい、確かにこの二人なら納得ですね。エディさん、師事する者を変える事を、強く強くお勧めします」

「やっぱそうなのか？　それならバレンシアさんの弟子にして欲しいよ」

「それは駄目！！！」

「うわ！　じょ、冗談だよ……」

シアさんは私のメイドさんなんだからね！！

「おおおおい！　やめろ！！　シラユキちゃんだけは怒らすな！！」

「最悪この町が滅ぶからね！！　冗談じゃないよこれは！！！」

「ま、マジで！？　す、すんません！！！」

これくらいで怒らないって。でもシアさんはだーめ。

しかし、なんという似たもの三人組。ぴったりだと思うよ。

とにかく、新しいお友達が増えた。嬉しい事だねー

その７０（後書き）

これで魔法の追加説明は終わりです。
新キャラの未来が危ぶまれる……

その71

ラルフさんナナシさんの分のグラスも用意、シアさんがジュースを注ぐ。あああ、無くなっちゃう……

「ラルフさんの分は無しでいいですね。残りは全て姫様に」

「やっぱり俺には冷たい！　外熱かったんだよー、俺にも一杯くれよー」

「姫様、先ほどの凍らせる魔法、実践してみます？」

「何か知らないけどやめてくれ！！」

「ラルフさん何でそんな嫌われてるんだよ……」

「俺が知りたいよ……」

あはは……、ラルフさんだから、かな？

その後少し経つと。ミランさんも受付へ戻って来た。

ミランさんはAランクの人たちを見に行ったんじゃなくて、人が減った隙におやつの補充へ行っていたらしい。軽く挨拶をしてカウンターに入り、いつもの様にぼーっとしている。

何というフリーダムな受付。いいな、冒険者ギルド。

「Aランクの人たちには会えました？　二人とも見に行ってたんですよね」

「ああ、いい胸だったぞ。目線に気づかれて殺気飛ばされたけどな。そうだ、ルーディンのやつにも教えておいてやってくれよ」

「何で胸しか見ないの！？　二つ名持ちの冒険者だから見に行ったわけじゃなかったんですか……」

「ラルフさんお姫様の前でもそのままか……。やっぱすげえなこの人」

やはりラルフさんはラルフさんか……。エディさんは染まらないでね。

胸？

「女性だったんですね、その人」

「誰が来たか聞いて無いんだ？　『落炎（らくえん）』と『鋼爪（こうそう）』だよ、『落炎』の方が女の人。なんでそんな大物がこんな田舎に出向いてきたんだか……」

ナナシさんが代わりに答えてくれた。

落炎と鋼爪？　翻訳機能は便利だね。意味合いまで伝わってきたよ。

しっかし、物騒な二つ名だね二人とも……

「『落炎』は確か有翼族の方でしたか。炎を雨のように降らせると

か。それと、『鋼爪』はライナー・ランガーの馬鹿の事ですよね」

シアさんはよく知ってるなー、鋼爪の人は名前まで。有名な人なのかな？　馬鹿？

「姫様、帰りましょう。Ａランクの冒険者になど気軽に会うものではありませんよ」

「え？　どうしたのシアさん、急に」

まさか、知り合い？　会わせたくない、あ、馬鹿とか言ってるし会いたくないのか！

「『鋼爪』ライナーを馬鹿扱いかよ……、さすがメイドさんか？　何で知ってるかは……、聞かない方がいいか」

「バレンシアさん本気で何者？」

「賢明な判断ですね。ああ、私はただの、どこにでもいるメイドですよ」

誰も信じないよ！　シアさんクラスのメイドさんがどこにでもいたら……、それはそれで面白いかもしれない。

「あはは。まあ、確かに体力馬鹿っぽかったかな？　竜人ってみんなあんな感じなの？　ちょっと夜の方、気になるんだけど」

よ、夜の方！？　って、え？

「え？　竜人？」

竜人の冒険者!?　あ、会ってみたい！

「シアさん！」

「駄目です帰りましょう」

「えー！！　会ってみたいな……」

お話、はちょっと怖いけど、見るくらいならいいんじゃないのかなあ……

「いいじゃん、会わせてやれば。周りの奴等と話してるの見てただけだけどさ、悪そうな奴には見えなかったぜ？」

「リズィーさんはいい人そうだったよ。睨まれたのもこの馬鹿が胸見てたのが悪いだけだからね」

有翼族の人はリズィーさんって言うのか。ずぃーが言い難そうだね。

それにしても、有翼族かー……。翼が背中に生えてる獣人、鳥系の獣人だったかな。会ってみたいー！　触ってみたいー！

「この方はこの国の姫様、という事をお忘れなく。危険から遠ざけるのは当たり前の事でしょう？」

「う、悪い……」

「あたしは大丈夫だと思うんだけどなあ……。ま、確かに冒険者に進んで会いに行くような事も無いか。あ、あたしには会いに来てね

？」

「うん。お友達ですから！」

ラルフさんもナナシさんも、冒険者以前にお友達だからね。

エディさんももっと気を抜いて話してくれるといいんだけどなー

「ナナシさんもすげえ……」

「ふふん。そんな凄いあたしに童貞を捧げてみんかね？」

「捧げないよ！？」

あ、童貞なのね。聞いちゃった……

「それでは片付けを。前を失礼しますね」

またものの数秒でグラスとテーブルクロスを片付けてしまうシアさん。

今回は本気で無理そうだ。諦めるしかないかー

バスケットを受け取り、魔法で仕舞う。帰る準備はできた。

「もっとお話したかったんですけど、今日は帰りますね」

ラルフさんナナシさんとは殆ど話せなかったな、残念だ。また何日か間を置いて会いに来よう。

「おう、またな。俺は酒でも飲むか、エディ付き合え」

「夜に酒場で飲んだ方がいいよ。それより魔法教えてくれって、冷やすのと凍らせるやつさ」

「何だ？　まだできないのかお前」

多分教え方が悪いんだよ……。でも私にはどうすることもできない。頑張ってねー

「あたしはどうしようかな。送っていこうか？」

いいねそれ、お話しながら帰りたい。

「すみませんが、急いで帰りますので……」

「そんなに急がなくてもいいのに……、ナナシさんありがとう、ごめんなさい。それじゃ三人とも、また今度。ミランさんも、またねー」

「失礼します」

「はぇ？　あ！　はい！　またです！！」

ミランさん気を抜きすぎだよ……

ギルドを出てすぐ、本当に出たその場。

「姫様、飛んで帰りましょう」

「え？　まだ町の中だよ？　危ないって」

「大丈夫です、屋根の上を飛び伝って行きますから」

そ、そこまで会わせたくないんだ……

まあ、仕方ないか、シアさんにはあまり我侭は言いたく無い。困らせたくないからね。

「それじゃ、ジュースだけ買って行きたいな。全部飲んじゃったし」

結局全部みんなで飲んでしまった。家にはあると思うけど、お店のとは少し味が違うからね、どっちも常に置いておきたいのだ。

「そう、ですね……。それくらいなら大丈夫でしょう。では、参りましょうか。お手をどうぞ」

「うん！　行こう！」

町の中では、手を繋いで歩くのがデフォルトだ。

ちょっと甘えすぎ、過保護すぎかもしれないけど、周りに大勢の人がいるのはまだ少し怖いんだ……

シアさんも、と言うか家族みんな、それを察してくれているみたい。

いつもジュースを買う青果店でオレンジジュースを購入、空いた瓶の回収もしてもらう。多分再利用してるんだよね、この辺りは異世界でも変わらない。

容器の持ち込みだと多少割引もあるらしい。でも王族がそんな事を気にするな、と兄様に笑われてしまった。

このお店もオレンジジュースの在庫は絶対に切らす事は無い素晴らしいお店だ……。ここも私のせいです！！

「ねえシアさん、歩いて帰ろう？　ゆっくり帰りたいな……」

「わ、分かりました。すみません姫様、少し過剰に反応しすぎましたね……。この広い町でたった一人の冒険者と出会う事など早々ありえる事では無いでしょうし」

ちょっと困らせちゃったかな。うーむ……、我侭を言ってしまった……、ちょっと罪悪感。

シアさんは私のためを思っての行動なのにね……

「今のは決して我侭などではありませんよ、安心してくださいね。どちらかと言えば私の我侭でしょうね」

「うん。ありがとうシアさん」

シアさんと手を繋ぎ直す。町中で二人だとついつい甘えちゃうね。優しくも厳しくもある姉様のような感じかな？　厳しくはないわ……

「シア？」

「！？」

真後ろからの呼び声に、シアさんが驚いて振り向く。

振り向いた先には男の人。さっきシアさんを呼んだのはこの人かな？

「シア……、バレンシアか？」

この人で合ってるみたいだね。

随分と背の高い男の人、１９０か２ｍくらいあるんじゃないだろうか？　袖の無い上着から出ている腕の筋肉が凄い、まるでプラモデルの様だ。変な例えだけど、作り物みたいに硬そう……

真っ赤な短い髪、え？　あれって、角？　両耳の少し上の辺りに、後ろへ向かって赤黒い角が生えている。兄様の言う通り目立たないねこれは……

竜人の人だ！　まさかこの人がＡランクの冒険者、『鋼爪』の、ええと、ライナーさん、だっけ？

年は、幾つだろ？　二十代後半？　でも、竜人もエルフと同じ長寿種族だし、聞かないと分からないね。

「確かに私はシアという名ですが、人違いでは？　竜人の方とはお知り合いになった事などあ」

「ぶふっ！！　何だその格好！？　メイドか！？　今お前メイドやってるのかよ！？」

盛大に吹いた！？　やっぱりシアさんのお知り合いだよこの人！

な、何？　面白くなってきたじゃない？

「ひ、人違いだと言っているでしょう、失礼な！　行きましょう姫様」

シアさんは私の手を引いて歩き出す、が。

「おいおい待てよ。随分丁寧な喋りになっちまってまあ、似合わねえなあ……。どう見てもバレンシアだろお前。髪型そのままで本気で誤魔化せると思ってんのか？」

ライナーさん（仮）も一緒について来てしまっている。

そういえば冒険者時代は多少荒めの言葉遣いだったって言ってたっけ？

「他人の空似ですよ。ついて来ないでください、憲兵を呼びますよ」

「この町そんなのいねえだろ。あ、エルフの自警団はいるんだっけか？　そりゃ厄介だな……」

「そうでしょう？　理解したらさっさと消えてください。私たちはもう帰るところなんです、これ以上邪魔をしないでもらえますか？」

少し早足になるシアさん。

ちょ、ちょっと……

「別に邪魔なんてして無いだろが……。じゃ、あれだよ、ナンパだ、ちょいと付き合えよ。今まで何してたか話せ、せめて現状報告くらいはな。ああ、キャロルにも連絡くらい入れてやれよ、あいつずっと探し歩いてるんだぜ？　……しかし、そっちは何でそんな面白そうな事になってんだよ」

しつこく食い下がるライナーさん（仮）。ついにナンパを始めてしまった。ちょっと話し方は乱暴で怖いが、悪い人じゃ無さそうだよね。

キャロルさんっていうのはシアさんのお友達かな？　女の人の名前だよね……、怪しい。

「話などありません、ナンパもお断りです。誰が貴方のような筋肉ダルマの相手など……」

提案を切り捨てつつ、さらに早足になる。

「わ、ちょ、シアさん、手、手……」

は、速いよ！　歩幅広いよ！　あ、足長い人が早足で歩くと本気で速いわ……、っと転ぶ！

「え？　す、すみません姫様！！　どこか痛めてしまってはいませんか？」

「う、うん、大丈夫。ちょっと転びそうになっただけだから……」

危なかった！　完全に私の事忘れてたね……

それだけ動揺してたっていう事か。どんな関係の人なんだろう？

「お？　何だそのちっこいの。　おお！？　まさか娘か！？　おいおいマジかよ！？　相手は誰、ん？　姫様だあ！？」

お、大声はやっぱり怖い！　とりあえずシアさんに抱きつこう。

「おっと、怖がらせちまったか、悪いな。姫ってまさか、この国のか？　何でそんな、ああ！　お前王族のメイドやってんのか！？　すっげえな！！」

大声に反応して体がビクッとしてしまう。

やめて！　悪い人じゃないのは何となく分かるけど、大声は怖いのよ！

「ふう……」

シアさんは大きくため息をついた。

「やっと話す気になったか？　それじゃ、場所変え」

「黙れ。いいからもう黙れ。いつからお前は私にそんな口が利ける程偉くなったんだ？」

シア、さん……？　何、その、冷たい目……

「え？　いや、前からこんなもんだっただろ？」

「私は黙れ、と言ったんだが……」

空気が重い？　なんだろこれ、こ、怖い！

ライナーさん（仮）は完全に黙ってしまった。

「もういい、とっとと失せろ、次に私の視界に入ったら殺す。これは脅しじゃない、お前になら分か」

！？

「シアさん！　やだ！！　そんな事言っちゃヤダ！！！」

「姫様？」

「イヤイヤイヤ！！！　そんな冷たい目しないで！　こ、殺すなんて怖いことっ、言わないで！！　いつもの優しいシアさんに戻ってよ！！！」

怖い！　こんなシアさんは嫌だ！　絶対に嫌だ！！！

「姫様！？　す、すみません。ああ……、な、泣かないでください。わ、私は何て事を……」

「もう我侭言わないから！　冒険者の人に会いたいなんて言わないから！　も、戻って……よ……。いつものシアさんがいいよぅ……」

「姫様……、申し訳ありません……。本当に、本当に……」

シアさんは、大泣きを始めてしまった私を優しく抱きしめてくれた。

ああ……、いつもの優しいシアさんだ、よかった……
さっきのは演技だったんだよね？　演技でもやめてよ……

「ギルドを通して謝罪をいれる。本当に悪かった……、今のお前の生活を壊すつもりは……、分かった」

シアさんがあっちへ行けという風に手を払うと、ライナーさん（仮）は歩いて離れて行ってしまった。

「ごっ、ごめんね、シアさん……、私が、ジュース、なんて……」

シアさんの言うとおりまっすぐ帰ればよかった……

「姫様は何も悪くはありませんよ。悪いのはあの男、そして私ですから。お願いですから、泣き止んでください……」

「うん……。ごめんね？　ごめんね……」

「ひ、姫様……。謝らないでください……」

「帰ろう？　もう、帰りたい……」

「は、はい。抱き上げますが、よろしいですか？」

「うん……」

何も聞きたくない、考えたくない。さっきの怖いシアさんは演技だったんだ。

それでいいんだ、それで……

その７２（前書き）

今回不自然に漢字を使った会話がありますが、気にしないでもらえると助かります……

その72

「し、シア、ちょっと！　頭上げて……、せめて立って、お願いだから」

姉様がシアさんの思わぬ行動に焦っている。

ここは母様の執務室。そしてシアさんは絶賛大土下座中。

ま、まずいよ、また盛大に自分を責めちゃってるよ。しかも、いつもの比じゃないよこれ。床に額をこすりつけんばかりの綺麗な土下座だよ……

は、早く解決しなければ！　このままだと本気で自殺しかねない！！

駆け寄って顔を上げさせたいんだけど、私は母様の膝の上にがっちりと捕まってしまっている。

父様母様、兄様までシアさんを止めようとはしない。

「ユーネ、バレンシアはとりあえずそのままでいい。『鋼爪』のライナーだったか？　たかがAランクの小僧の分際でシラユキを泣かすとはな……」

「一応ギルドから連絡は来たわよ。向こうもかなり焦ってるみたいね、精霊通信で来たわ。間に入るから正式に謝罪させたいんですって。どうする？　ウル。私としてはギルドはどうでもいいのだけれど、場所の提供かしら？」

「ギルドでという事か。確かに森の中へ入れる訳にもいかんな……。

まったく面倒な……」

「俺は腕の一本くらい落とせばそれでいいと思うけどな、態々こちらから出向いてやる必要は無いさ。謝罪を受ける側を呼び出すとかちょっとふざけが過ぎるんじゃないか？」

「ゆ、ユー姉様。なんかみんなが怖いんだけど……」

う、腕一本とか……。父様はＡランクの人をたかがの小僧扱いだよ……

「う、うん……。でもねシラユキ、私たち王族なのよ。王族をね、Ａランクっていう実力者とは言え、ただの冒険者が泣かせちゃったのよ。他の国だと、多分、その……、アレよ」

きょ、極刑、ってやつかな……？　なにそれこわい！

「し、シアさんのお友達なんだよね？　だからいいんじゃないかな？　シアさんも顔上げてー！　立ってよー！！」

「い、いいえ！　このままで！　皆様に合わせる顔がありません！！　それに、あれはただの馴れ馴れしいだけの子供。決して友人などでは……」

だ、駄目だ！　なんという固い意志！！

こうなったら最後の手段！　開始早々最後の手段だよ……

「シアさん命令！　立って！　顔上げて！」

「!?　はい!!」

ピシッと、いつもの完璧メイドさんスタイルに戻るシアさん。

うう……、シアさんに命令してしまった……

「ごめんね？　普通にお話して欲しいな」

「姫様……、なんてお優しい……」

半泣きだー！　美人の涙は凄い！　破壊力が凄い!!

「バレンシア、まだ早いと思うが話すか？　このままではお前が責められている理由がシラユキには分からんだろう？」

「ウルギス様、エネフェア様にお任せします」

な、何？　何か重大発表？

それを聞くとみんながシアさんを責めて、うん？　責めてるか？

シアさんが自分で自分を責めてるだけじゃないの？

「分かった、俺から話そう。シラユキ、バレンシアはな」

「う、うん」

しまった、考え事してた！　ちゃんと聞かなきゃね。

「実はな、バレンシアは通常のメイドでは無くな、お前の護衛だっ

たんだよ」

「うんうん。それは知ってる」

「なん……だと……？」

前に母様が言い掛けてたからね。やっぱり護衛で合ってたか。

「ってそれだけ？」

「あ、ああ……」

それだけなんかい！！！

何よもう！　そんな事随分前から知ってるよ！

「その護衛であるバレンシアがね、明らかに自分が原因であなたを泣かせちゃったの。だから自分を責めてるのよ。分かる？」

「あ……、うん。今分かった……」

護衛の知り合いが泣かせちゃった事になるのか……。そんな知り合いを持ってて、会わせてしまったシアさんが、悪い？

「うーん……？　今日のはどう考えてもシアさんは悪く無いよ？　シアさんは私を守ろうとしてくれたんだしさ。泣いちゃったのは……、その……」

「でもな、お前に隠してたんだろ？　知り合いだって事をさ。ギルドでちゃんと話して、普通に会わせてりゃ問題無かったんじゃないか？　完全にバレンシアの過失だろ？」

う……、やっぱり兄様頭いいな、誤魔化されてはくれないか。
でも、私が泣いた直接の原因はライナーさんじゃないんだよね。
ここじゃ絶対に言い出せないんだけど。

「バレンシアは自分の冒険者時代の話をされたくなかったんでしょうね。そうでしょう？」

「は、はい……。申し訳ありません……！」

「だ、誰にだって聞かれたくないことはあるよ！　メイドさんだからって聞き出すのは駄目だと思うよ？」

「や、優しいなこの子は……。もう全部どうでもよくなってきてしまうんだが……」

父様は簡単に落とせそうだね。よしよし、このままどんどん仲間を増やしていけば……

「本人がこう言ってるんだし、しょうがないか。でも、一応謝罪は受けるぞ。何かしらの罰も与えないとなあ。なんか急にめんどくさくなって来たんだが……」

よし、兄様も落ちた。あとは母様だね、無理そうだけど。ちなみに姉様は元々こちら寄りなので数に入れていない。

ちょっと振り向き、母様と目が合う。にっこりと素敵な笑顔。

駄目だ！　絶対に勝てない！！

「謝罪の件は後回しにしましょう。まずはバレンシアに罰を与えるわ」

罰!?　一体どんな……？

「母様やめて！　そんなのやだよ！！」

「ふふふ。貴女の冒険者時代のランクと二つ名を、今この場で公開しなさい」

「エネフェア様!?　そ、それだけは……！！」

え？　シアさんのランクと二つ名？

「やっぱり罰は必要だよね、ユー姉様」

「うんうん、必要よね。ね、お兄様」

「そうだな。よし話せバレンシア」

「ひ、姫様……」

助けを求めるように私を呼ぶシアさん。

「話してシアさん！」

「姫様！　ひどいです！！」

今を逃すと次はいつ聞けるか全く分からないからね、観念して話してもらおうか！

「はあ……、どうしてこんな事に……。姫様風に言うのなら、どうしてこうなった！　でしょうか」

私それ結構言ってるよね……

ついに……、ついにシアさんの冒険者時代のランクと二つ名を教えてもらえる日が来たよ！

「それでは、改めまして自己紹介をさせて頂きます。私の名はバレンシア、自分で付けた名で本名は分かりません。百年ほど前に冒険者を辞め、世界を放浪していました」

あれ？　ランクと二つ名だけじゃ？　ど、どこまで話すんだろう……

「十年前、姫様が二歳の頃ですね。詳しい経緯は避けますが、十年前にこの国へとやって来たとき、ウルギス様に姫様の護衛として雇って頂いたのです」

暗そうな、重そうな話は避けてくれてるみたいだね。どうして冒険者を辞めたかは聞かない方がよさそう。

「ええと、冒険者時代のランクは、そのー……、え、Ｓランクでし

た」

「えす！？」

「ちょっ！　え？　ホントに？」

「百年前に消えたSランクの一人ってバレンシアかよ！？」

驚く私たちに父様母様は満足気だ。

メアさんフランさんも驚いている。でもクレアさんとカイナさんは知ってたみたいだね、特に変わりは無いように見える。

「は、はい……、二つ名は『せんけん』、せんけんのバレンシア、と呼ばれていました。うう……、恥ずかしいです……」

あはは、ホントに恥ずかしそうだ。二つ名ってカッコいいのになー

でも、せんけんの意味が頭に入ってこなかったね、なんでだろう？　翻訳機能の限界？　あ、本人に聞けばいいか。

「せんけん、ってどういう意味なの？」

「そ、そこまでですか……！？　わ、分かりました、お話します。私の戦闘スタイルは分かりますよね？　主にナイフを使った行動になります」

分かりますよね？　って……。うん、まあ、なんとなくはね。結構投げてるところも見てるけど……、投げる？

「まさか、ナイフを千本投げるから『千剣』？」

「千本は無いだろ。一人で千体の魔物を倒した、とかじゃないのか？　それだとナイフは関係ないか……。尖ったナイフの『尖剣』か？」

「何言ってるのよお兄様、シアよ？　殲滅の『殲剣』に決まってるじゃない」

それだ！　頭いいな姉様！！

「そ、そうなの？　シアさん」

「ええ、皆様正解です……」

「え？」

「みんな正解？」

ど、どういう事なの……？

「『千本』の『尖った』ナイフで『千の敵』を『穿ち』、『殲滅』する。ああ、穿つの穿もありましたね。全てを合わせ、『千剣』と呼ばれていましたね……」

あ、遠い目してる……

あ！　あれだね多分、黒歴史ってやつだね。中二病の頃のあだ名を自分で公表させられた感じか……

それは恥ずかしすぎるでしょう……！？

まあ、それは置いといて。

「何その怖い通り名!?　千の敵って何!?　一対千でも勝てちゃうって事!?」

「シラユキ。たかが千だ、俺も余裕でいけるぞ?」

「父様は父様だからいいの!」

「私もできるわよ、多分」

「母様は絶対しないで!!」

「俺もユーネと二人ならいけるか?」

「お兄様と二人でなら何千だろうと平気よ」

「愛の力!?　ホントにできちゃいそうだよ!」

「わ、私もできます!　多分」

「クレアさんも!?　無理に参加しなくてもいいからね!?」

「カイナもできるんじゃないの?」

「わ、私ですか?　ちょっと難しいですね……」

「できないとは言い切れないんだ!?」

「姉さんも余裕でやっちゃえると思うよ？」

「コーラスさんまで！？　私の周りは怖い人ばっかりなんだー！！」

「だ、大丈夫ですか姫様、叫びすぎですよ？」

ぜえぜえと肩で息をする私。ツッコミ疲れた……

「ちょっと面白かったが、大丈夫か？　メアリー、ちょっと飲み物用意してやってくれ」

「はい！」

「あ！　私が！」

「カイナ？　あ、お願い。ここは私じゃ分からないか」

ここは執務室だもんね、この部屋専門のメイドさんにお任せするのが一番か。

カイナさんが用意してくれた紅茶を飲んで一息つく。

「シラユキ、興奮しすぎよ？　そんなに嬉しかった？」

「う？　嬉しかったのかな？　シアさんの事聞けたのは、うん、嬉しかったかな」

「姫様に喜んで頂けたのは私も嬉しいのですが……、複雑な心境です……」

まあ、黒歴史をほじくり返す事になっちゃったからね……

ふう……、落ち着いた。この流れで聞いてしまうか。
今なら本当の事を聞いても耐えられそうだ……

「シアさん、あと一つだけ聞いてもいいかな？」

「もう何でもどうぞ……、答えられない質問は黙秘しますよ？」

「うん、それでいいよ。聞くね？　あの、ライナーさん、だよね？
あの人に向けて言った言葉は、シアさん自身の言葉だったの？
それとも演技？」

「姫様……」

「何だ？　どういう意味」

私とシアさんの真剣な態度を見て、姉様が兄様の口を手で押さえられて止める。
ありがとう姉様。兄様はもうちょっと空気読んでね……

「私がまだ冒険者だった頃はあの様な喋りでしたね。今では意識して話さなければもう出て来はしませんが……」

「喋り方じゃなくて、その……、駄目！　やっぱり聞けない……！

！」

「シラユキ！？　どうしたの？　なんで泣くの？　シア、貴女その人に何を言ったの？」

「今後も敵対者、姫様に害をなす者に対してはああいった態度を取るでしょう。あれは私の、本心からの言葉でした。姫様を害する様な存在は生かしておく理由などありませんから」

「シア……」

やっぱりそうだよね、うん、分かってたよ。

「シアさんは、怖い人なんだね。とっても優しいけど、その分怖いんだ」

私に向ける感情がプラス１００なら、私の敵に向ける感情もマイナス１００になってしまうんだろう。

「今回の事は、私の心の弱さが招いた結果でしょう。もっと早くお伝えするべきでしたね。くだらない恥などを気にして平静を保てなかったとは……。申し訳、ありませんでした」

シアさんは深く、深く頭を下げる。

多分それだけじゃ無いだろうね、きっと冒険者時代の事は思い出したくも無い、私にも絶対に聞かれたくないんだ。

「シアさん」

「はい、姫様」

「大好きだよ」

「！　姫様……！！」

母様の膝から降りると同時に、シアさんに抱きしめられる。

「あの時のシアさんは怖かったけど……、それでもいいから一緒にいて欲しい。シアさんがいなくなっちゃう方がもっと怖いから……」

「ウルギス様エネフェア様に誓いました。私の全てを懸け、あなたを守ると。あなたを害する存在は全て打ち倒し、滅ぼして見せると」

「やっぱり怖い事誓ってたんだね」

「普通ですよ？」

「ふふ、シアさんだし、いっか」

「ええ。私ですからね」

「もうお前ら結婚しちまえよ」

「しないよ！！！」

「して頂けないんですか？　残念です」

「またそういう事言う！　シアさんはお姉さんみたいなメイドさんなの！！」

「ふふふ、可愛い」

「シラユキはいつも、どんな時も可愛いわよ？」

「そうだな……。そのシラユキを泣かせたんだ、ライナーとか言う小僧はどうしてくれようか」

なんか愛の告白みたいになっちゃったよ……

でも、これでまたいつも通りの関係に戻れるね。

問題無しだ！　私を害するような人がいなければ、シアさんはずっと優しいままなんだから。

簡単な事だよ、今まで通りにしてればいいんだからね！

その７２（後書き）

ちょっと上手く書き直せなかったのでこのまま投稿してしまいました、すみません。
千剣の千は数字の１０００、剣はナイフ、刃物の意味のみです。
問題の会話部分だけ書き直すかもしれません。

その73

あれから数日後、ライナーさんからの謝罪を受けるために町へとやってきた。
メンバーは、私、シアさん、母様、クレアさんの四人。兄様はもう面倒だからとついては来なかった。
父様思わぬ行動に出るかもしれないので姉様とお留守番だ。

それにしても、女王様自らご出陣だよ……、やばいよ……
特にクレアさんがやばい。服装はいつものメイド服なのだが、腰の後ろに鉈のような形をした剣を下げている。

その鉈は何？　と恐る恐る尋ねてみたら。

「鉈？　いいえ、これはファルシオンと言います。確かに鉈のようにも見えますが、鉈は主に伐採用。こちらは完全に武器として扱われます。今回はギルドまでの道のりの護衛ですからこの程度の武器で充分でしょう。魔物に会う事もありませんから。敵に出会うとしたらそれは人、相手が人であればこれでも十二分に威力を発揮できます。脳天から真っ二つ、とは簡単にいきませんが、手足を斬り飛ばす程度であれば造作もありません。先日の話ではありませんが、例え千の敵が来ようとも私とバレンシアの二人がいれば安心です。お二人に掠り傷付けることなく殲滅してご覧に入れます」

と、素敵な微笑みで説明、さらに怖い例え話で安心させて……、
安心できるかっ！

森を抜け町の入り口に着くと、なにやら大人数が待ち構えていた。
どうやらギルドからの迎えらしい。
人数は十人ちょっとか、その中で知っている顔はミランさんだけだね。多分Bランク以上の人も数人混じって護衛として付いてくれるみたいだ。

母様とギルドの人が何か話をしているが、私はそんな堅苦しい会話に興味は無い。シアさんを連れてそそくさとその場を離脱する。

「ミランさーん。そんな所にいないでこっちに来てー」

ここは空気を読まず、子供っぽく行動しよう。
ギルドの人ガッチガチだからね、少しでも肩の力が抜けてくれるといいんだが……

ミランさんは小走りでこちらに来てくれた。

「シラユキ様……、今日くらいはお姫様らしくしましょうよ……」

「いいのいいの、そういうのは母様にお任せ。ミランさんも一緒に来てくれるんだよね？　近くにいて欲しいな」

「今回はシラユキ様の知らない顔ばかりですからね。分かりました、私でよければお供しますね」

やった！　話し相手ゲットだ！
今日はシアさんもあまり話してくれそうに無いからね。ギルドまでの道のりを黙って歩くのは苦痛でしかない。

ん？

目に、ある人が止まる。

「み、み、ミランさん。あの人って……」

ミランさんの手を引っ張り、頭を下げてもらって、小声で聞いてみた。

「あの人？　ああ、リズィーさんの事ですか。綺麗な人ですよね……」

やっぱりそうだったか。あの人が『落炎』のリズィーさんか……

翼は目立つね。真っ白で大きな翼、とても綺麗だ。

リズィーさん本人も美人だね。綺麗な腰まである金色の髪、宝石みたいな碧色の瞳。背はシアさんより少し高いか？　１６０くらいだろう。年は、うーん、二十歳くらいかな。有翼族の年は見た目では分からない。

それとあの胸！　ラルフさんがつい見入ってしまうのも頷けるよ。胸が強調されるような服だからか、体が細いからか、さらに大きく見えてしまう。

「Ａランクの有名な人なんだよね？　お話したいな……。怖い人じゃないよね？」

リズィーさんは、にこにこと笑顔で待機している。

ラルフさんが殺気を飛ばされたって言ってたし、もしかしたら怖い人なのかもしれない。

「大丈夫ですよ、とても優しい人だと思います。話してみると、優しいと言うか可愛らしい感じがしますね」

「お願いしていいかな、あ！　目が合っちゃった」

「ふふふ。呼んできますね、少しお待ちください」

じーっと見つめすぎていたせいか、こちらの視線に気づかれてしまったようだ。

何かすっごい笑顔で見つめ返してくるんですが……

ミランさんはリズィーさんと数言話し、一緒にこちらに戻ってきた。

「はじめまして、姫様。私は、リズィー・ランと申します。ご覧の通り、有翼族です。どうぞお気軽にリズ、と呼んでくださいね」

うわあ、綺麗な人……。優しそうな人だ、これなら安心できそう。何と言うか、柔らかい、ゆったりぽわぽわしたような喋り方をする人だね。ミランさんの言うとおり可愛らしい感じがする。

ご覧の通り、と見せてくれた背中は大胆に開いていて、背中が腰の辺りまで丸見えになっている。見えやすいように髪を持ち上げているのが、またなんとも……

翼が常に出ている種族の服はこうなるんだ……。なるほど、そのせいで胸が引っ張られて、強調されてるように見えちゃうんだね。

ふむふむ、なるほどなるほど……。もげろ！

「はじめまして、シラユキ・リーフエンドです。ええと、リズさん、でいいのかな？」

「はい。親しい人にはリズ、リズラン、と呼ばれています。呼び捨てで、構いませんよ？」

「よ、呼び捨てはちょっと……。それじゃ、私の事も名前で呼んでくださいね。もちろん呼び捨てでも」

「ありがとうございます。それでは、シラユキ様、とお呼びしますね」

やっぱり様付けかー。呼び捨てで呼んでくれるお友達はさすがにできそうに無いかな……

「様なんて付けなくてもいいのに……。あ、敬語も無しでいいですよ。できたら、私とお友達になって欲しいです」

「この喋り方が普通なので、すみません、このままで。私のような冒険者とお友達、ですか？　私としては、嬉しいのですが……、いいんでしょうか？」

さすがに王族からのいきなりなお願いに困り、ミランさんに尋ねるリズさん。

「大丈夫ですよ。私もシラユキ様とはお友達の関係ですからね」

「そうなのですか？　ふふふ、では、こんな私でよければ、よろし

くお願いします、シラユキ様」

そう言ってリズさんは右手を差し出す。握手かな？

私はしっかりと手を握り返して。

「うん！　よろしくね！　リズさん！」

笑顔で答える。

やった！！　またお友達が増えたよ！　しかも今度はＡランクの冒険者の人！　いいねいいね！　ディ・モールトいいね！！

あれ？　リズさん手、放してくれないんだけど……

「何て可愛らしさ……。噂には、聞いていましたけど、まさか、これほどとは……。あの、メイド、さん？　抱きしめても、いいんでしょうか？」

シアさんに変な確認を取るリズさん。

「何故私に……。姫様、お答えしてあげてください」

私は空気に徹する、といった感じで私に丸投げされてしまった。

リズさんの期待の眼差しがちくちくと突き刺さる。

「うん……、あんまり強くは困るけど……。いいですよ？」

「はい！　では失礼して……」

私をとても優しく抱きしめるリズさん。

む、胸が凄い！　母様クラスと見た！！

「あああ……。まさかこの世界に、キャロル先生より可愛らしい方が、存在するなんて……」

キャロル先生？　最近どこかで聞いたような……

その後すぐ移動が始まった。リズさんは私と手を繋ぎ上機嫌。

ギルドまでは、そこまで時間は掛からないが、それなりには掛かる。道中リズさんと色々なお話が出来た。

リズさんのゆったりとした喋り方はいいね。他の種族の、特に人間の人って何となくみんな早口なのよね。

さすがに初めの内は母様の近くで緊張していたが、どちらも自分に似たような気配を感じたんだろう。すぐに自然に会話できるようになっていた。

リズさんは可愛いもの全般が好きなようだ。今度シアさんが作ってくれたぬいぐるみを自慢しようと思う。

シアさんは終始無言で、機嫌が悪いというか、何か考え込んでい

るようだった。
　冒険者時代の事を話されないか不安なのかな？　ライナーさんに会ったらまず、シアさんについては話さない様にお願いしようか。

その７４

ギルドに着いた私たちはカウンターの奥のドアへ案内された。こっちの方へ入るのは初めてだ。ちょっとワクワクしてしまう。

ドアを開けた先、短い廊下の左右にはドアが三つずつの合計六部屋。奥はこんなに広かったんだ……

通されたのは特に飾りも無い普通の部屋、広くもなく、狭くも無い。大きな長方形のテーブルが一つあり、向かい合わせの形で椅子が二対置かれている。

こちらでお待ちください、と部屋に残されたのは、私たち四人とリズさん。ギルドの人は一人も残ってはいない。

最初はギルド長も交えての謝罪、と言うか話し合いの予定だったらしいが。貴方に何か関係があるの？　という母様の一言で、当人同士のみでの席となった。

リズさんは、ライナーさんが万が一何か仕出かさない様にとのお目付け役。ただギルド側からも一人くらい出したかっただけなんだろうけど……

「座って待ちましょうか。どうぞ、姫様。エネフェア様も」

シアさんが引いてくれた椅子に腰掛ける。母様の椅子はクレアさんが引く。

椅子が二つずつという事は、私と母様、ライナーさんとリズさん

が向かい合って座るのかな？
そう思ったが、リズさんは席に着かなかった。さすがに王族と一緒の席には気軽に座れないのだろう。気にしないでいいのに……

「えーと……、リズさんは、ライナーさんとはお友達なの？」

ライナーさんが来るまで軽く雑談でもしようと思い、リズさんとライナーさんの関係を聞いてみる。
二人とも一緒に町に来たっぽいしね、何かしら関係はあるはずだ。

「友人と呼べるような仲では、ないですね。キャロル先生、私の冒険者としての先生、の事なんですけど、その先生の、お知り合いなんです」

Aランクのリズさんの先生か……。まさかキャロルさんってSランクの人だったりするのかな。

「キャロルさんはリズさんの先生なんだよね。Aランクの人の先生って、やっぱりSランクの人なの？」

「いいえ、私と同じ、Aランクですよ。先生は、私がまだ冒険者になっていない、子供だった頃からの、先生なんです。今では同じ、Aランクなのですが、私は下位、先生は最上位の、とても素晴らしい方なんです。今はSランクの試験待ち、らしいですよ。ギルド内の噂話、ですけどね」

やっぱり凄い人か！　シアさんもSランクだったし、同じくらいの強さ？　シアさんの強さはまだよく分からないけど、きっと相当なものだよね。

リズさんも六十歳でAランクになった、所謂天才という人らしい。
有翼族の寿命は人間の約三倍、人間で言えばやっと大人になった辺りだろう。
それでAランク、凄いよね……。見た目は私なんかよりずっとお姫様っていう言葉が似合う人なのにさ。

「キャロルさんにも会ってみたいな……。リズさんの先生なら優しそうな人だもんね。お友達になれるといいなー」

「はい、とても優しい方ですよ。近いうちに、この町へ来る事になると、思いますから、その時には、ご紹介しますね」

き、来ちゃうんだ？　す、凄いね……

Aランクの人が二人も来て騒ぎになったかと思ったら、次はさらにもう一人、しかもAランク最上位、Sランク一歩手前の人か。
なんか、戦争でもできちゃいそうな戦力なんじゃないかな……

「お話を遮ってすみませんが、キャロル先生という方は、『双塊（そうかい）』のキャロル・ウインスレットの事、なのでしょうか？」

シアさんがキャロルさんのことが気になったのか、話しかけてきた。

『双塊』？　二つの塊って事かな？　変わった二つ名だね。

「え、はい、そうですけど……。先生を知っているのですか？」

「いえ、私が知っているのは二つ名と本人の名前くらいです。失礼しました、お話の続きを、と、来たようですね」

シアさんも知っているくらいの有名人なのか。ますます会ってみたいね。

その後すぐ、ドアがノックされる。何で分かったんだろう……

「どうぞ」

母様がそれに答えると、失礼する、と言う一言の後、ライナーさんが部屋に入って来た。

前にあったときの荒さというか、軽さは全く感じられない。緊張しているのだろうか。

立ったままのリズさんを見て、自分は座っていいのか判断がつかないようだ。

「二人とも座って頂戴。立ったままでは話し辛いでしょう？　こっちの二人は気にしないでね、ただの付き添いよ」

二人に席につくように母様が勧める。こちらのメイドさん二人は立ってはいるが、いないものとして扱え、という事かな。

「私は、この人が失礼をしないかの、見張りですので、このままで。ライナーさんは、座ってお話、してくださいね」

リズさんはそう言うと、壁際の方へ下がって行ってしまった。

これは、ライナーさん、見捨てられた？　荒い言動の人だから、可愛い物好きのリズさんには、余りいい印象を与えていないのかもね。

ライナーさんはリズさんに恨みがましい目を向け、諦めたように席に着く。

そして、ゆっくり、はっきりと話し出す。

「まずは謝罪を。今回の事は」

「それはいいわ」

「え？」

「母様？」

母様は、ライナーさんの謝罪の言葉をいきなり止めてしまった。

「どうせギルドの考えた文章でしょう？　そんな物はいらないわ」

ギルドの考えた文章？

た、確かに、何となくライナーさんって、こういう畏まった謝罪なんてできそうにないよね。

まさか、練習して来たのかな？　それは、面白いな……

ライナーさんは黙り込んでしまった。どうやら図星のようだ。

「ギルドなんて関係ないわ、ただの場所の提供者よ。私たちは貴方の言葉を聞きに来たの。本当に謝罪したいという気持ちがあるのなら、畏まった喋りも、敬語も必要ないわ、貴方自身の言葉で話しなさい」

そうだよね、私たちはライナーさんが謝りたいって言うから来たんだった。それなのに、ギルドが考えた文を読まれてもね……

母様でよかった……。父様だったら、多分、ギルドを潰していたかもね。物理的に……

置いて来て本当によかった！！

「形だけの謝罪をしたいと言うならそれでもいいわよ？　その時は、こちらも中身の無い事務的な対応で返すから。意味は……、分かるわよね？」

はいこの人死刑ね、っていう感じでハンコをポンと押すだけかな。怖いね。

できたらちゃんとライナーさん自身の言葉を聞きたいものだけど……

数秒考え、ライナーさんは話し出す。

「分かった、まずは謝る、悪かった。アンタの言う通り、ギルドが作った謝罪文を読もうとしてた。内容は分かるよな？　ぐだぐだと書かれちゃいるが、俺に全責任があるからギルドは関係ないぞ、やるならこいつだけやれよ、っつー内容だよ。そんなの当たり前だってのになあ？　俺がやった事は俺の責任だっつの」

凄いなこの人、母様の前なのにこの態度。あ、開き直って諦めてるだけか。リズさんも何も言わないし。

シアさんは我関せず。クレアさんは……、怒ってるかな……？

武器に手をかけないで！！

「そうよね。ここのギルド長はまず保身に入ろうとするから嫌いよ。いい年の大人が情け無いったらもう……」

「まあ、お偉いさん何てモンはそんなモンじゃね？　おっと、アンタらは別だ、悪い。どの国のお偉い様も皆そうなら分かりやすくていいんだが」

「他の国って面倒そうよね……、もっと自由にゆったり過ごせばいいのに。貴方もこの街に住んじゃいなさいな。いい所よ？」

「あー、それもいいな……。でも、平和すぎるものなあ。俺みたいのはやっぱ、荒事してるのが一番性に合ってるさ」

平和すぎる？　ここのギルドの依頼が少ないのって、そういう事なのかな？

「あら残念。若いうちはそうね、思うが侭に暴れなさい。もう少し年を取ったらまた考えてね。……それじゃ、お話、聞こうかしら？

二人に説明は聞いたんだけど、貴方、悪く無いんじゃない？」

え？　あ、本題に入った？

なんか会話が普通すぎて逆に付いていけなかったよ……

「いや、姫さん泣かしちまったのは事実だしな、それは全面的に俺

が悪い。悪かったな、姫さん、バレンシアもな。その、許してくれ」

「え？　あ、は、はい！　ゆ、許します！！」

いきなり話を振らないでよ、もう……

まあ、ライナーさんに特に思うことは無いからね、許すも許さないもないよ。

「そこで私の名前を出しますか。この脳筋が……」

お、怒らないでシアさん！　あの怖い冒険者モードは嫌だよ？

「バレンシア、さん？　え……？」

今まで黙っていたリズさんが、シアさんの名前に反応した。

シアさん元Sランクだしね、名前はやっぱり有名だったんだろう。

「は？　いや、まさか、リズにまだ話してなかったのか!?　す、すまん！　悪い！！　わ、わざとじゃ……」

「はあ……、少し考えれば分かりそうなものでしょう……。これだから考え知らずの子供は……」

まったくもう！　シアさんは静かに暮らして生きたいんだからね！　……多分。

「あ、あの！」

「はいそこまで。こっちの二人は付き添いって言わなかったかしら？　それとも、問題、起こしたい？」

「リズさんごめんね？　シアさんの事は何も聞かないで欲しいな。ライナーさんも、お願いします」

母様の軽い脅しに加え、私からのお願い。

「俺はもう何も言う気はなかったんだが、まさかリズが何も聞いてないとは思わなくてな……。悪い」

「で、ですけど……、あの……」

リズさんは諦め切れないようだ。何か深い理由でもあるのかな？

「リズ、やめとけ。こいつはただのメイドだ、お前らが探してる奴じゃない」

「そんな！　キャロル先生がこの方にどれだけお会いしたがっているか、貴方も知っているでしょう！？」

これは相当だね、あのゆったりとした喋り方のリズさんが、こんな大声を出すとは……

会いたがってる？　シアさんに？　ああ！　そういえばあの日、ライナーさんもそんな事言ってたような……？

「家のメイド、私の家族に手を出すっていう事でいいのよね？　貴女がそうしたいのなら止めないけど……、できると思うの？」

ひい！　母様が怒ってる！？　は、早く謝ッテ！！！

「あ……、お、お願いします！　せめて無事だったというだけでも伝えさせてください！　私にできる事なら何でもします！　命でも何でも差し上げます！　どうか……、どうか、お願いします……」

「わわ！　リズさん頭上げて！！」

「お、おい、やめろ！　今回は相手が悪すぎるって、俺たち程度じゃどうしようも無えよ……」

ど、土下座で、決死の覚悟でお願いされてしまった……。しかも命懸けだよ。

リズさんの体の震えが凄い……。Aランクが二人いると言っても、母様の前では何の意味も持たないからね……

「折角のシラユキの新しいお友達だし、私も個人的に貴女の事は好きなのよね、困ったわ……。でもね、何より家族を優先するのよ私は。考え直しなさい、貴方達はバレンシアには会わなかった、それでいいじゃない？」

「母様、シアさん……。駄目なの？　シアさんに会いたい、心配してる人が探してるんじゃないの？」

話を聞く限り悪い人じゃないと思うんだけど……

「駄目よ。バレンシアは会いたくは無いのでしょう？」

そ、そうか。いくらいい人でも、シアさん本人が会いたくないなら、しょうがないよね。

「お……、お願い、します……」

まだまだ土下座を敢行するリズさん。

母様の気持ちは変わらないみたいだ、何とか諦めて貰わないと本当に命が危ない……

「え？　いいですよ？　と言うより、元々会うつもりだったんですが……」

「お願いしま、え？」

「あら？　そうだったの？　あらいやだ、私ったら、勘違いしちゃってたみたいね……。リズ、ごめんなさい、頭を上げて頂戴？」

「え？　あ、はい？」

「ど、どういう事だ？」

リズさんライナーさんはまだ、急展開が続きすぎて頭が追い付いていないようだ。私が代わりに聞くしかないか。

「いいの？　シアさん」

「ええ、以前姫様にもお話しましたよね。キャロ、キャロルはその時話した弟子のような子の事ですよ。でも、おかしいですね……。ギルドには、私の名前を本人だけには伝えるよう言っておいたのですが……」

そういえばそんな話もあったね。確か、リーフサイドのギルドに来るように連絡を回してもらったんだっけ。

「ああ、あの時の。連絡が付いてこちらには向かってはいるけど、いつになるかまでは分からないーって手紙来てたわよね」

「と、とりあえずリズさんは立って。何か、ちょっとした行き違いがあっただけみたいだよ？　シアさんもキャロルさんには会ってくれるって」

固まっていたリズさんに簡単に説明をする。私にもなにがなんだかわからないよ……

「え……？　あ……！　ありがとうございます！！」

また土下座しちゃったー！！！

「恐らく、ギルドのくだらない、小さなプライドのせいでしょう」

「だな、メンツって奴だ。元Sランクって言っても、もう辞めた奴だからな。そんなのにいいように使われるのが癪に障ったんだろ。たかが伝言じゃねえか、小せえ奴らだな……」

「私は国の依頼、という名目で呼び出してもらうつもりだったんですけどね。まさか、国からの圧力とでも感じたんでしょうか……。これが自由を謳う冒険者ギルドとは、情けない……」

「なるほどね。まあ、いいわ、報いは受けてもらうから、安心して

ね。ここのギルド長にはどこかに飛んでもらいましょう」

「ブールジーヌとか、どうでしょうか？　山奥のいい町ですよ」

「いいわねそれ、採用しちゃう」

「あっはははは！　簡単に決めちまっていいのかよ！」

「キャロの指導も中々のモノの様ですね。安心しました」

「ふふふ、ありがとうございます」

「クレアさんクレアさん。ブールジーヌってどこだっけ？」

「北の山脈の山間にある小さな町、いえ、村の事です。確かに冒険者ギルドもあるようですが、訪れる冒険者なぞ皆無と言っていいでしょう。村に住み着いている数人の冒険者相手の仕事しかないはずです。恐らくギルド長とは名ばかりで、受付など、全ての業務を一人でこなさなければいけない事になるでしょう。いい気味です」

「あはは……。母様を怒らせるとそうなっちゃうんだ……」

「命があるだけいい、と思いますが……。エネフェア様は本当にお優しい……」

わ、私だけ！？　私がおかしいのか！？

その75

謝罪という名の話し合いも終わ、うん？　したっけ？　まあいいや。とにかく話し合いは何事もなく、あったか？　それもいいや。とにかく終わった。

私はもう少しこの二人とお話したかったので、母様とクレアさんには先に帰ってもらう事にした。

帰る前にもう一度深く頭を下げて謝るライナーさんを見て、二人とも大丈夫だろうと納得して帰っていった。

リズさんは悩みが一つ解消された様で上機嫌、本当に嬉しそうだ。キャロルさんも、いつになるかまでは分からないけどこちらに向かっているみたいだし、シアさんとの再会も秒読み段階だろう。

何か、本当に全部上手くいった気がするね。みんなが笑顔で私も嬉しい。

場所は代わり、ギルド内のカウンター近くのテーブル、定位置に着く。

ミランさんも、もういつものようにぼーっとしている。ギルド内は私たちの他に誰もいないし、いつにも増して暇そうだ。

「姫様、お願いします」

「うん。……はい、シアさん」

バスケットを取り出し、シアさんに手渡すと、数秒でお茶会のセッティングが終了する。
例の如く、オレンジジュースとクッキーだけどね……

「な、何だ？　何の手品だそれ？」

いきなり何も無い所からバスケットを取り出した私に驚いたライナーさんが聞いてきた。

「ふふふ。手品です」

「お気になさらず。次に同じ事を聞いたら……、命の保障はできませんよ」

「聞いただけでかよ！！」

おお！　ライナーさんもツッコミができるようだ。すすす素晴らしいね！　実はまだちょっと怖いけど。
大きいのよこの人！！　椅子に座ってても存在感が凄いわ……

「しかも冷えてるなコレ、ホントにどうやったんだ……。なあリズ、今冷やしたようには見えなかったよな？」

「え？　ええ……。死にますよ？」

リズさんも不思議そうな顔。気になってるみたいだね、ふふふ。

「リズに聞いても駄目なのか！？」

「私も気になりますけど、諦めましょう。キャロル先生の先生、ですよ？　私は勿論、貴方でも何を、どうしたところで、逃げる事も、できないでしょう？」

「う……、まあ、そうなんだけどな……」

ライナーさんもリズさんも有名な人なんだよね。その二人が逃げる事もできないって……。

あまり人前で使わない方がいいのかな？　まあ、シアさんが何も言わないし、大丈夫だろうとは思うんだけどね。

「まあ、いいでしょう。次はありませんが」

シアさんこわーい！！

「私が口にしていいセリフでは無いと思いますが、その、キャロは元気にやっていますか？」

「は、はい。とても可愛らしく、元気ですよ。たまに無理をして、元気に振舞っているときも、ありますけど……。私に会うよりずっと前から、貴女を探し、私を弟子にとってからも、大陸中を旅して、探し回っていたのです」

可愛らしく元気に？　二つ名が『双塊』の人なんだよね確か。い、イメージが全くできない……

「そうですか……。あの子には辛い思いをさせてしまっていたよう

ですね。もう少し早く、息災だという事だけでも伝えるべきでしたね……」

「キャロルもここに向かって来てるはずだぜ？　俺たちはな、あいつにこの町で何か起こってるんじゃないかって、調査を頼まれたんだよ」

「そうなんです。理由も告げずに、いきなりの召還命令でしたから。キャロル先生は、ギルド側からの依頼を、全て無視して旅を、続けていましたので、制裁の意味での、何かがあるのではないかと、思っていたのです」

キャロルさんはシアさんのことを必死に探してたんだね。

まったくここのギルド長は……。会った事無いけど。

それにしても、制裁？　ギルドからの依頼？

Ａランクにもなるとギルドから直接依頼をされるのかな？

「もうちょっと早く喋れねえか？　なんかムズムズするんだよなお前の喋りって」

おっとと、今考えるような事じゃないね。

「私は聞き取りやすくていいと思いますよ。他の種族の人って喋るの早いんですよね……」

「そうか？　俺たちから見たら逆に、エルフののんびり口調の方が違和感があるんだよな」

「それは、種族の差と言うより本人の性格の現れでしょう。それで

も確かに人間の方は少し早めな気もしますけどね」

「お前のその喋り方も違和感がすげえよ……」

ライナーさんは私とは反対に、冒険者時代のシアさんしか知らないんだよね。

気になるけど、聞いちゃ駄目だ。

「そうですか？　私は、先生に聞いていた通りの、イメージの方だと、思うのですけれど……。強くて、優しくて、芯の強い、素敵な方だと」

大絶賛だねキャロルさん……

「申し訳ありませんが、ただのメイドの話などはその辺りで……」

「は、はい……。すみません……」

「ごめんねリズさん。シアさんももうちょっと柔らかめに……」

「う……、申し訳ありませんでした……」

母様から、シアさんのことは何も聞かない、話さない様に、と釘は刺してもらっている。今のくらいはいいと思うんだけどね。強くて優しくて、芯の強い素敵な人っていうのは事実だし。

よし、話を変えよう。

「キャロルさんってどんな人なんですか？　どうしても二つ名から

可愛らしいっていうイメージができなくて」

「ありがとうございます、シラユキ様。キャロル先生は、お二人と同じ、エルフの方です。シラユキ様はハイエルフ、でしたね」

またあっさりバレてる……。お礼まで言われちゃったよ。

「身長が、その、低めの方で……。１５０も無いくらい、ですね、本当に可愛らしい、素敵な方ですよ」

「話し遅えよ……、俺が代わる。二つ名は『双塊』だな。そのまんまの意味だ。鉄の塊みてえな大剣と棍棒が武器なんだよ。自分の体よりでけえのに、どっちも片手で振り回すんだぜあいつ？　一回やったことあるがな、ボッコボコにされたわ。あんな凶悪な武器相手じゃ俺の能力も意味無いんだよな……」

１５０無いくらい？　そ、それは、お友達になれそうだ！！！

しかし、その身長で大剣と鉄の棒を振り回すのか……。うーん、駄目だ、全くイメージできない……

竜人のライナーさんでもあっさりやられちゃう強さなんだね。……やっぱり怖い人なんじゃないのか！？　考えてみれば、シアさんのお弟子さんだし？

……俺の能力？

「ライナーさんの能力って……、あ！　ごめんなさい！！」

思い出した、忘れてた！　個人専用能力の事は聞いちゃ駄目なんだった。特に冒険者の人には、だったね。ししし、しまったー！

「ん？　何謝ってんだ姫さん」

「あれ？　能力の事って聞いちゃ駄目なんじゃないんですか？」

「ああ、なるほどな。その辺はちゃんとバレンシアから聞いてるんだな。ま、俺は別に構わないぜ？　知られたって困るようなものでもねえし、それ以前に二つ名がそのまんまだからな」

ライナーさんの二つ名は、『鋼爪』だったね。鋼鉄製の爪型の武器を使うとかじゃないのかな？

「俺の能力は『硬化』。体の一部を鋼並みの硬さにできるんだよ、すげえだろ？　見ての通り俺は武器なんて持たないからな、手を硬化させて戦ってたらいつの間にか『鋼爪』なんて呼ばれるようになっちまったんだよ」

な、何それ凄い！　武器要らず？　防具要らず？　経済的！！

なるほど、そこでその筋肉が活きてくるのか！　手刀の形に固めれば剣になる、指を広げて固めれば……、なるほど、鋼の爪だね。

「竜人の人って本当に凄いんですね……」

「ハイエルフに言われてもなあ……、ははっ、ありがとな」

あはは。確かに最強種族に言われてもね。

「きゃん！！！」

「ん？」

入り口の方から、何かやけに可愛らしい悲鳴が聞こえたような？

振り返って見てみると、入り口に女の子が……、引っかかっていた。……？

なにあれ！？　あああ！！　大きな剣！！　それに太い鉄の棒！！

あれがそうか！　キャロルさんだ！　噂をすればってやつか！！！

見た目は、うん、小さい。私よりは大きいけど。くそう！！！

肩まで伸びている薄い緑色の髪、シアさんと同じきれいな灰色の瞳。か、可愛い！！！

ホントに可愛らしいっていう言葉が似合う人だね。私も可愛い可愛いって言われるけど、子供だから、だし。

でも、背中の武器が凄いね……、物々しすぎるよアレは。

２ｍはありそうな大剣を真横に挿して？　背負っている。ラルフさんの持っている物とは全然違うね、幅が広く、厚みもかなりありそう。

棍棒の方は１ｍくらいか？　でも太さが凄い、３０ｃｍ以上あるんじゃないかなあれ。持ち手は付いてはいるが、もうあれは武器じゃない、建築素材だよ……。それを右腰にぶら下げている。どう見ても歩くと引き摺るよねあれは。

まあ、その、なんだ。

２ｍもある大きな剣を真横にして挿してたら入り口に引っかかるよ！！！

「きゃ、キャロル先生？　か、可愛い……」

「早いな、もう着いたのか」

「やっぱり！　あの人がキャロルさんなんですね」

「ちょ、まだ心の準備ができていないんですが……。逃げてもいいですか姫様？」

「ダーメ！　ふふふ」

「そんな！！！」

「あああ……、シラユキ様も可愛らしい……。私の楽園が、今まさに、ここに……！！」

さあ、感動のご対面だ！！！

その７５（後書き）

新キャララッシュ！

すみません、まだ続きます……

その76

「キャロル先生！　こちらです！」

入り口に引っかかったままのキャロルさんをリズさんが嬉しそうに呼ぶ。

キャロルさんの事大好きなんだね。ホントに可愛いよあの人……

呼び声に気づき、体を横向きにして入り直したキャロルさんが近づいて来る。

一歩一歩に木製の床が悲鳴を上げている。抜けちゃうんじゃないか？

「あれ？　ライナー生きてるじゃん。王族に喧嘩売ったって聞いて飛んで来たんだけど……。ああ、勘違いしないでよね。私はリズの心配をしてただけだから」

セリフこそはツンデレのそれだが、どうやら本心からの言葉のようだ。

見た目と違い、結構冷たい人なのかな？

「ひでえな……。喧嘩なんて売ってねえよ。まあ、でも、さすがに今回ばかりは死を覚悟したんだが」

「リズさえ無事ならもういいや。んで、何があったの？　それに、こっちの子とメイドさんは何？」

え？　私？

「こちらの可愛らしい方は、シラユキ姫様ですよ、先生」

「は、はじめまして、シラユキ・リーフエンドです」

座ったままで失礼だけど、ぺこり。

「そうなんだ？　へー……。はあっ！？」

あ、いい反応。

やっぱり同じエルフの人はいいね。大きな声出されても全然怖く見えないや。

「ちょ、ちょっとアンタたち！　何同じ席に、って言うか何こんな場所に連れて来てるのよ！！！　リズ！　アンタがいて何で！？　失礼はして無いでしょうね！？　って今現在この状態が失礼よ！！！」

おおう、ミランさん以上の反応だ。この反応も久しぶりだね。

「こんなに慌てるキャロル先生、初めて見ました、可愛いです……。大丈夫ですよ、私も、ライナーさんも、シラユキ様のお友達に、なったのです」

「面白ぇな。ま、色々あったんだよ、気にすんな」

「お友達ぃ！？　ちょっ、何よそれ！　羨ましい！！　……じゃないわ！！！　ちょっと、そっちのメイドさん！　いいんですかこれ！？　……ってなんで顔隠してるんです？」

シアさんは顔を横に向け、片手で隠している。見て一瞬吹いてし

まった。

やばい、何だろうこの面白さ楽しさは！

「私の事などお気になさらずにお席へどうぞ姫様とお話でもしてくださいい私は少し席を外しますね」

一息で言い、逃げようとするシアさん。何で逃げるかなあ……

「え……、え？　嘘！？　シア、姉様……！？　嘘！　ほ、本当に！？」

さすがにあっさりバレる。

ライナーさんが言うには、当時と髪型も全く同じで、服装しか変わっていないらしい。それでごまかすには無理があるよ……

ん？

シア姉様……だと……？

シアさんは観念して、キャロルさんに向き直る。

「ふう、やはりバレましたか。久しぶりですね、キャロ。元気にして」

「シア姉様！！！」

走って抱きつこうとするキャロルさん。

そしてそれを軽く避けるシアさん。

「シア姉様……？」

「シアさんなんで避けるの！？　さすがにそれはひどいよ！！」

「姫様、すみません。ですが……。キャロ、まず武器を置きなさい。私を潰すつもりですか」

ああ！　確かにそうだ！　あの重量の武器が二つだよ。さすがのシアさんでも潰れちゃうわ。

「ご、ごめんなさい！！！」

武器を二つとも床に、ズシン、ドズンと降ろす。置く音がおかしい！　ゆ、床が抜ける！！！

「あああ、あの！　シア姉様！！　だ、抱きついても、いいですか！？」

「相変わらず子供のままですねあなたは……。ほら、来なさい」

両手を広げるシアさん。キャロルさんはまっすぐシアさんに抱きつく。

「シア姉様！！　会いたかった！　会いたかったです……！！　ずっと探していたんですよ……。どうして何も言わずに……、う、う

う……」

子供の様に泣き出してしまった。

約二百年ぶりの再開か……。どれだけ寂しかったんだろう……

「す、すげえモン見ちまったな。あのキャロルが泣き出すとは……」

「でも、嬉し涙ですよ。よかったです」

「ええ、本当に……。ありがとうございます、シラユキ様」

何故か私にお礼を言うリズさん。

「何で私？　私は何もしてないよ？」

「多分姫さんのおかげだな。うまくは言えねえけど、姫さんがいたから俺がバレンシアに会って、問題起こして、こいつが飛んで来れたんだろ」

「はい。ですから、ありがとう、なのです」

「うーん？　よく分かんないけど、いっか。キャロルさんもシアさんも嬉しそうだしね」

シアさんは、私に見せるような笑顔でキャロルさんを抱きしめ、撫でている。

これが私のおかげって言うなら、いい事をしたみたいで気分がい

いね！

しばらくして、泣き止んだキャロルさんがこちらを向く。

「大変お見苦しい姿を見せました。シラユキ様、申し訳ありません」

深々と頭を下げるキャロルさん。

見た目と違って中身は凄く大人だこの人！

「わ！　だ、大丈夫ですよ！　頭を上げてください！！」

「頭を上げなさい、キャロ。余り畏まりすぎるのも失礼に当たるものなのですよ？」

「ご、ごめんなさい！　すみませんシラユキ様！！」

また謝っちゃってるよ。早く自己紹介でもして打ち解けなきゃ……

「姫様、これが私の弟子のキャロル・ウインスレットです。小間使いのように扱い、お使い捨てください。キャロ、こちらのお方は、リーフエンド国だけではなく、全世界の宝とも言える、いえ、宝その物、シラユキ姫様です。失礼を働いた場合は死んで償う覚悟でお相手するように」

どんな紹介の仕方よ！！

「ははははい！！！　きゃ、キャロルと言います！　……あの！　その！　死んだ方がいいですか！？」

真に受けちゃってる！？

「死んじゃ駄目！　シアさんも変な事言わないの！！　あっさりいつものペースに戻っちゃって……、もう！」

多分キャロルさんも私と同じ様に、日常的にこうやってからかわれて来たんだろう。

背の高さといい、シアさんをお姉さんの様に思っている事といい、本当にいいお友達になれそうだ。

「えと、シアさんの言う事は話半分で流しちゃっていいですよ。できたら、キャロルさんも、リズさんライナーさんと同じ様にお友達になって欲しいです」

「王族、つっても姫さん普通の子供だぜ？　ちょっと頭良すぎる気はするがな。敬語で話されるのも逆に困るっぽいしもっと気楽に付き合えよ。バレンシアもそうだが、お前の畏まった喋りも違和感がすげえ」

「アンタと一緒にするなアンタと！！　……失礼しました。ええと、シラユキ様？」

「私は敬語なんて使わずに話せるお友達になって欲しいんです。名前も呼び捨てでいいですよ？　えっと、お友達になって欲しいな、

キャロルさん」

「は、はい、分かりました。それでは、……こほん。私はキャロル・ウインスレット、冒険者ギルドAランク、二つ名は『双塊』と呼ばれています。背は低いですが、年は、ええと、三百四十くらいです。えーと……、よろしくお願いします、シラユキ様。すみませんが敬語抜きは難しいです……、お許しを」

シアさんに似てまじめな人だなー。いや、似てないか？　敬語はどうしようもなさそうだね、ちょっと残念。ゆっくりと慣れてもらう事にしよう。

「うん！　よろしくね！　キャロルさん！！　ふふふ、嬉しい！！」

やった！　今日はお友達を一気に三人もゲットだ！　嬉しすぎる……！！

「な、何この可愛い生き物……。これが本物のお姫様ってやつか……。私も自分の可愛さに自信があった方だけど、こりゃ絶対勝てないわ」

私は子供だし、キャロルさんより背も低いからね。そう見えちゃうんだろう。

「姫様と比較するなどということ事態が愚かな行為。身の程を知りなさい」

シアさんその言い方はちょっとひどいよ……

まあ、お弟子さんだし、いいのかな？

「キャロル先生も、とっても可愛いですよ。でも、シラユキ様は、ちょっと、別格と言いますか……」

「俺にはどっちも子供にしか見えねえよ。ま、よかったな、キャロル。探してたバレンシアにも会えて、さらに王族と友人関係だぜ？　このまま国に仕えるのもいいんじゃねえか？」

「子供言うな、私より年下のくせに。でも、確かにそれもいいかな、冒険者なんて辞めて、シア姉様と一緒にシラユキ様のメイドでもやろうか。リズもどう？」

「素晴らしい、ですね。是非お願いしたい、です」

え！？　キャロルさんライナーさんより年上？　み、見えないわ……

キャロルさんとリズさんもメイドさんになって私の家族に、か。いいねそれ。

リズさんはエルフじゃないけど、私が我侭を言えばきっと認められると思う。

「何をふざけた事を……。姫様のメイドになりたいのなら、最低でもSランク程度軽くなって見せなさい。リズィーさんもですよ？」

「最低Sランク！？　シア姉様、さすがにそれは無理が……」

「私もまだ、Aランクにあがったばかり、なのですがー……」

「や、やっぱ王族はメイドもすげえんだな。そういや、エネフェアさんに付いてたメイドもやばそうな強さに見えたしな。さすが最強の国リーフエンド、バレンシアクラスも珍しくないのか……」

何か盛大に勘違いされてるね。クレアさんとシアさんは何と言うか、メイドさんだけどメイドさんじゃないよ……

でも、面白そうだ、このまま勘違いさせておこう。ふふふ。

その77

ギルド内に人が増えてきた。追い出されていた人たちが戻ってきたんだろう。

Aランクが三人、さらに王族が一人。テーブル一つの顔ぶれが凄い事になっていて、注目されまくってしまった。

さすがに居心地の悪さを感じ、私も帰ることにした。

リズさんライナーさんはそのままギルドに、キャロルさんは私たちと一緒に外へ出た。

キャロルさんはエルフだ、許可さえあれば森の中に入っていく事もできる。

積もる話もあるだろうし、今日は家に招待してしまおう。

三人並んで歩きながら、早速切り出す。

「シアさんシアさん。キャロルさんも一緒に帰ってもいいんだよね？」

「え？　シラユキ様？」

「森の住人ではないですから許可が必要になりますね。許可を出すのは王族の方、つまり、姫様が決めてしまっていいんですよ」

わ、私が？　子供にそういうこと決めさせちゃ駄目だよ……

でも、今日くらいいいか。ちょっと王族っぽい事でもやってみよ

う。

「それじゃ、キャロルさん。森の中へ入る事を許可します」

「は、はい！　ありがとうございます！」

うん、様にならないね。まだまだ子供だよ私は。

「ふふふ、しばらく滞在していってね。シアさんとも久しぶりに会えたんだよね？　話したい事も沢山あるよね。」

「シラユキ様……、ありがとうございます。今夜は久しぶりにシア姉様に甘えられるかな。嬉しい……」

……？　何か、今の言い方、表情……、変じゃない、か？

「きゃ、キャロ。私には姫様のお世話と言う世界の命運より大切なお仕事、いえ、使命ががあるんです。あなたにばかり構ってはいられませんよ」

「そ、そうなんですか？　シラユキ様がお休みになった後は……」

「姫様のお部屋の前を交代で警備に当たっているに決まっているでしょう」

「あ、今日くらいはいいよ、私が許可しちゃう。キャロルさんとゆっくりお話してあげてよ」

そうじゃないと何のために家に来てもらうか分からないじゃない。

「ありがとうございます！　シア姉様、今夜は甘えさせてくださいね……」

！？　また！？　え？　ま、まさか……

「子供じゃあるまいし、やめなさい。私に甘えていいのは姫様だけです」

「そ、そうなんですかシラユキ様！？　え？　でもシラユキ様はどう見てもまだ子供じゃ……」

「子供だから甘えるんでしょう？　そ、それより何か食べたい料理はありますか？　今日は」

「シアさんストップ」

「姫様……？」

足を止めて、キャロルさんに向き直る。

「キャロルさん、正直に答えて。今夜シアさんに甘えるって、そういう意味なの？」

「シラユキ様！？　だ、駄目ですよ。シラユキ様にはまだ早すぎます！」

うわあああああああああああ！！！

「や、やめなさいキャロ！」

「シアさんやっぱり手出しちゃってるんじゃない！！　やっぱりそっちの人だったんじゃない！！　嘘つき！！！」

「ち、違います！　誤解です！　決して私から手を出したわけじゃ……！」

「！？　キャロルさんからって事！？　そ、そうなんだ……、ごめんねシアさん、取り乱しちゃ、って！　そっちの人であることには変わり無いじゃない！！！」

「し、シラユキ様落ち着いてください……。シア姉様、これは一体……」

シアさんがそっちの人だというなら、それはそれでいい。

「ねえシアさん？　私に嘘ついてたんだ？　嘘偽りの無い本心からの答え、って言ってたのは？　ねえ……？」

でも、あの状況で私に嘘を吐いたのは絶対に許せない！

「姫様、あの日の言葉は間違いなく私の本心です、信じてください。女性に、もちろん男性にも恋愛的な興味はありません。昔の話とは言えキャロを抱いた事は事実です。ですが……、いえ、これ以上は言い訳にしかなりませんね」

嘘じゃない？　それじゃ、どう言う事？　だ、抱いたっていう表現はちょっと……

「す、すす、すみませんシラユキ様！？　それは、あの、その、私が無理を言って、その……」

キャロルさんも話の流れを理解したのか、シアさんに助け舟を出す。

「え？　……あ！　きゃ、キャロルさんがそっちの人で、シアさんはただ、その、相手をしただけ、と言うか……、言えないよ！　何この話！？　二人ともごめんなさい！！！」

ややややっちゃったあああああ、はははは恥ずかしいいい

「ううう……。二人とも忘れてえええ……。だ、誰にも言わないでね？　後、そ、そういう事してもいいけど、私には絶対に分からないようにしてね？」

キャロルさんは好きな人に久しぶりに会えたんだし、シアさんも一回くらいは甘やかしてしまうかもしれないしね。

し、シアさんとキャロルさんが……。想像しちゃったじゃない！！！

「し、しません！　ありえません！　キャロもいいですね！？　姫様も、もう忘れましょう……」

「ええ！？　だ、駄目なんですか！？　そんな！！」

「そういう事は恋人を作ってしてもらいなさい。リズィーさんとかいいんじゃないですか？」

そういえばリズさんは可愛い物好きだっけ？
リズィーさん→キャロルさん→シアさん→私、とか言う流れに！？　ま、まさかね……

「リズは故郷に恋人がいましたよ。冒険者になる時に別れてしまったんですが。あ、もちろん男性でしたよ」

よ、よかった！　リズさんはノーマルだった！

「キャロルさんはシアさんのことが好きなんだね。女の人同士って

言うのは私には分からないけど、否定はしないよ。でも、シアさんは私の大事な家族なの、あんまり困らせないであげてね」

「!?　も、申し訳ありませんでした!!!」

全力で謝るキャロルさん、って危ない！　あんまり勢いよく動くと大剣が!!!　動くたびにブンブン空気を切る音がするんですが!

「う、うん！　ごめんねキャロルさん。やっぱりそう言うのは、お互い好き同士じゃないとね」

「は、はい……」

「姫様……、ご立派です……。私などの事をそこまで思って頂けるとは、この感動、どう伝えたらいいのか……」

大袈裟だなあ……

ちょっと母様の真似っぽい事してみただけなんだけどね。今日の母様、怖かったけど凄くカッコよかったなー

と言うか、一回か何回か知らないけど、キャロルさん可愛さに答えちゃったシアさんが悪いんじゃないかな……

きっと可愛い弟子、妹とかそんな気持ちで接していたんだろうね。シアさん優しいから、断りきれなかったんだろうと思う。

町の外へ出て、森の方へ近づく。

「ここからは飛んで戻りましょうか。姫様、今日はお疲れでしょう

？　私が抱き上げて差し上げますね」

「あ、うん。ちょっと疲れちゃったかな。お願い」

主に精神的な疲れだけどね！

私を抱き上げるシアさん。お姫様抱っこだね。

「シラユキ様いいな……」

「あなたは後を着いて来なさい。武器で木を傷付けないように注意する事。分かりましたね？」

キャロルさんが全力でまっすぐ走ったら、一直線に道が出来てしまうと思う。

町の中でも全く他の人を気にしてなかったし、実際何度もぶつかりそうになっていた。その度に相手の人が避けてくれてたんだけど……、キャロルさんは全く気にしていなかった。普通はこっちが避けるべきなんじゃないかな！！

そういえばギルドの入り口に引っかかってもいたね……、あれは可愛かった。

ふ、不安だ……。この森全体が私の家でもあるんだから、気をつけてもらわなくちゃ！

案の定と言うか、木を何本もへし折ってしまったキャロルさんは、シアさんにたっぷりとお説教を受けることになった。

正座でお説教を受けるキャロルさんは、でも、何となく、嬉しそうだったよ。

その７７（後書き）

キャロルの胸の大きさを書いてなかったとは……
シラユキがとてもいいお友達になれそうと思っている事で察してあげてください。

双塊がアレの意味だと予想してた皆さんには悪い事をしてしまいましたね……

その78

いきなり王族一堂の前で紹介されたキャロルさんの固まり様は凄かった。緊張で倒れちゃうんじゃないかと思ったよ。

緊張で、歩く時に手と足が一緒に出るって本当にあるんだね……。ちょっと笑っちゃったよ。

しきりにシアさんに助けを求めていたが、残念、シアさんも私以外の王族の前では控えちゃうんだよね……

でも、キャロルさんはAランクの最上位に位置する冒険者。国が関係するような依頼も請けて、王族、とまでは行かないにしても、多少偉い人には会ったこともあるとは思うんだけどなー。

やっぱりエルフにとって、この国の王族、ハイエルフは特別なのかもね。できたらそんな事気にせずに、気楽に話し合える関係になりたいものだ。

食事の席でもガチガチ。テーブルマナーなんて誰一人気にして無いのに……

ここでもシアさんに助けを求めていた。まあ、そのシアさんは私のお世話してたんだけどね……。ごめんなさい！

テーブルマナーと言えば、箸が欲しいね、今でも使えるかちょっと不安だけど。ナイフとフォークも慣れると使いやすいんだけどね、やっぱり箸以上に食べやすい食器は無いと思うよ。

何かを口に運ぶ度に、美味しいです、とは言っていたが、味なんてきっと分からなかっただろうと思う。まずは私と二人だけの席で慣れてもらった方がいいのかもしれないね。

そして今は食後、場所はいつもの談話室。私とキャロルさん、そしてメイドさんズの三人がいる。

さすがに王族に囲まれては談話も何もあったものじゃないので、みんなには遠慮してもらった。明日から一人ずつ慣れていってもらおうと思う。

シア姉様が立っているのに私が座るわけにはー、とか言っていたが、私とシアさんで無理矢理座らせた。お客様が何を言うか。ふふふ。

「ふう……、美味しいですねコレ。さすがシア姉様、何でも出来ますね……」

「落ち着いたかな？　そんなに緊張する事なんて無いのに」

紅茶を飲んで一息ついたところで話しかける。

シアさんの淹れてくれた紅茶っていうのが効いたかもしれない。

「す、すみませんシラユキ様、お気を使わせてしまったみたいで。まさか王族の方全員の前へ連れて行かれるとは思わず、またお見苦しいところを……」

「三百にもなって情けない……。殆どはいといいえでしか答えられてなかったですよ」

シアさんが呆れたようにため息をつく。

「シア姉様も助けてくれたってよかったじゃないですか……。シラ

ユキ様のお世話は確かに大切な事ですけど、そちらのお二人にお任せしてもよかったんじゃ……」

「この私が姫様のお世話を蔑ろにする訳にはいきませんからね。それに、ただのメイドに王族の方とその客人の会話に入っていけと言うのですかあなたは。常識で考えなさい」

「私も今日くらいはいいと思うんだけどな……。もっとキャロルさんを構ってあげてよシアさん」

「シラユキ様……、ううん、なんてお優しい方なんだろう……」

「甘やかさないでくださいね、姫様。キャロはこう見えても立派な大人、三百歳以上ですよ？　甘やかす必要など一切ありません。逆に言えば、姫様を甘やかす必要は絶対にある、という事になりますね」

「え？　どう考えたらそうなるの！？」

多分キャロルさんが緊張してたのは、王族の前という事に加えてシアさんの前だから、って言うのもあったのかな。大好きな人に変なところは見せられないよね。

「あはは。常識で考えろなんてシアの言えたセリフじゃないよ。一番の非常識メイドじゃない」

「うんうん。でも、まあ、ウルギス様とエネフェア様はしょうがないよ。私たちでもそこまで気軽に話しかけれないって」

そうかな？　フランさんもたまに母様と冗談を言い合ってると思うんだけど……。あ、キャロルさんのフォローか。

「失礼な。……そうですね、まずはルーディン様とユーフェネリア様とのお話に慣れるといいでしょう。お二人ともキャロより年下ですから、少しは話し易いのでは？」

「だねー。二人とも私より年下だし、ユーネ様は成人してるけどまだまだ子供っぽいところもあるしね、話しかけ易いと思うよ」

フランさんは二百歳以上だったね。あ、キャロルさんの方がさらに年上なのか……

見た目がメアさんより若く見えるから違和感が凄いよ。年齢を聞いた今でもついつい勘違いしちゃうねこれは。

「わ、分かりました。滞在中には緊張せず話せるように頑張ります。でも、できたら皆さんも一緒でお願いします……」

「さっきからちょっと気になってたんだけど、私たちに敬語なんて使わなくていいよ？　シラユキお付って言ってもただのメイドだし。メアも私もこんな感じで話すからね。あ、そだ、キャロルって呼び捨てでいいの？　悪いけど、見た目からさん付けはし難いんだよね」

何て正直な人だ！　さ、さすがはフランさんだ……

「あ、はい。呼び捨てでいいですよー、っと、呼び捨てでいいよ。実は私も敬語は苦手でさ、助かるよ」

「私も呼び捨てで呼んじゃおう。ねえねえ、キャロルってホントに三百以上？　やけに可愛いんだけど」

メアさんの約三倍生きているようには見えないよね。
み、未来の私を見ているようだ……！！

「うん、三百四十ちょい。背も胸ももう諦めたよ……。特に背は子供の頃から気にして色々やったんだけどね、リーチが短すぎるし。でも今はもう関係無いね、むしろ小回りが効いていいよ、この見た目で得する事も結構あるしね。何か買うときおまけしてもらえたりさ。あはは、子供扱いされて喜ぶのもなんなんだけどね」

リーチ？　小回り？　諦めちゃ駄目だよ！！　特に胸の方は諦めちゃ駄目だよ！！！
しかしキャロルさんは大人だなあ……。私もこんな大人になれる日が来るんだろうか？

はっ！？　私は諦めないんだから！！！

「冒険者の考えですね。姫様、リーチの差は生死に直結するんですよ？　今は関係無いと言うのも、例の武器で補えている、という意味です。姫様も安心して諦めてください」

「また顔に出てた！？　そうなんだ……、体が小さいっていうのは、冒険者にとって不利でしかないんだね、って諦めないよ！！！」

１６０、いや、贅沢は言わない！　１５０は欲しいです！　お願い女神様ーー！！

「シラユキ様はまだ十くらいですよね。大丈夫です、きっとエネフェア様、ユーフェネリア様のように美しい大人の女性になれますよ」

「ありがとうキャロルさん！　初めてそんな優しい言葉を貰った気がするよ……。あれ？　ホントに初めてじゃ……？」

「姫は美しい大人の女性って言うよりは、可愛らしくて子供っぽい感じに育って欲しいよね。ずっと私たちにお世話させて欲しいし、そもそも想像もできないって」

「ええ、まったくです。姫様はこの先ずっと、未来永劫そのままで、今のお可愛らしいままでいてくださいね」

「可愛らしいままなのは確実よね。ずーっとお世話してあげるからねー、シラユキ」

　みんなこうやって小さい方がいいとか、可愛いままでいろとか言うんだよね。それは、自分の背が高いからこそ言えるセリフなんだよ！！！

　でも、ずっとお世話したいって思ってくれてるのは嬉しいな。ちょっと涙が出そうになっちゃった。

「みんな猫可愛がりなんだね……。ふふ、シラユキ様も嬉しそう。私も引退したらこの国でゆったり過ごそうかな……」

　それはいい考えだね。キャロルさんという素晴らしい理解者を手放したくはないな……。引退したらと言わず、どうにか今すぐにでも我が家のメイドさんとして家族になってもらえないものか……

「シラユキの背はどうせそんなに伸びないから、その話はもういいとして。ねえ、キャロル、ちょっと聞きたい事あるんだけど、いい

？」

「フランさんひどい！！　よくないよ！　伸びるよ！　多分！　きっと！　信じれば……」

「シラユキ様落ち着いてください……。ええと、フランさん？　何かな。私に答えられる範囲でなら何でも答えるよ」

くそう！　フランさんめ……。自分がちょっと背も高くて胸も大きいからって……、うじうじ。

「あらら、ぶつぶつ言い始めちゃった……。ま、いいや、放っておこう。ん、さんは付けなくてもいいよ。レンとはさ、Ｈしてたんだよね？　女の人同士ってどうヤるの？　どうヤったの？」

「ええ！？　な、な……」

フランさんのアレ過ぎる質問にキャロルさんがうろたえる。

ななななんて事聞くのよ！！！　でもちょっとだけ興味のある話ではあるね、黙って聞こうか……。生々しい発言になりそうだったら止めよう。

「フラン！　いきなり何を聞くんですか！　姫様の前ですよ？　自重してください」

「私もちょっと興味あるなー。女の人同士とかじゃなくてさ、シアがそういう事するのって想像できないんだよね……」

え？　そうなの？　確かに想像しにくいけど、シアさんが女の人

と、って言うなら想像できちゃうよ？　またしちゃったよ！！！
うあああ……

「まあ、確かに、もう性欲というものは感じなくなりましたからね。……姫様は別ですが」

「私は別なの！？　性欲とか生々しい表現はやめて！！」

「あれだよ、別腹ってやつ。デザート感覚なんだよきっと」

それもやだよ！　でも的確な表現過ぎて泣けるわ……

「いい表現だねメア。それで、どうなの？　レンとはどうヤってたのか聞かせてよ」

まだ聞くか！？　でも止めません！

「シラユキ様の前ではちょっと、さすがにね……。シア姉様が話してもいいって言うなら、後で話してもいいけど」

「駄目に決まっているでしょう！！　叩き出しますよ！　フランもいい加減にしてくださいね」

「はい！　話しません！！」

うわ！　珍しくシアさんが大声を！　こ、怖いわー……

「ごめんごめん、もう聞かないって。……後でこっそり教えてね？」

「フラン？」

またいつの間にやらナイフを手に持っているシアさん。

「じょ、冗談だってば！　や、やだなー……。まったく、レンは真面目なんだから、もう」

「まじめとかそういう問題じゃないと思うよフランさん……」

私が生まれてから多分初めてのお客様なんだろう、メアさんフランさんも大喜びだ。

明日は兄様姉様も加えて、一緒にお話しようと思う。楽しみだー

でもHな話は勘弁して欲しいよ……。興味は、その、あるんだけどね！

その７８（後書き）

１０月６日
フランのセリフを修正しました。

やっぱり話し方がおかしかった……。すみません。

その79

「それじゃ、改めて自己紹介だ。俺はルーディン、よろしくな。シラユキを泣かせたら地獄を見せてやるから、そのつもりでな」

「私はユーフェネリアよ。結構間違えて覚えられるからユーネでいいわ。シラユキをいじめたら、友人家族その他諸々消えてなくなる……、程度じゃ済まないわよ」

「はははははい！　肝に銘じます！　よよよ、よろしくお願いします！！！」

「なんで脅すの！？」

昨日に続き、談話室。まずは兄様と姉様と気軽に話せるようにと、二人を連れて来てみた、のだが……、早速脅しが入ってしまった。

キャロルさんの緊張を解くための自己紹介だっていうのに、逆にさらに緊張させちゃってどうするのよ。まったく、この兄様姉様は……

「安心しろ、半分冗談だ。お前を泣かせたライナーとかいう奴の知り合いらしいからな。まあ、念のためだ」

「半分冗談って言うのは、キャロルがシラユキをいじめるなんて無いと思うからね」

「つまり、何か仕出かしたら地獄を見せると言うのは本気、という事ですね。勿論その時には私も参戦することになるでしょうから、地獄程度で済むとはとても思えませんが」

な、なるほどね。シアさんの言い方が怖すぎるが、よしとしよう。まだ昨日会ったばかりだが、キャロルさんが私に何かするなんてどうやっても思えない。安心だね。

「キャロルさん、安心してね。三人ともこんな事言ってるけど本当に優しいから」

「は、はい。ありがとうございます……。では私もまた簡単に。キャロル・ウインスレット、冒険者です。この度はリーフエンドの森へのご招待、本当にありがとうございます。私のようなただの冒険者の身に余る待遇、言葉では言い表せない感動です」

「うわ、硬いな……。別に感謝されるような事じゃないと思うんだけどな、許可出したのはシラユキだし。感動って何だ？　ま、俺たちもシラユキも一応王族なんだけどな、あんま気にしなくてもいいぞ、って言うか気にするな」

ホントに硬いよ。そしてこの見た目でこの喋り、うーん……、似合わな……、こほん。

「私たちから見たらただの妹の友達、貴女から見ても友人の姉と兄よ、そんなに緊張することなんてないわよ。ふふ、王族なんていうのは抜きにして、私たちともお友達になって頂戴ね」

「は、はい！　喜んで！！　さすがはシラユキ様のお兄様とお姉さ

ですね。お優しい、素敵な方……」

ちょ、姉様を見る目が……？　姉様を狙ったら兄様に何されるか分からないよ……

キャロルさんは甘えさせてくれるお姉さんみたいな人が好みなのかな？　その考えは分からないでもないね。私から見ると全員が優しくて頼りになって甘えさせてくれるお姉さんばかりなのだけどね。

「キャロルはシアの元お弟子さんなのよね？　冒険者時代のシアって全然想像できないのよねー。どこからどう見ても完璧なメイドにしか見えないし」

「たまにどう見てもメイドに見えないときもあるが……。やっぱ昔は他の奴等みたいに荒々しかったりしたのか？　今でも、まあ、たまに怖いが……」

緊張を解くためには、とにかく相手に喋らせる事だ。

シアさんの昔の事はあまり聞いて欲しくはないんだけど、共通の話題がシアさんの事しか無いからしょうがないか。私も、ちょっと怖いが聞いてみたい。

「確かに言葉遣いはすっかり変わってしまいましたが、シア姉様はシア姉様ですよ。何も変わっていません。昔から強く、厳しく、それでいてとても優しい人でした」

「や、やめなさいキャロ……」

照れてる照れてる。

シアさんが照れてるところなんて滅多に見られないし、今日は堪能させてもらおうか。

「バレンシアはバレンシア、か。そうだな……。それにしても、シア姉様か、そんな風に呼ばせてたんだな」

「しかも、やっぱり手、出しちゃってたんでしょ？　もう言い逃れできないわね、シア？」

「ううう……。私は一生謎メイドであり続けたかったのに……。はい、もう言い逃れはしません。ですが、昔の話ですよ」

私にははっきりと答えてくれたからね、もう気にならない。隠し事はいっぱいしてるけど変な嘘はつかないからね。もし嘘をつくことがあったとしても、それは私のためを思ってのことなんだろうと思うからね。

キャロルさんに手を出しちゃったっていう事をネタに姉様たちにからかわれる事になるとは思うけど、それは自業自得という事で、ふふふ。

「昨晩はお楽しみでしたね」

にやにやしながら言ってみる。

「姫様！？　何もしてませんから！！　そんな事を言ってはいけませんよ？　はしたないです」

「そ、そうですよシラユキ様。昨日の夜は久しぶりにシア姉様とお話ができて、確かに楽しかったですが……、あ」

「うん。そういう意味で言ったんだけどな？　シアさーん？」

「そ、そんな……。まさか姫様にからかわれる日が来ようとは……。喜んでいいのか、悲しめばいいのか、複雑です」

確かに、シアさんをからかえる日が来るなんて！　今日だけだと思うけど……

「ふふふ、ごめんねシアさん。もうからかったりしないから許してね？」

「分かりました。それでは、添い寝一回で手を打ちましょう」

「しまった！　からかえてもその分自分に帰ってくる！？」

添い寝くらいならいいけどね……。お楽しみはやだよ！？

「あはは……、あっと、すみません」

私とシアさんのやり取りに笑ってしまったキャロルさんが、何故か謝る。

「笑い出しちまったくらいで謝るなよ、自然にしてくれ。できたら敬語もやめて欲しいんだけどな？　いきなりは無理か」

「メアとフランくらい気軽に話して欲しいわね。名前だって呼び捨てでもいいのよ？　王族なんて言っても何か特別な事してるわけじゃないし、年下よ？　私たち」

「キャロは見た目子供ですから全く違和感は感じませんが。余りにも畏まるすぎるのは逆に失礼。昨日も言いましたよね」

「そう言われても……、やっぱり難しいと言うか……。すみませんが口調は変えられそうにありません」

そういえばキャロルさんは姉様の三倍以上か……。全く見えないわ……

「ゆっくり慣れていけばいいと思うよ。まだ会って二日目なんだし、まだしばらくは家にいてくれるんだよね？」

「え？　ああ、いえ、さすがに町で宿を取りますよ。依頼もこなして生活費を稼がないといけませんし、リズも町にいますからね」

えー……。残念だけどしょうがないかな。

冒険者は冒険者。ここでぬるま湯生活をさせ続ける訳にもいかないか……

「ああ、んじゃ、キャロルも家に住めよ。シラユキ付きのメイドにでもなればいいだろ」

「うん。私もそうなるといいな、って思ってたんだけど……。キャロルさんもシアさんと一緒がいいよね？　ね？」

「ええ！？　あの、ええ！？」

「いいわねそれ、さすがお兄様！　でも、そうなると、シラユキ一

人に四人は多いわよね……」

「いや！　ちょ……」

「メアリーかフラニーか……、メアリー外すか。それで俺付きになればいいな。それがいいそうしよう」

「え？　私ですか！？　それはそれでいいような……。でも姫付きの楽さは捨てがたい！」

私付きは私と遊ぶのがお仕事だからね。相当楽だと思う。
フランさんじゃないのは、人妻だから揉めないんですね、分かります。

「お兄様……？」

「じょ、冗談だって！！　怒るなよユーネ」

「ふんだ。どうせ私の胸なんて揉んでも楽しくないわよねー」

「馬鹿な事言うなよ……。どれだけ大きかろうとも、お前以上の胸なんてこの世界にある訳が無いだろう？」

「そんな……、もう、お兄様……」

見つめ合い、二人の世界へ入ってしまった。
しばらくは戻ってこないだろうから放置だ。目の前でキスされまくるのも目に毒だよ……

「あ、あの、私はどうしたら？」

おっとキャロルさんの事を忘れてた。

「とりあえずこの二人は気にしないでいいから。私もキャロルさんがメイドさんになって、家族になってくれると嬉しいんだけど……。キャロルさんにはキャロルさんの生活があるからね。無理にとは言わないから、安心してね」

「はい。折角の心遣いを、すみません」

「どちらにしてもこの子にメイドの仕事は無理でしょうしね。しかし、たまには遊びに来るように。姫様のご友人になったという事を決して忘れないようにするんですよ」

「はい！　勿論です！」

エルフのたまに、は、十年くらい間が空いても、たまに、なんだけどね。

「うーん、これからどうしようか？　お昼にはまだ早いし……」

話し相手が絶賛二人の世界中だからね、やることがなくなっちゃったよ。

「レンとの蜜月の日々を……」

「黙りなさい」

「はい！」

フランさんはまだ諦めてなかったか！

でもそれもいいね、蜜月の日々じゃ無いよ！？　まあ、少しは気になるんだけどね……

「キャロルさんの冒険のお話聞きたいな。シアさんと一緒に旅してた頃のとかさ」

「え？　シラユキ様にお話できるようなものはありませんよ？　その、割と危険な、と言うか、ええと」

言い出し辛そうだ、やっぱりそうかー……

「血生臭い？　やっぱりそういう話ばかりなんだ？」

「え、ええ……。シラユキ様にはお聞かせしたくない様なものばかりです。あー、そのー、シア姉様？　話を変えた方が……」

「姫様。ギルドの依頼の討伐対象は魔物が全て、という訳では無いんですよ」

「シア姉様！？　だ、駄目ですよ！」

魔物以外も討伐対称に含まれるっていう事？　魔物以外だと何が……？

キャロルさんの反応からすると私には聞かせたくないような……

「聞くんじゃなかったー……。しょ、賞金首みたいなもの？」

「は、はい……。指名手配された犯罪者や野盗などですね。ある程度の実力者になると、ギルドから直接依頼されるんですよ。私もＡランクになってそれなりに経ちますからね、そういった依頼もいくつもやってきているんです」

この世界では当たり前の話なんだろうけど、これはまだ、ちょっと聞きたくなかったな……

簡単に言えば人殺しの依頼か。キャロルさんも、もちろんシアさんも、経験してきているんだよね。

「あああああ、暗い顔にさせちゃった……。シア姉様？　シラユキ様が知るにはまだ早すぎますよ？」

「いいえ、早すぎるという事はありませんよ。あなたと友人として付き合うのに必要な前提でもありますからね。しかし、お聞かせしたくなかったのは確か。申し訳ありません」

「ううん、大丈夫。ちょっと怖い話だけど、思ったよりショックは少ないかな。シアさんもキャロルさんも、いい人だもん」

この二人が過去どんな依頼をしてきていようとも、嫌いになるなんてありえない。

「ええ、誰も進んで受けようなどと言う人はいませんよ。なので、ギルドが直接依頼を割り振るしか無いんです」

「中には嬉々として受ける者もいますよ。ですからあまり、冒険者ギルドには遊びに行かない方がいいと思うんですけど……」

「それはホントに聞きたくなかった！！」

荒事大好きで冒険者になる人もいるんだ！？

「キャロ！！　余計な事を……。しかし冒険者ギルドへの興味が消えるのは喜ぶべき事……？　はっ！　だ、大丈夫ですよ姫様。どこへ行くにも私が付いていますからね？　姫様の半径３ｍ以内に」

「また１ｍ増えてる！？　３ｍとか、道の真ん中歩いたらどうなっちゃうの！？」

「聞きたいですか？」

「聞きたくなーい！　シアさんこわーい！！」

私の歩いた後は肉片と血だまりしか残らない？　怖すぎるわ！！！

「何だ？　やけに楽しそうだな」

「あ、ルーディン様、ユーネ様。いいんですかあれ？」

「いいのよ。シラユキをからかうのはシアの日課と言うか、生きがいの様なものだから」

「そうなんですか……。さすがシア姉様、王族をからかうのが日課とは」

「悪いな、うちの妹がお前の姉さんを取っちまったみたいで。アイツを悪く思わないでやってくれ。恨むなら、俺たちをな」

「え？　いえいえそんな！　私ももうそこまで子供ではありませんから！　あんなに幸せそうなシア姉様を見せて頂いて、逆に感謝したいくらいです」

「そうだ！　これからは私に甘える？　私二百以上年下だけどね……。貴女可愛いのよー。シラユキの可愛さには遠く及ばないとしても、シアが可愛がってただけの事はあるわよねー」

「だからそんな子供じゃありませんってば……。ユーネ様は私の娘でもおかしくない年齢ですよ？」

むむむ。何か面白そうなお話してるな？

「それならユー姉様がキャロルさんに甘えるとかどうかな？」

「面白そうだなそれ。キャロル姉さんか？　だがもっと胸がだな……」

「キャロルお姉様？　いいわねいいわね、面白そう！」

「姫様はキャロ姉様とでも呼んでやってください」

ナイス提案だ、それでいこうか！

からかえそうな人間を見つけたら、即からかうのがリーフエンドの王族流。やな王族だな……

「キャロねーさまー」

「ふふふ、キャロルお姉様ー」

「キャロル姉さん。……照れるなこれ」

「勘弁してください！！　でも姉扱いは嬉しかったり……」

キャロルさん小さいしね、きっと今までずっと、妹か娘扱いしかされてなかったんだろう。

本当に未来の自分を見ているようで不安になるんですけど！？

その８０

お昼も食べ終わり、さて次は父様母様とお話ししようか、と考えていたところ、カイナさんがキャロルさんを呼びに来た。
どうやら、父様たちがキャロルさんだけにお話したい事があるらしい。まさか、キャロルさんメイドさん化フラグか！？
私とシアさんも一緒に来てくださいと半泣きでお願いされたが、心をオーガにして見送ることにした。
ごめんね？　無理矢理メイドさんにされるのを期待しちゃってるの。シアさんも一緒だし、いいんじゃないかなーって思っちゃう。

メイドさんフラグは半分冗談としても、一体何のお話なんだろう？　父様と母様が冒険者の人に聞きたいことでもあるのかな？
リーフエンドの外から来たみたいだし、他国の噂話でも聞くんだろうか。むむ、それは私も聞きたいな……
しまった！　やっぱり私も一緒について行けばよかったよ……、ちょっとおしいことしちゃったかな、残念だ。

予定が何も無くなってしまったので、メイドさんズと一緒に大人しく読書をすることに。
そういえばメイドさんズ三人とも、私がまた大泣きして帰ってきてからさらに過保護気味になった気がするんだよね……
まあ、悪い事ではないんだけど、このままだと兄様みたいに一人で町に出かけるとか、一生無理そうな気もしてきたよ……

いいや、今は考えない考えない。読書に集中しよう。
今日の本のタイトルは『カッコいい魔法の詠唱・初心者編』。

今までは、どうせ父様と兄様の趣味のくだらない本だろう、と思って無視してきた本だが、どうやらそうではないらしい。
分かりやすい、イメージしやすい詠唱と魔法名。さらには身振り手振りなど詳しく書かれているとても……、イタイ本だった。
詠唱と魔法名はいいとしても、身振り手振りはおかしい……。ダンスの指南書なのかこれはと思われちゃうんじゃないかな。体の動きに意識を持っていかれて、逆に魔法のイメージがし難くなると思うのは私だけなんだろうか？

他の種族から見ると、きっと歴とした魔法の指南書なんだろうと思うけど、エルフの私たちから見ると、詠唱も身振り手振りもあまり必要性を感じないし、詠唱破棄の場合に手を動かすくらいだね。
詠唱はカッコいいとは思うんだけど、人前だと恥ずかしいね。特に私からは中二成分が全開で含まれている様に見えてしまう。
そういった色々な意味を込めて、かなりの面白い本だとは思う。

「他の種族の人はみんなこんな詠唱してるの？　町でも見たこと無いんだけど」

実際見たら吹き出してしまいそうなものも多い。精神攻撃も兼ねているのでは？　と思ってしまうくらいだ。

「少なからずいるとは思いますよ、こうやって書籍化されているくらいですからね。他種族の方が魔法を使うところを余り見かけないのも、町の往来で魔法を使う必要がまずありませんから。冒険者ギルドでは冷やす魔法を使っている方は何人もいましたが、それくら

いですね」

「あ、確かにただ歩くだけの道で魔法を使う人はいないね。ギルドの中で魔法使ってる人がいたのは気づかなかったなー。みんな詠唱破棄だからかな？」

「ええ、できましたら、他人の魔法の行使を感知することが出来るようなって頂きたいのですが、姫様にはまだ難しいでしょうか？何となくだけでも感じ取る事はできませんか？」

シアさんはそう言って小さな明かりを私の前に作り出す。

「目の前で使われるとさすがに分かるんだけどね、私の意識の外と言うか……、目に入らないところで使われてもまだ分からないよ。すぐ後、とかならまだ分かりやすいかもだけど。うーん……、多少離れてても感じ取れるようになった方がいいの？」

「はい、お願いしますね。ご自身の身を守るためにも……、！？すみません！　無理にとは言いません！　ああ、姫様に強要してしまうとは……」

え？　あれ？　どうしたんだろシアさん。今のは私のためを思っての発言だろうと思うのに、何を気にする事があるんだろう……

「私もシラユキはそんな事できるようにならなくてもいいと思うよ。レンが謝ってるのは……、アレだね」

「うんうん、アレだよね。シアだからいいんじゃない？」

あ、アレ？　アレって何？

「あはは、分かんないか。姫、シアは自分で姫を守りたいんだって。だから姫は自分の身を守る事なんてあんまり考えなくてもいいんだよ？」

あー、そういう事……。なんか、むず痒い嬉しさだね。

「ふふふ。ありがとうシアさん」

「姫様……。メアも説明しなくてもいいんですよ、まったくもう……」

照れてる照れてる。

ペラペラとページを捲り、物を冷やす魔法の所で思いついた。

「この本エディさんにも読ませてみたらどうかな？　冷やす魔法が上手く出来るようになるかも？」

「いえ、本は本ですからね、やはり文字や絵だけでは限界があります。いくらこの本を熟読したところで、実際の炎の熱さ、氷の冷たさ、そして痛みは理解できる訳もありませんから。大抵は師事している方の詠唱をそのまま使い、慣れてきたら自分なりのアレンジを加える程度でしょうか。そのアレンジによって効果が変わっていくのを研究するのも、他種族のみの魔法の使い方の特徴ですね」

「な、なるほど！　シアさん凄い！」

そうだよね、実際体感してこそのイメージ、魔法だよね。

「え？　その、常識だと思うのですが……。姫様はたまに当たり前の様な事で驚かれて、面白可愛いですね」

面白可愛いってどんな表現よ！

確かに当たり前の事なんだけどね、うーん……、上手く言えないな。

頭では分かっていても、こうやってそれを自分が経験するとね。

あ、今の魔法の話と同じだ、面白いな。

「私は詠唱は考えない方がいいのかな。前に言ってたよね、無意識に威力が上がっちゃうって」

「そうですね、あまりお勧めはできません。特に姫様の場合は詠唱破棄が基本になっていますから。例えば、指先程度の火を灯す魔法でも、大きな声で燃えろ、と叫んで使った場合、どうなると思います？」

いつもはライター感覚で使ってるね。火の大きさもライターと同じくらい、火力の調整も意外にに簡単にできる。

その魔法を叫んで使うと、ああ、なるほどね。

「多分自分が思ってるよりも、はるかに大きい火が出ちゃうんじゃないかな。小さな声でしっかりイメージして言えば、詠唱破棄と同じくらいの大きさで出せると思う」

「通常は逆なのですが、姫様の場合は本当に注意が必要ですね。通常、詠唱ありで使っている方は、詠唱破棄で威力が下がるだけなのですが、姫様の場合は通常が詠唱破棄、詠唱ありにすると威力が上がっているように感じてしまうんです」

「それってみんなが黙ってたせいじゃない？　あれ？」

あ……、ああ！　やっと分かったよ！！

「お気づきになられたようですね。ですが、説明します。姫様の詠唱破棄での魔法の威力が、他の方の詠唱ありの威力、効果と同程度になってしまっているんです。勿論本人の力量次第で効果の程は変わります。姫様には通常状態でリミッターが掛かっている感じですね。集中、詠唱、大声での魔法名、そして姫様本人のイメージ力。その全てを最高の状態で発動した場合は……、あまり考えたくはありませんね」

「確かにあんまり考えたくないかも。あのプラズマボールも詠唱破棄で５０ｍの範囲なんでしょ？　あれってホントに軽ーく作っただけなんだよ？」

プラズマ球の魔法の名前は『プラズマボール』と命名した。

『サンダーボール』とか『ライトニングボール』よりはるかにイメージしやすいし、カッコいいよね。

「５０ｍ……？　あ、ああ！　すみません姫様、あれは嘘です」

しれっと言うシアさん。何だうそか。

「嘘だったの！？　な、何で？　え？」

あまりに普通な言い方に混乱してしまった。

５０ｍの範囲は嘘。それはどうして？　いや、そんな事よりも、シアさんがあんな風に自然と私に嘘をついていた事がショックだ……

「え？　シラユキホントに信じてたのあれ。５０ｍだよ５０ｍ、ありえないってそんな馬鹿みたいな範囲」

「シアの言う事だからね、あの時はシアも真面目だったし、信じちゃうよ」

フランさんメアさんも知ってたの！？　まさか、兄様姉様もか！！

「ううう、普通は嘘だって分かるんだ……。シアさん、どうしてそんな嘘ついたの？」

「今の今まで忘れていました、申し訳ありません。魔法を消す場合にも魔力を消費する、と姫様にお教えする時に明かすつもりだったのですが、姫様はご自分で気づかれてしまいましたからね。言い出せないまますっかりと忘れてしまっていました。理由は簡単ですよ、姫様にあの魔法、『プラズマボール』でしたか、あれを使わせないようにするためですね」

忘れてたとか！！　ん？　私に使わせないため？

「５０ｍという広範囲、そしてウルギス様でさえなすすべ無し。これだけ言っておけばお優しい姫様の事です、試しに使ってみようなどと思う事すら無かったのではないですか？　もしもう一度あの魔法を出現させ、それをまた消す事にでもなったら……」

「また魔力疲れで倒れちゃう、だよね？　もう……、普通に言ってくれればいいのに。シアさんの言う事ならちゃんと聞くよ？」

「ふふ、すみませんでした。理由は他にもありますよ。雷の魔法は私たちにとって完全に未知の魔法ですからね、他の王族の方が使われている以上のものはできればおやめになって頂きたいのです」

「あ、ごめんねシアさん……。もうあれは使わないよ、安心してね」

どうやら不安にさせてしまったみたいだね。

あー、大失敗だ。シアさんたちにとっては本当に全く分からない系統の魔法だからね。暴走させてしまった場合の対処も考え付かないか……

兄様ができる範囲の事に留めて置くのがよさそうだね。雷の矢と、『スタンガン』くらいなら使っても大丈夫かな。

「うわ、理解早すぎだよ。ごめんね姫、黙ってて」

「ルーディン様とユーネ様も同じ考えで黙ったのよ、怒らないであげてね」

「うん！　ありがとう、三人とも！！」

「こちらの謝罪に対して感謝の言葉を返されるとは……、姫様は優しすぎますよ。感動で泣いてしまいそうです」

シアさんの表現は大袈裟すぎるよ……、恥ずかしい……

「先ほどの詠唱の話ですが、集中、詠唱ありの『プラズマボール』でしたら５０ｍの範囲に届いてしまうかもしれませんね。ふふふ、さすが姫様、既に魔法の攻撃力に関してのみでは既に大陸一、いえ、世界一なのでは？　詠唱無しの範囲がどれ程なのか分からないのですが、ね」

「さすがにそれは無いと思うけど……、否定しきれないのが自分でも怖いよ。この先使うことは無いと思うからもう知りようが無いね。５０ｍとか、使ったら確実にシアさんも巻き添えにしちゃうよ」

私は電撃を完全無効化できるからいいんだけどね。５０ｍなんて凄い範囲になっちゃった場合は絶対に敵味方無差別魔法になってしまう。無差別魔法は姉様の専売特許なのにね。

あれ？　効果範囲を狭めることもできるんじゃないか？　プラズマボールの球体を大きくしたような位置固定型の魔法に……。ん？

「ふふふ、嬉しいです……。ふふ、あ、すみません」

え？　何その素敵な笑顔！？

シアさんは最高に嬉しそうな笑顔で笑っていた。

私、今何か変なこと言った？

「ど、どうしちゃったのシア、急に笑い出すなんて」

「シラユキの魔法に巻き添えになるのが嬉しい、とか？」

「いくらシアさんでもさすがにそれは無いよ……。無いよね！？」

私の魔法に巻き添えになったところを想像して笑った訳じゃないよね？　ど、ドMじゃないよね？

シアさんはまだにこにこと機嫌よさそうに笑っている。フランさんへのツッコミも無しだ。

本当にどうしちゃったんだろう……？

「ふふふ、本当に嬉しいです。姫様の何気ない一言に私の名前が出てくるとは。攻撃魔法を使うような状況で、近くに私がいるという事を当たり前のようにお話になるとは。従者冥利に尽きるというものです」

「え？　あ、ああ……。恥ずかしいな、もう……」

それだけもう、私の中ではシアさんが隣にいる、という事が当たり前になっているんだね。

万が一私が戦うような状況になっても、隣にはシアさんがいる。確かにそれ以外考えられないね。

「あまりに嬉しすぎるので、先ほど獲得した添い寝権を早速今夜使わせて頂きます。お覚悟を」

「覚悟！？　何する気なの！？　お、お楽しみは駄目だよ！！！」

まさか今夜早速使われるとは思わなかった！　と言うか本気で使うとも思わなかったよ！

「姫は今夜大人になるんだね。まだ十二なのに……。私だってまだなのに……」

「レン、優しくしてあげてね。シラユキ、明日感想をよろしく」

メアさんフランさんもここぞとばかりに私をからかいに来る。

「しないー！！！　何もしないからね！！！　一緒に！！　寝るだけ！！！」

「やっぱりキャロルよりシラユキの方がからかい甲斐があるよね」

「うんうん。私もからかうなら姫がいいよ、やっぱり」

キャロルさん早く帰って来て！！

やはりキャロルさんは私付きのメイドさんになるべきだ！　そうなればからかいの矛先も分かれるだろうからね。こんなひどい理由でごめんなさい……

「ああ、二人とも、今夜の警備は必要ありませんから、ゆっくりと休んでくださいね」

「ひ、人払い！？　シアさんまさか本気なの！？　な、何かしたらゼロ距離プラズマボールだからね！！」

ちゅ、中心部ならきっとシアさんでも倒せるはずだ！！

「私は、昨日お休みを頂いた分、今日は二人に休んでもらおうと思っただけなのですが……。一体何を焦っていらっしゃるのですか？姫様」

さっきまでのにこにこ笑顔はどこへやら、今度はニヤニヤ笑顔で私をからかうシアさん。

「くそう！　またやられた！！　もうみんな嫌いキラーイ！！」

「こーら！　姫？　くそうなんて言っちゃ駄目だよ」

「あはは。ごめんごめん。嫌いにならないでねシラユキ」

なる訳無いよ！　もう！

早くこういうからかいの言葉を簡単に受け流せるような大人になりたいよ……

キャロルさんも緊張してるだけで、多分こんな会話普通に流せちゃうよね。

「あー、疲れた……。クレーアさん強すぎっしょ。ホントにメイドさん？」

「クレアと呼び捨てにしてくれていい。しかし、さすがはＡランク最上位だな。私もまだまだ修行が足りないか……」

入り口からキャロルさんとクレアさんの声が聞こえてきた。どうやらお話も終わって戻ってきたようだ。

……強い？

体の向きを部屋の入り口に向け、見てみると……

「く、クレアさん!?　キャロルさん!?　ど、どど、どうしたの!?」

体中傷と血だらけ、服もボロボロになった二人が立っていた。

その８０（後書き）

すみません、まだまだ続きます……

今回やっと５０ｍの範囲云々の嘘バレができました。
あの時の他キャラの反応を読み直してみると気づけ……ないかもしれない。

１０月６日
フランのセリフを一つだけ修正しました。

その８１

「なっ、ど、どうしっ、何があったの!?　うわ！　うわわ！　お、大怪我!!」

走り寄って、近くで見てみると本当にひどい怪我だ。
かすり傷と小さな切り傷はそのまま、既に血は止まり、固まっているようだ。手足には包帯。内出血なのか、痣も所々に見える。包帯を巻くほどの怪我っていう事だよね……

「ひ、姫様?　落ち着いてください。この程度の傷、どうと言う事はありません」

この程度じゃないよ！　大怪我だよ!!
!?

クレアさんの声に顔を上げてみると。

「な、あ……、嘘!?　か、顔！　顔にまで!?」

右の頬にガーゼのような物が貼られていた。
血の色が滲んでいる、結構な出血があったんだろうと思う。

クレアさんの綺麗な顔に傷!?　ふ、深いの!?　まさか！

「ど、どうしよう!!　クレアさんの顔に傷が残ったら……」

「姫様、どうか落ち着いてください。クレア、キャロ、模擬戦です

か？　随分と白熱したようですが……、せめて汚れを落とし、着替えてから戻ってきなさい。姫様に血を見せるとは、どういうつもりですか……」

「う……、確かにそうだな。姫様、申し訳ありません」

「そ、そうだった！　ついいつもの気分で……。すみませんシラユキ様！」

静かに怒るシアさんの言葉に、今気づいたとばかりに謝る二人。

も、模擬戦？　え？　なにか大きな事故でもあったんじゃないの？

「クレアさんとキャロルさんが、た、戦ったの？　なんで？　なんでそんな……。怪我までして……」

「シラユキ？　あれ？　大丈夫？　ちょ、ちょっと二人とも、早く着替えて来なさいよ。子供に見せる姿じゃないわよそれ！」

「わ、分かった。姫様、失礼します。すぐに戻りますので」

「や、やっちゃったー……。わ、私も行ってきます！」

呆然とする私に気を使ってか、フランさんが二人を追い出す。

「姫、席に戻ろう？　まったく、あの二人は何考えてるんだか……」

メアさんに手を引かれ元いた席へ戻る。

二人とも凄い怪我だった……。あれがただの模擬戦でできた傷なの？　包帯の下は一体どんな……

「姫様、紅茶をどうぞ。急にあんなものを見せられて驚きましたよね。心中お察しします。ですが、今は何も考えずに、まずは落ち着いてください。あの二人でしたら本当に大丈夫ですよ。クレアの顔の傷も残るような事はありませんから。どうか、安心してください。見た感じですが、そこまで酷い傷は無いようでしたから」

出された紅茶を一口。まずは落ち着こうか。

何も考えるなって言うのは難しいけど、クレアさんの顔の傷は綺麗に消えるんだよね。それだけでも分かって安心だ……

「恐らくは、クレアがエネフェア様を通じてキャロに申し込んだのでしょう。キャロはクレアと同じく近接がメインの戦闘スタイルですからね。武器を見て血が騒いだ、とでも言ったところでしょうか。まったく野蛮な……」

「模擬戦なんだよね？　本気で喧嘩した訳じゃないよね？」

「ええ、お互いある程度は本気を出していたとは思いますが、必殺の一撃の様な攻撃を繰り出すのは避けていた筈ですよ。実力を確かめ合い、長く打ち合うのが模擬戦の主眼ですからね」

それでもあの大怪我か……

血はともかく、怪我なんて見慣れるほど見た事も無いからね、焦っちゃったよ……

何気に初めてなんじゃないか？　父様と魔法撃ち合ってる人たちもかすり傷程度だったし……

「喧嘩とか表現が可愛い……。はいはい考えない考えない。本の続きでも読んでなさいって」

「う、うん。そうする……」

二人が戻るまで本を読んで落ち着こう。

笑いを誘う内容の本でよかったよ。『世界の刃物大全・巻のニ』を手に取らなかった私を褒めたい。

「失礼します、クレアです。姫様は落ち着かれましたか？」

「し、失礼します……。シラユキ様は大丈夫、そうだね」

地面に大の字でうつ伏せに寝そべり、土を操作して動かす、と言う魔法の説明のページで盛大に噴き出したところで、二人が戻ってきた。なんてタイミングだ！！

二人を見てみると、クレアさんはいつものメイド服、キャロルさんは何故か、可愛らしい白のワンピースを着ていた。

さすがに包帯やガーゼはそのままだが、やはり綺麗な服に着替えたおかげで、殆ど気にならなくなっていた。

「きゃ、キャロルさん可愛い！！」

「うわ、ホントに可愛い。冒険者なんて辞めちゃえばいいのに……」

「やっぱコレは手放したくないね。ウルギス様に言ってちょっと強引にメイドになってもらっちゃおうよ。シラユキもそれがいいよねー？」

「うん！！」

「え、ええ！？」

可愛さに絶賛、そして怪しい企みを始めるフランさんに驚くキャロルさん。

「そうなってしまった場合、クレアが毎日模擬戦を仕掛ける事になりますが。きっとお互い生傷の絶えない毎日でしょうね、姫様はどう思われるでしょう？」

「さすがにそれは無いぞ、と否定できればいいんだが……。できんな」

クレアさんはバトルマニアなのか！　こ、怖いわー！　やっぱりクレアさん怖い人だったわー……

「ま、毎日アレはきっついわ……。シア姉様、クレアは何者なんです？　やっぱり王家に仕えるメイドともなると、特別な家柄の者だったりするんですか？」

「私はあなたの服装の方が気になりますけどね。姫様に対抗意識でも燃やしてるのですか？　身の程を知れと言ったでしょう」

私も毎日ワンピースだからね。動きやすいし、可愛いし。
外出する場合は短めのスカートにするんだけどね。高速で走る場合、長いスカートは邪魔になってしまうのだ。
最近はスパッツ無しで、スカートの中を見せないようにする、と言うメイド技術の訓練をシアさんにさせられている。
全力で覗きに来るシアさんはちょっと怖いが、意外に楽しい訓練だったりもする。

「これはカイナさんが無理矢理……。シラユキ様は成長が遅いからまだ当分必要無いから、って何着も押し付けられて……、はっ!?　ど、どうなのよクレア!?」

思いっきり聞こえてたよ！　それ私のだったのか!?　でも可愛いからよし!!

「特に特別な家柄、という訳では無いな。両親とも私より強いのは確かだが、普通に畑仕事をして暮らしているぞ？　私は子供の頃からエネフェア様に仕えるために鍛錬を重ねて来たんだが、やはりまだまだのようだな」

両親とも私より強い？
クレアさんってAランク上位並の強さじゃなかったっけ？　え？
農家の人だよね？
ああ、西瓜貰った事あるわ、あの人たちか。……本気で怖いんですけど!!!

「り、リーフエンドのエルフってどんだけよ……。Aランク最上位とか言われて、ちょっといい気になってた自分が恥ずかしいわ……」

「いやいや！　この国のエルフがみんな強いわけじゃないから！」

「そうだよ。私ら弱いよ？　攻撃魔法なんて使えない、事も無いけど、強くないよ？」

やっぱりフランさんは使えたか。多分強いよこの人……。コーラスさんの妹だよ？

「クレア程の実力となると、そうはいないと思いますよ。まあ、表に出ず、静かに暮らしている方々の中には、私クラスの方もごろごろしているでしょうが……」

「シアさんクラスって……、シアさんSランクだったんだよね！？」

その強さの人がごろごろ……？　え？　本気で世界取れちゃうよこの国。

「さすがに冗談です。ですが、クレアより強い方も、そこまで珍しくないくらいにはいると思いますよ」

「す、凄い国だ……。噂は噂かと思ってたけど、やっぱり本当の事なのかー……」

噂？　冒険者の噂かな。

冒険者の間でこの国はなんて言われてるんだろう。ちょっと気になるね。

「それって、どんな噂？」

「噂話と言うより、世界の共通認識と言った方がですね。各国の王

家にも伝えられている筈ですよ」

「リーフエンドには手を出すな、ですね。他の国の冒険者ギルドでは、登録時にまずそれを誓わされますよ。私も登録時に。何をおいても守るようにと何度も聞かされました」

ぎ、ギルドで誓わされるんだ。触れたら爆発する爆弾扱いですか、私の国は……

「私の登録時はもっとひどかったんですよ？　エルフに手を出した愚かな種は滅ぶと思え、でしたね。今では幾分かマイルドな表現になっているようです。私たちはエルフですから、あまり関係の無い話でしたけどね」

種ごと!?　人間が何かしたら人間種族が滅ぼされるって事？　しかも国じゃなくてエルフ全員が対象ですか！

「すみません、少し口が軽くなってしまったみたいですね。姫様にお聞かせするような話ではありません、話を変えましょう。クレア？　キャロと打ち合ってみてどうでした？　弟子の成長は私としても気になるものですので」

「ひい！　クレア、変な事言わないでね……」

むう、あっさり話しを変えられてしまった。

私も、こんな風にみんなの興味を引ける話題に、パッと変えられるようになりたいね。そうすればきっと、からかわれループが続くのも減らせるはずだ……

「あの質量の武器と打ち合うのはさすがに無理だったな、避けるしかなかった。受け流す事も難しいな……。よくもまあ、あそこまで自在に振り回せるものだ。あれだけの重量の武器を二つも持って出せる速度じゃないぞあれは……。加えてこの体の小ささだ、やり辛いと言ったらありはしない。正面に立つと分かるが、自分が肉片に変わるイメージしか出て来なかったぞ」

速い重い強いの三拍子ですか。さらにそこに小さいが加わり最強に見える、と。

イメージできないなー。肉片になるじゃなくてね？　あの武器を二つとも持って走り回るって事の方ね。

「なるほど、さらに精進した様ですね。当然の事なので褒めたりはしませんが。姫様、ラルフさんとお話した武器の振るい方の話を覚えていますか？」

ラルフさんと話した？

「ラルフさんはあの剣を魔法の補助を入れて振ってるんだっけ？　キャロルさんも同じなのかな」

「はい。魔法の補助、と言うよりは……、魔法で動かしている感じですね。どちらかというと手の力の方が補助に近いです、説明は難しいですね」

なるほどね、操作系の魔法で動かしてるのか……。あのサイズを片手で？　しかも二個同時に？

「キャロルと比べるとはるかに、と言いますか、比べてしまうと哀れに思えるほどのの差があるのですが、そうですね。使い方として

は同じです」

う、うん……。武器のサイズから見てそう思うよ……

「ラルフさんの場合は魔力が尽きたら終わり、という欠点があります。それでも今まで問題なく使って生き残っているところを見ると、両手剣を操作する事に特化した才能があったのでしょう。しかし、キャロは違います。この子は」

「ま、待って待って！　冒険者の人の戦い方、と言うか、手の内を明かしちゃ駄目なんじゃないの？」

淡々と説明してるからつい聞き続けちゃったよ！　これは普通聞いちゃいけない事のはずだと思うんだけど……

「キャロでしたら問題ありませんよ？　信用の置ける者同士の場合は、連携を取るために手の内を説明する事もありますからね。それに、知っておいた方がもし敵対された時に」

「ならないよ！？　ラルフさんもキャロルさんもお友達だからね！？」

「そうでしたね。姫様ならどちらも一撃で仕留める事ができますから、必要の無い情報でしたか。お耳汚しでした、申し訳ありません」

綺麗にお辞儀をするシアさん。

「一撃！？　えっ？　シラユキ様？」

「できないよ！　でき……、る？　し、しないよ！？」

「できちゃうんだ？　姫こわーい」

「防御不能で回避も難しいんだっけ、シラユキの魔法って。シラユキこわーい」

「私は避けられますよ？　ですが、怖い事には変わりありませんね。ふふ、姫様怖いです」

「きゃ、キャロルを一撃ですか。なんと末恐ろしい……」

「十二歳で既に私を一撃できちゃう強さ！？　り、リーフエンドは本当に怖い国だった……」

「怖いのはシアさんのポジションなのに！！！」

その８１（後書き）

１０月６日
フランのセリフを一つだけ修正しました。

その８２

その後しばらく、私とキャロルさんをからかいながらの会話は続き、おやつも食べ終わったところでキャロルさんは町に戻って行ってしまった。

もう何日か泊まって行ってほしかったのだが、いくらシアさんのお弟子さんとは言え一介の冒険者が王族の住まう家に長々といる訳にもいかない、という事らしい。

私たちは誰も気にして無いんだけどね、キャロルさんが緊張しすぎで倒れちゃいそうだし、しょうがないのかなと思う。

リズさんとライナーさんにも、調査の依頼をした形だから、お礼など色々することもあるらしい。こっちに呼んじゃえばと言ってみたものの、やはりエルフ以外は森に入れてはいけないようだ。残念。リズさんメイド化は無理か、本当に残念だ。だがしかし、キャロルさんメイド化計画は諦めない。

後日冒険者ギルドでまた会う約束はしたのだけれど、ちょっと寂しいね、家族が一人増えると思ったのに。しかも私の最大の理解者になってくれそうだったのに……！！

「まあ、よかったんじゃないのかな？　だってね、姫、シアを取られちゃうかもしれないんだよ？　それは嫌でしょ」

うじうじしてた私に気を使うように、メアさんが言ってきた。

「シアさんを取られる？　どういう事？」

「ありえませんね。いくら可愛い弟子と言っても、姫様以上の存在足りえるなどあろう筈が無いでしょう？」

メアさんが意味を答える前にシアさんが完全否定してしまった。

なるほど、そういう事ね。

「多分シラユキに遠慮してたんじゃないの？　ホントはもっと甘え、って、やっぱ無いわ。メア、キャロル三百歳だよ……」

正確には三百四十歳以上か。誰かに甘えるっていう年齢じゃないよね。

「そ、そうだった！　忘れてた……。姫よりちょっと上くらいにしか見えないからしょうがないよね……」

「メアとフランの年齢を足してやっと同じくらいですね。クレアとカイナも確か同じくらいの筈ですよ。キャロは少々精神的に幼いと言いますか、年相応に見えなくても無理は無いかもしれませんね」

クレアさんとカイナさんも三百歳くらいか、それは知らなかったな。てっきりシアさんと同じくらいなんじゃないかと思ってたよ。

「エルフや竜人など、長寿命の種族は精神年齢が外見に引っ張られる様な感じですね。いくら大人ぶろうとこの外見ではどうしようも無いだろう、と達観しているのでしょうか？　姫様も成人するとお分かりになれると思いますよ」

「なるほどねー。私もキャロルさんくらいで成長止まりそうだしね

……。止まらないよ！？　思いっきり納得しちゃってたよ！　さ、さりげなく言ってくれちゃってもうー！！」

諦めない！　絶対にだ！！

一番背の低いメアさんでも１５０以上は余裕であるからね。せめてメアさんと同じくらいには……！

「姫はずっとそのままでいて欲しいな。変な意味じゃ無くてね？子供のままでいてほしい、っていうのも違うか」

「そうだね。何百年経っても私たちが側にいるから、ずーっと甘えてよ」

あれ？　ちょっとしんみりとした空気になってしまった。

「メアさんフランさん……。ずっと子供のままは嫌だけど、私も、何百年でも一緒にいたいな」

何百年でも、何千年でも、ずっとね。

「二人が言いたいのは、何百年先でも子供の感性のままでいて、私たちにからかわれてください。という意味なのですが……、本当によろしいのですか？」

「え？」

「あ、ちょっとシア！」

「な、何言ってるのよ！！　まあ、あってるんだけどね……」

あってるのか！　まったくこの二人はー！！

「姫様ご安心ください、私は一生お側にいます。姫様をからかうのは私の大切な、とても大切な生きがいの様なものですから」

「変な生きがい持たないでよ！！　三人ともからかうの禁止ー！！」

「無理」

「え？　嫌よ」

「姫様の命と言えども、それだけは頷く訳には参りませんね……。お諦めください」

お前は何を言っているんだ？　と言う反応を返されてしまった……。ひどい！　ひどいわ！

「くううう、くそう！　負けるもんかー！！！」

いつもはお姫様扱いするくせに、こういう時はただの子供扱いするんだから！！

「コラ！　姫、最近言葉遣い悪くなってない？」

「冒険者ギルドに通い始めてからよね……。私もちょっと気になってたのよ」

あれ？　二人の顔から笑みが消えた……？

「それだけ私たちに気を許して頂いている、という事なのでしょうけど……。さすがにもう放置してはおけませんね」

「え？　シアさん？　な、何？　だ、大丈夫だよ？　ちゃんとおしとやかにも話せるよ？」

こ、これくらいいいじゃない？　ルー兄様だってかなり言葉遣い悪いと言うか、荒いときもあるよ？

「おしとやかにも、じゃ駄目なのよ。無意識にくそうなんて言葉が出るのはお姫様としてちょっとね……」

「ねえ、シア？　ギルドに通うのは控えさせた方がいいんじゃない？　むしろやめさせた方がいいかも」

「え？　ええ！？　そ、それはやだよ！！　キャロルさんとも約束したし！」

確かに冒険者ギルドに通うお姫様はいないわ……
でも私はもっとお友達が欲しいのよー！

「姫様、しばらくの間は控えましょう。キャロルはこちらに呼び出しますからご安心を。ウルギス様にもご報告を入れますからね？　エネフェア様にも叱って頂きましょうか」

「母様に！？　それはちょっと嬉しいけど……。ううう……、分かったよう……」

お姫様だもんね、しょうがないかー……

父様は大丈夫そうだけど、母様には少し怒られちゃうかな？

「エネフェア様に叱られるのが嬉しいとか、ホントに姫はエネフェア様のこと大好きだよねー」

「シラユキの前じゃ本気で怒る事なんて無いしね……。まあ、強く叱られるなんてないだろうから、大人しく怒られて来ちゃいなさい」

そういえば、リズさんがシアさんのことを聞いてきたときの母様はちょっと怖かったかな。

物言いは普段と全く変わらないんだけど、殺気と言うか、重圧と言うか、本当に辺りの空気が重くなる感じがするんだよね。あ、シアさんがライナーさんを追い払おうとしてたときもか……

おっと、この考えは怖くなりそうだからやめよう。

「リーフエンドで一番強いのはウルギス様だけど、一番怖いのはエネフェア様なんだよ？」

「え？　父様じゃないの？　父様は昔は凄く怖い人だったんだよね？」

今ではすっかりいいお父さんなんだけど、昔怖い人だったとか想像すらできないよ。

「ウルギス様は各国王家で知らぬ物は居らずの最強のハイエルフですからね。一夜で大都市を滅ぼした逸話は語り継がれていると……、失礼しました」

失言とばかりに謝って、話をやめてしまう。別にそれくらいならいいのに……

「私もそれは聞いた事はあるんだけど、うーん……？」

「私たちから見ても全然怖そうには見えないよね。子煩悩のパパさんにしか見えないってアレは」

「アレ扱いはやめなさいって。エネフェア様が産まれてからは大人しくと言うか、優しくなったのかな？　私はそう聞いてるよ」

おお、何か面白そうな話だねそれは。

母様が産まれてかからは大人しく？　んー？　母様が産まれるまでは国外を歩き回ってたんだっけ。暴れ回ってたとも言うのかな……

「ふふ、愛する方が出来ると人は変わるものなのですね。恋は人を変える、とはよく言った物です」

「レンの場合はシラユキのおかげ？　あ、今でも怖いままか。あはは」

「失礼な。ですが、私も変わったのでしょうか、ね」

「うんうん。でもさ、姫と一緒にいればどんな怖い人だっていい人に変わっちゃいそうだよね」

私を撫でながら言うメアさん。

「ううう、恥ずかしいよ……」

これは可愛い可愛い言われるよりずっと恥ずかしい！

「照れちゃってー。可愛いなーシラユキは。私も撫でよう」

「それでは私も失礼して……」

メイドさんズ三人に三方向からの撫で攻撃を受けてしまった。なにこれ幸せすぎる。

結局母様が一番怖いという話は聞けなかったが、まあいいや、気にしないでおこう。

明日はお説教かな？　嬉しさ半分怖さ半分、微妙な気持ちだね。

お姫様らしく。お姫様らしくか……、私にはちょっと難しいんじゃないかな……

その８２（後書き）

１０月６日
フランのセリフを一つだけ修正しました。

その８３

「くそう？」

「くそう、です」

「くそう、か……」

翌日早速父様母様の前に連行されてしまった。美形三人でくそうくそう連呼しないでよ……

「ふむ……。まあ、それくらいはいいんじゃないか？　いや、良くは無いんだが、シラユキはまだ子供だからな。子供のうちくらいは大目に見てもいいだろう？　本質は礼儀正しい良い子じゃないか」

さすが父様、分かってくれている。

か、母様は……？

「私もいいと思うんだけれど、ね……、くそう、はちょっと……。ねえ、ウル？　私たちは実際に、シラユキの口から直接聞いた訳じゃないからそう思っちゃうのかもしれないわよ？　バレンシア、正直に答えなさい、貴女はどう思う？」

あ、これは私、終わったな……

明日からお姫様っぽい言葉遣いを習わされる事になるのか……

「姫様は大変可愛らしいと思います」

「そういう意味じゃないよ!?」

キリッ！　とか付いてたよ今の。

父様母様、それに私の緊張を解くためのボケなのか、本心からの行動なのかは今ひとつ分からないが、場の空気が緩くなった気がする。さすがシアさんだ。

「失礼しました。個人的には自由奔放、元気に我侭に子供らしく成長して頂ければ、と思います。お世話のし甲斐もあるというものです。ですが、やはり言葉遣いは別でしょうか。他の国の王族のように無駄に偉ぶった喋りではなく、そうですね……、裕福な家庭のお嬢様程度の淑やかさは身に付けて頂きたいですね。確かに冒険者ギルドに通うようになってから、極々たまにですが、ちょっとした口調の悪さが気になる事があります。姫様には申し訳ないのですが、しばらくギルドへの訪問は控えた方がよろしいかと」

冒険者の人とお話しすぎたのかなあ……。でも、口の悪さが移る、なんて事あるのかな？

うーん……、どうしたものか……

このままだと本当に冒険者ギルドへ遊びに行くことを禁止されてしまいそうだ。

「俺たちの前では、そんな気になるような言葉を口に出した事は一度も無いんだがな。それはどうしてだ？」

「お二人の前では、姫様も変に大人ぶることなく、年相応の子供らしく振舞っているからでしょうか？　私たちはやはりメイドです。下に見ている、とは言い過ぎですね、すみません。恐らくは兄弟姉

妹のように気安く接して頂けているのではないかと」

シアさんは私の事を本当によく見てるんだなー。

うん、みんな家族。メイドさんズもみんな、とても優しいお姉ちゃんたちだね。

「確かに私たちに対する甘えっぷりは凄いからね。完全に気が抜けている感じかしら？　それじゃ、ルーとユーネにはどう？　私から見ると問題無い様に見えるのだけど」

「はい。ルーディン様ユーフェネリア様に対しても特に問題は無いと思います。大きな声でツッコミを入れていることはよくありますが、お二人とも成人された年上の兄姉ですからね、まだ甘えの方が強いでしょう」

ツッコミを入れるのは変な事言うからだよ……

私に対する過保護が主な原因なんだけどさ。あれは突っ込まない訳にはいかないよ。

「貴女たち、メイドたちとあとは外の冒険者に対してのみなのかしら。それはちょっと……、複雑ね。……うん？　ウル、それってやっぱり……」

シアさんの言葉を聞き、母様は少しだけ考えて、何かに気づいたように話し出した。

「あ、ああ、そうだな。しかし言っていいものなのかこれは……」

父様も何かに気づいたのか、何かに納得したのか、しかし言いよどんでいる。

「言って、父様。わ、私が悪いんだよね？　ギルドに行くのも我慢するから……」

何を言われるのか分からないが、覚悟はしよう。この優しい両親からの、初めての本格的なお説教になるのか。ああ、大泣きしそうだ……

「シラユキ、そんな顔しないで？　多分、いえ、ほぼ確実ねこれは。あなたは悪くは無いわ、安心していいわよ」

「うむ、間違いないな。バレンシア、メアリー、フラニーハナルスヒアメアロ。三人ともこっちへ来るんだ」

私は悪くない？　へ？　え？　今のフランさんの本名だ！　一瞬なんの魔法の詠唱かと思ったよ……

「！？　は、はい……」

「え？　ははははい！！」

「うえ！？　わ、私もですか？　名前全部で呼ばれるって事は……、やばい？」

三人が父様の前へ並ぶ。

メアさんフランさんはいきなり呼ばれて大慌てだ。

まさか、三人のせいにするって事!?
しまった！　メイドさんズは私の教育係も兼ねてるんだった!!
私がちゃんとしてないと、この三人の責任問題になっちゃうのか!?

「だ、駄目！　父様駄目ー!!　三人は悪くないよ!!　わ、私が悪いんだからね？　人のせいになんてしたくないよ……」

「シラユキは少しだけ大人しくしてなさい。すぐにその考えも変わるからね？」

父様を止めようと前に出ようとしたら、母様に抱きとめられてしまった。

「母様！　……え？」

ど、どういう事？　まさか、メイドなんていうのはそんなものとでも……、言う訳無いか。
母様の言うとおり、少しの間大人しく成り行きを見守ろう。

「まず最初に言おう。悪いのは主にお前たち三人だろう」

!?
だ、駄目だ、落ち着こう……

「冒険者の言葉遣いが少なからず影響しているのは間違いない、がだ」

三人は完全に固まっている。
多分父様がメイドさん、家族に対して怒る、なんていう事は今ま

で無かったんだろうね。メアさんは既に半泣きだ。

駄目だ、もうこれ以上見てはいられない！

「父様……、お、お願い、やめて。私が、私が悪いのになんで……」

「まったくこの子は優しいんだから……。ウル、もったいぶらないで一言で済ませてあげて。シラユキが泣いちゃうし、あなたも嫌われるわよ？」

「何！？　そ、それはいかん！！　よし、一言で説明するぞ。お前たちはシラユキをからかいすぎだ」

父様を嫌いになるなんて……、なんですって？

「え？　か、からかいすぎですか？」

「あちゃー……。話の流れからそうなんじゃないかなとは思ってたけど、やっぱりかー……」

メアさんは言われた意味が分からない様だが、フランさんは大体の予想は付いていたようだ。

シアさんは黙っている。どうしたんだろう？

「お前たちが無闇やたらとからかわなければ、シラユキも声を荒げる事など早々無いだろう？　つまりはそういう事だ」

あ、ああ！！　なるほどね！　そういう考え方もあるのか！！

「ど、どうしよう……。私はそんなつもりじゃ……」

「し、シラユキー、タスケテー」

フランさんが小声で私に助けを求めている。

ふふふふ、どうしたものかね……

「ああ、心配するな。悪気があっての事ではないというのは分かるさ。シラユキ可愛さからの行動というのも分かっている。ま、少しやり過ぎたな」

「す、すみませんでした！！」

「うう……、ごめんなさい。シラユキの反応が可愛くってついつい……」

おっと、フランさんは大丈夫そうだけど、メアさんは気にしちゃってるっぽいね。そろそろフォローを入れなければ。

「大丈夫。父様も母様も、もちろん私も怒ってないよ。からかうのはちょーっと控えてほしいけどね」

「ごめんね、姫。私たちやり過ぎちゃってた？」

「ううん。でも、たまに、ちょっと、ね？」

「うわー！　ごめーん！！　い、今のはウルギス様の言葉より効いたよ……」

「あはは……。私もごめんね、シラユキ。……レン？　どうしたの？」

そういえばシアさんずっと黙ったままだね……

まさか、また変な事考えて自分を責めてるんじゃ！？

「シアさん？　シアさーん！」

「は、はい……？　姫様……」

何かシアさん、茫然自失と言うか、心ここにあらずと言うか……、どうしちゃったんだろう？

「お二人は……、姫様は……、私から、生きがいを奪うおつもりなのですか……？」

はらはらと涙を流すシアさん。

そこで泣くの！？　大袈裟すぎるよ！！！

「ば、バレンシア？　泣かないで頂戴……。貴女の生きがいって、この子をからかう事、なの？」

「はい、私の存在理由を否定された様で……。しかし、私の生きがいが姫様を苦しめることになっていようとは……」

「存在理由とはまた……。少しくらい控える事はできないのか？」

無言で首を振るシアさん。

少しでも減らすと死んじゃいますと言った顔だねこれは……

はあ……、仕方ないか。シアさんのこんな顔は見ていたくないからね。

「もう……、今まで通りでいいよ。シアさん辛そ」

「あ……、この子ったらまた……、ふふふ」

「え？」

母様が呆れた様に笑う。

「はい！　今まで通りですね、分かりました。大変心苦しいのですが、姫様たってのお言葉とあれば断るという選択肢はありませんね。メア、フラン、いいですね？　姫様直々の命です。今まで通り、今まで通りですよ」

「シア……、さすがにそれは無いよ……」

「駄目よメア？　シラユキはお姫様。ちゃんと言う事聞かなきゃね」

「あるぇー！？　なんか前にもこんな事なかった？」

「気のせいではないですか？　ですよね？　フラン」

「うん。気のせいだと思うよ」

「あはは……。うん、気のせいだよ、姫」

くそう！　やられた！！　心の中でくらい悪態つかせて！！

「くっ、くくっ。シラユキがそう言うのなら、俺たちからはもう言える事は無いな」

「ふふふ。ええ、そうね。シラユキ、しっかりからかわれなさい。でも、下品な言葉は使っちゃ駄目よ？」

「あれ！？　やっぱり私に来ちゃうんだ！？　分かったよ！　これからは上品にツッコミを入れるよ！！」

父様母様に笑われてしまった。

ええい！　二人が笑顔ならもうそれでいいや！！

冒険者ギルドへも今まで通り行ってもいいそうだ。それだけが救いか……

いいもんいいもん、私が荒い言葉を使わなければいいだけのことだもんね。お姫様なんだからしょうがないよね……

どうしてこうなった！！！

その８４

「それでは、私たちは見ているだけ、フォローも入れません。いいですね？　しっかりとお役目を果たしてください。ええ、まさに命を懸けて」

「命懸け！？　ふぉ、フォローは入れてくださいよ……。バレンシアは私より年上じゃないですか」

「いつもはエネフェア様の側で普通にしてるのに何でシラユキの前だと緊張するのよ？　シラユキはお姫様だけど、ホントにただの子供だよ？」

「そ、それとこれとでは違うんですっ。フランはもうちょっと王族の方々に敬意を払ってください。口調の軽さが目立ちますよ？」

「あはは、やぶ蛇だったねフラン。確かにフランってエネフェア様の前でもあんまりと言うか、全く変わらないよね。それは凄いよ」

「んー、楽にしてくれって言われてるんだからいいんじゃない？一応エネフェア様とウルギス様と話すときはちゃんと敬語で話してるんだし、そんなこと気にしないでよ。それよりほら、シラユキの相手してあげて」

「え、ええ……、分かりました」

やっとメイドさんズ四人の話し合いが終わったようだ。

そう、今この部屋にいるメイドさんズはいつもの三人ではなく、四人なのだ。

「私が分からない所、気になった所を質問するだけだから大丈夫だよ。よろしくね、カイナさん」

今日の読書のお相手はなんと、カイナさんです！！

カイナさんは胸に手を当て、大きく深呼吸を一つした後。

「は、はい！　よろしくお願いしましゅ！」

盛大に噛んだ。

以前クレアさんに一度だけお相手してもらった事を聞いたんだろう。それを羨ましがっての行動かな？

私と仲良くなろう同盟を組んでいる二人だし、クレアさんの行動が抜け駆けに見えてしまったのかもしれない。

母様を通してのお願いだと言うから何かと思えばそんなこと、こっちは毎日来てくれても構わないのにね。

クレアさんのときと同じ様に、どんなお話が出来るのかとかなり楽しみだ。

椅子に座り、カイナさんがその横に立つ。まだちょっと緊張してるね、とりあえずは読んでみて何か質問を投げかけてみよう。なんとかこの緊張を解いてあげたい。

シアさんが選んでくれた本に目を落とす。
今日の本のタイトルは『お姫様になろう・初心者編』。ふむ、お姫様を目指す初心者向けの本、かな？

……！？

「何この本！？　しかも絵本だこれ！！　私ってやっぱり駄目お姫様なんだ！　こんな絵本に頼らないといけないくらいの駄目お姫様なんだー！！！」

あああああ……、何か凄いショックだ……。こ、ここまで駄目なお姫様だったのか私は……

「す、すみません！　申し訳ありません！！」

「何でカイナさんが謝るの！？」

何故かカイナさんに全力で謝られてしまった。

「いきなり躓いちゃったよ……」

「また変な本持ってきて……。シア、フォローしてあげてよ」

「まったく……、姫様はどうかお気になさらずに、深く考えずお読みください。カイナ、貴女は姫様の質問に貴女なりの答えを返すだけでいいんです。たったそれだけの事ですよ？　もっと気を楽にしてくださいね」

「命懸けとか言って無駄に緊張させてたのはシアさんじゃない……」

「わ、分かりました。では、姫様、読み進めていきましょうか。何かしらためになる内容が書かれている本なのかもしれません」

そ、そうだ！　ちゃんとしたお姫様になるためだ、絵本とは言え馬鹿にしてはいけない。

あのシアさんが選んだ本だ、必ず私を立派なお姫様まで導いてくれるに違いない。と信じたい！

頑張るぞと決意し、本を開く。

なになに……、『ステップ１　王族諸兄とお近付きになろう』、か。ふむ……？

「そう言う意味のなろう！？　の、伸し上がるの？　成り上がるの？　わ、私にこれを読んでどうしろって言うの！？」

「ひ、姫様、落ち着いてください。その絵本は、一般庶民が王族の側室、そして王妃へと成り上がる方法を描いた、大衆向けの娯楽書籍ですね。面白おかしく書かれた内容に笑いながら読んでいけばいい、と思いますよ」

今のどうよ！？　とシアさんの方へ顔を向けるカイナさん。

そうだそれでいい。と、ゆっくり頷いて答えるシアさん。

なにその掛け合い面白い。カイナさんこんな面白いキャラだったのか。

よし、そうと分かったら気楽に読み進めて行こう。でもこれを読んでどんな質問をしたらいいんだろう……

王族諸兄のような方々とお知り合いになるためには、まずは女を磨く事が重要です。ふむふむ。

女を磨くのに最適なのは男性との熱い一夜、これに限ります。激しく愛し合いましょう。ふむ……？

若さを武器に毎晩違う男性に抱かれましょう。勿論抱かれるだけではいけません。こちらからも奉仕する……

「ステップ1から全力でアウトだよ!!!　シアさん！　わ、私にこれを読めって言うの!?」

ステップ1でこれか!!　この先読み進めていったらいったいどんな内容と挿絵が……、ごくり。どれどれ続きは……

「いけません！　姫様には後千年早いです！　バレンシア！　姫様になんて物を読ませるんですか!!　こここんな、男性との……、なんて!」

カイナさんが真っ赤になって、横から本を奪い取ってしまった。

むう、続きが……、こほん。別に残念とか思ってないよ……？

しかし、この反応、この反応が普通なんだよね!!　何故か新鮮に感じてしまうんだけど……

でも千年は無いわ。

「その程度で何を……。姫様はともかく、貴方は三百以上ですよ？まったく、情けない……」

「何を言ってるんですか！　そういう問題じゃありません！　こういった、その、アレは、愛し合い、結婚する方とのみすることです！！」

「そうだよ！　さすがにこの内容は無いよ！！　カイナさんは分かってる！！」

素晴らしい、素晴らしい考えだ。

「愛し合う？　結婚？　男性とまともに会話もできない貴女の言えたセリフですか」

鼻で笑うように言うシアさん。

今の言い方はちょっとひどいんじゃないかな……

あれ？　もしかして読書のお相手役を取られた事を根に持ってる？

「う……。だって、男の人って、何か、怖くないですか？」

「う、うん、何となく怖いよね。私はシアさんが隣にいるから大丈夫なんだけど、一対一は絶対無理。泣いて逃げ出しちゃうよ」

「姫様凄いです……。私はウルギス様とルーディン様の前でも緊張してしまうのに……」

父様と兄様はカッコいいからね、しょうがないよ。さらに王族だしね……

でも、そうなると……

「男の人とお付き合い、とかした事無いの？　カイナさん美人だし、

告白とか何度もされてそうな気がするんだけど」

「おおおお付き合いだなんてとんでもない！！　告白は、その、実は何度かされたことはあるんですが……、どうしても怖くなって、謝って逃げてしまったんです。あのクレアですら恋人がいるというのに、情けないですね……」

あらら、もったいない、のかな？　カイナさんクラスの美人さんなら選り取り見取りで選べそうだし、そうでもないのかも。

って！　クレアさんバレちゃってるよ!?　まさか、みんな知ってバレてない様に振舞ってるだけなのか!?

カイナさんってこうやって話してみると、何か、可愛らしい感じの人だね。

私と考え方も似てるんじゃないのかな？　こんな素晴らしい人が近くにいた事を今まで気づかなかったとは……

これからは母様に甘えるだけじゃなくて、カイナさんクレアさんと話すためにも執務室に行くようにしよう。

「姫様にはカイナの様な大人の女性になって頂きたいですね」

カイナさんみたいな大人？

じーっと見てみる。

背はクレアさんと同じくらいだよね、１７０近くはありそうだ。

髪は肩まで伸ばしてるんだったかな、それを後頭部でまとめている。

短いポニテの様な感じか。仕事のできる大人の女性って雰囲気がい

いね。胸は身長に見合った大きさだ。もげろ。
この見た目でこの可愛らしい性格か……。さすが母様お付のメイドさんズの一人だね。

「私もカイナさんみたいな綺麗な大人になりたいなー」

「私は逆に、姫様の様な可愛らしい外見に憧れます。背がもう少し低ければと何度思ったことか……」

何その贅沢な望みは！
カイナさんの身長を下げて、その減らした分私にプラスする魔法でも作れないものか……

「そうなったらレンに襲われるよ？　よかったね背が高くて」

「さすがにそれは……。もうそれでも……？」

「カイナさん駄目！　気を確かに持って！！」

「何を馬鹿なことを……。私は姫様一筋だと何度も言っているでしょう。私が言いたいのは……」

私だけに信じてもらえればいい、と言う言葉通り、シアさんは女性好きと思われても特に反論しなくなってしまった。
でも、毎回そこで私一筋とか言うのはやめて欲しいんだけど……

「お付き合いや結婚どころか、男性とまともに会話もできず、逃げ出してしまうような大人になって頂きたい、という意味です」

「嫌だよ！！　私だって大人になったら恋愛の一つくらいしてみたいよ！！」

「なっ！？　いけません！　駄目に決まっているでしょう！？　全力で阻止してみせますからね！」

「なんで！？」

「私もそれは賛成しちゃう。ウルギス様とルーディン様以外の男になんて絶対触らせたくもないわ」

「だよね。姫が恋愛なんて考えられないし……。ああ、駄目だ、そんな相手がいたら生かしておけそうに無いよ」

「私もこればかりは賛成ですね。姫様、ルーディン様とのお子様、楽しみにしていますからね」

「こっこここ子供！？　なっ、はっ！　あ、ううぅ……」

カイナさんのあまりの一言に茹でダコ状態で固まってしまった。

カイナさんはクレアさんの言っていた通り、私に嫌われる事を恐れて緊張しすぎてしまっていたようだ。

私を可愛がりたい、でも、もし泣かせてしまったり、嫌われてしまったら、と考えると、体が固まってしまって上手く喋る事もできなかったんだって。

結婚に関しては、私以上に可愛い子を産める自信が無く、もう私

とユー姉様を可愛がれればいいや、と諦めてしまっているらしい。諦めちゃ駄目だよ……

ちょっと気になったんだけど、本のチョイスでこの話の流れになるよう、全部シアさんの思い通りに進んだんじゃないだろうか？　カイナさんとの共通の話題のような物を例に出し、親近感を覚えさせて見せたのか。

ちょっとシアさん凄すぎない？　今度、日頃の感謝も込めて何かプレゼントでもしようと思う。

「ルーディン様と言えば、よく私の胸を……、はっ！？　何でもありません！！」

兄様にはスタンガンの魔法をプレゼントしようと思う。バチィの刑とでも呼ぼうか……

その８４（後書き）

フランのセリフの違和感がどうしても拭えないので、その７８以降のセリフを少し修正しました。
話はそのまま変わっていないので読み直す必要は無いと思います。

その85

シアさんにプレゼント。これが結構悩みものだった。

シアさんの好きなもの？　私とオレンジくらいしか知らない。他の誰かに相談しようにも常に私と一緒にいるからね、それも難しい。好きな物でまず私が出てくるのはちょっとおかしい気もするが、シアさんだから仕方ないね……

プレゼントは私よ！　などと冗談を言ってみたらその場で押し倒されてしまいそうなので却下。次の案へ。

それならオレンジを使った何かはどうかな。ふむ……、手料理か、いいねいいね。

しかし、料理？　私は、転生前も今も、料理どころか包丁すら握った事が無いんだけど……。学校の実習で数回触った事があるか？　程度の知識しか頭にはない。

私個人ではどうしようもない、誰かに教えを請おうか。家族内で料理と言えばフランさんだね。

フランさんは私お付のメイドさんだが、私たち王族の食べる食事の一切を引き受けている。フランさんの作る料理で不味いもの、いや、美味しくないものが出た試しは無い。

教えてもらうならフランさん一択だろう。でもその場合もシアさんが一緒にいるんだよね。私が教えますとフランさんを押しのける様子がはっきりと想像できてしまうよ。

それならシアさんを一時的にでも、料理を教わる間だけでも私から離れてもらうか？　……な、泣かれそうだ……。駄目だね、この案も通せない。

ん？　反対に考えてみよう、離れてもらうんじゃなくて、離れてる間にできる事を考えるんだ。まずは、シアさんが私の側にいない時間を思い出してみる。

うーん？　おやつを作りに行ってる時、一緒に入らない場合のお風呂。トイレは当たり前だね。後は夜、寝る間か。でも交代で部屋の外にはいるんだよね、夜間警備か。

一度警備なんていらないんじゃないかな？　と、さりげなく聞いたことはあるんだけど、警備ではなく、私が夜不安にならない様にする事の方がメインらしい。

私は小さい頃から一人で暗い部屋で寝てたしね、最高に心配されていたみたいだ。その習慣が今でも続いているのか、やはり過保護だね。

おっと、考えを戻そう。

シアさんが私の側にいない間に何ができるか。おやつを作りに行っている間は厨房も使えない筈だ。この時間は料理は無理だろう。後は、週に一度くらいお休みを無理矢理取ってもらっているんだけど、何故かお休みの日も一緒にいるね。川の遊び場の整備など、他にも内緒で色々とやっていると思うんだけど……、いつやってるんだろう……

シアさんの謎が深まってしまった……

「シラユキ？　シラユキー？　考え事？　何か悩みがあるならお姉ちゃんに話してね。一人で考え込んじゃ駄目だっていつも言ってる

のに、この子はもう……」

むむむ、そんなに長く考え込んでたかな。姉様に心配されてしまったようだ。

「悩み、と言えば悩みなのかな……。ちょっと考え事」

「聞いてもいい？　悩んでるシラユキも可愛いんだけど、やっぱり笑ってる顔の方がいいからね」

家族の前で塞ぎこんでちゃ駄目だ、何やってるんだか私はもう。でも……

チラッと横を見ると。

「？　どうかされましたか？　姫様。御用でしたらなんなりとお申し付けくださいね」

悩みのシアさん本人がいるんだよね……。ふう……

「た、ため息!?　はっ!?　姫様のお悩みとはまさか、私の事なのでは！　わ、私に何か至らぬ点が……。それとも、ついに私の想いにお答えしていた」

「それは無いからね!?　もう！　そんなことばっかり言ってるからみんな勘違いしたままなんだよ？　後、シアさんに不満なんてある訳無いからね！」

このからかいは不満と言えば不満なんだが……

「冗談です、ご安心ください。さて、どうやら私の前ではお話し辛い内容の様ですね、私は少し席を外す事にします。メア、フラン、お二人のお世話はお任せしますよ」

「え？　あ、うん、了解」

「任せて。レン抜きの内緒話とか、いいねいいね！」

「シアさんごめんね。仲間はずれにしちゃったみたいで……。でも、うーん……」

フォロー難いなこれは。後でもう一回、ちゃんと謝りながら説明しよう。

「ふふふ、大丈夫ですよ、ご心配なく。楽しみに待っていますね。それでは一度、失礼します」

綺麗なお辞儀を一つ、シアさんは上機嫌で部屋から出て行ってしまった。

「あれは、何と言うか……。完全にバレてるよ……」

どう考えてもさっきの反応は、既に私からの贈り物を全力で楽しみにしているとしか思えない。

「バレてる？　シアに何か隠し事してるの？　シラユキは考えが顔に出やすいのに、それに加えてあのシアよ？　隠し事なんてできる訳無いじゃないの」

それもそうだね……

シアさんは私の表情を読むと言うか……、たまに本気で心を読まれてるんじゃないかと思わされることが多い。多すぎる。

私は特に顔に出やすいらしいんだけど、自分では全く分からない。

そんなに分かりやすいんだろうか？

「うん。あのね、日頃の感謝と言うか、色々してもらってるお礼と言うか……、シアさんに何かプレゼントでもあげようかなって思ってたんだけど……。どう見てもバレてるよねあれ」

「なるほどそういう事。確かにね、やけに嬉しそうにしてたし絶対にバレちゃってるわね……。ふーん……、シアにプレゼントかー……」

「へー……、シアにねー……」

「ほうほうほう、レンに、ね……」

あ、あれ？　三人の反応がおかしいぞ？　お姫様がプレゼントとかしちゃ駄目？

ああ！　自分で稼いだお金でもないし、やっぱりプレゼントは駄目か！！　贈り物を買うお金だって国のお金だったよ……

「私には、私たちには、何も無いんだ？」

「えっ」

姉様の一言に世界が静止する。

「そっかー、姫はシアだけにプレゼント用意するんだー」

「しょうがないよねー？　レンだしねー？　ラブラブだもんねー？」

「ふふふ、シアだし、って言うのに納得しちゃったわ。でもちょっと妬けちゃうわね……、シラユキ！？」

「ご、ごめんなさい……、私、そんなつもりじゃ……。み、みんなも、みんなにも……、う、うう……」

目の前が真っ暗になったような気分だ。

シアさんだけにお礼するとか、私は本当に何を考えてるんだ……。

自分がどれだけの人に甘やかされて、支えられて生きていると……

「ええ！？　な、泣かないで！　い、いじめたわけじゃないのよ？　ね？　シラユキ、ちょっとからかっただけだから……。あああああ、やっちゃったー……」

姉様は悪くないよ。メアさんフランさんもからかってるだけだって言うのも、ちゃんと分かってるよ。

みんなに甘やかされているのが、もう当たり前の様に感じてた自分が情けなくて……

「姫？　どうしたの？　からかってるって分かってるよね？　あれー……、やりすぎちゃったかな……」

「ウルギス様に控えろって言われたばっかりなのに……、しかも泣かせちゃったよ……。ど、どうしよう……」

「ごめんね、ユー姉様……。メアさんフランさんも、ごめん、なさい……」

「な、何を謝ってるの？　ううう、泣き止んでー……。まさか私がシラユキを泣かせちゃうなんて……、私も泣きそうよ……」

「私は、お二人のお世話をお任せします、と言った筈なんですが……。覚悟はできているでしょうね、二人とも。姫様のみならずユーフェネリア様まで泣かせるとは……」

「シア！？」

いつの間にか、二人のすぐ後ろにシアさんが立っていた。

「レン！？　違、わないけど、今はまず助けて！！　シラユキまた自分を責めちゃってるみたいなのよ」

「ご自分を？　とりあえず詳しく説明を。ああ、エネフェア様にご報告は入れますからね？　今回ばかりは本当に覚悟しておきなさい」

「後で全力で土下座しに行こう……」

なんとか泣き止んだ私が説明をする。みんな呆れ顔だ。……呆れ顔？

「ねえ、姫？　自分の年言ってみなよ」

「う、うん？　じゅ、十二歳……」

何か怒られそうな空気だったので、少し控え目な声で答える。

「か、可愛い！　……じゃなくて！　十二歳の子供が考える事じゃないよそれは……」

「よ、よかった……。またこの子の考えすぎ、と言うか思い違いだったのね。こ、今回はさすがに焦ったわ……」

姉様が安堵のため息をつく。

「姫様、こう言っては失礼になるかもしれませんけど……、もっと子供らしくしてください。子供を甘やかすのは親として、家族として当然の行為なのですよ？　その当然の行為に対して感謝を怠ったなどと考えられては……、その考えが逆に失礼に当たる、と言うものです」

「私たちは、私たちがシラユキを甘やかしたいから全力で甘やかしているのよ？　その考えはちょっとね、あんまり怒ったりはしたくないんだけど……、ええと、駄目よ？」

「ユーネ様優しすぎ。まあ、確かにこれは叱りにくいねー」

ああ、うん、怒られてるんだよね？　今。

子供らしくない考えだったのかな……？　それって……

私はみんなのことを家族家族と言いながら、どこか他人行儀にし

てたって思われちゃったって事？
う、うわあ！　それは怒られて当然だわ！
あああああ、早くちゃんといいい言わなきゃ……
「大丈夫ですよ姫様。皆ちゃんと分かっていますから。普段の姫様の甘え方を見て、どう勘違いしたらいいのか逆に聞きたいくらいです」
また泣き出しそうになった私を見て、シアさんが先にフォローを入れてくれた。
絶対心読んでるよ、読まれてるよ……
「あ、また変な事考えてたわね？　まったく、もう！　子供らしくないんだから……」
「う、ううう……。ごめんね？」
それと、ありがとう、みんな。
「私へのプレゼントは、そうですね。姫様のファーストキスでも頂きましょうか」
「いきなり何言ってるの！？」
「あ、シラユキの初めてのキスはお父様よ？」

「なん……ですって……？　あ、いえ、九歳まではノーカウントです」

「母様ともユー姉様とも、る、ルー兄様ともした事あるよ？　あ、あとフランさんとも」

「え！？　ああ、そういえばお兄様ってシラユキを抱き上げてはキスしてたっけ……。浮気だわー、ふふふ」

「内緒にしててねって言ったのに……。ま、いいけどね。」

「フランってばいつの間に……。姫、私ともしよ？」

「ひ、姫様！　まずは私に！！」

「お、襲われる！？　助けてユー姉様ー！！」

その86

「こんにちはー、っと、あ、いたいた。キャロルさーん……、ん？」

冒険者ギルドの中へ入り、まずは挨拶。いつものテーブルに座るキャロルさんを見つけ、呼びかける。

おや、リズさんとライナーさんも一緒だね。Aランクが三人も一つのテーブルに着いている。

誰も話しかけてないところを見ると、怖がられて……、それは無いか。リズさん美人だし、キャロルさん可愛いし。ライナーさんは怖いと言えば怖いが、この二人、特にリズさんとお近づきになりたいと思う男性は多いと思うんだけどな。このギルドには、美人を見かけたら即声をかけるような面白い男の人が何人もいたはずなんだが……

「む？　あ！　シラユキ様、シア姉様、こんにち、わあ！　ううううルギス様！？」

顔だけをこちらに向け挨拶と同時に驚いたキャロルさんが、勢いよく席を立つ。

「え？　ウルギス様、ですか？　え？」

「ウルギスってーと、エネフェアさんの旦那か……。！？　世界最強のハイエルフじゃねえか！！」

「あああアンタたちも早く立ちなさい！！　ライナーは死んで償え！！」

「はい！」

「何でだよ！？　ああ、呼び捨てはさすがに不味いか？　うおおお！　俺死んだ！！」

二人とも、一瞬遅れて立ち上がり、頭を下げる。

三人の慌てっぷりは中々面白いな。父様がついて来ると言い出したときはどうなるかと思ったけど、これはこれで中々……

今日はキャロルさんに会いに冒険者ギルドまで来ている。こちらから会いに行くから、今日はギルドにいてねー、という言付けをミランさんにお願いしておいたのだ。

そして当日になった今日、何故か父様も一緒に行くと言い出した。

父様とは一度も町に一緒にお出かけした事は無いので、実は結構嬉しかったりする。森の中でしか一緒に遊んだ事無いからね、今日はちょっと甘えてみようと思う。

「ああ、頭を上げてくれ、礼を払う必要など無い、座って楽にしてくれ。この国での王族なんぞただの金持ちに過ぎんからな」

「は、はい！　あ！　その前に紹介します。こ、この有翼族の子がリズィー、こっちのでかい竜人がライナーです。ほ、ほら、アンタたちも自己紹介しなさいよ！」

ああ……、緊張して話すキャロルさんは可愛いね。
リズさんは当たり前として、さすがにライナーさんも父様の前では緊張するのか。母様の前では開き直ってただけなのかな？

「二人とも、この前みたいに普通に話しても大丈夫だよ。確かに父様はすっごく強いけど、怖くないよ？　優しいよ」

父様を目の前に、言葉も出せない二人に助け舟を出す。

「敵対者には容赦はせんがな。まあ、シラユキの友人をどうこうするつもりは無い。肩の力を抜いて楽に話してもらえるとこちらとしても助かるな。俺も堅苦しいのは正直苦手な方でな」

「は、はい……。ふう……。わ、私は、リズィー・ランと申します。よ、よろしくお願いします」

まずはリズさんが、一息ついてから名前のみの簡単な自己紹介。

「次は俺か、あー……、ライナー・ランガー、です。よろしく、お願いします」

二人とも名前だけか。さすがに二つ名とかは言わないんだね。
それにしても、ライナーさんの敬語は似合わないこと似合わないこと。

「ふふふ」

「笑うなよ姫さん……」

「ふふ、ごめんなさい。三人とも、座ってくださいね。それと、ミ

ランさん？」

「ひゃい！？　ななな何ですかシラユキ様！！」

とりあえず三人には座ってもらう。それと、後もう一仕事しておこうか……

「椅子をもう一つお願いしていいかな？　五つしか無くて」

「は、はい！　すぐに！」

奥から持ってくるのかなと思っていたが、偶然いたラルフさんを蹴り落として、その椅子を持ってくるミランさん。

いきなりな事に驚くラルフさんと、ナナシさんの笑い声が聞こえた気もするが、多分気のせいだろう。……ごめんなさい。

「お、お待たせしました！　って、あれ？　五つでよかったんじゃ？　今日はバレンシアさんも座るんですか？」

「いいえ？　私はただのメイド、お心遣いは不要です。姫様？」

「もちろんミランさんが座るんだよ？　ふふふふ……」

お友達はみんな父様に紹介したいからね。

べ、別に面白そうだからとか思ってないよ？　思ってないったら！

「そんな！？　はっ！？　す、すみません！　み、ミーラン・スケイロです！　うう、受付をやっています！！」

「精霊通信でたまに聞く声だな。君がそうか……。ああ、座ってく

れ」

「はい！　失礼します……」

シアさんが、また数秒でテーブルをセッティング。二度目では驚きも無いか、残念。

やっと四人とも席につかせることができたよ。私も座ろうか。

さてさて、椅子に座るまででもこれか、この先は一体どんなお話になることやら……

父様が最後に席につき、口を開く。

「俺の紹介は必要無さそうだが、一応言っておくか。ウルギス・リーフエンド、この子の父親だ。ただそれだけの男だ、緊張する事などありはしないだろう？　今日ここに来たのは、まあ、暇だったからだな。娘と一緒に町を歩きたかった、というのもある。ただ友人が父親と一緒に来ただけなんだ、いつも通り話をしてやってくれ」

「はい！　私は、その、大丈夫だと思いますけど、こっちの三人はちょっと難しいかもしれませんね……」

リズさんも多分大丈夫かな？　ライナーさんも、少し話せばすぐに慣れるだろうと思う。

ミランさんは……、頑張ってもらおう。

私も父様の前でお友達と話すのは初めてだね。変なところは見せないようにしなきゃ！

「そうだ、キャロルさん、怪我はもう大丈夫なの？　見た感じ、もう痣も残ってない様に見えるけど……」

「はい、もう傷一つ残ってませんよ、ありがとうございます。この町の調薬ギルドには腕のいい職人がいましたしね」

クレアさんはまだ包帯だけはしてるんだけどな。魔法薬って凄いんだ……

「エネフェアさんと一緒にいたメイドだよな？　模擬戦っつっても、コイツが随分苦戦したらしいじゃねえか。やっぱこの国のエルフはそんなのばっかなのか？」

ライナーさんはもう普通に話せそうだね。また開き直ってるんだと思うけど。

「んー、どうだろ？　他のメイドさんは普通だったよ。ああ、もう一人の方、ええと、カイナさんだっけ？　あの人は結構強いんじゃないかな。エネフェア様のお付メイドさんみたいだし」

「え？　カイナさんも強いの？　父様父様、そうなの？」

「カイナは内政の補佐だからなあ、そこまで強くはないと思うぞ？　冒険者で言えば、精々Ｂランクと言ったところだろう」

Ｂランク？　ミランさんと同じくらいかー……

「シラユキ様、Bランクは一流のレベル、ですよ？　メイドさんでその強さは、普通におかしい、ですからね？」

「そ、そうだった、カイナさんも強いんだね。ミランさんBランクだし、ちょっと勘違いしちゃった」

「ええ……、私そんなに弱そうに見えます？　ううう……」

おっと、ついつい正直な感想が口に出てしまった。

「ふふ、ごめんねミランさん。だってミランさんって、受付でボーっとしながらお菓子ポリポリしてる印象しか無いし……」

「ああ、確かに……。ここのギルドの受付は暇そうですよね。私もここに住んで受付しようかな……」

シアさんにも会いに行けるしね、この町に住んでもらえるのは私にも嬉しい、が、やはりメイドさんになって欲しいものだ。

「そうなってしまったら、私も独り立ち、ですね。できたら、後数年くらいは、一緒に旅を、続けたいのですが……」

「リズもAランクに上がったしねえ、そろそろ独り立ちかな。まあ、安心しなよ、冗談だから。ミーランの仕事を取るわけにもいかないからね」

「はい。もう暫くは、一緒にいてくださいね」

リズさんは嬉しそう。キャロルさんのこと大好きだからね、別れたくないよね。

キャロルさんも、シアさんと別れて独り立ちする時は寂しかっただろうなー……

ん？　シアさんが私の手を取る。テーブルの死角でこっそりと、隠すようにして握る。

まるで、私はずっと一緒にいますから大丈夫ですよ、とでも言いたげだ。

危ない！　ほ、惚れてまうやろー！！

その後暫く他愛の無いやり取りが続き、お菓子もジュースも尽きた頃。

「あ、そだ、えっと、シラユキ様？　私とリズは、そろそろこの町を出ようと思うんです」

今まで言い出しにくかったのか、そろそろ解散しようかなと言うところで、キャロルさんは切り出してきた。

「もう行っちゃうの？　まだそんなに話せてないのに、寂しいな……」

「あー、俺もだ、この町は平和すぎるからな。リズも俺もまだ上に上がりたいんだ、他の町でもがんがん依頼をこなして回りたいんだよ。ま、俺たちはそう簡単に死なないから安心しろよ。何年か、何十年か置きに顔くらい出しに来るさ」

寂しがる私を思ってか、いつもより少し柔らかめな口調で再開の約束をしてくれる。

「私も寂しいです。こんなに可愛らしい、お友達ができた、というのに、もうお別れしなければ、ならないなんて」

「次にお会いできる時はSランクに上がってて見せますよ。その時は、メイドになりますか。ふふ」

そういえばメイドになるには最低Sランクってシアさん言ってたね。

「ふふふ、うん！　楽しみにしてるね！」

「ああ……、たまに来る高難度の依頼の消化がまた私に……」

Aランクが三人もいたんだもんね、ミランさんは今まで以上に楽できてたんだろう。

「あはは。その時は、あそこにいる三人組を連れて行くといいよ」

ラルフさんナナシさんエディさんの三人を指差し言う。ちなみにラルフさんはどこからか椅子を持ってきていた。

「ナナシさんはいいとしても、後の二人はまだまだねえ……。っと、すみません！」

口調が崩れた事を謝るミランさん。

この調子で行けば、私と敬語抜きで話せる日もそう遠い事ではな

さそう？

「人間と獣人か……。シラユキ、あの三人も友達か？」

他のみんなが恐縮しちゃうからと、あまり喋らなかった父様が聞いてきた。

「う、うん……。だ、駄目だった？」

「いいや、そうじゃないさ。だがな、辛いぞ？　お前は頭がいい子だ、俺の言わんとしていることは、分かるだろう？」

父様が言いたいことは分かる。分かるけど、それに怖がって逃げてるのはいけないと思うんだ。

「分かってるよ。多分いっぱい泣いちゃって、後悔もすると思う。でも、それまでは笑って話したいの、楽しくね」

「まったく……、十二の子の考えなのかこれは……」

父様にグリグリと撫でられる。

みんなの前だとさすがに恥ずかしいなこれは……

ちょっとしんみりしてしまったが、元気にお別れだ。もう二度と会えないという訳じゃない、一時的なお別れに過ぎないからね。

私もキャロルさんも、ライナーさんも長寿種族、リズさんはそこまで長くは生きられないかもしれないが、まだ二百年は余裕で生き

ると思うしね。まだ何度だって会えるさ！

帰り道に泣いちゃったんだけどね……。父様が優しく抱き上げて、家まで連れて帰ってくれた。

多分私が帰りに泣くだろうと思って、今日は一緒に来てくれたのかもしれない。本当に優しい父様だね。

その８６（後書き）

少しあっさり目ですが、今回で十二歳編は終わりです。
次回からは十二歳以上編が始まります。

何が違うのかはまた明日の前書きにでも。

その８７（前書き）

今回から『十二歳以上編』が始まります。

これは、その名の通りシラユキが十二歳以上の頃にあった出来事のお話ですね。

十二歳編であった内容と前後する場合もあります。……あるかな？

そのまま続きとして読んでもらって全く問題はありません。

その87

今日も今日とて読書のお時間。しかし今日は読書とは言っても、図鑑や参考書ではない。挿絵付きの創作話、所謂小説という奴だ。

内容は割とよくある感じだね、ファンタジー冒険物。

ん？　ここはファンタジーな世界だったね。という事は、これは現代物なのか？　現代冒険物なのか！　面白いなそれ！！

あらすじを簡単にまとめると。

ある冒険者が旅先の森で迷い、誤って伝説の剣を抜いてしまい、おまけで付いて来た妖精と共に旅を続け、なし崩しに何故か復活した魔王と戦う事になり、そして旅の途中加わった仲間と共に戦い、勝利。世界に平和をもたらし、お姫様と結婚して幸せになる。というベタベタな展開だ。

笑いあり涙あり感動ありの、子供向けではなく、かと言って大人向けでもない作品だ。

メイドさんズが言うには、こう言った作品はかなり多く、世界中で出版されているらしい。

現実には魔王だの世界の危機だのはやはりおとぎ話でしかないみたいだね。でもこれって、私のようなお姫様に読ませる本なんだろうか？

そ、そう言えばこれもシアさんが選んだ本だった！　何かしら裏があるに違いない。きっとそうだ、そうに違いない！

「何もありませんよ？」

「口に出してもいないのに即座に否定！？」

どうやら何も含むところは無かったようだ。

「最近姫様の夢や憧れを壊してばかりの様な気がしてましたので、たまにはこんな内容の本もいいのではないか、と思いまして。如何でした？　姫様好みのお話だったのではないでしょうか？」

理由を聞く前にシアさんは教えてくれた。

ああ、気を使われちゃったのね……。確かに色々な現実を見せ付けられたよ。でもね、別に夢や憧れを持ってた訳じゃ無かったからいいのに……

「う、うん。ありがとねシアさん。でもさ……」

「はい？　なんでしょう？」

「私一応お姫様だよ！　お姫様は魔王との戦いや冒険には憧れないよ！？」

シアさんは私をなんだと思ってるんだ！　まったくもう！

「え？　す、すみません……。てっきり姫様はこう言った冒険物が大好きなのかと……。女性、女の子向けの作品の大体は、町の一般

庶民の娘がどこかの国の王子と結婚するまでのお話ばかりですし……。もともとお姫様である姫様が読む必要などありませんからね。どこかの王子との結婚話など、絶対に！！」

「普通はそっちを薦めようよ！　うん、でも、冒険話の方が確かに好きではあるかな……。さすがシアさんだよ」

女性向けのベッタベタに甘い恋愛物は結構苦手な部類に入る。たまに主人公が酷い目に遭ったりとかさ、恋人との生々しい表現ありのアレのシーンとかさ……

「女性が主人公の冒険活劇物もあるにはありますよ？　数は少ないですが。しかし、そちらもラストはどこぞの王子との結婚で終わる物が殆どです。絶対に読ませたくはありませんね！」

むう、シアさんは何が何でも私に結婚どころか恋愛もさせたくないようだね。娘煩悩のお父さんか！

「最後結婚じゃないのもあるんでしょ？　女の子が主人公の冒険物でもさ。そういうのにしてあげればいいじゃない」

このままでは喧嘩になるとでも思ったのか、メアさんが話に割り込んできた。

「ええ、何冊かはありましたよ。ですが、姫様にお薦めできるような物は中々無いんですよね」

何冊かはあったんだね……。うん？　もしかしてシアさん全部読んだのか！？　私に読ませる本を選ぶために全部？

何というメイド魂。これは文句を付けちゃいけなかった！！

「それ、ちょっと気になるね。レン、どんな終わり方だったのよそれって」

そうだった、そうだったね、さっき私も考えたじゃないか。シアさんが選んでくれた本には何かしら意味があるってさ。

「自分で読んだ方がいいと思いますよ？　まあ、冒険物を楽しめる年ではありませんか、いいでしょう」

という事は、シアさんはあの蔵書を全部読んだっていう事？

「と、年って、傷つくなあ……。そう言うレンだって私の倍以上生きてるくせにさー」

いやいやそれは無いわ、何冊あると思ってるんだあれ。多分千どころの話じゃないよ。

「シアはシアで五百近くには見えないよね。普段はちゃんとしてるんだけど、姫が絡むと、ねえ？」

それでも、私が興味を惹かれるような物は目を通しているんじゃないかな？

「失礼な。成人したエルフに年などどうでもいい事ではないですか。と、終わり方の話でしたね」

うん？　一体いつ読んでるんだ？　まさか、私が寝た後とか？

「レンが言い出したんじゃない……。ま、いっか、教えてよ。例えばどんなのがあったの？」

な、なるほど、夜の警備の間に読んでるのか！

「一番多いのはやはりどこぞの王子との結婚ですね。その後の結婚生活を描いたファンサービス的な内容の続編が出る事もあります」

ふう……、珍しくすっきりした回答が出たよ。

「その次に多いのは……、また結婚ですね。こちらの場合は共に戦った仲間の男性との結婚になりますね。冒険譚と言うより、冒険中の恋愛模様が人気なようです。最初は仲の悪かった仲間や、敵対組織の幹部が仲間に加わり、というのがありがちな内容ですが、ありがちなだけにやはり人気が出るのでしょうね。女性主人公を取り合う、所謂逆ハーレム的な物も絶大な人気を誇っています」

謎メイドであるシアさんの謎が一つだけ解けた気がするね。長考した甲斐もあったと言う物だ。

「し、シア、そういう話好きなんだ……。い、意外過ぎるんだけど」

さて、考えるのもここまでにしてメイドさんズのお話を聞こうか。何か面白そうな話題になってるっぽいしね。

「い、いいじゃないですかそんな事は。姫様に読んで頂く本を選ぼうと読んでいたら、まあ、気に入った、程度ですね」

え？　逆ハーレム？

「でもレンの場合は、小さくて可愛い女の子に囲まれるハーレムがいいんじゃないの？」

ロリコンハーレムであるか。じゃなくて、シアさんが逆ハーレム好きのところを詳しく！

「姫様お一人いてくだされば他には何一つ、誰一人必要ではありませんね。話を続けますよ？」

くう！　気になる！　いいや、後で聞きなおそう。

「後はそうですね……、自分の命と引き換えに魔王を打倒、もしくは封印、ですね。聖女〇〇として後世に伝えられた、という終わり方もありますね。主人公が死んでしまって終わり、などという物は姫様に読ませたくはありません」

確かにそれはなんだかなー、だよね。

主人公っていうのはやっぱり幸せにならなきゃ！　だからこそ結婚エンド物が多いんだけどさ。

「他にも、まあ、色々と。魔王と結婚したり、勇者が国を追われたり、世界が平和になったと思ったら今度は勇者が世界を狙ったり、魔王に捕らえられりょうじょ、こほん。失礼」

りょうじょ？　なんだろう？

「ストップストップ！　シラユキにそれは聞かせちゃ駄目だって！」

フランさんの反応からすると結構ひどい話なのかな？　聞かないでおいた方がよさそうだねこれは。

「よかった……。フラン、大丈夫だよ。姫意味分かってないっぽい」

「こ、子供でよかったー！　レン！　今のは危なかったよ！　シラユキには絶対読ませちゃだめだからね！」

「え、ええ……。猛省します……」

あらら、シアさん落ち込んじゃったよ。

「まったく、誰の趣味よ！　見かけたら全部焼いておいてね？　もしそんなのをこの子が読んじゃったりしたら……、ううん、考えたくもない」

「わ、っとと」

フランさんに抱き上げられて苦しいほどに抱きしめられる。

特にフランさんの胸があたってる辺りが圧迫されて苦しいね。もげろ！

「どの世界でも人の考える話っていうのは同じような物なんだねー。私のいた世界とそこだけは変わらないよ」

でも、異世界に送られるとか転生するとか、異世界トリップ系の話は無いみたいだね。これも中々面白い発見だ。

「おやおや？　姫も恋愛物、好き？　逆ハーレムとか？」

「ど、どうかな……。小説読むのは好きだったけど、恋愛物は読んでて恥ずかしくってさ……」

逆ハーレム物なんて特にそうだ。お、男の人に囲まれるとか、言い寄られまくるとか……、考えただけで恥ずかしいよ。興味はあるんだが……

「超安心しました」

「超！？」

いえいえお気になさらず、と、シアさんはにこにこ顔だ。
私は一生恋愛なんかできないだろうと安心してるんだろうね。

駄目だ！　このままじゃシアさんと結婚する事になってしまう！？　だからそれは無いって。

そういえば、ちょっと気になった内容が。

「この世界にさ、魔王とか、伝説の剣とかそういう、何て言うんだろ？　そういう物ってあったりするの？」

魔法あり冒険ありの世界だし、もしかしたら、魔王っぽい存在や、伝説の武具がどこかに封印されてたりするんじゃないだろうか？

「どうなんでしょう？　私も長く生きているとは言え五百程度です

からね。世界の全てを知っているという訳では……。ですが、現在この世界に魔王はいませんよ。今後生まれる可能性はありますが」

いないんだねやっぱり……、現在はいない？

「現在っていう事は、過去にはいたの？　ってシアさん知ってるの！？」

「ええ、この大陸ではありませんが、ああれは、ええと……、三百年ほど前、ですね。噂を聞いたことはあります」

や、やはりファンタジー世界だった！！　魔王は本当にいたんだ！

「魔王とは言っても人間でしたからね。それから五十年と経たずに死んでしまいましたが」

「えー！　なにそれ！　人間なの？　魔王なんでしょ？」

人間が魔王になったんじゃないのかな？　力だけ手に入れて寿命はそのままとか、何それ、面白くない……

「何か、姫様と私とで魔王という存在の認識の食い違いがあるようですね。魔王などというモノは勇者や英雄と同じく、自身の行動から付く二つ名のような物ですよ？　今話した魔王と言うのも、姫様にはとても話せないような悪行を行ったからこそ呼ばれるようになっただけであり、元はただの人間の国の王ですね。その王政を崩壊させた組織の長が勇者と呼ばれるのが現実ですね。まあ、件の国はその次の代で滅んだようですが。王族が好き放題した結果のいい見本ですね」

な、な、な、生々しい！！

「現実は生々しいよ！　さっき読んだ小説の魔王は何だったの！？　ああ！　作り話だったね！　って！　だから私はそう言うのを聞いてるんだってば！！　生々しい話はやめてよー！」

「何という可愛らしさ……。姫様の愛らしさが既に、魔王とも勇者とも英雄とも、いえ、女神とも呼べる、いいえ！　女神程度では表現しきれない！　くっ！　私の表現力の低さをお許しください……」

「また大袈裟な！　もうシアさんはいいや……。メアさんフランさん、せめて妖精さんはいないの？　精霊さんはいるんだしさー」

「よ、妖精さん！　姫可愛すぎ！！」

「私やっぱ子供作るのやめるわ。旦那には悪いけど、シラユキより可愛い子産める訳無いし……」

この二人もか！！

なんでか妖精もさん付けしちゃうのよね。直そう直そうとは思ってるんだけど、中々上手くはいかないのもだね。

「ふう、すみません、落ち着きました。姫様の仰る妖精とは、小さな人型で、背中に虫の様な羽の生えた存在の事ですよね。いない、とは言い切れませんよ？」

「え！？　い、いるの？　見てみたい！！」

よ、妖精はいるんだ……。会えるならお友達になって欲しいな！

「妖精は、純粋で心優しく、それでいて汚れの無い心を持つ子供の前には姿を現すと言われています。妖精を見た、触れた、話した、という子供の証言は多いですよ。大人は信じずに嘘か見間違いだと決め付けてしまいますがね。実際見間違いも多いのでしょう、子供の目には、世界は不思議と輝いて見えるものですから」

それって、いないって言ってるも同じな気が……

まあ、でも、夢があっていいとは思うけどね、多分精霊が見えちゃっただけなんだと思うよ……

もしかしたら精霊の本来の形状が人型なのかもしれないね。どちらにしても実際にこの目で見てみたいものだ。

「姫なら見えるんじゃない？　でも、一人で出歩かせたくないな……」

「発見報告、って言うのも大袈裟か。子供の証言だと一人の時にしか会えてないんだよね？　シラユキを一人で散歩させてみれば、確かにわらわらと寄って来そうな気がするね」

「姫様ならば必ず見えることは分かっているんですが、ね。お一人で外出するなど、後五百年は早いです。お諦めください」

「見えないんじゃない？　どう考えても私、純粋でも、心優しくも、ましてや汚れの無い心なんて持ってないよ？」

さらに言うとそこまで子供でもないよ！

「またまたご謙遜を。世界一愛らしく純粋で心優しく汚れのない心を持った子供の姫様が何を……」

「姫以上に純粋で優しい子なんていないよ？　もっと自信持ちなよ」

「汚れの無い心っていうのも間違いないよね。シラユキは真っ白だよきっと。ふふふ」

「さ、さすがにそこまで言われると、ツッコミ以前に恥ずかしいんだけど……」

「うーん、一人で散歩か……。今度広場まで一人で行ってみようかな……」

お祭り、宴会、そして私が魔法の練習をしている広場までなら、子供の私の足でゆっくり歩いても三十分と掛からない。精々十五から二十分程度だろう。

「え、ちょっとやめてよ姫。転んで怪我して泣いちゃっても、誰も助けてくれないんだよ？」

「大丈夫じゃない？　シラユキって小さな怪我くらいは自分で治せるんだよね？」

そういえば怪我の治療、傷を能力で治すっていうのはまだ試してみた事も無いね。

生き物に関係する事だけど、新しい部位を継ぎ足すわけじゃなくて、治す、だ。多分できるだろうね。

ああ！　そうだ！　クレアさんとキャロルさんの大怪我をその場で治せばよかったんだったよ！！
もっと自分にできる事、できない事を把握しておかなきゃ……

「ひ、姫様がお怪我！？　いいいいけません！　私、死んでしまいます！！」

「何でシアさんが死んじゃうの！！　よし決めた！　広場まで一人で行ってみるよ！！」

「姫様！　そんな……！　お考え直しください！！」

「一人で散歩に行かせるくらいで半泣きにならないでよ！！」

その８８

私一人での散歩、それが実現したのはあれから数日後になった。
父様と姉様の説得に始まり、説得し終わったと思ったら今度は無人を徹底させる事に。当日、家から広場までの道の周辺を完全に無人にしようと言うのだ。やるからには徹底的に、という事なんだろう。もしかしたら、寂しがる私が途中で帰ってくるんじゃないか、という策略か？
シアさんは結局最後まで納得してはくれなかったが、やはりメイドさんの一人が反対したところで父様母様の決定は覆せない、ちょっと悪い事をしたなと思ってしまう。後で何か埋め合わせをしようと思う。

現在家の正面入り口、見送りは父様、姉様、メイドさんズの五人。母様と兄様は何を大袈裟な、と見送りには来なかった。当たり前だね、ただの散歩だよ……

「それじゃ、ちょっと行ってくるね。広場で軽く休憩したら帰ってくるから。んー、全部で一時間くらい？」

掛かって往復四十分、休憩を十分くらい入れるとして、余裕を見て一時間か。
結構長いかな？　また疲れて熱を出すなんてことにならないといいんだけど。

「何に、とは言えんが、気をつけてな。怖くなったり寂しくなったりしたらすぐに戻って来るんだぞ？」

「絶対に道から外れちゃ駄目だからね？　疲れたらすぐに休憩する事！　飲み物もお菓子も、仕舞ってあるでしょ？　あ、誰も見て無いからって飲みながら歩いちゃ駄目だからね！」

ちょっとそれはやってみたかったな……。やめよう、お姫様がお行儀の悪い事しちゃ駄目だ。

まったく、二人とも過保護なんだから、母様と兄様も呆れるよ。この森がどれだけ安全かなんて自分たちもよく分かってるくせに……

ここで、なるべく視界に入れないようにとしていたシアさんを見てみる。

うわあ、泣いちゃってるよ……

「シアさん……、大丈夫だよー。いつも行ってる広場だし、迷う事もないし、絶対安全だよ？　ね？」

「姫様ぁ……」

何か今生の別れの様だ……

初めてのお使いに子供を送り出す親、くらいの心配でいいのに……。今にも泣き崩れてしまいそうな感じのところをメアさんフランさんに支えられ、慰められ、宥められている。

「ううう、私も心配になってきた……。姫、転ばないでね、足元には気をつけるんだよ？」

さめざめと泣くシアさんを見て、メアさんも不安が増大してきてしまっている様だね。

「レンは私たちが抑えておくから安心して行って来ていいよ。でも、なるべく早く帰ってきてあげてね」

「うん。あんまり長い時間だとホントにシアさん死んじゃいそうで怖いよ……」

これ以上は逆にみんなの不安を煽るだけか、そろそろ出発しよう。

「それじゃ、みんな、行ってくるねー！」

開いているドアから外に出て、一旦振り向く。

「ああ」

「うん、いってらっしゃい」

「気をつけてね、姫」

「いってらっしゃい。お土産はー、無理か、あはは」

広場の土でも持って帰ろうか？　ふふふ。

「いってきまーす！」

「姫様！」

元気に歩き出そうとしたところで、シアさんに呼び止められてしまった。

「シアさん……？」

なにその悲痛な表情は……、罪悪感が凄まじいんですけど！

「姫様……、いってらっしゃいませ……。どうか……、どうかお気をつけて……！！」

私は今から戦場にでも向かうのか！？　とツッコミを入れたいところだが、我慢我慢。シアさんは本気だ。

「うん！　ありがとね！　それじゃ、今度こそ、いってきまーす！！」

メアさんとフランさんが、それぞれ左右のドアを閉める。完全にみんなが見えなくなった。

シアさんの泣き声が聞こえるような気もするが、きっと気のせいだ、前に進もう。

……なんなのこの罪悪感は！？

てくてくぽてぽてゆっくりと歩く、会話が何も無いのは静かだね。普段全く気にならない鳥の鳴き声や葉擦れの音がやけにはっきり、

大きく聞こえる。
　立ち止まって上の方を見てみる。道の上はさすがに空が見えるが、ちょっと左右に目を向けると、緑。森だねえ……

　転生前はこんな景色が見れるなんて思いもしなかったよ。山奥へ行けば見れたかもしれないが、そんな所へ足を運ぶ理由も無い。町の中にある緑なんて大抵は人の植えた物だった。道路脇、公園の隅に規則正しく並べて植えられている物しか見たことは無かったね。
　でも、今見ている景色は違う。言葉では説明しにくいが、うーむ……、自然、と言うのが一番しっくり来るかな。その自然の中、石だろうか？　レンガのような物で舗装された道が続いている。

　いつもは、最低でもシアさんと二人で、お話しながら歩いていたからね、今日は普段目が行かないような場所へと目線が動いていってしまう。
　道の脇にポツポツと生えている白雪草。木や草にとまっている小さな虫。ここからは確認できないが、鳴き声の聞こえる感じからすると、近くに鳥も何羽かいるんだろう。

　一人で歩く、たったそれだけの事で、世界が変わったような錯覚を受ける。面白いね、世界が輝いて見えるって言う奴かな？

　そろそろ半分くらいだ、時間的にも十分程度かな？　疲れは全く無い。当たり前か、ゆったりと歩いて来ただけだしね。
　それにしても、本当に静かだ。静かとは言っても、葉擦れの音、鳥の鳴き声は相変わらず聞こえては来ている。人口の音が私の足音以外一切しないんだ。
　この周りは多分、多分じゃないか、完全に人がいないんだろうね。

まったく、父様は毎回毎回限度と言うものを知らないんだから。
またみんなに迷惑を掛けちゃったんじゃないかな……
おっと、そもそも言い出したのは私か。私が悪いんだったね。いやいや、皆さんごめんなさい。

しかし、何かイベントでも起こらないものかな。怖い事件は御免蒙るが、精霊がふよふよと目の前を飛んで行くくらいの事はあってほしい。ふふ、贅沢か。

んー……、ん？　精霊？　思い出した！！

妖精だ！　妖精が見えるかも、っていう話だったね。いつの間にか散歩する事がメインになってたよ。ま、どうせ見えないんだからいいんだけどねー。
こんな現実的なことを考えている私に、汚れの無い心などある訳が無い。たぶん煤だらけで真っ黒だよ。ちょっと残念に思う気持ちもあるにはあるんだけどね。

いや……、待てよ？

もし今回、妖精が見えてしまったら？　私の前に出て来てしまったら？

（妖精は、純粋で心優しく、それでいて汚れの無い心を持つ子供の前には姿を現すと言われています。妖精を見た、触った、話した、という子供の証言は多いですよ）

純粋で心優しく、汚れの無い心を持った子供認定!?
ななな、何それ！　は、恥ずかしいってレベルじゃないよ!?

だだだ大丈夫だ、慌てるな、まだ慌てるような時間じゃない。
ふう……、落ち着け、深呼吸だ、素数を数えて落ち着くんだ……

（大人は信じずに嘘か見間違いだと決め付けてしまいますがね。実際見間違いも多いのでしょう、子供の目には、世界は不思議と輝いて見えるものですから）

「駄目だ！　世界が輝いて見える!!　だ、駄目よ、駄目！　落ち着くのよ私！　まだ見えると決まったわけじゃない!!!」

声に出し、頭を振り、悪い考えを振り切る。
さらに、目を瞑って大きく深呼吸を、一つ、二つ、三つ。

よし、目を開ける。

「ふふふ。何も見える訳無いじゃない、まったく、私ったら恥ずかしい」

当たり前だがさっきと変わりない景色だ。もし見えちゃうんだったら、家からここまで来る間に見えてるって。ふう、馬鹿馬鹿しい。
一人だからって焦りすぎよ、私。

一人だからって、ね……

とぼとぼと広場へ向かい歩き続ける。足取りはやけに重い。
一人、という事を意識してしまうと途端に寂しくなってしまった。泣き出すほどではないが、ここは安全と分かっているからの話だ。例え人通りが多くあっても、町の中に一人残されでもしたら、三分と持たずに大泣きしてしまう自信がある。どんな自信よ。
私はやっぱり子供だねー、甘やかされすぎの寂しがり屋の子供か。うん、認めようじゃないか。
だけど、今回は初めてだからなのよ！　何回も一人歩きの練習をしていけば、きっと町にだって一人で行ける様になるさ！
な、情けなさすぎるよ私……！

それから特に何のイベントも起こらず広場へ到着。転んで怪我をする事も、妖精はもちろん、精霊も見ることは無かった。

広場に用意してある私専用と言ってもいいサイズのテーブルに、能力で仕舞ってあったシアさん作のクッキー、いつものオレンジジュースとグラスを取り出し、椅子に座る。
ふう……。やはり甘いお菓子はいいね、心が洗われるようだ。
大袈裟な表現だが、寂しさも少しは薄まったかな？　いや、一人で食べてると逆に……、危ない！　考えちゃ駄目だ！　考えちゃったよ……、遅かった……

一人で食べても美味しくないね……。いや、美味しいんだけどさ、

やっぱりみんなと一緒じゃないとね……

「片付けて帰ろう……」

「あ、もう食べない？　だったら頂戴！　こんなに美味しそうなのに残すなんて、お姫様ってのはまったく……、贅沢だね」

「ちゃんと持って帰って食べるよ……。でも、いいよ。私はまた作ってもらうから大丈夫。ああ、ジュースもいる？　オレンジジュース」

「いいの!?　ほー……、話しかけてみるもんだね。前のお姫様は我侭放題だったってのに、今度のお姫様は随分と優しい子なんだね」

「前の……？　ああ！　ユー姉様の事？　そういえば子供の頃は我侭だったってルー兄様も言ってたね」

話しながらもう一つグラスを取り出しジュースを注いで、対面のお客様の目の前へ置く。

「おっと、ちょいとアタシにはサイズが大きいねえ、残しちゃったらごめんよ」

「あ、注ぎすぎちゃったみたいだね、ごめんなさい。大丈夫、残ったら私が飲むから、気にしないで残して」

「あっはっはー、ホントに優しいお姫様だこりゃ。そいじゃ遠慮無く頂くよん。……クッキーうめえ!!」

小さなクッキーを両手で持ち上げ一口、大喜びだ。可愛いなこの人、喋り方も楽しくていい。

「ふふふ。シアさんのお手製だからね、お店のよりもずっと美味しいよ？　シアさんって言うのは私のお世話をしてくれてるとっても凄いメイドさんで、あ、そうだ。私、シラユキ、シラユキ・リーフエンド。あなたは？」

危ない危ない。自己紹介もしないでお茶会は駄目だよね。

「んは？　いい名前だね、女神様に付けてもらったん？　それ、白雪草から来てるんだ？　あはは、確かに見た目はそれっぽいわ。あはははは」

おお、さすがだね。まさか女神様の花の本当の名前まで知っているとは。でも笑わないでよう……

「あはははっと、名前だったね、ゴメンゴメンゴ。アタシん名前はいっぱいあってね、お姫様には何て呼んでもらおうかな……。うぬぬ……、ユーフォルビアは、駄目か、ユーって呼んでもらうとお姉ちゃんと被るね。それじゃ、よし！　フォルビアでいいや！　好きに呼んで、あ、呼び捨ててね。さんとか付けたらキレるよ？　アタシもシラユキって呼ぶからさー。いいね？」

ユーフォルビアって確か……

ま、いっか、前の世界の事なんてどうでもいいや。ただ同じ名前なだけなんだろう。

よ、呼び捨てか……

でも、これだけ小さいと抵抗も薄いね。ペット感覚で話せばいいか？　失礼だな私は……

「うん！　よろしくね、フォル……、フォルビア……？　フォルベえ？」

「ぶはっ！　い、いいねそれ！　最高だね！！　フォルベーか、うんうん、いいよいいよー！！」

盛大に吹き出して大喜びだ。クッキーが飛び散る。

ああもう汚いなあ、でも喜んでくれてるみたいだし、新しいお友達ができたし、いいや。いい事尽くめだ。

「ふふふ。改めてよろしく、フォルベー」

「あいあいよろしくう！　お姫、じゃない、シラユキ！」

フォルベーは背中の羽をフリフリとさせて、とても嬉しそうだ。

その８８（後書き）

続きます！
なんという箇所での区切り……、すみません。

その８９

羽をフリフリさせながら、フォルベーは機嫌良くクッキーに齧り付いている。

い、今気づいちゃったよ……

完全に驚くタイミングを逃してしまった。今驚いたら、どれだけ長いノリツッコミだよ！？　と逆に突っ込まれてしまいそうだ。

落ち着いてフォルベーを見直してみる。

ち、小さいな、背は２０ｃｍくらいか？　見た目は子供に見えるね、大人の容姿ではない。

私と同じ真っ白な髪を私と同じ様に膝下くらいまで伸ばしている。瞳の色もこれまた私と同じ青色だ。この世界で青色の瞳がハイエルフ以外にいるとは思わなかった。本にも載ってはいない、父様でも知らない事はあるんだね。世界は広いや。

服も私に似てるね、白いワンピース。何故か裸足だけど、空を飛んでの移動が基本なのかな？　多分必要ないんだろう。

私を小さくコンパクトにした様な容姿。違う所は耳の長さと……、くそう！　何でそんな小さいのに胸はあるのよ！　もげろ！

背中の羽？　半透明で綺麗だね！　虫っぽくはない。先の尖った、薄い青色で細長い、氷みたいな形状だね、なんか硬そうだ。上下に全部で四本生えて、るのかな？　背中は見えない。上二本は斜め後ろ、上に向かって、下二本は対となる形だが、長さは半分くらいしかない。

なんか、アレだね。ロボットの背中に付いてる推進装置っぽい……

そんな事はどうでもいい！　なんでそんなに胸があるかと……、

じゃない！
落ち着け落ち着け、考えるな、後でもげばいいじゃないか……

「あん？　どしたん？　じーっと見つめて。惚れた？　いやん」

いやんじゃないよ、か、軽いなあ。でも、話しやすくていいね。

くねっと体を捻って恥ずかしがるフォルベー。背中は見えた、羽は浮いている、直接生えているわけではないようだね。

「い、今さらだけどさ、フォルベーは妖精さんなの？　ちっちゃいし、羽、生えてるし。あ、羽なのかなそれは」

「あー、んー……、どうだろ？　多分そうなんじゃないの？　アタシはアタシだよ。自分の種族なんてどうでもいいし？　妖精、なんてモンは人が勝手にそう呼んでるだけだからねえ……。コレ？　なんだろねコレ」

ほうほう、そういう事ですか。他種族との交流がないと、自分の種族なんてどうでもよくなるんだね。私は私、か、いい言葉だ。

でももうちょっと自分自身に興味を持とうよ……。自分の体に付いてる物なんじゃないの？

「ふふ、分からないならいいや。それじゃ妖精って事にしちゃおうか。他に妖精のお友達はいるの？　クッキー全部食べれそうにないし、持って、行けないか」

持って帰ってもらおうかなとも思ったけど、このサイズだと運んでいけるのは精々三、四枚かな？　重くて飛べなくなってしまいそうだ。

「友達？　そりゃいるよ、その中でも私は一番の古株さあ。大体みんなあそこにいるね、花畑。あの巨乳、いや、爆乳の人が管理してるとこ。持って帰っても二枚三枚じゃ全然足りないねえ」

ああ、コーラスさんの花畑か。

ば、爆乳……、なんて羨ましい響きだ……。妖精にもやっぱり胸のある無しは大きい物なんだろうか？

「それじゃ、私が持って行くよ。急に行って大丈夫かな？　みんな驚いたりしない？　普段は隠れてるんだよね？」

「どこまで優しいんだかこのお姫様は……。それじゃお願いしようかね。ああ、だいじょぶじょぶ、アタシと違ってみんなシャイだけど、シラユキなら問題ないさー」

私なら大丈夫、って言うのはよく分からないけど、フォルベーがこう言ってることだし、行ってみようか。

「それじゃあ一旦仕舞っちゃおうか、ちょっと待っててね」

テーブルに出してあった物をひょいひょいと影に詰め込む。便利な魔法だね。

フォルベーは特に驚く事も無く、にこにこしながら待っていた。

フォルベーを肩に乗せ、向かうはコーラスさんのお花畑。ここからそんなに距離は離れていない、お話しながらゆっくり歩いていこうか。

「妖精さんたちは普段どうしてるの？　隠れたままって言うのは辛いんじゃない？」

私にも、見えたのは本当に今日が初めてだし、家族も一切気づいてないという事は、多分国民全員が知らないんじゃないだろうか？
それは言い過ぎか。

「隠れたままっていう訳じゃないよ？　誰がそんな引き篭もり生活するもんかって。人には見えないようにしてるだけさー」

「見えないように？　消えたりしてるの？」

「ふっふふー。秘密だ！」

「えー？　いいじゃんいいじゃん。まあ、いいか」

「諦めるの早っ！　もっと聞いてよ！　面白いなシラユキは……。アタシ見ても全然驚かないしさー。最初はね？　驚かして泣かして逃げたところで、クッキーを頂くって寸法だった訳よ。それがふっつーに話しちゃってまあ、拍子抜けだよ。ふふ、おかげでいい友達ができたからいいんだけーどねー」

なるほど、悪戯妖精だった訳か、危ないな。一人歩きがトラウマになるところだったよ……

「あの時はちょっと、気分的に参っちゃってたからね、驚く余裕が無かったと言うか何と言うか……。その後妖精さんだー、って気づいて驚いたよ」

「あららら、そいや、今日は珍しく一人だね。どうしちゃったん？悪戯でもバレて、怒られて閉め出された？」

フォルベーと一緒にしないでよ。悪戯って言うのはバレないようにする物よ！

し、してないよ？　しても兄様のプリンを食べるくらいだよ？

「んーん、ただのお散歩。一人で出歩く訓練と、一人なら妖精さんが見えるんじゃないかって、ちょっと前に話してね、今日やっとそれを実行できたの。父様ったら、今日この辺り一帯を立ち入り禁止にまでしたんだよ？　大袈裟だと思わない？」

「ウルギスも昔はヤンチャ坊主だったのに、今じゃすっかり親馬鹿パパだねえ」

そうそう、父様って昔は怖い人だったらしいんだよね。……ん？

「父様の昔を知ってるって、フォルベー何歳なの？」

「知らにゃい。年なんて数える習慣が無いからさー、ウルギスが生まれるよりずっと、ずーっと前から生きてるよん」

す、凄い……

見た目子供なのにやっぱりとんでもない年齢みたいだね。
こんな機会は滅多に、と言うか、今後もう二度とないと思う。今のうちに聞けるだけ聞いておこう。

「お爺様お婆様も知ってたりするの？　どんな人だったか分かる？」

「質問ばっかだね、さすが子供。うんうんいい事だねえ。でもね、シラユキ」

フォルベーは肩から飛び立ち、私の顔の前で止まる。

「答えだけ聞いて面白いかい？　お姫様だし子供だから今は面白いんだろうけど……。これから自分が後何年生きると思ってるん？」

「え？　あ、ご、ごめんなさい……」

今日できたばかりのお友達に質問攻めは駄目だよね、怒らせちゃったかな……

「オウフ！！　ちょいちょいシラユキ！　こんな程度で泣かないでよー。あー、お姫様だったか、しまったなー……、優しすぎるってのも考えモンだねえ……。アタシが言いたいのはさ、自分で答え見つけたほうが楽しい、っつー事よ、分かる？」

「ふぇ？」

自分で見つける？　答えを？

「なんだろこの子、守りたくなってくるわ……、こりゃウルギスのこと馬鹿にはできんねー。いい？　世間知らずのお姫様。今日初め

て一人で歩いてみてさ、早速一つ自分で発見したじゃん？　ホレホレ、アタシアタシ。実際はアタシが出てきたからなんだけどね？　ま、んなこたぁどうだっていいじゃない？　一人で、外に出て、アタシ、妖精、知らない物、分からなかった物を一つ見つけたんだよ。簡単な事っしょ、分かんなきゃ分かる所行きゃいいの。成人したらさ、ウルギスみたいにこの森を飛び出して行っちゃえばいいじゃん？　んでさ、ルルも、ネネも自分で見つけてみなよ。多分この大陸のどっかにはいるって、多分」

ルルとネネ、お爺様とお婆様の名前だ……

自分で探す？　お爺様とお婆様を？　それだけじゃないか、本を読んでみんなに質問するだけじゃなくて、自分でも確かめに行けっていう事か……

「でも、森の外は……、怖いよ。森の中だって一人は怖い。今はフォルベーがいてくれるからいいけど……、一人なら広場で泣いちゃってた」

あの時はもう泣く寸前だった。ホントにフォルベーが来てくれてよかったよ。

「バーカ！！　くそう！　だからこの子大好きなんだよ！！！　だーれが一人で行けって言った？　メイドさんでも、ウルギスでも連れてきゃいいじゃん」

「へ？　あ、そうか！」

「前のお姫様、っと、ユーネちゃんか。あの子だって外行ってみたいーってギャーギャー騒いでたんよ？　一人で行きたいじゃなくて、

もちろん連れて行けってね。一人で何でもできると思うなよー？
……んー、違うか。ね、シラユキ」

「な、何？　どうしたのフォルベー？」

フォルベーは急に真剣な顔つきになって続ける。

「一人で全部やろうと思っちゃ駄目だよ。一生メイドさんにオンブ抱っこでもいいと思うよ？　お姫様なんだからね。家族に遠慮なんてするもんじゃないよ？　多分無意識にしちゃってるんだと思うな」

「遠慮なんて……」

「はいはい私のターンはまだまだ続くのよー、話半分でもいいから聞いときなさいな。今シラユキ子供じゃん？　もっと子供っぽく我侭言って、元気に外走り回って、転んで怪我して泣いて、家族に迷惑掛けてりゃいいのよ」

「あ、それはよく言われる」

「でしょ？　みんな迷惑掛けて欲しいんだって。ま、度が過ぎるのもアレだと思うけどね？　シラユキお姫様なんだぜ？　もっと我侭に生きようぜー！！」

「わ、我侭って難しいんだよ……」

「それだけ恵まれてるって事にしときなさいって。……あー、何の話してたんだっけ？　ま、いっか。花畑行こう！　そろそろ着くよー！」

何というフリーダムな人だ……。自分の言いたい事だけ言って終わらせてしまった。しかも多分、自分が何言ったかもう完全に覚えてないよ。結構大事な事を教えてくれた気もするんだけどな……

私なりに解釈すると、答えは自分で見つけろっていう事かな。子供のうちも、大人になっても、家族に迷惑掛けてもいいから、自分で見て自分で感じて、それで自分なりの答えを出せって？

さすがに実際世界中を見てきているだけあるね。

でもなー、私にはなー、難しいなー……

「ま、後百年も生きりゃ、考えも変わるんじゃない？　一人で世界中旅できるような、ふっとい神経の高飛車お姫様になってる可能性だって……、無いわ」

「あはは、それは無さそうだねー。でも、うん、今はいいか。フォルベー、ありがとね。まだまだ質問するけど、適当にはぐらかせて答えてもいいよ」

「質問はしちゃう訳ね。さっきはああ言ったけど、それもいいと思うよ？　シラユキのやりたいようにやればいいのさー」

フォルベーは私の周りをくるくると飛び回りながら楽しそうに、とても楽しそうに笑っている。

さてと、ここまでにしようか。花畑まで行ってもしょうがないよね。

私は立ち止まって、フォルベーに話しかける。

「それじゃ、最後の質問いい？」

「ん、いいわよ。まったくこの子は……、何で気づいちゃうのかしら」

「ごめんね？　理解が早くってさ。えとね、妖精さんって、いないの？」

「うん。ごめんねシラユキ、いないの。夢、壊しちゃった？」

「ううん、大丈夫だよ。これも私が見つけた一つの答えになるのかな」

「そうかもね？　答えたのは私だけれども、その答えを導き出したのは、シラユキ、あなただからね」

「完全な答えを貰っちゃうって、ちょっと悲しい事なんだね。思っ

たよりショックが大きいや……」

「そうよ。答えを貰ってしまったらそこまで、もうその先は無いわ。ああ……、答えない方がよかったかしら……」

「あはは、いいよいいよ。妖精さんを信じてるほど子供じゃないよ。でも、ちょっと残念な気もするね」

「でしょ？　私が言いたいのはそういう事だったの。分かってくれたかしら？」

「うん！　ありがとう！！　あ、あのー、もう一つだけいいかな？　これは絶対に答えが出ないから」

「謎は謎のまま、っていうのもいいものよ？　そうね、質問にもよるわね、言うだけ言ってみなさい」

「うん、あのね、今日はどうして来てくれたの？　悪戯のためなんかじゃないよね。最後に、それだけ、教えて欲しいな」

「あら、そんな事？　んー、どうしようかしら。あ、先に私の質問にも答えてもらっていい？　その後なら答えてあげちゃう」

「いいよ？　私に答えられるのかな……」

「シラユキにしか答えられないから大丈夫よ。ねえ、シラユキ、いつ気づいたの？」

「え？　あー、最初に怪しいなって思ったのは名前を聞いたとき、かな。だって、そのままだよ？　口調もバラバラで何か変だったし

さ」

「ば、バレバレだった訳ね。あー、恥ずかし。私の答えはね、シラユキが一人で泣きそうだったのが我慢できなかったから、でいい？」

「えー？　そう言うの、えこひいきって言わない？　大丈夫なの？　立場上まずいんじゃないのかな……」

「いいんじゃないの？　何か罰がある訳でもないんだし、ね？　でも、次はもう無いから安心しなさい。これでもう二度と逢う事は無いわ」

「ううー……、そう言われちゃうと寂しいよ……」

「いつでも見てるからね？　嘘だけど。今日はたまたま、偶然よ」

「たまたまだったの！？　まったく、ホントにらしくないんだから！！」

「ふふふ、ごめんなさい。さ、てと、そろそろ行くわね？　シラユキも早く帰ったほうがいいわよ」

「待って待って！　ええと、今日の事も、そうだけど、あの、ありがとうございました！！」

「どういたしまして。それじゃね、バイバイ。私の大切な、可愛い可愛いシラユキ……」

「うん！　また、じゃないや。さよならもやだな……、おっと、消えちゃうよ。……いいや！　ありがとう！！！」

その８９（後書き）

ユーフォルビア……、一体何者なんだ……

期待を大きく裏切る展開だったかもしれませんね。

その９０

フォルベーが消えると、また辺りは鳥の鳴き声と葉ずれの音しか聞こえなくなってしまった。

まったく、あの人は何やってるんだか。いくら私が泣きそうだったからってホイホイ出て来ていい人じゃないだろうに。まったくまったく、優しい人だね、もう……

これでもう、本当に二度と会う事は無いんだろうね。元々そうだった筈が、おまけで一回出て来たような物だ、運が良かったと考えよう。

これでまた一人か……。フォルベーとのお話が楽しかった分、それが無くなってしまった寂しさも凄い。泣き出してしまいそうだ、早く家に帰ろう……

今歩いてきた道を振り向く。当たり前だが誰もいない、人の気配が全くしない。家に帰るまで一緒にいてもらえばよかったよ。

そういえば時間はどれくらい経ったんだろう？　まずい、軽く一時間は過ぎている気がする。時計は大きな柱時計が家にあるだけだから、外だと正確な時間は分からないんだよね。成人したら腕時計が能力で作れないか試してみよう。

うーん、走って帰ったほうがいいかなこれは。もしかして、みんな私の事を探し回ってたりするんじゃ……。早く帰ろう、そうしよう。

でも、何故か、足が前に進まない。みんなの事を思い出してしまったのが、とどめになってしまったみたいだ。

寂しいよう……

家に帰ればみんなが待ってる、それは頭の中では分かっている。
でも、寂しい、悲しい、涙が止まらない。
広場、せめて広場まで戻れば、誰か見に来てくれているかもしれない。そうだ、広場まで、頑張って戻ろう。

よし行くぞと決めて、歩き出そうとした時に気づいた。
こんな涙目じゃ転んで怪我しちゃうか、少し落ち着くまでここにいるしかないね。
いやいや、涙なら拭けばいいじゃない、と、ポケットに入れてあったハンカチを取り出す。私の名前が刺繍してある、真っ白なハンカチ。もちろん刺繍してくれたのはシアさんだ。

失敗した。さらに涙が出て来てしまった。それに、このハンカチは涙なんかで汚したくないな……

「ひっく……、ううう……、とーさまー……、かーさまー……。寂しいよう……、帰りたいよう……。シアさぁん……」

駄目だ、もう嫌だ。帰りたい、みんなに、会いたい……

どれだけ泣き続けたか、多分数分だろうと思う。

「姫様！！！」

遠くからだが、はっきりと声が聞こえた。

「ふぇ？　シア、さん……？」

顔を上げると道の先、少し離れた所にシアさんがいた。広場までの道、広場にいない私を探してくれていたようだ。

「姫様！　ああ、……良かった……。姫様……」

目が合った次の瞬間には、すぐ目の前に。驚くよりも早く全力で抱きしめられていた。苦しい。

「シアさんだ、ううう……、シアさんだ……！　寂しかったよう……」

「姫様……、どうして、こんな、う、ううう……」

私もシアさんも大泣きだ。どれだけ心配を掛けてしまったんだろう……

抱き合って泣く事また数分、シアさんが離れようと身じろぐ。

「やだ、もうちょっとこうしていたい……」

「ひ、姫様……、分かりました。今から少し大きな音が上からします。大丈夫ですよ、ただの合図ですから」

そういうとシアさんは、一度左手を放し、またすぐに戻す。

そのすぐ後、パン、という乾いた、思ったより大きな音が頭上から聞こえた。ちょっとビックリしてしまったよ。

上を見上げると、黄色い煙が広がっていた。合図なのかな？　私の居場所を探し回ってるみんなに伝えたんだろうと思う。

むむむ、そうなると、ここには人がわらわらやってくるんじゃないのか？　さ、さすがに恥ずかしいぞ……

この年に、十二にもなって迷子捜索だよ！　ううう、でも、自業自得か……

「大丈夫ですよ、姫様が見つかりましたという合図です。合図を確認したら館へ戻る手筈となっていますから」

「そうなんだ……。うん、ありがとね……。ねえシアさん、ちょっと我侭言ってもいい？」

「館へ戻るまでの間でしたら何なりと、どんな事でもどうぞ。その後は皆様からのお説教が待っていますからね」

やっぱりお説教はあるかー。寄り道しないっていう、姉様との約束を破った私が悪いからそれはいいんだけどね。

「だ、抱き上げて連れて帰ってもらってもいい、かな？　後、できたら泣いてた事は内緒に……」

「その程度の事でしたら喜んで。むしろ私からお願いしようとしていたところです。ですが泣いていたことも含めて、何故こんな所にいたかという理由は、皆様の前で全てお話して頂きますよ。では、まずは失礼を」

ううう……、話さないと駄目なのかー。恥ずかしい……

シアさんは私を抱き上げてくれる。いつも優しいが、今日は特に優しい抱き上げ方をしてくれている気がする。

「それでは、帰りましょう。しっかり掴まって、いますね、失礼しました」

「うん。まだ離れたくない。ありがとシアさん……」

ものの数分で家に到着、片道徒歩で三十分くらいの距離が数分だ。私も舗装された道ならこれくらいの時間で帰れたはずなのに、ホント何やってるんだか……

う、うわあ……

家の前には家族が全員そろって待ち構えていた。メイドさんズたちも後方で待機しているね。みんな涙目だ。

「シラユキ！　ああ、もう！　この子は……。心配掛けて……！！」

「ご、ごめんなさい姉様」

駆け寄ってきた姉様、まだ泣いてるね。ああ、私の無事を確認してまた泣き出しちゃったのか。

「叱るのは後だ、今はまず、無事で良かった……」

父様から後でお説教があるらしい。何気に初めてなんじゃないかなそれって。

「広場までの道でどうやったら迷子になるんだよ……。バレンシア、ちょっとそいつこっち寄越せ」

「はい。降ろしますよ姫様」

抱き上げたままだった私を地面へと降ろす。

「待って、ルー。先に私にお願い」

母様が兄様を抑えて私の前に出てきて、抱きしめる。いつもよりも強めだ、苦しいね。でも、嬉しいな。

「本当に私たちがどれだけ心配したか……。でも、無事で良かった。見たところ怪我も無いようね。暫くは放してあげないんだから、覚悟しなさい」

「うん……。ごめんなさい母様。ごめんなさい、みんな……」

折角止まった涙がまた出て来てしまったよ。

場所は変わり、いつもの談話室、メンバーは例の十人だ。
私はあの後、そのまま母様に抱き上げられてこの部屋まで連れてきてもらってしまった。母様は本当に暫くは私から手を放す気はないらしい。
抱き上げたまま椅子に座り、私は膝の上に横抱きで座る格好になる。私としても、母様に全力で甘えたい気分なので全く問題はない。

「あー、何から聞いたもんかな……。こいつが無事だったならもうそれでいいや、とも思っちまうんだけど」

兄様はさすがと言うか……。気が抜けちゃったかな？

「そういう訳にはいかんな。危険は無かった様だが、どうして花畑の近くになどいたんだ。家とは完全に反対方向だろう？」

「話すまでは絶対に許さないからね。私との約束を破ってまで、どうして花畑に向かったの？」

「あ、ええと、そのー……」

何て説明したらいいかな……。あった事を全部そのまま話すと問題になるってレベルじゃないしなー……

「シラユキ？　お願い、話して？　一人でもっと遠くへ行ってみたかったの？　コーラスに会いたかった？」

「う、ううん。そういう訳じゃないんだ……。ええと、えっとね？　よ、妖精さんがね？」

「え……？」

「妖精？」

「よ、妖精さん？　何なのこの子可愛い……」

や、やっぱり駄目か！　誰も信じないよそんな事！

姉様は信じちゃったー！！！

「よ、妖精かよ……。やっぱ凄いなシラユキは……」

兄様も信じてる！？

「シラユキに妖精が見えるのは当たり前だろう？　今さらそんな事には驚かん」

「そうよね？　何か驚く事でもあるの？　と、それは今は置いておきましょう。シラユキ、妖精がどうしたの？」

誰も疑う気配すら見せないよ！

「何でみんなそんなに簡単に信じちゃうの？　よ、妖精さんだよ？　おとぎ話の中の存在だよ？」

「お前がそんなくだらない嘘つく訳無いだろ」

「純粋な心の優しい子供の前には顔を見せるんでしょ？　シラユキが一人になったら出て来るわよね」

「シラユキに妖精が見えるのは間違いないんだ。そして俺たちにそんな言い訳じみたつまらん嘘もつかない。考えるまでも無いな」

「ユーネには見えなかったのにね。ふふふ。シラユキ、誰も疑ったりしないから大丈夫よ。ゆっくりでいいから話して、ね？」

もうちょっと疑おうよ……。はっ！？　反対に考えれば、私の家族は全員妖精を信じているって事に！？

何よこの、純粋な心を持った大人たちは……

「うん。本当の事だから笑わないでね？　広場でクッキー食べてたら妖精さんが目の前に出てきたの。それでね、お話しながら一緒に食べてたんだけど……、シアさん何で笑ってるの！？　メアさんもフランさんも、カイナさんまで！　やっぱりみんな信じてないんだ！！」

た、確かに、迷子の言い訳を妖精のせいにする子供にしか見えない！！！

よく見てみると、この部屋にいる全員がにやにやしてる……？

クレアさんもか！？

「ああ、違うぞシラユキ。妖精との事を話すシラユキのあまりの可愛らしさに、ついにやけてしまうだけだ、気にするな。明日は祭り

だな」

「気にするよ！！　お祭りも駄目！　もう……。えーと、その後、私と妖精さんの二人じゃクッキーが食べきれなかったから、その妖精さんのお友達にも持って行こうって事になってね？」

「なるほど、それでその妖精の友達の住処が、コーラスのお花畑だった訳ね、うんうん。いいなー、シラユキは、私も会ってみたかったな……」

「途中にちょっと、色々あって、妖精さんはもう元いた場所に帰っちゃったんだ。そこに、シアさんが私を探しに来てくれたの」

途中の色々はさすがに話せないけど、みんななら多分察してくれると思う。無理に聞こうとなんてしないよね。

「ええ、一人きりという寂しさに大声で泣く姫様は、大変可愛らしかったです。一生物の思い出を頂きました」

「シアさん！？　な、何言ってるの！？」

こ、ここでそれを言う！？

「何だコイツ、一人が寂しくて泣いてやがったのか？　可愛いな」

「これはもう私は怒れないわ……、許しちゃう。お説教はお父様がお願いね」

「俺も無理だ……、寂しさに泣いてしまったシラユキを叱るなど……」

何その苦しそうな表情は!?　この過保護家族め！　くううう、恥ずかしいいいい！！

「そうなると私かしら？　この子を叱るのはちょっと抵抗があるのだけれど……。仕方ないわよね」

かかかかか母様が!?　やややややばい！！　だ、誰か……、あわわわわわ……

「動揺しすぎよ、可愛いわね、もう。いい？　シラユキ。いくら妖精と会えて嬉しかったからと言って、あなたはユーネとの約束を破ったのよ？」

「う、うん……。ごめんなさい姉様……」

「いいのよ、もういいの。もう怒ってないからね？　お母様、許してあげて？　シラユキが叱られるなんて見てるだけでも辛いんだもん」

「そうね、私も辛いわ……、これくらいにしましょう。ごめんねシラユキ？　厳しいお母様で」

許された！　……早すぎない!?

「どこが厳しいの!?　私まだ怒られたっていう自覚が無いんだけど!?　あれ？　今怒られてたの私？」

「だってなあ、ホントに安全な散歩道だしな。泣いちまったのはち

ょっと誤算だったが」

「悪いとしたらユーネとの約束を破った事くらいだしな。俺たちが心配しすぎただけの結果じゃないのか？」

それならせめて、その約束を破った事に対してもっと怒ろうよー！！！

し、叱られないのは逆に罪悪感が残ってきついわ……

「あと十年くらいは一人で出歩くなんて控えさせ、ううん。一生駄目」

「一生！？」

「ふふ。一生は大袈裟だけど、当分は一人で外出なんて許可しないからね。……一生でもいいかしら？」

「思いっきり否定したいけど、あそこまで寂しく感じるなんて思わなかったし、当分はいいや……」

「姫様のお側には常に私がいます、寂しい思いなど決してさせませんよ。私ももう姫様無しでは生きていけない体ですから、責任はとってくださいね」

「い、嫌な表現はやめて！！！　頬を染めて言わないでよ！」

私もそうだよ！　家族が、みんながいないと生きていけない体になっちゃってるんだよ！！

それでもいいんだけどねー。

今日は自分が甘えん坊のお姫様という事を再認識させられた。
フォルベーの言うとおり、一人でなんて何もできなくていいのかもね。みんなに迷惑掛けて、世界中を旅するのもいいかも？

どうせなら冒険者にでもなってみようか？　ふふふ、面白そうじゃない？

その９１

「次はどうするよ？　そろそろエディも討伐系連れて行ってもいいんじゃないか？」

「と、討伐系！？　俺、実戦なんてまだストレイドッグとしかやったことないんだけど、大丈夫かな……」

「あたしはまだ、採取メインで夜営にもっと慣れさせた方がいいと思うけど……。変な意味じゃないよ？　夜営中に襲ったりしないよ？　精々手と口で……、何でもない」

「襲うなら俺を襲え。採取もなあ、凍らせる魔法が使えないとやっぱな……。ああ、勘違いすんなよ？　実力は付いてきてるさ。俺の言えたセリフじゃないんだけどさ、魔法って大事だぜ？　燃やすのと凍らせるのは特に必須の魔法なんだよ」

「多少冷やす、くらいは出来るようになってきたんだけどなあ……。完全に凍らせるのはまだまだ出来そうにないよ。やっぱその二つは使えないとマズいよなあ……」

「そうですね。採取した依頼品を持ち帰ってみたら腐っていました、などではお話になりません。明かりは炎でも代用が効きますが、風の魔法では多少冷ます程度、凍らせるのは無理ですからね。物の温度を下げる、という魔法は本当に冒険者には必須の魔法なんですよ」

「メイドさん補足ありがとな、助かるよ。俺たちそういう細かい説明が苦手、と言うか、頭から抜けちまうんだよな」

「そうなんだよねー。戦い方や逃げ方は教え易いんだけどね。夜の方もいい加減教えてあげたいんだけどな？　そろそろ観念しちゃいなよ、毎晩でも優しく教えてあげるよ？」

「しないって！！　ヤりたくないって言ったら嘘だけどさ、やっぱナナシさんとはできないって」

「オイやめろ馬鹿。シラユキちゃんの前では控えろって言ってるだろ。ナナシは今晩俺が相手してやるから我慢しろよ」

「あ、ごめん！　つい、ね。それじゃ今晩を楽しみにしとこう。ふふふ」

今日も私とシアさんは冒険者ギルドに来ている。ラルフさんたち三人組は、エディさんの育成のためにあまり町から離れる依頼は受けないのだ。大体週に一日決まった日には、冒険者ギルドで他の冒険者も交えて、エディさんの今後の育成計画などを話し合っている。エディさんの顔なじみを増やす、という理由もあるんだと思う。ラルフさんはそういうのをちゃんと説明してあげないと駄目だよね……

まあ、いい、それはひとまず置いておこう。実は最近とても気になる事があるのだ。

それは、ラルフさんとナナシさんのこと。二人に会うたびに毎回思わされる事なんだが……

この二人って、付き合ってるんじゃない？　恋人同士なんじゃないの？

ここで本人たちに直接聞く様な馬鹿な事はしない、簡単に答えが出ては面白くないからだ。以前までの私ならきっとすぐに本人たちに確認をとっちゃっていただろうね。

でも今の私は違うのよ！　何事も自分で調べて、楽しんでみるのだ。……決して勘違いで笑われるのが怖いのではない！　ふう……

「私、ちょっとミランさんと話してくるね、シアさんはそのまま続けてていいからね。エディさんに色々細かい所を説明してあげて」

エディさんに聞くのが一番良さそうだが、本人たちの目の前と言うのはいけない。連れて離れるのも不自然すぎる。そうなると残る選択肢はミランさんしかない。

「はい、分かりました、お気をつけて。ですが、他の冒険者が近付いて来たら、カウンターに隠れるか、すぐにこちらに戻って来てくださいね？　泣き出しでもしたら血の雨が降ることになりますよ……」

「わ、分かってるよ、怖いなあ、もう……。じゃ、行ってくるね、って言ってもすぐ目の前なんだけど」

「珍しいな、いつも興味深そうに聞いてるのにさ。冒険者の話もさすがに飽きてきたか？」

「う、あたしのせいかな、ごめんね？　Hな話ばっかしちゃってさ。ついつい出ちゃうのよね、これが」

「ううん、大丈夫ですよ、冒険者についてのお話ももっと聞きたいです。でも今日は、ミランさんとお話がしたくなっちゃって」

言いながらパタパタと歩き出し、カウンターの中、ミランさんの近くへ向かう。

ナナシさんはあれでも精一杯ぼかした話し方をしてくれてるみたいだしね、人の性格を曲げてまで強制させようなんて思わない。私もそう言った事に興味が無いと言えば嘘になるしね。

カウンターの中に入るまで、いや、入った後もシアさんの視線を感じる。ラルフさんたちと会話をしながらも、注意は全て私の方へ向けているのだ。全てじゃないか？　多分９９．９％くらい、ほぼ全て、だ。

「シラユキ様？　どうしました？　私に何か……？」

「ふふ、ちょっとミランさんとお話がしたくて、来ちゃった」

「う、嬉しいです……。どんなお話ですか？」

勝手にカウンターの中に入り込んできた私を咎める様な事もせず、ミランさんは普通に話しかけてきてくれる。

本当は、ギルド関係者以外はカウンターの中へは入っていけない決まり。でも何故か私だけは例外とされていて、カウンターの中だろうが奥の部屋だろうがどこに入っていってもいいという事にされ

ている。書類だって触ってもいいらしい。普通は絶対駄目、という以前に大問題になるはずなんだが……。リーフサイドの冒険者ギルドのギルド長の決定だ、問題は無い。

最近ギルド長が交代になった。以前の小物臭漂う人は、リズさんの提案どおりブールジーヌと言う山奥の小さな村に飛ばされたみたいだ。顔も知らない会った事も無い人だ、どうでもいい。そしてあっさり決まった後任の新ギルド長は……、こちらも知らない人だ。

知らない人のはずなんだけど、着任早々その日のうちにまず決めたことが、私のギルド内での行動は一切制限しない、という決まりだったらしい。新ギルド長……、一体何者なんだ……

能力で仕舞っておいた、私用の小さめの椅子を取り出して座る。これも何度かは驚いてくれたのだが、今はもう全くの普通、当たり前の行動として捉えられてしまっている。寂しいね。

「ねねね、ミランさんミランさん。ラルフさんとナナシさんって、どう思う？」

この位置からラルフさんたちのいるテーブルまでの距離はかなり近い。小声でミランさんに問いかけてみる。

「どう？　ええと……、二人ともCランクで……、あ、性格かな。二人とも面白いいい人たちだと思いますよ？　ラルフさんは以前と違って、エルフの女性とも普通に話が出来るようになりましたし、評判も中々です。ナナシさんは、その、シラユキ様にはできたらあまり積極的に話して欲しくないと言うか……。でも、いい人には変わりないですね。明るくて可愛らしくて、っていう年齢でもないか、素敵な女性だと思います。求婚もかなり受けている筈ですよ、今は

全て断っているみたいですけど。ふう、まったく羨ましい……、私なんて……」

「ええ！？」

「姫様！？」

「な、何でもない！　大丈夫だよ！！」

「何でもないです！　な、投げないで！！！」

危ない！　ナイフ出してたよ！！

どうやらナナシさんは相当モテる人みたいだ。

明るくて可愛らしくて、Hが大好きな猫系の獣人の女性、さらにCランクでも中堅クラスの実力者と来た。ああ、モテない筈が無いか……

そういえばラルフさんはエルフ好きだったっけ？　いくらエルフ好きでもこんなに素敵な女性が近く、いや、隣にいるのに好きにならないとは考えられない。

ラルフさんとナナシさんは、何年も前から組んでてかなり仲が良い、親友と言ってもいい冒険者仲間なんだよね。まさか、友達関係が長すぎてお互い告白できずにいるのか？　話を聞いてる限りじゃHも普通に、と言うか、結構頻繁にしてるっぽいんだけどね……。それってセフ、うわ、変な事考えちゃったよ恥ずかしい……

見た目は完全に恋人同士に見える。座ってるときの椅子の距離も、なんとなーく近くにいるようにしてる気がするしね。うーん……、やっぱり怪しいな。

「あっと、違うの。そうじゃなくてね？　その、あの二人の仲、どう見えるかな？」

「ああ、なるほど。うふふふ、シラユキ様も女の子ですね。やっぱりそういうのは気になっちゃいますか」

ミラさんもやっと分かってくれたようだ。内緒話の様に話し方が小声になる。

「シラユキ様が思われてる通り、付き合っている様に見えますよね。でも、付き合ってはいませんよ、あの二人。お互い一人身、恋人もいない筈です」

「そ、そうなの？　ミランさんはなんで分かるの？」

受付でぼーっとしてるだけなのに、というセリフは飲み込んだ。危ない危ない、協力者を失うところだったよ。

「だって、ナナシさん未だに一晩の、こほん。恋人のいる身で受けるような物ではない雑務依頼があるのですが、ナナシさん、結構頻繁に受けているんですよ」

「な、なるほど、あの依頼ね。確かにラルフさんが恋人なら絶対止めそうだよね」

一晩のお相手の募集の依頼か。

いくらたった一晩で大金を稼げる依頼でも、恋人にそんな仕事はさせたくないよね。ラルフさんは多分だけど、恋人は大切にするイメージがある。冒険者を辞めさせてでも止めるんじゃないのかな。

「し、シラユキ様？　え？　なるほどって、え？　内容、知ってるんですか？　分かるんですか？」

「え？　う、うん。一晩の、その、アレのお相手募集の依頼だよね」

言わせないでよ恥ずかしい……

「わ、分かっちゃだめですよ！　誰に聞いたんですか！？　まさか、ナナシさん！？」

「うぇ！？　あ、あたし！？」

「ミランさんストップ！　落ち着いて！　何でもないよナナシさん！」

「ああ、うん……。死んだかと思ったよ……」

ミランさんを落ち着かせて椅子に座らせる。

あ、危なかった、そういえばミランさんも怒ると怖い人だったっけ？　受付兼Ｂランクの冒険者だっていう事忘れてたよ。

「誰から聞いたって訳じゃなくて、その、うーん、自然に？」

「何をどうやったら自然にそんな知識がついちゃうんですか……。ううう、メイドさんの誰かかな……、シラユキ様にはまだまだ早いですよ……」

「そんな感じかな。ふふ、驚かせてごめんね？　それじゃさ、ラル

フさんはどう思ってるのかな。ラルフさんってエルフ大好きな人だけど、ナナシさんすっごくいい人だと思うよ？」

もしかしたら、ナナシさんからは完全に脈無しなのかもしれないね、あんな依頼を受け続けてる訳だし。でも、それならラルフさんは？

「どうなんでしょう？　エルフ好きなのは確かですけど、気が多い人というか、本命がいないんじゃないですか？　いっその事当の本人たちに聞いてみましょうか」

「え？　だ、駄目駄目！　あのね、答えが分かるまでの過程をね、楽しみたいの。今ミランさんとこのお話してるだけでもすっごく楽しいんだよ？　まだ答え聞くのは早いよー」

こんなに楽しいお話になるとは思わなかった。お友達の恋愛話だからっていうのもあるけどね。

ミランさんは右手に口を当てて、よろめくような仕草をする。

「か、可愛いすぎる……。な、撫でてもいいですか？　はっ！？私ったら何を……！　すみません！」

「姫様を撫でようなどと、後百年は早いです。受付風情がおこがましい……」

「シアさんいつの間に！？　言い方もちょっとひどいよ！」

「ば、バレンシアさん!?　あああああ、違うんです！　あの！　か、可愛すぎたんです!!」

「ミランさん落ち着いて！　撫でてもいいから！　シアさんはいつもなんでミランさん驚かすの!?」

「打てば響く、素晴らしい音色を奏でる楽器があったとしたら、姫様はどうなされますか？」

「うん、納得しちゃった」

「が、楽器扱い!?　ひ、悲鳴を上げろって事ですか？　苦痛に泣き叫べと!?」

「いいですね、それ。さすがミランさんです、表現がいやらしい」

「そういえばミランさんはいやらしい人だったね」

「いやらしくありません!!!」

その92

ミランさんをからかうのに堪能したのか、シアさんはまたラルフさんたちのいるテーブルへと戻っていった。

「ごめんねミランさん。な、撫でる？」

「は、はい！　ししし、失礼します！」

ミランさんはおっかなびっくりといった感じで、私の頭の上へ手を伸ばし、優しく撫で始める。

「ふふふ」

ミランさんにこうされるのは初めてだ。なにかちょっと嬉しくなって、ついつい顔がにやけてしまう。

「かかかかか可愛いすぎる……、髪もサラサラ……。私もこんな可愛い子供欲しいなぁ……」

子供って可愛く見えちゃうよね、特に私は背が小さめだし、尚更可愛く見えてしまうんだろう。

可愛い可愛いと言われるのは嬉しいが、恥ずかしくもあるね。

「はー……、ずっとこうしていたい……。っと、すみません。ありがとうございました」

私の頭から手を放すミランさん。

かなり満足してくれたのか、凄くいい笑顔をしてくれている。嬉

しいね。

「ミランさんは好きな人はいないの？　私みたいな、その、可愛い子？　が欲しいなら結婚して作るしか……。子供作るとか言っちゃった……」

軽く問いかけたつもりが、自然に子作りとか凄いことを言ってしまい、顔が赤くなってしまった。

「ふふ、可愛らしい……。シラユキ様にはまだまだ考えるのも早いですからね」

「う、うん。それで、どうなの？　好きな人、恋人とかさ」

ミランさん可愛い人だし、いてもおかしくはないと思うんだよね。

「恋人ですか？　いませんよ。好きな男性もいませんね。私ももう三百近いですし、そろそろ結婚したいと考えてるんですけどね……。まぁ、その、気になる方もいるにはいるのですが、既に愛する人がいらっしゃいますからね。愛人の座を狙ってはいるのですが、無理でしょうね……。今は受付をしながら出会いを求めている毎日ですよ……」

あ、遠い目。

こんな可愛い人に誰も告白しないなんて！　みんなどういう目してるのよ！　まったく……！

でも、ちょっと気になる発言があったね、自然な話し方すぎて流してしまう所だったよ。

気になる人はいるんだね。でももう恋人がいるか、既に結婚してるのかな？　愛人の座を狙うとか、ミランさんも可愛い顔をして中々大胆な事を考えるね……

「その気になる人っていうのは？　あ、聞いちゃっていいのかな」

しまった！　聞いちゃったよ。

いいか。多分どうせ私の知らない人に決まっている。その人が同じエルフであってほしいと思うくらいだ。

「え？　あ、いや、さすがにそれは……。で、でも、シラユキ様のご質問だし、う、ううう……」

「無理に言わなくてもいいか」

「る、る、ルーディン様なんです……！　ああ、もう駄目だ……、結婚したかった……」

兄様か。

確かに兄様カッコいいよね。ああ、愛する人がいらっしゃるって言い方で気づくべきだったか。しかし兄様かー。兄様は姉様一筋だし、愛人も難しいんじゃないかなー……。ミランさん普通サイズだしね、もっと大きければ不可能ではなかったかもしれないが……

「ふう……。ルー兄様なの！？」

驚くのが遅れた！！

「姫様!?　またですかミランさん!!」

「すみませんすみません!!　できたら命だけはお助けをー!!!」

「何もしないよ!?　ミランさんはもうちょっと私たちを信用して!!」

「まったくもう!　お友達に何かする訳無いじゃない!」

「す、すみません!　ですが、ハイエルフ、王族の方々は、私たちにとって本当に雲の上の存在と言ってもいいくらいなんですよ。シラユキ様がお優しい方と言うのは分かってはいるんですけど、つい過剰に反応してしまって……」

く、雲の上の存在?　神様扱いか!?　そういえばキャロルさんもそんな反応だったよね。詳しく聞いてみるか?

いやいや、今日はまだやめておこう、急いで調べる事でもないや。今はまずは、ミランさんが兄様を、という話からだ。

「ミランさんも早く慣れてね。今度家に招待して、普段の父様母様を見せてあげるから。多分すぐに」

「おおお王族の方の館へ!?　とととととんでもない!!　わ、私ただの一般エルフなんですよ!?」

あるぇー?　逆に慌てさせてしまった。

シアさんが、またか……、という目でミランさんを睨んでいるが、

気にしないでおこう。

「気にしすぎだよ……。この話はやめよう、うん。話を戻すけど、愛人の座、だっけ、ルー兄様の」

「そ、そっちはそっちでとても話し辛いのですが……。はい、ルーディン様素敵ですよね……。ラルフさんを通じて紹介してもらったんですけど、お、王子様ですよ？　王族の方とお知り合いになれるなんて、もう舞い上がっちゃって……。恋と言うより憧れに近い感情ですね」

兄様カッコいいけど、家ではおっぱい星人ないいお兄ちゃんなんだよね。ミランさんの憧れを壊すような真似はしたくないから黙っていようか……

「ミランさんには残念だけど、ルー兄様はユー姉様一筋だからね。多分難しい、と言うか、無理だと思うよ？」

「わ、分かっています……。でも、やっぱり憧れますよね……。一度だけでもいいから抱いていただき、何でもありません！！」

き、聞かなかったことにしよう。ミランさんはやっぱりいやらしい人だ。

「ルー兄様は、胸が大きな女の人なら、後は無条件で興味を持つと思うんだけどね。ミランさんは小さくは無いんだけど、普通サイズだから……」

「ら、ラルフさんの言ってた事は本当の事だったんですね。む、胸で誘惑してみようかな……。やっぱり無理！！」

「あはは。ミランさんも森の中に住んじゃえばいいのに。それなら毎日でもルー兄様に会えるよ？　そうなると私も嬉しいなー。あ、家のメイドさんになる？」

ミランさんメイド化計画か、いいね。

エルフのお友達は全てメイドさんにしてしまいたいね……、？

私ってメイドさん好きなのか！？　嫌な事に気づいてしまった……！！！

「り、リーフエンドの森の住人に！？　だ、駄目ですよそんな気軽に！！　エルフにとってリーフエンドの森は聖地。選ばれた者しか住まうことは許されないんですよ？」

「へ？　そうなの？」

せ、聖地？　ただの森じゃないのあそこ？　え？　どういう事？

「何やら説明が必要な気配を感じまして、思わずやって参りましたバレンシアでございます。リーフエンドの森についての、森の外のエルフの認識のお話でしょうか？」

またいつの間にか真横にシアさんが！？

何か機嫌がいいね。今日はあっちでもこっちでも説明ができると嬉しそうだ。

ラルフさんとナナシさんの話から随分と離れてしまったが、これ

はこれで気になる話題だね。二人の事はひとまず後回し、まずはシアさんの話をしっかり聞こうかな。

「姫様にとってはただの森という認識で問題はありませんよ。ですが、エルフにとってはまさに聖地、聖域と呼ばれるに値する神聖な森。もちろん私も例外ではありません」

「シアさんもなの？　私にとってっていう事は……、私はハイエルフだからかな？」

「はい、さすがは姫様。姫様は不思議に思いませんか？　ハイエルフは世界に七名しか存在を確認されていない事を。他の大陸で今後生まれる可能性はあるとは思いますが、では、ハイエルフは誰から、いえ、何から生まれると思います？」

「ば、バレンシアさん？　あの、それって私が聞いてもいい事なんでしょうか……。王族の方に仕えるメイドさんだからこそ知っても許される事だと思うんですけど……」

誰からじゃなくて何から？　ミランさんの反応からすると、一般のエルフは知らないみたいだね。

考えた事も無いけど、普通にエルフから生まれた、髪と瞳の色が青いエルフがそう呼ばれるようになっただけなんじゃないのかな？

あれ？　でも、お爺様とお婆様が、ハイエルフはハイエルフ同士でしか子供を作れないって言ってたんだっけ？

あ、あれ？　そうなるとお爺様とお婆様は誰から生まれた？

……何から……？

「シアさん、ごめん、ちょっと、怖い。先に答え教えて？　な、泣きそう……」

「ええ！？　す、すみません姫様！！　怖がらせるつもりは全く！　私はなんという事を……。申し訳ありません姫様、ではまず答えから、答えとは言っても私もウルギス様に教えて頂いただけなのですが……。すみません、また回りくどくなってしまいましたね。ハイエルフは森から、いえ、恐らく世界から生まれるのだと思います」

「世界、から？」

「はい。ルル様とネネ様、姫様のお爺様とお婆様は、気づいたらこの世界にいたのだそうです。目覚めたのは、現在姫様の住んでいる館である大木、あの大木の根元で目覚められたとか。お二人は始祖ハイエルフと呼ばれていますね。私たちただのエルフになどには名前を呼ぶ事すらおこがましい、まさに神と同等、いえ、それ以上の存在と言っても過言ではありません」

「大袈裟な話、じゃないんだよね？　でも、森の中の人たちはみんな普通だよ？　みんな家族だよ？」

「ええ、その認識で大丈夫ですよ。今森の中に住んでいるエルフは全て、ルル様ネネ様と家族同然にあの森で暮らしてきたエルフの子孫に当たるんです。もしかしたら、当時の事を知っている方もまだ生きているかもしれませんね」

ああ、まだこの国ができる前から住んでいた人たちなのか。お爺様とお婆様が見つけた森で国を興したんじゃなくて、二人が生まれ

た森に人が集まって国になったのか？
駄目だ、スケールが大きすぎる、全然理解できないや。とりあえず分かる事は。

「み、ミランさん、凄い事聞いちゃったね。もう逃げられないよ？」

ミランさんはもう、友達から家族にランクアップしてもいいんじゃないか、という事だ。

「に、逃げられない！？　ああ、なるほど。この話を聞かせてもらえたのはあれですね。冥土の土産……」

「理解が早くて大変結構」

「違うからね！？　シアさんはもう戻っていいよ！　ありがと！！」

「はい。また分からないことがありましたらお呼びくださいね。いえ、説明の気配を感じましたら勝手に参上致します」

また元のテーブルへと戻って行くシアさん。

どれだけ説明好きなのよシアさんは！

「なんか疲れちゃった……。今の話は忘れようか、またラルフさんとナナシさんの話に戻ろう？」

ミランさんには、もちろん私にも、重大な秘密、国家機密のような話だった。

忘れた方がいいよねこれは……。絶対無理だよ！！

「ううう……。絶対誰にも話せないですよこんな話……。バレンシアさんは一体何を考えて……、あ、すみません。ええと、どこまでお話しましたっけ？」

どこまで話したんだったかな。シアさんのお話のインパクトが強すぎて思い出せないよ……

「えーと……。ナナシさんがまだあの依頼を受け続けてる、っていうのは聞いたね」

「忘れてください！　あ、本人たちに確認を取ろうとしたんですよ確か！」

「ああ！　そうだった！　私が止めたんだったよね。うんうん、そうだったそうだった。でも、まだ本人に答えを聞くのは早いなー」

「エディさんに聞いてみるのはどうですか？　今一番長く二人の近くにいるのは彼ですから、きっと知っているんじゃないかなと思い、あ、答えが出ちゃいますね。どうしましょうか？」

エディさんか。確かに答えが出てしまいそうだけど、まだそこまで長い付き合いでもないよね。もしかしたら当たらずとも遠からずなお話が聞けるかもしれない。

試してみる価値はある！　あの二人を一番近くで客観的に見れる立場だ、他にも面白い話が聞ける可能性だってある。また面白くな

ってきたぞー！！

その９３

エディさんに事情聴取。でも、どうやって？

今エディさんは、ラルフさんナナシさんから今後の修行予定を聞かされているはずだ。呼び出すのはまずいな……。それならこちらから？　そうなるとラルフさんナナシさんの目の前で聞いてしまうことになる。それはもう本人に聞くも同じ事だ。あれ？　詰んだか。

うーん、今日は諦めた方がいいか……。私の好奇心を満たすだけのために、エディさんの今後を決める話し合いの邪魔をする訳にはいかないよね。それは本当にただの我侭になってしまう。

三人ともお友達だし、絶対に気にしないでくれるのは分かってるんだけどね、私が自分で自分を許せそうにない。

「いい考えだと思ったけど、やっぱりやめよう？　大事なお話の邪魔しちゃ悪いよね。気になるけど、うん、諦めよっと」

「シラユキ様なんてお優しい……。でしたら、今度私がそれとなく聞いておきますよ。何か分かりましたら、ええと、お手紙でいいですか？」

おお、その手があった！　さすがミランさん！

「うん！　ありがとうミランさん、お願いね」

「はい！　お任せください！　ふふふ」

よし！　後は、果報は寝て待てか、どんな結果が出るか楽しみだね。

付き合ってなかったらくっ付けるか？　付き合ってたとしたら、ミランさんに例の依頼を受けないようにやんわりと言ってみるか？　どっちも余計なお世話かなあ……。二人の結婚式は見てみたいものなんだけど……、結婚？

冒険者の人は結婚はどうしてるんだろう？　子供が出来ちゃったりしたら……？　引退？　引退した冒険者はその後どうなるの？　年を取ってからもずっと依頼を受け続けるなんて無理だよね……

今まで考えた事もなかったな……。実家、なんて物は無いよねきっと。ある人はあるとは思うが、無い人の方が圧倒的に多いはずだ。

子供の問題はまだいいか、育てられない間は作らなければいいだけだと思う。でも、引退後か……。引退する年齢は、五十とか六十か？　その時家も無い家族も無い人はどうするんだろう？

んー……、駄目だ。何一つ浮かばない。

いや、一つは浮かんでいるんだけどね。できればそうであってほしくない予想なのだ。

「ミランさん、ちょっと、変な事聞いていいかな？　私は知らないほうが良かったり、まだ知るには早い内容だったらそう言って。無理に話さなくてもいいから」

「え？　ど、どうしたんですか急に？　わ、私に答えられる範囲でなら……。そうだ、バレンシアさん呼びます？」

「お呼びですか？」

「ひゃあ！」「きゃあ！！」

い、いきなり話に参加してこないでよ！　もう！

説明の匂いを嗅ぎつけたのか、名前を呼ばれたその一瞬で駆けつけたのか、また定位置、私の横にシアさんがいつの間にやら参上していた。

「び、びっくりした……。シアさんいい加減にしてよー……」

「ち、近付く気配が全くしなかったんですけど……。私一応Ｂランクなんですけどね……」

しょうがないよ、シアさんは元Ｓランクだし……

「驚かせてしまったようで、申し訳ありません。まあ、わざとなんですが、驚く姫様は大変可愛らしく……」

「もう……。さっきもミランさんに言ったけど、教えるかどうかはシアさんが決めてね。えとね、冒険者の人は引退後、どうしてるの？」

「それは……、ええと、なんともまた答えにくいご質問ですね……」

あらら、やっぱりか。

予想通り、という訳ではなさそうだけど、あんまりいい内容でもなさそうだね。教えてもらえるんだろうか？

「姫様がお知りになりたいのは、年老いた、体力の限界の来た人間種族の冒険者はその後どうするか、という内容であっていますか？」

「うん。人間も、獣人の人もそうだね。五十歳くらいでもう限界なんじゃないかなーって」

もしかしたらもっと早いかも？　武器を振り回して戦う、まさに体力勝負だよね冒険者って。体に衰えを感じたらもう無理はできないんじゃないのかな？　他の人にも迷惑を掛けてしまうと思うしね。

「討伐系を避けて、採取依頼や集団での護衛をメインに活動していけば、六十以上でも続けていく事は可能でしょうね。冒険者の引退後、ですか……、ふむ……」

「む、難しい質問ですね。その年まで冒険者を続けるという人自体稀なんですよね。シラユキ様、まずは冒険者が引退する理由から聞いてみませんか？」

むむむ？　その年まで続ける人は少ない？　と言うか殆どいないのか。その前に引退しちゃうんだね、ちょっと安心しちゃった……

「うん。聞かせて欲しいな」

気を楽にして聞けそうだね、多分私が変に構えすぎてただけなんだろう。

「では、まずは私が例を挙げていきましょうか。姫様の考える限界を感じて、という理由は確かに多いですよ。ですが、これは今は置いておきます。他の理由は、よくある話で言えば、結婚と就職の二

つでしょうか。私がそうですね、メイドへの就職……、ではないですね。しまった……」

あまりに自然に話しすぎて、自分でも言ってはいけない事だと気づかなかったようだ。シアさんとしては珍しいね。今日は説明する機会が多くて機嫌がいいし、気が抜けちゃってたかな？

そういえばシアさんは、冒険者を辞めて放浪した末に、この国に流れ着いたんだっけ……。聞きたい、聞きたいけど……！

「き、聞かないから大丈夫だよ！　シアさんは私のメイドさんになるために冒険者を辞めたんだよね！　うん！」

ここは強引に話を進めよう。話せるときになったら、話す必要が出来てしまったらきっとお話してくれるだろう。

結婚と就職か……。どっちも今ひとつ分かんないね、何となくは理解できるんだけど。

「あ、ありがとうございます姫様……。では、気を取り直しまして。結婚は簡単に言えば、嫁入り、婿入りですね。家族の一員として、家に迎え入れてもらう、という事です。その後は一般の町の人と変わらない生活を送る事になると思いますよ。元冒険者の夫という物に憧れる女性はそれなりに多いんですよ。男性の場合は自分より強い女性は引いてしまう様ですが」

「なるほど、ミランさんはそれを狙ってるわけだね？　ふふふ、難しそうだねー」

そうだよね……、冒険者より、受付より……、お嫁さんだよね！！

ミランさんは強いけど凄く可愛い人だし、モテると思うんだけど

なー

「は、はい……、愛人生活もちょっと憧れ……、こほん」

あ、愛人生活ってどんな……？　き、聞いてはいけない様な生活なのか！？

「やはりミランさんはいやらしい。次に就職、これはミランさんが分かりやすいですね。各ギルドのギルド員としての就職が多いでしょうか？　雑務依頼の仕事先で依頼人に腕を見込まれたりすると、冒険者なんて辞めてウチで働け、などと勧誘される事もあります。どちらも住む家は必要になるでしょうが、大抵は住み込みで働く事になりますね。こちらも最終的には一般の町人になるのでしょうか。他にも、自警団に組み込まれる、国の兵士として徴用される、Aランクともなれば国からの勧誘もあるでしょうね」

そ、そうだ、冒険者は何でも屋だったね。色々な仕事をこなしていけば、手に職がつく、って言うのかな？　冒険者を続けていく理由も無くなっていくのか。なるほどなー、面白いね。

「でも、みんながみんな、そんな都合よく結婚とか就職先が見つかる訳じゃないんだよね？」

「はい、特に結婚なんて……」

「ミランさんは放置で。姫様の仰る通りですね、半数にも満たないでしょう。ここで先ほどの、避けておいたお話が出てきます。体力の限界、冒険者としての限界を感じた者はどうするのか、姫様はどうお考えになりました？」

何も思いつかなかった、って言いたいけど、一つだけ思いついちゃったんだよね。

「多分一部の人だけだと思うけど、ええと、引退できないまま、その……、うう……」

「無理に仰って頂かなくても結構ですよ。ええ、確かに一部にはそういった方も出て来てしまいますね。無理を通せば待っているのは辛い現実、という物です」

うん、無理をして死んじゃうんだろうね。
でもそれは一部だけのはず、他の人は一体どうするんだろう？

「今の姫様には絶対に思いつかないだろう答えなので、まずは正解を。旅に出ます」

「た、旅！？」

え？　確かにその発想は無かったわ。でも、どういう事？

シアさんは楽しそうに、身振り手振りを加え、答えの説明を続けていく。

「ふふふ、すみません、比喩表現でした。安住の地を探す旅、とも言えるでしょうか？　この町、リーフサイドの町もそうやってできた町なのですよ、どの町も最初はそのようなものです。旅人が集まり、寄り添い、集落に、村に、町に、都市に、そして、国へとなっていく。まさに冒険者のその後に相応しいと思われません……、か？」

「な、なんとなく……？」

「ひ、姫様にならお分かり頂けると思ったのですが……」

私の複雑な表情を見てか、ちょっと芝居がかった表現で説明していたシアさんは、気恥ずかしさで元に戻ってしまったみたいだ。

「あはは。シラユキ様にはちょっと難しい表現でしたね。分かり易く言うと、開拓民の集落へ住み着くんですよ。勿論それが全て、という訳ではありませんけど……。見ず知らずの冒険者がその後どうなったか、なんて誰も興味はありませんから」

あ、ああ！　ああ？

な、何となくは分かるのよ、何となくは。冒険者としての色々なスキルを、長く生きた経験を開拓に活かす、っていう事？　聞こえはいいけど、うーん……、すっきりしないなあ……

「ぶっちゃけてしまいますと、そんなモン知ったことか、という事でございますね。姫様もあまりお気になさらぬように……」

ぶっちゃけちゃったよ……

それもそっか、他人事だよ。ラルフさんナナシさんはお友達だし気にはなるけど、もし何かあったのなら、お姫様権限でも使ってえこひいきしてしまえばいい。

顔も名前も知らない、あった事も無い世界中の冒険者の事なんて考えるだけ無駄か。

「そうだね。でも、勉強になったかな。ありがとうシアさん、ミランさん」

またちょっと甘やかされちゃったみたいだね。
多分こんなに軽く話せるような明るい話ではないと思う。開拓民、自給自足の生活をするんだろうか。国が開拓地へと人を送るのとは訳が違うよね……、うん？　そこに住み着くのか？　引退したって言っても冒険者だし、実は頼りにされて歓迎されるかもしれない？
色々な知識を持ってて、しかもある程度まだ戦える人だよね。絶対頼りにされるよ！

うん、それでいいや。すっきり！

「では、姫様が何故かすっきりした顔をされているところで、当初の話題へと戻りましょうか。ラルフさんとナナシさん、付き合ってはいませんよ。それは確実です」

わ、私を混乱させるつもりだねシアさん……！
あの二人は付き合ってない。うん、ミランさんと話して出た結論通りだね。シアさんが確実と言うのなら、それはもう１００％間違いない情報だと思っていい。

「シアさんはどこまで知ってるのかな？　あの二人、どうなの？」

「私も少し気になりますね。どうなんですか？」

ミランさんと私がずんずんと詰め寄る。勿論声は落として、小さめでね。

「付き合ってはいません。ですが、だからと言って、お互い想い合っていない訳ではありませんよね？　つまりはそういう事です」

「うんうん！　やっぱりそうだよね！　そうなんだよね！！」

「シラユキ様可愛い……」

「姫様可愛すぎます。押し倒しますよ？」

「やめて！！」

「冗談です。私のメイドセンサーの反応からすると、ナナシさんは間違いなくラルフさんの事を好き、いえ、愛していますよ。これは間違いありませんね。」

「ええ？　ラルフさんが、じゃなくて？」

「ラルフさんもナナシさんの事を好ましく思ってはいる筈ですが、愛には至っていないでしょう。メイドセンサーにそこまで強い反応は感じませんでした」

「な、なるほどねー……。さすがシアさん、凄いや」

「今の説明で納得できてしまうシラユキ様も凄いですよ……」

ふむふむ。メイドセンサーはまずは気にしないでおこう。シアさんだし、メイドさんだし、その程度の物搭載していたところで何等おかしくは無い。

ナナシさんはラルフさんの事が好きなんだ。でも、あんな依頼を受けてるのに？　もしかして、ラルフさんだけじゃ満足できないとか？　あ、ありえる、ありえてしまう……。普通に納得できてしまう理由だ！

「私がここまで他人の、いえ、姫様のご友人の方の内面まで話してしまった理由は、お分かりになりますよね？」

「うん。多分私はあの二人の恋愛に関してだけは、関わっちゃ駄目なんだね」

「え？　え？　ど、どうしてそうなるんですか？」

ミランさんにはちょっと説明し難いな……

「シアさんなりの優しさ、かな？　ありがとねシアさん、止めてくれたんだよね」

「はい、申し訳ありません。姫様にはどうしても……、すみません、これ以上は……」

「私はお礼を言ってるのに、どうして謝るの？　ふふふ」

人には人それぞれ事情がある。シアさんはその事情を調べてくれたのかな？　調べた結果、私には絶対に話せない内容だったんだろうね。

ラルフさんかナナシさんか、或いはその両方か。好き合って、想い合っていても付き合えない大きな理由があるんだろう。

子供の私には聞いても理解できない事なのかもしれないが、シアさんの言う事ならしょうがない。今回は完全に諦めようじゃないか。

「ば、バレンシアさん羨ましいです。私もシラユキ様とそんな風に通じ合ってみたいです！」

「ふふ。そのためにはまず、私のメイドさんにならないとね！」

「おおお王族の方のメイド！？　むむむ無理ですよう！！」

「冗談だよ、もう。でも、ミランさんもメイドさんになって欲しいなー」

ミランさん強くて可愛いとってもいい人だし、メイドさんになれば兄様の愛人の座を狙えるかもね？

半分以上冗談だが、そうなってくれたらいいなーとは会う度に思わされている。

「なれますよ？」

「えっ」

「えっ」

なにそれこわい。

「私が姫様の友人と言えども、ただのギルドの受付程度にあのよう

な重大な話をすると思いますか？」

「え？　シアさん？」

「え？　バレンシアさん？」

「ウルギス様の命です。まさか拒否する、などとは言い出しませんよね？」

「父様の！？　ど、どういう事！？」

「ううううルギス様の！？　ど、どういう事なんですか？」

「さあ？　さすがにそこまでは、私程度のただのメイドには分かりかねますね」

「この前会ったときに一目惚れされたとか？　ミランさん、兄様じゃなくて、父様の愛人になるの？」

「し、シラユキ様！？」

「姫様、混乱されるお気持ちは分かりますが、ミランさんが付け上がってしまいますのでその辺りで。はい、ミランさん、こちら、ウルギス様からの書状です」

「は、はい！！！」

な、何だろう？　どういう事？

とりあえず分かる事は、ミランさんが家のメイドさんになってくれるかもしれないって事。本当だったら嬉しいなそれは……

ミランさんはゆっくりと手紙？　書状を読み始めた。

その９３（後書き）

今回少し長めでしたね。それでもまた続いてしまいました……
本当はもっと短くなる予定が、シラユキがつい興味を向けてしまいまして。
キャラが勝手に動くのは予定を狂わされて面白いですね。

その９４

書状とは言っても小さな手紙だ、数分と掛からずに読み終わったようだ。

ミランさんは内容が信じられないのか、目を閉じて深呼吸をした後、読み直しを始めた。ん？　少し震えてる？

一体どんな内容の手紙だったんだろう？　差出人は父様だよね。シアさんの話し方からすると、メイドさんとしての勧誘？　それともＢランクの冒険者としてのミランさんに依頼でも？

「ば、バレンシアさん、冗談では、ないんですよね……？　わ、私が……？」

何度呼んでも書かれていた内容が信じられないようだ。シアさんに確認をとるミランさん。

「私も書状の内容までは……。見せて頂いても？」

無言でシアさんに手紙を手渡すミランさん。とても不安顔だ。

シアさんはゆっくりと渡された手紙に目を通し、一息つき……

「おめでとうございます、ミランさん」

笑顔で一言。おめでとう？

「シアさんミランさん？　私は仲間はずれ？　泣いちゃうよ？」

おめでとうなんて言葉を贈るんだ、私が聞いていけない内容じゃない筈だよね。

「ふふ、すみません姫様。リーフエンドの森に住む許可証のような物ですよ。ここ数百年での前例は私一人だけだったらしいのですが、ふむ……、なるほど」

許可証？　ミランさんも森で住む事になるんだ？　という事は、ミランさんメイド化計画の実行も夢ではない、という訳だね！

何かに納得してるシアさんはとりあえず放置。

「おめでとう！　なのかな？　よくわかんないけど、おめでとうミランさん！！」

「あ、ありがとうございます……。し、信じられない……、私、ただの冒険者ですよ？　ただの受付ですよ？」

ミランさんはそれでもまだ信じられないようだ。

そんなに信じられない凄い事なのかな。シアさんが言うには数百年間で二人目になるって事だね。ああ、それは確かに凄そうだ。

「冒険者でありただの受付である前に、姫様の友人、という事だからでしょうか。ちょっと理由としては弱いですよね……、ミランさんの考えであっていると思いますよ。ただの冒険者が聖地での居住権を手に入れるなどありえない事です。私も例外的なものですから、

恐らくミランさんにも何かしら制限がつくのでは、と思いますけど、基本的に特に気になさらなくても問題ないと思いますよ」

私にはただの自分の住んでいる家とその庭のような感覚なんだけどな……

それより、シアさんが例外？　ミランさんもか。シアさんは護衛として一緒に住む許可が出てるだけっていう事なのかな。まあ、これは私が勝手に永住権でもあげちゃうとして……。ミランさんにも何かお仕事を頼んで、そのお仕事をするのに森に住む事が必要になる訳か。

「受付のお仕事はどうするの？　森に住む事になるんだよね？　私は嬉しいけど、ミランさんにだって都合があるよね」

「あ、ええ。まだこの仕事は続ける事になると思います。森へ住む許可が与えられた、というだけですから」

うん？　許可が出ただけ？　森から通うのは大変なんじゃないのかな……？

「森で何かお仕事しろっていう手紙じゃなかったの？　駄目だ、全然分かんないや……」

「特に強制という訳では……。私は今まで通り町で暮らしますよ、まだまだしたい事も沢山ありますからね。もっと年をとった後の話でしょうか……、私には身に余る事過ぎて、まだ現実感が沸きませんけど」

ああ、なるほどそういう事。外での生活に飽きたらいつでも森に来ていいよっていう事ね。うーん……、それならそれでまた分から

ないね。なんで父様はミランさんだけに特別に許可なんて出したんだろう。私の友達だから？　それだと他のエルフの人たちに示しがつかないと言うか……。うーむむ……

「姫様、ここでお悩みになっても答えは出ることはありませんよ。ウルギス様に直接お答えして頂くしかないのでは……」

「う、うん……、そうだね。うん！　考えるのはやめよっと。とりあえずミランさんは、いつでも家に来てメイドさんになってもらってもいいからね！　今日からでも！！」

「ふふふ。ありがとうございます、シラユキ様」

答えの出ない事をいくら考えてもしょうがない。将来的にミランさんが私の家のメイドさんになるかもしれない可能性が出てきたことを素直に喜ぼう。

「それじゃミランさん、お話ありがと、ラルフさんたちのところに戻るねー。あ、ラルフさんとナナシさんの仲の事が分かっても手紙はくれなくてもいいよ。付き合い始めたー、とかなら教えて欲しいけどね」

「はい。私もまだ死にたくありませんから！」

大袈裟な……、でもないか。

やっぱり気になるなー、二人が付き合えない理由、ナナシさんが告白できない理由か？　考えてはいけない事だって分かってるんだけどね……

席に戻ると……、エディさんが絶望していた。何があった。

「お？　戻ってきたのか」

「あ、シラユキちゃんおかえりー。何話して来たの？」

こっちの二人は普通だね、いつも通りだ。お酒を飲みながらになっているって事は、次の訓練予定が決まったのかな？

「ただいま？　秘密です、ふふふ。それより、エディさんはどうしちゃったんですか？」

エディさんは机に突っ伏してお酒をちびちびと飲んでいる。拗ねていると言うか、諦めていると言うか、複雑な表情だ。

「ああ……、シラユキちゃんとバレンシアさんか、おかえり……。俺、死ぬかもしれないんだ……」

「それは、ご愁傷様です」

「ええ！？」

まさか、高難易度の討伐依頼にでも連れて行かされる事に？

「大袈裟なやつだなコイツは。それくらいで死にゃーしねえよ」

「冷えた体はあたしが人肌で温めてあげるから安心しなさいって。そのままセッ、運動始めれば温まる事間違い無しだよ？　どうよ？」

「ナナシやめろって、オイ！」

「や、野外で初めては勘弁！！　シラユキちゃん真っ赤になってるんだけど……、俺たち死ぬんじゃないかなこれ……」

「え？　今のアウト？　め、メイドさん……？」

「アウトです。三人とも覚悟はいいですか？　ああ、一瞬で死ねるとは思わないでくださいね。明日の朝日は拝ませて差し上げますからご安心を、その時まで両の目が残っていたらの話ですがね……」

「ししシアさん怖いよ！！　ナナシさんもなんて事言うの！　もう！　ううう……」

二人とも生々しい表現過ぎる……！　人肌で暖めて、そのままう、運動始めるなんて……。な、あ、うわ、想像しちゃう！

「ホントにウブな子だよねシラユキちゃんって……。早く慣れて！あたし死んじゃうから！！」

「お前がそういう事言わなきゃいいんだよ……。シラユキちゃんは多分一生慣れないからなそんな話」

「魔法の修行のまえに死ぬかと思ったよ……。ナナシさんはもっと

控えようよ……」

あーうー、まだ顔が熱いよ……

なまじ本人たちが目の前にいるだけに、想像がリアルになっちゃって……。ああ！　また想像しちゃった！　ううう……、私のムッツリスケベ！！

「姫様はしばらく戻って来られない様なので私が。魔法の修行ですか？　凍らせる魔法の。修行方法が決まったのですね」

エディさん凍らせる魔法は苦手だって言ってたもんね。そんなに難しい魔法でもないんだけどなあ……

「ああ、やっぱりメイドさんの案で行くよ」

シアさんの案？　それなら安心だね、確実に使えるようになると思うよ。よかったねエディさん。

「人手もどうにかなりそうだしね。ふふふ、楽しみだよ。あ、人肌で温める運動の事じゃなくてね？」

！？

「だからやめろってコラ！！　ごめんなさい！！！」

「ひい！　今のは違うよ？　ひ、否定しただけ……、ごめんなさい！！！」

「とりあえず俺も、ごめんなさい！！！」

次々とシアさんに頭を下げていく三人。

「あはは、三人とも息ぴったり。仲良いですよね本当に」

「む……。姫様が笑ってくださったので、まあ、よしとしますか……。ナナシさん、貴女は実際言葉にする前に、一度考えてから発言してくださいね、まったく……」

シアさんもあまり無理強いはしない。ナイフを投げたいからではないはずだ。

私の笑顔一つで許しちゃえるくらいなんだから、そこまで怒ってもいないんだろうけどね。

「それで、どんな練習方法なんですか？　物を凍らせる魔法ですよね？　アイス、だったかな」

「あ、ああ、シラユキちゃんも止めてくれよー」

「穴掘って水溜めて、あ、氷も入れるよな？」

「うん。どうせやるならそれくらいしないとね」

「え？」

「深い、大人の身長程度の穴を掘り、その中へ氷水を溜め、エディさんを投入するんです。以前姫様にもお話しましたよね、一生モノのトラウ、思い出になるでしょう」

「トラウマにしかならないよ！！　え？　それって死んじゃうんじゃないの？」

「大丈夫だろ、多分」

「だよね、多分」

「多分で人を死地に送る師匠。やっぱりついて行く人を間違えたのか俺は……」

「私はどちらでも構いませんが、エディさんの生き死にに興味はあまり……」

「シアさんそれはちょっと……。エディさん、頑張ってね」

「あれ！？　止めてはくれないんだ！？」

その95

「父様教えてー？」

「ははは、秘密だ」

「ふーん……。みんなに内緒でミランさんを愛人さんにするつもりなんだ？」

「愛人！？　何をどうしたらそんな結論になるんだ！？　誰だ！シラユキにこんな事を教えたのは！！」

「……ウル？」

「エネフェア！？　違うぞ！　ありえん！！」

ミランさんにリーフエンドの森に住む許可を与えたのは父様の一存らしい。母様もこの反応だと知らないみたいだね。

「シアさんが言ってたけど、この森って大切な土地なんでしょ？私のお友達だからって、そんな勝手な事しちゃっていいの？」

この国の女王様は母様だが、最高権力者はお爺様とお婆様のどちらかの筈だ。世間的にはあまり知られてはいないが、二人とも父様よりも強いのは確かだろう。うん、怖いね。

でも、一回くらい会ってみたいな。私が生まれてすぐに顔を見に来てくれたみたいなんだけど、またすぐに旅に出てしまったらしい。かなり自由奔放な性格をしているという話だ。ますます会ってみたくなる話だね。

「勝手も何も家の土地だからな。誰にも文句を言われる筋合いなどないぞ？　まあ、妬みややっかみは多少受けるかもしれんがな」

やっぱりそういうのはあるんだ。

シアさんの話を聞いた後でも、ここはただの森にしか見えない。他のエルフの人も一度見てみれば分かると思うんだけど……

「もう！　父様は人の迷惑になるようなことしちゃ駄目だよ！　私としては嬉しいから、あんまり強くは言えないんだけどね」

「はははは、すまんすまん。怒るなシラユキ」

笑いながら私の頭をグリグリと撫でる父様。

くう、駄目だ、誤魔化されるんじゃないぞ私！　……でも嬉しい！　誤魔化されてしまおう！　落ちるの早いな私は……

「丁度いいし、私からも一つ言っちゃいましょうか」

「う？　何？　母様」

「キャロルにも同じ様に、この森に住む権利をあげちゃってるのよ？　あ、そっちは私がね」

「母様大好きーー！！」

母様に勢いよく抱き付く。
キャロルさんも、ずっと先の話だとは思うけど、この森に、もしかしたらこの家で一緒に住めるかも？　母様最高だ！！

「ふふふ、可愛い……」

「ぬう……。何故こうも俺と反応が違うのか……」

おっと、父様がいじけてしまっている。
ミランさんもキャロルさんの事も、理由は分からないが新しい家族になる、いや、もうなったと言ってもいいだろう。こんなに嬉しい事は無い。

「ふふ、ごめんね父様。父様も、ありがとう、大好きだよー！！」

「なっ！？　何という愛らしさだ……！！　よ、よし！　こうなったら」

「お祭りは駄目」

「何故だ！！！」

だって父様広場で延々と、私が何をしてそれがどう可愛かったっていう演説したいだけじゃない。ただの娘自慢したいがためにお祭り開催しまくっちゃ駄目に決まってるよ。
後、自慢される方の身にもなってほしいものだ。あの恥ずかしさは凄まじいものがある。いや、自慢に思ってくれてること自体は嬉しいんだけどね……

「それじゃ、手配お願いね」

「はい、それでは早速……。失礼します」

しまった！　お祭り好きの家族のフットワークのよさを忘れていた！！

止めようにも、母様の指示を受けたカイナさんはすでに部屋にはいない。明日はお祭りかー……

まあ、私もお祭り好きの一人だからいいや。

母様の執務室から場所は変わり、いつもの談話室。今日のおやつはシアさん作のクッキーの、山。凄い量だねこれは……

「い、いっぱいあるね……」

「ふふ、すみません。この国ではあまり見かけない香辛料が手に入りましたので、ちょっと張り切りすぎてしまいました。無理に食べ切ろうとなさらなくても大丈夫ですよ」

こ、香辛料？　シアさんが好きな香辛料が見つかって嬉しかったのかな、言ってくれれば用意したのに……。ん？　どうやって？

メイドさんズに？　結局変わらないじゃん！！

ま、まあ、気にしないでおこう。

「それじゃ早速頂いちゃおうかな。いただきまー、す？」

クッキーを一つ摘み、口元へ運ぶ。
ん？　この匂いって、……え？

「姫？」

「シラユキ？　あれ？　固まっちゃったよ」

「ひ、姫様？　どうされました？」

クッキーを食べる直前の動作のままで固まってしまった私を心配して、三人が話しかけてくる。
いけないいけない、つ、ついね……。まさかコレがこっちの世界でも使われてるとは……、油断した……！！

「シアさんシアさん。これって、シナモン？」

そう、この香りは間違いなくシナモンの香り。ど、どうしよう……

「え、ええ。さすが姫様ですね、よくご存知で。香りの感想を頂きたかったのですが、残念です」

「う、うん。いい匂いだと思うよ」

一つ口に入れて租借、味は最高だ。しかしシナモンの何とも言えない香りが……
紅茶で流し込む。お行儀は悪いが、そんな悠長な事は言っていられないのだ。

「ね、ねえ、シア？　なんかさ、姫、半泣きなんだけど……」

「ま、まさか……。姫様？　もしかしてこの香り、苦手でした？」

無言で頷いて答える。

「も、申し訳ありません！！　すぐにお下げします！　わ、私としたことが……！！」

「私はいい匂いだと思うけどな……。あ、シア、下げなくてもいいよ、これは私たちで食べちゃおう。姫には他に何か持ってきてあげて」

「ええ……、そうしましょうか……。ついでにこの世界からシナモンの採れる植物を滅ぼしてきます……」

「おやつ取りに行くついでで！？」

シアさんは元気無く、トボトボと他のおやつを取りに行ってしまった。

そのまま本気でシナモンが採れる植物を滅ぼしに行かないか、心配になってしまうのは何故だろう……

「シラユキにも苦手な食べ物があったんだね……。あ、香辛料かこれは。んー……、アップルパイにも入れようと思ってたんだけど、やめた方がいいかなこれは」

シアさんが持って来てくれたのはアップルパイ。何故か焼きたてに見え、実際焼きたて並のおいしさだ。アップルパイって数分で作

れる物じゃないよね？　……考えないようにしよう。

「ええ。まあ、もう作れませんが。諸悪の根源は全て処分しておきましたから安心してくださいね。この際国内の流通も止めましょうか……」

「全部捨てちゃったの？　レンはやることが極端すぎるよ……」

「ただの香辛料を劇薬扱いしないでよ、もったいない！　ううう……、ごめんねシアさん……、まさかシナモンがあるなんて思いもしなかったから……。作ってもらってる立場でこんな我侭言うなんて……」

我慢すれば食べられない事も無いが、どうにもあの匂いは苦手なのよね……。アップルパイに入ってる事も多いので、油断をして一口食べて大当たり、なんて事は前世でもよくあったものだ。

「え？　我侭なのそれ？　なんか姫ってズレてるなあ……。苦手な物が食べられないのはしょうがないよ、落ち込まないでいいってば」

「姫様は、私が作った物を食べられなかった事に対して落ち込んでいるんです。そこを勘違いしないようにお願いしますね」

「なるほどね、半々くらいの理由なのかな」

そんな感じかな……

メアさんも、シアさんの言動を話半分に流すっていう事をだんだん覚えてきたみたいだね。

「ねえねえシラユキ。もしかして、今まで無理して食べてたのってあったりする？　料理担当の私としてはかなり気になるんだけど…

…」

「今まで？　う、うーん……？　多少苦手なだけのは普通に食べれちゃうし……、うーん……？」

「苦手な物はあったんだ！？　言ってよ！　この子はもう！　教えて？　教えなさーい！」

そうは言われてもねえ……、シナモンみたいに完全アウトって言うのは中々無いんだよねー

ピーマンの苦さは確かに苦手だけど、味付け、料理の仕方によっては美味しく食べられるし……

「うーん……。分かんない」

「ええー？　自分が嫌いな食べ物でしょ？　あ、シナモンは匂いが駄目なだけか。フラン、嫌いな食べ物っていうのは確かにパッと出てこないよ」

「それもそうか……。シラユキにはいつも笑顔で食べてもらいたいから、ちょっと熱が入りすぎちゃったみたいね。反省反省」

「ああ！　辛いのは苦手だよ？　トウガラシ入ってるのとか。少しくらいなら大丈夫なんだけどねー」

フランさんの作る料理なら、辛くても美味しいからいいんだけど、辛すぎるのはちょっとね……

「それは分かってるからいいのよ。子供に辛い物食べさせるほど私は馬鹿じゃないって」

なぬ？　今まで結構辛めのはあったんだけど……、黙っていよう。

「好きなのは苺とアップルパイ、それにオレンジジュースか……。か、可愛いわ……」

「子供だねー」

子供舌でごめんなさいね！！

シアさんとフランさんの作るアップルパイは、いつも行くケーキとパイのお店のより美味しいのよ。オレンジジュースもシアさんの手作りだ。

「私もオレンジが好きですね。明日はオレンジのスポンジケーキにしましょうか」

「やった！　シアさん大好き！！」

「レンばっかりずるい！　私にも甘えてよシラユキー」

「あ、姫、私にも私にも」

「ふふふ、みんな大好きだよ！！」

メイドさんズ三人に揉みくちゃにされる。幸せだね。

「姫ってアレだよね、メイドさん大好きだよね。ちょっとオヤジ臭い趣味なお姫様だね……」

「う、うん……。やっぱ私たちのせいかなこれは……」

「私たちがメイドである限り問題はありませんね。私は一生姫様のメイドを続けるでしょうし、本当に何の問題もありませんよ」

私のメイドさん好きはこの三人の甘やかしが原因だったのか！？

その９５（後書き）

リアルが忙しくなりそうです……
毎日更新ができなくなるかもしれません。

その９６（前書き）

今回はほぼ会話文のみです。

その９６

「それでは、世界一愛らしく、お優しい、それでいて頭脳明晰という、まさにパーフェクトと呼ぶに相応しい姫様の忠実なメイドの私ことバレンシアが、王族の方々に庶民の暮らしというものを、独断と偏見を込めて皆様のご質問にお答えしていく形で説明していこうと思います。私も元冒険者、現在王族の方に仕えるメイドでありますので、必ずしもその答えが絶対の正解である、という事はありません。それだけは留意して頂きますね。ではでは、教えて！　シアさん先生！！　の始まりでございます」

綺麗なお辞儀で開幕の挨拶をするシアさん。

「前置きがなげえよ！！」

「シアさん先生って何！？　さんは必須なの！？」

「前置きの半分近くが私の褒め言葉なのは恥ずかしいよ！！！」

「開始早々のツッコミの嵐、ありがとうございます」

「何で嬉しそうなのよレン……。助手その１のフラニーハナルスヒアメアロ・ウインドウインドです、よろしく」

「私たちは一応庶民になるのかな？　助手その２のメアリー・ハーハニです。恥ずかしいねこれ……」

「恥ずかしさもその内に気持ちよく感じるようになりますよ」

「ならないから！！」「なりたくないから！！」

所はいつもの談話室、何やら変わった事が始まったが、別に何という事は無い。私たち王族はどれだけ一般庶民の人たちと、常識や認識がズレているのかとちょっと気になっただけなのだ。

最近あまり長い説明をしていなかったシアさんの我慢の限界が来たんだろう、あっという間に兄様姉様を連行し、場をセッティング。ご丁寧に黒板まで壁に掛けている。

服装はいつものメイド服だが、まずは形からとでも言う様に、眼鏡をかけ、手には指示棒の様な細い金属製の棒を持っている。丸い眼鏡なので可愛く見えてしまうのが笑顔を誘う、素晴らしい先生だ。

「ふむ、まずは何からお話していきましょうか……。何か日頃気になっている事などありませんか？」

「はいはーい！　シアさん先生、はーい！！」

「はい姫様、可愛らしいです。どうぞ」

「フランさんの名前ってなんでそんなに長いの？」

「早速庶民の暮らしと関係ない質問だよ、さすがシラユキ。ええとね」

「どうでもいいですね。他には……」

「レンひどいよ！！　私が生まれたときにね、名前の候補が四つあったのよ、フラニー、ハナル、スヒア、メアロの四つね。中々決まらなかったから、どうせなら全部付けちゃえばいいんじゃない？って事で全部付けられたの。この名前覚えてるのって家族とウルギス様エネフェア様くらいなんだよね……」

「一、ニ回聞いたくらいじゃ覚えられない……。ごめんねフランさん」

「俺も覚えきってないな。フラニーが名前でフランが愛称でいいだろ？　短く改名しろ」

「私もそうね。もうフランでいいんじゃない？　覚えにくいし」

「そういえばフハスメって呼んでる人もいたね。フハスメは無いよ……」

「改名はちょっと……。家族から贈られた名前だし、さすがに無理無理。ちなみに家族は皆バラバラで呼ぶのよ。知らない人から見たら混乱の極みよね」

「では皆様の記憶に残るようボードに書いておきましょうか。邪魔になるので隅の方に小さく」

「小さ過ぎる！　読めない！　読みにくい！！　シアさん覚えさせる気無いよこれ！」

「ああ、うん……、別にいいや。さ、次々いこうか！」

「王族って言ったって、この国ならそんなに庶民と変わらないんじゃないか？　俺たちは仕事してないんだけどさ」

「一般庶民の家では子供は、子供の頃から親の仕事の手伝いをするものなのですよ。両親それぞれの仕事、男の子なら父親に付いて手伝いをしつつ仕事を覚えていったり、女の子は家事の手伝い、弟妹の世話、母親が職を持っている場合は男の子と変わらず、仕事の手伝いをしたりする事もありますね、家庭により様々です。お二人に例えると、エネフェア様に付いて内政の仕事を補佐をしながら国の運営を勉強、という事ですね」

「う……、俺たち遊び人だな……。全部母さんに任せっきりだもんな」

「え、ええ……。ぎりぎり妹の世話の範囲には入ってるのかな……。料理くらい覚えようかしら？」

「わ、私は？」

「姫様はまだまだ子供ですから、そんな事は気になさらなくてもいいんですよ。国庫を空にする勢いで浪費生活をしてくださっても問題はありません」

「大問題だよそれ！！！　あ、国庫で思い出したけど、国の収入ってどうなってるの？　税金とかあるのかな？」

「姫、それこそ子供の気にする事じゃないよ」

「まあ、いいでしょう。説明が増えるのは歓迎します。リーフエン

ドの主な収入は、各ギルドからの、ふむ……、契約金のような物でしょうか。採取場、人員の提供に対する報酬に近いですね。リーフサイドにある冒険者ギルド、錬金ギルド、調薬ギルド以外にも、リーフエンドの管理圏内にある他の町のギルドからも、人員や素材の提供依頼は多々ありますからね。何故かギルドは管理圏内全ての採取場を国の物と認識していますから。これは黙っておきましょう、実際管理しているのもこの森出身のエルフですから問題はありませんね」

「今聞いちゃいけない事を聞いた気がします！！」

「忘れてください」

「はーい！　あはは……」

「税金は、各町の規模によって増減します。こちらは主に採取場の維持費、管理人の給料、各町の自警団の活動費に充てられます。他にも外壁、街道の補強、町間の休憩所の設置、その維持と様々ですね。税金は住民の安全や生活のために回されるのが当然ですからね」

「シア凄いわ……。もしかして結構常識だったりするの？」

「うーん、どうなのでしょうね？　子供は勿論知っている筈はありませんし、大人でも冒険者は知らない方は多数いると思いますよ。町で働いている者なら常識ではないのかと」

「なんか、楽して生きてるよな俺たちって。王族の責務とか考えた事も無いしな……」

「いえいえ、この国に限っての事ですが、それで構わないと思いま

すよ。管理圏内の町はほぼ独立していますからね。エネフェア様の内政のお仕事というのも、管理圏内にあるギルドとの書類のやりとりでしょうし……。他所の国の王族も何か特別重大な用件でもない限りは、直接各町の代表に話を持って行っていますから。この国の王族と関わりたくないと言うのが本音ですかね」

「え？　私たちって嫌われてるの……？」

「いいえ？　姫様を嫌う存在がこの世界に在るとでも？　ただの苦手意識ですね。長寿種族でも無い限り子供の頃からの付き合いになってしまいますから、小さな頃の失敗談をネタに話に花を咲かせられては、いくら王族とは言え人、恥ずかしいものなのですよ」

「シラユキを嫌う国があったら滅ぼすだけだ。確かに他所の国の王族との交流は殆ど無いよな。シラユキが生まれたときに祝いが届いたくらいか？」

「一番近いところだとそれかしら？　お父様ったら世界中に向けて嬉しさと感動を撒き散らしていたからね。シラユキは結構有名なのよ？」

「ええ！？　何それ恥ずかしい……」

「俺もユーネもだ……、気にするな。気にしたら負けだ……」

「姫様がお生まれになられた、という事くらいですのでご安心を。しかし、愛らしい姫様を狙い、よからぬ事を企む国も出て来てしまうのではないでしょうか」

「あるわけないよ！！」

「よからぬ事と言えば、戦争になったりしたらどうなるの？　この森は絶対大丈夫なのは分かるけど、他の管理圏内の町はどう守るのかな」

「ひ、姫……、庶民の暮らしから全力で離れて行ってるよ……」

「そうでもないわよ？　庶民が安全に暮らしていけるのはどうして？　っていう事よね」

「ああ、なるほど。すみませんユーネ様」

「戦争に関しては姫様の前ですので一切お話できません。庶民の安全な暮らしについてですが、自警団と冒険者が深く関わっていますね。自警団は各町の治安の維持、町周辺に迷い込んだ魔物の討伐。冒険者も同じように魔物の討伐の遠征に参加することもありますよ。報酬も出ますし、何より限られた人員を遠征に向かわせて減らしてしまうのは、町の安全の維持に支障をきたしてしまいますから。他所の国では自警団は小さな村にしか無く、各町には兵士が駐留しているのですが……、大差はありませんね」

「自警団かー。町でそれらしき人は見たことないなー」

「そう見えないだけで、実際町で何度もすれ違っていますよ。一度見つかると付かず離れず護衛されていたりもしますね」

「知らなかった!!　言ってよー!」

「それくらい自分で気づけるようになれ」

「私でも分かるわよ？」

「ユー姉様まで！？　あ、今のは深い意味は……」

「それくらいで怒らないから大丈夫。それだけ私が普通のお姉ちゃんに見えてるって事よね」

「え？　あ……、うん！」

「シラユキー？」

「きゃー！！」

「自警団と言えば、リーフサイドの自警団は凄いですよ、エルフにしか入団は認められていませんから。世界一平和な町と言われているリーフサイドですが、やはりこのエルフの自警団の存在が大きいのでしょう」

「シアが嫉妬のあまり自分から話を始めちゃったよ。姫もユーネ様もそれくらいにしようか」

「あはは」

「シラユキはとりあえず私の膝の上にいなさい。ふふふ」

「姫様、今日の湯浴みを覚悟しておいてくださいね」

「何の覚悟！？」

「物騒な話はやめて庶民の暮らしの話に戻ろうよ。食生活とかどうかな？　シア、分かる？」

「家々によりますね。やはりどこへ行っても貧富の差は出て来てしまうもの。ですが、主食が芋と小麦類なのはどこも変わらないですね。別段気にするような話題ではないかと」

「そ、そうよね、シラユキ暗くなっちゃいそうだし、やめよっか……」

「に、肉類、魚類、野菜類、長期間の運搬のために凍らせて運ぶんですよ。それでも鮮度はどうしても落ちてしまうのですが、そこはフランの腕の見せ所、という訳ですね」

「今度一緒に料理教えてもらおうか。二人で兄様に何か作ってあげましょう？　勿論シアにもね」

「うん！　料理は出来るようになりたい！」

「ほう、俺は実験台か。バレンシア、お互い生き残れるといいな……」

「姫様の手料理で逝けるのなら本望と言うものですが、刃物を必要とする料理はいけませんよ？　姫様は怪我らしい怪我はした事がありませんから。刃物傷は痛いのですよ？」

「ちゃんと普通に食べれるようになってからしか出さないよ！　で

も、怪我は怖いね。私が血が出るくらいの怪我したのって言うと……」

「広場で走り回って転んで擦り剥いた事あるだろ、それくらいじゃないか？　あー、あれはいつだ？」

「六歳の頃ですね。あの頃の姫様は本当に何にでも興味を持って駆け寄って行っていましたから……。ん？　今でもそうですね、可愛らしいです」

「そうそう！　泣き出すかと思ったら照れ笑いだもんね、あれはビックリしたわ……」

「痛みも一応知識としてはあったからね。六歳の頃だと前世の記憶もまだ強かった気がするし。うーん、思い出せないなー」

「それだけ毎日充実してるんじゃない？　でもさ、あんまり怪我なんてしないでよ？　姫が怪我なんてしたら私たちショックで死んじゃうよ」

「包丁使い始めたら怪我なんて日常的にする事になるよ。いくら慣れてもちょっとした油断でスパッといっちゃうからね」

「フランさんたまに指怪我してるもんね。痛かったら言ってね、治すから」

「軽く凄い事言うわよねこの子……。怪我治せるようになったの？」

「ううん、まだ試した事も無いよ？　でも多分できると思う」

「人で実験はやめとけよ。ああ、あれだ、ラルフで試そう。バレンシアのナイフで手のひらに風穴でも開けてやればいいだろ」

「ラルフさんも人扱いしてあげて！！」

「後何か聞きたいことある？　なんかさ、シアがいると話が物騒な方向に流れて行ってる気がするんだけど……」

「んー、後は……、娯楽？」

「娯楽ですか、さすがユーフェネリア様、では娯楽について。子供たちの遊びはどの種族も変わりません、体を使った遊びですね、特に説明は要らないでしょう。後は、本や音楽、観劇にスポーツと様々ですね。姫様の場合はおやつと読書でしょうか。読書は勉強も兼ねて……、あ」

「勉強？　学校とかあるのかな？」

「え、ええ、ありますよ。姫様には私たちが直接お教えしますので必要ありません。文字や計算などは既に修めていらっしゃいますから、特に急いで教わるようなものも無いとは思いますが……」

「魔法の学校とかもあるのかな？　冒険者の育成とか……」

「くっ！　姫様の興味が！！　しゅ、周辺の町には通常の学問、文字と簡単な計算を教えている学校の様なものしかありませんね。各国々には最低でも一つは冒険者や騎士、魔法使いを育成する学校はあります。大抵は王都と呼ばれる大きな都市に建設されるのですが、

リーフエンドの場合は反対にこの森から離れた町にあるんです。姫様には一生縁のない施設ですね」

「えー、行ってみたいなー」

「だだだ駄目よ！！！　寮に住み込みで通うことになるのよ！？」

「ああ！　絶対に駄目だ！！」

「お二人の仰るとおりです！　……？　使用人は確か同行が許されますよね。ふう、問題ありませんでした。今のはさすがに焦りましたよ……」

「シアずるい！！」

「その時は私たちもついて行こうよ、メア」

「一回見に行ってみたいだけだってば！！」

「どちらにしてもかなりの距離がありますから、まだ幼い姫様に長旅をさせるわけには参りません。今回は諦めてくださいね」

「長距離の旅行はまだちょっと怖いなー。シアさんが一緒なら安全って言うのは理解してるんだけどね」

「旅行も娯楽の一つよね、シア」

「はい、比較的裕福な家庭のみのことですが。往復分の護衛、滞在する生活費、その他観光に掛かる費用、全て合わせるとかなりの額

になると思います。庶民の娯楽にはちょっと当て嵌まりませんね。一つ二つ隣の町へ買出しに行く程度でも早々できないのではないかと。その分冒険者に雑務依頼として買出しを頼んだり、定期的にやってくる行商の方を楽しみにしていたりですね」

「シアさんはホントに色々知ってるんだねー」

「ああ、うん……。一般庶民にとっては常識なのよ、シラユキ」

「シアは冒険者だったからね、知ってるのも当たり前みたいな事だから……」

「俺は少しは分かってるからいいんだけどな、シラユキもユーネも一般庶民の常識からはかけ離れてると思うぞ？」

「う……、いいのよ、私たちはお姫様だもんねー。ね、シラユキ？」

「うー……、うーん？　わ、私は子供だからいいと思う！」

「それじゃ、ユーネ様はアウトだね」

「ううう……、もうちょっと勉強しなきゃ駄目ね……。シラユキに色々教えてあげたいし、お姉ちゃんだし！」

「あはは、一緒に勉強しようよ、ユー姉様！」

「私はシラユキの良き姉でありたいの。一人内緒でお勉強しちゃうわ！　いえ、お兄様と二人っきりでね……」

「ああ、そうしようか。しかし二人きりか、勉強になるといいけどな……」

「夜のお勉強ですね、分かります」

「シアさん!?」

「失礼しました。男女の夜の営みの」

「言い直さなくてもいいよ!!!」

その９６（後書き）

いつ頃の話かは決めていません。
十二歳のいつか、です。

実はこれを書いたのは『裏話』の投稿前だったりします。
教シアのその０という感じでしょうか。

予約投稿の日時を間違えてしまっていたみたいです。
今回は１９日分でした。

その97

フランさんをじーっと見つめる。そういえばフランさんってコーラスさんの妹さんなんだよね。

コーラスさんと同じ綺麗な緑色の髪を、肩を過ぎた辺りで切りそろえている。背はいくつだろ、１６０くらいかな？　さすがあのコーラスさんの妹さんなだけあって胸の大きさが……

「何、シラユキ、じっと見つめちゃって。ん？　あ、揉みたい？いいよ。やっぱルーディン様の妹なだけ」

「違うよ！！　今は珍しくフランさんと二人っきりだからね、何を話そうか考えてたんだ」

しかしフランさんの胸に興味があるのは確かだ。どうやったらこんなに大きく育つんだろう……

今日も談話室で読書をしていたのだが、今私の隣にはフランさんしかいない。事前におやつを作る事が出来なかったらしく、シアさんとメアさんが作りに行っているのだ。

フランさんでは先生にならないので、おやつの準備ができるまで何かお話をしようと思ったのだが、常日頃、殆どの時間を一緒に過ごしているだけあって話題が思い浮かばない。

何か話題になるような物は無いものかと、フランさんを見つめながら考え込んでいたのを勘違いされてしまった。どうやらいつの間

にか胸を凝視してしまっていたみたいだ。

「んー、たまにはいいかな。ね、シラユキ、ちょっと立って」

何かを思いついたのか、フランさんは私に椅子から立つようにお願いしてきた。

特に断る理由も無いので素直に立つ。何か怪しい事でも企んでいるのかもしれないが……

「んじゃ、ちょっと失礼して、っと。はい、シラユキも」

フランさんは私が座っていた椅子に座り、ポンポンと自分の腿を叩いて私を呼ぶ。

「あ、なるほど。珍しいね、フランさんがこんな事するなんて」

フランさんの膝の上に座らせてもらう。少し恥ずかしいが横抱きの体勢、目の前には大きな胸が視界の邪魔をする。もげろ！

「あー！　一回やってみたかったのよこれ！　うー！　可愛い！！キスしていい？」

「え！？　まあ、いいかな？」

額に頬に唇ににとキスをしまくられる。

「く、口は恥ずかしいよ……」

女同士で家族、姉とも母親とも言えるメイドさんズのフランさんだ。そこまで抵抗は無いんだけど、やっぱり少し恥ずかしいね。

「ああ、ごめんごめん。あまりの可愛さに暴走しちゃったわ。ふふふふ、口付けはシアもしたことないよねー？」

「シアさんとはした事もされた事も無いけど？　家族以外だとフランさんが初めてじゃないかな、ってフランさんも家族だった」

「え？　あ、やばいねそれ……。シアにも皆にも内緒にしてね？」

やばいかな？　でも黙っていようか。シアさんとメアさんにも、今度ほっぺにキスくらいしてもいいし、させてあげてもいいね。

「今日のフランさんはいつもより……、うーん、積極的？」

「あはは、うん、そうかもね。私ってあんまりシラユキの事積極的に可愛がりに行かないからね。可愛がるのはメアにまかせて、甘やかすのはレンの役目じゃない？　私はどっちも程々だったから、今日のおやつが出来るまでの時間くらいは全力で可愛がって甘やかそうと思ってね。あー、ホントに可愛いわこの子」

フランさんにスリスリと頬擦りをされてしまう。

くすぐったい。でも、なんだろう、凄く嬉しいね。

しかし、あれで程々なのか……

フランさんも結構全力で甘やかしに来てたと思うんだけどな。

「私、結婚してるけど子供はまだ作る気無かったのよね。そんな時にシラユキが生まれてね、なんでか私がお世話役に選ばれたのよ。ホントになんでだろね？　あ、シラユキにおっぱい吸われたことも

あるんだよ？　吸われたと言うか吸わせたと言うか、うふふふふ……」

「えええ！？　は、恥ずかしい……」

「あ、メアもね」

「メアさんのも！？　あ、ああ！　そうだ……、私って確か、小さいころって大きな胸が好きとか思われてたんだっけ？」

シアさんが、それを聞いてかどうかは知らないけどパッド入れてたっけ。懐かしいわ……

「小さい頃か、そんな話もあったね。今でも小さいけど……」

うるさいです！！

フランさんは超上機嫌。鼻歌交じりで私の頭を撫でたり、頬をグニったりと、本当に全力で可愛がりに来ている。

でも、悪い気は全然しないね、むしろ嬉しいとも思う。フランさんも大好きな、大切な家族だしね。

「うーん、子供かー……、どうしよっかな。出来たら出来たでいいとは思うんだけど、そうなるとシラユキの世話役から外されちゃうしなあ……」

そうなっちゃうよね。いくら王族って言っても、自分の子供を優先するのが普通だよね。フランさんが私のお付メイドさんから外れ

ちゃうのは寂しいけど、幸せになって欲しいもんね……

「あー、それはやだな……。せめてシラユキが成人するまでは避妊しよっと。今もし出来ちゃって産んだとしても、絶対シラユキより可愛がれる自信無いわ……」

あはは……、自分の子供が一番可愛いと思うけどね？

「ごめんねフランさん。今、ちょっと安心しちゃった」

「不安にさせた？　うわ、半泣き？　ごめんね。大丈夫、成人するまで、ううん、シラユキに子供が出来るまでメイドさんしててあげようじゃない」

「私の子供って……、私ハイエルフだよ？　千年くらい先かもしれないよ？」

「うわ、忘れてたわ……。まあ、いいや。私が子供作りたくなるまで、っていう事で」

「私が成人して、森の外に行くかもしれないしね」

成人したら森の外での生活も認められる。父様がそうだったみたいだし、王族にもそれは適用される筈だね。

「ええ！　駄目よ！！　シラユキ無しの生活とか耐えられないわー」

胸を押し付けるように抱きついてくるフランさん。

「苦しいよ！　もう、どうやったらこんなに大きくなるの？」

「ん？　自然に？」

「もげろー！！」

鷲掴みにして……、できない！？

「こらこら、もげろとか怖いこと言わない。レンのが伝染った？」

「あはは。ホントに大きいなー、羨ましいなー」

「うーん……、好きな男の人に揉まれると大きくなるって聞いたことがあるね。ルーディン様に揉んでもらったら……、揉める程無いか……」

「痛い！　言葉のトゲが突き刺さる！！」

「ふふふ、私が揉んであげようか？　ほーら」

「きゃー！！」

「楽しそうですね、フラン？」

「人が暑い中厨房入ってたのにずるいよ！！　私も姫座らせてあげたいのに！！」

「あ、ご苦労様二人とも。いやー、堪能させてもらっちゃったよ」

「おかえりー。フランさんといっぱいお話できたよー！」

「姫様ご機嫌ですね。フラン、今回は許します、いえ、褒めてあげましょう。素晴らしい仕事です」

「私も姫に甘えられたいいいい！」

「んー、今日はちょっとこのままでいさせてよ。自分でもよく分からないんだけどね」

「何となくその気持ちは分かるよ、しょうがないね。姫、明日は私が甘やかすからね！」

「うん！！」

明日はちょっと無理を言ってメアさんと二人きりにしてもらおうかな。今日のフランさんみたいに思わぬ話が聞けるかもしれない。

その97（後書き）

新しい話が書けない……
ストックが尽きそうです。

その９８

「失礼します。ひ、姫様、バレンシア、エネフェア様がお呼びですよ、執務室でお待ちです。何かご予定があればそちらを優先してもらっても構わないそうですが、よろしいですか？」

読書に一段落つけて、おやつを食べながらだらだらと休憩をしていたとき、カイナさんが伝言を届けに来た。

相変わらず緊張気味な喋り方だが、今までに比べると随分と柔らかくなった気がするね。やっぱり少し前に一緒に本を読んだ事が効いているんだろう。

「あ、カイナさんだ、珍しいね。何の用事か聞いてる？」

「す、すみません、分かりません。あ、用件を伺って参りましょうか？」

「いえ、そこまでしなくても結構ですよ。エネフェア様にはすぐに伺いますとお伝えしておいてください。しかし、私もですか。ふむ……」

私を呼べばシアさんが付いてくるのは当たり前のようなものだし、態々名指しで呼ぶという事はシアさんにも何か用事があるっていう事だよね。

「ええ、バレンシアも一緒に呼んで来るようにと。何かしたんですか？　神妙な顔をしていらしたんですけど……」

「え！？　な、なんだろ？　お説教？」

「姫様の悪戯がバレたのでは？」

「姫様、一体何を……。悪戯も程々にしないといけませんよ」

「何の悪戯よ！！　うーん……、何かしたっけ私……」

用件を告げ終わると、カイナさんはすぐに母様の所へ戻って行った。

「姫の悪戯って、つまみ食いくらいだよね。プリン作ると、絶対って言っていいくらいウルギス様のも食べちゃうもんね」

ぷ、プリンはしょうがないじゃない。あの誘惑に勝てる人間なんていないよ……。エルフにもいないよ。プリンは私の好物の中でも既に別格、順位の付けようがないほどの存在なのだ。

どうせ父様は私に半分以上くれるし、無くなっても兄様から奪い取るし、兄様は甘い物はあんまり好きじゃないから大丈夫だよね？

うん、大丈夫だ、問題ない。

「プリンか、いいね、明日作ってあげようか。バニラはまだ残ってた筈だし、うーん、クリームはどうするか……」

フランさんが明日のおやつについて悩み始める。

「やった！　ありがとうフランさん！！」

「たまにはね。シラユキ自分から食べたいって言わなくなっちゃったもんね」

フランさんの言うプリンはプリンアラモードの事だ。ア・ラ・モードだっけ？　どうでもいいか。

初めて作ってもらった時、あまりの美味しさに毎日お願いしちゃったんだよね。毎日同じおやつが続いたのでみんなには嫌な顔をされてしまい、お願いするのをやめたのだ。私は毎日でもいいんだけどね！

「では姫様、参りましょうか。エネフェア様をこれ以上お待たせする訳にはいきません」

「うん、二人はここでおやつ食べてていいよ。行ってくるねー」

そこまで時間は掛からないだろうし、名指しで二人呼ばれたのなら、多分二人で来いっていう事だとも思うからね。

「たっぷり怒られてきなさい。何したか知んないけどね」

「私はお説教じゃないと思うけど。エネフェア様に甘えておいでよ」

それがいいか。うん、母様に甘えに行くつもりで行こう。

執務室に入ると、待っていたのは母様とカイナさんクレアさんの

三人。父様がいないところを見ると、やっぱりお説教じゃなさそうだね。一先ず安心だ。

「母様、来たよー」

「お待たせして申し訳ありません」

「ううん。ごめんなさいね二人とも、急に呼び出しちゃって。ちょっと気になる報告が上がって来たものだから……」

気になる報告？　私たちに何か関係してるんだろうか？

母様の手には一枚の書類、ここからは内容の確認はできないね。

「ええと、ラルファード・ふろむ？　フロフムン、人間男性。言い辛いわねこの人の姓……。もう一人はナナシ・イェル、猫族の女性、どっちもCランクの冒険者ね。活動拠点はリーフサイド、今は弟子が一人、と。この二人、シラユキのお友達よね？」

ラルフさんとナナシさん？　ラルフさんのフルネームは始めて聞いたね。名前は間違えられやすくて姓は言い難いからラルフで通してるんだ、って前に聞いた覚えがある。

「うん、二人ともお友達だよ。……え？　二人に何かあったの！？」

大きな怪我？　病気？　まさか、死！？　一瞬で悪い考えが次々に浮かび上がる。

「ふふ、違うわよ、落ち着きなさい。何かあったと言えばあったわね」

「よ、よかったー……」

驚かさないでよ！　私が勝手に驚いたんだけどさー……

「それは残念」

「シアさん！？」

「失礼、失言でした」

「失言！？」

「おっと、冗談です」

「どこまで本気か分かりにくいよ！！」

「ふふふ。話、続けていいかしら？　見ていて楽しいから、もっとじゃれ合っててもいいのだけれどね」

母様にクスクスと笑われてしまった。

おっと、ついついシアさんとのやり取りに集中してしまった。シアさんもあの二人ともっと仲良くなって欲しいんだけどね。

「あ、ごめんなさい母様。二人に何があったの？　悪い事じゃないんだよね？」

「ええ、悪い事ではないわ。むしろいい事なんじゃないのかしら。この二人、結婚したんですって」

「え？」

「は？」

け、結婚？　え？　だ、誰と誰が？　あ、ラルフさんとナナシさんがだよね。あはは、私は何を言って……

「えええええ！？」

あの二人が結婚！？　え、ちょ、急すぎる！！！

「はあ、結婚ですか、なるほど。ラルフさんはそんな素振りは一切見せていなかったのですが、ナナシさんが押し切ったのでしょうか。吹っ切れたのですかね、ふむ……、どうでもいい事でした」

うわ！　シアさん興味無さげだ！！

「ああ、バレンシアはこの子の事情を調べてあるのね。シラユキには話してないわよね？」

「はい、勿論です」

え？　あ、何？

驚きすぎてもう何が何だか……。この子？　ナナシさんかな？

事情？

「そう、安心したわ。うーん、困ったわね。この子に事情を話さずに置くと……、うーん……。それで貴女も呼んだのよ、バレンシア」

あ、ああ！　私には絶対話せない事情が二人にはあったんだっけ、もう忘れてたよ。

「姫様も知識としては知っていらっしゃるでしょうから、説明自体は理解して頂けると思います。ですが、あまりお聞かせしたくない話なのは確かですよね……。まったく、あの二人は余計な事ばかり……。面倒ですね、消しますか」

「何で結婚する二人を消すの!?　そこは祝福してあげようよ!!」

「私もそれは考えたんだけど、やっぱり駄目よね？」

「母様まで!?」

「冗談よ。カイナ、お茶の用意してあげて。シラユキ、叫びすぎよ？　はしたないわ」

「はい、すぐにご用意」

「あ、ごめんなさ、って二人のせいだからね!?」

「私もですか!?」

「カイナさんじゃないから!!」

カイナさんが淹れてくれた紅茶を飲んで、とりあえず落ち着く。

「姫様には以前少しだけお話しましたよね。ナナシさんはラルフさんのことを愛している、ラルフさんもナナシさんのことを憎からず想っていると」

シアさんはゆっくりと語りだした。

「ああ……、話しちゃうのね……、シラユキ大丈夫かしら。出来るだけ遠まわしに話してあげてね」

母様がハラハラしてる……

私が聞いていい内容の話なんだろうか？　プライバシーの侵害にあたるんじゃないのかなこれ。

「ねえ、母様、シアさん。私はそんな人の隠してること、かどうかは知らないけど、個人の秘密の情報までは聞きたいと思わないよ」

「分かりました、この話はここまでにしましょう。ですが」

あら、意外とあっさり……、ですが？

「そこから先は私が言うわ。次の収穫祭までに本人から聞くこと。聞けなかった場合はお祭りの日はお留守番よ」

収穫祭とは、ただの秋に開催されるお祭りの事。秋という恵みの季節を女神様に感謝するお祭りなんだけど、結婚式も兼ねてるのよね。

一般の人たちは一組一組結婚式なんて挙げない。挙げられないと言った方がいいか。秋祭りを過ぎてから結婚した全ての組を、その日にまとめて祝福するのだ。年に一回の特別なお祭りだね。

私たち王族もゲストの様な感じで毎年参加している。参加とは言っても開始の挨拶を母様がするくらいなんだけど、これが結構評判

がいいみたいで、隣に立たされる私は中々恥ずかしいものなんだよねー。王族を近くで見れるのがそんなにいい事なんだろうか？
特に母様は子宝の神様扱いされている事もあって、恵み、実りのお祭りには欠かせない重要な役割を担わされているらしい。
うん、これはあまり深く考えないようにしよう……

「秋祭りまでに？　う、うん、聞いてもいいんだよね？」

「ええ、本人の口から直接なら問題ないでしょ？　シラユキにはちょっと重い話だけど、大丈夫だと思うわ、多分。やっぱり心配だわ……」

「何も知らないまま素直に祝福するのも問題ないと私は思いますよ？　後で知ってしまっても知らない顔をしたまま、というのは姫様には難しいかと思われますが」

「もしかして、素直には祝福できなくなる内容？　こ、怖いんだけど……」

素直に祝福も出来なくなるような重い話？
全く想像もできないんだけど……、二人がここまで言い淀むとなると、かなり重い複雑な事情でもあるのかもね。

ううう、なんだか急に二人が心配で会いたくなってきてしまった……

「わ、私は大丈夫だと思います。姫様でしたらお話を聞いた後も変わらず接する事ができると思いますよ、いえ、できます。お二人とも大切なお友達なんですよね？　でしたら、大丈夫です！」

「なるほど、さすが姫様に近い性格のカイナだけはありますね、そこまで言い切ることが出来るとは。なんという自信、もしもの時は責任を全て背負うつもりなのですね」

「えっ？　責任？　あの、バレンシア？」

「シアさんの言う事は気にしないで……。ありがとうカイナさん、大丈夫だって思えてきたよ！」

「私が姫様のお役に……！！　痛い！？　クレア、肘はやめて！！」

「また抜け駆けを……。もし大丈夫でなかった場合は……、ふう」

「どうなるの私！？」

「カイナさんどうなっちゃうの！？」

その99

「んぁ？　ああ、子供作れない体なのよあたし。そんなお嫁さんが結婚式出れる訳ないじゃーんってね。だって収穫祭だし？　実りのお祭りだし？　子供だって実りじゃない？」

「軽すぎるよ！！！」

お、重すぎる話のはずなのに何なのよこの軽さは！！

次にラルフさんたちがギルドで相談をする日に早速事情を聞きに行ったのだが、あっさりと答えられてしまった。自分で聞くのはできそうに無かったから半泣きでシアさんに頼んだのに……

このあまりにもあっさり過ぎる答え方、ナナシさん本人は全く気にしてないんだろうか？　子供が作れないなんて相当に辛いことのはずだよね。ううん、泣きそうだ……

「ま、そんな話はいいじゃねえか。おおそうだ、聞いてくれよ。コイツやっと凍らせる魔法使えるようになったんだぜ。やっぱ氷水に全身浸かるのは効くな、ありがとなメイドさん」

「いえいえ。実際その罰ゲー、修行風景を見れなかったのは残念ですが。エディさん、おめでとうございます」

「あ、うん、エディさんおめで、罰ゲーム!?」

「ああ……、そんな気はしてたよ……。やっぱり王族から見たら俺たち冒険者なんて遊び道具の一つに過ぎないんだよな……」

「ご、誤解しないで!!　で、できるようになってよかったですね!!」

ああもう、何が何だか。

とりあえずエディさんが冒険者必須魔法の一つを無事修めたっていう事だね。よかったよかった。

「あはは。でもさ、冷やすのができなくなっちゃったんだよねー、凍らせるだけ。まあ、それは追々でいいかな」

「そうなんだ。多分壮絶なトラウマになっちゃったんだと思うよ……」

凍らせれることができれば後は調節だけだと思うしね、しっかり練習していけばすぐに使いこなせるようになると思う。

……？

「流される所だった!!　な、ナナシさん、聞いちゃ駄目?」

「むう、誤魔化しきれなかったか、残念。シラユキちゃんには話し難いんだよねー」

子供に聞かせていい話じゃないって事かな……

ううう……、気になるけど、大人しく退くしかないよね。

「直接的な原因まではお話にならなくて結構ですよ。姫様はただ、ラルフさんを愛しているのに何故告白する事ができなかったか、との理由をお知りになられたかっただけですから」

え？　だからそれが理由なんじゃないの？　子供の作れない体だから言い出せなかったんじゃ……

いくらナナシさん本人が自分の体の事を気にしていなくても、ラルフさんが同じくそうとは限らない。私だったら絶対に、どんなにその人のことが好きでも、いや、好きだからこそ言い出せないと思う。

「あ、愛してる？　は、恥ずかしー！！　んふふ、別に告白できなかった訳じゃ無いんだよね、ただ自分の気持ちに気づいてないだけだったのよ」

「やめろよオイ、俺も恥ずかしいわ。愛してるとか……、くそっ、顔がニヤけちまう」

二人とも少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうにしている。

自分の気持ちに気づいてなかった？　ラルフさんが好きだっていう気持ちかな。

私にはさっぱり分からないんだけど……。最近気づいて告白したっていう事？

「あ、あの、私に話せる範囲でいいですから、聞かせてもらってもいいですか？　こ、子供が作れないって、その……、大変なことなんじゃないんですか？」

分からない……。ナナシさんとラルフさんが全然気にしているように見えないのが……、分からない。

「真面目なお話は苦手なんだけどな……。メイドさんは全部知ってるみたいだよね？　どこまで話していいと思う？」

「ナナシさんにお任せします、と言いたいところですが、難しいですね……。先ほども言いましたように、原因をお話するのはやめておきましょう。私にも詳しい、直接的な原因までは分かりませんでしたが、恐らく冒険者になる前のお仕事のせいなのですよね？」

「うわ、よく調べてあるなあ……。あ、怒ってないから大丈夫だよ。お姫様に集る悪い虫の可能性も考えられるんだから、素性を調べ上げるのは当然だよね。子供が作れない体になった原因は、実はあたしにも分かんないんだ、それは今は置いとくよ？　冒険者になる前の仕事ってちょっと特殊と言うか、ありふれたものだったんだけど、うーん……、あたしが特殊だったのよ多分」

ナナシさんが冒険者になる前のお仕事？　それで子供の作れない体に？　ありふれた仕事みたいだけど、一体どんな……

ああ、ナナシさんが昔何をしてたかなんて聞いた事もなかったよ。てっきりエディさんみたいに成人してすぐ冒険者になったのかと思い込んじゃってた。冒険者の日常を聞くだけでも凄く楽しいから、それ以外の事は、食べ物の好みとか趣味くらいしか話してないや。ナナシさんと話してると、どうしてもそっち方面へ話が転がって行っちゃうっていうのもあったかな……

「その仕事の内容は話せないよ、ごめんねー。メイドさんも答えてくれないと思うから聞かないでね。シラユキちゃんには前に話したよね、あたしは捨て子だったって」

「は、はい……」

ナナシさんは、私の表情を見ながらゆっくりと続きを話し始めてくれた。

確か、名前が無いからナナシっていう名前になったんだったかな。初めて会った日に姓は貰い物って言ってたっけ。

「緊張しなくてもいいって、可愛いなあ……。簡単に説明しちゃうか、詳しく話そうとすると、あたし絶対口滑らせると思うしね。まあ、そこに拾われて、物心付く前から働かされてたんだけどね、その頃のあたしって、文字も読めない馬鹿だったのよ。言葉が話せるだけでさ、常識も無かった。誰も仕事の事以外教えてくれる人なんていなかったし、十五になるまでずっとそんな感じだったの。う……、メイドさん、どうしよっか？　もうやめとく？」

「姫様……、お辛いのでしたら、ここまでにしましょう？　泣きながら聞くほどの話ではありませんから」

言葉が出ない。言葉は出ないが……、涙は出る。シアさんが優しく涙をハンカチで拭ってくれる。

今は何も考えちゃ駄目だ、続きを聞こう。

ブンブンと首を振り、シアさんの提案を断る。

「では、簡潔にお願いします。すみません、貴女も思い出したくな

い事なのでしょうが……」

「ん？　いや、そうでもないよ？　その仕事は好きだったからね。それはいっか、続けるよ？　十五の時にね、ある人に引き取られたの、その人があたしに姓をくれた人。冒険者だったんだけどねその人、父親みたいな感じだったかな。引き取られたその日から一般常識やら冒険者の知識やら、色々と叩き込まれてね。そのおかげで今のあたしがある訳なんだけど。端折りすぎたけどいいよね？　それでさ、あたしって精神的にまだ子供なのかね、十歳くらい？　あはは、シラユキちゃんより下かもだね。そんな訳で、人を好きになるなんていう感情がよく分かんなかったんだよね」

「なるほど、私は子供が作れない、という理由から言い出せなかったのではないかと思っていましたが、自分の心が、気持ちが理解できていなかったのですね……。お疲れ様でした、ナナシさん。まずは謝罪を、申し訳ありませんでした。」

「ごめんなさい、ナナシさん……。私……、うう……」

シアさんと一緒に、私も頭を下げて謝る。

いくらお友達でも、これは聞いちゃいけなかったね……

何度も思うことだけど、私は自分がどれだけ恵まれているか全然理解できてないんだよね。

「あはは、いいっていいって。あたし本人が気にして無いんだからさ、いいんじゃない？　ま、でもさ、子供に聞かせる、特にシラユキちゃんみたいなお姫様に聞かせる話じゃなかったかもね」

世の中には幸せな人ばかりじゃない、ナナシさんが不幸だったと

は言いたくは無いが、幸せな子供時代を過ごしてきたわけじゃない。
「今」だから笑顔でいられてるんだ。

「あー、泣かないでくれよ。結婚の祝いに来てくれたんだろ？　何でこうなるんだよ……」

「お祝いする空気じゃなくなっちゃいましたよね……。ごめんなさい」

「この空気は辛い……。結婚を勧めた俺が悪いみたいだ……」

「エディさんが勧められたんですか？　それはまた思い切ったことを……」

「そうしないと俺がナナシさんに狙われるんだって。俺から見たらこの二人恋人同士にしか見えなかったしさ、付き合ってないだけで絶対好き同士だって分かってたからあそこまで逃げてたんだよ」

エディさんから見たらやっぱりそうだったんだね。ナナシさんは、自分の気持ちが恋愛感情だっていうのが分からずにラルフさんに甘えてたのかな？　Hも何回もしてたみたいだし……

一晩のお相手募集もそうか。ただ、その、気持ちいいことしてお金を貰える、くらいにしか思ってなかったのかもね……

「結局エディの童貞は食えなかったなナナシ。エディ、お前も結婚する前なら許したのに、もったいない事したなあ？」

「俺は俺でナナシさんくらいのいい女性（ひと）見つけるよ！！　い、いる

かなあ……。くっそ、最近周りに美人が増えて、目が肥えて来ちゃったんじゃないか俺って……」

ナナシさんすっごく可愛いもんね、可愛いって年じゃないんだけどさ。他にはミランさんにシアさん、リズさんも見てたよね。何という美人ぞろい……、姉様にはまだあってなかったっけ？

「あたしくらいのならゴロゴロいるんじゃない？　さすがにメイドさんクラスともなるとこの国に一人二人いるかどうかなんだけど……。ま、頑張んなさい、Eランクになったら独り立ちなんだし、そっからでも遅くないよ。今は一人前になることを優先しなきゃね」

Eランクで独り立ちなんだ？　ああ、Eランクからやっと本来の意味で冒険者ギルドの一員になれるんだったね。

「が、頑張ってくださいね。早く独り立ちしないと、二人の熱い仲を見せ付けられる毎日が続いちゃいますからね」

この二人は兄様姉様みたいなラブラブ空間は作り出さないと思うけど、ナナシさんってそっち方面での遠慮は一切しなさそうだからね。

「夜営が既にやばいんだよ……。でも、焦らず頑張るよ、ありがとう、シラユキちゃん」

や、夜営!?　わわわわわ、また想像しちゃうよ……

「お詫びと言っては何なのですが、一度診察を受けてみませんか？

初潮がまだ来ていないだけかもしれませんよね？　可能性は低いでしょうけど……」

「ああ、できたらそうしたいよな。でもそんな詳しい診察ができる医者なんているのか？」

初潮が来てない？　え？　ああ！　そういう事なのか！！

「じゅ、獣人の人は分からないですけど、人間種族の場合は二十歳過ぎても来ない人も稀にいるらしいですよ。体が小さかったり、栄養が足らなくて体の成長が遅れている人には、そういう事があるらしいです。な、ナナシさんは小柄な人ですから、そうかもしれないですよね！」

シアさんの言う様に可能性は低いだろうけど……

「医師ではなく、姫様と以前お話した癒しの能力を持つ方ですよ。体の機能をを正常に戻す、という事もできるのではないかと」

「え？　あ、マジで？　今さら生理とか来ても逆にめんどくさそうな……」

「うぉーい！！　子供作れるならそっちの方がいいじゃねえか！！　つーか癒しの能力者かよ、すげえな。それじゃ、頼んでもいいかなメイドさん。コネ使うみたいで悪い気がするんだけど、こればっかりは俺たちじゃどうしようもないからさ」

「そうだよナナシさん。駄目元でも診てもらった方が絶対にいいって！　やっぱ王族って凄いなホントに……」

癒しの魔法を使える能力者って、国が全部抱えちゃってるんだよね。ただの一般の冒険者夫婦が簡単に会えるような、そんな軽い役職には就いていなさそうだ。

「エディさんの仰るとおり、駄目元に近いかもしれません。私はただの一メイド、ウルギス様エネフェア様の許可が必要になるかとは思いますが、何とかして見せます、確約します。先ほどお詫び、と言ったでしょう？　今回ばかりは全力で協力致しますよ。貴方方の笑顔はイコール姫様の笑顔に繋がりますからね、遠慮し断ろうが無理矢理にでも診られてもらいますからね」

最後のは取って付けた様な理由だね。シアさんもラルフさんたちのことはいいお友達だって思ってるはずだし、照れが出ちゃったかな？　ふふふ。

そういえば、シアさんが言うにはその人はもう人前には滅多に出てこない人だったね。昔、能力関係で何かあったのかもしれないね……。私の口添えでも難しいのかもしれない。

お姫様なんて言っても無力な物だよね、父様母様に我侭を言うくらいしか私にできる事はなさそうだ。癒しの能力なんて珍しい、も、の……？

「ああ！！！」

今気づいた！　思い出した！！

「うお！　何だ！？　珍しいなそんな大声」

「ひ、姫様？　どうかなさいましたか？　すみません、出過ぎた真

似をしすぎましたでしょうか……」

「シラユキちゃん？　やっぱ王族に頼っちゃうのは駄目かな……。シラユキちゃんってお父さんお母さん大好きなんだもんね。迷惑になっちゃうかー……」

「え？　俺たち死んだ！？」

四人が私の大声に盛大に勘違いしているが……、今はそれを訂正している余裕は私の頭には無い！

「ななななナナシさん、ちょっと立って、こっち、来て来て！！」

椅子から立ち上がり、ナナシさんを手招く。
あ、興奮で敬語忘れてた。ええい、今はそんな事はどうでもいい！
さっきから心臓がドキドキ言ってる。私にできること、やれること、あるじゃない！！！

「姫様？　一体何を……」

「な、何？　い、行くけどさ、何なの？　手打ちにされる！？」

ナナシさんは席を立ち、恐る恐る私の隣へとやって来た。

手打ちって何？

「うふふふふ。ちょっと抱き付きますね」

返事を待たずに正面からナナシさんに抱き付く。あまりの嬉しさに変な笑いが出てしまっているが、気にしない。

む、ちょっと汗臭いよ？　お風呂入ろうよ……

「うひゃー！　小さい！　柔らかい！　いい匂い！　私女の子に興味なかったけど、シラユキちゃんなら全然イケるわ！！　やばいわこれ、興奮してきた……」

両手でしっかりと抱き返してくれるナナシさん。

何か指がワキワキしてゆっくりと下に進んでるんだけど……

「変な事言わないでください！！　あ、シアさん、倒れちゃったらごめんね？」

身の危険を感じる、さっさと済ませてしまおうか！

「！？　姫様！　いけません！！」

シアさんの静止の言葉とほぼ同時に能力を発動する。

イメージは癒し！　身体機能の正常化！！　私の全魔力を注ぐイメージで！！

ナナシさんの体の中がどうなっているかなんて私には理解も想像

もできないが……、私の、この能力なら、何も！　問題は！！　ない！！！

どこか悪い所があるのなら……、全部治してしまえばいい！！！

その９９（後書き）

続きます。
なんというハイテンションなシラユキ……

その100

「んー……、にゅ？」

目が覚めた。よく寝たわー

よく寝た？　何かよく寝た気がするね。涼しい季節のお休みの日に、ついついお昼まで寝てしまった感じに近いか。私は毎日お休みみたいなものだけど……

このまま目を瞑ればまだまだ気持ちよく眠れそうな気さえもする。寝てしまうか？　二度寝の心地よさは異常。

でも起きよう、どうせすぐにシアさんが起こしに……、ん？

「シアさん？」

ベッドの横で、シアさんが椅子に座って眠っていた。何故に？寝顔も美人さんだなあ、とまじまじと見て思ってしまう。

シアさんは、私の声に反応して目が覚めたのかゆっくりと目を開き、こちらを確認し、私と目が合う。

そして驚いた様に目を開き……、睨むように目を細めた。

お、お、怒ってるー！！？

「おはようございます姫様。まあ、今は時間的にお昼過ぎなのですが……。ご気分は如何ですか？　どこか体に異常は感じませんか？　ああ、黙っていたら脱がせて確認しますよ？」

「な、無いよ！？　え？　な、何？　あ、おはよう？」

怒ってる、これは怒ってるね……。な、なんでだろう……

無いとは言ったがとりあえず確認だけはしよう。体を起こして少し上半身を動かしてみる。手を腕を回し、腰も捻ってみる。うん、特に異常は無いね、眠気もすっきり、寝過ぎでだるいという事も無い。万全の体調と言ってもいい感じだね。

シアさんは無言でドアの方へ歩き、外へ向かってノックをする。

「フラン、起きてますか？　姫様がお目覚めになられました。すぐに皆様へ」

「起きた！？」

勢いよくドアが内側へ開かれる、が、シアさんはヒラリと回避。予想していたようだ。

「シラユキ！！　起きてる！！！」

「まずは皆様にお知ら、私が行きます。姫様のお側を絶対に、絶対に離れてはいけませんよ。姫様、ベッドから出ない様お願いしますね。それでは、少しの間失礼します、すぐに戻りますので……」

「う、うん」

「ごめん。急いでね、レン」

フランさんと入れ替わるように、シアさんはお辞儀を一つ、部屋の外へ出て行ってしまった。

「ああもう！　よかったー！！　心配掛けてー！　もう！！」

半泣きで私に抱きついてくるフランさん。

「わ、っとと……。ど、どうしたのフランさん？　何かあったの？」

心配？　私が何か心配を掛けるような事をしちゃったのか？

んー？　何かしたっけ私……

「覚えてないんだ……、叱り難いなあ……。シラユキ丸三日寝たままだったんだよ？　寝たままと言うかさ、意識が無いって言うのかな？　もう、私たち心配どころじゃ無かったんだからね！　今回は私も本気で怒ってるのよ！」

私から体を離し、目じりの涙を指で拭いながら説明をしてくれる？

「三日！？　何で！？　えええ！？」

三日間寝たまま！？　寝過ぎでしょう私！！　寝過ごしたっていうレベルじゃないよ！！

「ホントに覚えてないんだこの子……。三日前のお昼過ぎにさ、ぐったりしてるシラユキをレンが連れ帰ってきたのよ。顔色も真っ青で、言い方は悪いけど死んでるんじゃないかって状態で……。ホントに、起きて、よかったあ……」

そのときの私の状態を思い出し、さらに安心したのか、フランさんは泣き出してしまった。

「な、泣かないでフランさん……。三日前何があったの？」

「く、詳しい事情は私も聞いてないのよ、魔力を使い切ったって聞いただけ。どんな無茶したのよこの子はもう……」

また私を、今度は強めに抱き締めて、撫でてくれる。

どうやら魔力を使いすぎて、体が強制的に意識を落としちゃったみたいだね。ブレーカーが落ちた感じかな？

でも、そんな強力な魔法を使った覚えが……。三日前って何してたっけ……？　うーん……？

「シラユキ！！」

わ！？　母様？

母様がノックもなしに部屋に飛び込んで来た。ビックリしたよ……

フランさんが私から離れ、間をおかずに今度は母様に抱き締められる。母様も泣いちゃってるね。

ううう……、何をしちゃったか思い出せないけど、悪い事をしてしまった気分だ。

「シラユキ、ああ、起きてるな、よかった」

父様が、

「シラユキ！　ああ……、よかった、よかったあ……」

姉様も泣きながら、

「この馬鹿、心配掛けやがって……」

兄様も半泣きで、次々と部屋に入って来た。

最後にメアさんとシアさん。メアさんは大泣きしていて言葉も出ないようだ。

なんという罪悪感だ！！！

さすがに全員は部屋には入れないので、私お付きの三人以外のメイドさんたちは廊下で待機することになった。

今はベッドの周りを家族みんなに囲まれている、母様は私を抱き締めたままだ。ちょっと、いや、かなり嬉しかったりする。

「大丈夫？　痛いところは無い？　お腹は空いてる？　食べれるかしら？　カイナ、何か軽いもの用意してあげて」

「はい！　すぐに用意して参ります！」

私を抱き締め、撫でながらカイナさんに指示を出す母様。廊下か

らカイナさんの返事が涙声で聞こえた。

「お腹は……、空いてるかな？　よく分かんないや。体は全然大丈夫だよ、母様」

「ああ……、もっと声を聞かせて……。三日、三日もあなたの声を聞けなかったのよ……、もう気が狂ってしまいそうだったわ……」

「母様……、ごめんなさい……」

「いいの、いいのよ……。目を覚ましてくれただけで私は……」

母様の涙は止まらない。私も泣き出してしまいそうだ。

「お母様……、ごめんなさい、代わって。私も……」

母様が私から離れて、今度は姉様に抱き締められる。

泣いたままの母様は父様の側へ、父様に肩を抱かれる。

「う、ちょっと苦しいよユー姉様……」

抱き締める力が強い！　苦しい！

「私は怒ってるの！！　もう……、目覚めないままだったらどうしようかと……」

「ううう、ユー姉様、ルー兄様、父様、母様……、それにメイドさんみんな、ごめんなさい……」

自分が何をしてしまったのかが全く分からないが、家族全員に相

当な心配を掛けてしまったみたいだね。

「ふむ、まあ、なんだ、目覚めてよかった。言いたい事は山ほどあったんだがな、シラユキの顔を見たら飛んでしまったな……」

父様はとても優しそうな笑顔で私の頭を撫でてくれた。

みんなの涙も落ち着き、私は今、椅子に座る母様に膝抱きにされている。母様からは、撫で、頬擦り、キスの嵐を受けている。唇はやめて！！

「いくら友達の事だからって、もうちょっと考えてから行動しろよ？　毎度毎度心配させられる俺たちの身にもなれってんだ……」

兄様はまだまだ怒ってるかな？　うん？　友達の事？　何だろう？　それに毎度毎度って、そんなに毎回心配なんて……、あ、掛けてるのか私は……

「あのー……、私って、何しちゃったの？　全然思い出せないんだけど……」

「お、覚えてないの！？　自分のやった事くらい覚えてなさい、叱れないじゃない……」

呆れる姉様。

このまま思い出さなければ叱られないんじゃ、と少し考えてしま

った。

「俺たちもバレンシアから聞いただけなんだ、説明されてもよく分からないんだよな」

「お兄様のお友達、あ、ラルフの奥さんになったんだっけ。ナナシに何かしたんでしょう？」

ナナシさんに何か……、あああああ！！！

「し、シアさん！！　ど、どうなったの！？　ナナシさんの体、治ったの！？」

そうだそうだそうだった！！　ナナシさんの体を能力全開で治そうとしたんだったよ！！

え？　あ！　それで魔力が尽きたのか！　いやー、初めて使う魔法だっただけに加減ができなかったみたいだね。失敗失敗。

「分かりません。それどころではありませんでしたから」

そっけない！　怒ってるなあ……

「母様、何かお手紙とか来てない？」

「ううん、何も連絡は来て無いわ。冒険者個人からの手紙が私に直接届くなんて事は、まず無いからね。それより、治った？　何を、ううん、どこを治そうとしたの？」

返事、質問をしながらも、私を撫でる手は止めない母様。

「ナナシさんの、その、どこだろ？　体全部かな。どこが原因で、あー、その」

「そこは言わなくてもいいわ。なるほどね、体の中のどこかに異常があると思ったのね。あなたの能力の応用の効く範囲を甘く見ていたかしら……」

「あー。何の話だ？　ナナシが怪我でもしてたのか？　体の中？」

姉様も、兄様もナナシさんの体のことは知らなかったみたいだね。これは伏せたままにしておこう、まだ治ったかどうか分からない、余計な心配を掛けてしまうだけだろう。あまり人に気軽に話せるような内容じゃ無いしね。

「姫様がナナシさんに抱きつき、能力を発動させてすぐでした、多分一秒ほどの時間だったのではないかと。ナナシさんに触れていた箇所が僅かに発光していましたね。そのまま姫様は糸が切れた人形の様に意識を失い、お倒れになってしまったのです。私はすぐに姫様を抱き上げ戻って参りましたので、あの後ナナシさんがどうなったかなど分かりませんし、一瞬たりとも考える事もありませんでした」

「シア、もうちょっと柔らかく……」

シアさんの淡々とした説明にメアさんが注意するが……

「何か？」

「な、何でもない……」

メアさんにはどうすることもできなかった……

「まあ、バレンシアが怒るのも無理は無い。何故一言断らなかったのだ？　即座に癒さなければ手遅れになるという訳でもなかったのだろう？」

「あ、言われてみればそうだね……」

あの時は……、私にもできる事があるって思いついて興奮しちゃってたからか。考え無しに行動しちゃったねまた……

何でも一人でやろうとするなって散々言われてたのにね、反省反省。

「何だ？　また無意識かよ……。何回言っても直らないなそれは、まったく……」

兄様にも呆れられてしまった。

「ううう、シアさんごめんなさい……。ゆ、許して欲しいな？」

「いえいえ何を仰っているのか分かりませんね私が姫様に対して怒りの感情を沸かすとでもお思いなのですか悲しいですね私は何よりもまず姫様のことを第一に想っているというのに」

「区切り無しなのに聞き取りやすい！！　うー、シアさん怒らないでー……」

つーんと横を向かれてしまった。可愛い！　じゃない！

「もう……、拗ねないでよう……。？　拗ねてるの？」

私の言葉にこちらを向き直るシアさん。

「姫様、何故一言だけでも私に相談して頂けなかったのですか。いえ、これは私の我侭に過ぎませんね。ただのメイド如きが出すぎた事を申しました、申し訳ありません」

そして深々と頭を下げてしまう。

これは痛い！！　罪悪感で胸が締め付けられそうだ！！

「ゆ、許して！！　ううう、あの時はホントに何も考えてなかったと言うか……、私にもできる事があるんだって嬉しくて……。シアさん許して、お願い……」

「王女である姫様がたかがメイド如きに許しを請うなどと……、いけませんよ？」

「許される気配が無い！！　ど、どうしたら……」

さ、さすがシアさんだ。私に一番効果があるやりかたで攻めてくるとは……、やるな！！

「それくらいにしてあげなよシア。姫、シアって三日間殆ど寝てないからさ、ちょっと機嫌悪いのよ、多分」

「メア……」

さすがに見かねたのか、メアさんがフォローを入れに来てくれた。

ん？　三日間殆ど寝てない！？

「ええ！？　だ、駄目だよそんな！！　ちゃんと寝なきゃ！！」

「心配掛けてた側のセリフじゃないよ？　睡眠不足なのは私たちも同じなのよねー。肌が荒れちゃったらシラユキに治してもらおうか」

「う、メアさんフランさんもごめんね？　いつでも治すから遠慮なく言ってね」

睡眠不足はお肌の大敵！　私の能力で肌荒れまで治せるのかは分からないが、こんな美人メイドさんたちのお肌を荒らすわけには絶対にいかない！

「まずはそういった実験が必要だったのですよ。能力の強弱の加減も分からないまま体全体を癒そうなどと……。もしそれでナナシさんに何かあったとしたら、姫様は決して癒える事の無い傷を背負うかもしれなかったのですよ？　ああ、ご心配なく、ナナシさんには特に異常は見られませんでした。今どうなっているかまでは分かりませんが、恐らくマイナスになっている様な事はないでしょう。姫様の思う通りの結果が出ているか、体の表面、目に見える傷だけを癒したのか、それとも全く別の効能が出てしまっているのか……。ふむ、少し楽しみですね」

よ、よかった。ナナシさんは何ともなかったみたいだね。

シアさんもいつもの話し方に戻ったし、機嫌直してくれたかな？

「確認に行きたいか？　でも駄目だぞ、数日は様子見だ。これは誰が何と言おうとも許さん。ギルドに軽く調査する様言っておく事にしよう。分かったな、シラユキ」

本当は今すぐにでも確認に行きたいのだけれど、来週までは我慢しよう。ラルフさんたちはお仕事に出て行っちゃってると思うしどうせ会えないだろう。呼び出すのも駄目だよね。

「う、うん！　ありがとう父様、みんな。それと……、あの、心配掛けちゃって、ごめんなさい。次からはちゃんと相談するようにするね」

「それ毎回言ってるよな。まあ、許してやるか。カイナはまだか？　シラユキ、腹減っただろ」

「私はまだ許してあげないからね！　また暫くの間、私の側から離れないようにするのよ？　それで許してあげちゃおうかな」

兄様は頭をグリグリと、姉様からは頬をグニグニとされてしまう。

何か、あっさり許されてしまいそうだねこれは。兄様も姉様もやっぱり激甘だなあ……

「駄目よ、ユーネ、まずは私ね。公務なんてどうでもいいわ、三日分のシラユキ分を取り戻さなきゃいけないの」

シラユキ分ってどんな成分！？　母様に全力で甘えられるチャンスだ、黙っておこう。

「えー、ずるいわお母様。あ、二人でも良いわよね、そうしましょう、お母様」

「ええ、そうね。ふふふ。ごめんなさいね、貴女たちも心配していたのは同じなのに。でも、お願い、優先させてもらえるかしら」

メイドさんズにお願いする母様。

ここで命令しないのは素敵だよねー。まあ、どっちにしても女王様だし、メイドさんズに断れるわけもないんだけど。

「私たち三人は常にお側に立たせて頂いています、エネフェア様が断りを入れる必要など何もありませんよ。姫様もエネフェア様に甘えられると嬉しく思われていますし」

「言い切られた！！　合ってるのが凄いよねホントに……」

「私たちの方がレンより二年長い付き合いなのにねー。でも、今のは分かり易かったかな」

「うんうん。エネフェア様に甘えられるぞっていうあの笑顔を見れば誰だって分かるよ」

母様に甘えられるのは嬉しいんだからしょうがないじゃない！！

そんなにニコニコしてたのか私は……

「カイナ遅いね……、エネフェア様、私ちょっと行って見てきます

ね」

「ええ。お願いね、フラン」

「では私は紅茶の用意を……。姫様には私特製の薬草茶を淹れて差し上げますね。覚悟してください」

「飲むのに覚悟が必要なお茶なの!?　シアさんまだ怒ってるー!!」

「いえいえそんなとんでもない１００％の善意からの行動ですよ何を仰られているのか理解不能です少々苦味が強いだけですよご安心くださいね」

「よくそんな流暢にスラスラ言葉が出てくるもんだな、バレンシアは。真似したら舌噛みそうだ……」

「に、苦いのはイヤー!!!」

「苦いのはイヤとか、いやらしい子ね……」

「ユー姉様!?」

「大丈夫よ、その苦味もすぐに癖に……」

「フラン！　ユーネ様も今日くらいはそういうのやめようよ……」

「楽しそうだな……。まるで本当の兄弟姉妹を見ているようだな」

「バレンシアが一番上の姉の様よね。本当にいい拾い物をしたわ」

「物扱い！？　母様ひどーい！！！」

「ふふふ、可愛い……」

その後起こったことを簡単に。

カイナさんは一から何かを作ろうとしていたみたいで、シチューを煮込んでいた。それは時間掛かるよ……

フランさんが消化に良さそうな物を、そのシチューを使ってさっと作って来てくれたのが凄かったね。美味しかった。シチューにパンを浸したような料理？　名前は無いらしい。

母様と姉様が競うように食べさせてくるのが嬉しかったけど、とても疲れた。

私の食後のお茶はとても苦い薬草茶だった、温かい青汁か？　暫く飲まされ続けるらしい。泣きたい。

他のみんなはシアさんが淹れた紅茶を飲みながらおやつタイム。私の部屋でね、目の前でね。妬ましい、妬ましいわ！

また少し眠り、その後の夕飯もお風呂も、母様と姉様の激しい戦いが繰り広げられた。つ、疲れる……

数日はこんな毎日が続くと思う。でも、嬉しいね。

心配を掛けておきながらひどい考えだと思うけど、嬉しいんだからしょうがない。

ちゃんと悪かったと思って反省もしてるよ？

その日の夜中目が覚めて、トイレに行こうと魔法で明かりを点けようとしたら……

魔法が使えなくなっていることに気がついた。

その１００（後書き）

ついに１００話です！

だからと言ってなにかある訳でも無いんですけどね……

その101

「それでね？　その時シラユキ何て言ったと思う？　お兄様」

姉様やめて！！

「ん？　なんか変な事言ったのか？　ああ、分かった。どうしてこうなった！　か？」

どうしてこうなった！

「今回は言わなかったわねそれ。……どうしよう、まだナナシさんが治ってるかも分からないのに……、って泣きそうになってね。ふふふ、優し過ぎるわよこの子」

「おいおい、魔法が使えなくなってまずした事が他人の、っと、友達の心配かよ……」

「ううう、だってまだ治ってるかどうか分からないんだよ？　治ってなかったらまた治しに行かないと。……あ」

しまった！　つい口が滑って……

「こーら！　また勝手に使う気だったわね？　まったくシラユキは……」

「シラユキ？」

「ごごごめんなさい母様！！」

「ふふ、ちゃんと相談するのよ？」

「はーい！！」

母様大好き！！！

「んで、今はもう問題なく使えてるんだよな、魔法」

「うん。先に教えておいてくれればいいのに……、びっくりしたよホント」

魔法が使えなくなったのは一時的なものだった。

昨日の夜は盛大に焦り、一緒に寝ていた母様と姉様を起こして泣きついてしまったのだが、二人には笑われてしまった。ひどいよ。

どうやら魔力を消費する事を体が拒否、と言うか、魔力を使い過ぎた反動なのかな？　体が回復しきるまでは魔法は使えなくなるのが普通らしい。

自覚はできていなかったのだけど、やっぱりまだ体は全快ではなかったみたいだね。ステータス画面があれば……、と初めて思ってしまった。

先に教えてもらえてなかったのは、魔力を使い切るほど消費させるつもりは元々無く、教えるまでもないんじゃね？　という事らし

かった。多分忘れてたんだろう……
以前魔力疲れで倒れた時も試してはいなかったが、多分使えなかったんじゃないかなと思う。
あの時はシアさんに何から何まで全部お任せしちゃってたからね、魔法を使おうとも思わなかったよ。

「私たちは基本的に魔力疲れなんて起こさないからね。ちょっと説明が抜けちゃってたかな？」

「子供のうちだけだよな魔力疲れなんてさ。シラユキももうちょっと大きくなればもっと使えるようになるさ」

「魔力の総量は年齢を重ねるたびに増えていくんだっけ？　ホントに謎パワーだよね魔力って」

成人したらそれ以上増えないと言う訳じゃなかった。まあ、細かい所はさっぱり分からないみたいなんだけど。
既に千五百年以上生きてる父様でもまだまだ増えているのかもしれないね。なにそれこわい……
これがエルフが最強種族たる所以なのかな？　ハイエルフは元々の魔力量がエルフよりも多いらしいのだけど、シアさんを見ていると自分が特別だとはとても思えない。
そうだ、私は将来、有り余る魔力で傷ついた人を癒す仕事をするのもいいかもしれないね。

「体感して分かるモンでもないんだけどな、いつの間にか、ってやつだよ。普通の魔法はいいが、能力の使用は控えるか、しっかり考えてから使うんだぞ？」

「はーい！　ふふふ」

「可愛いわシラユキ……」

母様に抱き締められ、

「ああ、可愛いなコイツは……」

兄様にグリグリと撫でられる。

「癒しの力は凄いわよね。でも、どう練習したらいいのかな？　シラユキに傷口なんて見せたくないし……」

「包帯かガーゼの上からでもできるだろ？　んー、家でよく怪我するのって……、フラニーとクレアか？」

「はへ？　あ、うん。いくら毎日料理して慣れてるって言っても、包丁傷とは中々縁は切れないものなんだよね」

いきなり話を振られたフランさんが、間の抜けた返事の後答える。

クレアさんは執務室だ。父様が母様にお仕事を全部投げられてしまったので、カイナさんと一緒にお手伝いをしているんだと思う。

どれだけ慣れても毎日の事だからね、やっぱり指先の怪我は絶えないものなのかな。

ふむふむ……、うーむ……

「まだ駄目よ？　それにね、何でも治してしまえばいいって言うも

のでもないの。ちょっとシラユキには難しいかしら……、分かる？」

何故バレたし……

「うん、何となくならね。癒しの力頼りになっちゃうし、後、多分だけど、怪我を軽く考えちゃうかもしれないね。怪我しても治せばいいやって」

それこそ本当にゲーム感覚で怪我を恐れず行動しちゃいそうだよね。

「お、教える事が無いわ……。癒しの力頼りって言うのは、小さな痛みにも耐えられなくなるかもしれないの。怖いでしょ？」

怪我した痛いー！　早く治してー！！　ってなっちゃうんだね、情けないわそれは……

「たまにだけど、深く切っちゃうこともあるからさ、その時はお願いしようかな」

「うん！　でも、怪我はしないで欲しいな……」

家族が怪我してるところなんて見たくも無いよ。クレアさんがキャロルさんと模擬戦した時にできた傷には、凄いショックを受けちゃったしね。

「ううん、この子優しすぎでしょう！　ねえ、お母様、代わって？」

「駄目よ。まだ三日分のシラユキ分は取り戻せていないもの、もう少しだけ我慢しなさい、ユーネ」

「お母様ずるいわー！！」

今日も私の取り合いを続ける母様と姉様。

ふふふ。疲れるけど、とっても幸せだ。

「結局ナナシの何を治そうと思ったんだ？　エロさか？」

そこはやっぱりお友達の事、気になっていたのか兄様が聞いてくる。

「それも治ってるといいね……。んー、兄様には言えないなー。ごめんね？」

ホントに治ってるといいな……。エロさの事じゃないよ？

「女性の体の事を気軽に聞いちゃ駄目よ、ルー。私とバレンシアは知っているのだけれど……、こればかりは簡単には言えないわね」

「う、悪い、どうしても気になっちまってさ。まあ、聞けたら本人たちから聞くか……」

「私も駄目なの？　お母様。ナナシは私にとってもいい友人なんだけど……、心配だわ」

姉様もナナシさんとは気が合うみたいで、既に親友クラスのお友達みたいだ。

「ウルも言ってたでしょ？　急がないと手遅れになるものでもないって。健康に問題がある訳じゃないのよ。シラユキの癒しの力の効果が出ていなくても、今までと何も変わりは無いわ、安心しなさい」

倒れてみんなに心配も掛けてしまったんだし、何かしら効果が出てないとなんか、損した気分になってしまうよ。

「うん……。それじゃ、全部解決したら本人から聞くわ」

「俺はシラユキが知ってるって言うのが不満なんだがなー。そこまで重い問題でもないのか？」

「ふふふ、秘密だよ」

重い、重すぎるくらいの大問題なんだけどね。解決したらきっと笑いながら話せると思う。そうなったらいいな……

「ずるいわシラユキー！」

姉様にほっぺをグニグニとされる。

「うにゅにゅ……。ふふふ」

し、幸せすぎる……

さて、次の問題、大問題に取り掛かろうか……

一晩明けた今でも、シアさんが不機嫌なままなのだ！！　これは重大な問題だよ……！！

「し、シアさーん？」

「何か？」

反応が冷たすぎる！

「怖い！！　むう、機嫌直してよ」

「シア、まだ怒ってるの？　そろそろ許してあげなよ」

メアさんが呆れたように言ってくれる。

「ああ、申し訳ありません。自分の不甲斐なさを嘆いていただけの事でありますから。姫様には逆に、申し訳なく思っているところです」

シアさんが不甲斐ない？　どこからそんな考えが出てきたんだろう……。私に対して怒ってる訳じゃないのかな？

「バレンシア、自分を責めないで。この子の突拍子もない行動を止める事は誰にだって難しいと思うわ」

「いえ、予想はでき、止める事も可能でした」

よ、予想はできてたんだ……。シアさんホント凄いな……

「姫様にならこのままナナシさんの体を癒す事ができるのでは？

と一瞬躊躇してしまったのです。その一瞬の躊躇の結果が……」

私の気絶、か……

「今回は誰を責めればいいものか。姫様は勿論の事、ナナシさんにも非はありません、あそこで止める事ができた私の判断ミスでした。今回はお目覚めになられましたから良かったものを、もしあのまま……」

「もういいわ、そこまでにしなさい。シラユキ第一主義なのはいい事だけれど、過ぎた事をいつまでも悔やむものでもないのよ。シラユキはちゃんと目覚めて、今笑顔で私たちの前にいる、それでいいじゃない。それとも貴女はその大切なお姫様の笑顔を曇らせたいのかしら？」

「も、申し訳ありません！！　決してそのような事は……！！」

ここここ怖い！！　私今母様の膝の上にいるんだから、怒らせないでよ！！　怒った母様は怖過ぎる！！

「謝るのは私に？　違うでしょう？」

「はい……。姫様、本当に申し訳ありませんでした……」

「ううん。いいよ、シアさんが怒ってないならそれでいいよ」

母様が怒りを納めてくれればいいよ……

「母さんこえぇ……」

「お母様怖いわ……。シア、本気で気をつけてね」

「そうだよシア、生きた気がしないよ……」

「は、はい……」

「あはは。エネフェア様は怒ると怖いからね」

「もう、みんなして怖い怖いと……、怒るわよ？」

「ごめんなさい！！」

「何でシラユキが謝るの！？　みんなひどいわ！」

その後、精霊通信でギルドに聞いてみたところ、シアさんの言うとおり、ナナシさんに特に変わりは無かったみたいだ。

でも、全身の傷と、古い傷跡まで全部治ってしまったみたいで、お肌がツルツルになったと喜んでいた様だ。ミランさんが羨ましがっていたらしい。

次にギルドに行った時はミランさんにも……

「駄目よ？」

「はい！！！」

その１０１（後書き）

特に何事も無く話は続いていきます。
何か本当に皆さんの期待?を裏切ってばかりですみません。

その１０２

いつもより五割り増しくらいの過保護も今は鳴りを潜め、ん？　五割で済むのかあれは……？　まあいいや、とにかくまた、変わらない日常が戻ってきた。

あれからナナシさんについての連絡は特に何も来ていない、そろそろ一月も経とうというのだが……。やっぱり治らなかったのだろうか？　うーん、残念だね。

曖昧に全部治す、というイメージがいけなかったのかな？　でも体のどこが原因になってのことなのか全く分からない。多分あの方法しか無い筈だ。

むう……、魔力を使い切って、気を失って三日も寝込む程の魔法の効果が美肌効果とは、ちょっと納得いかないぞ……

いや、女性からして見るとそれほどの効果なのだけどね。だって美肌よ美肌。私はまだ子供肌だし、ツルツルすべすべ卵肌っていう感じなのでまだ気にはならないが……、うん？　もしかして私は一生肌荒れと縁の無い、一生美肌でいることのできる方法を手に入れてしまったのではないだろうか？　あれ？　凄くね？

ナナシさんの体の細かい生傷や、古い傷跡なんかも全部治ってしまったみたいだし、それはそれでよかったのかもしれないね。女性に傷跡なんてあって欲しくは無いからね。

そう考えると、損をした、納得いかない、という考えは捨てられそうだ。うんうん、純粋によかった、と思えるね。

おっと、考えを戻そうか。方法はあれしかないとなると、だ。

イメージはあのままでいいとして、問題は私の魔力量なのか？

そうなると現状どうしようもないんだけど……。いきなり手詰まりだよ。

魔力の総量は年齢を重ねる事でしか増えていかないんだよね確か。初期値や増えていく量の個人差はあると思うが、いきなり劇的に増やす、なんて事は無理に決まってる。私の能力を使ったところでもこればかりは何ともなりそうに無い。

ぐぬぬぬぬ……

「考えてもしょうがないか……、本の続きを読もっと」

ぐるぐる回る考えをやめ、『家庭の医学』、と、どこかで聞いたことのあるような本に目を戻す。

「何かお悩みですか？　姫様。お一人で考え込む様なことはなさらずに、遠慮なく私たちにお申し付けくださいね」

さすがにここまで長く考えるとシアさんでも読み切れないみたいだね。何か悩んでいるっていうのは簡単に分かってしまったみたいだけど。

「んー、今はいいや。ありがとねシアさん」

現状どうしようもない、という事で答えは出てしまった。いくらシアさんでも私の魔力を増やすなんて事はできる訳無いしね。できないよね……？

い、一応聞いてみるか？　だってこの人、シアさんだよ？　メイドさんだよ？

「そうですよね……、私なんて何の頼りにもなりませんよね……。しくしく……」

「しくしくはっきりと口に出して泣く人はいないよ！！　もう……、シアさんでも私の魔力の総量を増やす、なんて無理でしょ？」

「え、ええ……、申し訳ありません」

謝られちゃった！！

シアさんは私の力になれない事を本気で悪いと思っちゃうんだよね。

「謝らないでよ……。誰にだって無理だよそんな事」

「魔力の総量を増やす、というのは確かに無理な相談なのですが、魔法の使用回数を増やすことはできるのですよ。こちらではどうでしょうか？　根本的な解決策と呼べるものではありませんが……」

「へ？　どういう事？」

使用回数を増やす？　ああ、同じ様な効果を持つ、それよりも魔力消費の少ない魔法を考えるのか。

ナナシさんの体を治す場合は、体全体ではなく、原因となってる部分を治すイメージにするとか、かな？　やっぱり無理じゃん！！

「一言で説明すると、慣れですね」

「な、慣れ？　え？」

どうやら全然違う話みたいだね。

よし、今日の読書はここまで。詳しく聞かせてもらおうかな。

分厚い本を閉じて、横にずらし置き、シアさんと向かい合う形に座り直す。

メアさんとフランさんはつまらなそうにしてるけど、ごめんね。これは今必要な、本当に大切な事だと思うんだ。

「以前にも少しだけお話しましたよね、魔力運用の効率化についての事です。また少し簡単に説明しますと、何度も同じ魔法を使い、イメージをより強く固めることにより、それまで以上の効果と魔力消費の効率化が成されるんです。日常的に使う魔法の魔力消費量が少ない理由はこれですね」

「ん？　あ、えーと、慣れないうちは魔力の消費が多いっていう事？」

言いたい事は何となく分かる。でも、魔法ってそんなものなの？

「はい。分かりやすい例を挙げてみましょうか。キャロが持っていたあの鉄塊、魔法で動かしていると説明しましたよね。操作系の魔法は特に魔力の消費が激しい、それは姫様にも何度もお教えしたと思います」

「あ！　そうだよ！　キャロルさん、あ、ラルフさんもそうだった。ラルフさんは背負ってても違和感が少ないけど、キャロルさんは絶

対魔法がないと潰れちゃうよ！」

大剣に潰されてもがいているキャロルさんを想像してしまった…

…、可愛い。

「私がキャロに初めて出会ったのは、……あの子がまだ今の姫様くらいの子供の頃ですね。自分の何倍もある岩を投げて遊んでいたんですよ」

「なにそれこわい！！」

どんな遊び方よ！？　がんせきおとし？　どこのバトルマスターよ！？

「ふふふ、続けますね。あの子は特に、別段力が強い、という訳でも無いんですよ。どちらかというと弱い方でしょうね。それはあの見た目から分かると思います」

キャロルさん小さいもんね、小さくて可愛いもんね。手足も細かったし、力が強いとは誰がどう見ても思えないと思う。

「もうこれは才能としか言い様がありませんね。物体を動かすという魔法に関しては、恐らく大陸中探したところでキャロ以上の使い手は見つからないでしょう。ああ、流体に関してはコーラスさんにはるかに多く分があります、あの方もまさに天才としか表しようが無いですね。と、すみません、話が逸れましたね。あの子、キャロは子供の頃から日常的に操作魔法を使い、生活して来ているんですよ。その長所を伸ばすために手足に重りを付け生活させ、こほん」

やはり手足に重りを付ける修行方法は、こちらでも一般的なもの

なのかな。いや、どんな形状の重りかにもよるね……

一瞬手足に鎖で鉄球を繋げられたキャロルさんが頭に浮かぶ。……い、いやらしい……。しかし、シアさんのことだし、普通にありえてしまいそうなのが怖い。

「な、なるほど、半分くらいはシアさんのせいなんだね。コーラスさんも本当に凄いや……。でもさ、あの大きさの武器二つだよ？普段持ち歩いてるだけでもそれなりに消費してるんじゃないの？」

「姫様が使う明かりの魔法、魔力を消費した気はします？」

質問を質問で返されてしまった。

でも怒らないよ。爆弾魔やマフィアじゃあるまいしね。

「ううん、全然……、え？　さすがにそれは、嘘でしょ？」

「本当の事ですよ。あの巨大な質量の武器二つを振り回す事の魔力消費より、魔力の自然回復量の方がそれを上回っている、という事なのでしょう。恐らくキャロは自然回復量も多いのでは、と思いますが……、それは測りようがありませんね」

「う、嘘だー……。でも、そうでも言わないとあの大きさには納得できないよね……。キャロルさんって私が思ってるよりも、もっともっと凄い人だったりするのかな？」

私には、可愛くてすっごく強い人、としか……

「Aランク最上位の二つ名持ちの冒険者ですよ？　む、姫様には分かり難い表現でしたか……。姫様はまだ操作系の魔法は数える程しかお使いになられてないですよね。そうですね……、一度あの武器

のどちらかと同じくらいの重量の物体を魔法で動かしてみては如何です？　今の姫様では三秒持つかも怪しいところだと思いますよ」

「三秒どころか多分持ち上がらずに気絶しちゃうと思うよ……。またみんなに心配掛けるのは絶対嫌だし、それはやめておくね。ラルフさんも凄いんだなー……」

キャロルさんのと比べると何倍も軽い武器だとは思うんだけど、２ｍくらいある両手剣だしね。かなり重いんじゃないかなあれも。

「ラルフさんの場合は実際に手に取り、動き回る、振るう、という二点に関してのみ使われているようですね。さらにラルフさんは、両手剣以外を魔法で動かす事は苦手らしいですよ？」

「え？　なんで？　同じ操作系の魔法だよね」

「イメージのし易さの差でしょうか。ラルフさんは両手剣を動かす事に関してのみの才能の様ですね。人間種族ですから魔力の総量もそこまで多くは無いだろうと思いますし、やはりＣランク止まりなのではないかと」

なるほどなー。魔法の強さ、使いやすさは、その人、実際使う人の生活環境によって大きく変わってくるんだね。これは面白い事を教えてもらっちゃったな。

「うーん、シアさん凄い！　ありがとね！！」

「い、いえいえ、どういたしまして。あああ、なんて可愛らしい……。ちょっと失礼しますね」

シアさんに優しく撫でられる。ふふふ。
私は甘やかされてる日常だから、甘やかされる事に特化した魔法が……、無いよ！！！

「でもさ、姫が使いたいのって癒しの魔法だよね？　それを日常的に使うってのは無理なんじゃないかな」

「私の指先の包丁傷も態々魔法で治す程のものじゃないからねー、確かに無理そうだねそれは」

話が一段落したのを感じて、メアさんとフランさんも会話に加わってきた。

「母様も魔法頼りになっちゃうから簡単に治しちゃいけないって言ってたもんね。中々上手くはいかないものだねー」

本当に上手くいかないものだ。
私が珍しくやる気を出して練習しようと思う魔法ほど、その練習方法が無いというのは……

「簡単に練習できますよ？　例えば私がこのように」

左手にナイフを作り出し、右手の平へ近づけるシアさん。

！？

「駄目！！！　絶対に駄目！！！」

「ひ、姫様？」

ななな、何をしようとしてるのよこの人は！！！

「そんな事したら絶対に許さないからね！！」

「シア、さすがにそれは無いよ……」

「んー、今のは無いよね。エネフェア様には黙っておくから二度と考えないようにね。私らも怒るよ？」

メアさんフランさんも怒っている。怒るのも当たり前だよ。

「え？　あの……、申し訳ありませんでした……」

「つ、次にまたやろうとしたら、いくらシアさんでも絶対に許さないんだから……」

あ、涙が出てきちゃったよ。驚きすぎたかな……

「姫様！？　しません！　絶対に致しませんから！！　ああ……、本当に申し訳ありません……！」

慌てて私を抱き締めるシアさん。

私たちが怒った理由、分かっているのかな……？

「まあ、シアはさ、元冒険者だし、ちょっとした切り傷なんてどうって事ないんだと思うけどさ……。包丁傷と自分でナイフで付けた傷、しかも姫のために傷付けるなんて事は……、全然重さが違うよ」

「シラユキはその包丁傷でも心痛めちゃう子なんだよ？　それはアンタが一番よく分かってるんじゃないの？　……あ、ごめん、ちょっと興奮しちゃったわ」

「そう、ですね……。私の考え足らずでした、すみません……。フランが謝る事は何一つありませんよ」

シアさんが責められてる……。珍しい事だからもう少し見てみたいけど、そろそろ止めに入らないとね。

「いつも心配ばっかり掛けちゃってる私の言える事じゃないけど、シアさんも無理しないでね、ホントに」

「姫様がナナシさんに思わず能力を使ってしまったお気持ちが分かりました。自分にできてしまう事は了解を得ずともついやってしまうものですね……。姫様、愚かな私をどうか、お許しください……」

深々と頭を下げて謝るシアさん。

「わわわ、あんまり自分を責めないでね？　明らかに私の方がもっと色々やっちゃってると思うし……」

「ここで強く出れないのが姫のいい所だよね」

「悪い所じゃなくて？　んー、確かにいい所かな」

「姫様に悪い所などある訳が無いでしょう」

「あれ？　もう息ぴったり仲直り？　いいけどさ……」

この三人にはいつも笑顔でいてもらいたい。笑顔で私を甘やかして……、こほん。

その１０２（後書き）

感想欄で１００話おめでとうコメントを沢山頂いてしまいました。
本当に嬉しいです。ありがとうございます！！

その１０３

「んーと、ナナシさんは来ってるっかなー、っと、いたいた！」

「久しぶりにお友達に会えると心弾む姫様、大変可愛らしいです」

「シアさんうるさーい！　ふふふ」

「あー……、シラユキちゃん久しぶりー……、元気してた？　心配してたんだよー……」

「元気無い！？　ナナシさんの方がもっと心配だよ！！」

やっと……、ええと、実に約二ヶ月ぶりにナナシさんに会える事になった。

外出許可が中々出なかったり、ナナシさんたちと都合が合わなかったりと、やけに遠回りさせられた気がするよ。

今日はナナシさんだけがギルドでお留守番してると聞いて、急いで会いに来たのだ。

それはもういい、こうして会えたんだからね。問題は今、この状況は何？

ナナシさんはやけに体調悪そうに机に突っ伏している。

さっきの挨拶も顔だけ向けて、手をヒラヒラさせてくれてただけだし……。何があった！！

「ど、どうしたのナナシさん！　まさか私のせいで……？」

私の能力で作った癒しの魔法のせいか！？　うう……、そんな……

「あー、違う違う、生理痛。シラユキちゃん治してー……」

「なんだ生理痛ですか……、よかった。それは女の人なんですからしょうがないですよ。多分治せますけど、癒しの魔法を使う事は止められちゃってて……」

今日また使おうとしたのなら、シアさんに即座に強制送還させられる事になっている。

でも、優しいシアさんのことだから、軽く、少し使うくらいなら見逃してもらえそうだけどね。

「えー……。だるいよー、お腹痛いよー……。癒しの魔法とか軽く言っちゃう辺りが何と言うか、シラユキちゃんだねえ……」

どういう意味よ！

でも、よかった、ただの生理痛で。勘違いしちゃったじゃないまったくもう……

「痛み止めの魔法薬は使われないのですか？　この町の調薬ギルドで売っていると思いますが」

あ、そんなのあるんだね。魔法薬は全然知らないし、今度本でも読んでみようかな。癒しの魔法のイメージの底上げになるかもしれ

ない。

「んー、あれはそこまで安くないしね、高くも無いけどさ。どうせ毎月の事だから、慣れないとねー……。だるいよシラユキちゃーん」

「あはは。私はまだですから辛さは分かってあげられませんけど、辛そうですねー」

前世の知識として結構辛かったっていう記憶はあるね。私の場合はどうだっただろう……、お、思い出せない……

「治してもらっておいてなんだけどさ、これはつら……、あ！　ごめん！！」

「え？　え？　な、何がですか？」

急に元気になって謝られてしまった。一体何のこと？

「この痛みも本来は喜ぶべき事なんだよね。本当にありがとう、シラユキちゃん。あたし、子供作れるようになったみたいだよ。思いっきり気づいてなかったっしょ？」

「ああ、言ってしまいましたか。姫様がいつご自分で気づくのかと楽しみにしていたのですが……、今回は良しとしましょう。おめでとうございます、ナナシさん」

ん？　え？　子供作るとか恥ずかし……い？　あああ！！！

「治ったの！？　治ってたの！？　そうだよ！　生理痛で普通は気づくよ！！　シアさんも言ってよ！　あ、ナナシさんおめでとう！

！　よかった！　よかったー！！！」

ななななな治ってたー！！！

やった、やった！　駄目だ、嬉しすぎて他に言葉が出てこない。

とりあえず、バンザーイ！！！

「可愛すぎる……。メイドさん、抱き締めちゃ駄目？」

「死ぬ覚悟で、と言いたいところですが、姫様の許可を取ってからにしてくださいね」

シアさんも嬉しそうな笑顔だ！

ああ、テンションが下がらない！　抱き締める？　ＯＫＯＫ　むしろこっちから抱き付くよ！！

「ナナシさーん！！　よかったね！！　私も嬉しい！　すっごく嬉しいよ！！」

椅子に座ったままのナナシさんに飛びつく！　はしたないなんて言ってられない！！

「ひゃあ可愛い！！　いい匂い！　舐めたい！！　もう痛みもだるさも全部飛んだよ！　これこそ本当に癒しの魔法だね！！」

「舐められる！？　でも今日はそれくらい許せちゃいそう！！」

「姫様の笑顔はまさに万能薬と言ったところですか。ちょっと羨ましすぎるのでナイフを投げてもいいでしょうか？」

「メイドさん笑顔が怖い！！　もうちょっとだけー！」

さらに抱き締める力を強めるナナシさん。

「よかったー！　よかった、よかったよう……」

「あ、あれ？　ちょ、シラユキちゃん！？　め、メイドさんどうしよ。泣いちゃったんだけど……」

「暫くそのまま泣かせて差し上げてください。泣くほどの嬉しさ、安心感があったのですよ。まったく、ただの冒険者にそこまでのお心入れをなさるとは……。本当に姫様はお優しい方ですね」

よかった、本当に、本当によかったよ……

「ご、ごめんなさい泣いちゃって。恥ずかしい……」

暫くナナシさんに抱きついて泣き続け、ようやく涙も落ち着いた。私が泣いている間、困ったように頭を撫で続けてくれたのが嬉しかった。

くう、ナナシさんの前で大泣きしちゃったよ。他の冒険者の人にも見られちゃったし、恥ずかしすぎる……

「いいよいいよ、あたしも嬉しい。実際初めて生理来た時はあたしだって泣いたしね、ラルフもエディも自分の事みたいに喜んでくれてさ。そのせいかちょいと過保護になった気がするんだけどね。それはそれで嬉しいからいいんだけどさ。ふふふ」

あれから二ヶ月経ってるし、二回目かな？　ああ、生理痛のおかげで今日はお留守番だったのか。宿で休んでてもらえばいいのに……、ん？　ギルドはミランさんがいるから安心なのかな。

あ、そうだ、これは聞いておかなきゃ。

「体の方はどうですか？　他に、何か変わっちゃった所とかありますか？」

最大の悩みは消えたとしても、そのせいで他の所にに異常が出ていたらいけない。これはしっかりと確認を取っておかなければね。

「ん、悪くなったっていう所は無いよ、安心して。むしろいい事ずくめ。いやー、肌つるっつるよこれ！！　ミランさんに羨ましそうに触られまくったし、ラルフに抱かれてるときも、おっと……」

また何か危険な事言おうとしてたな……。まあ、そのー、ミランさんラルフさんにも大好評だったという事で……

「よ、よかったですね……。体の表面だけ癒せば美肌の魔法として使えるのかなこれ……。シアさん？」

「ええ、そうだと思いますよ。姫様らしく、とても優しい素晴らしい魔法ですね。ですが」

「うん、大丈夫、使わないよ」

怪我人が出ないと練習もできないしね。ん？　手荒れを治すくらいならいいんじゃないのか？　フランさんに今度こっそり使っちゃおう。

「私の前でお願いしますね！　まったく、姫様は懲りないんですから……」

「いきなりバレた！！」

さ、さすがシアさんだ。でも使っちゃ駄目って言わないところが優しいよね。

うーん、シアさん大好きだ！

「あはは。美肌の魔法かー。ミランさん喜ぶんじゃない？　さっきから聞き耳立ててるよあの人」

ナナシさんの言葉に指差す方へ顔を向けてみると。

興味津々という顔のミランさんと目が合ってしまった。

お互い気まずく、照れ笑いで軽く会釈をし合う。

「ミランさんも、こっち来る？」

「行きます行きます！！」

パタパタと嬉しそうにカウンターから出て来るミランさん。やっぱりミランさんは行動が可愛いな……

「早速お願いします！！」

「森に住む権利を得た早々に命を散らすおつもりですか？」

「ごめんなさい！！」

「あはは。ミランさんそんなに肌荒れてしてるの？　そうは見えないんだけどなー」

パッと見た感じ、んー、肌綺麗だよね？　表面には見えない所か？　うーん、謎だ……

「でもさ、ミランさんはお菓子の食べ過ぎなんだと思うよ？」

「えっ？　そ、そうなんですか？」

「うん。一日一回おやつの時間にならいいと思うけどね、ミランさんいっつもポリポリ何か食べてるし……。それに、太っちゃうよ？」

食生活の乱れはお肌の乱れと直結してるからね。それにお菓子は太りそうだ、女性は特に気をつけないといけないんじゃないかなー。

「私はあまり太らない体質らしいのでつい……。でも、もう癖の様なものになっちゃってますし……」

「姫様、ここはミランさんのためにも」

「うん、強く言ってあげるといいよ。食べても太らないとか許せないよ……」

ナナシさんは凄くスマートな体してるよね。日頃から気を使ってるのかな？　冒険者は体が資本なんだしね。

冒険者という事を抜きにしても、女性として太らない体質というのは羨ましく、そして許せないものなんだろうね。

私もそうだとは言わない方がよさそうだねこれは……

いけないいけない、また考え込んじゃってたよ。とりあえずミランさんへの判決を下さなければね。

「よし、ミランさんはしばらく間食禁止！！」

「そんな！　シラユキ様！！　どうかお許しを！！」

おやつ抜きはさすがに堪えるのか、必死に許しを請うミランさん。

「ほう……？　王族の、いえ、姫様のお言葉に従えないと？」

わざとらしくナイフをチラつかせるシアさん。

「わわわわ分かりました！！　ううう……、でも、美肌のためよ……！！」

「そうそうその意気だって。ミランさん今でも充分可愛いけど、もっと可愛くなればきっと恋人もできるってもんよ？」

ナナシさん上手い！！　ミランさんの目標に上手く繋げたね。

「が、が、頑張ります！！！」

「ふふふ、頑張ってねミランさん！」

やはりミランさんだった！　この人にはこれが一番効くわ……

「あ、忘れてた。悪かったというか、ビックリした事があったのよ。これはシラユキちゃんの魔法の効果で間違いないよ」

「ええ!?　ごめんなさい！　ど、どうしようシアさん……」

「落ち着いてください姫様。ナナシさんは驚いただけですよ?」

「うんうん。言い方が悪かったかな?　まあ、確かに痛かったんだけどね。考えようによってはいい事かもしれないし」

「痛かった?　体を癒す魔法の筈なのに?　ちょっとナナシさん、はっきり言いなさいよ。シラユキ様泣かせたら私も怒るよ?　刻まれたいの?」

「うぇ!?　怒らないでよミランさん。やっぱこの人可愛いけど怖いなあ……。事が事だけに、あ、場所が場所だけに、かな。シラユキちゃんに言っていいものかちょっと悩んでるんだけどね」

「ああ、なるほどなるほど。ふふふ、どうぞ、今日くらいはいいでしょう」

「むむむ、シアさんはもう分かっちゃったんだ?」

「あ!　あ、あー……。シラユキ様は聞かない方がいいのではないかなーと……」

「ミランさんも分かったの?　むう、教えてよナナシさん。調子悪

そうだったらまた治すから」

「ちょ！　また治すのは勘弁して！！　痛いのよあれ？　まあ、シラユキちゃんには、あ、ミランさんも分からないか」

「う、うん……。まあね、そうなんだけどね、いずれは経験するわよ！」

痛い？　経験？　場所が場所だけに？　私には、言っていいものか悩む？　……うわあ！！

「あれよ、シラユキちゃん。しょ」

「やめて！！！　なんかもう！　ごめんなさい！！！」

シアさんとナナシさんのタッグにからかわれまくってしまった。

いつもならナナシさんの言動を窘めるシアさんだが、今日ばかりはあまり怒るようなこともせず、むしろ結託して私を、さらにミランさんをからかいに来ていた。

やっぱりシアさんもナナシさんの体が治った事は嬉しいんだよね。ツンデレだよねこの人。

ナナシさんの膝の上に座らせてもらったり、デレ成分多目のシアさんを見ることもできた。

さっきのナナシさんの言葉じゃないけど本当に今日はいい事ずくめだ。からかわれるのも良しとしようじゃないか。

でもね？

「ナナシさんって……」

「いやー、やっぱ柔らかくていい匂いだねシラユキちゃんは。今なら舐めても怒られな、うん？　何？」

「ナナシさんってちょっと汗臭いですよね」

「うぇ！？　お姫様にそう言われるとさすがにショックなんだけど……」

「ふっ、ふふふ……。し、失礼」

「あははは。やり返されちゃったわね、ナナシさん」

ちょっとくらいやり返したっていい筈だよね。ふふふ。

その１０４

「ただいま母様ー！！　ナナシさん治ってたよ！！　やったよ！！！　……とうっ！」

執務室に駆け込み母様に報告。

嬉しさを留めておく事ができないので飛び付いてみた。

「きゃっ！　っとと……。こーら、シラユキ？　急に飛び付いて来るなんて危ないわよ？　私としては嬉しいのだけどね。ふふふ、可愛いわこの子……」

「えへへへ、母様大好きー……」

母様は私を叱りながらも優しく抱き留めて撫でてくれる。

ああ、幸せすぎる。

ナナシさんの体も治り、母様に抱きついて喜びを表現。

私の幸福度が有頂天になった。この喜びはしばらくおさまる事を知らない。

「よかったわねシラユキ、本当に。でもね、ノックも無しに部屋に駆け込んでくるのはいけないわ。飛び付いて来てくれるのも嬉しいけれど……、はしたないわよ？」

「あう……、母様ごめんなさい……」

テンションを上げすぎてしまって怒られてしまった。もっとお姫様らしくしないと駄目だね……

「でも可愛いから許しちゃうわ！　シラユキはまだ子供だし、話半分程度に聞いておけばいいわよ」

やはり母様だった！！

そうだよね、まだ子供だからいいよね！！

「うーん、可愛い……。ねえカイナ、もう今日はお休みにしちゃいましょう？」

母様は、自分の膝の上で全力で甘える私を見てお仕事のやる気が無くなってしまった様だ。

「そういう訳には……、明日の仕事が増えるだけですよ？　はあ……」

カイナさんが、またか……、と言いたそうに溜息をつく。よくある事なんだろうか？

確かに母様ってちょくちょく私の顔を見に、と言うか、私を可愛がりに来てくれるよね。

まさか……、それってお仕事が終わったんじゃなくて、私を可愛がりたいから途中で逃げ出して来ているのだろうか？

母様に甘やかされるのは嬉しいけど、カイナさんたちに迷惑を掛けているとなると……、複雑だ。

「カイナが女王にならない？　私はこの子を可愛がるお仕事に就きたいわ……。私、貴女なら問題ないと思うの、どうかしら？」

「むむむ無理ですよ！　大問題ですよ！！　いきなり何を言うんですか！！　姫様からもお願いします……」

母様のいきなり過ぎる発言にカイナさんもビックリだ。私に助けを求めてきた。

「私から？　いいよ？　カイナさん女王様のお仕事頑張ってねー！」

「はい！　頑張ります！！　……あれえ！？　姫様ぁ……」

「この子ったら……、可愛すぎるわ」

「あはは！　冗談だよカイナさん。ごめんね？　もうちょっとだけー……」

ここしばらく母様と姉様にいつも以上に甘やかされてたからね、ちょっと離れると寂しく感じてしまうようになってしまった。

またすぐに慣れるとは思うけど、甘えられる時は全力で甘えにいくのだ。

「凄い笑顔だぞ、バレンシア。珍しく油断し切っているな」

ん？　今の声はクレアさん？

わ、ホントだ、シアさん満面の笑顔だ……。でも、そう言うクレアさんこそ、珍しく分かりやすい笑顔だ。

「貴女の方こそ鏡をご覧なさい。まったく、姫様にからかわれるカイナを羨ましく思ってしまいますね……」

「まったくだ……。また抜け駆けを……！！」

「私は悪くないと思います！！」

何か今日のカイナさんいつもより可愛いな、落ち着いてるし。母様の前だから？

「姫様が悪いとでも言うのですか？」

「え？　私？」

「それとも、エネフェア様が悪いと言いたいのか？」

「あら？　私？」

「すすすみませんでした！！！」

ああ、どうしよう、面白楽しすぎる！　でも、あんまりカイナさんだけ苛め過ぎるのも駄目だね。

母様の膝の上も充分に堪能したし、そろそろ談話室に戻ろうかな。本音を言えばまだまだ甘えたいんだけどね。

名残惜しいが、母様の膝の上から降りる。

「もういいの？　もっと座っててもいいのよ？　と言うよりもっと甘えて欲しいのだけれど……」

名残惜しいのは母様も同じの様だ。

「ううん。これ以上はお仕事の邪魔になっちゃいそうだし、そろそろ戻るね」

「シラユキを可愛がった後のお仕事は辛いわ……。ねえシラユキ、今日は一緒にお風呂入りましょうね？」

「うん！　ふふふふ」

やった！　今日は母様とお風呂だ！！

母様と一緒って言っても二人だけで入るわけじゃないんだけどね。母様も私も、さらには姉様も一人で髪を洗えないし、メイドさんズの誰かが一緒に入る事になるのだ。大体はシアさんだね。

父様と兄様は、それぞれ母様と姉様をお風呂に入れてたみたいだからそういった事も慣れているみたい。凄いね二人とも……

「エネフェア様羨ましいぃ……」

「カイナも一緒に入ればいいじゃない。ね、シラユキ？」

そうだ、今日はカイナさんにお手伝いをお願いしちゃえばいいね。

「うん。今日はカイナさんも一緒に入ろう？」

「え……？　ええ！？　いいのですか！？　ありがとうございます

！！」

何でお礼！？　そんなに私の裸が見たいのか！！　無いわー……

カイナさんは私を可愛がりたくても怖くてできないって、クレアさんもシアさんも言ってたもんね。たまにはいいよねー。

「くっ！　カイナぁ……！！」

「殺気飛ばさないでよクレア！！　あなたも一緒にお願いしたら？」

「何？　いや、それは、その……」

「クレアさんも一緒に入る？」

家のお風呂なら十人くらい余裕で入れるよ。

「よ、宜しいのですか？　ぜ、是非お願いします！！」

「いつもの馬鹿力で姫様の柔肌に傷でも付けようものなら……、楽に死ねるとは思わないように」

「う……、やめておくか……」

シアさんのちょっと怖い脅しに、手加減する自信が無いのかあっさり引いてしまうクレアさん。

「シアさん怖いよ！！　大丈夫だからね二人とも！」

「姫様お優しい……」

「うん、本当にお優しい、素晴らしいお方だ……」

「何を当たり前な……」

「ふふふ。この子は優しくて良い子に決まってるじゃない」

絶賛された！　恥ずかしい！！

何かこの二人って凄く仲良いね？　喧嘩友達と言うか、親友と言うか……。いいな、こういう関係。

確か二人とも三百歳くらいだっけ？　年も近いのかな。私って同年代のお友達は全然いないからね。一番近い年だとエディさんかな？　でも種族が違うし実年齢は当てにならないね。

エルフで一番年が近い人はえーと……。成人はして無いけど見た目はもう完全に大人っていう人しかいないね……

「クレアさんとカイナさんはお友達なの？」

おっと、馬鹿な事を聞いちゃったかな。友達以前にみんな家族なんだから、仲が良いのも当たり前だよ。

「え？　ええ、同い年ですしね。エネフェア様にお仕えするよう子供の頃から一緒に育てられて来たんですよ」

「私は主に護衛として、カイナは内政の補佐としてです。私は戦う事のみなのでお恥ずかしいのですが」

同い年？　め、珍しい……

エルフで同い年の人なんていないと思ってたよ。まあ、そういう

珍しい事も実際あるんだね。

「クレアは料理が得意じゃない。私は何でも普通にこなせるってだけで、これが得意っていうのは一つも無いし」

「何でも普通にこなせるのが羨ましいんじゃないか。私は料理と剣だけだ」

「その容姿で料理ができれば充分よ。自分がおかしいくらいの美人だって自覚あるの？　嫌味に聞こえるわよ、もう！」

「なっ！？　カイナの言えた事か？　何でも出来るなどと嫌味にしか聞こえないぞ！」

あれ？　何か険悪な空気に……？

あ、何か違和感を感じると思ったらカイナさん敬語じゃないね。

いいなー、本当にお友達との会話っていう感じがして羨ましいな。

「その喋り方だって直そうと思えば直せるくせに！　ああ、直ったら求婚の嵐ね、羨ましいわ」

「求婚！？　わ、私は一生をエネフェア様に捧げると決めているんだ、この喋りは男避けにもいいだろう？　そう言うカイナは何度も求婚されてるじゃないか、余裕の現れか？　ああ、男とまともに話せないんだったな、悪かった」

「くううう！　痛い所を……。さ、さすが恋人がいる方は違いますね！！　その辺りご教授願いたいものですわ！！」

「表に出ろカイナ！！！」

「望むところよクレア！！！」

二人とも勢いよくドアを開き、外へ出て行ってしまった。

どういうことなの……

「ふふふ。相変わらず仲が良いわねあの二人は」

「ええ、まさに親友と言った感じですね。丁度よく休憩の時間ができましたね、すぐにご用意致します」

二人とも今のを見てそんな感想なの？　け、喧嘩だよ喧嘩。

「いいの母様？　クレアさん凄く強いんだよね？」

クレアさんは冒険者で言うとＡランクの上位並、カイナさんは父様が言うにはＢランクくらいの強さのはずだ。

あれ？　そんな二人が本気で喧嘩したら……？　森が荒地に！？

「ああ、違うのよシラユキ。あの二人はこれ以上ここで口喧嘩する訳にもいかないから場所を変えただけよ。ホントに仲が良い二人だから安心していいのよ？　最初は私も驚いて注意してたんだけどね……、もう慣れちゃったわ」

そう言いながら、また私を膝の上に乗せる母様。

「よくある事なんだ……。喧嘩するほど仲が良いっていうやつなの

かな？」

「ふふふ、まさにそうね、あの二人にピッタリ。あ、見に行く？面白いわよー、あれは。最後の方になるとお互いをどんどん褒めだしてね、二人同時に謝って仲直りするの。もう結婚しちゃえばいいのにっていうくらい仲良いのよ？」

あー、何となく想像できちゃうわ……

「クレアさんは恋人いるんだよね？　さっき、その、母様に一生を、とか言ってたんだけど……」

これは聞いちゃいけない事かもしれない。でも、クレアさんが恋人をいることを隠している、いや、バレバレなんだけど、隠したいっていう理由は何なんだろう？

「その事なんだけどね、私も悩んでるのよ。いくら進めても絶対に結婚しようとしてくれないし……。もう命令しちゃおうかしら」

「め、命令しちゃ駄目だよ……。何か理由でもあるの？　結婚できない理由……、あ……、ごめんなさい」

またズカズカと人の心に土足で踏み入るような事をしてしまった……。ナナシさんと同じ様な理由があったらどうするんだ私は！！

「ホントに優しい子ねあなたは。そこまで重い理由じゃないから大丈夫よ。ただね、子供の頃から私を守る、その為だけに育てられて来たのよクレアは。恋人って言うのも本人は男避けの偽の恋人だって言ってたんだけどね。まあ、実際最初はそうだったのよ。でもね、本当に好きになっちゃったみたいで、ん？　それも違うわね、多分

初めから好きだった筈よね。私には分かるわ」

「け、結構重い理由だよ……。でも、カイナさんも同じ様に育てられたんでしょ？　なんでクレアさんだけ……」

カイナさんは男の人が怖いだけで、恋人を作らないとかそういうのじゃなかったよね。直そうとはしてたみたいだったし。

「カイナはカイナで悩みものなのよね……。あの子、もう結婚以前に男の人と話す事も諦めちゃってるし、困ったものだわ……」

「ええ！？　カイナさん美人なのにもったいない！！」

美人と言うか可愛らしい人か。それでいて頭が良くて、何でもできて、胸も大きい……、あれ？　パーフェクトメイドさんじゃない？　シアさんくらい凄いよ！！

「まあ、そんな事はどうでもいい事ではないでしょうか。さ、お二人とも、お待たせしてしまって申し訳ありません。紅茶です、どうぞ」

「シアさんはもっと私以外に興味を持とうよ……」

「バレンシアもあの二人とは違った意味で困った子よねえ……」

「多分メイドさんの中で一番困る人だよね」

「う……、申し訳ありません。ですが私は姫様第一、それはこれか

らも決して変わる事はありません！　ありませんとも！！」

「困りすぎて逆に安心しちゃうよ……」

「ありがとうございます」

「褒めてないからね！？」

でも、安心だね。

その105

「あー、あの二人なら何だ、何がいいんだ……、武器か？　食いモンか？　いや、食べ物は無いか……」

珍しく、本当に珍しく兄様が悩んでいる。

「でも、あの二人の武器はお兄様の贈り物でしょう？　あれ以上の物って早々無いと思うんだけど」

武器を贈った？　何か物騒なお話だね……

「悩むよな、こういうのってさ。シラユキは何がいいと思う？　お前が選んだ物なら誰だって喜んでくれる筈だしな」

自分で考える事をあっさりと放棄し、私の意見を参考にしようとするズルい兄様。

「話からすると、ラルフさんとナナシさんの結婚のお祝い？　主語を抜かれても分かんないよ」

「分かってるじゃねえか」

「分かってるじゃない」

「分かってるけどさ、そういう意味じゃないよ！」

まあ、いいけどね、兄妹で通じ合ってる感じがしていいだろう。

おやつの時間に兄様と姉様が乱入して来て悩み始めたと思ったら……、確かに結婚のお祝いに何か贈るのもいいね。

ふむ、あの二人のさらに喜ぶ顔が見れるわけか。ふむふむ？　なにそれ素晴らしい……

リミットは次の秋祭り。まだ春前だし、考える時間は多くはあるが、考えた後実際にその贈り物を用意する時間も必要だ。

前世はインターネットで注文して、その翌日には商品が家に届く事が当たり前の時代だったのだが、こちらではそう簡単にはいかない。

王族からの注文という事で必死になるとは思うが、そこはやっぱり人の力、遠い町からの取り寄せなどは月単位で掛かるかもしれない。

そうなると、早ければ早い方がいいね。

その前に何を送るかをまず決めなければいけないのだけれども……冒険者は何かと物入り。お金はまるで羽が生えているかの様に飛んでいってしまう筈だ。ここは普段我慢して買えないような物でも贈るのがいいかな？

「プレゼントっていうのは相手の立場になって考えてみるといいと思うよ。シアさんの欲しい物がさっぱり分からなかった私じゃ、ラルフさんたちの欲しい物なんて考え付かないと思うけどね」

そういえば結局お礼は頬にキスしただけだったね。それもメイドさんズ三人と、さらに家族全員に……。うん、思い出さないように

しよう。
毎日一緒に生活しているシアさんの欲しそうな物が殆ど思いつかなかった私には、ちょっと難しい相談かもしれないね。

「私は姫様が欲しいです」

「私！？」

「はいはいシア、話の邪魔しないの」

「失礼しました。どうぞご相談をお続けください」

いつものようにメアさんに注意されて下がっていくシアさん。

え？　何？　私自身が欲しい！？　何それ怖いんですけど！！

「あの二人の欲しい物、か……。何だ？　ユーネ、何か思いつく事無いか？」

またあっさりと考えを放棄する兄様。
親友の欲しい物くらい簡単に思いついてよ、もう！

「二人一緒じゃなくて、別々に二つの物でもいいんじゃない？　お兄様はラルフのを、私がナナシのを考えるのはどうかしら？」

さすが姉様いい提案だね。でもね？

「できたらさ、私たちみんなで何か大きな物にしない？　みんなで考えようよ。私だって二人のこと大切なお友達だと思ってるんだよ？　結婚なんて凄く大切なイベントだし、何か凄い物贈ろうよ！」

二人には幸せになってもらいたい。別れる可能性もゼロでは無いが、今そんな事を考えてもしょうがない。

お祝いだ。盛大にお祝いするんだ！！

「そうだな……、ついいつもと同じ様に考えるところだった。結婚、結婚したんだよなあいつら……」

「ええ……。本当に人間の時の流れって早いわよね。まだ出合ってたった五、六年程度よ？　それからまたほんの数年で、今度は子供が出来ちゃったりするのかしら……」

あ、あれ？

私の思ってたのとは全然違う反応が返ってきてしまった。なんでそこでしんみりしちゃうのよ？

「る、ルー兄様、ユー姉様？　どうしちゃったの？　私また何か変な事言っちゃった？」

「あはは、違うの違うの。ちょっと感慨深いと言うか、ふふふ」

「人間も猫族の獣人も寿命は八十年くらいなんだよな。俺たちからは想像もつかないが、うーん、何て言ったらいいか……」

「それは向こうから見たらこっちもそう見えると思うよ？　何百年何千年も生きるなんてきっと想像もできないと思う。私も初めはそうだったもん」

初めは、ね。今はもうエルフとしての考えが当たり前になって来てるんだけど。

「自分たちでは当たり前の事だからね。私みたいなのならともかく、みんなには分かり様が無いと思うな」

「お話に口を挟む事をお許しください。ラルフさん夫妻への贈り物の相談だったのでは？」

「ん、ありがとな、バレンシア」

おっとと、話が変方向へ流れて行っちゃうところだったよ。

今のはシアさんにしては強引な話の戻し方だったね。兄様もお礼を言ってたし、もしかして私には聞かせちゃいけない話になりそうだった？　あ、危ないなあ……

「あー、話を戻すぞ。とりあえずはシラユキの案を取り入れよう。問題は次だ、結局何を贈ればいいと思う？」

うん、結局何も話は進んでないね。

しかし兄様はもっと自分でも考えようよ、考えてよ……

「漠然と凄い物って言ってもね……。うーん……、難しいわねえ……」

結婚のお祝いって何があっただろう？　うん？　何が、あった？

……そうだ！！

前世の記憶を呼び起こせー！　思い出すんだ私！！　ん？　結婚とか全く関係の無い生活だったねそういえば……
だ、駄目だ！　前世の記憶が引き出せたとしても多分当てにはならない！

「い、色々言っていくよ！　何かあるよきっと！」

「あら？　シラユキがやる気だしてるわ。面白そうね、聞かせて？」

「とりあえず結婚は抜きにしてお祝いの品だね。簡単なところだと花束とか」

「花は枯れたら終わりだからなあ……」

「家具とか、食器のセットは？」

「宿にそんなの置けないわよ……。でも、ただの結婚祝いとしてはいいかもね」

「服！」

「冒険者の服なんて使い捨てよ？　あまりいい服を贈っても着る機会が無いと思うし……」

「食べ物はー」

「それも食べたら終わりだな。できたら形に残る物がいいよな」

「くっ！　冒険者なら武器と防具は？」

「二人の武器はもう俺がいいのやっちまったからな……。防具もお前がランクアップ祝いにミスリルの贈ったろ。ああ、あれってすげえ高かったんだよな」

「値段は怖いから聞かない！！　もうどうせなら家でも買ってあげちゃう？　結婚と言えば新生活、新居だよ！　……多分」

「家！？　た、確かにそれもありと言えばあり？」

「ねえよ……。町に家を勝手に建てる訳にはなあ……、出来んことは無いが……。そもそもあいつらどうせ他の町に、しまった……」

兄様は、つい言ってしまった、という感じで自分の口に手を当てる。

「ルー兄様、今の、どういう意味？」

どうせ他の町に？　……リーフサイドから出て他の町に行くっていう事！？

「まあ、うん、言葉通りの意味だな。シラユキに話すつもりはまだ無かったんだが、油断したな……」

「もしかして、ラルフの生家へ？　へー、帰る気になったんだ。やっぱり大事な人が出来ると人って変われるものなのね」

うん？　姉様も知らなかったのか。今の口ぶりからすると、悪い

話じゃないみたいだね。
でも、私に話すつもりはまだ無かったっていうのが気になる所ではある。あ、まだ、ならそのうち話してもらえたのか？

「詳しく聞いちゃ駄目かな？」

「さすがにこれは本人に聞いてくれな。俺たちが言えるのは、ラルフの奴はちょっと訳ありで家出して来てる感じだったんだよ。ナナシとの結婚を機に帰るか、って話になってな」

私の頭をポンポンと優しく叩きながら話してくれる兄様。

ら、ラルフさんは家出少年だったのか……。少年？　昔は家出少年か？　十五歳で冒険者になったんだったよね確か。
何となく分からない事も無いね、冒険者になる事を家族に反対されてたんじゃないかな。

「おめでたい事なのかな？　二度と会えないって訳じゃないんだよね、よかった……」

「シラユキ……」

私の言葉に手を止め、表情を曇らせる兄様。
何、その表情……？

ねえ、そうだって言ってよ。いつでも会いに行けるんだぞって、そう言ってよ……
今までみたいに、とはいかないかもしれないけど、半年に一回、せめて年に一回くらいは会えるんだよね……？

「あ、あのな、シラユキ……」

「そ、そうだ！　お祝い何にする？　それを考え、なきゃ……」

嘘……、だよね……？

「聞きたくない……」

「ううう、どうしようお兄様……」

「あー、シラユキ、黙ってたのは悪かったがな、その……」

分かってるよ……。私にこんな話、簡単にはできないよね。兄様も悩んだんだろう、きっと。

「会えるの？　それとも、もう会えなくなっちゃうの？」

「今までみたいに簡単には会えなくなるのは確かだな。でも、二度と会えないって訳じゃないさ」

「そうよ。お互いが会おうと思えば……」

「月に一回？　それとも年に一回？　そうだ、どこの町なの？」

他の町、隣町のカルルエラに行くだけでも何日も掛かるのに、一体どこの町へ行ってしまうの？

「聞いてよシラユキ……。ミラよ、カルルミラ。一応国内だから大丈」

「カルルミラ!?　遠いよ!　遠過ぎるよ!!」

「し、シラユキ、落ち着いて……」

「会えないよ!!　会いに行けないよ!!!　どうしっ、!?　ごめんなさい!!」

「ええ!?　ちょ、シラユキ?」

「どうしたんだよシラユキ、何でお前が謝るんだよ……」

私、また自分の事しか考えてなかった……

兄様だって、姉様だって……、悲しいに決まってるじゃない!!!

「ごめんなさい!　我侭言ってごめんなさい!!　私だけが寂しい訳じゃないのに……、私だけが、会えなくなる事が悲しい訳じゃないのに!」

「わ!　ちょ、ちょっと予想外すぎるわこれは……」

「ここで俺たちに気を使うかコイツは……。もっと我侭言ってくれりゃいいんだけどなあ……」

言えないよ……、今回ばかりは絶対に言えないよ……!

「俺たちも悲しくないって言えば嘘になるが、シラユキ程じゃないからな。会おうと思えば会いに行けるんだ」

「でも、シラユキは無理よ。ごめんね？　ホントにごめんね……」

「私は付いて行っちゃ駄目なんだよね……。ルー兄様が会いに行けるなら、いいかな、うん……」

「泣きながら言っても説得力無いぞ……。でもこれは泣くな、なんて言えないよなあ」

ううう、これでも泣くの我慢してるんだよ！！
さっきから零れてくる涙を袖で拭っている。拭ったところで止まる訳でもないんだけど……

「どうする？　まずは泣いちゃう？　無理しないでシラユキ……」

姉様が私を優しく抱き締めて撫でてくれる。

うん、泣いちゃうか……！！

「うあああ……、やだよ、寂しいよ……。行っちゃやだよう……、ううう……」

二人にこんな事を言ってもどうにもならないのは分かってる。でもね、結婚して、子供が出来て、幸せになる二人を見たかったよ……

「お兄様」

「駄目だぞユーネ。俺も考えたが、それは駄目だ」

「ふえ……？　あにを？　っすん」

「ちょっと落ち着いたかな？　ううん、気にしないでいいのよ」

「では私が……」

「まったく、バレンシアも何を言って……、おい目が本気だぞ！？」

「ちょっとシア！　駄目よ！！　ああ、でもやっちゃってもいいかな！　行きなさい！！」

「オイやめろ馬鹿！　誰か父さん呼んで来い！　俺じゃ本気のバレンシアは止めれん！」

「ああ、冗談ですよ……、ご安心ください……」

何？　何がなんなの！？　涙が引っ込んじゃったよ！！
え？　あ！　まさかシアさんこれが狙い？　話の意味は分からなかったけどさ……

でも、なんか、顔が笑ってないんだよね……

その１０５（後書き）

十二歳以上編最後のお話に入ります。

その106

「ラルフさんナナシさんこんにちわー……。うう……」

「会っていきなり涙目に!?　どうしたシラユキちゃん?」

「ちょっ、ラルフがなんかしたの!?　新婚だし見逃してメイドさん!!」

うん、いつもの二人だね。私もちゃんとしなきゃ……

二人の顔を見たら涙が出て来てしまった。自分でもそうなるだろうなとは思っていたのだが……

「ええと、まずは何から聞けばいいかな……」

「ああ、ルードから聞いたのか。最後まで黙ってりゃよかったのに」

む、やっぱり私には何も言わずに行っちゃうつもりだったのか。

「カルルミラに行っちゃうっていうのは聞きました。その……、いつ、なんですか?」

兄様はあれ以上何も教えてはくれなかった、知りたいなら自分で直接聞きに行けと。口止めされてたのかもしれないね。

「いつって言うのは決まってないよ。でも、そう遠くもないかな、エディがEランクに上がったら、と思ってる」

エディさんがEランクになったら？

そういえば今日はエディさんが見当たらない。わ、忘れてた訳じゃないのよ？　ラルフさんとナナシさんのこと以外考える余裕が無かっただけで……。ごめんなさいエディさん。

「多分年内には、かな。ごめんねシラユキちゃん、あたしら薄情だよね……」

年内……？　早い、早過ぎるよ……

二人の口から直接聞かされたことで、一気に別れの現実感が増してしまった。ボロボロと涙が零れ落ちる。

「う……、泣かないでくれよ。俺たちだってつら、あー、スマン……」

「うん、それは勝手に行く側が言っていい言葉じゃないね。何て言ったらいいんだろ……」

「何も仰らなくても結構ですよ、姫様もちゃんと理解していらっしゃいます。ただ、まだ気持ちの整理がつかないのでしょう」

うん、ラルフさんたちは幸せなんだ。

私たちという友達と離れる事にはなるが、自分の生まれ育った町で可愛らしい奥さんと生きていけるんだからね。本当は笑っておめでとうって言わないといけないのに……

「お願いします。別れのその日まで、何も変わらずそのままの態度で接して差し上げてください。冒険者に別れは付き物、笑って別れ、当てもない再会を誓うものでしょう？」

「当てもないって……。まあ、いいか」

「メイドさ、バレンシアさんも元冒険者だっけ。でもさ、シラユキちゃんには辛いと思うよこれは……」

「姫様には変に気を使われる事の方がよほど辛いですよ。お二人はもう行くと決めたのでしょう？　それとも取り止めてこの町で暮らしていきますか？」

私が泣いちゃってるせいか、シアさんの言葉が少し冷たい。二人を責めている様にも聞こえてしまう。

「いや、それは……」

「シアさん、もういいよ。大丈夫、今は悲しいけど、笑って見送れる様になれるよ、きっと」

無理だと思うけど。

「申し訳ありません。さ、湿った話はここまでにしてしまいましょうか。まあ、続く話も全く関係が無いという訳ではありませんが」

うーん、駄目だ。心の整理なんて簡単にできないよ……

ここはシアさんの言うとおり別の話をしよう。全く関係の無い話ではないみたいだけど。

「ラルフさんは実家を飛び出して冒険者になったのですよね？　宿を継げと言う両親の反対から逃げてこの町へやって来たのでしたね」

え？　ラルフさんの実家は宿屋！？　宿屋ってこの世界じゃ一番のって言ってもいい程重要な施設だよ。

ちゃんとした家柄と言うか、町や国からの許可がそう簡単には降りず、それなり以上の信頼を得ないと開業することはできない。町の看板とも言える施設だ。

一般のお客というものは少ない、主なお客は冒険者。冒険者は家を持つことがまず無いからね、宿の確保は最重要の問題だろう。

各ギルドにも専用の部屋が用意されているが、大抵は一部屋に十人くらい押し込まれる事になる。駆け出しや金欠の冒険者はたまに利用しているらしいけど、それらしい人は全く見たことは無いね。

プライバシーも何もあった物ではないし、やっぱり夜は安心してベッドで眠りたいのは誰だって同じ事だろうと思う。

「よく調べてあるなあ……。ナナシの体の事も知ってたんだろ？　どこ情報だよそれ」

「メイド情報です」

「なるほど」

ラルフさんも慣れたね……

涙も大分落ち着いた。ラルフさんの実家への興味が強くなってきたからだろうか？

シアさんは全然興味無さげだし、私を泣き止ませるために聞いてくれたのかもしれない。

「宿屋を継ぐんですか？　ラルフさんの家族、両親も怒ってるんじゃないんですか？」

家族の反対を押し切って、家出をしてまで冒険者になったのに、いきなり帰って来て、おかえりって迎えられるものなのかな？　しかもお嫁さんまでいるし。いや、お嫁さんがいることによって怒りが軽減されるのかもしれない。

「家を飛び出したって言っても手紙のやり取りはしてたからな、早く帰って来いって内容ばっかだったが。結婚したぞって手紙送ったら連れて来いって返事が来てさ、一緒に宿をやればいいだろう？　ってさ。そんで、継ぐ継がないは抜きにしても一度顔を出しに行こうって事になったんだよ。ま、継ぐ事になるだろうと思うけどな」

うん。大事な、大切な人が出来ちゃうと人は変われるもの。姉様も言っていたね。

冒険者なんて、言い方は悪いけど、いつ死んでもおかしく無い職業なんてやめて、お嫁さんと宿を継いだ方がいいに決まってる。

前にミランさんとお話した、冒険者の引退理由。結婚と就職かな？　丁度どちらも当てはまる感じだね。

「あたし、家族なんて呼べるのは師匠だけだったし、その師匠ももう死んじゃってるからね。やっぱ家族は大切にしなきゃ。ごめんね

シラユキちゃん、あたしの我侭なんだ、これは」

我侭？　どこが？

「ううん、全然我侭なんかじゃないですよ。本当に、大切な事だと思いますから」

ナナシさんは十五歳の時にその親代わりの冒険者の人に引き取られたんだっけ。その人はもう死んじゃってるんだね……

うん？　そうなると……

「ナナシさんナナシさん、ラルフさんと、さらにその両親兄弟まで新しい家族に？　わ、わわわ！　おめでとう！！」

「あ、あれ？　意外なところで笑顔が戻ったよ？　ま、いいか。ありがとねシラユキちゃん」

これは止めれないよ！　ホントはちょっと止めちゃおうかな、なんて思ってたんだけど……。ナナシさんに新しい家族ができるんだ！！　うわあ、自分の事じゃないのに嬉しいよ！！！

「新しい家族と言えば、子供はすぐに作られるのですか？」

「何て事聞くの！？」

「はは、調子が戻ったみたいだな。ま、向こうに着いてからだな、考えると燃えるな……」

「うんうん。燃えるわ……」

「やめて！！！」

くう……！！　私の調子が戻った途端にこれだよ！！　シアさんは本当はこれを聞きたかったんじゃないのか！？

「今でも毎日毎晩燃え上がってるんだけどね？　それとは別だよね。子作りって考えると……、あ、やばい、興奮してきた……。ねえ、宿に帰っていい？」

こここここ子作り！！！　毎日毎晩！？

え？　宿に戻って？　え？　こ、こんな明るい内から何する気！？　な、何ってそれは、はううううう……

「おいおい……、さすがに言い過ぎだぞナナシ。シラユキちゃん真っ赤になっちまったじゃねえか」

「あははは、ごめんごめん。ふふふふ、子供の名前考えて貰っちゃおうか、ラルフ」

名前？　ああ、二人の子供の……

「お？　いいなそれ。なあ、シラユキちゃ」

「それだ！！！　シアさんそれだよ！！」

名前！　名前だ！！

「さすがは姫様、あ、いえ、ナナシさんのお考えでしたね。私も素敵な事だと思いますよ」

シアさんもいい笑顔で賛同してくれる。
これだ、これだよ。この手があったよ!!

「な、何だ？　何の話だ？」

「え？　あたし？　なんか変なこと言った？」

二人とも不思議そうな顔だ。ふふふ、分かんないよねー。

ナナシさんは変な事毎回言ってるよ!!　でも今日はそうじゃなくてね？

「ふふふふふ、ありがとうナナシさん！　大好き!!」

「告白された!?　今のは胸にズドンと来たわ……。ラルフ、残念だけど別れようか！　あはは」

「ぅおおい!!　いきなり新婚の嫁さん取らないでくれよ!!　はっ、あはははは!」

あはは、それでもいいかもね!!

決まったよ、結婚のお祝いはこれだ。二人の子供の名前を私たちから贈ろう!!

ふふふ、最高のプレゼントになると思わない？

その107

「まったく……、泣いて帰って来るかと思ったら大変な事引き受けて帰って来やがってコイツは……」

「え？　だ、駄目だったかな……」

「ううん、シラユキが泣いてないならそれでいいわ。でも、名前って大切なものよ？」

家に帰ってきたら即兄様と姉様に捕まってしまった。二人はまた随分と心配してたみたいだ。私の顔を見るなり安堵のため息を大きくつかれてしまった。

まったく、優しい家族だね、嬉しい。しかし、贈り物を決めちゃって来たのはまずかったかな？

全く決まる気配も無かったからよかったと思うんだけど……。ああ、私が一人で勝手に決めちゃったんだったね。私が三人で考えようって提案したんだったよ……

「ご、ごめんなさい姉様、勝手に決めちゃって……」

「姫様は他の事を考えて悲しさを紛らわせてしまおうとお考えなのです。どうかお許しを」

シアさんが心を読んだように私の心情を話してしまう。

「それは分かってる」

「私も分かってるわよ」

あれ？　バレバレでしたか……
うーん、さすが私の家族、よく分かってるね。

うん、他ごとを考えてる間は寂しさも忘れる、とまでは行かないとしても、多少は薄れる。今はできるだけ来るべき別れを忘れていたい。
こうでもしないと毎日ずっと泣き続けてしまう気がするからね。情けない話だよホントに……

「まあ、いいか。受けちまった物は今さら何を言ってもしょうがないからな。どうせなら飛び切りの名前考えようぜ。それになシラユキ、三人で考えればいいんだよ。それでお前の言ってた通りの三人からの贈り物になるだろ？」

「ええ、そうね。どうせやるなら徹底的に、よ。ええと、男の子と女の子二人分考えればいいのよね？　ふふ、どんな名前がいいかしら……」

おお、確かに言われてみればそうだね、贈り物が決まっただけだ。さらに実際贈る名前を考えるのはそれとはまた別だったね。兄様頭いいな。

二人ともやる気になってくれたみたい、これは心強いよ。どうせやるなら徹底的に、は父様がよく言うセリフだね。ホントに姉様は父様に考え方が似てるよ。

しかし、兄様のネーミングセンスはちょっと不安かな。魔法とかそのまんま過ぎるし……

なるべく姉様と私とで考えるべきなのかこれは……？

が、頑張ろう！！

「ラルフさんとナナシさんの名前から一文字取った方がいいよね。うーん……、結構難しそうだねー」

両親の名前から一文字取るというのは、この世界では割と当たり前のようになっている。私の場合は女神様が付けちゃった名前だからちょっと特別なんだけどね。普通の場合はそれが一般的だ。

「絶対って言う訳じゃないけどな。できたらそうした方がいい、ってくらいの考えでいいぞ？」

「あまりそれに拘り過ぎていい名前が浮かばないのも困るしね。名前って難しいわよ……。私たちも早く自分たちの事で悩みたいわね、お兄様……」

「ああ、そうだな。こっちは普通に悩みものだが、俺たちの子供ともなればどれだけ嬉しい悩みになってくれるのか想像もできないな……」

手を取り合い、見つめ合い、二人の世界へ入ってしまう兄様と姉様。

早速二人が脱落だよ！！　ええい役に立たない兄姉め！　目の前でキスされると目に毒だよ！！

「シアさんは何かいい案はない？　どうしよう、軽く受けちゃったけど難しいよこれ。いい案だと思ったんだけどなー」

「わ、私ですか？　私にも難しいご相談ですね……。メアとフランはどうです？」

あっさり投げた！　シアさんでもさすがにこれは難しいかー……

「姫が受けたんだから姫が考えるしかないよ。うんうん」

「あ、何かおやつ用意しようか？　メア、手伝ってー」

「りょうかーい！　姫、シア、ちょっと行って来るね」

そう言い残すと、二人はそそくさと部屋の外へ出て行ってしまった。

「逃げられてしまいましたね。ですが、メアの言う通りですよ。姫様がお引き受けになったご依頼ですからね、責任を持って当たらなければいけません。大丈夫です、姫様でしたら必ず素敵な名前を考え付かれる筈ですから」

「う……。そうだよね、私が考えないといけないよね。ルー兄様たちと三人で考えたかったんだけどな……」

三人で考えて贈るからこそのプレゼントなのになー……

「ん？　ちゃんと考えてるぞ？　安心しろって、お前だけに考えさせる訳無いだろ？」

「え、あ、ごめんなさい。私はお兄様の事しか考えてなかったわ……」

あれ？　いつもは体を揺すったり、大きな声で呼び掛けないと戻って来ないのに、珍しいね。でも姉様は釣られて戻って来ただけみたいだが……

「いつもの俺は、シラユキ５、ユーネ４、その他１くらいの割合なんだが、今日は違うぞ？　シラユキ５、ユーネ３、その他２くらいだな、うん」

「何の割合か分からないよ……。後、減らすなら私分を減らしてよ！」

よりによって姉様分を減らすとは、後が怖いよ？

「お兄様の中ではシラユキの方が比率が大きいのね……」

「ゆ、ユーネ？　そういう意味じゃなくてだな、あー、その」

今が既に怖かった！！

「うん？　あ、私もかも。ごめんなさいお兄様、確かにそういう意味だとシラユキが一番よね」

許された！　兄様許されたよ！！　でもどういう意味よ……

「ちなみに私の中では姫様が１０、その他はゼロです」

「言うと思ったよ！！」

現実逃避はこれくらいにして真面目に考えよう。
名前、名前……。ファンタジー風と言うか、横文字っぽい名前でいいのかな？
いや、ここは日本風な名前を付けるのもありなんじゃないだろうか？　私の名前もちょっと変わってるな、くらいにしか思われて無いし。
待てよ……、それが原因で学校とかで苛められたりでもしたら……。だ、駄目だ！　迂闊に変わった名前を付ける訳には……
そういえば私って、ゲームのキャラに名前を付けるのにもの凄く時間が掛かってた気がする。多いと六人とか決めないといけないゲームもあったっけ……

「シラユキが前に住んでた世界だと、こういう時はどういう風に名付けてたのかしら。参考に聞いてみてもいい？　あ、思い出せたらでいいわよ？」

おおお、姉様いい考えだよ！　ここで私の異世界知識が役に立つかもしれないね。

「うん！　ええとね、えーと……。んー、自分の好きな言葉かな？　私の一番新しい知識だとそれが最後かも」

当て字を使ったキラキラネーム、だったかな？　賛否両論と言うか、否定的な意見が多かったね確か。

「す、好きな言葉？　お兄様の場合はおっぱいとかね。なるほど…

…」

「どんな名前だよ！　いや、ラルフとナナシの子供だよな……、有りか？」

「無いよ！！　ラルフさんとナナシさんっていうので納得しかけちゃったよ……。んー、好きな有名人の名前をそのまま持って来ちゃったりとかもあるね」

中にはアニメや漫画のキャラの名前そのままとかね。そこまで変な名前も無いし、普通にこれは有りだと思う。

「何だ？　他人の名前そのままってのは有りなのか？　まあ、本人達がそれでいいならいいと思うんだけどな。偶然以外で同じ名前とか正直考えられないぜ？」

「そうよね、自分の子供に他人のイメージを押し付けてる感じがしちゃうわよね……。これは無いわ」

そんな考えもあるかー……、割と普通な名付け方だったと思うんだけどね。なるほどなるほど面白い。

そうなるとこれは除外して、と。後は……

「似た感じので、何か歴史的な快挙を成し遂げた先祖の名前を付ける事もあるかな。〇〇二世とかね。子供のうちは別の名前で呼ばれたりしてね」

「子供の内は別の名でか？　ああ、幼名って奴だな。それはなんか、なあ？　名前二個考えるみたいで逆に面倒じゃないか？　呼ばれる

子供も途中で名前が変わるとか混乱しそうだよな」

「人間種族はそうでも無いですよ？　慣れる事に関してはずば抜けた能力を持っていますからね。適応力の高さでは随一と言ってもいいでしょう」

「私たちだと考えられないわよね。先祖って言ったって、皆生きてるし、家族で同じ名前になっちゃうからね」

人間は世界中どこにでも住んでいて、一番数が多い種族だからね。適応力が高くないとどんどん寿命で死んで行っちゃうって事かな。今回の話とは何となく意味合いが違う気もするけどさ。

私たちみたいな長い寿命の種族の場合は、実際生きてる先祖と同じ名前になっちゃうのか。ラルフさんたちには関係無いけど、これはやっぱり無しだね。次へ行こう。

「文字数で決めるっていうのもあるよ。運勢が良くなる文字数とか？　これは私にはよく分からないねー。他にも色々とあるけど、あんまり参考にはならないかも。私もそれが専門って訳でもないし、それ以上詳しい事も分からないんだけどね」

「いいや、充分参考になったぞ？　ありがとなシラユキ。ちょっとこっち来い」

兄様に引き寄せられ、膝の上に乗せられてグリグリと撫でられる。

「ルー兄様撫でるの強いよ……。ふふふ」

そういえば兄様の膝の上に座らせてもらうのは久しぶりかな？

もっと小さい頃は毎日の様にしてもらってたんだけど。

なんだろう、嬉しいな……

「うわー、何この笑顔、可愛すぎる……。お兄様、私にも抱かせて？」

「ふふふ。もうちょっとルー兄様に甘えたいな。ごめんねユー姉様」

「そんな事で謝らないの。ああ、可愛いわー……」

「やはり姫様は、是非ルーディン様と一緒になって頂きたいですね」

いきなり何を言い出すかなシアさんは……

「ははは、子供に言う事じゃないなそれは。今はただの妹として甘えてればいいさ、な？　シラユキ」

「うん！　ルー兄様大好きだよー！！」

将来兄様と、なんてまだまだ考えられないよ。今は優しくてカッコいいお兄ちゃんに甘えられればそれでいいね。

「なんか話が逸れてばっかりだな。シラユキが可愛すぎるのが原因か？」

「うん。どうもいけないわね、ついつい可愛がっちゃうもの。でも、これはしょうがないわよねー。ね、シラユキー？」

「ふふふ、くすぐったいよユー姉様」

兄様と交代して、私を膝の上に座らせて満足そうな姉様。スリスリと頬擦りされてしまう。くすぐったいけど嬉しい。

「ええ。姫様の御前では全てが有象無象と化します。これは姫様に責任を取って頂く外ありませんね」

「え？　どういう流れでそうなるの？」

私のせいにされてるー！！　可愛い可愛い言われてるだけに怒れない……！！

目の前で兄様と姉様に甘えすぎて嫉妬されたか！？

よし、責任を取って私的に考えて最高の案を出そうじゃないか。

「深く考えないで、名前の響きで決めるのが私はいいと思うな」

兄様の魔法の名前の付け方に近いかもしれないけどさ、結局はカッコいい、可愛い、素敵な名前がいいと思うんだよね。

「名前の響き……、音の事？　うん、それはいいかもね。実際口に出して、響き良い名前っていうのは重要な事よね」

「後は覚えられ易いと直いいな。ユーネはよく間違えられたよなあ……」

未だにユーネフェリア様って呼ぶ人いるしね。愛称がユーネだし、間違えて記憶されがちなんだよね。

「私の名前は女神様に付けてもらったんだよねー。今回も特別に付けてもらえないかな……」

「え！？　ちょちょちょちょっと待って待って！！　シラユキ女神様と連絡取れるの！？」

「お前それ、どこの神子だよ！？」

「取れないよ？　無理だからね！　でも絶対できないとは言い切れない自分が怖い……」

多分白雪草に向かってお願いしたら、その晩夢に出て来るくらいは平気でして来そうだ。

もう二度と会う事は無いなんて言っておきながら、ちょこちょことこちらの生活を覗いてるみたいだしね。……覗き？　見守ってくれている、にしよう。覗きだといやらしく感じてしまう……

「そ、そうよね。あー、焦ったわ……」

「絶対って言い切れないとか言ってるぞコイツ……」

「あはは、試してみようか？　多分無理だと思うけど」

女神様に名前付けてもらえるなら最高のプレゼントに、ん？　ならないね……

私達が考えるからこそ意味が出て来るものだったよ。いけないいけない。

「やめとけやめとけ。もしできちまってそれが誰かに知られたら、

どこかの神殿に祭り上げられるぞ」

「うわ、そんな事もあるんだ？　ちょっと怖いねそれは……」

この世界の宗教と言うか、信仰の対象は女神様だけだからね。秋祭りも収穫の神様に感謝するのではなく、大地と女神様に感謝するお祭りなのだ。

他の国ではどうか詳しい事はまだ分からないけど、世界一般的な認識はそうだろうと思う。

「そうなればその神殿を潰すだけですよ。ご安心くださいね」

「反対の意味で安心できないよ！　もう、シアさんは……」

「え？　当たり前の事じゃね？」

「そうよね？　その町ごと潰されないだけありがたいと思ってもらわなきゃ」

「父さんなら町ごと潰すな」

「お爺様なら国ごと？」

「爺さんならありえるな……」

「なにそれこわい。え？　私がおかしいの？　え？　あれ？」

その108

「男の子ならアドルファ、女の子ならアンジェリーナ。どうですか？　一週間掛けて考えてみたんですけど」

結局ほぼ私一人で考える事になってしまった。兄様はバストかヒップがいい、とかふざけた事ばかり言ってたので途中から選考者から除外された。でもウエストはありだと思って候補には入れておいたけどね。

男の子の名前にはラルフさんの文字を、女の子の方にはナナシさんの名前の文字を入れている。それでいて響きよく、カッコいい、可愛らしい名前にするために悩みに悩んだのだ。

実は父様と母様も一緒に考えてくれていたのだが、この二人が恐縮してしまいそうなので黙っておいた。気にしないかもしれないけどね、念のためだ。

まあ、さらっと言っては見たものの、内心ドキドキだ。気に入ってくれるといいんだけどな……

「その……、何て言うかな、あー……」

ラルフさんは何かを言い難そうにしている。

イマイチだったかな？　うーん、残念、考え直すか……

「おっと、まずは礼だな、悪い悪い。ありがとなシラユキちゃん。あー、いいのかな……、こんな立派な名前貰っちゃってさ。アドルファとアンジェリーナ、アドルとアンジェか？　いいな」

おや、気に入らなかった訳じゃないんだね。よかった、ちょっと安心。

「ラルフさんとナナシさんのために考えたんですから、当然、いいんですよ。ふふ、気に入ってもらえました？」

「気に入ったなんてモンじゃないよ！　友達って言ってもさ、シラユキちゃんたち王族だよ？　そんな人たちに名前を贈ってもらえるなんてさ……。あー、さっきのラルフじゃないけど、なんて言うか……」

ああ、なるほどね、もしかして、感動されちゃった？　う、嬉しいなそれは……

「一応他にもいくつか候補はあったんですけど、聞きます？」

もしかしたらそっちの方がいい、って考えも変わるかもしれないしね。今ならまだ間に合うと思う。

「いや、聞かないよ。三人で考えてその中から選び出された名前なんだろ？　それ以上のモンは無いさ。ははは、最近幸せ過ぎていかんなこりゃ。顔がニヤけちまう」

「ホントホント。毎晩のアレも結婚する前より……、ごめんね？」

ま、毎晩幸せそうなんだね……

今までの冒険者仲間と、っていう意識じゃなくて、愛する人と、だからかな？　ひゃー！　恥ずかしい！！

今日だけは特別なのか、シアさんも特に怒りもせず、止めようと

もしない。

「んー！　こんなに幸せでいいのかな……。ここ数年凄いよ？　ラルフと知り合って冒険者に戻って、王族の友達ができて、人を好きになるって気持ちを知って……。ふふ、ラルフと結婚しちゃったりさ。さらには子供の名前まで贈ってもらっちゃって……。あー、泣いちゃいそう」

冒険者に戻って？

……おっと、いけないいけない。こんな明るい席で聞く話じゃないよね多分。

「ふふふ、羨ましいです。二人とも凄く幸せそうで、私も嬉しいです」

本当に私も嬉しい。他人（ひと）の幸せがこんなに嬉しいと思えるなんて初めての経験だ。この気持ちは素敵だね、大事にしたい。

「ふむ、んじゃちょっと恥ずかしいが、いっちょやるか！」

「ん？　何すんの？」

ラルフさんが椅子から立ち、私に真っ直ぐ向き直る。

「え？　え？　ラルフさん？」

「姫様、黙って聞いてあげてください」

「う？　うん……」

シアさんに注意されてしまった……

何か大切な事でも話してくれるのかな？

「ああ、やっぱ恥ずかしいな……。ん、まずはもう一度礼を言うよ、本当にありがとうな、シラユキ姫。俺、いや、俺たちの子供には必ず伝える。お前の名前は……、可愛くて、恥ずかしがり屋で、凄く心の優しいお姫様が付けてくださったんだぞってな。それこそ子々孫々までってやつさ、俺たちとその子供の名前、それにシラユキちゃんのことは伝え残すように言っておかなくちゃな。おっと、今回の事だけじゃない、ナナシの体もだ、これは本当に礼を言っても言い切れねえよ。ホントに俺たち泣いて喜んだんだぜ？　っと、それはいいか」

「恥ずかしいよラルフ……。シラユキちゃんも泣いちゃってるよ？　まったく……。でも、ホントにありがとね。言葉じゃ感謝し切れないよ」

「あはは、もうちょっと我慢してくれな？　最後にこれだけは言わせてくれ。俺たちはさ、後五十六十も生きれるかどうかだ。多分だけど、もう何度も会えないだろ。もしかしたらもう会えないかもしれないな、うん。だからな？　シラユキちゃんが大人になってな、俺たちの孫やひ孫に会いに来てくれると嬉しい、ん、だが……」

「姫様……」

ううう……、こ、こんないきなりはずるいよ！！

涙が止まらない、こんな素晴らしいお友達に、もう会えなくなっ

ちゃうなんて……、そんな、そんなの……

「やだ……、やだよう……。行っちゃ、やだああ……」

言ってしまっては駄目な言葉、言っても意味のない言葉だっていう事は私も分かってる。

でも……、寂しいよ、嫌だよ、別れたくないよ……

「今日でもう会えないって訳でもないだろ？　でも、ちょっと安心したな、やっぱ子供だよシラユキちゃんは。ここで笑ってお別れしよう、なんて言い出すかとも思ったんだけどな」

「ここまで子供っぽいのは確かに初めてだよね。あ、いや、これが普通なんだよね……。うーん、メイドさん、いい？」

「どうぞ、今日はラルフさんもご一緒に」

そう言って、シアさんは一歩後へと下がる。

「シラユキちゃんごめんねー？　まだ会ってニ、三年くらいなのに、別れが悲しくて泣いてくれるなんて、嬉しいよ……」

「うおおお……、そういや俺ってシラユキちゃん触るのって何気に初めてじゃねえか？　緊張するわ……。！？　髪柔らかっ！　何だこれ！？」

ラルフさんとナナシさんが、椅子に座って泣く私の左右に立ち、優しく撫でてくれる。

な、何だこれはないでしょ、もう……

「あたしたちもこんな可愛くて優しい子、作ろうね、ラルフ」

「いやあ、ちょっとどころか絶対無理だろこの可愛さは……。ま、頑張るか！　折角名前二つも貰ったんだ、二人は作れって事だよなこれは」

「うんうん、頑張ろう？　あ、やばいわ、頑張るとか言ってたらシたくなってきちゃった……」

「あー、実は俺も……」

「人を撫でながら変な事話さないでください！！」

ああもう！！　まったくこの二人はー！！　大人しく泣かせてもらえないかな！　もう！！

「おお、怒った怒った。やっぱ泣き顔も可愛いなシラユキちゃんは」

「あははは！　怖い怖い！　シラユキちゃんも、もうちょっと大きくなればルーディンさんとするんでしょ？　ふふふふ、別れの前に色々と教えておこうか？」

興味あります！　……じゃないよ！！！

怒った私、それでも撫でる手を止めない二人。

この二人は、この二人はー！！

「もう！　ナナシさんのエッチー！！　もう！　もう！！　二人とも大好き！！！」

「あははは！！　俺も多分ナナシの次に好きだぜ！！！」

「あたしは一番かも？」

「おいコラ！！」

「あっはは！！　冗談冗談！　あたしも大好きだよ、可愛いくて優しいお姫様……」

「うーん、俺たちもいるんだけどなあ……」

「エディさんはついて行かないんだし、あの話には加われないわね。今は空気呼んで黙ってなさいって、刻まれたいの？」

「そうですよ。死にたいんですか？　５０点取りましょうか？」

「怖え！　ミランさんもバレンシアさんも美人なのに怖えええええ！！！　５０点って何！？」

「ラルフさん亡き後のツッコミ役として充分ですね。頑張ってください」

「メイドさん！？　俺ってやっぱ死ぬの！？」

「シアさん！？　ラルフさんってやっぱり死んじゃうの！？」

その１０８（後書き）

今回でお別れのお話は終わりに見えますが……
すみません、まだまだ続きます。本当に長いです。

あんまり湿っぽいお話ばかり続くのは読んでいても面白いものではないと思いますが、もう暫くお付き合いをお願いします。

その109

「それじゃ姫、おやすみ。何かあったらすぐ呼んでね」

「う、うん。おやすみメアさん」

今日の夜間警備の一人目はメアさん。

そろそろそんなのはやめちゃってもいいと思うんだけどね。いくら交代制と言っても、夜、何も無い廊下で一人椅子に座ってるだけとか辛すぎるよ。

まあ、シアさんみたいに本を読んだりはしてると思うんだけどね。うーん、どうしたものか……

ちょっと強めに言ってやめてもらおうかな。でも、私のためを思っての行動なんだよね、それも悪い気がする。贅沢な悩みだよホントに。

明かりを消してベッドに入る。今日は大人しく寝よう、大人しく……

ラルフさんもナナシさんも喜んでくれてたな……、嬉しい。嬉しいけど、寂しい。

カルルミラか……。私が行けるようになるのは成人後かな……

成人なんてまだ八十年以上先の事だよ。そのころにはもうラルフさんもナナシさんも……

魔法で明かりを付け、ベッドから降り、ドアの前へ、そして静かにドアを開ける。

「メアさぁん……」

「ん、姫、トイレ？　え？　どうしたの!?　な、泣かないで!!」

私の顔を見たメアさんが驚き、慌てて駆け寄り撫でてくれる。
情け無い話だが、一人で寝ることが急に寂しくてたまらなくなってしまった。

「怖い夢でも見た？　ってまだ寝てないか。何かあった？　エネフェア様呼ぼうか？」

私はフルフルと頭を振り、答える。

「メアさん、あのね、えとね……、うう……」

「あー、そういう事か。んー……、シア呼んで一緒に寝てもらう？でも今日の当番は私とフランなんだよね。この時間ならまだシアも起きてるとは思うけど、すぐには来れないかな……」

私は寝るのが早いからまだみんな起きてるよね。でも、シアさんだってもう自分の部屋で休んでいる筈だ。
私が呼べば急いで用意して飛んで来てくれるとは思うんだけど、どうしよう……

「ね、姫。私が一緒に寝てあげようか？　と言うか一緒に寝たいな。

どう？」

言い悩む私を見て、メアさんが提案してくれる。

「うん、お願いしてもいいかな……。ごめんねメアさん、どうしても寂しくって……」

「あああ、泣かないの、もう！　なんで謝るかな……。一人で待てる？　フランに交代はしなくていいって言って来ないといけないし、私も着替えないと」

「うん、それくらいなら……。それじゃ、待ってるね」

「待つなら部屋の中で待っててよ？　じゃ、急いで着替えてくるからね」

そう言うとメアさんは、私の頭を軽く撫でてから小走りに行ってしまった。

一人寝がこんなに寂しく感じるなんて、どうやら精神的に相当参ってるみたいだね私は……

その後五分と待たずにメアさんは私の部屋へ戻って来てくれた。

家族とは、特に母様とは一緒に寝ることは多いのだが、メイドさんズと一緒に寝るなんてシアさんでも一度だけしかない。メアさんはかなり嬉しそうだ。

「ふふふ、やっと夜間警備の本来の目的が達成できたかな？　ね、

やっぱり必要だったでしょ？」

う……、笑われてしまった。

今日はしょうがないじゃない！　あの素敵なお友達とお別れすることになっちゃうんだよ？　今日は……？

「どうしようメアさん……。私、また一人で寝られるように戻れるか不安になってきちゃった……」

「あー、重症だね……。でも、いいんじゃないかな？　もっと私たちに甘えなよ。夜廊下で交代で警備するより、毎晩交代で一緒に寝る方が楽だと思うし……。ん？　これからそうしよっか？」

ま、毎晩交代で？　今日はメアさん、明日はフランさん、明後日はシアさんっていう感じかな。

それならメイドさんズの負担も減るし、夜中に私が寂しくならないようにする、という本来の目的も遂行できるんじゃないか？

あれ？　それでよくない？　そんな簡単な解決方法があったとは……

「そうしてもらっちゃおう、かな？」

「うんうん、そうしようよ。でも、これから毎日私たちと寝ることに慣れちゃうと……、一人で寝られなくなっちゃうかもね？」

「う、それは無いって言い切れない……。とりあえず、しばらくの間はお願いしちゃうね」

「大人になるまでとは言わないけど、五十くらいまではそれでいいと思うよ。ユーネ様だってずっとルーディン様と一緒に寝てるわけ

だし……」

姉様は子供の頃からずっと兄様と一緒に寝てるんだよね。今はもう寂しさじゃなくて違う意味で一緒に寝てるんだと思うけど……

まず私が先にベッドに入り、すぐにメアさんもいそいそわくわくと入ってくる。嬉しそうだねホントに……

「うーん、嬉しいな。姫はもっと甘えてよね。本当は今までも寂しい時はあったんじゃない？　五歳の頃から一人だけで寝るとか、私たち結構不安で心配してたんだよ？」

「ううん？　今日までは特にそういうのは無かったかな。五歳の頃はまだ前世の記憶が強かったからね、一人で寝るのも普通に思えてたし、そのまま慣れちゃったのかな」

ん？　そう考えると、私って精神年齢がどんどん下がって行ってるのか？　前世の記憶も完全に薄れちゃって今はもう知識としてしか残ってないし、自覚ができないや。

最近子供扱いされてもあんまり嫌に感じなくなっちゃったし、そうなのかもしれないね。いい事なのか悪い事なのか……

「そうだ、姫と一緒に寝るのは今日が初めてっていう訳でも無いんだよ。小さい頃、もっと小さい頃は私かフランが一緒に寝てたんだけど、覚えてないよね」

「そうなの？　んー、分かんないや。二歳とかそれくらいの頃？　さすがに覚えてないなー」

父様か母様と一緒に寝てたんじゃないのか……。父様はともかく、母様は今でも毎日忙しそうだし、私がもっと小さい頃もそうだったんだろう。

一人で寝るようになる前は父様と一緒に寝てたんだったかな。

「フランに聞いたよね？　ふふふ、私も姫におっぱい吸われてたなー。あれは結構恥ずかしかったよ」

「ううう、恥ずかしい……。私ってホントに大きな胸が好きだったのかもね……」

「まあ、ルーディン様の妹だしって納得してたんだけどね。あ、久しぶりに吸ってみる？」

「すすす吸わないよ！！　子供扱いはいいけど、赤ん坊扱いはしないで！」

「あはは、冗談だって。ごめんねー、怒らないで。姫とこうしてまた一緒に寝られるなんてちょっと嬉しくてさ」

メアさんは私を抱き寄せて、優しく撫でながら謝る。

うーん、こうやって抱きつくと本当の大きな胸だな……、羨ましすぎるううう……

メアさんもいい匂いだなー。安心と心地よさで眠気が一気に増してきたよ。もっとお話したかったけど、もう眠気が強すぎて限界だ。

「あ、話しすぎちゃったかな、眠いよね。そろそろ寝ようか？　おやすみ、姫」

「うん……、おやすみなさーい。……メアさん大好き……」

「ふふ、可愛いなあ……」

「今夜は私が！！」

「レンは前に一緒に寝たことあるでしょ！　まずは私！！　ねー、シラユキー？」

「うん、今日はフランさんにお願いしようかなー。シアさんは明日でもいい？」

「そんな！！　わ、分かりました。今夜は枕を濡らす事にします……」

「明日は一緒に寝れるのに何言ってるんだか。それにシアと姫を一緒にって言うのは最近ちょっと不安なんだけど……」

「それじゃ明日はまたメアでいいね。私とメアの交代にしようか？　それとも毎日シラユキに決めてもらう？」

「私は母様がいいなー。でも私が寝る時間はまだお仕事してたりする事もあるよね。お仕事の邪魔はしたくないや」

「何もしませんから！　お願いします！　お願いします！！」

「わわわ！　冗談だよ、もう！　必死すぎて逆に怖いよ……」

夜間警備はめでたく廃止が決まりました。

これからは日替わりでメイドさんズの誰かと一緒に寝ることになっちゃったけど、三人が毎晩ぐっすりと眠れるようになるし、私の寂しさも解消される。

しばらくの間の話だけど、また一人で寝られるようになるまでは甘えようと思う。

嬉しさ、恥ずかしさ、情けなさが入り混じる複雑な気持ちだよ。

その１０９（後書き）

ちなみにメアリーは、寝るときはノーブｒ

その１１０

「おーい、シラユキ、アップルパイ買って来てやったぞ。どうだ？　今食べるか？」

「あ、シラユキ、ほらほらこれこれ、猫のぬいぐるみ。シラユキ猫好きでしょ？」

「お、俺もアップルパイを買って来てしまったんだが……、まさかルーと被るとはな。まあ、好物はいくらあってもいいだろう？　皆で食べようか。それに、シラユキは魔法で保存もできるからな。うむ」

「う、ウルギス様、ルーディン様、今日のおやつはアップルパイなんですけど……」

「なにい！？」「なんだと！？」

「ふふふ、お父様もお兄様も駄目ね。その点私は……、？　ねえシラユキ？　それって……」

「う、うん……。ね、猫のぬいぐるみ。今日シアさんに貰っちゃった……」

「も、申し訳ありません、ユーフェネリア様……」

「ああ、うん。いいの、いいのよ……。お店の品よりシアの手作りがいいわよね……」

談話室でメイドさんズと本を読んでいたら、突然父様兄様姉様の三人がそれぞれプレゼントを持って乱入してきた。しかも三人ともメイドさんズと丸被りで面白い結果に。

それぞれが私の反応と笑顔を期待していたんだろう、が、逆に落ち込ませてしまったみたいだ。

プレゼントもその気持ちもありがたい。でも、でもさ……

「ありがとう、みんな。でもちょっとあからさますぎるよ……。あんまり心配しなくても大丈夫だよ？」

もうすぐラルフさんナナシさんはカルルミラの町へと行ってしまう。

その寂しさがどうしても顔に出てしまって、みんなを心配させてしまっていたんだろうと思う。

「大丈夫な訳あるかよ、一人で寝れなくなったくせに何言ってんだ。ちゃんと報告は来てんだよ」

「うっ……」

はい、一人で寝られません……。だって寂しいんだもん！

「毎日ちょっとした事で思い出して涙目になってるじゃない。それで心配するなっていうのは難しいわよ」

「ううっ……」

ば、バレてた!?　だって悲しいんだもん!!

「最近は用もなく執務室によく顔を出しているそうじゃないか、エネフェアも甘えてくれて嬉しいと言っていたな。ああ、その程度で執務が滞るなどという事は無い、そこは安心していいぞ。本音を言うと俺にももっと甘えてほしいんだがなあ……。まあ、俺は家を空けることが多いし、それも難しいか？　悪かったな、シラユキ」

そう言うと父様は私を抱き上げてくれる。

あ、父様に抱き上げられるのは久しぶりな気がする。

父様はそのまま椅子に座り、私を優しく撫でてくれる。

「ふふふ。ううん、ありがとう父様」

何て優しい父様。ついつい抱きついて頬擦りしてしまう。

「シラユキ可愛い！　お父様ずるいわ、私がしようと思ってたのに！」

「ははは。ま、いいじゃないか。ユーネは俺の膝の上でどうだ？」

「え？　あ、も、もう！　お兄様！　シラユキの前でそれは恥ずかしいわ！」

私の前じゃなかったら喜んで乗っていきそうだよね姉様は……

「ふむ……、シラユキには悪いのだがな、俺はこれで良かったと思うんだ。前に一度言ったろう？　辛いぞ、と。今回はただの、と言っては軽く思えてしまうかもしれんが、ただの別れに過ぎん。予行練習が出来て良かったとも俺たちは思ってしまうんだ」

私を撫でる手は止めず、ゆっくりと自分の考えを話してくれる父様。

「う、ウルギス様、それは姫様にはまだ……」

「こら！　シアはちょっと黙ってなさいって。あ、ウルギス様、失礼しました」

「メア、私は……、ひ、姫様……」

父様を止めようとしたシアさんだが、メアさんに注意されてそのまま引っ張って行かれてしまう。なんという心配顔だ……

おっと、意識をこちらに戻そう。予行練習？　何の？　前に父様が言ってた辛いって……、あ。

「お父様、私もシラユキにはまだ早いと思う。って、気づいちゃった？　この子はまったくもう……」

「俺もユーネも一度は経験してきた事だからな、遅かれ早かれって奴だ、ユーネ。それに、シラユキもそれを知ってあいつらと付き合ってた訳だしな。深く理解はしてないと思うが」

「う、うん……、そうなのかもね。そっちの場合の寂しさ悲しさは

今回の比じゃないよね。それに、ラルフさんたちは結婚して幸せになるんだからもっと喜ばないと……」

そう、今回は「ただの」別れに過ぎない。「一時的な」と言った方が分かりやすいか。

二人はラルフさんの生まれた町で新しい生活を始めるんだ。まだまだこの先色々な事が待っている事だろう。

父様が予行練習と言ったのは、そのさらに先の、「一生の」別れについての事だ。平たく言えば死別だね。

「ルー兄様も、ユー姉様も、その……、お友達と？　つ、辛かったよね」

「そりゃな、当たり前だ。今だってそうだぜ？　ラルフたちが死んだら泣くだろうな。あいつは本当に、親友、なんだよ」

「ええ、そうね。二人とはまだ数年の付き合いだけど、年月は関係ないわ、ラルフはいいお友達で、ナナシは私にとって姉みたいな存在の友人だもの。そのときが来たら、暫く泣き続ける生活が待ってると思うわ」

「ルーにもユーネにも、勿論シラユキにもだ。他種族の友人をあまり作ってほしくない理由はこれなんだ。辛い、本当に辛いんだぞこれは」

ううう、どうしたんだろう。今日の父様は私を脅そうと来てる気がするよ……

「お父様、シラユキ泣いちゃうわよ？　すでに半泣きだけど……。あんまり苛めないであげてよ」

「確かにらしくないな。どうしたんだよ父さん、シラユキに嫌われるぞ？　まあ、甘やかすだけじゃ駄目だって気づいたのか」

「ええ！？」

「うお！？　どうしたシラユキ！？」

いきなり目の前で大声を上げて驚いた私に、さらに父様が驚く。

とととと父様が私を甘やかさなくなるの！？　やだ！！　それは絶対嫌だ！！！

「あ、う、え、あうあう。父様ぁ……」

ううう、父様にはもっと甘えたい、甘やかしてほしいな……

「ははは、こらこら慌てるな。安心しろシラユキ、俺は一生お前を甘やかす生活を続ける気だぞ？　シラユキの欲しいものは何だって手に入れて来てやる、それこそ世界だろうとな。シラユキが嫌いな奴がいるのなら、そいつのいる国ごと滅ぼしてやるさ。だから安心して甘えて来るんだ」

「よ、よかったぁ……。例えは怖いけど、父様大好き！！」

盛大に安心しました。娘のために世界征服くらい軽くやってくれそうだよね父様は。

何か、一人の女の子のために町を丸々一つ死人の町に変えた赤と黒の悪魔の話を思い出しちゃったよ。

「むう……、父さんはやっぱ凄いな。俺たちじゃここまで素直に甘えてくれないもんな」

「うん、お父様も、後シラユキもちょっと羨ましいかな。たまには私もお父様に甘えたくなるし……」

あはは。姉様もまだまだ父様に甘えたいよね。父様は本当に凄く素敵な、最高に頼りになるお父さんだもんね。

「何を言ってるユーネ、いつでも甘えに来い。もちろんルーもな。お前たちも、成人しようが何千歳になろうが俺の大切な子供だという事に変わりは無いからな」

「ふふふ、私はお兄様に甘えるから大丈夫よ。ありがとうお父様」

「はは、さすがに俺はもう甘えるって年でもないよ。でも、ありがとう父さん、今の言葉は素直に嬉しいよ」

「父様素敵！　カッコいい！！　ねえねえ父様、今日は一緒に寝よ？」

ああもう！　何この最強お父様、大好きすぎる！！！

「ああ、そうだな。シラユキと寝るのも久し」

「姫様！？　今日は私の当番の日なのですよ！？」

びっくりした！！
父様の言葉を遮ってシアさんが話に加わってきた。

「ちょ、ここで割り込む！？　ご、ごめんなさいウルギス様！　レン、ちょっと外に出てようか……、今のはさすがに許せないって。メア、後お願いね」

「あ、うん……。シア、落ち着いたらちゃんと謝るんだよ？」

「はっ！？　も、申し訳ありません！！　少し頭を冷やして参ります……。それでは、失礼します」

シアさんはフランさんと一緒に部屋の外へ出て行ってしまった。
あちゃー、随分落ち込んでたみたいだけど大丈夫かな……。そういえば今日はシアさんと一緒に寝る日だったね。いやあ、失敗失敗だ。
フランさんも怒ってたね……、ちょっと怖かったよ。怒るような事じゃないと思うんだけどなー。

「話を戻すが、もう友人になってしまったのならば、今さら何を言っても仕方が無いことだ。数十年後、覚悟だけはしておくようにな」

「うん。多分、ううん、絶対大泣きして塞ぎ込んじゃうと思うけど、その時は甘えさせてね？」

今からそんな覚悟も、考える事もしたくはないが、いずれ必ず訪れる別れと悲しみだ。

沢山泣いて、後悔して、落ち込んで。でも、またお友達を作ろうと思えるくらい元気になれるように……

家族みんなに甘えようと思う。

あははは、情けないね私って！

「よし！　エネフェアの所へ行くか！　ルーもユーネも行くぞ！仲間はずれにされたと思われるといかんからな！」

「そいつはやばいな……。それじゃ、行くか！　どうせならその足で町にでも行くか？　みんなでさ」

「いいわねそれ！　家族みんなで町に行くなんて滅多に無い事だし、たまにはいいわよね！」

「うん！　なんか凄い大問題になりそうな気がするけど、今日はいいや！　行っちゃおう！！」

その１１０（後書き）

今回でこの話、終わりに見えるだろ。

ウソみたいだろ。

まだ続くんだぜ。

これで……

すみません。お別れのお話はまだまだ続きます……

しかし、ちょっと前に１００話行ったと思ったら、もう１１０話です。

これがキングクリムゾンの能力か……

その111

「ふう……。やはり姫様のお側は癒されます……、一生このままでいたいくらいですね」

「んー、気分は晴れた？　もう、シアさん落ち込みすぎだよ。フランさんは怒っちゃったけど、私も父様も全く気にしてないんだから、シアさんもそんなに落ち込まなくてもいいのに……」

私は今、落ち込むシアさんの膝の上で、シアさんの心を癒すお仕事をしている。お仕事なのかこれは……

シアさんは先日の、父様と私の会話に無意識に割り込んでしまったのをずっと気に病んで、それがずっと尾を引いているみたいだった。それでちょっと無理を言って椅子に座らせて、私を膝の上へ乗せてもらったのだ。

シアさんの心を癒し、さらには私もシアさんに甘えられて嬉しいという、まさにいい事ずくめの作戦だね。

「そういう訳には参りませんよ。冗談半分で割り込んだ事は今までも多々ありますが、あの状況下でのあの行動は決して許される事では無いでしょう。できましたら何か重い罰を頂きたいところなのですが……、逆に落ち込む私を癒そうとして頂けるとは、本当に姫様はお優しい方です……」

「あー、うん、私も言い過ぎたかな？　だってねえ、まさかあそこまで真面目な話してたウルギス様の言葉を遮るなんてね。その真面目なお話も終わりかけてたんだけど、ね。そういう問題じゃないよあれは」

フランさんは私と家族との会話は何より優先してくれるからね、特に酷い行為に見えちゃったのかもしれない。

「フランが怒って、シアは落ち込んでる訳だけど……、当の本人たちは全く気にしてないのが本音なのが困り物だよね。姫はもうちょっと怒ってもいいと思うよ？」

「そう言われても……、何か怒る事なのかなあれって。うーん……、分かんな、わひゃあ！？　ちょっ！　シアさん耳舐めないで！！！」

び、ビックリした！！
ちょっと考え事をしていたらシアさんに耳を舐められてしまった。母様と姉様には何度かされてはいるが、シアさんにこんな事をされたのは初めてだ……。心臓がドキドキ言ってるよ。

「えっ！？　す、すみません！！　私は今、そんな事をしていました？　む、無意識にそんな行動をとってしまうとは……。何故覚えていないのですか私は……！！　その時の自分が羨ましいです……」

「うーん、重症だね。大丈夫、シア？　たまにはゆっくり休んでみたら？」

「いえいえ、それには及びませんよ、ありがとうございます、メア。ですが姫様、もう暫くこのままの体勢でいて頂いても構いませんか？」

「う、うん……、いいけど……。また舐めたりしないでね？　あー、まだドキドキしてる……」

「ふふふ。シラユキの耳は私も舐めてみたいな。今度不意打ちで舐めてあげちゃおう」

ひい！　いやらしい計画を立てないでください！！

「舐めて驚かせるのは構いませんが、転ばせてお怪我などさせないよう気をつけてくださいね。……はむ」

「にゃー！！！」

甘噛みされたーーー！！！

「くっくくくっ、あっはは！！　おっかしい！　今日のシアはいつもよりなんか、ノリがいいね。はー……、あんまり笑わせないでよもう」

メアさんは涙目で笑っている。笑いすぎて苦しそうだ。

「ムイシキデスヨ」

「無意識なら仕方ないね、ふふ。あ、レン、私はもう怒ってないから安心していいよ、ちょっと過剰反応しすぎたのかもね。ウルギス様とエネフェア様に甘えてるシラユキってさ、なんか見てるだけでこっちも幸せになってくるのよ。それはちょっと邪魔して欲しくなかったと言うか……」

「ええ、分かっていますよ。今はまだ自分を許せそうにありませんが、だからと言ってフランに思う所は何一つありません。貴女も安心してくださいね」

「ビックリさせられた私を放置して、何事もなかったかのように話を続けないで！！　むう……。でも、シアさんが元気になってくれたならいいかな」

まったくシアさんは落ち込んでてもシアさんなんだから！　自分で言ってて意味不明だよ！！

おっと、そんな事より、これだけは言っておかなきゃね。

「えとね、ちょっといい？　話を戻しちゃうけど」

「あ、すみません、お叱りですか？　さすがに今のはやりすぎましたね、申し訳ありません」

「あ！　そのままでいいよ！　叱るとかじゃないから安心して？」

シアさんは謝って席を立とうとするが、行動前に私が先に止める。私ももう少しこのままでいたい、けど、それは黙っておこう。

さてさて、ちょっと恥ずかしいけど私の考え、予想を述べさせてもらおうかな。

シアさんが何故あの真面目？な席で会話に割り込んでしまったのか、という事について、ちょっと私なりに思うことが一つあるのだ。

「うんとね、多分だけど、シアさんが気を抜いてくれたんじゃないかなって私は思うんだ」

「うん？　気を抜いちゃったから割り込んじゃったんじゃないの？　姫？」

「やはり私はお叱りを受けるべきでは？　確かに気を抜きすぎていたのかもしれませんね」

あれ？　ちょっと説明し難いなこれは……

自分の考えを言葉にするのは結構難しいものだね。

「そういう意味の気を抜くじゃなくてね、あ！　そうだ！　気を許してくれてる、でどう？」

「ああ！　あー！　なるほど！　ふふふふふ、シアー？」

「なーるほどね。うんうん、それなら納得だよね。ふふふ、レーン？」

私の言葉に納得がいったのか、メアさんとフランさんはニヤニヤしながらシアさんを見る。

「や、やめてください恥ずかしい……！！　確かにそうかもしれませんね……、よく言えば気安い仲に、悪く言えば馴れ馴れしくなったのでしょうか私は……」

「それもちょっと違うかな、ふふふ」

「姫様？」

気安いとか馴れ馴れしいとか、気を、心を許してくれるもちょっと違うね。

私が一番言いたかった事はこれだ。

「シアさんも、私たちみんなのことを家族同然に見てくれてるんだよね。私はあのとき怒るどころか反対に嬉しいくらいだったよ？家族同士の会話に当たり前のように入ってきてくれる、かな？　シアさん、フランさんもメアさんもそうだけど、遠慮なんてしなくていいからもっともっと会話に入ってきてね」

ふう……

ちょっと恥ずかしかったけど言いたかった事はこれで全部言えたかな？　ガラにも無く少し緊張しちゃったよ。

「姫……」

「シラユキ……」

「姫、様……」

あ、あれ？　なんか、静まり返っちゃった？

言い終わった後からかわれまくるつもりの覚悟で話したのに、三人ともどうしちゃったんだろう？

「わ、私何か変な事言ったかな……」

「あ！　違う違う！！　ちょっと、ちょっとね……」

「うん……、何て言ったらいいんだろ……。最近子供っぽさが増したと思ったらこれだもんね。やっぱり油断できないわシラユキは」

「姫様……、ありがとうございます。今私は、言葉にできない感動に襲われています」

よ、予想外の反応だ！！　これはからかわれるよりキツイ！　恥ずかしい！！

子供らしくない考え方だったかな？　でも、メイドさんズはみんな私の大切な家族だ。だから父様母様と話してるときにだって何も気にすることなく、どんどん話に割り込んで来てもいいと思うんだよね。多分、と言うか絶対に、父様も母様も、兄様姉様だってそんな事気にする訳無い。

これはずっと子供の頃から気になってたんだよね。今も子供だけど……

「うーん、ありがとね、姫。でもさ、ウルギス様とエネフェア様との話に割り込むのはやっぱり難しいよ」

「ルーディン様とユーネ様とならそこまで私たちも気にしないんだけどね。ふふふ、言わない方がいいかなこれは」

「確かに王族の方々、特に姫様のご両親との会話に入っていくのは難しいですね。ですが、王族の方という事が一番の理由では……」

「へ？　遠慮して、と言うか、控えてたんじゃないの？」

てっきり父様と母様の前ではさすがに前に出ていけないんじゃな

いかなと思ってたんだけどな。

「言ってしまいますか。姫様のお考えで大体は合っていますよ。ウルギス様エネフェア様はやはり特別ですね、どうしても緊張が出てしまいます。しかし、絶対に話に入っていけない訳ではありませんよ？　もう一つ大きな、とても大きな理由があるんです。ですよね、二人とも？」

「うん、まあね。簡単に言っちゃうと姫のせいかな」

「そうそうシラユキの笑顔のせい。あれは邪魔できないよホントに」

……うん？　ん？　私のせい？　私の、笑顔の、せい？

！？

「ええ！？　そんな理由で遠慮してたの？　嘘だー？」

「嘘じゃないって。特にエネフェア様に甘えてる時の姫の邪魔だけはしたくないよね」

「ホントホント、あれは見てるだけでこっちも幸せになっちゃうくらいの笑顔だからね。邪魔なんてとんでもない！」

あ、あはは……

父様母様の前では控えてたっていうのもあるけど、嬉しそうに甘えてる私の邪魔をしたくないなんて理由もあったとは……

く、くう……、恥ずかしい！！

「ううう……、気を回しすぎちゃった、考えすぎちゃったかなまた」

「ううん、姫の気持ちは素直に嬉しいよ。私たちも言いたいことがあったらちゃんと話しに入っていけるからさ、そこまで気にしなくてもいいよ」

「まったく優しすぎるんだからこの子は。そろそろ代わってよ、レン。私もシラユキ座らせてあげたくなっちゃった」

「え、ええ、そうですね、名残惜しいですが……、その前に。……はむ」

「うにゃー！！！」

その112

そして、来るべき日が……、いや、その前段階がやって来てしまった。

「エディさん、Eランクおめでとう……」

「暗い！！　勘弁してくれよシラユキちゃん……。睨まれながら祝われるなんて初めての経験だ……」

おっと、睨んじゃってたか……

「姫様から直接お祝いのお言葉を頂いた反応がそれですか？　失礼の極みですね。何本にしましょうか」

「すんません！！　ありがとうございます！！！」

そう、エディさんがついにEランクへと昇級し、一人前の冒険者として認められたのだ。

それはつまり、ラルフさんとナナシさんとのお別れがまた一歩近づいてしまったという事。多少暗くなってしまうのも許して欲しい。

嬉しいのは確かだ。でも……

「ま、これで俺たちの仕事も済んじまったな。まだもう暫くは一緒に行動すると思うけどな。うん、そろそろ……、だよな」

「う、うん……。そろそろなんだよね……。シラユキちゃん？　だ、大丈夫？　泣いてはいないみたいだけど……」

二人とも私を気遣ってか、直接的な表現を避け、とても言い辛そうにしている。

駄目駄目！　今日はお祝いの席！
今はその事はとりあえず忘れて、エディさんのランクアップのお祝いをしっかりしなきゃね！

「暗くなっちゃってごめんなさい。ええと、エディさん、改めておめでとうございます！　これで一人前の冒険者ですね」

「ん、あ、ありがとうシラユキちゃん。うーん、無理してるなこれは」

言わないで！！

「まったく、気づいても実際に口に出すのものではありませんよ？　ラルフさんナナシさんの影響でしょうか……。まさにこの師匠にしてこの弟子あり、と言った感じですね」

「う、ごめん」

シアさんが少し呆れたようにエディさんを注意する。

確かにエディさんって、この二人に性格も似てきちゃってる気が

するよね。
　会った時から似た物三人組で凄くいい関係に見えてたからね。その後もずっと一緒に生活してきた訳だし、さらに色々と伝染っちゃったのかもしれない。
　ナナシさんのエロさが伝染らなかったことは心から安心している。
「お祝いの席でする話ではないと思うことなのですが、エディさんがたかがEランクに上がった程度ですしどうでもいい事ですよね。お二人は、その、いつ出られるので？」
　何かひどい事を言っている気がするんだけど、今の私にはそれを突っ込んでいる余裕は無い。ごめんねエディさん……
　シアさんは私が一番知りたい、そして一番聞き難い事をずばりと尋ねてくれてしまった。
「お、俺の扱いがひでえ……。でも、しょうがないか。俺も聞いて無いんだけど、いつなんだよラルフさん」
「いつに、っていうのはまだ決めてないな、寒くなる前にとは思ってるんだけどさ。だから、そう先の事じゃない」
「寒い中の長旅はキツイからね。冬に入る前、ううん、もっと前に出なきゃいけないんだよね……」
　寒くなる前？　今はもう夏も終わりっていう気温だよ？　それじゃもう、後一月も、ない……？
　え……、そんな……、やだぁ……

「お二人とも、言い出し難い事を聞いてしまい申し訳ありません。数週間の内に、という事ですよね。姫様……、姫様？」

黙り込んでしまった私をシアさんが呼ぶ。

言いたい、言ってしまいたい。

無駄だと分かっていても、行かないで、と口に出してしまいたい……！！

「限界、の様ですね。度々申し訳ありませんが、今日はこれでお暇させて頂きます。後、これは私の我侭、勝手な言い分なのですが……、出立のその日まで、もう姫様とはお会いにならぬようお願いできますでしょうか？」

シアさんが珍しく、まるでラルフさんと初めて会ったときのような、冷たい話し方で、え？

「え？　シア、さん？」

「ああ、それがいいな。もう、いつもみたいに笑って話すなんて無理だろ。俺たちも実際見てて辛い。メイドさんなんて特にそうだろ？　なあ、シラユキちゃん。シラユキちゃんが暗くなってるとな、皆、皆辛いんだよ。ごめんな？　会う度にそんな暗い顔させてたんじゃ、俺たちメイドさんに殺されちまうぜ？　ははっ」

「ラルフさん？」

ラルフさんはとても優しく、そして軽くおどけて話してくれる。

「今までは月にニ、三回、一ヶ月に一回も会えなかった時だってあ

るし、それとおんなじ、とは言えないか……。でもさ、シラユキちゃんの泣き顔を見るのはホントに辛いよ……。だから、だからね？　その泣き顔を見るのも、次で最後にしよう？　ね？」

「な、ナナシさん……」

ナナシさんも今日はとても優しい話し方をしてくれている。

次で……、最後……？

「うおおお……、俺が悪いみたいだ……。ランクアップすることで罪悪感を覚えるとか、世界中探したって俺くらいしか経験して無いんじゃないかこれは……」

「ふ、ふふ……。ごめんなさいエディさん。エディさんのランクアップは本当に嬉しいですよ。あ、今日は忘れちゃいましたけど、ちゃんとお祝いも用意してますからね、楽しみにしててくださいね？」

ちょっと涙声だったけど、これでちゃんとお祝いは言えたかな？

「な、泣き笑いの顔も可愛いなこの子……、はっ！？　バレンシアさん！？　ち、違いますから！！　ただ可愛いって思っただけで、おわ！　ナイフ！？　両手！？　え！？　何本あるのそれ！？」

「やはり貴方はここで消しておくべき存在なのでしょうか？　割と本気でそう思ってしまいます。姫様の愛らしさに心眩むのは人であるのなら避けられない現実。いえ、人に在らずともこの世の全ての存在を魅了してしまうのが姫様、しょうがありませんね。では、死んでください、エディさん」

両手の指の間にナイフを持ってる!?　なにそれカッコいい!!
!　両手で八本あるの!?　す、凄い!　シアさん凄い!!

「って違う!　シアさん落ち着いて!!　どうしたの今日は?　い
つにも増して過保護なんだけど……」

エディさんはただ可愛いって言っただけじゃない、もう!　涙も
吹き飛んじゃったよ!!　あ……

「ふふ、申し訳ありません、姫様」

「あ、うわ……、ありがとうシアさん……。それと、ごめんね?」

「いえいえ、とんでもありませんよ。エディさんを殺そうと思った
のは本気で、こほん」

「ひい!　勘弁してください!!」

うーん。シアさんに憎まれ役をさせちゃったかな。頼りになりす
ぎるよこのメイドさんは……

駄目だ駄目だ。シアさんはとても頼りになるメイドさんだ。でも
ね?　私はお姫様なんだよ?　こういうのは、私がちゃんと言わな
いといけないんだよね、本当はさ。

黙って様子を見てくれていたラルフさんとナナシさんへと向き直
る。

「ええと、ラルフさん、ナナシさん。まずは、ごめんなさい。多分また泣き出して話せなくなっちゃうと思いますから、今、ちゃんと言いますね。シアさんが言ってくれた事なんですけど、私もそうしようと思います。もう、出発の日までここには来ま、せんっ、ね。ふっ、ううっ……、お、お別れの、日に、また……、ううう、ううう……、行っちゃやだあ……」

言っちゃった、また言ってしまった。それに、最後まで言い切る前に泣き出しちゃったよ……、情け無い。

シアさんが涙を拭いてくれてはいるが、拭っても拭っても次から次へと涙が溢れてくる。

「姫様、ご立派ですよ。ラルフさん、ナナシさん、それにエディさんも、本日は本当に申し訳ありませんでした。ランクアップという祝いの席でこんな話をしてしまいまして……。まあ、それは先ほども言いましたように、所詮Eランク、所詮エディさんの事ですし、構いませんよね？　姫様はまだ十四歳、十五も近いのですがまだまだ子供。新しい門出を祝い、笑って送り出せる年齢ではありません。個人的には何も言わずそのまま町を出て頂きたかったのですが、ルーディン様のさりげない一言から気づかれてしまい……、このような結果となってしまいました。ええ、なってしまったものは仕方ありません。また、別れのその日にお会い致しましょう。その日も姫様は泣かれてしまうと思いますが、いえ、泣かれてしまいますが、ええ、貴方方のせいではありませんよ？　お気になさらぬようお願いしますね」

「あはは。気にするなっていうのは、ま、難しいかな。子供の泣き顔はやっぱ効くなあ……。ん、今日はここまでにしようぜ」

「シラユキちゃん……、泣かないでー……。ああ、あたしも泣きそう。この子のことホントに大好きになっちゃったんだよね……」

「明日はルーディンさんとユーフェネリアさんが来るんだっけ？俺、宿にいてもいいかなあ……。多分殺されるよ……」

兄様と姉様、明日来るんだ？　私も明日一緒に来ればよかったかな……

「ごめんっ、なさい。ううん、シアさぁん……」

「ああ……、姫様……。抱き上げますよ？　それでは、来て早々なのですが、失礼させて頂きますね」

シアさんは私を優しく抱き上げ、三人に向かい、軽くお辞儀をする。

「出立の日はルードに言うよ。その……、また、な、シラユキちゃん。メイドさんも」

「ああ……、ううん……、罪悪感が……。またね、シラユキちゃん」

「シラユキちゃん、バレンシアさん、また、ええと、またその日に」

三人の言葉を聞き終わり、シアさんは歩き出す。私はずっと泣いたままだ。

二人の顔を見るのが怖い。今見てしまうと絶対に行かないでと泣きついてしまう。それだけは絶対にしたくはない。

シアさんに強く抱きついて泣き声を押し殺す。シアさんのメイド

服が涙で汚れてしまうけど、どうしようもない。後で謝ろう……

ギルドの外へ、町の外へ。そして森の中へ入ったとき、大声で泣いてシアさんを困らせてしまった。

巡回の人がビックリして集まって来てしまい、みんな大慌て。それから一騒動あったらしいのだが……、その時母様の膝の上で泣いていた私には何が起こったのかは分からない。

父様も兄様も笑っていたし、特に大事件に発展することも無かったようだ。

その113

「っすん、ううう……。母様ぁ……」

「あああ……、泣かないで、泣き止んでシラユキ……。あなたが泣いていると私まで悲しくなってきちゃうわ……」

「ああ、姫様、お労しい……。カイナ、どうにかできないのか？」

「ええ！？　そんな、エネフェア様でも無理な事を私ができる訳無いでしょ。姫様が落ち着かれるまではどうしようもないわ。ううう、私も泣きそうよ……。姫様の泣き顔は心に来るわ……」

「二人とももう少し声を落としなさい。悔しいですが、ここはエネフェア様にお任せする外ありませんよ。自分の無力さが恨めしいです……」

一夜明けた今日。ラルフさんたちに会いに行く兄様と姉様を見送った私は、また泣き出してしまった。

泣き出したといっても静かにぐずっているだけなのだが、シアさんたちではどうしようもない、お手上げ状態になってしまったので、こうして母様のお仕事を中断させてまで私を……。恥ずかしい話だが、私をあやしてもらいに来た、という訳だ。

「母様、ごめんなさい……」

「どうして謝るの？　お友達とのお別れは誰だって辛いわ。沢山泣

いて、私に、私たちに甘えなさい。こういう時こそ家族に甘えるものなのよ？」

母様は優しい、とても優しい言葉で私を慰め、撫で続けてくれる。

「お仕事のっ、邪魔、ぐすっ、うう……」

「ふふ、馬鹿ね、もう。優しいのにも限度があるのよ？　この子ったら……。あのね、シラユキ？　こんな時くらい相手のことなんて気にせず、もっともっと我侭言っていいのよ。普段我侭を言い慣れてないからかしら？　まったくもう……。甘えと我侭は違うのだけれどね？　本当に今日くらいは気にせずに甘えなさい。……そうね。カイナ、クレア、それにバレンシアも。悪いのだけど、少し外してもらえるかしら？」

「は、はい！　すみません、気が利かず……。行きましょ、クレア」

「あ、ああ。姫様……」

「そういう意味ではないと思いますが……。分かりました、部屋の外で待機しています。何かありましたらいつでも、すぐにお呼びください」

三人とも丁寧なお辞儀の後、母様の言うとおりに部屋の外へと出て行ってしまった。

執務室には、私と母様の二人だけが残された。ドア一枚、壁一枚挟んだ向こうにはシアさんたち三人が待機しているので、本当に二人きり、という訳でもないのだけれど。

「母様……？」

どうしたんだろう母様。人払いしてまで私に何か、大切な事を話してくれるんだろうか？

「もう、心配そうな顔しないの。メイド達の前、あの子達も家族だけれど、言い難い事だってあるし、甘え辛いでしょ？　ほらほら、もっとギュッて抱きついてきなさい」

「え？　あ、母様……。ありがとう、大好き……。ホントに大好きだよ」

少し強めに、体全体を押し付けるくらいのつもりで母様に抱きつく。

「ゆっくりでなくても、落ち着かなくてもいいわ。今思っていること、悩んでいる事……、言いたくても言えない事とかね？　全部私に言っちゃいなさい。大きな声で、寂しい、悲しい、って泣いたっていいの。ふふふ、私は誰？　あなたのお母様よ？　ね、シラユキ、愛する娘がどんなことをしたって、迷惑に思うなんて事はありえないのよ？」

母様優しすぐる天使か。

あまりに優しすぎる母様の声に、ちょっとした冗談を考える余裕が出て来てしまった。

「寂しいよ、悲しいよ。行っちゃイヤだって、ひどい、ズルい事言っちゃったよ……。ラルフさんも、ナナシさんも、これから幸せになるのに……、幸せになるために行くのに……」

言葉が、言いたい事が纏まらない。でも、私が今思ってることを母様に聞いてもらっちゃおう。聞いてもらってもどうにかなる問題でも無いんだけど、そんな事は考えない、気にしない。

「私、ひどい子だよ、自分の事ばっかり考えてる。お友達と別れたくない、それだけしか……。ごめんね母様、私、悪い子に育っちゃったね……。ホントに我侭なお姫様だよね……」

最近ふとした時、夜寝る前などに、ラルフさんたちはどうしたら残ってくれるのか、と、あまりにもひど過ぎる事ばかり考えてしまう。

本当にお友達の事を思っているのなら、笑って見送ってあげなきゃ駄目なんだよね。それは分かってるんだ……。でも、でもね……!!

「……え？　な、何言ってるのこの子？　ちょっと、さすがにその考えは……、え？　あれ？　シラユキ？　それって当たり前、普通の事よ？　お、お姫様とか、我侭とか関係ないわよ？　予想外すぎるわこれは……」

はぇ？　当たり前？　普通？

私の本音を聞いた母様は、私が思っていたのと間逆の反応を見せている。

悪い事を考えてばかりの私を叱って、その後思いっきり甘やかし

てもらおうと思ってたのに……。どういうことなの？

「う、うーん……。てっきり寂しくて悲しくて泣いてるんだとばかり……。あ、それも多分にあるのよね。まさか、自己嫌悪？　そんな馬鹿な事、あ、ごめんねシラユキ、ひどい事を言ってしまったわ、許してね？　そんな、ええと……、そんなの、本当に当たり前の事よ？　誰だってお友達が遠くへ行ってしまうなんて辛いわ。辛くて、悲しくて、寂しくて……。私だって絶対に引き止めてしまうわよ？　結婚して幸せになる二人っていうのが大きいのかしら？　もう……、本当にこの子は、可愛い子ね」

か、母様でも？

「でも、母様。ラルフさんは今まで離れてた家族とまた一緒に、しかもお嫁さんと暮らせるようになるんだよ？　ナナシさんだって、新しい家族がいっぺんに何人もできちゃうんだよ？　それを止めるなんて、止めようと考えるなんて……。私、悪い子だよ？」

「違うのよシラユキ。もう、本当に何を言ってるのかしらこの子は……。さっきも言ったでしょ？　そんな事誰だって考えちゃうの！　つい言っちゃうの！　ああ、もう！　その二人の家族、リーフサイドに呼び寄せちゃおうかしら……」

「だ、駄目だよ母様！！　何言ってるの！？　ラルフさんの家は宿屋さんなんだよ？　もう！　迷惑掛けちゃ駄目！！」

「ふふふ、ごめんなさいね？　すっかり泣き止んじゃったかしら？　いつもの調子が戻ってきたみたいね。ほら、その調子よ。今度は私の言った事をよく考えてご覧なさい？　考えるのは得意でしょう

？　悩みと考えは違う物なのよ」

「へ？　あ、うん……？」

確かに涙は完全に止まっちゃったかな。ありがとう母様。

それじゃあ、考えてみよう。母様の言った事？

別れを寂しがる、悲しがるのは当たり前。うん、これは当たり前だね。私も寂しい、悲しい。

その悲しい別れを嫌がり、引き止めてしまう事も当たり前？　確かに行かないで欲しいと思うのは当たり前のことだと思う。その人が自分にとって大切であればあるほどその気持ちは大きくなるはずだ。これは寂しさ悲しさにも言える事だね。

でも、その人にだって事情があるからこその別れだ。前世の話になるが、両親の仕事の都合で引っ越す子だっていたよね？　もう思い出せないんだけど。

特に今回、ラルフさんたちは幸せになるために他所の町へ、カルルミラへと行く、行ってしまうのだ。それを止める、止めようだなんて考えるのは悪い事、いけない事だと思うよ！！

結論が出た。有罪！！

「やっぱり私悪い子だよ！　母様、叱って！！」

私って最低のお姫様じゃん！！　これはもう母様に本気で叱ってもらうしかないね！！

「あん、もう、いけない子ね。駄目よ？　悪い事考えちゃ。はい終わり。どう？　これで分かったかしら？」

！！！？

「分かっちゃった！！　は、恥ずかしいいいいい！！！」

「ふふふふ。可愛いわ……、この子可愛すぎるわ……。明日はお祭りにしましょうか」

「またお祭り！？　駄目だよ、もう！！」

「はい。それでは早速手配して参りますね」

「カイナさんいつの間に！？」

「私もいますよ？」

「シアさん！？　あれ？　クレアさんも！？」

「え？　まさか本気で気づかれていなかったのですか？　さすが姫様、なんという集中力。私も見習わなければな……」

「変な方向で褒められた！？」

カイナさんはクレアさんを連れて、引き摺って？　早速明日のお祭りの準備をしに行ってしまった。クレアさんを連れて行ったのは、自分がいない間に私とクレアさんが、自分以上に仲良くなってしまう事を避けるためなんだろうと思う。面白いなカイナさん。

どうやら三人とも私が長考してる間に母様に呼ばれていたようだ。まったく気づかなかったよ……。こ、今回ばかりは私も真剣に考え込んじゃってたからね？　気づかなくてもしょうがないよね？

おっと、話を戻そう。

あの母様の軽い怒り方でやっと気づかされた。

私の考えは確かに悪い事、いけない事、なのだが……。母様が言うように、誰だって思ってしまう、「当たり前の悪い事」なんだと思う。

まあ、本音を言えばまだそこまであっさりと気持ちの切り替えはできていないんだけどね。それは、うん、しょうがないよね。

その当たり前の悪いことを考えてしまった私を叱るのは、あの程度の叱り方にしかならないんだろう。

「でもね、シラユキ。何度も引き止めてしまうのは子供だから許される事よ。それだけは気を付けなさい。あなたのことだから、これは言わなくても分かっている事かしらね」

「ええ、本当に限界が訪れてしまった場合に口に出てしまう、くらいしかありませんね。エネフェア様、姫様は本当にお優しい方です

よ。まず第一に相手の事を考えられてしまっていますね。悪く言うのなら遠慮深い、と言いますか……、？　悪く？」

「あまり悪く聞こえないわねそれは……。悪く言うなら、そうね……、？　ええと……」

「どうしたの母様？」

「ば、バレンシア、お願い」

「も、申し訳ありません！　私も思い付きませんでした……。姫様を悪く言うなどとできる筈がありませんでしたね」

「ええ、本当にそうね。まさか悪く言う言葉が出て来ないなんて思わなかったわ……。ふふふ」

「なにそれこわい。でも、母様から私の悪口なんて聞いたら私、泣いちゃうかもね」

「！？　私の言葉でこの子を泣かせてしまうところだったわ！！ごめんねシラユキ、悪いお母様を許して頂戴！！」

「どうしてそうなるの！？　ふふふ、母様大好きだよー！！」

その１１３（後書き）

今回はイミフな内容だったかもしれません。

その１１４

「うわ、ホントに泣き止んで帰ってきたよ……。エネフェア様凄いなあ……」

「ま、女王様以前にシラユキのお母様だからね。くうう！　でも、ちょっと悔しいな。私たちじゃ全然泣き止ませられなかったもんね」

「ええ、本当に。素晴らしいお方ですよね、エネフェア様は。さすがは姫様のお母様、としか言い様がありません」

「ふふふ。母様を褒められると私も嬉しいな」

「さすがは、姫様の、お母様。姫様が基準です。つまり私は今、姫様を褒めたのですよ？」

「言い方からそんな気はしてたよ……」

すっかりと泣きやんだ私は、シアさんと談話室へと戻って来た。もっと母様に甘えていたかったのだけど、あれ以上は本当にただのお仕事の邪魔でしかなくなってしまうからね。

部屋に入った私の顔を見て、メアさんとフランさんはとても安心した顔をしていた。また余計な心配を掛けちゃったみたいだね。

勿論まだ寂しさは消えたわけじゃない。でも、母様のおかげで心が少しだけ軽くなった気がする。寂しさ悲しさともう一つ、自己嫌悪の気持ちか？　そっちは大分薄れたね。

メイドさんズの言うとおり、さすが私の母様だね。

しかし、いつも甘えさせてもらってる三人には少し申し訳ない気持ちに……

「あ、また変な事考えてるねこの子」

少し黙り込んでしまった私にフランさんが反応する。

「うん。今のはシアじゃなくても分かるよね。まったく、姫は私たちに気を使いすぎだよ」

「それだけ私たちのことを想ってくださっている、と何度も言っているでしょう？　姫様のお気持ちを素直に受け取りなさい。ふむ……、ですが、姫様がお気に病まれる事など何もありませんよ？」

またあっさりバレてるよ……

しかも今回はメアさんフランさんにもだ。二人のメイドスキルが上がってきているという事なのか！？

それは大変だ！　このままでは私の考えを全て見通してしまう恐ろしいメイドさんズが出来上がってしまう！！

「ん？　また変な、ホントに変な事考えてる？」

「ふふ、元気になってよかった。さ、おやつにする？　今日はプリンだよシラユキ」

「プリン！？　……はっ！？　恥ずかしい……」

くそう！　プリンに釣られてしまった！！　でも嬉しい！！

「ふふふ。本当に可愛らしい……。今日は私が用意を。二人は姫様のお側にいてくださいね。姫様、少しだけお待ちくださいね。それでは、失礼します」

「へ？　あ、シア？」

シアさんは二人の返答を待たずお辞儀一つ、部屋の外へと出て行ってしまった。

「うーん、気を使わせちゃったかな。レンも変わったね」

「あー、そんな感じだったね今のは。前までは、こういう時の姫の側から離れるなんて絶対しなかったもんね」

気を使った？　今のシアさんが？

確かにちょっと強引と言うか、不自然だったけど……、どういう意味だろう？

「メアさん、フランさん。気を使ったって、シアさんが？　どういう事なの？」

「あれ？　分かんない？　んーとね、私たち三人に気を使ったんだよ。ね、フラン」

「うんうん。レンは町に行く時とか、よくシラユキと二人で行動してるでしょ？　さっきだってエネフェア様の所へ行ったのもレンだけだったしね。ま、こっちはおまけ、ついでの様なものかな？　本命はシラユキだね」

なるほど。いつも一緒に、二人に比べて一緒にいる時間が長いから、っていう事か。ふむふむ。でも、それはついで？　本命は私？

「おやつの用意なんて十分も掛からないんだけどさ、私たち三人で用意しに行ったら、姫一人になっちゃうからね。そしたら姫、また泣いちゃうんじゃない？」

「う、そうかも……」

さらになるほど。私を一人にさせないためか……

誰か一人残る場合、こんな時はシアさんが残りそうだしね。メアさんかフランさん、どちらかを残すかを考えるより、二人とも残ってもらって自分一人でおやつの用意をしに行けばいい。フランさんの言うように、ついでに近い考えかもしれないけどね。ふーむ、そういう事か……

「最近のレンってさ、あんまり自分が自分が、って前に出て来なくなったよね。ちょっと前まではシラユキのことは私に全部任せろー！　っていう感じだったのに。それが変わった、っていう意味よ」

「え？　そう……かな？　うーん……？」

ああ、ちょっと前に話したアレか。気を許してくれてるっていうアレ。

うんうん、いい事だね。シアさんも私ばっかりじゃなく、家族み

んなともっともっと仲良くしてもらいたいもんね。

「あはは、嬉しそうな顔しちゃって。さっきまでスンスンぐずってたのにね。やっぱりエネフェア様は当たり前だけど、シアもちょっと特別だよねー。うーん、妬けちゃうよ」

メアさんはそう言いながら、私のほっぺをグニグニとしてくる。

シアさんが特別？

確かに特別変な、謎なメイドさんだよね……。そういう意味じゃないって。うにゅにゅ……

「そんな事無いよ？　メアさんも、もちろんフランさんも。カイナさんもクレアさんもみんなみんな、大好きだよ」

ふふふ、ちょっと恥ずかしい事言っちゃったね。

メイドさんズはみんな、みんな大事な家族に決まってる。それに順番なんて付けられないよ、付けるなんて事できないよ！！

「ひ、姫……。可愛い！　嬉しい！　ちょっと抱き締めよう……」

「ああ！　メアずるい！！　私も私も！　くううう、ホントに可愛い事言ってくれちゃってこの子はー！！」

「うわ！　わ！　くすぐったいよ二人とも！！」

メアさんフランさんに取り合うように抱き締め、撫でられ、頬擦りなどなど。揉みくちゃにされてしまう。

し、幸せすぎる……、が。

「ちょ、フランさん！　キスするのはやめて！！」

キスはいいとしても唇はやめて！！

「フランずるい！　私もしよう。んー……」

メアさんにもされてしまう。当然のように唇にだ。

「んー！！　んっ。もう！　恥ずかしいよ二人とも！！　嫌じゃないんだけど、その、恥ずかしいよ！！」

嫌じゃない、全然嫌じゃないのだ。むしろ嬉し、あ、あれ？　やばくね私……

「ううう……。女の人とキスするのがそこまで嫌じゃなくなってるよ……。嬉しいとさえ思っちゃってるよ……。あ！　家族だからだよね！　うんうん！　そうだよね！！」

「あらら、ちょっとやりすぎちゃったかな？　ごめんね姫、ちょっと調子に乗りすぎちゃったみたいだね。大丈夫、私たちのキスは親愛の証だよ？」

「うん、他意は無いって。レンはありそうって言うか、他意しかないと言うか……。気をつけなくちゃね、そのうち舌入れて来るようになるよアレは……」

「舌！？」

シアさんとキス。それは恥ずかしいけど、それ自体はもうあんま

り抵抗は無い。一緒に寝るようになってからお休みのキスとか、おはようのキスとかしてるしね。あ、勿論頬にだよ？

唇にされることもたまにはあるが、恥ずかしいだけで嫌には感じないね。でも、舌を入れられるのはちょっと……。い、いやらしいよ！！　どんな感じなんだろう……

……うん？　ちょっとおかしくないか私？　シアさんとキスするのに全く抵抗を感じなくなってる！？

あ、いや、いいんだよそれでも。シアさんはノーマルだってはっきりと言ってくれたじゃない。私ったらもう、またシアさんを疑うような真似を……。やっぱり悪い子だよね私は。

「今はまだシラユキも子供だから大丈夫だと思うけど……。もうちょっと大きくなったら、生理来たら絶対本気出して襲って来るよアレは。まあ、変な男にちょっかい出されるよりかはレンの方が安心かもね。ルーディン様かレン、シラユキはどっちとHすることになるのかな？　それともウルギス様？　ふふふふふ……」

「なっ！　なんてこと言うのフランさん！！　えええHするだなんて、！？　言っちゃった！　恥ずかしい……」

ううううう、このエロフ、じゃない、エロエロフめ！！

そういえば、最近は私の元気が無いから抑えてたんだねきっと。

ここぞとばかりにからかいに来たか！！

「ルーディン様はユーネ様一筋だし、ウルギス様だってそうだよ？　エネフェア様一筋。そうなるとやっぱり……、シアしかいないんじゃない？　ま、シアならいいかな。ふふ、シアと結婚しちゃう？　姫？」

シアさんと結婚!?　お、恐れていたことを実際に口に出されてしまった!!!

その時、入り口の方から金属の何かが床に落ちる音が聞こえた。
その音に顔を向けると、いつの間に戻って来ていたのか、シアさんが固まっていた。何故か微動だにしない。

うん？　どうやらスプーンを落としちゃったみたいだね。珍しいね、シアさんらしくないミスだ。あ、それで固まっちゃったのかな？　まったく気にしすぎだよシアさんは……

「シアさん？　スプーンならまた洗えばい」

「ついに私の想いにお応えして頂けるのですか!?　式はいつになさいますか!?　ああ、すみません、これだけは言っておかなければ……。必ず幸せにします!!」

「シアさん!?　何言ってるの!?」

「ぷっ、くっ、くくく……。あはははは!!」

「レン、ナイスタイミングだよ!　ぶっ!　あはははは!!」

「笑いすぎだよ二人とも!!　もう!!　ふふふ」

メアさんもフランさんも大爆笑。お腹を抱えて笑い出してしまった。
それにつられてか、私も自然と笑いが出て来てしまったね。ふふ

ふ。

「まったく二人とも、姫様の結婚の話など後五千年は早いですよ」

「五千年!?　私そんなに長生きするの!?」

あ、お爺様とお婆様は三千歳以上だっけ？　私もそれくらい生きるのかもしれないね……

「あはは、それくらいは余裕で生きれるんじゃない？　でも結婚まで五千年は無いよ……」

「まあ、順当に行けば、次に結婚するのははメアなんじゃないの？　んー？　メア、どうなのよ？」

シアさんは、その、アレだけど、フランさんはちゃんと結婚して旦那さんがいるんだよね。

確かに次はメアさんの結婚する番になるのか？　ほうほう？

「ど、どうなのよって、そんな相手いないんだけど……。これが夫持ちの余裕か……」

「メアはルーディン様に初めてを貰って頂きたいと言ってましたよね？　愛人狙いですか」

!!!?

「ちょっ、シア！！　姫の前で……。あ、姫？　違うよー？」

「え、あ、う……、ゆ、許します！！」

「許しちゃ駄目だよ！！　完全に混乱しちゃってるね、姫」

「まあ、冗談半分だよね。でも、メアの胸なら不可能でも無いんじゃない？　って話してただけだから、安心してね」

「うんうん。たまに揉みたそうにしてるよねルーディン様。まだ実際揉まれた事は無いんだけど、食い入るように見つめてくる時あるよね」

「安心できないよそれ！　メアさんも、フランさんも気を付けてね！」

あのおっぱい星人兄様め！！　メアさんに手を出そうものならひどいんだからね！！

後二人ともげろ！！

「姫様？　わ、私には……？」

「え？　し、シアさんは狙われないんじゃないかな……」

シアさんに何かできるのは父様か母様くらいしかいないよ……

「なるほど。私の胸などその程度、と仰りたいのですね。これは思ったよりショックが大きいですね……」

「ち、違うよ？　違うからね！　シアさんも大きいからね！！」

「ふふふ、冗談ですよ、ご安心ください。あ、揉まれますか？」

「揉まないよ！？」

「シラユキって一緒に寝てるとき揉んできてるよ？」

「あ、私も揉まれてる。可愛いよね」

「ええ、幸せですよね……」

「嘘！？　私そんな事してるの！？」

姫様巨乳大好き説の代わりに、姫様おっぱい星人説が……！！

その115

「ルー兄様たちは、今日も？」

「ええ。お昼もあちらで済ませられるそうです。ふふ、またお土産が増えてしまいますね。専用のお部屋を用意致しましょうか？」

そう、今日も、なのだ。

あれから兄様たちは、毎日のようにラルフさんたちに会いに町へと行っている。ラルフさんたちももう長く町から離れるような依頼は受けていないので、いつでも会いに行ける。簡単な雑務依頼はまだ受けているみたいだけどね。エディさんもそれに付き合っている様な感じで、まだ一緒に行動をしているようだ。

何をしに行っているかと言うと……、まあ、お節介を焼きに行っているのかな？

カルルミラまでの旅の移動手段の手配、馬車だね。それと護衛の手配。冒険者に護衛なんて必要ないと言っていたらしいけど、無理矢理国から何人か同行させるらしい。護衛と言うよりも、馬車を貸し出す形になる訳だから着いたらそれを返す人員が要る。だから連れて行けと半ば強引に押し付けたのだそうだ。長旅の最中万が一が起こる事もありえるからね、兄様いい仕事だ。

その護衛の内の一人に、なんとクレアさんのお父さんが入っているらしい。これはもう万が一が起こったとしても全員の安全は確約されたような物だね。

後は到着後の話かな。連絡を取り合う手段の確保などなど。

二人とも冒険者から引退してしまう事になる。そうなると冒険者

ギルドを通じて連絡をとる、というのが難しくなってしまう。その辺りを、こう言ってしまってはなんだけど、王族権限で認めさせる感じかな？

私たちは王族だし、他の町の各ギルドとは簡単に連絡をとることができる。後はそこからラルフさんの家へとその伝言を運んでもらったり、口伝えができない様な内容の話の場合は、精霊通信を使って直接会話ができるようにしてもらう、などなど。一般の町人が与えられる権利を軽く逸脱してしまっている。そこを王族の権限で押し通す、っていう事だね。

でも、幸いラルフさんの実家は宿屋、それなりに古くから続く老舗宿らしい。そのおかげであまり難色は見せられなかったみたいだ。夫婦揃って元Cランクっていうのも大きいのかもしれないね。考えてみたら凄いな二人とも……

連絡は、とろうと思えば割と簡単にとり合えるみたいだね。色々な所に迷惑を掛ける事になるかもなので、あまり頻繁にはできそうも無いけど……、少し、安心したよ。

勿論それだけが理由じゃないと思うけどね。兄様たちだって親友と呼べるお友達と離れてしまうことになるんだ、寂しいに決まってる。

もう大体の事は全部決めてしまった筈だし、それでも毎日のように足を運んでいるというのは、そういう事なんだろうと思う。

あ、シアさんの言うお土産が増えてしまう、というのは……。兄様たちが町へ行く、行ったついでに私にお土産を買う。というのが続いているのだ。

内容は、お菓子に果物に、服にぬいぐるみに本にと様々だ。もう

出発の日まで会いに行けない私に気を使っているのか、それとも寂しがる私を慰めるためなのか。……多分両方かな？　ぬいぐるみを並べておくスペースが無くなってきてしまったのが地味に悩みものだ。でも、専用の部屋を用意するほどじゃないよ……。遊び部屋か！？　こ、子供っぽい！！

お土産は確かに嬉しい、嬉しいんだけど、私としてはできたら二人とも家にいてほしい。でもそんな事は口が裂けても言えないよ。ん？　そういえば口が裂けても言えないって、実際口が裂けてしまったら痛くて喋れないんじゃないか？　唇の端が切れると……

「姫？　姫ー？　こら！　ひーめっ！！」

「う？　あ、何？　メアさん」

また長く考え込んじゃってたみたいだね。メアさんに怒られてしまった。うん？　怒られた？

「え？　私何かしちゃった？」

「おや？　気づいて無い？　めーずらし！　シラユキ、下見てみなさいって。こぼしてるよ」

メアさんの代わりに、フランさんが指を差しながら答えてくれた。

「こぼしてる？　……あ」

フランさんの指差す先、すぐ下へと目を向けると……、ボロボロとパンくずがこぼれ落ちていた。よく見ると膝の上、スカートにまで……

「ご、ごめんなさい！　お行儀悪い……。子供みたいで恥ずかしい！」

「ああ、姫様はそのままで結構ですよ。そういった事は私たちにお任せください。お召し物も食後に着替えてしまいましょうか。少し不快かも知れませんが、今は我慢してくださいね」

パンくずを片付けようとしたのだが、シアさんに止められてしまった。

着替えるほどの汚れじゃ無いと思うんだけどな。これくらいパッパと手で払っちゃえばいいのに。

シアさんが軽く目の前を掃除、服に落ちた方も丁寧に取り除いてくれた。

「ふふふ。久しぶりにボロボロこぼすなんて可愛いところ見せてもらったんだけどね、考え事しながら食べちゃ駄目だよ、シラユキ？　行儀のいい悪いはそこまで気にしなくてもいいんだけどね、やっぱり作ってる私からすると味わって食べてもらいたいのよ」

「う……、ごめんなさいフランさん……」

ううう、食事中に考え込んじゃうなんて……。いつも美味しいお料理を作ってくれてるフランさんに申し訳ない気持ちで一杯になってしまった。

「怒ってないから大丈夫。さあ、さっさと食べちゃおう？　あ、でも、ちゃんとよく噛んで食べること！」

「はーい！　ごめん、じゃない、ありがとうフランさん！」

考え事なんてやめやめ！　フランさんの言うとおりちゃんと味わって食べよう。お行儀も悪いしね。

まったく、パンくずをこぼしちゃうなんて本当に小さな子供みたいだよ。まあ、私は実際小さい子供なんだけど……。あれ？　いいのか？　よくない！　私はお姫様だよ！！

そういえばもっと小さい頃、まだナイフとフォークに慣れていない頃はよくこぼしてたなあ……

「あ、また何か考えてるよ。無理も無いか……。姫、大丈夫？　食欲無い？」

また考え事を始めてしまった私に勘違いしたメアさんが、心配そうに話しかけてくる。

「あ！　違うの違うの！　ごめんねメアさん、大丈夫だよ。今のはちょっと小さい頃のこと思い出しちゃっただけだから」

「姫様は今も小さくて可愛らしいですよ？」

「そういう意味じゃないから！！」

朝食後、何度も別にいいよと言ったのだが、結局着替えさせられ

てしまった。シアさんが言うには、私の着る服はいつも綺麗に清潔に、後、可愛らしく、らしい。ちょっとパンくずが付いたくらいで大袈裟な。

まあ、いい。もう着替え終わった後に何を言っても今さらだ。さてさて、今日は何をしようかな？

「姫様、今日は天気もいいですし、外へ出られませんか？　広場……、いえ、花畑は如何でしょう。コーラスさんもお誘いしてお昼も外で、サンドイッチでいいですね。フランに用意させましょう」

今日読む本を探しに書庫へ行こうとしたら、シアさんに外出を勧められた。勧められたと言うか後半はもう決定されたような口振りだ。

ここ数日は家にこもりきりで読書の毎日だったからね。本に逃げているように見えたのかもしれない。と言うか実際そうなんだよね。本を読んでいる間は忘れられる、考えなくて済むからね。

気晴らし、気分転換のため、かな。気を使われてしまったみたいだ。

フランさんメアさんはお昼を作りに台所へ、シアさんは私の外出用の準備。さっき着替えたばかりなのに……！！

メイドさんズ三人と一緒にお出掛け。ピクニック気分でちょっと楽しいね。

シアさんは必ずと言っていいほどだが、メアさんフランさんも一緒に、というのは久しぶりかもしれない。二人とも嬉しそうだ。勿

論私もね。

さすがはシアさんだね。とてもいい気分転換になってくれた。

「ふふ。よかったわ、今日は泣いてないみたいで。ちょっと前はホントに大騒ぎだったものね……」

お昼も食べ終わり、ゆったりと休憩をしていたときに、コーラスさんが思い出したかのように話し出した。

「大騒ぎ？　ちょっと前って、何かあったの？」

少し前にあった騒ぎ？　なんだろう？　私は特に何も聞かされてないな……。コーラスさんの言い方からすると、私が泣いていた事に何か関係があるのかな？

「え、ええ……。姫様が町から帰られたあの日、あの後のことですよ。何か大きな事件があった訳ではありませんので、ご安心くださいね」

「あ、あー、アレね。姉さんも聞いてたんだ？　ふふ、事件って言えば事件かな。私も人伝えで聞いただけなんだけどね」

「私もそうだね。まあ、姫が気にするような事じゃないよ。私たちには面白い話だったけどねー。ふふふ」

三人ともにこにこニヤニヤ顔で気にするなと言ってくる。

そういえば、それらしい事を父様と兄様からも聞いたような覚え

が……？

気にするなと言われると反対に気になってくると言うもの。丁度いい食後の休憩の話題だし、ちょっと聞いてみようかな。この三人の反応からすると悪い話ではない筈だ。

「教えて欲しいなー。気になるよ、そんな言い方。コーラスさん、教えて教えてー」

「ううっ、久しぶりのシラユキの可愛らしさには勝てないわ！　私が何でも教えてあげちゃいましょう！！　フラニー凄いわね……、毎日この可愛らしさを目の前にしてよく平気でいられるわね。……よいしょっと」

コーラスさんは話しながら私に近寄り、軽く抱き上げて自分の席へ戻り、私を自分の膝の上へと降ろす。

なんという自然な動き……。さすが千年以上生きているコーラスさんだ……！！

そして目前に迫る巨大な双峰。……ごくり。

「まあ、確かに多少は慣れたんだけどね。時折見せる可愛すぎる仕草にはまだまだやられちゃってる毎日よ。もうどうせなら姉さんもメイドになればいいのに。家事、得意でしょ？　シラユキはメイドさん大好きだし、今まで以上に甘えてくれるようになると思うよ。シラユキも姉さんと毎日一緒にいたいよねー？」

こ、コーラスさんがメイドさんに……？　ば、ば、爆乳メイドさんの誕生であるか……

全力でコクコクと頷く私。

「め、メイドさん大好きなんだこの子。お姫様の趣味としていいのそれは……。うーん、でも……、ごめんねシラユキ。私も毎日遊んであげたいんだけど、この仕事は他の誰にも任せる気は無いのよ。呼んでくれればいつでも遊びに行ってあげるから、ね？　勿論毎日遊びに来てくれたっていいのよ」

うーむ、残念！　でも、コーラスさんの言うとおりだ。会いたくなったら会いに行けばいい話だからね。

「うん！　毎日、は来ないと思うけどね。ふふふ、コーラスさんにこうされるのって久しぶりで、なんか嬉しいなー」

「かかか可愛いいいい、可愛すぎるううう……。私も相手さえいればこんな可愛い子を……、？　こんな可愛い子は無理！！」

コーラスさんに全力で抱き締められてしまう。

苦しい！　力も意外に強い！！　な、何これ！？　む、胸に溺れる！！！

「姫様？　こ、コーラスさん、もう少し力を緩めて差し上げてください。ああ、でも何か幸せそうなお顔をされていますね」

シアさんの言葉に即座に抱き締める力を緩めるコーラスさん。

「く、苦しかった……。胸に潰されそうになるなんて初めての経験……、でもないや」

母様、フランさん、メアさん。この三人に日頃抱き締められる事に慣れていなかったら今のは危なかった！！

「あら？　ちょっと強すぎちゃった？　ごめんね。しかしね、ホントにこの子、ルーディンの妹よね。女の子なのにおっぱい好きとか……」

「ルー兄様と一緒にしないで！！　でも、うん、嫌いじゃないかな……」

むしろ好きとも、大好きとも……。あれ？　母様以外の大きな胸は敵じゃなかったか！？　だ、駄目だ！！　このままでは姫様巨乳大好き説が再浮上してきてしまう！！！

「夜も寝てる間無意識に揉んでくるしねー。あれくすぐったいけど、なんか幸せな気分になるよね。姫、おっぱい好きは悪い事じゃないよ？　姫だから許されるっていうのもあるけどね」

「ふふふ。私のも揉、え？　メアリーが一緒に寝てるの？　はー、意外だわ。てっきりバレンシアと一緒に寝てるんだとばかり」

「ああ、違うよコーラスさん、毎日日替わり。姫一人で寝れなくなっちゃってさ。昨日は私、今日はフラン、明日はシアだね」

「え？　は？　今まで一人で寝てたの！？　よく皆そんな事許してたわね……。私だったらお風呂だって寝るときだって絶対に放さないのに」

確かに言い出したときは反対されたね。部屋の外にメイドさんズの誰かを待機させる、っていう条件で許されたんだけど。

当時はお姫様だから当たり前の事なのかなー、なんて思ってたっけ？　今思うと普通にメイドさんズに迷惑掛けてただけなんじゃな

いかと思ってしまう。

「私もシラユキと一緒に寝てみたいな……。ねえ、フラニー？　今日はあなたの番なのよね？　代わりなさい」

「命令形！？　まあ、いいんだけど。姉さんもホントシラユキにメロメロだよね。見ておかしいったらないわ」

ああ、なんか姉妹の会話っぽくていいなこれ。

年はもの凄く離れてるけど、二人ともとっても仲良しに見えるね。

うんうん、いい事だ。

「今日はコーラスさん泊まりに来るの？　嬉しいな。うん！　一緒に寝ようね！」

「あああああああ可愛い！！！　家の子にしたい！！」

「あはは。コーラスさんが私の家族になっちゃえばいいんだよ。メイドさんしながらお花のお世話も出来るんじゃないかな？　ふふ、忙しくなっちゃうね」

「うわ、悩むわこれは……！！　うーん……、でも、ルーディンに日常的に揉まれるのは……、うーん……、でもシラユキを毎日可愛がれる……」

コーラスさんはうんうん唸りながら深く悩み始めてしまった。

その問題があったね……

兄様のことだから、目の前にコーラスさんがいたら絶対揉みに行くよ！　そうなると姉様も不機嫌になっちゃう？　くう、それは駄

目だ！！

「とりあえず保留！　今日はお風呂も一緒に入ろっか。特別に直に好きなだけ揉ませてあげちゃおうかな。あ、吸う？」

「吸わないよ！！　もう！　赤ん坊扱いはやめてよ。　でもお風呂に浮かぶコーラスさんの胸を見るのは楽しみかも」

「やっぱりオヤジくさい趣味してるわねこの子……。ふふ、さすがにおっぱい吸う年じゃないかー、ちょっと残念ね」

「寝てるときに口元に寄せれば吸うよ、この子」

「あらそう？　それじゃ今夜早速やってみようかしら。楽しみだわー」

「あ、フランもやってみた事あるんだ？　可愛いよねー」

「ええ！？　ふふふ二人ともなんて事してるのさせてるの！！？　コーラスさんもやめてね？　……はっ！？　シアさんは！？」

「いえいえ何を仰りますやら私がそんな不埒ないやらしい行為を姫様にするとでもお思いなのですか悲しいですねそれは」

「分かりやすい！」

結局何が大騒ぎで面白かったのかは聞きそびれてしまった。でも、もう全く気にならない。

そんな事より私がそんな、赤ん坊のような行動をしていたことが地味に、いや、本気でショックだ……

その116

コーラスさんはまだお仕事が残っているらしく一緒に帰ることはできなかったが、夕飯時にはお邪魔するわー、と言っていた。楽しみだね。

夕ご飯も食べに来るんだ。フランさんの料理の腕は知っていて当たり前だし、食べたくなったかな？　毎日食べに来てくれてもいいのにね。

森のみんなは全員家族、コーラスさんは特に仲が良い。フランさんのお姉さんなんだし、もっともっと遊びに来て欲しいな。

ふふふ。今日はコーラスさんと一緒にお風呂、一緒に寝れる。どっちも初めての経験なので最高に楽しみで、嬉しい。

湯船に浮かぶあの二つの巨大な塊はいったいどれ程の見ものに……、？　二つの塊？　何か聞き覚えが……？　まあいいや。

しかし、寝てるときに変な事をされないといいんだけど……。うう……、まだ恥ずかしいよ、私って本当に子供だなー。でも赤ん坊扱いはやめてほしい！！

「ふふ、姫嬉しそう。そんなにコーラスさんの胸に触るのが楽しみ？」

「違うよ！？　でも楽しみじゃないと言えば嘘になるかも。ふふふ」

あの胸は同性だって触りたくなるよ！　……？　メアさんフランさんには分からないか……。もげろ！

フランさんは既に台所へ行ってしまっている。多分お姉さんが来

るから張り切ってるんだと思う。本当に仲の良い姉妹でいいね。

「コーラスさんほどのサイズともなると、もげろとは言い辛いですね。もう国宝級と言ってもいいでしょう。ああ、メアはもげるといいですよ」

「何で！？　怖いなあ、もう。シアだって小さくないじゃん。普通か普通よりちょっと大きめなんじゃない？」

「シアさんは細いから大きく見えるよねー……。はっ！？　大きいよ？　シアさん大きいよ！！」

「き、傷つきました……、しくしく」

またしくしく口で言ってるよ……

「シアさんはホントに大きいと思うよ？　それで美人だし、強いし、何でもできちゃうし……。なんでメイドさんなんだろう……？　じゃなくて！　そんな凄い素敵なメイドさんが私に付いてくれてるなんて、本当に凄く嬉しいんだよ？」

元Sランクの冒険者で、現在私、王族お付きのメイドさん。どういう経緯でそうなったのか気になるけど、今は聞かないでおこう。きっと私が成人したら楽しそうに長い説明を加えつつ話してくれる筈だ。

「姫様……。あ、ありがとうございます……」

私の言葉に感動したのか、深々と頭を下げてお礼を言うシアさん。

「わ！　そんな大袈裟な感謝しないで！　もう、まったくシアさんは、何でも大袈裟にしちゃうんだから」

「ふふ、すみません。姫様の今のお言葉が本当に嬉しくて、感極まってしまいました。一生心に刻むことにします」

本当に大袈裟すぎるよ！！

「あー、シアずるーい。ねえねえ姫、私には？」

シアさんをベタ褒めしすぎてしまったようだ。メアさんが私にもとせがんで来る。

「ふふふ、メアさんも大好きだよー。いつも一緒に遊んでくれるし、姉様みたいだよね」

「え？　あ……、こ、これは照れちゃうね。お姉ちゃんみたいに思ってくれてるんだ……。シアじゃないけど、ちょっと感動しちゃった」

感動されてしまった！　こっちも照れちゃうよ……

「私って、本当に我侭だね。こんな素敵な家族がいつも一緒にいるのに、いてくれてるのに、寂しいなんて言っちゃって」

「姫様、それは違いますよ。ええ、絶対に我侭などではありません。友人と離れる事になってしまうのは誰だって寂しくなるものです。その空いた心の隙間を埋めることは、逆に家族には難しいことだと

思いますよ。私たちにできる事と言いましたら……、そうですね、今まで以上に姫様を甘やかし、可愛がり、からかい、寂しいなどと思う暇さえ与えないようにするくらいでしょうか？　姫様にして頂くことは、その寂しさに慣れる事でも、ましてや忘れる事でもありません。今まで以上に私共に甘えて頂ければそれでいいのです。寂しいのでしたら寂しいと、悲しいのでしたら悲しいと、どうか仰ってください。私たちにできる事など高が知れていますが、全力を尽くし姫様の寂しさ悲しさを薄めて差し上げますよ。……姫様！？」

「え？　シアさんどうしたの？　あれ？　私泣いてる？」

無意識に、いつの間にかポロポロと涙が零れていた。

「姫！？　ちょ、シア言い過ぎ……じゃないよね今のは」

ああ、どうやら……

「ももも申し訳ありません！！　一メイドの分際で偉そうな事を申しました！！　ああ、私はなんという事を……」

自分のお説教で私を泣かせてしまったのかと勘違いしたシアさんが盛大に謝り、自分を責め始める。

「わあ！　違う違うよ！！　ふふ、ふふふ。恥ずかしいけど、感動しちゃったみたい……」

どうやら、さっきのシアさんメアさんの様に、シアさんの言葉に感動してしまったみたいだ。

無意識に涙が流れてしまうくらいの感動か。ふふ、嬉し恥ずかしだね。

「感動、ですか？　私などの言葉に……。それこそ感動してしまいます」

なにその感動合戦。

「やっぱシアは凄いね、五百年近く生きてるだけあるよ。私も考えてる事は同じなんだけどさ、それだけはっきりと言葉にはできないもん。姫が寂しかったら可愛がろう、くらいにしかね。うーん、ちょっと悔しい」

「ただの年の功ですよ。ああ、さすがに焦りました……。姫様、落ち着かれました？」

私の涙を優しく拭いながら、少し心配そうに聞いてくるシアさん。

あはは……。最近泣いてばっかりだね私は。でも、これはいいよね？

「うん、ありがとうシアさん。ふふふ、嬉しいなー」

「うわ、姫超ご機嫌。さっすがシアだね！　あはは」

「やめてください、もう……」

シアさんも照れ照れだ。ちょっと赤くなってるね、珍しい！　いいものを見た！！

「はーい、シラユキおやつよー、って、何？　何か楽しそうね三人

とも。レンはなんかちょっと赤いし……。私のいない間に盛り上がらないでよー。ほーら、シラユキ？　何があったか教えなさーい！」

「うんうん！　えとね、シアさんがね」

「姫様！？　恥ずかしいです……」

「あはは。それじゃ私が……」

「メア！！　……もぎとりますよ？」

「シア怖い！」「レン怖い！！」「シアさんこわーい！」

それからしばらく読書をしながらの雑談が続き、仕事を終えたコーラスさんが家にやって来た。

ご飯の時間までコーラスさんを加えての雑談がさらに続く。雑談と言ってもとても楽しい時間だった。あっという間に過ぎて行った気がするよ。

コーラスさんを連れてダイニングへ。王族の食事の場という仰々しい部屋ではなく、普通に台所近くにある食事専用の小さな部屋だ。小さくはないか？　それなりに広い部屋だね。

席には既にみんな座っていた。兄様と姉様、帰ってきてたんだね。いつもなら帰ってきてすぐ私の顔を見に来るのに……。あ、今日はコーラスさんがいたから邪魔しないでくれたのかな？　でも兄様なら、コーラスさんがいたら尚更顔を出しにくると思うんだけど。

おっと……、こんな所、こんなタイミングで考える事じゃなかったね。さっさと席に着こう。

いつもより少しだけ賑やかなテーブル。いつもより少しだけ豪勢な料理。やはりフランさんは大張り切りだったみたいだ。まあ、いつも豪勢と言えば豪勢なんだけどね。

楽しい食事、楽しい時間はあっという間に過ぎていくもの。

でも、少しだけ違和感を感じる。その違和感の正体は分かっている。兄様と姉様の口数が少ない、気がする。

二人ともちょっとした所で会話が途切れ、上の空になり、名前を呼ばれてまた話に参加する、といった感じだ。一体どうしちゃったんだろう？

「ルー、ユーネ、いつまでそうしているつもりだ、何か言いたいことがあるんだろう？」

みんな食べ終わり、一段落したところで、父様が兄様と姉様を促す。

言いたいことがあったのか。父様はなんで分かったんだろう？凄いな。

「コーラスの前じゃ言い難いかしら？　それとも……、私が代わりに言う？」

母様が？　あ、二人とも知ってるのか、なるほどね。コーラスさんの前では言い出しにくい事なのかな？

「うん？　あー、席外しましょうか。ユーならともかく、ルーディンがそこまで悩むなんて珍しいわね」

「いや、いい、コーラスもいてくれ。ユーネ、俺が言う、お前は座ってな」

「お兄様……。ごめんなさい、お願い……。私には無理、言えない……」

さっきまで笑って話をしてた姉様が泣きそうになっている。一体どんなお話が……？

兄様は席を立ち、私の座っている席の近くへ……？　え!?　私!?

ああ!!　ラルフさんたちの出発の日取りがきまったんだね、きっと……

「あー、その、何て言ったらいいか……。ああ、シラユキ、……土産だ」

そう言うと兄様は、私に封筒を二通手渡す。

むむ、違ったか。お土産？　なんだろう……。うん？　お手紙？

誰から？　これが今日のお土産？

……誰からの、お土産……？

「嘘……、嘘だよね、兄様？」

二通の手紙、差出人は、二人。

「何をどうやったらそれだけで気づくんだよ……」

二人、今日兄様たちが会いに行ったのは、ラルフさんとナナシさんの二人。

「ごめんね、シラユキ……、ごめんねえ……」

ラルフさんとナナシさんが、態々手紙を書く理由。

「くそっ！　最後の最後まで厄介事残して行きやがってあいつらは……」

何か私に言っておく事があるのなら、最後のお別れの日に言えばいいだけのこと。

「本当のこと、なんだ、ね……」

それはつまり、直接私に言えなくなったんだ。

もう、ラルフさんとナナシさんは、リーフサイドに、いないんだ……！！

「ごめんね……！！　ごめんねシラユキ！　ラルフとナナシ、もう、行っちゃった、の……。う、うあ、あああああ……」

「泣くなよユーネ……。シラユキ、最初からそのつもりだったんだよ、黙ってて悪かったな。あー、悪かったの一言で済ませれることじゃないんだが……」

「いつ？」

「あ？　ああ、今朝だ。日が出てすぐにな」

「今朝？　今日、行っちゃったんだ……」

「どうした？　泣いていいんだぞ？　俺たちを責めたっていいんだ、いや、責めてくれよ」

「え？　あ、そうだね。なんでだろう？　涙が出てこないや。驚きすぎちゃったのかもね……。全然、頭が回らないや」

「大丈夫？　ウル、シラユキをお願い。ユーネ、泣き止んで？　もう、シラユキが泣いてないのに、お姉ちゃんのあなたが泣いてどうするの」

「お母様ぁ……、ごめんなさい……。ごめんなさいシラユキ……」

「シラユキ、シラユキ？　ふむ……、これは大泣きされるより堪えるな……。ルー、お前も辛かっただろう？」

「いや、辛いっちゃ辛いが、泣くほどじゃないよ。俺は時間さえあれば会いに行けるし。それより、シラユキは大丈夫なのか……？」

「姫様？　ど、どうしましょう？　まさかこんな反応をされるとは……。いえ、まさか何も反応を返されないとは……」

「姫？　泣けない？　どうしましょうって、シアが考え付かない事が私たちに思いつける訳無いよ」

「うーん、食べてすぐだけど、お風呂入る？　あ、姉さん、今日シラユキと一緒に入るんだったね。お願いね」

「ええ！？　な、なんてタイミングでお呼ばれしちゃったのかしら私は……。ま、これも年長者の仕事かな、任せなさい」

「さ、さすがはコーラス様、頼りになります。ああ、こういった時、剣のみに生きてきた自分を恨んでしまうな」

「誰だって無理よこれは……。でも、姫様のお力になれない自分の能力の低さは確かに恨めしいわ……」

「あ、そうだ、お手紙読まなきゃ」

「姫様！？　あ、あまり無理をなさらずに……」

「思いっきり泣いて、落ち着いてからでもいいのよ？　なにも今すぐに読まなくたって……」

母様は心配そうにしてるけど、今の私、なぜか落ち着いてるのよ。落ち着いていると言うか、ええと、何て言えばいいんだろうね？　落ち着きすぎて、心が凍ってしまったような感じだ。

まずは白い封筒。こっちは多分ラルフさんからだね。もう片方はピンクだし、こっちは絶対にナナシさんだ。

特に糊付もされていないので、簡単に取り出して、って一枚だけか……。ラルフさんらしいや。

「ええと……、うん？　……え？」

は？　え？　ええ！？

急いでナナシさんの封筒も開けて、中身を取り出す。こちらも一枚だけだ。

早速目を通す、と……

「あ、あはは……、ふふっ」

「お、おい？　何でそこで笑うんだよ。一体なんて……、シラユキ！？」

「姫様！？　ああ、やはり泣かれてしまいましたか……。エネフェア様」

「もう……、だから言ったのに。いいわ、そのまま暫く泣かせてあ

げて頂戴」

「シラユキ？　ううう、私お姉ちゃんなのに情け無いわ……」

「ユーもまだまだ子供なんだし、気にする事無いわよ。うーん？何か複雑な泣き方ねこれは。ふふ、その冒険者二人、消しちゃおうとも考えたけど、やめておいた方がいいみたいね」

「姉さん怖い！　冗談に聞こえないから困るよホントに……」

「うん、ある意味シアより怖いよね……」

「ははは。コーラスは怖いぞ？　あまり怒らせんようにな」

「う、ウルギス様まで！　ちょっとカイナ、コップに水一杯貰えるかしら？」

「え？　何をするおつもりです？」

「やめろカイナ！！　コーラス様に水を渡すんじゃない！！！」

ああ！　もう！　分かった！　分かったよ！！　頑張るよ！！！

うあー、凄い量の涙だ。ハンカチじゃなくてタオルが欲しいね。

寂しい！　悲しい！　でも、何でだろう？　嬉しい！！！

「なんて書いてあったんだ？　ソレ」

あの状態の私をここまで泣かせる文章に興味を持ったのか、兄様が聞いてくる。

でも駄目だ、私は現在進行形で大泣きをしているので言葉にできない。

ああ、言葉にできないなら見せればいいね。大きな文字だし、これで読めるだろう。

私は手紙を二枚とも手に持ち、みんなに見えるように掲げる。

「ん？　な……、お、おいおい！　やってくれたなあいつら……。ははははっ」

「ふふ。これはしょうがないわよね、お母様？」

「あらら、ホントにやってくれたわね。うーん、その内考えましょ？　ふふふ」

「まあ、やろうと思えばどうとでもなる。安心していいぞシラユキ」

「なるほど。これは５０点を取らざるを得ませんね。ふふふ……。

腕が鳴ります」

「５０点？　冒険者らしいねこれは。私もその二人に会ってみたかったな」

「ホントホント、冒険者らしい勝手なセリフよね。不思議と悪い気はしないわ」

「切り刻みに行きたい……」

「吹き飛ばしてやりに行きたい……」

「貴女達も充分怖いわよ……」

その手紙には、便箋の真ん中に、大きく、でかでかと、こう、一文だけ書かれていた。

『またな　お姫様　約束だ』

『またね　お姫様　約束だよ』

その１１６（後書き）

十二歳以上編終了です！！

いい区切り、という訳ではありませんが、毎日更新は多分今日で終わることになると思います。
なるべく長く日数を空けない様にしたいとは思っているのですが、難しいかもしれません。

その１１７（前書き）

今回から二十歳以上編が始まります。
十八、九歳の頃の話も多少入ってくるとは思いますが、大体は二十歳以上の頃の出来事がメインになります。

その117

「では……、これより第二次新規メイド採用試験を始めます。試験官は私と姫様が担当、フランとメアリーはただの外野、見学です、気にしないように。まあ、意見は貰う事になるとは思いますが。……何か質問は？」

「第二次!?　あれ？　私ってまだメイドとして認められてなかったんですか？　あ、あれだけ苦労させられてやっと一次試験突破しただけとか……。さすがは王族のメイド、厳しいです」

うんうん。もの凄く苦労させちゃったよね。まさに疲労困憊っていう言葉がよく似合ってたよ……

「仮採用の様なものですね。料理もできない、姫様の遊び相手しか務まらない見習いの分際でどの口が言いますか」

「まだ掃除しかできないからねー、それもしょうがないかな？　私もそんなに得意って訳じゃないけどさ、やっぱりメイドとして料理はある程度できないと駄目だよ。それ以前に、四百近く生きてるのになんで料理くらい覚えようと思わなかったの？」

メアさんも普通に料理得意だと思うんだけどな……。あ、身近にシアさんとクレアさん、それに料理担当のフランさんがいるからか。この三人と比べちゃ駄目だよ……

「今まではリズが作ってくれてたんだよね……。リズを弟子にするまでは、切って塩かけて焼くだけだったかな。シア姉様と別れるまでは毎日手作りの料理食べさせてもらえてたなあ……」

「はいそこ余計な事は言わない！　私の過去に触れたら叩き出すと何度も言っているでしょう……」

ほうほう？　やっぱりシアさんは可愛い女の子は甘やかしちゃってましたか。

それにしても切って塩かけるだけとか……、見た目と違ってワイルドすぎるよ。

「料理はいいよ、教えるのも楽しいし。思いっきり年上なんだけど、なんか妹か娘ができたみたいで嬉しかったりするのよね」

「どこへ行っても子供扱い……。まあ、それも慣れたけどね。それで、シア姉様、試験の内容は何です？」

「何にしましょうか、姫様」

「慣れちゃ駄目だよキャロルさ、私が決めるの！？」

さて、唐突に始まったキャロルさんのメイド採用試験。第二次という事らしいけど、この分だと第三次第四次と続きそうだね。多分シアさんがキャロルさんで遊びたいだけなんだろうと思う。

しかし、メイドさんの採用試験か。普通はどんな試験があるんだろう？

メイドさんと言えば、料理とお掃除か？　クレアさんは主に護衛

なんだけど、あ、シアさんも私の護衛だった……。また完全に忘れてたね。

まあ、いいや。料理にお掃除、後はええと……、うん？　もう無いんじゃないか？

私の専用メイドさんになるのなら、遊び相手に読書のお相手、夜一緒に寝る、くらいかな。お風呂もたまには一緒に入ってくれると嬉しいね。

「うーん……。やっぱり料理？　一応フランさんに教わってるんだよね？　それじゃ、今日のおやつはキャロルさんに何か作ってもらっちゃおうかな」

「ししシラユキ様のおやつを私が！？　無理ですよそんな！　もしお腹を壊されでもしてしまったら……、シア姉様に殺されてしまいます！！」

私の提案を大慌てで断るキャロルさん。

むう、料理の作れない私には分からないんだけど、ちょっと失敗したくらいでお腹を壊すなんて事は無いと思うんだけどな。

「では不採用という事で。お帰りはあちらです」

「早い！！　仮採用まで取り消しですか！？」

シアさんが部屋の入り口へと手を向けて案内する。なんて冷たい人なんだ……！！

うーん……、ツッコミをしなくていいのはホントに楽だ……

「ふふふ。まあ、冗談はそれくらいにして、おやつ作りを手伝ってもらっちゃおうかな。んー、何にしようか……。シラユキは何か食べたい物ある？」

「急に言われても……。フランさんが作ってくれるのは何でも美味しいしなー。プリンにアップルパイ、苺を使った何か……。おまかせで！」

「それが一番困るから聞いたのに……。と言うか、プリンとアップルパイは本当に飽きないねこの子」

「特にプリンなら十年くらい続いても飽きないんじゃない？　何年経っても子供のままだよね姫は」

フランさんには呆れられて、メアさんには撫でられて子供扱いされてしまった。

ふーんだ！　まだまだ子供だもーん！　……恥ずかしいなこれ！！

「ではオレンジのケーキで」

「初心者にケーキ作り！？　いや、私が付いてるから大丈夫なんだけどね……。それじゃ、それにしようか。シアもオレンジは飽きないね」

ふふふ。好物っていうのはいくら食べても飽きないものなんだよフランさん。普通は三日も続けば飽きる、とかよく言われるけどね。プリンとアップルパイを飽きる？　ありえません！！

「ケーキか……、作れるようになれるといいなあ……。料理できる

人ってホント尊敬しちゃうよ。フラン先生、お願いします！」

「シアの好きな物だからって張り切ってるねキャロル。ふふ、頑張ってシアにいい所見せなきゃねー」

なるほどね。好きな人に美味しい手料理を食べてもらいたいよね。それで、美味しいって言われたいよね！！

「私も料理できるようになりたいなー。フランさん、私にも教えてー？」

「駄目です！！　料理には怪我は付き物。絶対にいけません！！」

「まだちょっとシラユキには早いかなー。ごめんね？」

「うんうん。成人したらにしよう？　指先の怪我って本当に痛いんだよ？　姫」

「そうですよシラユキ様。シラユキ様には怪我など絶対にしてほしくないです。私も色々と作れるようになって見せますから、シラユキ様にお教えできるくらいになるまで……、百年ほどお待ちください」

「百年修行するんだ？　って長いよ！　相変わらずみんな過保護すぎる！！」

その１１７（後書き）

今回はちょっと短めです。

毎日更新はできないんじゃなかったか、ですか？　ナンノコトヤラ。

その118

「それで、今回はいつまで滞在する予定なの？　随分と大変だったみたいだし、暫くゆっくりしていくんでしょ？　私かフランか、他の誰かをお世話係に付けようか」

「お、お世話係とか大袈裟なもの要らないよ。ああ、うん、そうだね、さすがに疲れたよ。肉体的にも、精神的にもさ……。ああ、主に精神的かな……。まだ魔物の大群を相手してた方が楽だったよ、マジで。今はゆったりとだらけたい気分」

「あらら、お疲れさま。私たちもついて行きたかったんだけどねー。毎日もう心配で心配で……。まあ、レンが一緒だしそこまで心配はしてなかったんだけどね、やっぱりちょっとは不安だったのよ。不安より寂しさが強かったかな？　うーん、シラユキー！　もうちょっと抱かせてー！　この子のいない生活はもう考えられない！！」

「あはは。ごめんねフランさん、メアさんもね。でも、寂しがってくれてちょっと嬉しく思っちゃう。ふふふ、私も三人がいない生活は考えられないし、耐えられないかもね」

「あああ！　姫可愛い！！　ほんの少し見ない間にまた可愛くなったんじゃない？　キラキラして見える……。あ、フラン、そろそろ代わってよー！」

「ええー！？　むう、しょうがないか。また後で代わってねメア。今日はお風呂も一緒に入ろうねー、シラユキー」

「うん！　メアさんと三人で入ろうか？　あ、キャロルさんも一緒

に入る？」

「私も一緒にですか！？　あ、私はその、できたらシア姉様と一緒に……」

「一人で入りなさい。子供ですか、まったく……。ああ、勘違いしているようですから言っておきますが、客人扱いはしませんよ。どうせ暫くやる事もやりたい事も無いでしょう？　私たちがメイド修行をつけてあげましょう」

「あれ！？　私の休暇はどこへ！？」

これが数日前、私たちがカルルミラから帰ってきたときの出来事だ。

キャロルさんが家にいるのは、カルルミラとの往復間の護衛にキャロルさんとリズさんの二人が付いてくれたからだね。

旅のメンバーは兄様と姉様、それに私とシアさんの四人。シアさんは私たち三人のお世話に専念するという事でどうしても護衛が必要になってしまい、急遽この二人が呼び出されることになったのだ。久しぶりに二人に会えて凄く嬉しかったね。

リズさんは今回の護衛のお仕事を最終課題として、見事最後まで大きな問題もなくやり通し……。ん？　問題なく……？　ま、まあいいや。そして、ついに独り立ちすることになってしまった。別れ際は泣いちゃって寂しそうだったね……。リーフサイドで少しだけ休み、その後他の町へと行ってしまうらしい。

キャロルさんはこれで当面の目的が無くなってしまったようで、少し気が抜けてしまったみたいだ。そこをシアさんに再度捕まり、私がお願いして、暫くの間家に滞在してゆっくりと旅の疲れを癒し

てもらおうと思ったのだけど、何故かシアさんがメイドさんの修行をさせる事に決めてしまった。

ちなみにSランクにはまだ上がっていなかった。Sランクは本当に化け物と呼ばれる程の強さが必要らしく、Aランク最上位と言われているキャロルさんでもまだその域には届かないらしい。

そういえばシアさんは元Sランクだったね。……怖いよシアさん!!

話を今に戻そう。

長旅の護衛で疲れているキャロルさんの休暇だが、実際メイドさん修行がいい休暇になっているみたいだった。

いくらAランク最上位でも冒険者。命の危険は常に身近にある生活だった筈だ。でも今はそれを忘れて女の子らしい生活を……。キャロルさんもう女の子って年じゃなかった……。ま、まあ、キャロルさん可愛いからいいよね！　見た目は本当に可愛らしい女の子だしね。うんうん。女の子らしい生活が逆にいい息抜きになっているんだと思う。

姉様の趣味のフリフリのミニスカメイド服と、シアさんお手製のネコミミ付きメイドカチューシャがとても似合っている素晴らしいメイドさんだ。

このまま冒険者を辞めて、私の家のメイドさんになってほしい。兄様のお付になってもらって、巨乳を遠ざけてもらうんだ!!

「という訳で、キャロルさんメイド化計画を……、？　始まってる！？」

「何が、という訳で、なのかは分かりませんが……、キャロをメイドにですか？　始まっているというのは、ああ、私のせいですね。ただあの子にも少しは女の子らしい事をさせてみようと思っただけでありまして……。実際キャロはメイドには向いていないと思いますよ。割と大雑把な性格をしていますし、ちゃんとしているように見えるのも姫様と私の前だけかと。きっと今頃フランを脅してケーキを作らせ、さも自分が作った様な顔をして持ってきますよ」

ああ、シアさんのお弟子さんだからそれくらいやりそうだよねー、って違うよ！？

「前半でいい人だと思わせて後半で一気にひどくなった！！　うすうすそうなんじゃないかなと思ってたんだけど、シアさんってキャロルさんのこと嫌いなの……？」

言葉にトゲと言うか、扱いがぞんざいと言うか……やっぱり見た目が可愛い女の子でも、中身が大人だともう興味の対象外になってしまうんだろうか？　それはちょっと、悲しいな。

「違うよ姫。シアはあれで可愛がってるんだよ？　シアがからかうのは親愛の証だよね。シラユキにだってそうじゃない？」

「あ、そっか。ふふふ、なるほ」

「えっ？　あ、失礼……」

「えっ？　シアさん？」

なにその心底意外です、と言った感じの表情は。

「えっ、じゃないよシア！　折角入れたフォローをあっさり潰さないでよ……」

「ふふふ、冗談ですよ。キャロは独り立ちした後も私の可愛い弟子、それに変わりはありません。しかし、かと言って甘やかすというのはまた別問題。百年以上心配させてしまったので無理も無いとは思いますが……、やはり一人前の冒険者、いえ、一人前の大人の女性としてしっかりとしてもらいたいのですよ」

シアさんとしては珍しく、はっきりと自分の考えを教えてくれた。とても優しい声だ。

ああ……、やっぱりシアさんは優しいな、凄いな、カッコいいなー。

キャロルさんの事は可愛いと思ってる。でも、可愛い弟子だからこそ厳しく当たっているんだね。将来好きな男の人だってできるかもしれないし、その時料理の一つもできれば……。うんうん。

まあ、当のキャロルさんは男の人に全く興味ないんだけどね……

「キャロルさんあんなに可愛いのになんで女の人が好きなんだろ？もったいないよねー。……シアさんのせい？」

ちょっと考えたらシアさんのせいとしか思えなかった。

シアさんに出会ったのは私くらいの子供の頃だったっけ？　それからずっと大人になるまで一緒に旅をしてたんだよね、多分。こん

な素敵な女性が近くにいたら男の人になんて目が向かなくなっちゃうよね。

……ん？　今何か引っ掛かりが……？

「う……、そうなのかもしれません。あの子が本当に子供の頃から、ええと、百四十くらいまで行動を共にしていましたからね。私も甘やかしが過ぎてしまっていたのでしょうね。はあ……」

シアさんは疲れたように溜息をつく。

ふふふ。キャロルさんには何も話すなって言っておいて、自分でもついつい過去の事を口に出しちゃってるね。突っ込むとやめちゃいそうだから黙って聞くけど……。ふふふ。

キャロルさんと一緒にいるのはシアさんだってやっぱり嬉しいんだよね、可愛いお弟子さんなんだしさ。私にするみたいに全力で甘やかしてたのかな？

「シアって冒険者の頃はそんな優しい性格じゃなかったんだよね？　ん？　今でも優しいのは姫だけにか……。それでも好きになっちゃうって、相当可愛がってたんじゃない？　あ、Hもしてたんだよね。初めてを貰ってあげたんだっけ？　あ……」

H!?　また聞いてて恥ずかしい話題を！　は、初めてを貰ってあげたっていうのは初耳だね。女の人同士でどうやって……？　！？　か、考えちゃ駄目だ!!　あああ、いやらしい考えが浮かんでくるううう……

「メア……、姫様の前では、？　姫様？　ああ、真っ赤になってしまわれて……、なんて可愛らしい……」

「あはは。ホントにこういう話題には慣れないよね姫は。姫だって後三十年もしたら経験する事になるんだよ？　……シアと」

な、慣れないよこれは、これだけは……！　え？　三十年後くらいに私も……、シアさんと？

「なんでシアさんと！！？　私もシアさんもノーマルだよ！！　確かにシアさんの事は大好きだけどさー。メアさんもフランさんも大好きだよ？　それと一緒だよ、もう！」

最近シアさんだけじゃなくて私もそっちの趣味の人に思われ始めている気がする……。これもきっとシアさんのせいだ！！

「ああ、怒らないで姫、ごめんごめん。久しぶりでちょっとからかいすぎちゃったかな？　でも今一番姫とくっ付く可能性が高いのはシアなんだよねー」

「絶対に幸せにして差し上げますよ、姫様」

素敵な笑顔で言われてしまった！！　落とされてしまうー！！！

その後小一時間ほど読書と楽しいお話が続き、ケーキが出来上がりおやつの時間になった。

「いいいい如何でしょうか！！」

緊張でガチガチになりながら、ケーキの感想を求めてくるキャロルさん。

「キャロル緊張しすぎだよ……。見た目ちょっと悪いけど味は同じだってば。だよね？　シラユキ」

「うん。おいしいよキャロルさん。ふふ、ありがとう！」

材料の分量とかは全部フランさん任せなのかな？　フランさん凄いなー。初めてのケーキ作りでここまでおいしい物を作らせることができるんだ。これは私も教わらなければ……！！　いつになったら料理を教えてもらえるんだろう……

「はああ、可愛らしい……。感動です！！！　私の作ったケーキでシラユキ様が笑顔に……！！　シア姉様とフランの気持ちが分かったような気がするわこれ……」

感動されてしまった！！　やっぱりおいしいって言われるのは嬉しいんだね。ふふふ、私も嬉しいな。

「シアはどう？　可愛い弟子の手料理だよ？」

「え？　ええ、見た目は多少不恰好ですが、普通に美味しいですね。……つまらないですね。やはり不採用という事で、お帰りはあちらです」

またドアの方へと手を向けて退出を促すシアさん。

「ええ！？」

「そんな反応なの!?　シアさん的には面白くないといけないんだ!?　メイドさんに面白さを求めちゃ駄目だよシアさん……」

「シラユキが可でレンが不可。そうなると今回の採用試験の結果は……」

「現状維持という事にしましょうか。見習いのままですね。また次の試験までそのネコミミカチューシャでいなさい」

「は、はい……。追い出されないだけ良かったのかな今回は……」

「あ、見習いの証なんだそれって。可愛いよねー。ずっと見習のままでいてね、キャロルさん」

「結構恥ずかしいんですよこれ……。カイナさんにやけに好評なんですよね。可愛いと言われて悪い気はしませんが、子供扱いはやめて欲しいですよ」

「あはは。カイナも可愛いもの好きだからね。それってシアの手作りなんだっけ？　姫にも似合いそう」

「ええ、姫様にも是非。私渾身の作がこちらに……」

「私も見習いに？　何の見習い？　……見習いお姫様!?」

自分で言ってピッタリすぎて驚いちゃったよ！！

うーむ……、早く見習を卒業して立派なお姫様になりたいものだね。私もキャロルさんを見習ってお姫様修行でもしようかな？

その１１８（後書き）

『また』の後のお話になります。
しばらくこんな感じのだらだらとしたお話が続くんじゃないかなーと。

何故か毎日更新が続いている不思議……！

その119

「メロンパン？　何？　メロン味のパン？　うーん……、あんまり美味しそうには思えないんだけど、折角のシラユキのリクエストだしね。ちょっと考えて作ってあげましょうか」

「あ、違うの違うの。味はメロンの味じゃなくって、あれ？　アレは何味って言えばいいんだろう……。メロンみたいな見た目のパンでね、えーと、ええと……」

「見た目がメロン？　丸いの？　面白そうだねそれ。フラン、そんなの作れる？　メロンの形のパンかー……。でもさ、肝心の味が分からないと作れないよ、姫？」

「丸いって言えば丸いけど、半分に切った感じなのかな？　表面にメロンみたいな模様が……、あれれ？　メロンってあんな模様じゃないよね……。うーん、縦横に線を入れるだけでいいかな多分、うん。味は、えーと、甘い？」

「甘い！？　漠然としすぎだよ……。やっぱり面白可愛いわこの子。模様は表面に切れ目を入れればいいとして、味は甘い……。んー、シラユキの言う感じだとただの甘いパンだよ？　ほかに何か特徴は無いの？」

「と、特徴？　う、うーん……？　意外に難しいねこういうのって」

今日たまたま、なんとなく急にメロンパンが食べたくなったのでフランさんにお願いしてみたのだが……

なんと、この世界にメロンパンは無かったのだ！！

無かったら作ってしまえばいい。私の能力で、じゃなくて、フランさんにこんなパンだよって教えて作ってもらおうと考えたのだけど、中々上手く伝わらない、伝える事ができない。

大袈裟な話だが、常識を教えると言うのは本当に意外なほどに難しいものだね。

メロンパンの特徴、特徴かー……。甘くて、表面に格子状の模様が入ってて……、あ！

「そうだ！　表面は硬くて中身は柔らかかったよ！　あれ？　表現がおかしいな……」

硬いって言うほどの硬さは無いよねあれは。

「表面が硬い……。バゲットみたいな感じ？　んー、あれを甘くして半球状に、か……、シュガーブールみたいな感じかな。うん、できると思うよ。それじゃ、早速取り掛かろうかな」

フランさんは考えが纏まったのか、早速厨房へと作りに行ってしまおうとする。

バゲット？　ああ、フランスパンね。あれとはまた全然違うんだけどなー。

「ううん、それも違うの。ごめんねフランさん、私、説明下手で……」

自分の頭の中の映像と情報を言葉で説明するのって難しいな……。本当になんて説明したらいいんだろう？

「こんな事で謝らないでいいの。落ち込まないでよ、もう……。んー、こんな時に限ってレンは外しちゃってるんだよね。ま、私たちが何とかするしかないか……。メア、何か思いつかない？」

「私もフランと同じかなあ、甘いバゲットしか思い浮かばないよ。ね、姫？　ゆっくり一つ一つでいいから、思い出して言葉にして言ってみてみなよ。私たちが絶対に作ってあげるからさ。ね？」

メアさんが落ち込んでしまった私を、まるで小さな子供をあやすように撫でてくれる。

なんという子供扱い。まあ、まだ小さな子供なんだけどさ、嬉しいから問題ないか！

メロンパンを頭によく思い浮かべ、身振り手振りを交えて説明していこう。

「うん！　分かり難いかもしれないけど思い出しながら説明してみるね。んー、味はちょっと、甘いとしか表現できないや、ごめんね。そうなると後は見た目と食感だよね。見た目はさっきも言ったけど、半球状で縦横に線が入ってる感じ、かな？　あ、その四角い部分が膨らんでたような気もするね。それで、表面が硬いんじゃなくて、サクッとしてるって言うのかな。クッキーとかあんな感じの……、ああ！」

そうだ！　そうだったよ思い出した！！

「どうしたの姫？　急に大声出して驚かせないでよ」

「何か思い出したかな？　いいよ、シラユキ。気にしないで続けて」

おっと、メモを取る二人の邪魔をしてしまった。反省反省だ。

「ええとね、確か、なんだけど、生地を二種類使ってた筈だよ。表面のサクッとした食感のクッキーみたいな生地と、中身のふわふわな感じので二種類。うん、合ってると思うよ！」

どんな生地だったかまでは、パン作りどころか料理すらした事の無い前世の私の知識にも無い。でも、この二人、特にフランさんなら分かってくれる筈だ！

「生地を二種類か……。そういうのを待ってたよ、ふふふ。表面はクッキーみたいにサクサクで、でも中身はふわふわのパンか……。いいね、いいね！」

全く新しい料理というだけあって、フランさんのテンションが高くなってきた。料理人の血が騒いだんだろうね。

「私にはちょっと難しそうだね。フランに任せちゃっていい？　上手くできたら私にも教えてよ」

「それは勿論。作る人で味も食感も変わるだろうしね。だから料理って面白いのよ？　よし！　そうと分かれば早速……、あ、メア、シラユキのことお願いね。私は厨房に篭るから」

「はいはいりょうかーい。ふふふ、今日は私が姫を独り占めだね。どう可愛がってあげようかなー」

「あはは、フランさん頑張ってねー！　楽しみにしてるからね！」

「シラユキの応援！　なにこれ、やる気がさらに沸いてきたわ……。絶対に美味しいパン作ってあげちゃうから、楽しみに待ってなさーい！！」

私の応援を受けたフランさんはさらにテンションを高め、厨房へと走って行った。

別にメロンパンはそこまで好きな物っていう訳じゃないんだけど、もの凄く楽しみになってきてしまった。

はてさて、どんなパンが出来上がってくるかな？　普通にメロンパン？　それとも全く違う別の何か？

どちらにしてもフランさんが作るパンだ、おいしい事は間違いないね。ふふふふ、楽しみ！！

「ん？　今日はメアリーだけか。フラニーとバレンシアはどうした？　そういやキャロルも見当たらないな」

メアさんの膝の上で、撫で、頬擦り、キスなどなど、全力で可愛がられていたところ、兄様が談話室へやって来た。

「フランは厨房で、シアはキャロルと町へ出掛けていますよ。何か御用でした？」

相変わらず兄様には敬語なメアさん。姉様とは普通に話せるのに、やっぱり男の人で偉い人だからなのかな。それに年上だしね。

「いや、ちょっと気になっただけだ。それにしてもシラユキ、羨ましい体勢しやがって……」

羨ましい？　ああ、私の目の前にメアさんの胸があるからか。ええい、このおっぱい星人め。

「あ、あの、私の胸でしたらどうぞお好きなだけ」

「駄目だよメアさん！　兄様もメイドさんの前でそんな事言っちゃ駄目だよ。みんな言う事聞いちゃうかもなんだからね！」

「分かってるって、嫌がってたり無理してそうな場合は何もしないさ。信用無いな俺……。意外にショックだ」

私の言葉にショックを受けてしまったようだ。だが謝らない！　兄様の大きな胸に対する情熱だけは信用できないもんね。あれ？　信用できるのか？　信用できるからこそ信用できないんだね。イミフ。

カイナさんなんて結構な頻度で揉まれてるみたいだし……。しかも本人全然嫌がって無いんだよね。男の人が苦手なのが悪化しちゃったりでもしたらどうするのよまったく！

男の人って言っても、カイナさんから見れば兄様も年下の弟くらいに見えているみたいで、胸を触られる程度なら何とも思わないら

しいんだけどね。
　カイナさんが兄様お付のメイドさんじゃなくて本当に良かったよ。もしそうだったとしたら……、カイナさんを姉様と呼ぶ事になっていたかもしれない！　……それはそれでいいね。

「ルー兄様、私に何か用事？」

「ん？　ああ、ただ暇だっただけで特に何か用があった訳でもないんだが。いや、シラユキを可愛がるという大切な用事があったな。ほら、こっち来い」

　メアさんから降りて、今度は兄様の膝の上に乗せられる。
　兄様の膝の上はメイドさんズとはまた違った良さがあるね。凄く落ち着くと言うか、安心できると言うか。むう、兄様大好きだ！

「ふふ、姫嬉しそう。あ、紅茶の用意をしますね。少しお待ちください」

　にこにこ顔で紅茶の用意をしに行くメアさん。

　そんな嬉しそうな顔してたかな……、恥ずかしい。
　嬉しいものは嬉しいんだからしょうがないよね。とりあえず兄様に甘えよっと。

「ああ、可愛いなコイツ……。このまま可愛がってやるのもいいが、今日は俺と一緒に本読むか？　ユーネは出掛けちまってるし、俺も特にやる事もなくて暇なんだよな今日は。どうだ？」

「うん！　一緒に読も？　ふふふ、嬉しいな」

兄様と一緒に本を読むのは久しぶりだね。ついつい嬉しくて抱きついて、頬擦りをしてしまう。

「ちょっ、姫可愛すぎ……。私にもそれくらい素直に甘えてほしいなあ」

見られてた！　聞かれてた！！　恥ずかしい！！！

「お待たせシラユキ、完成！　とはまだ言えないけど試作品の完成だよー、っとルーディン様もいたんだ？　多めに作っちゃったから丁度いいかな」

「あ、フランさんお疲れ様。うわ、なにその……、ケーキ？　その上に一つ乗ってるのって木苺かな？　随分と豪華なのになっちゃったね」

「あはは、張り切りすぎだよフラン。でも凄い、美味しそうだねこれ。やっぱりフランは凄いね、尊敬しちゃうよ」

「ほ、褒めすぎよメア。恥ずかしいってば」

「お、おい。何だよそのケーキ……」

「ちょっと飾り付けすぎちゃったけどパンだよこれ。シラユキ考案

のメロンパン。この見た目じゃわからな」

「シラユキが！？　や、やっぱりお前は天才だな！！　そうか……、こういうのもあるのか……、この発想は無かったぜ」

「正確には私が考えたんじゃないんだけど……。どうしたのルー兄様？　このパンそんなに凄い？　凄く見えるのはフランさんの飾り付けで」

「ああ！　凄いなんてモンじゃない！！　いや、しかしメロンパンはおかしいな……。ん？　おかしくないのか？　確かにスイカやメロンに例える事もあるな……。そこまで考えてのネーミングなのか、まさか。さ、さすがはシラユキ、さすが俺の妹だ！！！」

「西瓜？　さっきからルー兄様は何の事言ってるの？」

「あ、ああ！　な、なるほどね。さすがルーディン様……。確かに二つ並べるとそう見えちゃいますね」

「並べると？　どれどれ……、こう？　……あ。ぶふっ！　あはは！！」

「う、うわあ……。フランさん、木苺はアウトだったよ……」

「ふむ……。俺が名付けるならば、『おっぱいパン』、略して『おっパン』だな。どうだシラユキ、最高だろう！？」

「最低すぎるよ！！！」

その１１９（後書き）

ルーディンの安定感は異常。

次回投稿は未定です。今から書き始めます……

その１２０

シアさんとキャロルさんは夕方過ぎに帰って来た。
何をそんなに買ったのか、キャロルさんが文字通り山のような荷物を背負って？　担いで？　でも全く重そうな顔をしていないのが印象的だったね。キャロルさんはやっぱり凄い人だ。シアさんが荷物を何一つ持っていなかったのが気になったが、突っ込まないでおいた。
今日一日シアさんとのデートを楽しんでもらえたみたいでよかったよ。ちょっと疲れた表情をしてるけど嬉しそうだね。

疲れた表情をしているのは、多分服装のせいだと思う。
シアさんはどこへ行くにもメイド服だし、キャロルさんもきっとメイド服での外出を強制させられたんだろう。勿論ネコミミも付いたままだ。可愛い。

「あははは。私も一緒に行けばよかったかな？　うーん、その時のみんなの反応、見てみたかったなー」

多分私がされるのと同じくらいに子供扱いされて可愛がられたんじゃないかな。

「シラユキ様……。本当に恥ずかしいんですよこれ。シア姉様、着替えるのが駄目ならせめて通常のメイド服にしてくださいよう……」

「ふむ……、私の作ったカチューシャはともかくとして、ユーフェネリア様にお選び頂いたメイド服が気に入らないと？　あなたも言う様になりましたね」

「ちちち違いますよ！！　はあ……。リズには大好評だったし、いいかな……」

リズさんも可愛い物好きで、さらにキャロルさん大好きだからね。相当喜んでくれたんじゃないかなと思うよ。

うーん、やっぱり私も見てみたかった！

「そうだ！　シラユキ様！　あのソフィーティアとかいうエルフ、一体何なんですか！！　聞くとシラユキ様のご友人だとか言うじゃないですか」

買って来た荷物など全て片付け終わり、談話室へと戻ってきたキャロルさんが思い出したように聞いてきた。

あ、ソフィーさんに会って来たんだね。それは何と言うか、お疲れ様だ……

なるほど、服装のせいもあるけどそっちが主な原因だったのか。確かに、慣れた私でもあの人とのお話は結構疲れさせられるよ。初対面なら尚更だと思う。

「あ、うん、と、友達だよ。ソフィーさん綺麗な人だよねー。や、優しいし、丁寧な話し方で、ええーと……、悪い人じゃないよ？」

うん、悪い人じゃないんだ、悪い人じゃ。

「悪いです！　シラユキ様の教育に悪いです！！　なんでにこやかにお尻撫でてくるんですかあの人は！！　あまりにも自然すぎて反応ができませんでしたよ！　シラユキ様の友人でなければ蹴り飛ばしてたのに……」

おお、そんな言い方もあったか……。確かにそういう意味でなら悪い人だね、うんうん。

ソフィーさんとは、最近リーフサイドへやって来た冒険者の人。珍しいエルフの冒険者だ。ランクはCでそんなに強い人じゃないらしい。経緯は端折るが、ちょっとした事があってめでたく私のお友達になってくれたのだ。

性格は親切丁寧、物腰穏やか、とても優しい。見た目は金髪ロング、碧眼の、清楚で可憐なお嬢様っていう言葉がよく似合う人だね。……見た目はね。問題の中身は……、ナナシさんを数段パワーアップさせた感じかな……

何故かエディさんがお気に入りで今は行動を共にしている。ラルフさんのお弟子さんなだけあって、そういった人を引き寄せてしまうのだろうか？

エディさんに紹介されたその日、私もお尻を触られそうになったが、シアさんに本気で殺されてしまいそうなのでエディさんが全力で止めてくれたんだ……

見た目はお嬢様。中身は男でも女でも人外でもどんと来いな変態さんだ。そう、変態と言う言葉がしっくり来るね……

「ちょっと変わった人だけどいい人だよ？　確かに疲れる人ではあ

るけどね。多少強めのツッコミは喜んで受ける人だけど、蹴り飛ばしたりはしないであげてね？」

「変態じゃないですか！！　どこがいい人なんですか！！　ああ、もう……、シア姉様はなんであんな輩を放置しているのか……」

なんという酷い言われようだ。うーん、慣れると面白い、いや、慣れても疲れる変態さんだけど、本当にいい人なんだけどなー。

「え？　その方が面白いからに決まっているでしょう？　あ、いえ、なんでもありませんよ姫様」

こっちにも酷い人がいた！！

シアさんは、ソフィーさんとのお話で私が慌てたり恥ずかしがったりしてるのが面白いから、敢えて手を下さなかったんだね……。そうなんじゃないかとは思ってたさ……

それでもちょっと酷いというか、いやらしすぎる話になった場合はちゃんと止めてくれる辺りがシアさんらしいと言うか何と言うか。ふふふ。

「本当にシラユキ様の教育に悪いと思いますよ？　アレは。シラユキ様もその時は遠慮なく私に言ってくださいね。すぐに処理に向かいますから」

「処理！？　怖い！　珍しくキャロルさんが怖い！！　でも見た目は可愛いからそこまで怖くないや」

「冒険者は怖いんですよー？　なので、できたらギルドの訪問はお控えになってくださいね。後、シラユキ様のほうが何倍も可愛いで

す！！」

褒められてしまった！！

冒険者の人は怖い人もいるけど、シアさんさえいれば安心だからね。しかし、キャロルさんも基本的に私の事は子供扱いなんだなあ……。実際子供だからいいんだけど、なんか複雑だよ。

「まあ、どっちも可愛いって事でいいじゃない。見てて微笑ましいわこれは……。キャロルも暫くなんて言わないでもうずっとここでメイドしない？　レンと一緒にいれるし、シラユキもその方が喜ぶと思うよ」

「そうそう、それがいいって！　あ、でもさ、姫のお付は譲らないからね。キャロルは強いから館全体の警備にでもなるのかな？　まあ、姫と遊ぶのが一番の仕事になると思うけどね」

ここで二人から素晴らしい提案が舞い込んできた。

中々話に加わってこないと思ったら、私とキャロルさんとのやりとりを見てニヤニヤしてたなこの二人め……。あ、シアさんもか！

しかしその提案は私の口からはあまり言ってはいけない事なんだよね、許そうじゃないか。

「うん、ここはホントに居心地がいい国だよね、私もそう思っちゃうよ。でも、まだ冒険者は続けるよ。自分はSランクに上がる実力が持てるのか、それとも所詮この程度が限界なのか、まだまだ試してみたいからね。ま、限界を感じちゃったら護衛として、メイドとしてでも雇ってもらっちゃおうかな。あはは、逃げてくるみたいでなんだけどさ」

そう、照れくさそうに話すキャロルさん。

「キャロルさんってやっぱり大人の人だよね。見た目はこ、その、可愛い人なのに」

見た目は子供って言いそうになってしまった！　危ない！！

「うんうん。見た目はホント子供なのにねー。姫と並ぶと可愛すぎて微笑ましいったらないよ」

「見た目は子供で中身は大人っていうのも中々いいものだよね。こう、小さな子が無理して大人ぶってる感じがしてさらに微笑を誘うね」

人が気にして言い留めた事をこの二人はあっさりと！！

「ふふ。まあ、見た目こんなでも色々と経験してるって事よ。あ、シラユキ様もお気になさらずどうぞ。子供扱いは慣れていますから」

お、お、大人すぎる！！　違和感が凄いよ！！

キャロルさんは三百五十歳以上だったっけ。お、大人だよね……私の周りの人と比べてみると、カイナさんクレアさんと同じくらいで、メアさんフランさんよりもずっと年上なんだよね。

やっぱりしっかりしてる大人の人なんだなー。自分のやりたい事に向かって自分の足で進んで行く、っていう感じがしてカッコいいね。見た目が可愛すぎて違和感は拭いきれないけどね。

「そうですね。姫様も将来同じ悩みを抱く事になりますし、ここで一度見本を見ておくのもいい経験になるのではないでしょうか？しかし、キャロの様に軽く流すのは姫様には少し難しいかもしれませんね……。しかし、ご安心ください。私がいつも、いつまでも隣でお支え致しますので……」

「あ、うん、嬉しいな。私もずっと一緒に……？　!？　またさりげなく言ってくれちゃってー！！　伸びるもん！　キャロルさんより大きくなるもーんだ！！」

「姫可愛い！　これが本物の子供の可愛さだよキャロル」

「シラユキ可愛いすぎる！！　うん、キャロルも見習わないとね。またシアに可愛がってもらえるかもしれないよ？」

「ええ！？　くっ！　やってみるか……？　……む、無理！　子供扱いは慣れても子供のふりは無理だって！！　くうう……、シラユキ様可愛いなあ……。私も膝の上で甘えられたいなあ……」

「……ふむ。それもまた見てみたいものですが、残念ながら見習いでは姫様を膝に乗せる権利は与えられません。精進なさい。ああ、後、あなたが言うと性的な意味に取られてしまいますよ？」

「え！？　きゃ、キャロルさん……？」

「シア姉様！？　ち、違いますよシラユキ様！！　私はシア姉様一筋です！　シア姉様を愛していますから！！」

「大声で何を言うんですか！　まったく……、？　姫様？」

「ごめんなさいシア姉様！　え？　シラユキ様が何か？」

「……愛していますから、だって！　きゃー！」

「なんという可愛らしい反応……。ふふ、まあ、許しましょう」

その121

「失礼します！！　ああ、良かった！　姫様こちらにいらっしゃったんですね。クレア、姫様に説明して差し上げて。私はユーネ様をお呼びして来るから」

「なっ！？　私に説明させる気か！？　はあ……、分かった、急いでくれ。あの方の指に跡でも残ろうものなら私たちの命を使っても償い切れん」

「大袈裟な……。でも、それくらい大事よね。姫様、慌しくしてしまって申し訳ありません。では、失礼します」

ほんの数秒の出来事だった。

シアさんをお相手にいつものように本を読んでいたら、突然カイナさんとクレアさんが談話室へ駆け込んで来た。カイナさんの口振りからすると私を探していたのかな？

二人とも少し慌てているみたいで、部屋の中にいる私たちの反応を見る余裕も無い様だ。珍しい事もあるもんだね。

カイナさんはクレアさんに私に説明するよう言い、すぐにまたパタパタと小走りに部屋から出て行ってしまった。

何の説明だろう？　指に跡？　傷跡？　誰か怪我でもしたのかな？

ん？　カイナさんは姉様を呼びに行ったんだっけ？　……え？

姉様が怪我！！！？

「クレアさん案内して！！　うわぁ！！！　な、何！？　あ、シアさん？」

椅子から飛び降り駆け出そうとしたところ、シアさんにひょいっと後から持ち上げられてしまった。

駆け出そうとした助走の勢いが急に止められて変な声が出ちゃったよ！

「シアさん！　何で止めるの！！　ユー姉様が怪我しちゃったんだよ！？　そうなんだよね？　クレアさん」

シアさんに軽く持ち上げられブラブラとした状態だが、細かい事は気にしていられない。まずは確認だ！

「え？　あ、はい！　？　私はまだ何も説明していないのですが……。まさか、先ほどの私とカイナとのあのやりとりだけでお気づきになられたのですか？　さ、さすがは姫様、なんという聡明な方だ……」

また変な所で褒められた！！　クレアさんは私を褒めすぎだよ！もう！　でも嬉しいです……、じゃない！！

「シアさん放して！　降ろして！！　ユー姉様の所に行かせてー！！」

何で止めるの？　姉様が怪我したんだよ？　早く、早く行かない

と！！

「落ち着いてください姫様。カイナが今呼びに向かっているところですよ？　それに、二人の反応からするとそこまで程度の酷い傷でもないのでしょう。そうでしょう？　クレア。貴女ももう少し落ち着いて、まずは姫様にきちんと説明をしなさい」

慌てる私を優しく諭し、説明不足だったクレアさんを窘めるシアさん。

まあ、まだなんの説明も受けて無いんだけどね……

落ち着いた私は何故かシアさんの膝の上に降ろされ、クレアさんの説明を待つ。

「くう、羨ましい……。は、また失礼を致しました、申し訳ありません。では説明を。今日はエネフェア様が執務をお休みになられて、ウルギス様とお二人で出掛けられているというのはお聞きですね？

そこで私たちの手が空いたのですが、ああ、護衛の私ですが今回は特に必要ないとのことです。ウルギス様お一人居さえすれば例え千だろうが万だろうが、と、話が逸れました。手の空いてしまった私とカイナに、ユーフェネリア様が料理を教えてほしいとお頼みに参られまして。それで、その……、少し深めに指先を傷付けてしまわれまして……。申し訳ありません！！　謝ったところで償いきれるものではありませんが、本当に申し訳ありません……」

説明を終え、悲痛な表情で頭を下げるクレアさん。

そういえば今日は父様と母様デートしてるんだっけ、いつまでも若い二人だねまったく。今頃どこか人目の付かないところでラブラ

ブな空気を醸し出していることだろう。
　姉様の怪我はちょっと深めなのかな？　心配だね。しかし、姉様はちょっとお願いしたら簡単に料理を教えてもらえるのか……。うーん、羨ましいな。私も早くフランさんに教えてもらいたいのになー。怪我は抜け駆けした天罰とでも思ってもらおうか。ふふふ。

「あ、気にしないでクレアさん、頭上げてほしいな。指を切っちゃった姉様が悪いんだし、ね？　そんなの本人の不注意のせいに決まってるよ、もう！　ユー姉様だって怒って無いんだよね？　大丈夫、もし跡が残っちゃっても私が消しちゃえば……、あ、私が今治しちゃえばいいんだった。そのつもりで私の所に来たんだよねきっと」

「は、はい。姫様の癒しの魔法にお縋りしようかと……。お願いしてもよろしいですか？」

「うん、勿論だよ。でも、うーん……、シアさん？」

　勿論そんな事は許可を得るまでもない、お願いされるまでもない当たり前の事だ。
　でも、でもね……

「姫様、制御できる自信はおありですか？　また全力で発動し意識を失う事にでもなってしまわれでもしたら……、クレアは自殺ものですよ？　あれ以来一度も使われていらっしゃらないですよね？　ユーフェネリア様のお怪我は確かに心配なのですが……、できましたらおやめになって頂きたいです」

　やっぱりそうだよね……

　実はあれから一度も癒しの魔法は試していない。試す機会が無か

ったとも言うが、例え誰かが怪我をしても私に黙ってる事の方が多いからね……

フランさんのたまに付けてしまう包丁傷や、他のメイドさんたちの日常の家事仕事でできた手荒れを治そうにも、本人達がこれくらいどうでもいいって断っちゃうんだよね。多分私が三日も寝込んだ事がみんなが遠慮しちゃう原因なんだろうと思うけど。

そんな訳で、制御できる自信は全く無い。

部分的に小さく癒す感じでイメージすると上手くできると思うんだけどなー……

「やはりいきなりは難しいですか……。ユーフェネリア様には私の使っている包丁をお使い頂いていたので、少し深く切ってしまわれているのです。見ていてとても痛々しく……。魔法薬は体に負担を掛けてしまいますし、我慢して頂く外ありませんか……」

「それを先に言いなさい。そうなるとさすがに心配ですね……。指を落とすような事が無く良かったと言いますか」

え？　クレアさんの包丁？

シアさんの反応が変わったところを見ると、何か特別な包丁なのかな？

「クレアさんの包丁ってどんなのなの？　指を落とすとか、ちょっと私も心配になってきちゃったんだけど……」

「あ、はい。私専用に特別にあしらえてもらった業物で、錬金ギルドの技術の結晶とでも言いましょうか。折れず、曲がらず、凍りついた食材を切ろうとも欠けもせず。力加減を間違うとまな板どころか調理台ごと真っ二つにしてしまうという、実に素晴らしい、最高

の一品です」

ああ、いつものクレアさんだ。刃物の説明をするときは本当に楽しそうに話すねこの人は……。うん？　調理台ごと真っ二つ？

「なんでそんな凄い包丁を貸しちゃうの!?　それもう包丁じゃなくて武器だよ!!　ああ！　だからクレアさんが責任を感じてるんだね……。ホントに少し深めに切っちゃっただけでよかったよ」

でもどんな包丁か一度見てみたいね。投げるとカンストするくらいのダメージが出るんじゃないだろうか？

少し経って、カイナさんが姉様を連れて部屋へと戻って来た。姉様の人差し指には包帯が巻かれている。

無事な方の手で傷ついた指を庇う様に押さえ、表情も少し痛々しそうだ……

ああ、これは駄目だ。実際怪我をしている姉様を見てしまったら、癒しの魔法を使うのをやめるなんて考えはどこかへ吹き飛んでしまった。

よし治そう。すぐに治そう。今すぐ治そう。

「あ、シア、シラユキを抑えててね。この子絶対止めても治しに来ちゃうから」

「はい、既に。お優しい姫様のことです。私が何を言ったところで

使用を控えて頂けるとは思いませんでしたので……。座ったままの姿勢で話す失礼、お許しください」

なぬ？　……あ。

いつの間にかしっかりとシアさんに捕まってしまっていた。

まさかこれを見据えて自分の膝の上に私を乗せたのか！？　私はそんなに分かり易い性格なのか……！！

「え？　どういう事です？　姫様に治して頂く為に探されていたのでは？　あれ？」

姉様の言葉にカイナさんが困惑している。

カイナさんとクレアさんじゃなくて、姉様が私を探していたんだね。でも、癒しの魔法目当てじゃないとなると、なんで態々私を探してたんだろう？

「ねえシラユキ、癒しの魔法なんて使わなくてもいいのよ？　これくらいの傷どうってことないわ。ふふ、私はお姉ちゃんなのよ。でもね、シラユキ、お姉ちゃんでも痛いものは痛いのよ……。それでね？　シラユキに癒して貰いに来たの」

「う？　だから傷を癒して治すんだよね？　あれ？」

魔法を使わずにどうやって癒せと……？　それより本当に痛そうで見てられないんだけど、シアさんをどうにか振り切って無理矢理にでも治しに行かなければ！！

！？　私を抑える力が強まった！？　はっ！　心を読み取られたのか！！　くそう！　シアさんめー！！

どうにか私を拘束しようとするシアさんの両手を外そうともがいてみたのだが、ビクともしない。シアさんの顔を見ると、今何かしましたか？　と涼しげだ。なにそれこわい。

「ば、バレンシア、放して差し上げたらどうだ。姫様、落ち着いてください。姫様のお力ではバレンシアの腕を外す事はできません。まずはユーフェネリア様のお言葉を頂きましょう」

駄目だ！　クレアさんの言うとおり外せる気がしない！　軽く手を私のお腹に当ててるだけに見えるのに……！！

「お言葉って、そんな難しいことでもないのよ？　ただシラユキの可愛らしさに癒されに来ただけよ。もういいでしょう、シア、代わって」

そう言うと姉様は椅子に座り、私をシアさんから受け取り膝の上に乗せる。なんという物扱い。

目の前に姉様の怪我をした指が見える。包帯に血は滲んではいないみたいだけど、やっぱり痛そうだ。

あれ？　今がチャンスじゃね？　今なら誰にも邪魔されずに……、はっ！　シアさんがにこにことしている。あの笑顔はまずい！　今魔法を使おうものなら後でお仕置きですよ、とでも言いたげな笑顔だ！

「ううう、ユー姉様大丈夫？　痛そうだよ……。やっぱり魔法で治しちゃおうよ。ユー姉様が怪我してるのなんて自分が怪我するよりずっと辛いよ……」

「くううううう、優しい子ねシラユキは。うーん、可愛い！　可愛すぎる！！　ふふふ、さっきも言ったでしょ？　シラユキの可愛さにもう充分癒されちゃってるのよ？　痛みなんてもうどこかへ行っちゃったんだから。それに、お母様の言葉、忘れた訳じゃないでしょう？　これくらいの傷で魔法に頼っちゃ駄目よ」

それはそうなんだけど、実際怪我してる家族を見ると……。ううううう……

「包帯なんてあるから痛そうに見えるだけよ？　もう……。こんなの外しちゃおうかしら……」

「え？　ユー姉様？」

「ユーネ様！？　駄目です！！」

カイナさんの静止は間に合わず、姉様は包帯を外してしまった。どうやらガーゼも一緒に外れてしまったみたいで傷口がはっきりと……

「あ、あら？　わ！　ちょっ！　シラユキ降りて！　血が付いちゃう！！」

は？　え？　血？　あ、姉様の指から血が……？　え？　何あの傷口痛そ、ちょ、血が垂れ、え、あ、う？

……えい。

「ししししシラユキ!?　何してるの!?　ちょっと、は、放しなさい。何この子可愛すぎる……。ううん、しみるわ、でも幸せ……」

口の中に血の味が広がる。うーむ、この後一体どうしたらいいんだろう？

咄嗟に姉様の指を口に咥えてみたのだけど、この先どうしたらいいかさっぱり分からない。姉様の指も血も別に汚いなんて全く思わないし、シアさんたちが何か手段を講じるまではこのままでもいいか。

「ユーフェネリア様、なんて羨ましい……！！　姫様、私にも後でお願いします！　指なら切りますから！！」

何言ってるのシアさん!?　自分を傷つけるなんて事したら絶対許さないって言ったよね？

「きゃあ！　シラユキ、くすぐったいわよ！　ううん、ちょっと痛いけどやっぱり幸せ……」

「う……。取り乱しました、申し訳ありません……」

「バレンシアはどうして今ので分かるんだ？　私にはモゴモゴとしか……。カイナ、新しいガーゼと包帯を」

「あ、そうね。私もちょっと羨ましくて見つめちゃってたわ……。姫様、ユーネ様、しばらくそのままでお待ちくださいね。あ、姫様、血を飲んではいけませんよ？　お辛いでしょうがそのまま口に含んだままでお願いしますね。では、失礼します」

カイナさんはまた小走りに部屋から出て行ってしまった。

今日は忙しそうだね。折角のお休みの日なのに逆に忙しくさせちゃって悪い気がするよ。

しかし、血は飲んじゃ駄目だったのか。もう既に少し飲んじゃってるんだけど……、大丈夫なのかなこれ。

姉様は幸せそう、怪我してるのに……。シアさんとクレアさんはとても羨ましそうにしている。後でしてあげるか……？　いや、駄目だよ！　怪我してるわけでも無いのに指先を口に入れるとか……、いやらしい！！　いやらしいよそれは！！　でもちょっと二人の反応は見てみたいな……

うーん……、うん？　口の中に血が溜まって……、あれ？　出血酷いんじゃないかこれ！？　ちょっ！　カイナさん早く、早くー！！　血は飲んじゃってもいいけど姉様が貧血起こしちゃうよ！！　どどどうしよう。これってもしかして、思ったより傷が深いんじゃないのか！？　姉様平気な顔してるけど、これ本当は凄く痛いと思うよ？　ううううう、姉様が痛い思いをしているのは嫌だな……、絶対に嫌だなそれは……！！

「姫様！！」

「わ！　どうしたのシア？　大声出して……、あら？　痛みが消えた？　まさか、シラユキ！？」

「ぷはっ。ううう、全部飲んじゃった……。どう？　ユー姉様？」

「どうって？　……うわ、あれだけの切り傷が影も形も無いんだけど……。シーラーユーキー？　使っちゃ駄目だって言ったでしょ！　もう！！」

「ごめんなさーい。ふふふ、上手くいったみたいだね。口の中だけに限定してイメージしてみたの。これなら指先の傷だけ治せるよ！！」

「怒られてるのに嬉しそうにしないの！　まったくこの子は……。ふふ、ありがとねシラユキ。でも、もう少し自分の体の事も考えるのよ？　魔力疲れは起こしてない？　優しくて良い子過ぎるのも考えものね……」

「うん、大丈夫だよ。ふふふ、治ってよかった！　嬉しいなー」

「お待たせしまし……、あら？　クレア、まさか姫様が……？」

「ああ、そのまさかだ。すまん、止める間も無かった……」

「バレンシア、姫様を責めないであげてくださいね。ああ、姫様、嬉しそう……」

「分かっていますよ。しかし、一瞬であれ程の傷を治療してしまうのですか、凄まじい効果ですね……。魔力もそれなり以上に消費しているのでは……？　姫様」

「うん？　なあに？　シアさん」

「明日から、いえ、今日からまた暫く薬草茶をお飲みくださいね」

「なんで！？　あの苦いのはイヤー！！」

「後、ウルギス様エネフェア様にもご報告を入れさせて頂きますよ。楽しみにお二人のお帰りをお待ちくださいね」

「あうあうあう。うう、自業自得だししょうがないかー……。でも、ユー姉様の怪我が治ったし、いいや！！」

その１２１（後書き）

怪我は舐めて治す！

私が書くと何故かいやらしい表現に見えてしまう気がします……

その122

「これで全部？　それじゃそろそろギルドに遊びに行こっか。今日はエディさんがいる筈だし」

「ええ、少しお待ちください、確認を……。はい、買い漏れはありませんね。お疲れ様でした、姫様。まったく、姫様に買出しを頼むとは……、フランとは一度きちんと話をしなければいけませんね」

お買い物のメモにチェックを付け、全部買い揃えた事を確認。シアさんはちょっと怒ってるね。怒っていると言うか、呆れてるに近いかな？

今日はフランさんのお願いでシアさんと町へ買い物に出て来ている。あれからフランさんはメロンパンの試作を繰り返し、今度は色々な食材を使ってさらに新しい試作品を作り出そうというのだ。

いつもは補充される食材を使って料理しているフランさんだが、どうやら次の補充の日まで我慢ができなかったみたいだね。特にすることも無くぼーっとしていた私に、運動ついでに買出しに行って来てとお願いをしてきたのだ。断る理由どころか、むしろ新しいおやつは大歓迎なので喜んでＯＫしたのだが、シアさんは不満気だね。

まあ、考えてみたら私ってお姫様だったよ。お姫様に買出しをお願いするメイドさんは確かにおかしいんじゃないか……？

でも、フランさんは家族だしいいんじゃね？　と一秒で結論を出して納得する。

「私はいくらでも荷物を持って動き回れるんだからいいんじゃないかな。ふふ、この魔法が無かったら怒ってもいいかもね」

買った商品は配達ではなく、全部私の収納と保存の魔法で仕舞ってある。本当に便利な魔法だよこれは。

どれぐらいの量を仕舞う事ができるか、などの実験にもなるし、特に必要は無いと思うけど練習にもなるんだから、いい事ずくめだと思うんだけどね。

「そういう問題では……。違和感を感じたらすぐに仰ってくださいね。出し入れする度に魔力を消費している筈ですから。これは絶対ですよ？　本当にすぐに仰ってくださいね」

シアさんは少し心配そうにそう言ってくれる。

なるほど、その考えは抜けちゃってたな。お姫様に買出しを頼む、という事もあるけど、私に魔法を乱用させることに対して怒ってるのか……。シアさんはやっぱり過保護だなー。

ひょいひょいと気軽に仕舞ってはいるけど、その度に極少量の魔力は消費されているのかもしれない。全く何か減ったような気配は感じないんだけどね。シアさんの言うとおり、帰ってから取り出すときは注意しながらにしよう。

「うん、ありがとねシアさん。でも、フランさんを怒らないであげてね？」

「姫様は優しすぎますよ。……ふう、分かりました。ああ、ギルドの前にもう一軒寄っておきたい所があるのですが、よろしいですか？」

「いいよ？　お店？　シアさんもそういう時は遠慮しないでどんどん言ってね」

「はい、では遠慮なく。調薬ギルドへ薬草茶の茶葉を買いに……」

「！？　きょ、今日はやめようか！　ギルドに行こ！！」

「ふふふ、冗談ですよ。可愛らしい……」

その後特に何事も無く冒険者ギルドへ到着。

中をくるりと見回して、いつものカウンター近くのテーブルにエディさんを発見する。同じテーブルにはソフィーさんもいるね、エディさんに寄り添う様にして座っている。あれ？　今日は二人だけか。いつもは他にも女性の冒険者の人が、一人か二人は一緒に座っているんだけどな。

エディさんももう二十四歳になった。本当に人間種族の月日が経つのは早いね、私もあれくらいすくすくと成長したいものだ。

十六の頃から身長が１０ｃｍ以上伸びているみたいなんだよね。本当に、本当に羨ましい……。いや、妬ましい、妬ましいわ……。パルパル。

エディさんはラルフさんの様に両手剣を扱う、などの特に特出した才能は無く、二十歳ごろにＤランクに上がった切りで、Ｃランクに上がれるほどの実力は無いみたいだった。

人間種族はそれが当たり前らしく、本人は気にしていない。そうなるとラルフさんもナナシさんも凄い人だったんだなー、としみじみ思ってしまうね。今では二人とも宿屋の旦那さんと女将さんなん

だけど。ふふふ。
　その二人の弟子だったエディさんは、二人のいい所取りをした様なバランスのいい戦い方をするらしい。前衛でも後衛での補助でも何でも器用にこなす、頼りになる熟練冒険者へと成長している。

　初めて会った当時１６０くらいだった身長も、今では１７０ｃｍ以上。エルフの私にはよく分からなくなってしまったが、人間種族としてはかなりカッコいい大人になり、冒険者としても頼りになる存在。

　何が言いたいかと言うと……、モテモテなんですよエディさん。人生最大のモテ期がやって来た！　と本人は最初は喜んでいた。……最初はね。

「こんにちはー。エディさん、ソフィーさん、お久しぶり、かな？」

「こんにちは、お久しぶりですねお二人とも。特に大きな怪我なども無い様で、非常に残念です」

「ああ、シラユキちゃんにバレンシアさん、久しぶりーって酷いなオイ！！　元気だよ！　元気で悪かったな！！」

　うん、いいツッコミだ。さすがはラルフさんのお弟子さんだね！

「シラユキ様、お久しぶりです。今日も本当に可愛らしいですね、ふふふ。バレンシアさんも相変わらずお綺麗で、美味しそうです。お二人ともお元気そうで何より。一月ぶり、くらいですよね？　カルルミラへのご旅行は楽しかったですか？」

一言変な言葉が入っていたが気にしない、気にしたら負けだ。私も慣れたね……

「お、そうだったそうだった。ラルフさんたちは元気だった、よな？　あの人たちならそう心配は要らないか。俺もそのうち会いに行かなきゃなあ……」

エディさんは数年前を思い出したのか、感慨深そうだ。そう簡単に思い付いたからって会いに行ける距離じゃないしね。

「二人ともとっても元気でしたよ。もうすっかりお父さんお母さんしてて、ふふふ。連絡は貰ってたんですけど、実際見てみるとビックリですよね。別れてたった五年くらいで二人も子供が生まれてるんですから。可愛かったですよー」

そう、二人。男の子と女の子、二人も子供が生まれていた。名前は勿論私たちの考えた名前、アドルファくんとアンジェリーナちゃん。ちょっとできすぎてる気もするよね……。女神様が何か手を回しちゃったのかもしれない。まあ、本人たちは幸せそうだし、問題はないんだけどね。

アドルくんが四歳、アンジェちゃんが三歳。カルルミラに着いて、落ち着いたらすぐに子作りを始めたらしい。何と言うか、あの二人らしすぎるよ……

「姫様の方が何倍も、何十倍も、？　計りきれません……！！　まあ、幸せそうでしたよ」

「そっけないなあ……。はは、二人は全然変わらないな。んー、会いに行きたいな」

「その時は私も一緒に連れて行ってくださいね。いいえ、ついて行きます。カルルミラの『跳ねる魚亭』と言えば混浴露天風呂で有名、エディくんと一緒に入りたいです。お互い体の隅々まで、奥の奥まで洗い合いましょう？　勿論肌と肌で、ですよ？　ふふふ、楽しみですね……」

自分の腕で体を抱き、身をくねくねとさせながら言うソフィーさん。本当に楽しみそうにしている。

隅々はいいとして、よくないけど、奥の奥まで……？　はっ！　考えちゃ駄目だ！！　この人の言葉に一々反応しちゃ駄目だ！！　分かってる、分かってるんだけど反応しちゃうのよ……。シアさんもこれくらいならいいかと私の反応を見てにこにこしてるし……。くううう！！

「一緒に入るのは構わんけど、人前で変な事始めんなよ？　後、何度も言ってるだろ、シラユキちゃんの前でそういう話するんじゃねえよ」

「そういう話？　私、また何か変な事を言いました？　すみませんシラユキ様……」

「わ！　謝らなくてもいいよ、ソフィーさん。気にしないでいいからね？」

この人はこれが普通だからしょうがない。どうしようもないんだよ……。私が慣れるまで、慣れることができなくても我慢すればい

いだけの事だ。お友達の性格をどうこうしようなどと偉そうな事は考えられない。

　ソフィーさんは、ナチュラルに、本当に自然にこういう事を話しちゃうんだよね。ナナシさんと違うのは、それを特に変な事だと感じていないみたいで、その事が私たちが疲れる一番の原因となっている。

「本人分かってないから咎め難いんだよなあ……。ま、シラユキちゃんはあんまりコイツの相手はしない方がいいぜ？　四六時中一緒にいる俺でも手を焼いてるんだからな」

「そんな事できないですよ、ソフィーさんは大切なお友達なんですから。その、あまりにもアレすぎるお話の場合はシアさんが止めてくれますから大丈夫ですよ。エディさんもソフィーさんのこと、あんまり怒らないであげてくださいね」

「はあ……、優しいなシラユキちゃんは、癒されるよ……。最近ホント疲れさせられる事ばっかなんだよな俺の周りって」

「周りにいい顔ばかりしていた貴方の自業自得ですよ。もういっそソフィーさんと一緒になってしまえばどうです？　周りの女性も諦めがつくでしょう」

「はあ、結婚ですか？　まだまだ考えられませんね……。今のところはただの冒険者仲間ですよ。それに、結婚しなくとも依頼で別れる以外は昼も夜も一緒ですから。昨晩も」

「はいそこまで」

　シアさんナイスタイミング。凄いなー、憧れちゃうなー。

エディさんの周り。うん、ホントに女性だらけなんだ、最近のエディさんの周辺って……

弟子にしてほしい、共に行動してほしいに始まり、普通にお付き合い、結婚、無理ならせめて抱いてほしい、などなど。まさに人生最大のモテ期が到来している。

最初は本人も悪い気はしていなく、そう長くも続かないだろうと思い、シアさんの言うように周りにいい顔をしすぎちゃったのかな？　そのせいでモテ度はさらに加速した。

四年位前かな？　経緯は聞いてないけど、ソフィーさんと一緒に行動するようになってからだと思う。何かソフィーさんは近くの男の人をモテさせる能力でも持っているのだろうか？　無いわー。

そんな状態がかれこれ四年近く続いていることになるね。最初は喜んでいたエディさんもさすがに疲れてしまっている。贅沢な悩みだね。

ソフィーさんの性格がこれだから他の女性避けには一切ならない、ただその性格にさらに疲れさせられるだけというのも悩みの一つになっている筈だ。

まあ、私にはどうする事もできない。エディさんには自力で頑張ってほしい。

「あ、シラユキ様。ご旅行の間にエディくんに面白い依頼が入ったんです。Dランクで名指しの依頼ですよ？　ふふ、凄いですよね」

「依頼？　エディさん個人に？　はー、エディさんもいつの間にか有名に、うん？　面白い依頼？」

「お、おい！　その話はやめろって！！　ああ、シラユキちゃん、気にしないでくれると助かるんだが……」

エディさんが焦ってソフィーさんを止めようとする、が。

「その焦り様、面白そうですね。ソフィーさん、是非お聞かせください。ああ、エディさん？　止めたいのならばソフィーさんの前にまずは私を止めて見せる事ですね」

「無理だよ！！　な、ナイフは仕舞ってください！！」

こんな面白そうな話題をシアさんが見逃す訳も無い、諦めて貰おう。私もちょっと気になるし、黙って聞くとしようじゃないか。

「獣人の女性からの依頼で、エディくんとの子供が欲しい、と。一晩のお相手の依頼の上位の依頼に当たるのでしょうか？　ふふふ。一晩で済みそうも無い所が面白そうですよね。毎日毎晩まさに精を注ぐ依頼、達成は妊娠の確認ですね。男性の方にとっては夢のような依頼だと思いますよ」

「言うなって！！」

……？　ナンデスト？　子供？　あ、ああ、エディさんとの子供……

「ななななんて依頼ですかそれ！！　そ、そんな依頼もあるんだ……。本当に冒険者って何でも屋なんですね……、あはは……」

だ、大丈夫！　これくらいならまだ何とか受け流せるよ！　私も

成長したね、うんうん。……うん？

「エディさん、子供、出来ちゃったんですか？　え？　お父さん？」

「受けてねえよ！！！　あ、しまっ！　ちょっ、バレンシアさん、今のは」

「姫様を怒鳴りつけるとは、本当にいいご身分になったものですね……。？　姫様、大丈夫ですか？」

びびびっくりした！！　ううう、お友達でも人間の人にいきなり怒鳴られるとやっぱり怖いや……

驚きすぎて黙り込んでしまった私を心配して、シアさんが覗き込んで来る。

「あー、ごめん。どうもソフィーと付き合いだしてから怒鳴り癖が付いちゃってる気がするな。な、泣いてないか？　あれ？　ついに俺もここまでか！？」

「怒鳴り癖？　確かに私は罵られながら突かれるのも大好きですけど……。エディくんそんな癖ありましたか？　たまに激しい時もありますけど、どちらかというと優しく抱いてくれる方が多いような……」

「ストーップ！！　いい加減にしろって！！　お前も死ぬぞ！？」

「え？　あ、また私何か言ってしまいました？　すみません。あの、バレンシアさん、死ぬ前に精も根も尽きるほどエディくんと、いえ、

どうせならここにいる男性全員を交えて乱れたいのですが……、一晩待って頂けますか？」

「ああ！　もうお前は黙ってろ！！　まさにこれだよ！　これのせいだよ！！」

「これ？　エディくんの○○○が何か？」

「お前はコレって言うとそれしか思い浮かばないのかよ！！！」

「ふふっ、ふふふ。もう、恥ずかしい事言わないでよソフィーさん。エディさんも気にしないでくださいね。今のはちょっとびっくりしちゃっただけですから」

「お？　笑ってるか、よかったー……。あー、ごめんなホントに。あんま怒鳴られたりする経験なんてないだろうし、怖かったろ？」

「うう、すみませんシラユキ様。何かシラユキ様には恥ずかしい事を言ってしまったみたいで……」

「大丈夫、ソフィーさんも気にしないでね？　無理に自分のどこが悪いかなんて考えなくてもいいから、ね？」

「はあああ、シラユキ様はなんてお優しい、可愛らしい……。あの、キスを、いえ、全身舐め回したいのですが、いいですか？」

「よくないよ！　わわ！　じわじわ寄ってこないで！！　シアさーん！」

「またですか……。姫様に触れたらころ、こほん。姫様に触れたら消すと言いましたよね私は。この世から物理的に、髪の毛一本残さず消して差し上げましょうか？」

「シアさん怖い！！　消しちゃ駄目！！　ソフィーさんもなんで嬉しそうな顔してるの！！？」

その１２２（後書き）

久しぶりの新キャラの登場です。
変態すぎるのもアレなのでかなり控え目にしてみました。

その123

「うへ、ソフィーティアいるじゃん……。ん？　あれ？　シア姉様？　それに、シラユキ様まで！」

「あ、本当ですね。シラユキ様、バレンシアさん、ごきげんよう。それと、エディさん、ソフィーティアさんも。あ、お二人とも？　キャロル先生とシラユキ様に、何かしようものなら、肺を焼きますよ？」

「リズさんの表現が具体的過ぎて怖い！！」

「俺もかよ！！　リズィーさんならともかくキャロルさんは見た目子供だしありえないって……。シラユキちゃんなんて本物の子供だぜ？」

「肺を焼かれるのはちょっと……。熱した鉄の棒で臀部を殴打するくらいにして貰っても構いませんか？」

「子供扱いはいいとして……。ソフィーティアはいい加減にしなさいよマジで……」

「キャロ、慣れなさい。慣れると本当に楽しい方なんですよ？」

じわじわと私ににじり寄って来ていたソフィーさんをシアさんがでこピンで迎撃していたところ、キャロルさんがリズさんを連れてギルドの中へ入って来た。

キャロルさんはソフィーさんを見て、あからさまに嫌な奴にあっ

たぞという苦い表情をし、リズさんはキャロルさんと私に何か手出しをされないようにと先手を打つ。

まあ、ソフィーさんもさすがに肺を焼かれるのは辛い、と言うか死んじゃうので何もしないだろうと思う。いや、別のお仕置きの提案が通れば全力で撫で回しに行くだろう……。そのお仕置きも充分過ぎるほどキツイと思うんだけど……

エディさんにも言ったのは、エディさんは女性関係で色々と面倒事も起きているので、多分噂を聞いたんだろうか、警戒されてしまっているんだと思う。もう少し話し合えばいい人だって分かるだろうから、特にフォローは入れなくても大丈夫だよね、多分。

ちなみにキャロルさんはいつものフリフリメイド服では無かった、残念だ。でも、カイナさんが用意したワンピースを着ているね。うんうん、可愛くていいね。

リズさんに可愛い可愛いと言われるのが嬉しかったのかな？　ふふふ。シアさんももっと言ってあげればいいのにね。

「あの、シア姉様？　シラユキ様の教育に悪いですよ本当に。コイツと会話する事には年齢制限を設けるべきだと私は思います！　ソフィーティア、シラユキ様に何か失礼を働いてないだろうね？」

た、確かに……。ソフィーさんはＲ１８制限が付くよ！！　……？　あれ？　私二十歳じゃね？　問題なくね？　まあ、変な考えは頭の隅に追いやって、と。

キャロルさんはソフィーさんのこと嫌いなのかな？　ソフィーさんもキャロルさんも私の大切なお友達なんだし、もうちょっと仲良くと言うか、友好的に接してもらいたいんだけどな。

第一印象が最悪すぎたか……。キャロルさんの可愛さについついお尻に手が伸びちゃったんだと思うよ。だから許してあげ、れないか……。むう、難しそうだなこれは。

「私がシラユキ様に何か失礼を、ですか？　どうしてかは分からないのですけれど、少し恥ずかしがらせてしまったみたいなのですが……、私がシラユキ様に失礼を働くなんてありえませんよ。女神様に誓ってそうはっきりと言えます」

本当に分からない、という顔をして答えた後、真面目な顔で女神様に誓うという最大限の言葉で否定するソフィーさん。なんだけど……

「との事ですが、シラユキ様？」

キャロルさんは全く信用していない。私に確認を求めて来てしまった。

「う、うん、大丈夫。何もされてないよ？　全身を舐め回そうと近付いて来ただけで……」

「してるじゃないですか！！　思いっきり全力でアウトですよコイツは！！！」

ひゃあ！　可愛い顔して大声はやめてほしいな。キャロルさんじゃなかったら泣いてるよ私……

「キャロルさん落ち着いて……。シアさんがいるんだから大丈夫だよ」

「は……、あ、すみません！！　シラユキ様の前でこんな大声を上げるなんて……。怖がらせてしまいました？　ああ……、大人気ないなあ私……」

少しビクつく私を見て盛大に謝り、少し落ち込んでしまったキャロルさん。

そこまで気にしなくてもいいのにと思うけど、見た目は子供だけど中身は分別のある大人だからね。子供の私の前で大声を張り上げるなんて大人気ない行為だと思っちゃったかな？

「キャロ、姫様の仰るように、私がいるのですから何も心配する事などありませんよ？　ソフィーさんには姫様に触れたら消すとはっきりと伝えてありますし、先ほど姫様ににじり寄っていたのも私から受ける軽めの仕置きを期待しての事。本当に姫様に何かしようなどという考えでの行動ではありませんからね。まったく、あなたはもう少し年相応の落ち着きを持ちなさい」

「ううう……、ごめんなさいシア姉様。すみませんシラユキ様。悪かったね、ソフィーティア」

シアさんの言葉に反省して、私たち三人に謝るキャロルさん。

しかし、ソフィーさんに対する謝罪は結構投げやりだ。まあ、うん、急には難しいよね。

それにしても、さっきソフィーさんがにじり寄って来ていたのはシアさんにお仕置きされるためだったのか……。確かに言われて見

れば、シアさんにでこピンされる度にやけに嬉しそうな表情をしていた気がする。きっとシアさんみたいな美人に攻められるのは大好きなんだろうね、この人は……。なんというドM。

「いえいえ。キャロルさんもリズィーさんも、もし私が何か失礼な言動をとってしまったら遠慮なく注意してくださいね。少しくらい強めのお仕置きも加えて貰えると嬉しいです。骨を折ったり肺を焼かれたりはさすがに辛いですが、軽い打撲や火傷くらいなら……。そうです、是非大声で汚らしく罵りながら私の臀部を」

「やっぱコイツ今ここで叩き潰しましょうか？」

「その後消し炭に、しましょうか？」

「二人とも怖い！！　慣れて！　慣れてあげて！！」

「嬉しそうに尻を向けるな！！　マジですんません二人とも……。後臀部言うなソフィー」

テーブルに手を付き、二人に向けてお尻をフリフリとさせるソフィーさんを注意するエディさん。

これは二人が慣れてくれるまでハラハラドキドキものだね……。シアさんも止め、？　何その凄くいい笑顔。ふふふ。シアさんが楽しそうだし、良しとしようじゃないか！

「しっかし、なんつー美人揃いだよこれ。バレンシアさんにリズィーさん、中身は変態でもソフィーも見た目はいいし。シラユキちゃ

んとキャロルちゃ、さんは美人と言うか可愛いだな」

今まで女性揃いで口を出し難かったのか黙っていたエディさんが、険悪な空気を打ち消すかのように話し出す。

「私がそう見えるのは子供だからですよ。でも、本当にみんな綺麗ですよね。私も大人になったらシアさんくらいの美人になりたいなー」

ここはありがたく乗っておこう。褒めるんだ、褒めてうやむやにするんだ！

実際本当に美人揃いだよねこの状況。その中に男の人はエディさん一人……。むむ？　これってまた、あらぬ誤解を招くんじゃ……？

「私の様に、ですか？　姫様に比べれば私程度、そこらの道端にに生えている雑草程度の存在なのでは？　ええ、今現在で既にそうです、姫様が成人なされたときは……、ふむ。その美しさには女神様ですらひれ伏す事になるでしょうね」

「いつにも増して大袈裟すぎる！！」

何真剣な顔で言っちゃってくれてるの！？　女神様は美人っていうレベルじゃないよ？　中身は結構軽い人なんだけど……。まあ、それは今はいいや。

「バレンシアさんは、本当に綺麗な方、ですよね。ふふふ、キャロル先生が好きになるのも、当然と思ってしまいますね」

「ちょっとやめてよリズ……。後、エディ？　今私の事ちゃん付けしようとしなかった？　子供扱いには慣れてるけど嫌なモンは嫌な

のよ、そこは気を付けなよ？　まあ、可愛いって言われて悪い気はしないけどさ」

「あ、危ねえ……。キャロルさんが大人でよかったぜ……。シラユキちゃんなら怒り出すところだった」

ふーんだ、どうせ私は子供ですよー。

「ええ、本当に。キャロルさんが大人でよかったです。うふふ……」

ソフィーさんが言うと何かニュアンスが違って聞こえるよ！！

とにかく、何とかこの場はうやむやにできたかな？　さすがはエディさんだね、女性関係で場の空気が悪くなるのには慣れているんだろう、きっと。あれ？　全然凄く感じないね？

「それで、エディくんはどなた狙いなのですか？」

「……は？　お前何言って……、はっ！？」

ソフィーさんの一言に、多少緩んだ空気が一瞬にして固まってしまった。

「五百の年を重ねたバレンシアさんのテクニックは大変興味深いですよね。リズィーさんの豊満なお胸に挟まれたいですか？　あ、挟みたいですか？　エディくんは大き目のサイズですけれど、リズィーさんでしたら問題なく挟みきれますね、うふふ。私はそこまで胸も大きくないですし、うまく挟んであげられませんからね。それともキャロルさんですか？　キャロルさんにはちょっとエディくんの

サイズはきつすぎるかもしれませんね」

「やめろ！！　頼むからやめてくれって！！　俺まだ死にたくない！！！」

ソフィーさんの口を押さえて黙らせようとするエディさんだが、ひょいひょいと軽くかわされ、最後まで言い切られてしまう。

な、何かとんでもない事を聞かされちゃった気がするんだけど……。なんでシアさんは止めてくれないんだろう？　いつもならリズさんの胸、辺りで止めてくれたと思うんだけどな……。うう、恥ずかしすぎる。

「ねえ、エディ……？　シア姉様とリズに手を出そうってんなら……、磨り潰すよ……」

怖い！！　キャロルさんが本気で怖い！！！　でもワンピース姿で凄んでも迫力が薄いよ！！

「はあ、私はともかくとして、キャロル先生狙い、ですか？　それは、はあ、何と言いますか……。まずは、目の水分からで、いいですか？」

リズさん笑顔なのに怖すぎる！！　目の水分からってどういう意味！？

「ちょっ！　ちがっ！！　違うって！！！　二人とも落ち着いてくれよ……。コイツが馬鹿なこと言ってるだけだって！　バレンシアさんも笑ってないで止めてくれよ。シラユキちゃん真っ赤になってたぜ？　今は怖がって青くなってるけど」

うん？　私今青い顔してる？　あ！　またシアさんいい笑顔してる！

なるほど。だからソフィーさんを止めなかったんだね……。キャロルさんとリズさんに脅されて焦るエディさんが見たかったんだね……

なんて酷いメイドさんだ！！　でもエディさんならいいかな？　と思ってしまう。なんて酷いお姫様だ私は！！

「すみませんエディさん。姫様も大丈夫ですか？　申し訳ありません、ふざけが過ぎましたね。キャロ、落ち着きなさい。リズィーさんもですよ？　私は勿論のこと、キャロがエディさん如きを相手にするとでもお思いですか？」

「あ、うん、大丈夫。でもちょっと怖かった……」

「も、申し訳ありませんシラユキ様！！　ああ、やっぱ私って大人気ないなあ……。だよね、エディだもんね」

「すみません、シラユキ様。キャロル先生のこと、となるとつい……。そうでしたね、エディさんですからね」

「ううん。二人とも大好きな人のことだもん、しょうがないよ。でももちょっと考えれば、エディさんとはありえないって分かると思うんだけどな」

「助かった……。でもなんか俺の扱いがひでぇ。おい、ソフィー、

お前はもうちょっと考えてから物を言えよな……。この三人の前だと命がいくつあっても足りねえよ」

「ええ？　また私、何かおかしな事を？　ううん、すみません……。少し考えますね……」

「何をだよ……。ま、いいか。はあ……、なんかすっげえ疲れたな……」

「あはは。お疲れさ」

「分かりました、シラユキ様狙いですね？　しっかり考えるとちゃんと答えは出るものなのですね」

「まです、ええ！？」

「考えた挙句のセリフがそれかよ！！！　まあ、こんな程度でバレンシアさんが動じ……、ナイフ！！？」

「うわ！　シアさん落ち着いて！　む、無言は怖いよ！！　さっきキャロルさんたちに言ったセリフを思い出して！」

「シラユキ様はまだ子供ですよ？　確かにとても可愛らしく美味しそうな方なのですが……。しかし、愛さえあれば種族の違いや年齢の差など、という言葉も」

「てめっ！　もう黙れ！！　この！　避けんな！！！」

「あん。女性の口を塞ぐにはどうしたらいいか、分かりませんか？　うふふ」

「人前でキスしろって言うのか!?　んな恥ずかしい事」

「え？　キス、ですか？　ああ、その発想はありませんでした。そんな方法もあるのですね……。女性の口を塞ぐにはキスよりも」

「はいそこまで」

キスよりも、何!?　何なの!?　キャロルさんも５０点コールしない!!　リズさんも手拍子やめて!!

ああ！　もう！　やっぱりこの人は疲れるよ!!!

その１２３（後書き）

と、こんな感じのキャラでした。
直接的な表現は避け、れてますよね？　不安だ……

これからもちょこちょこと登場するキャラなので、自分で書いていてさらに不安になってきてしまいますね。

……控え目ですよ？

その１２４

「くっくく、ははは…。それは疲れただろう？　くくくっ。ふう…。最初は排除するべきか悩んだが、やはりバレンシアの言うように放置して正解だったな。疲れるがいい友人なんだろう？　性格はああでも、最低限の常識は持ち合わせているみたいじゃないか。シラユキに手を出す事もありえんだろうしな」

「ええ、そうね。ふふふっ。本当に楽しそうな子みたいね……。私もその時の皆の反応、見てみたかったわ」

帰宅後、今日の出来事を父様と母様に話したら、笑われて大喜びされてしまった。

最初は排除するか悩んだとか初耳なんですけど……。まあ、いいや。本当に疲れる人だけど、本質は優しいいい人、いいお友達だからね。ただ本能に忠実なだけの人なんだよ、理性はちゃんと働いて……、？　それなりに働いているんだよっ。

「ううん……、ウルギス様公認のご友人なんですか……。私は本当にシラユキ様の教育に悪いと思うのですが……。ああ、心配です」

キャロルさんはまだ納得がいかないみたいだね。当たり前か……、あの人とは年単位でお友達をしている私でもかなり疲れさせられるからね。話してる内容を理解しちゃってるから、私の教育に悪いとかはもう無いと思うんだけど、キャロルさんには分からないか……。でも、全部が全部理解できてる訳じゃないんだよね。今日だって分からないところも多少あった。キス以外で女の人の口を塞ぐ？　あれは一体どういう意味で……

！？

まずい！　いやらしい事に決まってるよ！！

駄目だ、そんな事に興味を持っちゃ駄目だ私！！　考えるな、忘れるんだ！！

いいい今さらだけど、ソフィーさんは私の教育？に悪いんじゃないだろうか……！？

「そこまで心配する事は無いさ。それだけこの子の事を考えてくれているという事か……。優しい子だな、キャロルは。俺たちがここまで安心して静観できるのは、バレンシアがいつもシラユキの側にいてくれるからなんだ。キャロルもそうは思えないか？」

そう、父様がソフィーさんについての報告を受けてから、それでも静観を決めたのはこれが一番の理由だと思う。

シアさんなら、本当に私の教育に悪いと思う人なら即座に排除している筈だからね。ソフィーさんの場合は、多少教育には悪いかもしれないが、とても面白そうな人なので自分が監視しておけばいいや、的な感じなんだろうとは思うけど……。まあ、実際にシアさん抜きで会いに行くことはありえないし、気にしなくてもよさそうだ、安心だね。危険な会話になりそうなときもちゃんと止めてくれてるしね。

「は、はい……。シア姉様ならば絶対の信頼を寄せれますね。確かにそう考えると安心なのかもしれません。個人的には排除をお進め

したいのですが……、はっ！　すみません！　私個人の印象の良し悪しでシラユキ様のご友人を測ろうとするとは……。あ、あああ……」

「キャロルさん!?　もう、気にしすぎだよ」

どうやら自分の個人的な好みで私のお友達の排除を進めようとしたことに気づいて、大反省してしまったみたいだね。

ふふふ、キャロルさんはやっぱりシアさんのお弟子さんだね。こういうところはシアさんにそっくりだよ。

「落ち着いて、キャロル。シラユキが心配だからこそ出て来た言葉でしょう？　謝る事なんて何一つ無いわ。ふふ、ありがとね。これからも遠慮しないで進言して来て頂戴。でもね、バレンシアの判断を信じてあげてね？」

「は、はい……！！　はあああ……、私程度になんてお優しいお言葉を……。エネフェア様……、お優しい……、素敵……」

キャロルさんは母様の優しい言葉に盛大に感動してしまっている。

「ふふふ、この子も本当に可愛い子ね。冒険者を辞めて、本当の意味で家族になれる日が今から楽しみね。シラユキも貴女のことはとても気に入っているみたいだし、ふふふ。あ、その時は私たちに甘えてもいいのよ？　私たちから見れば貴女もまだまだ子供に……、私たちから見なくても子供に見えるかしら？　ふふ、ふふふふ。今、少し甘えてみる？」

私は今父様の膝の上にいるので、母様の膝は今空いている状態。

母様は自分の腿をポンポンと叩き、キャロルさんを呼ぶ。

面白いな、三百五十歳以上のキャロルさんが子供扱いだよ……。
ま、まあ、子供扱いはいつものことなんだけど……

「ええ!?　えええええエネフェア様に甘える!?　ななな!
そんなっ、恐れ多いです……。ああああ、でも、エネフェア様お綺麗
……。行っちゃおうかな……、あいたっ!　え!?　あ、シア姉様
?」

母様の誘惑に負けフラフラと歩み寄ろうとしていたキャロルさん
を、シアさんがチョップを一撃入れて現実へ戻す。

「落ち着きなさい。エネフェア様に甘えようなどと……。まさか、
姫様の特等席であるエネフェア様の膝の上へ乗ろうと?　たとえエ
ネフェア様ご本人が、そしてお優しい姫様が許そうとも、この私は
到底許す事などできませんね」

あれ……?　うわ!　シアさんが珍しく本気で怒ってる!!?
え?　今のどこに怒る要素が?　子供扱いされたキャロルさんが
怒るのなら分かるんだけど……

「ごごごめんなさいシア姉様!!　エネフェア様!　本当に失礼
なのですが、申し訳ありません、遠慮させて頂きます!!　お許し
ください!!」

「あら?　そう?　残念だわ。もう、バレンシアもそこまで怒るこ
とないのに……、まったく。それじゃ、代わりにシラユキを甘えさ
せてあげちゃおうかしら?　シラユキ?」

「へ?　あ、うん!」

「ああ！　シラユキ！！　く、くそう……、やはりエネフェアには勝てんか……」

父様の膝の上から降り、そのままの勢いで母様に駆け寄り、抱きつく。

「ふふふ。母様ー！」

「ほーら、ちゃんと座りなさい？　ああ、可愛いわ……、可愛すぎるわこの子……」

母様に撫でられ、頬擦りされ、キスもされまくる。し、幸せすぎる……

父様が悲しそうにしてるから後でちょっと甘えてあげよう。今日は父様と一緒にお風呂に入ろうかな？

「よく見てご覧なさい、キャロ。あなたはあの姫様のお幸せそうな可愛らしい笑顔を奪おうとしていたのですよ？　それがどれほど愚かな、決して許されない行為だと何故気付かなかったのですか……！！」

「わ、私はなんて事を……！！　そんな愚かな行いをしてしまうところだったなんて……。ああああ、シラユキ様本当に可愛らしい……。見ているだけで幸せになってしまいますね」

何か小声でこそこそと大袈裟なやり取りをしているようだけど……、母様の膝の上で幸せ全開の私には全く気にならない。好きにさ

せよう。

「ああ、姫様がお幸せそうだと私たちも本当に幸せだ。なあ？　カイナ」

「そうよね……。私もあんな風に甘えられたいわ……。一緒に寝ることのできるバレンシアが羨ましい……」

「私の当番は絶対に譲りませんが、メアとフランに頼んでみたらどうです？　まあ、あの二人もそう簡単に譲るとも思えませんが」

「た、頼んでみるか……？　い、一度姫様に胸をだな」

「え、ええ。吸ってもらいた」

「吸わないよ！！？　カイナさんもクレアさんも私のこと赤ん坊扱いするんだ！？」

さすがに止めるよこれは！！！

「ふーんだ。どうせ私は甘えん坊の子供だもーんだ！」

「ああ、拗ねてるシラユキも可愛いわ……。でも……、この子ももう二十歳なのよ？　子供扱いはいいけど、赤ん坊扱いはやめてあげてね？」

できたら子供扱いも……。ううん、二十歳なんてまだまだ子供だし、しょうがないか。

相変わらずと言うか、私お付のメイドさんズは一緒に寝るときにたまに、その、そういう事をしてきているみたいだ。本人達曰く、幸せ過ぎてやめられないとのこと。ホントに幸せそうに話すからあんまり強く言えないんだよね……

寝てるときの私も私だよ！！　……あれ？　私が悪いんじゃね？

無意識とは言え、吸っちゃう私が悪いんじゃないか……？

ああ、そうだ……、赤ん坊みたいな事をしてしまう私が悪いんだよ……

「な、何故か姫様が落ち込んでおられるのですが……。あ、あの、姫様が一言やめろと命じてくだされば、私もメアもフランも即座にやめるんですよ？　お、落ち込まれてしまうとは……、さすがにもうやめておいた方がよさそうですね。申し訳ありませんでした、姫様。姫様の優しさに付け込んでしまっていたようですね。あの二人にも私から伝えておきますから、安心してくださいね」

落ち込む私に勘違いしたのか、シアさんが謝り、やめようとまで言ってくる。

「いいよ、やめなくても、私が寝てる間の事だしね。でも、話題に出すのはやめてほしいかな……。やっぱり恥ずかしいよ」

メイドさんズの楽しみを奪うなんてことは絶対にしたくない。ただ、その事を話題に出して私を赤ん坊みたいに言うのだけはやめてほしいんだ……

「も、申し訳ありませんでした！！　私の不用意な一言で姫様を落ち込ませてしまう事になるとは……。くうっ、これはどう償えば…

…」

「クレアは胸としか言ってないじゃない、悪いのは私よ。姫様、どうか、罰するなら私を……」

「まったく、大袈裟だな二人とも。シラユキがお前達家族に罰を与えるなどする訳が無いだろうに。まあ、シラユキ可愛さから来る行動なのだからしょうがないだろう。誰が悪いという事は無い。強いて言うならこの子の可愛さが悪……くないぞ!?　お、俺は今なんという事を言ってしまうところだったのだ……！！」

フォローを入れた父様が落ち込んでどうするのよまったく！

「ふふ、ごめんねみんな、気にしないで！　あ、そうだ、父様？今日一緒にお風呂入りたいなー」

「お、おお……。なんて優しい子なんだシラユキは……。ああ、そうだな、最近はバレンシアとばかり入っているからなあ。十歳くらいまでは俺と毎日一緒に入っていたのだがな……。ん？　そういえば、どうしてバレンシアと入るようになったんだ？」

「どうしてって……、？　どうしてだろう？　言われてみれば、今はシアさんと一緒に入るのが当たり前になっちゃってるね。うーん……？」

本当に、言われてみれば、いつのまにか、だ。

別に父様と一緒にお風呂に入るのが嫌になった訳じゃない。思春期に入った女の子は嫌がるようになるが、そういう訳でもない。

まあ、私は思春期が来ようが、成人になろうが絶対に嫌になるなんて事はありえないんだけど。父様のことは大好きだし、勿論兄様とだってだ。兄様とは本当にたまにしか一緒に入ってないんだよね。いつも姉様と一緒に入ってるっぽいし。まあ、それは今は置いておく。

「シア姉様と一緒に……。シラユキ様、羨ましいです」

「ははは。おお、そうだ。キャロルもバレンシアも一緒にどうだ？」

シアさんと一緒にお風呂、という言葉に反応して羨ましがるキャロルさんに、父様がとんでもない提案をする。

「ええ！？　え、あ、その……、シア姉様と一緒に入れるならそれもいいかも？」

「キャロ……。はあ……、今日は姫様もウルギス様と入られるようですし、一緒に入ってあげますか。まったく、いい大人が子供のように……」

「は？　え？　や、やったー！！　あああ、シア姉様とお風呂……！！　嬉しすぎるううう！！」

本当に子供のように喜ぶキャロルさん。

むう、可愛いな……。しかし、シアさんに何かされるんじゃ……。うん？　あ！　シアさんが何かされる側か！？　なにそれ凄い！！　キャロルさんはやっぱり凄いや！　意味不明だよ！！！

「四人で入ればいいだろう？　お、どうせならクレアもカイナも、エネフェアもどうだ？　うちの風呂ならここにいる全員が入ってもまだ余裕があるだろうしな」

「わ、私もですか！？　私はその、ウルギス様にでもその、肌を晒すのは……」

「ううううウルギス様とおふ、お風呂……。はううう」

「父様なんてこと言うの！？　カイナさん？　カイナさーん！？　ああ、駄目だ、完全に茹で上がっちゃってるよ……」

「駄目よ、ウル。あなたから見たらみんな子供に見えるだろうから仕方ないのだけれど、他の皆から見たらあなたは素敵な男性なのよ？」

「むう……、そうか。それならエネフェアと三人で入るとするか。なあ？　シラユキ」

「うん！　父様、気をつけなきゃ駄目だよ？　みんな綺麗なメイドさんだから一緒に入りたいのは分かるけどね」

「……ウル？」

「こらシラユキ何を……、エネフェア！？　違う！　違うぞ！？」

その１２４（後書き）

５年程度では誰も特に何も変わらず、ですね。
シラユキはさらに子供っぽくなったかもしれませんが……

その125

「ふふ、ふふふふ。んふふふふ……」

「もう、シラユキニヤニヤしすぎだって。ニヤニヤしてても可愛いなあこの子……。そんなに私とお出掛けするのが嬉しいの？」

「うん！！　す、っごく嬉しいよ！！　フランさんと一緒に町でお買い物なんて初めてのことだから！　上手く言えないけど、うん、嬉しいな！！」

今日はなんと、フランさんと一緒に町へ買い物に出て来ている。勿論シアさんも一緒。護衛としてキャロルさんも付いて来てくれている。メアさんは残念ながらお留守番だ。

普段森の中のお店、と言うか、野菜や果物を作っている人のお家へ一緒に行ったことは何度もある。だけど、町の方への買い物にフランさんがついて行きたいと言い出したのは初めての事。

今度町へ行く時に連れて行ってくれればいいよ、とフランさんは控えめな事を言っていたのだけど、私が明日早速行こうよ！　とテンション高めに勝手に決定してしまったのだ。

フランさんも買出しは買出し担当の人に任せちゃっているので、町へ、森の外へ出る事は滅多に無いみたいなのだが、今回は自分の目で実際に見て商品を選びたいらしい。

その気になる商品とは、料理の食材ではなく、調味料。しかも、買いにいく先が調薬ギルドなのだ！！

フランさんと一緒の初めてのお買い物に加え、初めて行く事にな

る調薬ギルドが備わり最強に見える。私の嬉しさはさらに加速した。
わくわくドキドキと嬉しさが溢れ、ニヤけが止まらない。テンションも高めになってしまうのも許してもらいたい。

「ちょ、シア姉様、今日のシラユキ様いつもよりさらに、さらに可愛くないですか？　ああ……、フラン羨ましいなあ……。私もシラユキ様と手を繋いで歩きたいなあ……」

「今日の私達は護衛がメイン、姫様とフランの邪魔をしてはいけませんよ？　ああ、本当に可愛らしい……。相手がフランなら嫉妬の心も羨望の気持ちも全く出て来ませんね。純粋に、嬉しそうな姫様のお顔を拝見でき、幸せになってしまいますね」

私達二人の少し前を歩く二人の会話が聞こえてきた。

いつもはシアさんと二人、手を繋いで歩いているね。兄様姉様がいるときはそのどちらかか、或いは両方と手を繋いでいる。その場合は少し後をついて来る感じかな？　今日みたいに少し前を歩くなんていう事は初めてだね。さっき言っていたように、今日は護衛に徹するんだろう。別に、一緒に手を繋いで歩けばいいのに……。私の手は二本あるんだよ？
む？　むう……、そうだ、私の手は二本だったね。それは当たり前。しかし一緒に歩いているメイドさんは三人だ、一人余ってしまう。
フランさんと手を繋ぐ事は決定事項として、残る片方の手はシアさんかキャロルさんか、どちらかを選ぶ事になるのか……。うーむ、

難しい問題だねこれは。

「ふふ。シラユキが嬉しそうにしてると私も嬉しくなっちゃう。もっと早くこうして一緒に町に出て来てあげてもよかったかな……。でも、町に用なんて特に無いからね。それに、遠いし、人が多くてゴミゴミしてるし、あんまり進んで来たいとは思わないのよね。次はまた何年も先の話になるんじゃない？　って聞いてる？　シラユキー？　こら！　考え事しながら歩くと転ぶよ？　ま、その時は私が引っ張ってあげるから安心しなさい。ふふふ」

「ふぇ？　あ、ちゃんと聞いてたよ。フランさんもシアさんみたいに早く走れればいつでも来れるのにね。私も町はちょっと人が多すぎて怖いかなー。でもシアさんが一緒にいてくれるし、絶対安全安心だよ？　フランさんもたまにでいいからまた一緒に来ようよー」

「うーん……。シラユキのお願いだし、聞いてあげたいんだけどね……。いいじゃない？　町じゃなくても。クレアの家に野菜貰いに行ったりとか、姉さんの花畑にみんなで行くとかじゃ駄目？」

「う？　あれ？　困らせちゃった？　ううん、駄目じゃないよ？　ごめんねフランさん、我侭言っちゃったね」

森の中のエルフの人はあんまり外に出たがらないんだよね。フランさんの言うように、特別な用事でも無い限りは全部森の中で済ませてしまう。済ませてしまうと言うよりは、済んでしまうと言った方がいいかもしれない。町へ行く必要性を誰も感じていないんだね。森の住人でそんなに頻繁に町へ行くのは買出し担当の人くらいなんじゃないだろうか？　まあ、私が知らないだけで他にも沢山いる筈だけどね。町で何かお仕事をしたりしてる人もいると思う。

「まったくこの子は……。今のって、謝るのは私の方だと思うんだけど？　いつまで経っても我侭を言うって事を覚えないんだから、シラユキは……」

「フランさんを困らせちゃう我侭なんて絶対言えないよ！　普段我侭は結構言ってると思うんだけどなー」

自分の言う我侭って本人には分かり難いものなんだよね。他の人に言われて初めて気付く感じかな？　私もきっとそれなりに我侭は言っているんじゃないかなと思う。

「シア姉様、シラユキ様が我侭を言うなんて想像もできないんですが……」

「え、ええ……。姫様はああ見えられてもご自分の事を我侭なお姫様だと思ってらっしゃるんですよ。キャロの方がよほど我侭ですよね？　ふふふ」

「くっ。で、でも、私が我侭を言うのはシア姉様に対してだけで……。その、す、好きな人には甘えたいじゃないですかっ」

な、何かキャロルさんが可愛い事言ってるな……

フランさんと顔を見合わせ、お互いにんまりと笑顔を見せ合う。

ふふふ……、少し聞き耳を立てようじゃないか。シアさんとキャロルさんの会話は聞いてて結構面白いんだよね。

「まったく、年を考えなさい、年を。まあ、好きな方に甘えたくなる気持ちは分からないでもありませんが、ね。少し前に一緒に入浴

してあげたでしょう？　それで我慢なさい」

ああ、なんかこのシアさんいいな。厳しくてもたまに優しさを見せちゃうお姉さん的な感じがして……、いいな！　私にももうちょっと厳しいところを見せてくれてもいいんだけどなー。

「ええ？　まだこちらに来てから一回だけですよ？　折角の温泉宿でも二人っきりでは入ってくれませんでしたし……」

「あなたがベタベタとくっ付いて来るからでしょう？　どうもキャロと二人きりだと身の危険を感じてしまうんですよね」

「好きな人が目の前で裸でいるんですから当然ですよ。シア姉様は相変わらず肌も綺麗で、胸もお尻も張りがあって……。ううん、その……、久しぶりに、あの、あ、甘えさせてほしいなーと思うんですけど……」

はっ！？　キャロルさんの今の、甘え、の言い方は危険だ！！
そ、そっちの意味での甘えだ！！！
止めた方がいいんじゃないか！？　と、フランさんを見ると、もの凄くいい笑顔で、人差し指を立て、口に当てている。
面白そうだから黙って聞けという事ですか……。ううん、恥ずかしいよう。

「そういう事は恋人を作って、と前にも言った筈ですが……、まったく……、いやらしい。あなたもソフィーさんのことは言えませんよ？　姫様は今の一言で完全に理解されているんです、覚えていませんか？　ですよね、姫様？　後、フランはもげなさい」

振り返り、にっこりと笑顔で私達に問いかけてくるシアさん。

「普通にバレてた！！」

「あはは、ごめんごめん。なんか、レンとキャロルって恋人って言うより仲の良い姉妹に見えるね。レンがお姉さんっぽくて面白いよ、ホントに」

「んー、シア姉様はシア姉様だからね。小さい頃から成人するまで、成人してからも一緒に旅してたからかな。私の事は妹とか娘みたいに想ってくれてるんだと思うよ。私は恋人として見てほしいんだけどなあ……」

きゃ、キャロルさんはこういう事を素直に口に出せちゃうんだ、凄いな……

やっぱりこの見た目でこの大人的言動は違和感が凄いよ。キャロルさんが本当に大人の女性だという事を思い出させられてしまう。

私が大人になって、それで好きな人とか出来ちゃったとして……、こんなに素直に好きな人に好きと言える大人になれるんだろうか？

うん、無理だね。考えるまでもなく答えが出てしまったよ……

「私をそこまで想ってくれているのは嬉しいのですが、その想いに答えることは残念ながらできませんよ。そう、何度も言っているでしょう。私などより素敵な方はそこら中に溢れているというのに……。早く新しい恋でも見つけなさい」

シアさんより素敵な人がそこら中に溢れてたら怖いよ！！　ありえないよ！！

シアさんって自分の事低く見すぎだよね……。自分がどれだけ綺麗で優しくて強くてカッコよくて……、素敵な人だっていう事を自覚して無いのかな？

「ああ、カイナとかどうです？　カイナもキャロの事はかなり気に入っている様ですしね。それに、カイナは男性嫌い、きっと簡単に女性趣味に転がりますよ？　あなたが手取り足取り一から教えてあげるといいですよ」

「だからシアさんは簡単に身内を薦めちゃ駄目！！　な、何を教えるって言うの！？」

「カイナさんかあ……。カイナさんも綺麗な人ですよね。私の事をやけに構ってくれてるんですけど、あれはまさか……！？」

「違うよ！　違う……よね！？」

「何でそこで私に聞くかな……。でも、カイナもちょっと怪しいよね、シラユキのこと異常なまでに大好きだし、レンと同じ怪しさを感じるよ。ふふふ……」

「失礼な……。と、着きましたよ。話はまた帰ってからにしましょう。？　姫様？」

「か、カイナさんも……、シアさんと……、同じ……？」

「あ、ちょっとシラユキ？　冗談だからね？　でも、カイナは本当にそっちに行っちゃいそうだよね」

「キャロ、落としなさい。やってしまいなさい」

「ええ!?　だ、駄目です！　私はシア姉様一筋なんです!!」

「大声で言うのはやめなさい！　姫様も落ち着いてください、私もカイナもノーマルですよ？　ただ姫様のことを何よりも大切に想っているというだけですから」

「う、うん！　えへへ……」

もう、シアさんは嬉しい事言ってくれちゃって。照れちゃうよ、ふふふ。

いつの間にやら調薬ギルドに到着してたみたいだね。さてさて、中にはどんな物が置いてあるのか、楽しみだね!!

その１２５（後書き）

２３時５８分に書き終わりました。ギリギリだ！！

本当は調薬ギルドの話になる予定だったのですが、何故かこんなお話に……

シアさんとキャロルの二人の話も書いてみたいですね。

その126

いつの間にか、本当にいつの間にか調薬ギルドの前に到着していた。シアさんに付いてきただけだから道も覚えて無いよ。

ふむ……、外観は冒険者ギルドとそんなに差は無いね、入り口横に大きな掲示板もある。冒険者ギルドと違うのは入り口に両開きのドアが付いている事くらいかな？　二十四時間営業ではないんだろう。

掲示板はやっぱり雑務依頼なんだろうか？　貼ってある紙の数は向こうと比べるとかなり数が少ないね。

うん？　調薬ギルドって確か、お薬関係のギルドだよね？　一体どんな依頼があるんだろう……

病気のお薬、怪我のお薬を依頼？　でも、それこそ調薬ギルド本来の役目の筈。多分そういった依頼は中の掲示板にあるんじゃないかな？

おっと、また自分だけで考え込んじゃってたよ。分からないなら分かる人に聞けばいい。

シアさんとキャロルさんに……、？　この二人は元冒険者メイドさんと冒険者だった……。いくらシアさんでも他のギルドの事は詳しくはないよね。

まあ、中に話しかけやすそうなエルフの人がいたら聞いてみよっと。

「ふーん、ここが調薬ギルド、ね。見た目は普通の建物だね。ねえ、レン、あの紙が貼ってあるボードって……。調薬ギルドに雑務依頼なんて無いんじゃなかったっけ？」

ギルドを正面から見て、フランさんが疑問に思ったことをシアさんに聞いている。

むむむ、今ちょっと気になる発言があったね。調薬ギルドには雑務依頼は無い？

「ああ、あれは調薬ギルドの物ではなく、冒険者ギルド向けの雑務依頼ですよ。一応どのギルドの前にもああいった掲示板が設けられていますね。主な依頼は、採取時の護衛と荷物持ちでしょうか？そのギルドに関係したものが貼られる事が多いですね。まあ、実際に依頼を出しているのも調薬ギルド関係者、ギルド前ならすぐに貼り出せますからね、便利なのでしょう。急ぎの依頼でない場合や、どうしても必要な物でもなければこちらへ、なるべく早めに手に入れたい物、期間の限られている物などは冒険者ギルドの方へ貼りに行く感じですね。見ての通り見に来ている方は少ないでしょう？と言うか今はいませんね……。あって無いようなものですね」

なーるほどねー。こっちも冒険者の雑務依頼なんだね。

自分から聞くまでも無く疑問に答えが出てちょっと嬉しいね。ありがとうフランさん、聞く手間が省けたよ。これで中にいる人がエルフじゃなかった場合も安心だね。

知らない人間種族の人にいきなり話しかける勇気は中々持てないし……。情け無いな私。

「ま、たまに見に来ると変わった依頼があったりして面白いよ。あ

！　ちょっとシラユキ様には見せない方がいいんじゃないですか？　シア姉様」

なぬ？　そんな危険そうな、ある意味私にとって危険そうな依頼があったりするのかな？

しかし、今日はよく先手を打たれる日だね。早速どんな依頼があるのか見に行こうとしてたところだったよ。

「そうなの？　シアさん。ちょっと見てみたかったんだけど」

「そうですね……、ではまずは私が先に確認を。それで問題がなければ姫様もご覧になって頂いて構いませんよ」

「あ、私は別に見ても構わないよね？　ちょっと気になるから一緒に行くことにするわ。ふふ、中々面白そうじゃない」

私には見せない方がいいと言う言葉に興味を引かれたのか、フランさんもシアさんと一緒に依頼の紙を見に行くようだ。

「キャロ、姫様に近付く輩は全て排除なさい。責任はウルギス様が持って頂けますから」

「分かりました！！　シラユキ様、ご安心くださいね。今日は武器は持って来ていませんが、人の一人や二人、いえ、何人来ようとも素手でミンチに」

「表現が怖い！！　キャロルさん可愛いのに言う事がたまに怖いよ……。もう……、大丈夫だから普通にまってようよ。あ、手、繋ぐ？」

どこまでシアさんにそっくりなんだキャロルさんは……
キャロルさんに向けて右手を差し出す。

「え？　あ、はい！！　あああありがとうございます！！　うわあ……、柔らかい……、すべすべ……」

何故かお礼を言いながら私の手を両手で取り、撫で始めるキャロルさん。
シアさんとフランさんがにこにこしながらこちらを見ている。そんなに微笑ましいのか！

むう、くすぐったいなもう……。キャロルさんの手だって柔らか、ん？　よく見るとキャロルさんの手って結構傷だらけだね、細かい傷跡がいくつも見える。指先の方は最近出来た包丁傷かな？　絆創膏のような物が貼ってある。前にお風呂で見たときも、腕足にはかなり傷跡があったんだよね。私の魔法で消しちゃおうとしたら兄様と姉様に怒られたっけ……

キャロルさんみたいな可愛らしい人の手に傷跡なんて似合わないよね。それに、痛々しい。せめてこれだけは治してしまいたい。シアさんの注意が逸れている今のうちに……

「姫様？　まあ、無いとは思うのですが、キャロの手の傷跡を消そうと癒しの魔法をお使いになりませんように……。ああ、申し訳ありません。姫様がその様な事をなされる筈がありませんでしたね」

「ううううん！　し、しないよ？　しませんよ？」

「なんて分かり易い慌てよう……。駄目だよ、シラユキ？」

また先手を打たれた!!　シアさん鋭すぎるよ……。フランさんにも怒られてしまった。

まあ、怒られて当然のことなんだけどね。この前の姉様みたいに酷い傷って言う訳でも無いし、ちょっとした包丁傷と昔の怪我の跡だもんね……

「もう、シラユキ様？　前にも言いましたが、私の体の傷は戒めの様な物なんですよ？　大抵は油断から付いてしまった傷ですからね。この傷跡を見て、気を引き締めるんです」

「うん、ごめんねキャロルさん。でも、治したくなったらいつでも言ってね！」

「ふふ。では……。冒険者を辞め、メイドとして暮らしていこうと決めたらお願いしますね。その頃にはもっと上手に、自由に使えるようになっていると思い、いえ、なっている筈ですからね」

私の手を優しくなでながら、そう、諭すようにキャロルさんは言う。

「言い切られちゃったねシラユキ。これはしっかり練習しないとね、ふふふ。でも、レンがいない時は絶対に使っちゃ駄目だからね？　勿論居ても勝手に使っちゃ駄目。分かった？　あんな思いはもう御免だよホントに」

「はーい！　頑張るからね、キャロルさん！　楽しみにしてて！」

「姫様可愛らしい……」「シラユキ様可愛らしい……」

なんという似たもの師弟。

癒しの魔法の練習なんて簡単にできるとは思えないけど、キャロルさんが冒険者を引退するのなんてまだまだ何年も、何十年も、もっともっと先の話だろう。その頃にはきっと、キャロルさんが言ったように自由に？　安全に？　上手に使える様になっている……、といいなあ……

シアさんとフランさんが掲示板の雑務依頼を確認しに行っている間、私はキャロルさんとここでお留守番。ほんのちょっと離れるだけなんだけどね。すぐ目の前だ。

キャロルさんは私と手を繋いで、にこにこといい笑顔でシアさんたちを見守っている。それでも多分、ちゃんと周りに気を配ってるんだと思う。

しかし、キャロルさん嬉しそうだなー。私と手を繋ぐくらいの事がそんなに嬉しい事なのかな？　ちょっと不思議だけど悪い気はしないね。あ、そうだ、私もキャロルさんと手を繋いでてちょっと嬉しく感じてるし、それと同じなのかもね。ふふふ。

「うわ……。レン、これじゃない？　これは確かにシラユキには見せられないわ……。見てどんな反応してくれるのかはちょっと気になるけど」

「どれです？　ええと……、ああ、これですね。まったく、こんな物一体何に使うんだか……。ふむ、これ一枚のようですね、破り捨てておきましょうか」

え？　ちょ、え？　し、シアさーん？

シアさんは自然な動作で依頼の紙を剥がし、細かく破り、ご丁寧に魔法で風を起こしてその破片を吹き飛ばしてしまった。

「し、シアさん!?　え?　いいのあれ?　キャロルさん、いいの?」

「よくは無いですけど……。依頼の紙が剥がれ落ちてどこかへ行ってしまう事はよくある事ですし、いいんじゃないでしょうか?　それに、これでシラユキ様も見ることができますよ?」

「あ、うん、そっか、そうだね。って!　私のせいみたいな言い方やめて!　ううん、実際私のせいなんだけどさ……」

「ふふ、本当に問題はありませんからご安心くださいね。さ、私達も見に行きましょうか」

「う、うん。大問題だと思うんだけど……」

キャロルさんに手を引かれ、掲示板の前へと向かう。

「あ、姫様。姫様のお目にお入れすることのできない様な依頼はありませんでしたので、ご安心ください。ささ、こちらへどうぞ?抱き上げて差し上げますから」

「シアさんさっき破り捨ててたよね!?　何しれっと言っちゃってるの!?」

「あはは。シラユキ落ち着いて。まあ、いいじゃない、レンのやること一々気にしてちゃ身が持たないよ？」

「ううう、そうなんだけどね……。その依頼を出してた人が困っちゃうんじゃないの？　やっぱり気になっちゃうよ」

「ああ、そっちを気にしちゃってるんだ？　レン、ちょっと早まったかもね」

「え、ええ……。姫様はなんてお優しい……。見ず知らずの方の本当にどうでもいい依頼のために心痛めてしまわれるとは。申し訳ありません、軽率な行いでした」

「や、破っちゃった物はもうしょうがないですよ！　ホントに優しすぎる方だなあ……。シラユキ様、他の依頼を見てみませんか？」

「うん。それじゃ……、フランさんお願い」

「あれ？　私？　ふふふ。いいよ、おいで？　レンはちょっと反省してなさい」

「姫様！？　ああ、そんな……。くう、しかし、姫様がお与えくださった罰、喜んで受けましょう」

「なんでちょっと嬉しそうなんですかシア姉様……」

その後、フランさんに抱き上げられ、たまにくすぐられながら依頼を一通り見てみたのだけれど、特に目新しいものは無かった。

採取の護衛兼荷物持ちの依頼。少し危険な地域での採取の依頼。
やはり調薬ギルド前の掲示板なだけあって、素材の採取関係の依頼ばかり貼られていた。

私に見せられないような依頼とはなんだったんだろう？　シアさんの一言からすると何かの採取依頼な気もするけど……
まあ、いいや。考えても答えは出ない。教えてもらう事もできないだろうし、諦めよう。

入り口で随分と時間を使ってしまった気がするね。早く中に入ってフランさんのお買い物を……

！？

調味料！？　調薬ギルドで調味料！？

そうだ、そうだよ！　なんか変じゃないかそれ！！
むう……、どうやらフランさんと町でお買い物、さらに調薬ギルドへ初めて行く事の嬉しさが強すぎて疑問に思わなかったみたいだ。
嬉しさで頭が麻痺していたのか……

その１２６（後書き）

すみません、まだ入り口なんです……

十二歳以上編までのキャラクターの簡単な紹介を一つ書こうと思います。

フルネーム、身長、年齢、髪の色と長さと瞳の色、主な髪型、くらいでしょうか。

後は少しだけ、本当に簡単な紹介文を数行程度ですね。

結構先、忘れた頃の投稿になるかもしれませんね……

その127

シアさんが先頭に立ち、入り口のドアの片方を開ける。ドアベルが付いていたのか、チリンチリンと澄んだ綺麗な金属音が聞こえた。

私とフランさんは手を繋いでいるので一緒に、最後にキャロルさんの順でギルドの中へと入る。

心臓がドキドキと言っている。初めての場所はどうしても緊張しちゃうんだよね。

しかし、今のは凄くいい音だったなー。金属製の風鈴のような……。ちょっと談話室の窓に一つ欲しいなこれ。もしどこかで買った物ならどこで売っていたか聞いてみよう。

おっと、ドアベルの事ははもう置いておこう。ついつい興味を引かれたらその事だけ考えちゃうのは私の悪い癖だね。

くるりとギルド内を見回……、す？

！？

「んー……。レンの言ってた通りただのお店だねここ。調薬ギルドって言うくらいだからもっと、何て言うか……」

私と同じ様に中を見回したフランさんが感想を述べる。

感想と言っても言葉にならない感じかな？　私も違う意味で言葉にならないんだけど……

ギルド内はあまりにも普通すぎた。
外観からすると少し狭めな部屋に、商品らしき小瓶や箱が綺麗に並べられている棚がいくつも並んでいる。フランさんも言っていたけどただのお店、雑貨屋さんにしか見えない。
恐らくはこちらはただの売店のような物で、奥の方へ入ると薬品の調合などをする部屋があるんだろうね。今工場直売って言う言葉が頭をよぎったよ……

部屋の右隅にはカウンターが見える、あそこでお金を払うんだろうね。そこだけは他のお店と違ってるかな？　カウンターの中にいるのは茶色の髪の女の人、あの耳、エルフの人だ。よかった、まずは一安心。
この世界は防犯システムなんていうものは無いからね。大抵のお店は入り口に清算する所があって、そこで来客の確認や、窃盗の防止の為の監視も兼ねているんだろうと思う。

ま、まあ、そんな事より私は……

「言いたい事は分かりますよ。らしくないでしょう？　今は私たちの他に誰もいないようですが、こちらは一般の方もそれなりに買い物に見えますからね、ただの雑貨屋という認識で問題はありませんよ。傷薬や包帯、薬草類などなど。魔法薬も店員、と、ギルド員でした、失礼。ギルド員に頼めば用意してもらえますね。それなりの値段がする物なのと、体に負担の掛かる薬なので安全のために棚には置いていないようですね。まあ、一般の方が魔法薬を使う事など早々無いのですが……。あるとすれば精々痛み止めくらいですね。それも棚に置かない理由なのかもしれません。ああ、以前にお話した冒険者の必需品もここで取り扱っていますね。後は保存食と、フランのお目当ての……、姫様？　姫様！？　どうされました！？」

フランさんと私に説明をしてくれていたシアさんが、私の異変に気付いて駆け寄って来た。
異変って言うほどの大袈裟な事じゃないんだけどね。ちょっとこれは……

「え？　あ！　どうしたのシラユキ！？」

「シラユキ様！？　い、いったい何が……」

フランさんとキャロルさんもシアさんの言葉で気付き、どちらも心配そうに、下を向いて黙っている私の顔を覗き込んでくる。

いけない、これ以上変な心配を掛けるわけには……。別に体に何か異常が起きた訳じゃない。

ここ、ここってさ……

「ううううう、しゅごいにおいだよ……」

手で鼻と口を押さえているので、ちょっとくぐもった鼻声になってしまった。恥ずかしい。

凄い匂いなのよここ！　つ、辛い！　強い匂いで頭がくらくら、気分が悪くなってしまう。
薬品の匂いなんかじゃなくて、ええと……、あ、あれだ、化粧品売り場や生活雑貨売り場に近いかもしれない。石鹸やシャンプーの売り場だね。
そこにさらに食品の匂いが混ざった感じか……。ううう、なんで三人とも平然としてられるのよう……

「ああ、そういう事。びっくりさせないでよ、もう……。確かにちょっと匂いがキツイかな。はい、ハンカチ。でも、そんなに辛い？　キャロルはどう？」

「私は全然。色々な匂いがするなーくらいにしか感じないんだけど。っと、いけない。シラユキ様、大丈夫ですか？　お辛いなら無理をせず、外で待ちませんか？」

ふ、二人とも全然平気なんだ……、凄いな……。とりあえずフランさんから受け取ったハンカチで口と鼻を押さえよう。これだけでも全然違う、随分と楽になった。

むう、これはどうしたものかな。どんな商品が置いてあるかは凄く興味がある、見て回りたい。でも、この匂いの中動き回るのは正直言って辛い……！！

「どうひよう……。ちょっと辛いけど頑張るよ！　……やっぱりくひゃーい！」

一瞬ハンカチを外してみたのだが……、やはり無理だった！！

「あはは……。何この子可愛い……。うーん、無理しちゃ駄目だよ？　シラユキ。すぐに、とは言えないけど急いで選んで買ってくるから、外で待ってなさいって」

「それがいいね。シラユキ様、お楽しみにしていたところ残念ですが、やっぱり無理はいけませんよ。あまり慣れない強い匂いにさらされ続けると、鼻の感覚が狂ってしまうかもしれませんからね。フランの事はシア姉様に任せて、シラユキ様は私と……、？　シア姉様はどこに？」

「ふぇ？　ひあさんいない？」

言われてみれば、いつの間にかシアさんがいない。本当にいつの間に離れたんだろう。

何も言わずに私の側を離れるなんて珍しいね。それだけキャロルさんの事を信頼してるっていう事かな。ふふふ。

「あ、いた。ほら、二人とも、あそこあそこ」

フランさんの指差す方へ目を向けると、シアさんを確認できた。カウンターの人、店員さんと何かお話してるみたいだね。あ、ギルド員さんだったっけ？　まあ、いいや、似たようなものだろう。

……うん？　まさか、シアさんギルドの人に文句をつけに言ったのか！？

うわ！　ありえる！　と言うかそれしか思い浮かばない。と、止めに行かなきゃ！

「あ、ちょっと！　勝手に行っちゃ駄目だってば！　ああ、もう……。キャロル、私たちも行こう」

「あー、うん。シラユキ様大丈夫かな……。知らない場所でシア姉様とは離れたくないのかな？　可愛いなあ……」

奥へと進むと少し匂いが強くなった気がする。でも、そんな事で歩みを止める訳には行かない！！　ギルド員さんが殺されちゃう！！

「あ、姫様。今、換気の許可をもらいましたから、もう少しだけ我慢してくださいね。完全に匂いが消える訳ではありませんが、幾分かは薄くなるかと思いますので」

!?

「ご、ごめんねシアさん！」

「いえいえ、お気になさらずに。姫様は強い香りのする物は苦手でしたか？　シナモンはあの香り自体が受け付けられないのでしたよね」

あれ？　何か勘違いしてるなシアさん。私が謝ったのはシアさんが文句を言いに行ったって勘違いしちゃった事であって……。い、いや、このまま勘違いさせておこう！　態々訂正する事も無いね、うんうん。

「ううん？　強い匂いが苦手っていう訳でもないよ。でも、ここはいろんな匂いが混ざり合ってて気持ち悪くなってきちゃって……」

「ええ!?　だ、大丈夫なんですかシラユキ様……？」

「換気が終わるまでハンカチを当てていてください。無理をしてはいけませんよ？　キャロ、あなたはそのまま姫様とフランの側にいてください。特に姫様からは目を放さないように。ロレーナさん、加減はしますが、商品が落ちてしまったらすみません。その時は弁償しますのでご安心ください」

ロレーナ、さん？　あれ？　シアさんのお友達なのかなこの人。え？　シアさんお友達いたんだ!?　ちょっと酷い事を考えてしま

った。本気で反省。

「ああ、気にしないでいい。風で落ちるような商品は軽いから……、棚の高さから床に落ちたくらいでどうにかなったりはしない。拾って元の場所に戻してくれればいいよ」

お、おお？　何今の平坦な喋り方。表情もまったく変わって無いし……。もしかして、ちょっと怖い人？　って風？　今日はそんなに風は強くないよね？　どういう事だろう……

「分かりました。では、落ちてしまったものを見てから決める事にしましょう。フラン、姫様の髪をお願いしますね」

「髪？　ああ、なるほどそういう事。うん、了解」

そう言うとシアさんは窓に向かって歩いていく。言われたフランさんは私の髪を、後ろから抱き締めるように押さえてくれる。なんだろう？

店内、じゃない、ギルド内の左右にある大きめの窓を開け放ち、その後入り口のドアも両方開き、開いたままになるように固定する。開いた時にまたドアベルの綺麗な音が鳴った。やはりアレは欲しい。

その後シアさんは、入り口から真っ直ぐ奥の壁際に立ち、軽く左腕を横に払う。風を起こす魔法を発動したみたいだ。フランさんに私の髪を押さえさせたのはそういう事か。

なるほどね。入り口に向かって風を流して、左右の窓から外の空気を取り入れるわけか。いいね、この魔法の使い方。さすがシアさんだカッコいい。あんな事を言っていたが、商品が棚から落ちるような事も無かった。加減もばっちりだね。

しかし、一連の動作の間中ずっと、ロレーナさんが私の事を無表

情で見つめてきていたのが少し気になったね。
　無表情と言うか、なんだろう？　完全に気が抜けてしまっている表情かな。腑抜けた顔、というのはちょっと言い過ぎか。

「如何ですか？　姫様。多少は薄まったと思うのですが……」

　シアさんの言葉にハンカチを外してみる。ついでに風が収まっても私にくっ付いたまま離れようとしないフランさんからも離れておく。動きにくいのよ！

　おお、凄い。かなり匂いが薄まったね。まだ少し気になるけど、我慢できないほどじゃない。

「うん！　ありがとシアさん！　ふふふ、シアさんすごーい！！」

「ふふ、どういたしまして。窓はこのまま開けたままにしておきましょうか。構いませんよね？　入り口はさすがに閉めておきますか」

「うん、構わないよ……。入り口も開けたままでいい。んー……、可愛いなこの子。お菓子、食べる？」

　シアさんに答え、カウンターの引き出しから綺麗に包装された紙の袋を取り出し、私に差し出すロレーナさん。さっきと変わらず平坦な、気力の無い喋り方だ。
　何の脈絡も無く、いきなりの事だったのでつい受け取ってしまった。

「え？　あ、う？　ありがとう……？」

この包みは見たことがあるね。確かミランさんがよく買ってくるお店の包装だ。この重さは多分クッキーだね。

っと、そっちじゃないよ！　何故かいきなりお菓子を貰ってしまった。この人はいい人かもしれない。……お菓子に釣られる私、子供か！！　子供だよ！！　知らない人からお菓子を貰って、ホイホイついて行きそうな子供だ……

「こーら、シラユキ。もっとちゃんとお礼を言う！」

「あ、ごめんなさい！　ありがとうございます！」

フランさんに怒られてしまった。

ぺこりと頭を下げて、しっかりとお礼を言う。

「バレンシアー、この子、撫でてもいい？」

「私ではなく姫様に許可を得てくださいね。それよりまずは……、そろそろお互い自己紹介をしてみては如何です？」

「んー……、別に必要無いと思うけど……。シラユキ様のことは知ってるし、私はただのギルドの手伝いだし、もう会う事も無いよ、多分」

ああ！　無気力な声でそう言われるとちょっとショックだ！

この人は今まで私の周りにいなかったタイプの人だな……。私に対して興味を持ってくれてはいるみたいだけどね。

クレアさんとはまた違った意味で顔に表情が出ない人なのか。それともただ単純に元気が無い人なのか？　シアさんの話す感じからすると悪い人じゃないというのは間違いない。お菓子もくれたしいい人だよね。

うーん……、お友達になってほしいな。でも、確かに今日はたまたま会えただけなんだよね。次にここに来る日は一体いつになるか、っていうレベルの話しだし。

いいや！　細かい事は気にしない、後で考えよう。結局後で考えちゃうのか私は……

「そんな事言わないで、ええと、お友達になってもらえると……。あ、自己紹介しましょう？　その、してほしいです。ええと、私は、シラユキ・リーフエンドです。よろしくお願いしますね！」

またぺこりと軽くお辞儀をして、名前だけの簡単な自己紹介。

「うん、知ってる」

ああ、そっけない！　くう、負けないもん！！

「あ、あの」

「私はロレーナ、ロレーナ・アコスタ。調薬ギルドの手伝い。あー、正式なギルド員じゃないよ。んー……、よろしく。それじゃ、友達になった事だし、撫でてもいい？」

「ふぇ？　あ、うん！　じゃない、はい！　どうぞ」

「何で敬語？　まあ、いいか。お、さらさらだ、私とは大違い。さ

すがお姫様」

どうやらそっけなく思えただけで、そういう話し方の人なんだね、きっと。

ロレーナさんは優しい手つきで私の頭を撫でてくれている。

確かにロレーナさんの髪って、少しボサボサと言うか、全く手入れをしていない感じだね。前髪も目に掛かっちゃってるし。長さは背中くらいまでで、首の辺りで纏めて縛ってるだけかな？

折角長い髪なんだからもう少しお手入れした方がいいと思うんだけどなー。メイドさんに全部任せちゃってる私が言っていいことではないから言わないけど、勿体無いよね。

多分こういう人ほど、身だしなみを整えたら凄い美人に変身するんだよ。……胸も大きめだし……。

「わ、私も数えるほどしか撫でた事無いのに、初対面で……。ぐぬぬぬ……」

「ふふふ。キャロルさんも許可なんて取らなくていいからね。いつでも撫でていいんだよ？」

「キャロルは身長差もそこまでないからね、難しいんじゃない？膝の上に座らせてあげるのだってちょっと危なっかしそうだもんねえ」

「見習いにそんな権利は与えられません。まあ、撫でるくらいはたまにして差し上げるといいですよ。姫様は撫でられるのがお好きですからね」

「ああ、このちっこいメイドさんって前に来たことあるね。いつだっけ……？　まあ、いいや。元気してた？」

「ちっこい言うな！　撫でるな！！　シア姉様の友人じゃなかったらこの腕へし折ってやるのに……」

「また怖い事言ってる！　ろ、ロレーナさん、キャロルさんはこう見えても大人の人だから……」

「うん、知ってる」

「知っててやってるんだ!?　す、凄い人だ……」

思わぬ所でお友達が増えた、嬉しいね！　でもここはちょっとくさーい！！

その１２７（後書き）

調薬ギルドの内部情報はあまり書かないかもしれません。
それにしても今回登場の新キャラのロレーナ、動かし辛いです。動いてくれない……
無気力系のキャラは難しいですね。

その128

「んー……、可愛いな。おお、ほっぺ柔らかい。お、伸びる伸びる、マシュマロみたいだ」

「うにゅにゅ……。！？　ひはいひはい！！」

「あ、ごめん」

「ロレーナ！！　シラユキ様になんて無礼を……！！」

「わあ！！　落ち着いてキャロルさん！　ちょっと痛かっただけだから！　怒ってないから！！」

「どれどれこっちは……。おお、こっちも柔らかい。でもシラユキ様の方がいいな……」

「さ、触るな抓るな引っ張るなー！！！」

シアさんフランさん、早く戻ってきて！！　この人の相手は多分キャロルさんじゃ無理だ！

シアさんは、フランさんと一緒にお店、じゃないやギルドか、ええい紛らわしい、もうお店でいいや。お店の中を見て回っている。

私も一緒に見て回りたかったのだが、ロレーナさんとももっとお

話がしたかったので、カウンターの中に椅子を出してロレーナさんの隣に座っている。ここへは来ようと思えばいつだって来れるしね。折角出来た新しいお友達とのお話を優先する事にした。

一応念のためにキャロルさんが側に残ってくれている。シアさんじゃなくてキャロルさんなのは、キャロルさんではフランさんの調味料探しの役に立てないからだ。

さっきから私の頭を撫でたり頬を抓ったりして遊んでいたロレーナさんだったが、今度は興味がキャロルさんに移ったようだ。キャロルさんもさっきの私の様に、頬を引っ張られて遊ばれている。

それでもシアさんのお友達だからか、キャロルさんは無理に手を払いのけるようなことはしない。やっぱり大人だねキャロルさんは、我慢強い。思いっきり子供扱いされてるのにあんまり怒らないんだよね。むう、これは見習わなくてはいけないね。

おっと、それよりも今がチャンスだね。

キャロルさんがターゲットになっている内に質問をしてみよう。ロレーナさんとお話するために残ったんだしね。

「ロレーナさんは調薬ギルドのお手伝いさん？　でした？　お店の方の店員さんをしてるんですか？」

「ん、だからなんで敬語？　まあ、いいや、好きにして。あー、手伝いは手伝い。手伝いの無いときはこっちにいるだけ」

キャロルさんを弄びながら、こちらに顔を向けずに淡々と喋るロレーナさん。キャロルさんはもう好きにしろとでもいった感じで不貞腐れてしまっている。

だ、駄目だこの人！　多分具体的に聞かないと答えが返ってこな

いんだね……

今ので分かったのは、ギルドのお手伝いとしてここにいて、今はお仕事が無いからお店の番をしているっていう事、かな？

しっかり考えてから質問しないといけないみたいだね。むう、面白いぞこの人！！　たったこれだけで大好きになってしまったよ。

「うん、敬語はやめるね。やめていいんだよね……？　ええと、まずは何から……、あ、その前に、色々質問しちゃっても大丈夫、かな？　調薬ギルドのことはシアさんもあんまり詳しく無いと思うし、私も今まで全然興味が無かったから。ここはどんなお仕事をするギルドなんだろうって気になっちゃって……。……あのー？　ロレーナさん？　聞いてる？」

キャロルさんを弄るのが楽し過ぎるのか、私に見向きもしなくなってしまった。寂しい。

「ちょっと、ロレーナ、シラユキ様の質問を無視？　いくらシア姉様の友人だからってやっていいこ」

「調薬ギルドは……、混ぜるギルドかな。ちゃんと聞いてるよ。あ、キャロルちゃん、こっちこっち」

「誰がキャロルちゃんよ！！！　くう、コイツのちょっと遅れたテンポは私には合わない……、って、うわ！！　やめろこのっ！」

キャロルさんをひょいと持ち上げ、自分の膝の上に乗せるロレーナさん。そしてそのまま私の方へ体を向ける。

あ、なるほど、これで話しやすくなった？　私はロレーナさんと向き合って話ができる。ロレーナさんはそのままキャロルさんを可

愛がる？　弄る？　事ができる。
　ふふふ。やっぱり面白い人だねロレーナさんは。よし！　続きをしっかりと聞かせてもらおう。調薬ギルドは混ぜるギルド、だったね。どういう意味だろう？

……？

……？

！？

「続きは！？　あれ？　さっきのだけで説明終わりなの？」

「シラユキ様、コイツ多分質問した分の答えしか返しませんよ……。くそっ、子供扱いは嫌なはずなのに居心地がいいわここ……」

「あはは……。えーっと、混ぜるギルドってどういう意味なのかな。その、うーんと……、色々教えて！」

　全く知らないことは質問も中々思い浮かばないよ……。とりあえず今の質問の答えを聞いてから、また質問を考えよう。
　ロレーナさんとの会話は一歩一歩確実に、だね！　私はこの微妙に遅いテンポ、嫌いじゃないね。

「はあ……、めんどくさい……」

「ごめんなさい！！！」

「ロレーナ！！！　あんたマジでいい加減に」

「混ぜて新しい物を作るギルドだよ。新しい物だけじゃないか……」

「なっ！？　は……、くっ、コイツもう嫌だ……。シラユキ様、後はお任せします……。私はお力になれそうにありません……」

キャロルさんはツッコミを諦め、完全に力を抜いてロレーナさんにされるがままになってしまった。

ああ、ビックリした……。質問のしすぎで嫌われちゃったのかと思っちゃった。

でも、めんどくさいって言ってたね。これ以上はさすがにやめておいたほうがいいかな？　今日出来たお友達に早速嫌われてしまうような事は、絶対にしたく無いからね。

「ん、次は？　……終わり？」

聞いていいんかい！！！　はっ！？　はしたないわ私ったら……

ああ、もう！　ロレーナさん大好きだ！！！

「混ぜて新しい物を作るって、やっぱりお薬とか？」

「まあ、そうだね、主に薬関係。薬草の調合率なんかで変わる効能を調べたり……。滅多に無いけど全く新しい薬品を作り出したり……、だね」

「はー……、凄いや、本格的だね。それは魔法薬とはまた別の、えっと、普通のお薬のことかな？　魔法薬ってどうやって作ってるん

だろう……」

「それはシラユキ様でも教えられないな……。あー、製造の過程で魔法を使う工程があるんだけど……。うん、そんな感じかな……。私はその工程の手伝いをしてて」

「あ！　いいよいいよ言わなくても。ごめんね、変な事聞いちゃって。あ、そうだ！　調味料はなんで扱ってるの？　保存食ならまだなんとか納得できるんだけど……、冒険者さんたちも色々買いに来るみたいだしね」

「ふう、疲れた……」

「ごめんなさい！！」

「ん、なんで謝る？　まあ、いいか。混ぜるのは薬草だけじゃないから……、だね。あー……、簡単なのだと塩とか、普通のハーブもある。そうやってる内に調味料っぽいのが出来ちゃったから……、かな」

「あ、話してくれるんだ……。話すのが嫌になっちゃったら言ってね？　うーん……、昔から受け継がれてきた物なのかな？　面白いね、それ。合成調味料じゃなくて、調合調味料かな。ふふふ」

「合成調味料……か、いい名前だね。調味料はまとめてそう呼ぶことにしよう……。ああ、大丈夫、シラユキちゃんと話すのは楽しいよ……」

「え？　勝手に決めちゃっていいの？　あ、ロレーナさんが呼ぶだけか……。うん？　シラユキちゃん？　ふふふ、嬉しいな」

「おお、可愛い……。キャロルちゃんちょっとどいて……、シラユキちゃんおいで」

「え？　わ！　あ……。ふふ、ふふふ」

「あー、助かった……。って！　シラユキ様を膝抱きに！？　羨ましい……！！　あと、さっきスルーしてたけど許可も無くシラユキ様をちゃん付けするな！！　様を付けなさい！　様を！！」

「……シラユキちゃん様？」

「言うと思ったわ！！　冗談じゃなくて素で言ってるのがさらにむかつく！！　このっ、あいたっ！　え？　あ……、シア姉様……？　はっ！？　シラユキ様！？　え？　泣いて……？　こ、これは、その……、違うんですよ！　決してシラユキ様に対して怒鳴ってる訳では……」

ああ、よかった。シアさんナイスチョップだ。

キャロルさんみたいに可愛らしい人でも、やっぱり目の前で、私に対してじゃなくてもがんがん怒鳴られるのは怖いや。涙が出てきちゃった……

ロレーナさんに対しての言葉だっていうのは分かってるんだけどね。私は今ロレーナさんの膝の上にいるわけだから、そのロレーナさんを真正面から怒鳴ると私に向かって怒鳴ってるように感じちゃうんだよね。

「はぁ……。キャロ、あなたは外で待っていなさい、もう選び終わ

りましたから。姫様？　大丈夫ですか？　本当に申し訳ありません、不肖の弟子に代わりお詫びします。フラン、姫様を。ロレーナさんもお騒がせしてすみません。それでは、これだけ会計をお願いします」

「ごめんなさい！　も、申し訳ありませんシラユキ様！！　どどどどうしよう……」

「あ、うん。やっちゃったねキャロル、後でしっかりとレンに怒られなさいよ？　ウルギス様たちには黙っておいてあげるけど……。ほら、シラユキ、おいで。あ、私達も一緒に出ようかな。えっと、ロレーナさん？　ごめんね。キャロルは見習いメイドだから、許してあげて」

ロレーナさんの膝の上から私を受け取り、抱き上げてくれるフランさん。

ちょっと怒ってるみたいだね、珍しい。私が泣いちゃったせいか……

「ん？　んー……、何が？　まあ、いいか。キャロルちゃんは子供の前で大声出さないようにね……。もっと落ち着くといい」

「だ、誰のせいだと……、いや、私のせいか……。しかし、この落ち着き様は見習うべきか。……ごめん！　またね、ロレーナ」

「ああ……、うん。また、ね。シラユキちゃんも、そっちのメイドさんも……、？　そういえばこの人は誰……？　まあ、いいか……」

一言謝って外へ出て行くキャロルさんに、力無くヒラヒラと手を振るロレーナさん。

フランさんもキャロルさんに続いて歩き出そうとする。

おっと、いけない。涙目で恥ずかしいけど、最後にもう一つだけ、これだけは聞いておかなければ。

「フランさん待って。大丈夫、泣いてないよ。あの、ロレーナさん、また、遊びに来てもいい？」

「ここは遊びに来る様な所じゃないけど……、いいか。うん、またいつでもおいで。私は大体はここにいるから」

あれ？　今ちょっと笑顔にならなかった？　見間違いかな……

「ありがとう！　また来るね！」

私が言い終わると同時にフランさんは歩き出す。表情をうかがって見ると、にこにこと少し嬉しそうだ。機嫌は直してくれたかな？

「あ、あの！　本当に申し訳ありませんでした！！」

ギルドの外へ出たら、キャロルさんに大きな声で謝られてしまった。辛そうな表情だ。

一体何を謝る事があると言うんだろう？　大声にビクビクして涙が出ちゃった私の弱さが悪いと思うんだけどな……

「キャロルさんは悪くないよ。ちょっと……、ビックリしちゃった

だけだから、ね？」

「思いっきり大声に怖がってたくせに……。あー、キャロル？　シラユキはこう言ってるけど、そう簡単に許して貰えるとは思わないようにね。さらに言うなら私は許す気は無いから。シラユキを泣かすとか、許せる訳無いの分かるよね？」

むう、フランさんはまだ怒ってるか……

「ううん、ヘコむなあ……。シラユキ様本人が全く怒ってないのがさらに……。よし、やっぱりウルギス様にも自分で言うよ。シア姉様に叱られるだけじゃ全然足りない、自分が許せないわ……」

どうやらもの凄く落ち込ませてしまったみたいだ。私自身が何か罰を与えないと納得してもらえないのかな？

うーん……、何をどう考えてもキャロルさんは悪く無いのになー……

「お待たせしました。姫様、ご気分は如何です？　キャロルには私がきついお仕置きを与えておきますので……、？　フラン？　貴女はさっきから何をしているんです？」

「ん？　ああ、シラユキの髪の匂いをちょっとね。ギルドの中の匂いが付いちゃったかな？　ほら」

「え？　匂い付いちゃってる？　むう、自分じゃ分からないや。鼻が麻痺しちゃったかな？　どう？　シアさん。臭い？」

「失礼します……。な……、なんて事！！　フラン、姫様をこちらへ。キャロ、フランの護衛は頼みましたよ、私は姫様とすぐに館へ戻ります。姫様、すぐに帰って髪をお流し致しますからね。暫く、いえ、ほんの少し我慢をお願いします」

「ええ！？　そんな大袈裟なあうっ！？」

私が言い終わるより前に、シアさんは建物の屋根の上に飛び乗り、そのまま屋根伝いで町の外へ。町の外へ出てから、森に入ってからも全く勢いは落ちず、あっという間に家に付いてしまった。

あまりの速さに目を回してしまったよ……。やっぱりシアさんは凄い、本当にすごいメイドさんだ。

真剣な顔で私の髪を念入りに、でもいつもの様に丁寧に洗ってくれたのが嬉しすぎた。今日は丁度よくシアさんと一緒に寝る日だし、いつもよりも甘えてみようかな？　シアさんも喜んでくれそうだし、私も何となくシアさんに甘えまくりたい気分。

……吸わないよ？

その１２８（後書き）

ロレーナは「まあいいや」と「まあいいか」を言い過ぎですね。
結構面白いキャラになってくれたと思います。

次の登場はいつになる事やら……

その129

「ちょ、シアさんくすぐったいよ……、ふふふ。もう、匂い嗅ぎすぎ！　まだ匂い残ってる？　私には全然分かんないんだけどなー」

「す、すみません。どうしても気になってしまいまして……。あ、いえいえ、匂いが気になるのではありませんよ、ご安心くださいね。少しでも残っていてはいけないとつい、念には念を入れていたのです。いつもの姫様のとても美味しそうな香りですよ」

夕ご飯も食べ終わり、またお風呂でしっかり髪を洗われた後、眠くなるまで談話室でメイドさんズとお喋りの時間。お相手は、シアさんメアさんフランさんのいつもの三人だ。キャロルさんは父様と母様の所へ謝りに行っている。

どうせ気にするなって笑われて終わりだろうと思うけどね。キャロルさんも私の事をとても可愛がってくれているし、そんな私を泣かせてしまった事を相当気に病んでるみたいだね。フランさんももう怒ってないみたいだし、本当に気にしないでくれるといいんだけどね。

あれは泣いたって言うほどじゃなかったんだけどなー。ちょっと怖くなって涙が出ちゃっただけで……。泣いてるよそれ……

私の周りはみんな穏やかな、のほほんとした性格の人ばかりだからね、大声を上げる人なんてほとんどいない。兄様にはたまに少し大きめの声で怒られることも無い事は無いんだけど……。兄様はずっと一緒にいた家族だから、まったく怖いとは感じないね。逆に嬉しいくらいだ。

私がここで悩んだって仕方ないか……。キャロルさんが戻ってくるのを待とう。私が眠くなる前に戻って来てくれるといいんだけれど、ね。

今私はシアさんの膝の上に座らせてもらっている。丁寧にしっかりと髪を洗ってもらったお礼のようなものだね。こんな事がお礼になるのはシアさんくらいだよね。ふふふ、安上がりな人だね。

「美味しそうな香りって……、まあ、確かにオレンジのいい匂いだよね。姫のシャンプーってシアが選んでるんだっけ？」

私の使っているシャンプーは柑橘系の香り。シアさんオレンジ大好きだもんね。私ももうこれじゃないと落ち着かないようになってしまった。

「ええ、姫様の身の回りの物はほぼ私が。香りについては私の趣味を押し付けてしまった感じになってしまったのですが、姫様に気に入って頂けた様で私も嬉しいですね」

「うん、私もこの香りは大好きだよ。シアさんとお揃いだよねー。ふふふ」

今日は何故かシアさんに全力で甘えたい気分なのだ。体を横に向けて抱きつき、スリスリと頬擦りをする。

「な、なんて可愛らしい……、幸せすぎます。ああ、そうです、姫様？　このシャンプーも調薬ギルドの製品なんですよ」

「え？　シャンプーまで作ってるの？　ホントに雑貨屋さんなんだね……」

「あ、そういえばいくつか並んでたね。もしかして、あの石鹸もそう？　バラの香りとか色々置いてあったよね確か。へえ、手広くやってるのねー」

感心したように言うフランさん。

冒険者みたいに何でも屋とも言えちゃうね。冒険者の何でもやるっていう意味とはまた違う、何でも売ってるって意味なんだけど。うーん、私もお店の中を見て回ればよかったかな……。まあ、シアさんたちがまた何か買い物に行く時にでもついて行けばいいだけか。ロレーナさんとまた遊びに行くって約束もしたしね。

「私も一緒に行けばよかったかな？　でも、うーん、買い物程度で町まで行くのはちょっと面倒だね、町って遠いしさ。あ、シアにおぶさって走ってもらう、とかどう？」

「自分で走りなさい。まあ、確かに魔法で早く走れないメアとフランには町は遠いですよね。二人とも練習してみてはどうです？」

「え？　あれは無理無理！　あんなの絶対できないって。私は元から魔法なんて全然使ってないしさ、練習したってできるようになるとは全く思えないね。姫は天才だよねー、ホントにさ」

早く走る魔法、跳躍魔法の水平移動版だね。私も結構慣れたもの

で、ある程度抑えたスピードなら木にぶつからないで町まで行けるようになった。少し急ぐとまだがんがんぶつかっちゃうんだけどね、そこはまた頑張って慣れるしかない。

シアさんみたいによそ見をしながら、さらに考え事をしながら、しかも私の全力よりもはるかに速い速度で走れるようになるには、一体どれだけ頑張って練習しなければいけないんだろう……

「カイナとクレアみたいに子供の頃から訓練してきてるってんならまだしも、私らは家事がメインのメイドだからね。シラユキが生まれるまではメイドですらなかったし」

「え？　そうなの？　メアさんもフランさんも、もちろんシアさんも、どこからどう見ても素敵なメイドさんだよ？」

二人とも、料理に掃除に私の遊び相手に、なんでもこなせる凄いメイドさんなのに。てっきり私が生まれる前からこの家でメイドさんをしていたんだとばかり思ってたよ。

そうなると、私が生まれるまでは一般の、ただのこの森の住人だったんだよね。うん、うーん？　ああ、なるほどね。家事全般が得意で、なおかつ胸の大きな人という理由で選び出されたのか。

ということは、姫様巨乳大好き説が囁かれていなければ私お付のメイドさんは誰か他の人になっていた可能性もある訳で……。あ、それはやだな……

そう考えると変な誤解が広まったのも悪い事ではなかったのか。あの兄様の妹だから、ってみんな納得しちゃってるみたいだし、まあ、そこまで気にならなくも……、やっぱり気になるよ！！　おっぱい好きのお姫様はおかしいよ！！

「あ、あの……、姫様？　大変嬉しいお言葉を頂いて感動なのではありますが、その……、人前ではさすがに恥ずかしいですよ？　あ、いえ、姫様に胸を揉んでいただける事自体は本当に嬉しく、幸せな事なのですが……」

「う？　何？　シアさ……、あ」

揉んじゃってた！！！

う、うわあ……。無意識に揉んじゃうとか、私はどれだけおっぱい好きなんだ……

「ふふふ。やっぱり姫っておっぱい好きだよね。ちょっと考え事してて、目の前に胸があると無意識に揉んじゃうとか……。それとも、シアだからかな？」

「ええ！？　ち、ちが」

「うんうん。一緒に寝るときも絶対揉んでくるよねこの子。あのくすぐったさとムズムズ感は……。でも、可愛くて、嬉しくて、幸せで……、ついつい吸わせちゃうのよね。メアとレンはたまに感じちゃったりしない？」

！？　かかかか感じる！！？

「私はそういうのは無いかな。揉まれても吸われてもちょっとくすぐったいくらいだね。くすぐったいけど、それ以上に幸せすぎちゃってさ、夜中中撫でてたまに寝不足になるよね」

「うんうん、なるなる。シラユキ撫でてると時間なんてあっという間に過ぎちゃうんだよね。ふふ、さすがに感じたりはしないか。あ、

レンはどう？　それよりもレンは寝てるシラユキに何か悪戯してそうなんだけど……」

い、悪戯！？　どどどどんな！？　い、いやらしい！！

はっ！？　な、無いってそんな事！　シアさんはノーマルだよ！ちゃんと信じなきゃ！！

もう、やっぱり私は悪いお姫様だね。大切な家族をちょっとでも疑っちゃうなんて……

「まあ、さすがに感じたりはしませんが……、悪戯ですか？　ふむ……、していると言えばしていますね」

「シアさん！！？　な、な、ななな……！！」

「ふふ、落ち着いてください姫様。言い方が悪かったですね、すみません。悪戯と言っても耳をくすぐってみたり、頬を突付く程度ですよ。姫様は眠っていらしても反応がとても可愛らしく、つい手が伸びてしまうのです。申し訳ありません」

そう言うとシアさんは、とてもいい笑顔で軽く頭を下げる。

そ、そういう意味か……。一瞬もの凄くいやらしい考えが頭に……、！？　わ、忘れよう！！

「ビックリさせないでよ……。あと、それくらいで謝らなくてもいいからね。そんなのみんな、起きてる時だって、いつだってやってる事だよ。あー、もう、ホントに焦ったよ……」

「あらら、あっさり信じちゃうんだ？　面白くない。いいの？　シ

ラユキ。もしかしたらとても口には出せないような、凄くいやらしいことを寝てる間にされてるかもしれないんだよー？　ふふふふ」

フランさんが両手をわきわきとさせながら、いやらしい笑顔で言ってくる。

「ふーん、だ。私はシアさんのことを信じてるもん！　ね？　シアさん？　寝てる私にいやらしいことなんてする訳ないよねー？」

「え、ええ、ももも、勿論です！」

「シアさん！？　目を逸らさないで！　お願いだから信じさせてー！！」

「ふふ、ふふふ。冗談ですよ。姫様のあまりの可愛らしさについ調子に乗ってしまいました、すみません。はぁ、幸せです……」

本当に幸せそうに目を細め、頬擦りをしてくるシアさん。私もさらに嬉しくなって頬を擦り返す。

これだけ幸せな気持ちになると、別に寝てる間くらい何されてもいいやと思えちゃうね……。！？　思っちゃ駄目だよ私！！

あ、危ない！　変な事考えちゃ駄目だ！！

ま、まあ、シアさんが私の嫌がることをするなんてありえないんだけどね。もし内緒で何かしてたとしても、精々キスとか、耳を舐めたりする程度だろう。うんうん、それくらいなら全然問題ないね。

……問題ないか？　あれ？

いくら考えてもシアさんならいいやという結論しか出ない。これがシアさんのメイドスキルの効果なのか……！！

「ひ、姫可愛すぎ！！　むう、なんか羨ましくなってきたんだけど……。シア、ちょっと代わってよ」

「あ、私も！　ほーら、シラユキ？　好きなだけ揉んでも吸ってもいいからおいでー？」

「フランは今日一緒に買い物行ったでしょ？　手繋いでさ。私は今日の姫分が不足してるんだってば！　ほらほら姫、こっちにおいで。私のも好きなだけ吸っていいよ」

「一緒に来なかったメアが悪いのよ。ま、シラユキに選んでもらおうかな」

「うん、それがいいね。さあ、姫、どっちのおっぱい吸いたい？」

「胸が基準なの！？　揉まないから！　す、吸わないからね！！　いい加減赤ん坊扱いはやめて！」

「誰が代わると言いましたか……。まあ、いいです、ここで私も参戦すると致しましょう。姫様、今脱ぎますから、少しお待ちくださいね」

「脱いじゃ駄目！！　うわ！？　メアさんもフランさんも対抗しないで！！　わわわわわ、今ルー兄様が来たらみんな襲われちゃうよ……」

「冗談だって。うーん、やっぱり姫の反応は最高だね」

「あはは。ごめんねシラユキ、さすがにこんな所じゃ脱がないって……。それに、ルーディン様は揉む以上の事は多分しないから大丈夫。私は胸を揉まれるくらいなら構わないし」

「わ、私もルーディン様になら揉まれてもいいかな……。姫はもうちょっとルーディン様のことを信用しようよ」

「ええー？　まあ、ルー兄様カッコいいしね。でも、揉ませちゃだーめ！！」

「そうですよ二人とも。私たちの胸は既に姫様の物なのですからね？　フランは結婚していますから、その方だけは特別に、姫様の許可の下貸し出す、という形で」

「旦那さんにくらい自由に触らせてあげて！　わ、私今凄い事言った気がする……。ううう……」

ここでシアさんが、椅子に座ったままくるりと入り口の方へ体を向ける。もちろん私を膝の上に乗せたままだ。

「キャロ、いい加減入って来なさい。そこでいくら待っていても私たちは脱ぎませんよ」

「ひゃい！！　べ、別に覗いてた訳じゃ無いですよ！　フランとメアリーの胸は確かに興味あるけど……」

いつの間にかキャロルさんが戻って来てたみたいだね。私たちの

話が盛り上がりすぎてて、部屋に入るタイミングが掴めなかったんじゃないかな？
　しかし、今のは可愛い悲鳴だったね……。ふふふ。

「あ、そういえばキャロルってそっちの趣味だったね。ちょっと揉むくらいなら別にいいと思うんだけど、ごめんね、私の胸はシラユキの物になっちゃってるみたいだから」

「確かに、キャロルって見た目可愛いから、揉まれても嫌悪感とかあんまり出なさそうだね。姫の許可取れば揉んでもいいよ？」

「二人とも変なこと言わないの！！　キャロルさんがそんな事する訳無いよ、もう！」

「シラユキ様！　シア姉様の胸を触る許可をお願いします！！」

「キャロルさん！？　ほ、本人に聞いて！！」

「却下します」

「そんな！！」

その１２９（後書き）

調薬ギルドではこんな物も作ってるんですよ、という話だった筈が、
なぜかおっぱい話に……
メイドさんズが三人揃うと、話が逸れまくって面白いです。

その１３０

最近キャロルさんの様子がおかしい、そんな気がする。
普段は特に変わりも無く、シアさんに甘えようとして軽くあしらわれたり、フランさんとメアさんに楽しそうに料理を教わったり、高い所の掃除ができなくて嘆いていたり。
でも、最近、ため息をついていることが多い。考え事をしているのか、窓の外を眺めてぼーっとしている事もあるね。本当にどうしちゃったんだろう？

いつから？　多分調薬ギルドへ行った日くらいからだと思う。では、どうして？　その原因が分からない。
初めは父様と母様に強く怒られてしまったのかと思っていたんだけど、本人たちに確認してみたらそんな事実は無かった。やはり気にするなと笑い飛ばされて終わったらしい。
他に原因になりそうな事は……。思い付くのは、私を泣かせてしまった事、フランさんに許す気は無いと言われた事。後は、メイドさんズの脱ぐところが見られなかった事とシアさんの胸を触る許可を貰えなかった事くらいか。シアさんのお弟子さんだけに後半二つも充分ありえてしまう気がする……

よし、前半二つに絞ってみよう。
私を泣かせた事で確かに落ち込んでたね。でもそれは、何度も謝って来る度に気にしないでいいよと返していた筈だ。今では謝ってくることも無くなって、また私を可愛がってくれている。これは違いそうだね。
という事はフランさんに許されていない事なのか？　フランさんはもう怒ってはいないようだけど、この事に関しては一生許す気は無いみたいだ。怒ってないけど許さない？　私にはよく分からない

ね。しかしこちらも、普通に笑いながらお話してるし、料理も普通に教えて貰えてるみたいだから違うんじゃないかなと思う。ぱっと見仲の良い親……、姉妹に見えるくらいだ。

むう、振り出しに戻ってしまった。いや、消去法で二つは消えたんだ、前進している事は確かだね。

消去法で残った二つ……、？　やっぱりメイドさんズの生着替えが見たかったのか！？　無いわ！！　ならばシアさんの胸をそこまで触りたかったのか！？　無い……、とも言い切れない！！

恥ずかしい結論が出てしまった……

「む、どうやら考え事の答えが出たようですね。しかし何やらあまりいい答えではなかったようで……。姫様、お悩みでしたら私たちに遠慮なくご相談くださいね。全力を尽くし姫様を悩ます問題を解決してご覧に入れますよ」

「あ、終わった？　ねえ、シア？　揉まれなかったんだけど……、やっぱりシアだからなのかな？　っと、それは置いておいて……、シラユキ？　シアの言う通りよ。一人で抱え込まないで、悩み事があるなら私たちに相談しなさい。ま、まあ、私じゃあんまり頼りにならないと思うんだけどね。私はお姉ちゃんなんだから、可愛い妹のために何かしてあげたいと思うのは当然のことなのよ！」

うん？　あ、忘れてた。そういえば今私、姉様の膝の上にいるんだった。むう、いけないいけない。姉様に可愛がられているというのに考え事をしてしまうとは……

姉様の膝の上は、母様とも、メイドさんズともまた違った良さがあるね。今日はされなかったけど、座らせてもらっている時にくすぐられるのは姉様だけだ。そのくすぐりが私は大好きなんだよね。最高に楽しく幸せな気分になって、ついさらに甘えてしまうのだ。でも恥ずかしいのでおねだりはしない。

「うん。ありがとうシアさん、ユー姉様もありがとう！　……揉む？」

「あ、うん。シアからね、シラユキが膝の上に座ってるときに考え事を始めると胸を揉んできますよ、って教えてくれてね？　ちょっと揉まれてみたいなと思ったのよ。一緒に寝るときは絶対揉まれるらしいんだけど、シアは聞くまでも無く絶対代わってくれる訳もないし、メアもフランもこればっかりは譲れないって言って代わってくれないのよ。それでちょっと、今日は試しにずっと膝の上に乗せてたの。でも揉んでくれなかったわね……。やっぱりシアだから？

それとも、大きさ？　シラユキは大きな胸が大好きだもんね……。お姉ちゃん悲しいわ……」

「そんな理由だったの？　今日はずっと甘えさせてくれて嬉しかったのに……。ユー姉様も充分大きいよ？　母様とメイドさんみんなが大きすぎるだけだよ……」

よく分からないが、どうやら姉様は私に胸を揉まれたかったらしい。多分シアさんたちが、特にフランさんが嬉しそうに話しているのを聞いて、羨ましく思ったんだろうね。

胸を揉むくらいはいくらでもしてあげてもいいとは思うんだけど、

ちょっと今、改めて揉むのは恥ずかしいね。一緒に寝てるときとか、考え事してるときに無意識に揉まれるのがいいのかもしれないね。

なんか私、自然にいやらしいこと考えて無いか……！？　くっ！

この考えは振り切らなくては！！

「そうそう、それなのよ！　メイドのみんな大きいわよね？　シラユキに胸を揉んでもらうと胸が大きくなるって噂なの！　だからね、シラユキ？　揉みまくって欲しいのよ！！」

「無いよ！！　みんな元から大きかったよ！！　みんなもげ」

「お兄様が言うにはフランとメア、大きくなってるらしいわよ？」

なん……だと……

「あら？　シラユキ？　シラユキー？　しょ、ショックで固まっちゃったみたい……。無理も無いわね、私だってお兄様に聞かされたときは大ショックだったし……」

「あ、あの、ユーフェネリア様？　ルーディン様は私については何か仰られていませんでしたか？」

「え？　ああ、うん……。シアの胸は凝視すると睨まれそうだからあんまり注視しないようにしてるんですって。自分の胸の事なんだから、サイズ測り直してみたらいいじゃない。私から見たらシアだ

って充分すぎるほど大きいわよ？」

「い、いえ、胸のサイズは自分でも毎日……、なんでもありません。しかし、嬉しいですね。私の胸を大きいと言って頂けるのは姫様とユーフェネリア様のお二人だけですから。毎日仰って頂きたいくらいです。それよりもまさか、あの二人はまだ育っているというのですか……。羨ましいを通り超え、殺意さえ覚えてしまいますね」

「そうよねー。羨ましいったら無いわ！　……シラユキ？　そろそろ戻って来なさーい？　むう……、揉んじゃうわよ？」

！？

「わにゃあ！！　ユー姉様やめて！！　ふふふふ……、くすぐったいよ！　ふふ、ふふふふ……。ユー姉様大好きー！！」

姉様に胸を揉まれてしまった！！　揉むほど無いからくすぐると言ったほうがいいんだけどね。　姉様のくすぐりは、笑いすぎて苦しくなったり涙が出たりもしない、絶妙な力加減。職人技だね。これは本当に、されてて楽しく嬉しく、大好きなのだ。

「か、かか、可愛い！　シラユキ可愛すぎる！！　ああ、もう！この子のためなら何だって出来ちゃうわ！！　さあ、シラユキ！遠慮なんてしないで、悩み事をこの優しいお姉ちゃんと綺麗なメイドさんに打ち明けなさい！！」

全力で頬擦りをしてくる姉様。

し、幸せすぎる……。もう悩みとかどうでも……、よくない！危ない！　今完全に忘れてたよ！　キャロルさんの様子がおかしい

ことを悩んでたんだったよ私は！！

「忘れてましたね？　姫様。さすがはユーフェネリア様ですね。一時的にとは言え姫様に悩みを忘れさせてしまえるとは……。では、改めまして、姫様？　この、ええと、き、綺麗なメイドにお悩みを打ち明け願います」

ちょっと照れながら言うシアさん。可愛い……

確かに姉様に可愛がられて幸せだったからもあるけど、主な原因はメアさんとフランさんの胸がまだ大きくなっている、の方で……、っと、いけないいけない。また考えが他へ逸れるところだった。

これ以上この優しくて綺麗な二人に心配を掛けちゃいけないよね。正直に話して相談に乗ってもらおう。姉様には難しいかもしれないけど、シアさんならきっとどうにかしてくれる筈だ。

「ええとね、キャロルさんのことなんだけどね？　最近ちょっと様子がおかしいと言うか、えーっと、何か悩んでるんじゃないかなって」

キャロルさんが何か悩んでいるかもしれないと私が悩む。なんという悩み連鎖。

「キャロルが？　うーん……？　そうなの？　シア」

姉様は気付いていなかった様で、少し考えてシアさんに確認を取る。

「ええ、あの子は今ちょっとした悩み事を抱えていますね。しかし、姫様に、小さな子供に心配を掛けてしまうとは、大の大人が……、？　大の？　ふむ……、小の大人が情け無い……」

しょ、小の大人……？　なんて的確な表現なんだ！

おっと、そうじゃない、シアさんは何か知っているみたいだね、さすがだ。もしかしたら既にキャロルさん本人から相談を受けていたのかもしれないね。

「ねえシアさん、聞いちゃ駄目かな？　人の悩み事を聞いちゃうのはいけない事だと思うけど、どうしても気になっちゃって……。キャロルさんに元気になってほしいし……」

「姫様……、なんてお優しい……。姫様の心遣い、キャロも喜ぶことでしょう。しかし、申し訳ありません、お話しすることはできないのです。お許しください……」

シアさんはそう言うと、本当に申し訳無さそうに深く頭を下げる。

「むう、シアさんが謝ること無いよ……。勝手に聞いちゃいけないのは当たり前の事だしね。でも、シアさんが知ってるならいいかな。ちょっと安心しちゃった」

「そうね、シアが知ってるなら安心よね。キャロルの悩み事は気になるし、心配だけれど、うん、シアならきっと何とかしてくれるわよね」

ふふふ、と、姉様と笑い合う。シアさんに任せれば本当に安心だよね。

よかった、のかな？　いや、まだか。でも時間の問題だろうと思う。

キャロルさんの悩み事がどんな物かは分からなかったが、シアさんが知っているという事で安心して悩みが解消されるのを待つことができる。この最高に頼りになるメイドさんのシアさんのこと、即座に、簡単に、とは行かないかもしれないけど、全て丸く収めてくれるだろう。

「安心したらちょっと力が抜けちゃったね。ユー姉様ー？　甘えさせてほしいなー？」

「うわ珍しい！　でも可愛い！！　ふふふ。ほーらシラユキ、お姉ちゃんにいっぱい甘えなさい。ふふ、ふふふ、本当に可愛いわぁ……。くすぐっちゃおうかしら？」

「きゃー！　ふふふ、あはは！　ユー姉様だーい好き！！」

「ふむ……。まあ、しかし、こればかりはあの子自身にしか解決できない問題ですからね。私には何もできる事はありませんし……、する気もありません！！」

「ちょ、拗ねないで、シア。ふふふ、見せ付けちゃったかしら？ごめんね。うーん、簡単に解決する悩みじゃないみたいね……、でも、話を聞いてあげるくらいの事はしてあげてね？」

「シアさんにも難しいことなのかな……。ううん、また心配になって

きちゃったよ……」

「ふふふ、大丈夫ですよ。キャロなら、あの子なら自分で一番の答えを出す事ができるでしょうから。姫様、ユーフェネリア様も、どうかキャロを信じて待ってあげてください」

「分かったわ、シアがそこまで言うのなら今度こそ本当に安心ね。その答えとやらを楽しみにして待ちましょ。ね？　シラユキ」

「うん！　ふふ、やっぱりシアさんはカッコいいなー、優しいなー、頼りになるなー。ふふふ、大好き！！」

「私も大好きですよ、姫様」

「ふふふ、久しぶりに告白されちゃった！」

その131

「悩み、ですか？　それはやはり、子供扱いされる事、ではないでしょうか？　キャロル先生本人は、慣れたから大丈夫、といつも仰っていますけど……、宿で私と二人きりになると、今日は誰々に子供扱いされた、と悔しそうにされて、いましたからね。ふふふ。後は、背の低さと、胸の小ささも、大きな悩みになっていると、思われますよ。私は可愛らしくて、大変いい事だと、思うのですけれど……」

リズィーさんはその時のことを思い出したのか、キャロルさんの悩みについての考えを笑顔で話してくれる。

おお、大人の余裕で受け流していると思ってたけど、やっぱりキャロルさんも影では悩んでいたのかー。

「ああ、うん……。それは私も近い将来……、わ、私は伸びるよ！　胸だって大きくなるよ！！　ふう……。ま、まあ、キャロルさんもやっぱり、今でも気にしてるんだよね。うーん……、でも、それも悩みの一つだとは思うんだけど、今回はそれとは違う気がするなー」

「そう、ですか？　シラユキ様やバレンシアさんに、愚痴をこぼす事ができなく、鬱憤が溜まってしまっているのでは、と私は思います」

「だって、キャロルは可愛いんだからしょうがないわよ。あれで二百歳以上年上とか……。ついつい子供扱いしちゃってる私もいけないのかしらね。もしかして内心では本当に嫌がってたのかも……」

え？　姉様ちょっと不安になる事言わないでよ……。キャロルさんに、大切な家族に悪く思われてたりしてたらショックどころじゃないよ。

「それは無いだろ。はっきりと、こうだから違うぞ、ってのは言えないんだけどな、少なくとも嫌がってはないさ。そこは安心していいと思うぞ、二人とも」

「うん、ありがとうルー兄様。でもちょっとは複雑な思いはしてそうだよね？　言ってくれればみんなに子供扱いしちゃ駄目だよって私からお願いするのに」

「姫様の前ではお姉さんぶりたいのですよ、キャロは。私と二人きりになると猫のように甘えて来て鬱陶しいくらいですよ？　まあ、それは今は置いておきましょう。残念ながら不正解ですね」

ああ、そう言われてみれば、ストレスとかでは無いね、うん。

キャロルさんの部屋はシアさんと一緒だし、ベッドも一つで仲良く寝ている筈だ。シアさんが私と寝る当番の時は一人にはなるけど、三日に一回だけだしね。当番の日以外は私が寝た後に全力で甘えてるんじゃないかなと思う。ふ、普通にお姉さんに甘えるって言う意味でね！

「しかし、リズィーさんでしたら正解に辿り着けると私は思いますが、ね」

シアさんはにっこりと笑顔で、そう一言付け足す。

「むう、シアさん思わせぶりすぎ！！　ねえ、そう思うよね、キャ

ロルさん？」

「え？　ええー……？　あ、あのー、シラユキ様？　できたらこういった話は私のいない所でお願いしたいのですが……」

ふんだ！　一向に答えを出す気配が無いキャロルさんが悪いんだよーだ！

私と姉様、他にこの事を知っている家族みんなで、キャロルさんが悩んでいる問題の答えが出る事を今か今かと毎日楽しみにしていたのだが……。あれから数週間、キャロルさんは答えを出せないままでいる。みんなガッカリだよ。

裏を返せばそれだけ大きな悩み事、という事にもなるのかも？と思ったけど、どうやらそうでも無いらしい。普段のキャロルさんは結構楽しそうに笑っているからね。たまに思い出して考え込んじゃったりするくらいだ。

他人（ひと）の悩みについてああだこうだとあんまり口出しする訳にはいかない。それに、悩みに答えが出ないことについて私たちが不満を持つのも筋違いだ。それは分かっている。

でもね……

「おっと、悪い悪い、つい話が逸れちまったな。シラユキも人が悩んでる事をあんまり他言するもんじゃないぞ？　んで、リズィー、いつ出るんだ？」

「ええ、明後日に。ルーディン様、シラユキ様を叱らないで、あげてください。キャロル先生を想っての、ことですから」

「ん、分かった、これ以上は言わないさ。ほれほれ、シュンとするなシラユキ。しっかし、明後日か……、急だな」

「見送りは？　あ、やめた方がいいわね。ふふ」

「はい、すみません。依頼者の方も、驚かれてしまいますから。ありがとうございます、ユーネ様」

リズさんが旅に出てしまう。また会えるとは思うけど暫くのお別れだ。できたらそれまでに悩みを解消して、さっぱりとした気分で見送ってあげてほしかったな。シュンとしてたのはそれが寂しかった訳で、決して兄様に怒られたからではない、筈だ、多分。

随分とリーフサイドに長居をしてしまったリズさんだが、予定通りなら明後日この町を去る事になったみたい。本当に急だね。

ここまで長くこの町にいたのは、やっぱりキャロルさんと別れるのが辛く、どうしても踏ん切りがつかなかったから。自分で決められないのなら、次に他の町への護衛の依頼が貼り出されたらそれを受けて町を出よう、とキャロルさんと決めていたのだ。

そしてついに昨日、私達に護衛の依頼を受けた、町を出ることが決まったという連絡がギルドを通して入って来た。来てしまった。

兄様も姉様もあの長旅でリズさんとはかなり仲が良くなったからね、二人とも寂しそう。もちろん私だってそうだ。

でも、以前のお別れの時ほどじゃないね。また今回のように会え

る日が来る、それは絶対だ。家に帰ってから母様に全力で甘えるつもりではあるけど、泣いたりしない様に耐えてみせるよ。

「リズィーもエルフなら森で暮らせるように父さんに頼むんだけどな、ま、これぱっかりはどうしようもないか」

「ルー兄様はどうせリズさんの胸狙いでしょ？　さっきからずっと目線が固定されてるし……」

まさに目が釘付けだね。まったく、この兄様は……

「ええい、言うなっ。うーむ……、一揉みくらいしたかったな。っと、しまったつい口が」

「お兄様？　……もう！　帰ったら私の胸を揉んで！　それでお互い寂しさを薄めましょう？」

「ああ、そうだな……。今夜は寝れると思うなよ、ユーネ……」

「ふふ、望むところだわ。今夜が、いいえ、帰ってからが今から楽しみね、お兄様……」

二人してとんでもない事を口走り、いつもの様に二人の世界へと入って行ってしまった。

私がちょっと成長してきたからって今のセリフはちょっと……、本気で恥ずかしいんですけど……

この二人の愛は年々深まって行くばかりだね、そのことについては嬉しく思うよ。でも人前では自重して！！

「み、見てて恥ずかしいんだけど……。私もシア姉様とあんな風にイチャイチャしたいなあ」

「私も姫様と……、こほん。まったく、あなたは早く恋人でも作りなさい。まあ、冒険者の身では難しいかと思いますが……」

私とシアさんは傍から見るといちゃついているように見えなくも無いと思うけど……、言わないでおこう。シアさんだけじゃなくてメイドさんズみんなか？　あれ？　気をつけた方がいいのか？　いや、メイドさんズに甘えるのはやめられない！　やめにくい！！

「キャロル先生に恋人、ですか？　バレンシアさん以外、考えられませんよね。キャロル先生は、確かに可愛らしい、素敵な方なのですけど、生憎と私は、そちらの趣味は無いもので……」

「まあ、この子は見た目は子供ですから、男性でも女性でも、中々その気になってくれる方はいないでしょうね。キャロ、あなたも暫くしたらまた旅に出るのですから、その旅で恋人の一人や二人」

「シア姉様！！！　あ……、す、すみません！！　また大声を……」

シアさんの言葉を大声で止めるキャロルさん。また大声を上げてしまった事で申し訳なさそうだ。

ビックリした……。何か今のキャロルさんの止め方、違和感があったね。かなり必死だったような……？　そう、必死だった。

シアさんに恋人を作れって言われるのはよくある事だし、それをあんなに必死になって止める理由は無いよね。そうなると今の言葉には何か別の意味があるんじゃ……？

「なるほどな、キャロルの悩みはそれか。バレンシア、わざとか？
まあ、いい、今解決しちまうか」

「る、ルーディン様！？」

「なーるほどねえ。ふふ、やっぱり見た目通りの可愛さじゃない。
ええ、解決しちゃいましょう。ねえキャロル、貴女も行くの？　それが言い出せなかったんでしょう？　それに、シアと離れたくないんでしょ」

「え？　ユーネ様？　あ、あの……」

私が引っ掛かりを覚えたように、兄様と姉様も違和感を感じ、その答えが分かってしまったみたい、だ？

……え？

「キャロルさんも、行っちゃうの……？」

「そうなんですか？　キャロル先生。次はどこの町へ？　できたらまだ一緒に、旅がしたいです……」

あ……、そっか、そうだよね。キャロルさんはSランクを目指してるんだったよ。冒険者の人だったよ……
最近毎日可愛いメイド服でお仕事してるのが当たり前になってたから忘れちゃってたよ。そっかあ、キャロルさんも行っちゃうんだー……

「シラユキ様！？　い、行きません！　まだ、ですけど、行きませ

んから！」

「ふぇ？　あ、泣いて無いよ、大丈夫。泣きそうだけど……、うん？　まだ行かないの？　あれ？　ルー兄様？　ユー姉様？」

「何？　しまった、外したか……。は、恥ずかしいなオイ」

「か、勘違いでシラユキ泣かせちゃうところだったわ。ごめんねシラユキ、キャロルも。でも、それじゃないとしたら何なの？　さっきの焦り様、何かあるんでしょう？」

な、なんだ、兄様たちの勘違いか……

でも、まだ、なんだから、今度はちゃんと覚悟しておかないとね。

まあ、泣いちゃうんだろうけどさ。

さて、どういう事なんだろう？　私にはさっぱり分からない。違和感に気づけただけでも褒めてほしいくらいだね。

「え、ええと、その……」

「お二人とも当たらずとも遠からず、と言ったところでしょうか。キャロ、いい機会です、お話して差し上げなさい。それが独り立ちをする弟子の前でする顔ですか、まったく……。素直に話して、馬鹿だと笑い飛ばされて……、それでリズィーさんを笑顔で見送ってあげなさい」

「キャロル先生……」

な、なんというシリアスな空気。私は黙っておいた方がよさそうだね。

多分独り立ちするリズさんについての事なのかな？　それは私たちに分かる訳も無いよね。

やっぱり可愛い弟子と別れたくない？　それとも、好きになっちゃって恋人にしたい、とか？　それは無いか。キャロルさんはシアさん以外目に入ってないし。

兄様も姉様も空気を呼んで黙って見守っているし、私も大人しくキャロルさんの言葉を待とう。

「う……、あ、あの……。ううん、シア姉様、代わりにお願いします……」

「情け無い！　こればかりはあなたが直接言わなければ意味が無いでしょうに。はあ……」

「あらら。そんなに言い辛いことなのね。うーん、お兄様、言ってあげて？」

「お、俺か？　憎まれ役はバレンシアの役だろ？　ま、そのバレンシアの言葉でも言い出せないみたいだし、しょうがないか……。キャロル、言え、命令だ」

「ルーディン様……。は、はい……、分かりました」

「ルー兄様！？　ひどいよ！！」

「くそう、バレンシアとユーネはよくても俺は駄目なのか……」

「る、ルーディン様、落ち込まないでください。キャロル先生？私の旅立ちの前に、悩みを晴らし、いつもの可愛らしい笑顔で、見送ってください。お願いします」

「うん、分かったよリズ、ありがとね。それでは……、すみません、先に謝っておきます。空気を悪くしてしまうかもしれません」

キャロルさんは深呼吸を一つ、二つ。落ち着いてゆっくりと、私の方へ向き直る。

……私！！？

その１３１（後書き）

続きます！

また０時ギリギリの投稿でした。明日はもう無理かもですねこれは……

その１３２（前書き）

注意！！
長いです。いつも以上にイミフです。

その132

キャロルさんは真剣な顔つきで、私を真っ直ぐ正面から見つめている。どうやら悩みを、自分の心の中を話す決心がついたようだ。
だが……

なんで私!?

え？　私の事について悩んでたの？　意外すぎるんですけど……。てっきりシアさんか他のメイドさんズか、今日の反応からしてリズさんかも？　とは思っていたのだけれど、まさか私だとは……
無意識のうちにキャロルさんを悩ませるような何かをしちゃってたってことかな？　ううう、何したんだろう私……。やっぱり私は悪いお姫様だね、大切な家族をずっと悩ませていたなんてね。それを不満に思っちゃうとか最低すぎるよ！

しかし、どんな悩みなんだろう？　しっかりと聞かなくちゃね！
まあ、お姫様らしくなさ過ぎる私に我慢の限界が来たんだろうけど……。お、お説教か!?

うん？　それとも、わ、私の事が……!?　な、無いわー。……無いよね!?　シアさんのお弟子さんだからきっぱりと否定できない!!　わ、私はノーマルなのよ!!
どどどどうしよう！　もしキャロルさんに告白なんてされちゃったら……？　はっ!?　シアさんがそれを見て黙っている筈が無い!!
もしそうだとしたら、シアさんとキャロルさんとで私を取り合う、

いや、奪い合う壮絶な戦いが始まっちゃうんじゃないだろうか！？

ま、ま、町が滅んじゃう！！？

「あのー……、シラユキ様？　お、お話してもいいんでしょうか？」

「ちょっと待ってキャロル。シラユキー？　どうしちゃったのかしらこの子……」

「か、可愛らしいです……。ええ、どうしてしまわれた、のでしょう？」

「なんか慌ててるな……。何があった？　まあ、いい。バレンシア、頼む」

「はい。何やらまた勘違いをして混乱されてしまった様子ですね。どんな勘違いか見当はつきますが……。姫様……、姫様！　こちらに戻って来てください」

「ご、ごめんなさいキャロルさん！？」

お、女の人とお付き合いはできません！！

「ええ！？　な、何を謝ってるんですか！？　ちょ、と、とにかく落ち着いてください！」

おおお落ち着けって言われても！　あわわわわ……。シアさんとキャロルさんが私の目の前に……

ご、ごめんなさいリーフサイドの町の人たち……。私のせいで今日この町は……、？　勘違い？

！？

お、落ち着いた！！　だいじょうぶだ…わたしはしょうきにもどった！

「あ、う、ううん？　ななな、何でもないよ？　だい、大丈夫、落ち着いてるよ！」

あー、危ない危ない。つい考えが変な方向に飛んじゃってたよ。キャロルさんはシアさん一筋、シアさんの事を愛しているって前に言ってたじゃないか。思い返すとなんて恥ずかしいセリフだ……

「今の勘違いで思考が飛んでしまったことについては後で皆でからかうとして……。姫様、まずは落ち着いてキャロの話を聞いてあげてください。大丈夫ですよ、それに対して姫様に何かをして頂く、といった様な話ではありませんから。ただ、姫様も真剣に聞いてあげてください。お願いします」

シアさんは深くお辞儀をして私にお願いすると少し後へ下がり、キャロルさんの言葉を待つ。

「シア姉様、ありがとうございます。でも、からかっちゃ駄目ですよ……、と、すみません。では、お話します」

「そう言ってくれるのはキャロルさんだけだよ……。それじゃ、キャロルさん、お願い」

みんな静かに、黙ってキャロルさんが話し出すのを待つ。キャロルさんは最初の言葉が出て来ないみたいだ。

幸いここは個室だし、時間はまだまだ充分にある。さすがに料理に手を付けて待つなんて事はしないが、ゆっくりと話し出すのを待つことができる。

キャロルさんはまた大きく深呼吸を一つし、ついに口を開く。

「ま、まずは私が今悩んでいる事、それをはっきりとお伝えします。た、旅に出ていいものか、悩んでいるんです。……いえ、違いますね。すみません、言葉が見つかりません……。旅に出る事ができない、出る決心がつかない、でしょうか？　すみません、纏まらない言葉で……」

旅に出る決心がつかない？　という事は、もっと前に冒険者に戻る予定だったのかな？

「ええと、何て言ったらいいのか……。その、この国は本当に居心地がよく、毎日楽しく、本当に充実した毎日で……。シア姉様と一緒にいられて、フランとメアリーに料理や掃除の仕方を教わって……。そして、シラユキ様たち王族の方々に本当によくして頂いて……」

「ならこの国にずっといりゃいいじゃねえか。回りくどい言い方しやがって……、それでも年上か？　なあ？　今のお前、ホントに弟

子の前でする顔じゃねえぞ」

「違うわよ、お兄様。キャロルはSランクの冒険者を目指したいの。キャロルもまずそっちを言わなきゃね。後、お兄様？　シラユキが怖がってるわ、落ち着いて」

「しまっ！？　シラユキ？　お兄ちゃんは怖くないぞー？　ちょっとイラッと来ただけだからな？　怒ってないからなー？」

「うん、だ、大丈夫。でもちょっとビックリしちゃった……」

「うおお……、俺は可愛い妹の前でなんて事を……。ああ、キャロル、スマン。続けてくれ」

「は、はい。本当にすみません。自分でも上手く言葉にできなくて……」

「キャロル先生、頑張って……」

今の兄様はちょっと怖かった……。兄様はたまに言葉遣いがかなり悪くなる時があるんだよね。普段が優しくてカッコいいだけに凄く怖く感じちゃうよ。

うーん？　キャロルさんは、ええと、迷ってるのかな？

Sランクの冒険者を目指して、町々で依頼をこなして回る旅にも出たいが、この居心地のいい、大好きな人のいる場所でずっと暮らしていきたいとも思ってる、と。

ふむ……、これは違うね。確かにこれも悩みの一つだとは思うけ

ど、私のみに絞った言い方をしようとした理由にはならない。まあ、私が大好きだから離れたくないって言うならそうなのかもだけど、それを言うならどう考えても私よりシアさんに、だよね？

多分本当に上手く言葉にならないんだろうね。ゆっくり一つ一つ段階を踏んで、最終的に一番の悩みである、私に対しての何かに辿り着こうとしているんだと思う。シアさんはそれを分かっている筈なんだし、もうちょっと手助けというか、そこまで導いてあげてほしいんだけどな。

「ユーネ様の仰るとおり、私はSランクの冒険者に、シア姉様と肩を並べられるほどの実力者になりたい。なれるかどうか試してみたい。シア姉様のように最強の冒険者と呼ばれるのは難しいと言うか、無理だろうとは思いますけど、背中に手が届く、いえ、せめて背中の見える位置までは辿り着きたい。そのためにはまた、この国だけではなく、大陸中を旅して回る必要があります。強さだけならシア姉様に、森の実力者の方々に鍛えて頂ければ済む事。ですが、強さだけではSランクに届く事など絶対にありえません。特に私は強さのみでAランクに上がったとも言えますし、ギルドからの依頼もことごとく無視してきています。本当に大陸中で依頼をこなしていかなければ、Sランクに上がる事など到底叶わぬ夢でしょう」

う、うーん。落ち着いて言葉に出せるようにはなったみたいだけど、またちょっと回りくどくなっちゃってきてるかな？　兄様が怒り出さないといいんだけど……

それも確かに気になる事ではあるのだけれど、今、もっと気になる発言があったね。シアさんが、最強の冒険者？

元Sランクの冒険者で、今は何でもできる凄いメイドさん。凄い凄いとは思っていたけど、まさかSランクの人の中でも最強のお人

だったとは……。シアさん怖い！！　でもカッコいい！！

おっといけない。こんな大事なお話の途中で変な考え事をしてしまった。この事についてはまた後で、シアさんに何となく探りを入れてみよう。

そのシアさんと言えば……。うん、怒ってるね。自分の事は何一つ話すなっていう約束を軽く破っちゃったしね……。今はシアさんも空気を呼んで黙っているけど、後で叱りつける筈だ。キャロルさんのご冥福を祈ろう。

「はあ……。キャロ、その調子では日が暮れてしまいますよ？　結論から言いなさい」

ここでシアさんがやっと手助けに、と言うより、ただこれ以上変な事を話されては敵わないとでも思ったんだろう。キャロルさんに最終的な結論をまず言うように進める。

「ごめんなさいシア姉様！　け、結論ですか？　え、ええと……」

私のほうをちらちらと見ながら言いよどんでしまうキャロルさん。

「本当に情け無い弟子ですね。はっきりと言ったらどうです、姫様を悲しませたくはないと」

「シア姉様！？」

「え……？　私、を？」

私を悲しませたくないから、悩んでた？　旅に出る決心がつかなかった？　私の……、せいで？

「あー……、いきなり核心を突きやがったな。だが、俺もまたちょっとイラッと来てたところだ、いいだろう。まあ、確かにキャロルが旅に出ればコイツは寂しがって泣くよな。だからって自分の目標なんだろう？　Ｓランクの冒険者は。それにな、二度と会えなくなる訳じゃない。シラユキだってそれは理解してるさ。気にすんなよ」

「そうよキャロル。どんな悩みかと思ったらそんな事だったの？　またちょくちょく顔出しに、遊びに来たらいいじゃない。大丈夫！　シラユキを悲しませるなんて私達がする訳が無いでしょ？　安心して行って来なさいって。ね？」

私を悲しませたくないから旅に出ない？　そんな、そんな理由で悩んでいた？　私のせいで旅に出ることができなかった？　私のせいで目標に向けて歩き出すのが遅れてしまった？

「お二人とも、それに、姫様、違うのです。キャロル、早速姫様を悲しませてどうするんですか、まったく……。あなたの悩み、悩むに至った理由、原因があるでしょう。まずは原因を、それから自分はそれに対してどう思ったか、そして今こうして悩んでいる、と順序立てて話してみなさい。これ以上の手助けはしませんよ？　皆様、申し訳ありません。本当に情け無い弟子で、困ってしまいますね」

苦笑気味に話すシアさん。

情け無くも可愛い弟子だから放っておけない感じかな？　ふふふ、シアさんは優しいね。私も変に考え込まないで、気になったらどんどん、積極的に聞いていかなきゃ！

キャロルさんは黙ったままだ。しかし、シアさんの助けはもう期待できない。それなら……

「キャロルさん、聞かせて？　日が暮れちゃってもいいから、ゆっくりとキャロルさんの言葉で、お話してほしいな？」

「ははっ。また命令してやろうか？　できたらその前に話してくれるといいんだがな」

「駄目よお兄様、今度こそシラユキに嫌われちゃうわよ？　だから今度は私ね。キャロル、話しなさい。命令よ、ふふふ」

「キャロル先生？　シラユキ様のお願いに、ユーネ様からの、ご命令ですよ？　ふふふ。皆さん、なんてお優しい……」

私たちが無理矢理にでも聞いちゃえばいいね！

「分かりました！　ああ、まったく、なんて情け無いんだろ私って。そうですよね、話には順序ってのがありましたよね。ふふふ、すみませんでした。何をするにもまずは最初から、スタートがありましたよね。ふう……。そうですね、最初の原因と言えば、ウルギス様からのお言葉ですね」

「父様の！？　あ、っと、ごめんなさい。続けていいよ」

くう、キャロルさんがいつのも調子に戻ってくれたから、ついついこっちもいつもの様に反応しちゃったよ。

父様のせいだったのか……。キャロルさんをここまで悩ませるな

んて、父様は一体なんて言ったんだろう？

「今でもはっきり、一字一句違わず覚えています。あの日、私がシラユキ様を泣かせてしまったあの日です。ウルギス様とエネフェア様にお叱りを頂こうとしたのですが、そんな事を気にするなとお二人には笑い飛ばされてしまいまして……」

おお、やっぱりあの日が原因の日だったのか。私の予想は当たっていたようだね。

私が勝手に泣いちゃっただけだし、キャロルさんには何の責任も無い。それは父様も母様も分かっていた筈だからね。笑い飛ばされるのも当たり前だ。

「ですが、その後こんなお言葉を頂いたのです。不可抗力やからかい過ぎて泣かせてしまったのは、程度にも寄るが笑って許してやる。だが、あの子を悲しませて泣かすことは絶対に許さん。と……」

へ……？　え？　そ、それってさ……

「ね、ねえ、キャロルさん。それって考えすぎなんじゃないのかな？　キャロルさんがまた旅に出ちゃうのは、寂しくなって泣いちゃうだろうと思うけど……。また会えるんだよね？　会いに来てくれるし、ずっと先のことだと思うけど、旅が終わったら森に落ち着くんだよね？　それなら、うん、悲しくは無いよ？」

ちょっとは悲しくなっちゃうとは思うけどさ。それは父様の言葉とは意味合いが全然違うよね。

「いえ、違うんです。シア姉様もさっき言っていましたが、違うんです……」

「どう違うってんだよ？　っと、まだ話の途中だったか……。シラユキ、黙って聞け。まだ原因の段階だ」

「う、うん……。ごめんね、キャロルさん」

まだ原因が分かっただけ。次はその原因に、父様の言葉に対してキャロルさんがどう思ったか、だよね。

「シラユキ様を悲しませてはいけない。それは誰にだって、この世界中の誰にとっても当たり前のことです。私はその時二つ返事で答えました。勿論です、と。しかし、私は軽く考えすぎていたんです。そのウルギス様のお言葉の本当の意味を理解していなかったんです。シア姉様に言われて初めて気付きました、いえ、改めて思い出しました。私は冒険者、Ｓランクの冒険者を目指し、大陸中、世界中を旅して回ろうとしていた事を」

「キャロル先生……。ああ……、私にも、やっと分かりました。それは、本当に怖いですよね」

どうやらリズさんは全て理解してしまったみたいだね。シアさんが、リズさんなら答えに辿り着けるって言ってたとおりだ。

でも、私にはまだ全然分からない。キャロルさんが冒険者を続ける事と、私が悲しむ事。どんな繋がりがあるって言うんだろう……。リズさんが言うには、怖い事？

「なるほどなあ、やっと分かったぜ。そりゃ誰だって悩むよな……。でも、まあ、さっきのシラユキの言った意味とは違うが、考えすぎじゃないのか？　キャロルはＡランクでも最上位の実力なんだろ？」

「うん……。絶対とは誰にだって言えないけど、ね。あんまりこういう事は言いたく無いんだけど、言っちゃいけない事なんだけど、冒険者を辞めちゃうのもありよ？　それならこの子は悲しむどころか嬉しさで泣いちゃうかもしれないわよ？」

「え、ええ、それが悩みなんですよね……。もうこのまま旅にも出ず、シア姉様と皆さんをお守りして生きていこうかなとも考えてしまって……。はい、情け無い悩みですみませんでした」

！？

「よく分かんないけど私もそれがいいな！！　もう冒険者なんて辞めちゃおうよ！　……ごめんなさい！！」

しまったあああああ！！！　ついあまりの嬉しさに一番言ってはいけない事を言ってしまったよ！！

私ったら、もう！　人の気持ちを考えずに、自分が嬉しいからってとんでもない事を勧めてしまった！！　これは大反省しなきゃね……。後で母様に叱られに行こう……

「あ、謝らないでくださいシラユキ様！！　心の弱い、迷いを振り切れない私が悪いんです！　今、こんな心境のまま旅に出れば、絶対にシラユキ様を悲しませる事になってしまうと思うんです。そんな考えが堂々巡りしてしまっていて……。本当にすみません！！」

「キャロ、姫様もその辺りで……。キャロ？　姫様はまだあなたの悩みの答えを理解しきっていませんよ？　確かにそんな心持では、間違いなく姫様を悲しませる事になってしまうでしょうね。本当にもう辞めてしまいなさい、私も心配です。姫様、はっきりしない情

け無い弟子に代わりに、私がまずは説明してしまいますね」

「あああああ……。ごめんなさいシア姉様……。でも心配してくれて嬉しいいい……。辞めちゃおうかなあ……」

私も心配です、の一言に感動し、シアさんにじわじわと擦り寄っていくキャロルさん。

よし！　キャロルさんはもう置いておこう！　シアさんの説明を聞こっと。説明と言えばこの人、シアさんだよね。うん？　分かって無いのは私だけなのか！？　私こそ情け無いよ……

シアさんは、縋り付こうとするキャロルさんの頭を片手で押さえながら話し出す。

キャロルさん面白いな……。緊張が途切れて甘えモードに入ってしまったのか？　確かに猫みたいで可愛いね。

「これ以上長引かせると本当に日が暮れてしまいます。リズィーさんにも色々と準備する事があるというのに……。ではまずは、いえ、簡潔にこの子の悩みの結論から。キャロは、死ぬことが怖いのです」

ん？　うん？　え？　それは誰だって……

「自分が死ぬことにより姫様を悲しませることが怖いのです。この子の本当の悩みの原因、お分かり頂けましたか？」

「ええ！？」

「シア姉様、ちょっとストレートすぎますよ？　シラユキ様はまだ子供なんですから、もっと遠まわしに言って差し上げないと……。シラユキ様にはまだ分かりませんよね。冒険者というものは、いつ死ぬとも知れず、明日さえ確実ではないんですよ。それは私もリズも、現役時代のシア姉様だって例外では無かったんです。これが、その、情け無い情け無いと言っていた本当の理由ですね」

「ホント情け無いよな。これでよくAランクの最上位になんて登り上がれたもんだよな、まったく」

「シアのせいじゃない？　だって音沙汰が無くなってから百年以上ぶりの再会よ？　もう完全に気が抜けちゃったんじゃないかしら。ああ、うん、これは駄目ね。絶対にこんな状態で旅に出るなんて許せない。キャロル、貴女の冒険者としての権限全てを一時的に剥奪するわ」

「え？　ちょっ、ユーネ様!?　この年でいきなり無職になるのはちょっと……」

「キャロル先生？　ご自分の今の服装を」

「はっ!?　正式にメイドとして雇って頂けるのですか!?」

「まだ見習のままですが、ね。申し訳ありません、ユーフェネリア様のお手を煩わせてしまう事になるとは思わず……」

「いいのいいの。シアも止めるつもりだったんでしょ？　リズ、キ

ヤロルの事は私達に任せてくれて大丈夫よ。リズならこんな腑抜けにはならないと思うから安心して送り出せるわ。貴女も安心して行ってらっしゃい。でも、たまにでいいから遊びにーは難しいかな。たまには連絡くらい寄越しなさいね？」

「ふふ、ふふふ。は、はい！　本当に、本当に安心です。ユーネ様、ありがとうございます……」

「あん、もう。友達に頭を下げないの！　ほらほら、泣かないで？　元気でね、リズ。暫く先になっちゃうと思うけど、また会いましょう？」

「ええ、絶対に。ルーディン様、バレンシアさん、それに、シラユキ様。また、変わり無い姿をお見せすると、約束します。キャロル先生のこと、よろしくお願いします」

「ああ、任せとけ。お、そうだ、発つ前に一揉みだけでも餞別に……、冗談だ！　室内で炎はやめろ！！」

「ルーディン様でもリズに手を出したら許しませんよ？　同意の上でなら問題ないですが……。まあ、リズ？　一揉みくらいはさせて差し上げたら？」

「ユーネ様のお許しがあれば、一揉みでも、ニ揉みでも、いくらでも。ふふふ、その先でも、私は構いませんよ？　ルーディン様は、素敵なお方ですし……。ですが、ユーネ様を悲しませる、結果となるなら、話は別、なのです」

「だーめ！！　お兄様に一度でも抱かれたらもう離れられなくなっちゃうわよ？　でも、一揉み、一挟みくらいなら……」

「はいそこまでです。リズィーさん、お気をつけて、お元気で、などは元冒険者の私としましては中々言えぬ言葉なのですが、どうかお元気で。もし何か、どうしようもできない事態に遭遇した場合は、『閃光』と『鋼爪』の馬鹿二人組をこき使ってやってください」

「現最強の『閃光』を馬鹿扱い、ですか。ふふ、ありがとうございます。その時は、遠慮なく。キャロル先生、次にお会いする時は、お互い立派な冒険者と、メイドさんになって、いましょうね？」

「はいはい。開き直って一流のメイドを目指そうか、多分冒険者にはそう簡単に戻れないと思うよ……。ま、寂しくなったらいつでも会いに来なさい。この情け無い先生でよければ、ね？　あははは」

「そんな事を言われると、すぐに戻って来て、しまいますよ？　ふふふ」

「ビックリしてる間にお別れのお話が終わろうとしてる……。悲しくて泣いちゃうよ？」

「そうなるとキャロは、ウルギス様に絶対許されなくなりますね。ふむ……、極刑もありえるのでは？」

「シアさん怖い！！　もう！　リズさんへの贈り物とかまだ色々あるのに！！」

その１３２（後書き）

８０００文字以上に……、長い。
途中で二つに分けるか？　とも思いましたが、いい区切りが見つからずこんな長さになってしまいました。

その133

「ふわあああぁ……。あ、キャロルさんおはよー」

「おはようございます。シラユキ様？　はしたないですよ？」

人前で大欠伸してしまった事をキャロルさんに注意されてしまった。

「あ、そうだね、気をつけなくちゃ……。ごめんなさい、キャロルさん。でも今日はまだ眠くて……」

「昨日は少し遅くまで起きていられましたからね。無理をせず、いつもの時間に館に戻ってもよかったんですよ？　ふむ……、もう一度顔を洗いに戻りましょうか。それと、キャロ。姫様の可愛らしい仕草を咎めるとはどういうつもりです。それでも私の弟子、王族の方々住まう館のメイドですか。まったく、嘆かわしい」

「え？　ご、ごめんなさい！！　？　あっれー？　何で私が怒られてるんだろう……」

シアさんに怒られ反射的に謝るが、キャロルさんは納得がいかないようだ。

「キャロルさんは悪く無いよー……。安心しにゃふぁ……」

むう、また欠伸が、しかも変な声まで出てしまった。恥ずかしい！

「見ましたか？　聞きましたか？　なんという……、なんという可

愛らしさ！！　あなたの無思慮な一言で、今の最高に可愛らしい姫様の欠伸を今後一切拝見する事ができなくなってしまうところだったのですよ？　猛省なさい！」

「は……、わ、私はなんて愚かしい行為を……。申し訳、申し訳ありません……！！」

「朝からテンション高いね二人とも。ふわ……、はふぅ……。うーん、眠いや……」

眠い、眠すぎる。ちょっと目を瞑れば夢の世界へ旅立てそうだ。どこよそれ。夢の中だよ！　あまりの眠さに意味不明な考えが浮かんでしまう。

朝食後もう一度顔を洗い、そのついでにシアさんにほっぺをグニグニとされたのだが、眠気が消えない。頬グニでさらに眠くなった気もするが……

昨日はキャロルさんの歓迎会だった。いや、歓迎のお祭りだった。キャロルさん歓迎祭だね。

今日から森の住人、家族が増えるぞとみんなで大騒ぎ。多分私の誕生日のお祭りくらい人が集まったんじゃないだろうかあれは。ミランさんの番が今からとても楽しみだ。

演説台に立たされて、みんなの前で挨拶と軽い自己紹介を、まったく緊張することも無く軽くこなしていたキャロルさんがカッコよかったね。まあ、他のみんなから見たら、フリフリメイド服のおか

げで子供が頑張って大人ぶっているようにしか見えなかったんだろうけど……。父様と一緒に挨拶して回ってた先々で、可愛い可愛いと撫で回されてたのが見てて面白かった。

お昼に始まったお祭りは夕方を過ぎても全く終わる気配を見せず、夜になって宴会へと移り変わる。中には朝から既にお酒を飲んでた人もいたけどね。兄様とか。

みんな家族が増えることがとても嬉しそうで、お祭り、宴会の間中キャロルさんの周りは大賑わいだった。

私もそんなキャロルさんのすぐ側にいたので、つい来る人来る人と話し込んじゃったり、キャロルさんと一緒になってみんなに撫でられまくったり、からかわれるキャロルさんをシアさんとニヤニヤしながら眺めていたり、と。夜遅くまで、私にとって夜遅くまで起きていてしまったのだ。

最後の方はもう全然記憶に無い。途中眠くなって、でもまだここにいたくてうつらうつらしながらも眠気に耐えていたのは覚えているのだが、限界が来て眠ってしまったみたいでシアさんに家まで運んでもらったらしい。寝ている私の着替えはもちろん、お風呂、歯磨き、その他寝るまでの準備をシアさんが全部一人でやってくれたみたいだね。まったく、凄いメイドさんだよ。途中で全く起きなかった私もある意味凄いのかもしれない……

シアさんはお世話ができて嬉しそうだが、次からはまだ自分で動けるうちに帰らないといけないね。寝ている間にお風呂とか着替えとか、ちょっと不安になってしま、はっ！？　信じてる！　信じてるよ！！　迷惑を掛けたくないだけだよ！　うん！

「うん、それはキャロルが悪いわ。ま、欠伸は気をつけても出ちゃうものだからね、今後見れなくなるなんて事は無いだろうと思うけど……」

「姫はあんまり夜更かしもしない、と言うかできないんだけど、早寝早起きの良い子だからね。欠伸自体夜中トイレに起きた時くらいにしか見れないレアな動作なんだよ？　それを見れて喜ぶならともかく、注意しちゃうなんてさ、そんなことじゃここのメイドは務まらないよ」

何故かキャロルさんが、フランさんとメアさんに怒られている。
本当に何故だ……

「うん、ホントにごめん。シア姉様に言われて気付いて大反省してたところ。ああ……、さっきのシラユキ様、本当に可愛かったなー……」

「むう、思い出してニヤニヤしないで！　みんな私より遅くに寝て早く起きてるのに何で平気なふわぁ……、うん、ごめんなさい……」

駄目だ眠すぎるー！　また喋りながら欠伸が出ちゃったよ。

「可愛い……。あ、シラユキ、そんなに眠いならまた寝ちゃう？一緒に寝てあげるよ？」

「ちょっと、フラン？　今日は私の当番の日だよ。ねね、姫、無理しないでいいからさ、私と一緒に寝ようよ」

「いいえ、当番制は夜だけのことでしょう。姫様、是非私と一緒に……」

うーん、三人の言うとおりまた寝ちゃおうかな？　今日は特に何かする予定がある訳でも無いし、この眠気は正直耐えられそうに無い。でも食べてすぐ横になっちゃうのはいけないと思うなー。

「し、シラユキ様凄い。欠伸一つで三人ともメロメロになっちゃってるよ……。んー、私も一緒に寝てみたいな。シラユキ様、私もたまには」

「見習いが何を言いますか！！　そんな事を考えている暇があったら姫様に冷たいお飲み物でもお持ちしなさい！」

「ははははい！　行って来ますー！！」

キャロルさんはシアさんの一喝に、まさに飛び上がるほど驚き、部屋の外へ駆け出して行ってしまった。

「シアさん、今のはちょっと言いすぎじゃないかな？　私もキャロルさんと一緒に寝てみたいと思うよ？」

今のはシアさんらしくない過剰な反応だったね。私もビックリして眠気が少し飛んじゃったよ。

キャロルさんならこの三人みたいに変な事はしてこないだろうし、その、私に揉まれる胸も無いだろうし、お互い安心できると思うんだけどな。

「え、ええ。私も今反省しているところです。あの子はこれくらいの事を気にするような細い神経の持ち主ではないのでいいのですが……。はぁ、少し自己嫌悪してしまいますね。ですが、姫様？　ご

自分の可愛らしさをきちんと把握してくださいね？　キャロが姫様の寝姿に欲情し、襲われでもしたらどうするのです。いいえ、確実に襲われますね」

「言い切っちゃうんだ……。でも、うん、私もちょっと心配かな。シラユキは自分の可愛さ、ホントに分かって無いでしょ？　キャロルはレン一筋って言ったって、シラユキの可愛さをベッドの中目の前で見ちゃったら、辛抱堪らなくなって襲っちゃうわよね。私もキスは我慢できなくてしまくってるし」

「シアならいいけど、キャロルはまだ姫のお相手には認められないなー。シア一筋なんだよね？　好き合ってるならともかく、一時の感情の爆発で姫と……、なんて許せる訳が無いよ。もしそんな事にでもなったりしたら……、生かしてはおけないね」

きゃ、キャロルさん信用無いなあ……。そんな事ある訳無いってば。むしろフランさんが寝てる私にキスしまくってる方が問題だよ。

そんなありえない事より、みんなして可愛い可愛い言いすぎ！　まあ、そう言われるのは素直に嬉しいんだけどさ、小さな子供でさらに身内贔屓の目で見てるからそう感じるだけだって。今私は子供だからいいけど、大きくなってからも綺麗だの可愛いだのなんて言われてたら勘違いしちゃうよ。

でも、母様の娘で姉様の妹の私、ある程度の美人になれる素質は……？　ふう……、夢は見ないでおこう。容姿云々の前に、身長と胸だ！

「お待たせしました！！！」

「はやっ。ぜ、全然待って無いよキャロルさん！　あ、シアさんに

は注意しておいたからね。キャロルさんは悪く無いんだから、気にしないでね」

「シア姉様を注意？　さ、さすがはシラユキ様、誰にもできませんよそんな事……。あ、オレンジジュースでよかったですよね？」

「うん、ありがと。いただきまーす」

シアさんって結構注意されまくってると思うんだけど……。うわ冷たいなこれ、目が覚めるー！！

物の数分で厨房とここを往復したのか……、キャロルさんも凄いメイドさんだね。まあ、メイドさんは四階の高さを数分で往復できる必要は無いんだけど。

「まあ、先ほどは私も言いすぎてしまいました、が、姫様はリーフエンドのお姫様なのです。いくら姫様がお優しい方と言っても、最低限それだけは忘れないようにするんですよ」

「は、はい……。シラユキ様は本当にお優しい気さくな方で、つい友人かシア姉様の妹の様に思ってしまうんですよね」

「私も自分がお姫様だっていう事をよく忘れちゃうんだよね。でもそれは毎日私をからかってるシアさんが言っていいことじゃないと思います！　ふふふ」

私をからかう事を生きがいにしてるシアさんこそが言われるセリフだよ！　まったくもう！　シアさんの妹かー……。ふふ、よく分からないけど嬉しいね。

「今はそこまで気にしなくてもいいって。シラユキはお姫様でもま

だまだ子供だし、成人するまでは全力で甘やかしてればいいと思うよ。私は成人してからでも甘やかすつもりだけどね」

「そうそう。姫は成人しても多分キャロルより小さいだろうと思うし……。私も成人したくらいじゃ可愛がるのはやめれないと思うなー」

「伸びますー！　伸びるもん！！　キャロルさんより大きくなって見せるもんだ！！」

「伸びませんよ？」

「言い切らないで！！　シアさんに言われると本当にそうなりそうで不安になっちゃう！！」

「三人とも全然お姫様扱いしてないよね……。私はまだ見習いだからしょうがないか、はぁ……。早く私もシラユキ様をからかえるくらいのメイドになりたいな。胸も揉んで大きくしてもらいたいし、吸われるのにも興味があるし……、はっ！？」

メイドさんズ三人と、プラス私の視線が自分に集中している事にキャロルさんはやっと気付いたようだ。

キャロルさんは結構独り言が多いね。考えが筒抜けというか、素直な人なんだね、きっと。そのせいか言ってはいけない事をついつい口に出しちゃう事も多そうなんだけど。

「やっぱり胸の大きさはまだ気になるんだ？　姫とは一緒に寝させられないから……、シアに毎晩揉んで貰ったら？　相手がシアの場合は揉む側がいいかな？　あはは」

「今でもそれくらいはしてるんじゃないの？　レンと同じ部屋なんだし、あ、まさか、Hもしてるとか？　好きな人と毎晩同じ部屋、同じベッドで我慢できる訳無いよね。うふふふふ」

「してません！　まだ言いますか貴女は……。精々抱きつかれて眠るくらいですよ」

「私は毎晩でも甘えさせて欲しいんだけどね。でも、抱き枕にさせて貰ってるだけでも満足だよ。シア姉様のいい匂いにムラムラしちゃうんだけどさ、その時は、まあ、シア姉様が寝静まってから自分で」

「黙りなさい。……姫様？」

じ、自分で！？　自分で何！？　シアさんって確かにすっごくいい匂いなんだけど、え？　む、ムラムラ来ちゃうの？　ほ、ホントにキャロルさんって女の人が好きなんだ……

フランさんも、メアさんも、あれ？　姉様だって母様だっていい匂いだよね？　キャロルさんはこんな素敵過ぎる女の人たちに囲まれて我慢できるのかな……。おお、襲われちゃうんじゃ……？　はっ！？　わ、私も気をつけなきゃ！？　……私は無いか。私はシアさんだけに気をつけておけばいいよね。

「うわあ、真っ赤。姫ももうちょっとこの手の話に免疫付けてくれないかなー」

「なんで二十歳くらいでそこまで理解しちゃうんですか……。メアリーとフランが色々教えすぎてるんじゃないの？　お姫様にそんな

事教えちゃっていいの？」

「ん……、そんなとこかな。あー、うん、シア、さすがに言っちゃ駄目だよね」

「当然でしょう。姫様もキャロにはまだ話さないようお願いしますね。見習いを卒業後、エネフェア様の許可を得てから、という事にしておきましょう」

「何の事です？　って、聞いちゃ駄目か。頑張って見習い卒業しなきゃなあ……。くう、いいな、家族の内緒話かー」

「何の話だっけ？　ああ！　私自身もう完全に忘れちゃってたよ。そんな事もあったねー」

「か、軽い……。普通はもっと、結構重要な、重大な秘密の筈なのにね。ふふふ、頑張んなさい」

「ふむ……、丁度いいですね。今日は姫様も特にご予定は入っていませんし、メイドとしてではなく、姫様のお側に立つための心構えを私たち三人で教えてあげましょうか」

「え？　あの……、まだメイドとしても半人前どころかそれ以前の問題ですよ？　私。いきなり姫様のお側仕えになるための修行はちょっと、荷が重過ぎるのでは……」

「ああ、勘違いしない様に。姫様のお側仕えはあなたが一人前になろうとも、私は勿論、メアもフランも譲る訳が無いでしょう？　人の話はしっかりと聞きなさい、心構え、ですよ？」

「う？　そんなのあるの？　私も一緒に聞いてもいい？」

「それじゃ、姫にはお姫様としての勉強を教えようか」

「しまった！！　普通のお勉強はいいけど礼儀作法とかはちゃんとできる気がしなーい！！」

なんだかよく分からないうちに始まった、私の側に立つための心構え？　の勉強会。

どうせ三人とも今日は暇そうだし、私とキャロルさんをからかって遊びたいだけだろうとは思うけど、どんな内容か気になるのは確か。いつでも逃げられるようにだけはしておいて、成り行きを見守ろうと思う。

まあ、私も今日は暇なんだよね。ふふふ。

その１３３（後書き）

また暫くこんな、ゆるゆるだらだらとしたお話が続きます。

その１３４

さあ、始まりました。私の側に立つための心構えの勉強会のお時間です。なにそれ。

久しぶりにシアさんがシアさん先生モードになっている。指示棒と可愛らしい丸眼鏡を着け、さらに壁には倉庫の奥で埃を被っていた黒板をセッティング。この黒板も懐かしいな……

シアさん先生を中心として、左右にメアさんとフランさんが並んで立つ。今日は二人はアシスタントではなく先生として参加するみたいだね。これは面白くなってきた。眠気も完全に飛んじゃったよ。ふふふ。

私は椅子に座り、その横にはキャロルさんが立っている。生徒役はキャロルさんで、私はおまけのようなものだね。キャロルさんはこれから何が始まるか、どんなことを教えられるのかと少し緊張気味だ。

私の予想では限りなくどうでもいい事に近い内容だと思う。気を抜いて楽にして聞こうよ、とキャロルさんに進め、勉強会が始まるのを待つ。

「シア姉様その眼鏡まだ持ってたんですね、懐かしいなー。やっぱり似合うなあ……。綺麗だなあ……」

キャロルさんは昔を思い出して懐かしみ、シアさんの眼鏡姿に見惚れている。

私はどちらかと言うと可愛らしい印象を受けるんだけどな。キリッとした表情にあの丸い眼鏡というギャップがいいよね。

「キャロルさんもこういうお勉強会は何度も経験してるんだ？　シアさんは昔から説明大好きな人だったんだね」

「また気軽に人の話を……。中止にしましょうか」

「ちょ、折角準備したのに……。埃払うの大変だったんだよ、これ。まあ、今回も前みたいに私の名前を書いたくらいで結局使わないとかになりそうだけどね」

そういえば前回使った時は、フランさんの名前を小さく、隅っこの方に書いた以外何も使われてなかったね。あれは何年前だったか……

「はいはい。冗談ばっか言ってないで始めるよー。姫の側に立つための心構え！　なんて言っても特に何か決まり事がある訳じゃないよ。ただ、こうしよう、そうしてあげようって私たちが勝手に考えてるだけ。三人ともなのと、一人一人別で考えてる事があるね。えっと、ちょーっと分かり難いかな？　むう、説明って難しいね……。シアは毎回毎回よくやってるよこれ」

私たちの、？　な表情を見て少し落ち込むメアさん。

言いたい事は何となく分かるんだけどね。ただ三人がそう思ってるだけのことで、絶対にこうしろ、ああしろ、って言うのとはまた違う、ああ！　だから心構えなのか。

「決まり事もあると言えばありますよ？　こちらも私たち三人が勝手に決めた事なのですが……。ええと、姫様の前では少し言い出し難いですね。一番重要な決まりなのですが、今は除外します。後で私から教えておきましょう」

「ああ、それなら私が教えちゃってるからいいよ、口止めもしてあるから安心して。改めて言うまでも無い事だとは思ったんだけど、ちょっと思うところがあって、ね。でも、一応レンからもまた後で言っておいてあげて。多分レンから言われた方が心に残ると思うし」

「へ？　あ、ああ、この前のアレ？　確かに言われるまでも無いって私も思ったけど、フランから聞いた話じゃそうでも無いらしいじゃん。実際に見たのはフランだけなんだっけ？」

何？　何の話？　私の事についての話のはずなのにこの疎外感……、悲しいわ……

ヒントは、実際に見たのはフランさんだけ、という言葉。うーむ、さっぱりだ。

「キャロの口の軽さを考えてから話してくださいね、まったく。これについては今後一切話題にも出さないようにしましょう。キャロ、不注意で口に出さないよう気をつけなさい。もし、はありえませんよ？　絶対です」

「は、はい！！」

ああ！　分かる前に終わってしまった……。せめてもうちょっとヒントが欲しかったなー。

いいもんいいもん。どうせ今日のメインはキャロルさんだもん。私はただのおまけだもーん。いじいじ。

「何かシラユキがいじけてるけど放っておいて話を進めよっか？それじゃまずは私からね。私が気をつけてることは食事関係かな？　この子って苦手な物があっても黙って無理して食べちゃうのよね。作ってる側としては中々辛いものなのよこれがまた……。無理して食べて、おいしいよ、って笑顔で言ってくれちゃうからね。あの心の痛さは耐えられるものじゃないって……。だから初めて出す料理の時は顔色を、表情を見極めるようにしてるの。そんな事を繰り返してきたおかげで、よーく観察するとちょっとした違和感に気付ける様になれたんだけど……。レンみたいに瞬間的に、心を読んでるみたいな域には到達できそうにないのが気掛かりなのよねー」

何それ初耳なんですけど。って言うか無理して食べてたのバレバレだったのか！！　言われてみれば私の苦手な料理って大体一回出たらもう次は出てこないような……？　くうっ、やるな！　フランさん！　……ごめんなさい！！

内心で謝る私の表情に気付いたのか、フランさんにニヤニヤされてしまった。

「あー、シラユキ様ってそんな感じするよね。お姫様なんだしもっと我侭でもいいと思うんだけどなあ……」

「あ、ちょっと前の話なんだけどさ、我侭ってどう言ったらいいの？　とか真面目な顔で相談された事あるよ。あれは呆れたね」

「あはは。ホントにシラユキ様らしいね」

懐かしい！　人の黒歴史を披露しないでください！！

「それじゃ、次は私だね。私は、ね、とにかく全力で可愛がるようにしてるかな。撫でたい時は撫でるし、抱き締めたい時は即座に抱き締めに行くし、キスだってちょっと嫌がられても唇にもするようにしてるし」

「き、キスは不味くない？　唇！？　お姫様の唇をそんな簡単に奪っていいの！？　シア姉様、いいんですか？　ウルギス様たちに知れたら……」

「私もフランも姫様とのキスは毎日のようにしていますが、何か？」

「シア姉様も！？　シラユキ様羨ましいいいい！！　私にもたまにはしてくださいよー」

「寝る前に頬にはしてあげているでしょう？　まったく、子供ですか」

「そんな子供を寝かしつけるようなのじゃなくて……、その……」

「子供じゃなくて、大人のキス？　ああ、舌入れたり？」

「そう！　それ！」

「どれですか……。ああ、メア、この二人は放っておいて続きをどうぞ。姫様が茹で上がってしまいます」

「あはは。前にも言ったけど親愛の証のキスだから気にしないでね、姫。嫌がってると言うか、恥ずかしがってるだけで内心嬉しそうにしてるのは分かってるからやめられないんだよねー。私たちのせいで女の子が好きになっちゃったらごめんね？　その時はシアが責任を取ってお嫁さんにしてくれるから安心していいよ。後は、うん、お姉さんっぽくする事を心掛けてるかな。前にさ、姫が私の事を姉様みたいだって言ってくれたのが凄く嬉しくて、それから、ね。ふふふ」

「お姉さんっぽくか……、私にはどう考えても無理そうだ……」

し、し、舌を入れるだなんて！　いやらしい！！
メイドさんズとのキスは本当に嫌ではないね、恥ずかしいだけ。メアさんの言うとおり親愛の証っていうのは分かってるし、妹みたいに可愛がってくれるのは本当に嬉しいし……
でもメアさんはたまに、長めにしてくるときがあるんだよね。あれは恥ずかしすぎるよ、息できないし。

まあ、私が本当に道を外れて女の人のことが好きになってしまったら、シアさんだけではなくメアさんにも責任を取ってもらおうか。ふふふ。
絶対にありえないって言い切れることだけに、余裕を持って言う事ができるね。

そんな事を赤くなりながらも考えていたら、メアさんにニヤニヤされてしまった。

……あれ？　何か違和感が……

「では、私ですか。私は簡単ですよ？　何をするにもまず、姫様は、と考えるんです」

何をするにもまず私？

「シラユキ様は、ですか？　どういう意味です？」

「説明しないと分かりませんか。ふむ……、そうですね、簡単な例を挙げてみましょうか。朝目覚めたらまず姫様が今どうされているのかを考えます、私の当番の日でもなければまだお休みになっておられるでしょうが、念の為すぐに確認に向かっていますね。しっかりとお休みなのを確認し安心したところで部屋へ戻り、着替え始めます。その時も、私のこの姿をご覧になって姫様はどう思われるのか、と考えながら身だしなみを整えていきます。その後の朝食の食材選びもそうですね、姫様は今日何をお食べになられるか、なりたいと思われるか、それを予想し、自分が食べていいものかどうかを考え……、？　どうしました？」

「シア……、姫ドン引きだよ……。ま、まあ、私たちもそれに近い考えで動いてるんだけどさ、え？　それで簡単な例なの？」

「さ、さすがはレン。ちょっと極端な例が気になるね」

「起きてすぐ外へ行くのは、トイレじゃなくてシラユキ様の確認に向かってたんですね。私もそこまでシア姉様に想われたい！！」

し、シアさんはもうちょっと自分の事を考えてほしいな。使っていい食材が選べなかったら朝食抜きとか？　シアさんならありえてしまう……、っと。

「あ、引いてないよ？　ただ大袈裟に言ってるだけなんだよね？　シアさんはもっと自分の事も大切にしてね！」

さすがにこれはちゃんと口に出して言わなきゃね。

「私にとっては当たり前のことですから、特に大袈裟な言い方をした訳では……。ですが、ありがとうございます、姫様。では、フランのリクエストの極端な例を……、ふむ、本当に聞きたいですか……？」

「き、聞きたくない！　何となくだけど嫌な予感がひしひしするよ！！」

「姫様もこう仰っている事ですし、残念ですがここまでにしておきましょうか。からかい足り、……話し足りませんね」

話し足りないんだ……。シアさんは本当に説明とお話が大好きな……、？　からかい足りない！？

「ああ、気付かれてしまいましたね。まあ、わざとなんですが。私たちの話に表情をくるくると変える姫様の可愛らしさ、堪能させて頂きました」

「やはりからかわれていただけだった！！　三人ともどこまで本気なのー？」

「うん？　私とメアは普通に話してたよ？　ちょっとはシラユキの

反応を楽しもうって考えはあったけど、ね。ふふふ」

「うんうん。姫はちゃんと苦手な食べ物は苦手だって言って、私にはもっともっと甘えてくれると嬉しいな、っていう話だよ」

「二人ともメイドって言うより本当に家族なんだね。私もそうなれる日が来るといいなあ……」

「う？　キャロルさんはもう家族だよ？　そろそろ敬語もやめてほしいなー」

「可愛い！　は、失礼しました！　敬語抜きはホントに難しいんですよ……。シア姉様もそうですし、私も今はまだこのままでお許しくださいね」

「うん！　あ、結局また黒板が無駄になっちゃったね」

「いいえ？　これは今から使うんです。おや、姫様、お忘れですか？」

「にゅ？　何を？」

「にゅ！？　もしかして姫って、まだ寝惚けてる？　やけに口数少なかったし……。さっき私が言ってたよね、お姫様としての勉強もするって」

「え？　……あ、忘れてた！　ど、どんなお勉強……？」

「あはは。いいよいいよ、今日はやめておこ？　そんな事より可愛がりたくなってきちゃったから、ちょっと私の膝の上に乗せるよ」

「なんだかよく分からないけど助かった！　メアさん大好きー！！」

「ああ！　メアずるい！！　私もとりあえずキスしよう」

「シア姉様は行かないんですか？　真っ先に行くんじゃないかと思ってたんですが」

「私は後で。フランとメアが昼食の用意へ行きますからね、その時にたっぷりと……」

「たっぷりと、何!?　私何されるの!?」

たっぷりと膝の上で頬をグニられました。

そしてそのあまりの気持ちよさ、心地よさにそのままおやすみなさいと寝てしまった。

目が覚めたのは夕方過ぎ。それでも夜にはまた眠くなっちゃう私は子供だなー。

その１３５（前書き）

今回はちょっと……、Ｒ１５と言うか、ＧＬ要素が？
苦手な方はお気をつけてください。

その135

「今日はキャロルさんのお話、聞かせてほしいなー」

キャロルさんの個人的なお話ってあんまり聞いたこと無いんだよね。リズさんはあの反応が可愛かった、この仕草がが可愛かった、としか話してくれなかったし、一体どんな生活を送ってきたのかちょっと疑問に思ったら興味が膨れ上がってしまったのだ。

幸いな事と言うか、シアさんはメアさんとおやつを作りに行ってるし、今がチャンスだね。キャロルさんは話してる間についつい昔のシアさんの事をポロッと言っちゃいそうだからね。それが狙いでもある。

「私の話、ですか？　前にも言いましたが、冒険者の話なんて聞いていて面白いものじゃありませんよ？　まあ、雑務依頼の方ならそれなりに変わった話もいくつかありますが」

「それでいいんじゃないの？　私もそっちの話なら興味あるよ。レンに聞いたけどホントに色んな依頼があって面白そうじゃない、冒険者の仕事って」

「ああ、配達やら収穫の手伝いやら、魔物退治に一晩の相手、他にも色々あるよな。キャロルは受けた事あるのか？　一晩のお相手募集」

フランさんと兄様は雑務依頼に興味があるようだね。私の聞きたい事のメインは、冒険者としてでのキャロルさんじゃなくて、個人的な趣味とか好きな物とかのお話だったんだけど……。今兄様失礼な事聞いたな……。セクハラだよ、パワハラだよ！　まったくもう！

ちなみに私は今兄様の膝の上にいるので実際に文句は言わない。降ろされたくないしね。

「ありませんよ……。私のこんな子供みたいな体で誰が満足するんですか。それに、私が体を許すのはシア姉様だけです！」

おお、軽く流した。さすがはキャロルさん大人だ。

何か変な事も口走っちゃってるけど気にしないでおこう。

「うんとね、そういうのじゃなくて……。キャロルさんの趣味とか、好きな食べ物とか、そういうのが聞きたかったの。子供の頃……、あ、シアさんとどうやって出会ったー、とかね？」

確か子供の頃に岩を投げて遊んでるところをシアさんに見つかってスカウトされたんだったかな？　でもキャロルさんの両親とか、家族の人は反対はしなかったのかな……。こんなに可愛いキャロルさんの子供時代、もっともっと可愛かった筈だよね。

「ああ、なるほど、私個人についてですね。それじゃ、話せる範囲でお話しますから、何か気になる事がありましたらどんどんどうぞ」

キャロルさんは少し嬉しそうに、任せてと言った感じに自分の胸に手を当てて話す。

「女性同士ってどうヤるの？」

「フランさん!?　い、今のは無しで!!」

「俺もちょっと興味あるな……」

「兄様まで!!　そういうのは私のいない所で話してー!!」

「あはは……。シラユキ様、落ち着いてください。フランとルーディン様には後でお話しましょうか」

あ、ホントに後でするのね……。私も興味が無いといえば嘘になるけど、やっぱりまだ恥ずかしさが強いよ……。もしそれを聞いてしまったら、その後にシアさんとキャロルさんが恥ずかしさでまともに見れなくなってしまいそうだ。

最初からいきなり躓いてしまったけど、気を取り直して質問していこうかな。

「それじゃ、簡単なところから。好きな料理ってある？　リクエストしてくれれば大抵のものは作ってあげれると思うよ。辛いのが好きなんだよね、確か」

料理担当のフランさんの興味はやっぱりそこになるね。辛い物の好きっていうのは前にチラッと聞いたことあったかな。

「うん、何でも赤コショウかけて食べてた時期があったね。シア姉様に、頭だけじゃなくて舌まで馬鹿にするつもりかこの阿呆、って言われてからはやめてるけど。でもこれが好きっていう料理は無いねー。辛い物全般なんでも来いよ」

「シアさん何気にひどい！　私は辛いのは全然駄目だなー。兄様も辛いのは好きだよね？　やっぱりお酒に合うから？」

兄様はお酒大好きなんだよね。私には分からないけど辛い料理はお酒に合う、とか言われてたような？

「ん？　ああ、麦酒の事か。それはあるな、うん。キャロルは酒はどうだ？　この前の祭りの時それなりに飲んでただろ」

「果実酒ならそれなりにですが飲めますね。特に好きという訳でもないです。麦酒は付き合いで飲むくらいですね。どちらも特に好きと言える程じゃありませんね」

「ほー。んじゃ、今度付き合え。ユーネもシラユキも全然飲めないからな」

「はい、いつでもお呼びください。フラン、その時は辛い料理よろしく」

「はいはい、楽しみにしてなさい」

私も甘ーいのなら少しは飲めるね。グラス一杯も飲めば真っ赤になって寝ちゃうんだけど。

兄様も父様もどこに入るんだっていうくらい飲むんだよね。兄様は飲みすぎて酔っ払うと厄介な人に変貌するので、二人には気をつけてもらいたい。

ふふふ。やっぱりシアさんの事が出てきたね、シアさんの昔の口調をちょっとだけ知れて嬉しい。冒険者の頃は荒めの口調だったっ

て言ってたもんね。
この調子で次々行こう！　キャロルさんの事に加え、シアさんの過去をもっと探るのだ！！

「趣味って呼べるものはあるの？　冒険者の人ってそんな余裕は無さそうだよね？」

毎日必死に生きていってる人達だもんね。趣味に回すお金とか、そういう余裕は中々無さそうな気がする。

「レンは料理が趣味だって言ってたし、そうでもないんじゃないの？」

「趣味なんてモン別に余裕が無くても持てるだろう。ラルフの場合はあれだな、女性観察。いい趣味してる奴だったぜ、ははは」

「女性観察って言うか……、女の人の胸見てたんでしょそれ。やっぱりルー兄様の親友だね」

「趣味ですかー……。んー、無いかな。シア姉様と一緒にいる間は、修行ばかりでしたし。その分たまに甘やかしてくれるのが本当に嬉しかったな……。その後、独り立ちしてからも今度は一人でやって行く事に必死で、シア姉様が行方不明になってさらに余裕も無くなって……。リズを弟子にしてからもそうですね、教えた事をどんどん吸収していくリズを育てることが楽しくて……。言われてみれば無趣味ですね私」

あはは、と照れくさそうに言うキャロルさん。

なんか、改めて聞くとキャロルさんって苦労人だよね。

子供の頃にシアさんに捕まって冒険者にさせられて、飴と鞭を上手く使い分けられて育てられたのかな？

独り立ちしてからもシアさんが行方不明になっちゃったりで、あんまり余裕が無い生活をしてたのかもしれないね。シアさんはもっとキャロルさんを労わるべきだと思う！　私から進言しておこう。

……甘やかすってそっちの意味じゃないよね？

「それじゃ、これからだね、ふふふ。今は料理、とか？」

「ああ！　料理って面白いですよね。それに、あんなに楽しいものだったとは思いもよらず。シア姉様も教えてくれないかな……」

「私も教えてもらいたーい！」

「何だコイツら、可愛いな……。キャロル、撫でてやろうか？」

「え？　いえいえそんな！　私なんかよりシラユキ様をもっと可愛がってあげてください」

「やっぱ反応は大人だな……。違和感が凄え」

「あ！　これは聞いておきたかったんだった。あー……、でも、シラユキの前だと話し難いかな？」

フランさんが思い出したように言う。何か気になっている事があったみたいだ。

私の前だと話し難い内容とか、嫌な予感しかしないよ……。兄様は既にニヤニヤして黙って聞く体勢だよ……

「言うだけ言ってみてよ、そんな言われ方したら気になっちゃうって。シラユキ様にお聞かせし辛い質問なら答えなければいいだけだしさ」

「そう？　それじゃ聞くけど……。キャロルが女の人を好きになった理由ってあるの？　やっぱりレンが原因だったりする？」

ほ、ほう……。それはちょっと私も気になる質問ではあるね。今聞いておけば私が女性趣味に転んでしまう事がもし、万が一あったとしても回避が可能になるかもしれない！！

「ちょいと恥ずかしいねそれ……。うん、シア姉様が原因かな。小さい頃からの憧れが恋愛感情に変わった瞬間は覚えて無いけど、あ、一目惚れだったのかも……。私が投げた岩をナイフ一本で粉々に砕くシア姉様、カッコよかったなぁ……。今でもあの凛々しい立ち姿は目に焼きついて離れないよ。その姿に一瞬で惹かれて、家族の反対を押し切って無理矢理弟子入りしたのよ私って。そんな小さな我侭な子供だった私を受け入れてくれた優しいシア姉様……。好きにならない訳が無いよね」

うん……、うん？　い、イイハナシダナー。

キャロルさんが投げた岩をナイフ一本で粉々にしちゃうシアさんもシアさんだけど、人に向かって岩を投げちゃった子供の頃のキャロルさんもキャロルさんだよ！　どっちもおかしいよ！！

しかし、シアさんがキャロルさんを捕まえたんじゃなくて、キャロルさんから弟子入りを志願したのか。ふむふむ。

なるほどね、シアさんの凄さを見せ付けられて、そこに痺れる憧れるぅしちゃった訳なんだね。

なんの参考にもならなかったけど、また一つシアさんの過去を知ることができた。良しとしようじゃないか。偉そうだな私……

「それでも女性同士っていうのは抵抗なかった？　私はちょっと考えられな……、シラユキなら考えるけど」

「考えないで！！」

「抵抗？　無い無い。毎日厳しく色々な事を叩き込まれて、できないとさらに厳しく叱られて。それでやっとできた時、もの凄く優しく笑顔で撫でながら褒めてくれるのよ？　あの優しい笑顔に惚れないなんてありえないって。不出来な私に呆れてお説教をしながらも、きちんと毎日料理を作ってくれたり、武器や着る物から何から何まで用意してくれたり……。本当に、本当にシア姉様以上の人なんている訳無いよ……」

昔を、シアさんとの旅を思い出しながら、とても嬉しそうに話すキャロルさん。

キャロルさんはシアさんの事が大好きなんだなー。でも今のシアさんはキャロルさんに対してはそっけないよね……、ちょっと悲しくなっちゃう。私のせいなのかなと考えるともっと悲しくなっちゃうね……

「それで……、初めてを貰ってもらったんだっけ」

！？　フランさん何を！？　兄様よくやった！　って顔しない！

！　今のキャロルさんにそれを聞いちゃったら……

「うん、初潮が来てすぐにね。もう大好きで大好きで堪らなくなっちゃってさ。シア姉様の下着をくすねて、その匂いを嗅ぎながら自分を慰めてるだけじゃ、全然満足なんてできなくて、どうしようもなく切なくなっちゃって……。あれは毎日辛かったなー、シア姉様って女の人どころか男の人にも全く興味ないみたいだったし。そんな頃に初潮が来て、お祝いに何でも一つ聞いてあげるって言われて……。結婚も恋人も無理なら、せめて処女を貰ってくださいってお願いしたんだ……。その晩、渋々、嫌々だったと思うんだけど、もの凄く優しく抱いてくれて……。ああ……、シア姉様……」

「あっちゃー、キャロルちょっとストップ。シラユキ大丈夫？　ごめんね？　真っ赤になっちゃって可愛い……」

「俺も聞いてて恥ずかしくなったな……。シラユキは大丈夫か？　こんなストレートに聞いちまったの初めてだろ。あー、耳塞いでてやればよかったか、失敗したな」

「フランさんもルー兄様もきらぁい……」

「ごごごごめんシラユキ！！　許して！！　シラユキに嫌われたら死んじゃう！！！」

「うおおおお……。痛え、心が痛え……。半泣きでこのセリフは本気で辛いな……。シラユキごめんな？　ほら、こっち向いて抱きついて来い」

「でも、その日からシア姉様、たまに甘えさせてくれるようになったのよ。もう幸せで幸せであいだっ！！　いったー……、な、何が？　あ、シア姉様。おやつの準備出来たんですか？　あれ？　怒って……？　はっ！？」

「着替えて、武器を持って表に出なさい。久しぶりに私が直々に、その腑抜けた面構えを叩き直し、鍛え直してあげましょう……」

「あらら、頑張ってねキャロル。フラン、姫とルーディン様のお世話、もう少しお願い。おやつはここに置いとくよ。私は包帯と傷薬出して来るから、あ、魔法薬もいるかな？」

「わ、私もここまでか……。あ、うん、よろしく。腕の一本くらい無くすかも。そうだ、ルーディン様、シラユキ様、今までお世話になりました。もうお会いできなくなるかもしれないので一応……」

「馬鹿な事を言ってないで早く用意なさい、この馬鹿弟子が……。明日に残るような怪我はさせませんよ。傷を残すのは、心に、です。もう二度とその軽い口が回らなくなるようにしてあげます。これであなたも安心でしょう？　まあ、副作用で泣いたり笑ったりもできなくなりそうですが……、問題ありませんよね？」

「ひい！　許してください！！！　最高に怖いけど何故かちょっと嬉しい……。い、行ってきまーす！！」

その１３５（後書き）

もうちょっとこんなだらだらした話を続けたいと思います。

その136

「はあ……。あれが本気のバレンシアか、まさか私とキャロルの二人掛かりで掠りもしないとはな。一線を退いたとは言え流石は元Sランク、少しは通じるくらいの実力が自分にはあるんじゃないかと思っていただけにショックが大きいな……」

「本気？　何言ってんのクレア。シア姉様にとっちゃあんなの遊びの内だって……。私たちがギリギリ回避できる、全力で避ければ掠る程度で済む速さで投げて来てたっしょ？　しかも多分、アレだよ、私たちが本気で殺すつもりで行ってるのに、シア姉様はきっと、今日のおやつは何にしようかしら？　とか考えてたよ……」

「やめてくれ、本気で落ち込むぞそれは……。あー、しかし、そこは眺めがよさそうだな。下着が丸見えだが、こんな所誰も通らんだろう、気にするな」

「ちょっ！　言われて初めて気付いたわ！！　見るな！　あ、シラユキ様いつの間に！？　見ないでくださーい！！！」

「クレアさんはさっきから何して、？　上？　何されてるのキャロルさん……。黒！？」

無表情だけど、多分内心ニヤニヤしながら上のほうを指差すクレアさんに従い目線を上げると……、まさかの黒！！　はっ！？　動揺してしまった……。キャロルさんは大人なんだし、黒い下着もありえるよね、うんうん。

物干し竿を袖を通され、キャロルさんが干されていた。文字通り

洗濯物のように干されていた。

なにこれ超楽しそう。

「キャロルさんは……、大人だね！」

「どんな感想ですか！！　あ、すみません、こんな姿で失礼します……」

しかし見事なまでに洗濯物になってるねキャロルさんは……。どうしてこんな事に、っていうのは想像はつくけどね。どうせシアさんの仕業に決まっている。私がここに来たのもシアさんに連れられて、だったしね。

そのシアさん本人はおやつを作りに行ってしまったんだけど、素敵な笑顔で私を一人こんな所に置き去りにして行ったのはそういう訳だったのか。

ここは、いつもの談話室の一つ上の階、五階にあるバルコニー。主に洗濯物を干す場所として使われている。

引き篭もって読書ばかりの私を見かねたシアさんに、今日は温かいからそこで日向ぼっこでもして来い、とズルズル引き摺られてやって来たのだ。正確には抱き上げられて来たのだが、それは、まあ、どうでもいい。

私としては読書を続けたくて嫌々だったのだけど、こんな面白い

物を見せてもらって逆に感謝の気持ちで一杯になってしまった。

日差しも暖かく、気持ちがいい。さらには話し相手も二人、内一人は私の目も楽しませてくれるという、まさに至れり尽くせりだね。

私専用サイズの小さな丸テーブルと椅子を出し、それを見たクレアさんに椅子を引かれ、一言お礼を言いながら座り、落ち着く。

クレアさんはそのまま私のすぐ横で待機してくれている、私のお世話ができるぞと少し嬉しそうだね。そう思ってくれるのは私としても嬉しい。

「姫様はどうしてこんな所へ？　それにお一人で……。館の中でも必ず誰かを連れて移動してください、心配です。バレンシアは何をしているんだ……」

なんという過保護な……、お家の中くらい一人で歩かせてくれたっていいじゃない。うん？　ああ、私が一人だと何を仕出かすか分からないから心配なんだね、なるほど納得。……くそう……

「シアさんにここで日向ぼっこでもしたらーって言われて連れて来られちゃったの。そのシアさんはおやつを作りに行ってるよ、今日はここで食べるのかもね。ここって温かくって気持ちいいねー。それに、面白い物も見れたしちょっと嬉しいな」

ふふふ、とニヤつきながら、ちょっと失礼だけどキャロルさんを指差す。

「笑わないでください、はぁ……。いい眺めですよー、シラユキ様も一緒にどうですかー。ふぅ……」

「あはは、私は遠慮しておくね、キャロルさん一人で楽しんでていいよ？　ふふふ。うん？　そういえば、キャロルさんはどうしてそんな目に会ってるの？」

シアさんの仕業というのは間違いない。でも、一体どんな理由で？　まさか私の目を楽しませるためか！？

「ああ、キャロルは川に落ちたのです、正確にはバレンシアに落とされたのですが。今日は干してある洗濯物も少ないですから、着替えるよりここで干してしまえと……。恐らくは姫様をここへお連れする事も考えての行動でしょう。それならあの強引さにも納得がいきます」

本当に私を楽しませるための行動だった！！　シアさん何しちゃってくれてるの！？　ありがとう！！　ひどいな私は……

「多分川に落としたところから全部シアさんの企みで合ってるよ……。ごめんねキャロルさん、私が引き篭もって本ばかり読んでたからこんな面白そうな……、こほん。こんなひどい目に……」

「わ！　謝らないでください！　シラユキ様に楽しんで頂けたのなら、川に落ちたのもここに干されたのも、クレアとシラユキ様に現在進行形で下着を見られているのも本望というものです」

はっきりと、干されたままではちょっと格好がつかないが、はっきりとそう答えるキャロルさん。

最後の一言は変な意味に思えちゃうからやめようね……。ろ、露出が趣味とか思われちゃうよ！！　でもついつい目線が行っちゃうね。じろじろ。

最近のキャロルさんは、出会った頃の様なピシッとした？　キリッとした？　とにかく可愛くてカッコいい冒険者の顔つきに戻ってきたような気がする。

そのせいで、折角丸くなってきた話し方までまた少し荒めに戻ってしまったのだけれど……、私には基本敬語なのは変わっていないからいいと言えばいいのかもしれない。

しかし！　油断する事がほぼ無くなってしまったのが非常に、ひっじょーに残念で堪らないね！

あれからシアさんについての情報をこぼす事まで全く無くなってしまったのだ。こっちは無くならないままでもよかったのに……

「今日の訓練にはクレアさんも参加したんだね。聞いてもいい事なのか分からないけど、どうだった？」

訓練とは、毎朝私が起きるまでにやっているらしい、キャロルさんの鍛え直しの訓練。シアさんが私と一緒に寝る当番の日はお休みになるが、朝からそんなヘトヘトになるまで動いちゃっていいんだろうかと疑問に思ってしまう。

まあ、シアさんにとっては朝のラジオ体操程度の運動なんだろうけどね、キャロルさんはその後さらにメイドさんのお勉強まであるのに、本当に大変そうだ。それでも、もうその生活サイクルにすっかり慣れてしまっているみたいで、そこまで心配することでは無いと思うんだけど、ね。体を壊してしまっては元も子もない。現に今、ご覧の有様になっちゃってるし……

「どう、ですか？　そうですね……、結果は分かりきった事だったのですが、上には上がいる、という事を改めて思い知らされました。

しかし、最強と呼ばれる程の強さを目の当たりにし、実際に自身の身にその技を受けて経験できたのはいい収穫でした。これでまた目標を高く持ち、鍛錬を続けていく事ができそうです」

そう、満足そうに話すクレアさん。やる気に溢れている感じだね。

私が聞きたかったのは訓練内容だったんだけど、聞き方が悪かったね。でもクレアさんが嬉しそうだからいいや。相変わらずの無表情だけど、なんとなく分かるようになってきたよ。

「シア姉様は実際のところエルフの中では最強だよ。ハイエルフの方々を含めたら……、どうだろう？　本気のシア姉様をどうにかできるのはウルギス様くらいなんじゃないの？」

「シアさんってそんなに強いんだ？　父様は世界最強って呼ばれてるのは知ってるけど……。うーん、どっちも強いっていうのは何となく分かるんだけどね、強さの基準って言うのかな、そういうのは私にはよく分からないや」

とにかく二人ともすっごく強いっていう事しか分からないね。……あ。

「でもでも、お爺様とお婆様の二人とも父様より強いんじゃなかった？　それなのに父様は世界最強なの？」

お爺様とお婆様の二人が本気になったら世界が滅ぶ、とかそんな言われ方してたしね、考えてみるとかなり怖いな……。私が生まれてからだから、二十年以上帰って来てないのか。会ってお話してみたいし、たまには帰って来てくれないかなー。

「シラユキ様のお爺様とお婆様、ですか？　私はその方々がいる、という事くらいしか知りませんね。帰って来られたらご挨拶をしなければ、とは思っているんですけど……、ウルギス様より強い……？　え？」

「あの方たちはあまり表立っては行動されないのです。大陸中の冒険者ギルドを転々として巡り、誰も受けぬような高難易度の依頼を人知れず潰して回られているとか。私もそれくらいしか知りません。お二人とも気さくな方なのですが、やはり直接口をきくのは恐れ多く……、失礼しました。世間一般的には、お二人は全く知られていないのです」

「なるほどねー、あんまり目立つような行動はしてないんだね。きゃ、キャロルさんは気にしないでね？」

「は、はい！　やっぱりリーフエンドは怖い国だった……！！」

失礼な！！！　でもプラプラとしながらで可愛いから許してあげよう。ふふふ。

「如何でしたか、姫様？　たまには外に出て日に当たる事も必要なのですよ？　しかし、日焼けには気をつけてくださいね」

「うん、ありがとねシアさん。シアさんがくれた日傘もちゃんと仕舞ってあるから大丈夫だよ。ふふふ」

「私の日焼けも気にしてください！！　上からはジリジリ下からはジロジロもう大変で、って言うかそろそろ降ろしてくださいよー！

！」

「洗い物が何か騒いでいるようですが……、気にしないでおきましょう。さ、姫様、そろそろ中へ入りましょうか」

「気にしてあげてよ……。クレアさん、キャロルさんの事、お願いね」

「はい、お任せください、もう暫く眺めてから降ろすとしましょう。カイナも連れて来るか……」

「シラユキ様！　クレアじゃなくてシア姉様に言、ああ！　待ってください！！　せ、せめて一度トイレにー！！！」

その１３６（後書き）

今回はちょっと短めに。
こういうあんまり内容の無い日常会話を書くのがとても楽しいです。
読んでる方にとってはつまらないとは思いますが、やめられない！
やめにくい！！

その１３７（前書き）

Ｒ１５くらいの表現があります。
ええ、例の人です……

その137

今私は、シアさんと手を繋いでちょっと久しぶりな気がする冒険者ギルドに向かっている。

エディさんもソフィーさんも特にお休みの日とかは決めてなくて、事前にいつお休みなのか聞いておかないと中々会えないんだよね。ソフィーさんには森に入る許可を出してしまおうかな？　いや、危険か。森に猛獣を解き放つようなものだ、やめておこう。

実際今日も約束があって来た訳じゃない、ただのついでだ。たまたま近くを通りかかった、と言うか、お買い物ついでにミランさんにお菓子の差し入れにやって来たのだ。

か、勘違いしないでよねっ、別にミランさんに会いたくて来た訳じゃないんだからねっ！　とか言ってみようかなとも思ったけど、ミランさんは本気で落ち込みそうだからこちらもやめておこう。

ミランさんは私の間食禁止令を律儀に守り、今は決まった時間、おやつの時間にしかお菓子を食べてはいない。

最初は本当に辛そうで、よくペンを齧りながら私の方を縋る様な目で見つめてきていたのだが。やっぱりそこは禁酒禁煙と同じ、慣れてしまえば後は楽みたいで、肌荒れがあまり気にならなくなったと喜んでいた。そういえば煙草って吸ってる人見かけないな……。まあ、どうでもいいか。

禁止令を出した直後くらいに手を少し触らせてもらったんだけど、全然荒れている感じはしなかったんだけどね。見えない部分で何かしらあったのかもしれない。

まあ、もう過去の話だ、今思い出して悩んでも仕方が無い。そんな考えを頭の隅に追いやり、ギルドの中へと入ると……

ソフィーさんがカウンターの前で正座をさせられていた。

……嫌な予感がする。なんでちょっと嬉しそうなのソフィーさん……

「ミランさんソフィーさんこんにちわー。はい、ミランさんこれ、お土産だよ。おやつの時間に食べてね」

「わあ！　ありがとうございますシラユキ様！！　お姫様から差し入れを貰うギルドの受付なんて私くらいですよね。ふふふふ」

おお、ミランさん嬉しそう。これは遠回りしてでも寄りに来た甲斐があったね。誰かに嬉しそうにして貰える事は私にとっても嬉しい事だ。ふふふ。

「挨拶を返しなさい挨拶を。不敬罪で国外追放ものですよ？」

「すすすみません！！　シラユキ様、バレンシアさん、こんにちは！！」

シアさんの一言に大慌てで挨拶を返すミランさん。大きな声だったので注目を集めてしまった、恥ずかしい。でも挨拶は大切だね！

「はいこんにちは、お元気そうで何よりです。ところで……、ソフィーさんはどうしてその様な、面白そうな状態になっているのです

か？」

さっきから一言も喋らず、にこにこ笑顔で正座しているだけのソフィーさんが気になったのか、指を差しながらミランさんに尋ねる。

あー、折角嫌な予感がしてたから放置してたのに。後、人を指差しちゃ駄目だよシアさん……。私もつい最近したような気がするけどね。

黙ってにこにこと正座してれば誰だって気になっちゃうか……。私も嫌な予感がしていただけで気になってはいたところだし、よしとしよう。

「あ！　そうだ！　聞いてくださいよシラユキ様！　ソフィーさ……、やっぱり聞かないでください」

「なんで！？　そんな言われ方したら余計に気になっちゃうよ……」

聞いて聞いてと言われて、でもやっぱり聞かないでとくるとは、ミランさんやるな！

ちょっと怒ってるみたいだし、多分ソフィーさんがまた何かいやらしい事でも仕出かしたんだろうけど、これは気になっちゃうね。

「察するに、姫様にはお聞かせし辛い内容の様ですね。では、まずは私が聞きましょうか。姫様はソフィーさんの足を突付いてお待ちください」

そう言うとシアさんは、ヒラリと一飛びカウンターの中へ。普通に歩いて入ろうよ……

ふむ……

チラリとソフィーさんを見てみると、もの凄くキラキラとした期待の眼差しを私に向けている。だからなんで嬉しそうなのよソフィーさん……

まずは近寄って観察してみよう。床の上に直接じゃなくて、何か布を敷いてその上に裸足で正座させられてるね。それでもちょっと痛そうだ、ミランさんは厳しいね。

いつからさせられているのかは分からないが、正座というものは毎日して慣れている人でもない限り足が痺れてしまうもの。正座が珍しくない日本でもそれは変わらなかったね。ましてやここは、正座こそはあるが、主に反省させる用途にしか使われていない世界だ。間違いなく今のソフィーさんの足は痺れていることだろう。

ふむふむ、ふむ。実に面白そうじゃないか……

ソフィーさんのすぐ横にしゃがみ込み、とりあえず足首の辺りをツンツン。

「あふんっ。……あ、失礼しました」

何今のいやらしい声！？　ハートマークが付きそうな声だったよ！

ソフィーさんは声を出さないように言われているのか両手を口に当て、私の次の行動を期待の眼差しで待っている。

いやらしい声が出ないのならちょっと安心かな。さすがに突付くたびに変な声を出されては私の心が持ちそうに無い。

気を取り直して同じ辺りをツンツンツン。
突付く度にビクビクと体全体で反応するソフィーさん。

なにこれ楽しい。

足首の辺りだけではなく、踵、足の裏や指先の方も突付いていく。
さすがのソフィーさんも断続的に突付かれては辛いのか、肩を揺らし、首を横に振りながらビクビクと耐えている。
たまにくぐもった声で、んっ、とか、ふっ、とかちょっといやらしい声が聞こえてきちゃったりして、私の方もそれなりのダメージは負っているのだけど、楽しくてやめられない。

数分間、こんな楽しくも恥ずかしい時間を堪能し、ソフィーさんの顔を改めて見てみると……、!?　涙目!?

「ご、ごめんなさいソフィーさん!!　や、やりすぎちゃった?」

「え?　あ、いえいえ!　とっても気持ち良かったですよ?　どうぞもっともっと私で、私の体でお楽しみください。くすぐって貰っても、抓ってもらっても構いませんよ?　それとも、足先だけでは物足りないですか?　あ、スカートは捲ってしまいますね。是非太腿の内側を姫様の可愛らしいお手でくすぐって頂きたいです。そのまま足の付け根の方へ手を進めて頂けるともっと嬉しいですね。うふふ。少し乱暴なくらいに弄ってくださっても……、そうだ、下着も脱いでしまいますね」

「やめて!!　ごめんなさい!　謝るからやーめーてー!!　わあ!　下着見えちゃってるから!　戻して戻して隠して!!」

立ち膝でスカートを捲り、裾を口に咥えて固定し、下着に手を掛けて脱ごうとするソフィーさんを必死で止める。

「こらー！！　ギルド内で何やって……、本当に何やってるの！？　いい加減にしなさいよソフィーさん！！　シラユキ様もそんなやらしい人相手にしちゃ駄目ですー！」

「申し訳ありません姫様、楽しそうにしていられましたので止めるのが遅れました。ああ、まずはお手を。他人（ひと）の足の裏など触ってはいけませんよ？　注意が足りず、申し訳ありませんでした」

私には止めることが無理だと感じたのか、ミランさんとシアさんがカウンターから出て来てソフィーさんを止めてくれた。

助かった、終わったと思ったよ……。あのままだったら無理矢理色々な所を触らされていたかもしれない……。ソフィーさんはいろんな意味で怖い！！

シアさんに念入りに手を洗わされて、いつもの席へ三人で座る。ソフィーさんがテーブルに着くまでの一歩一歩毎にいやらしい声を出していたのが恥ずかしかったね。

三人とは言っても、私、ソフィーさん、それとシアさんが座っている訳じゃなく、ミランさんだ。今日も相変わらず暇そうだし、誰か来るまではここにいてもいいかなと思うね。私もその方が嬉しい。

「ええと、バタバタしちゃってごめんなさい。それで、シアさん、私が聞いてもいいお話だった？」

ソフィーさんをツンツンするのが楽しくて忘れちゃってたね。ソフィーさんが正座させられていた理由は何だったんだろう？

「少し難しいですね……。できることなら姫様にも聞いて頂いて、その上でソフィーさんをお叱りして頂こうと思っていたのですが……。心優しい姫様のことです、真剣にお怒りになられて、最悪ソフィーさんを嫌ってしまうのではないかと思いまして……」

「それは半分言っちゃってる様なものじゃ……。っと、シラユキ様？　それだけ許せない事を仕出かしたんですよこの変態は。もし当たっていたらと思うと……」

当たる？　……おっと。

私がソフィーさんを嫌いになってしまうくらいの酷い事？　うーん、聞かない方がいいのか、それとも聞いて怒った方がいいのか……。でも、私が絶対に許す事のできない内容だったとしたら……

でも、ソフィーさんは変態だけど基本は優しいいい人なんだよね。どんな事をしてしまったかは全く分からないけど、そんなに酷い事をしてしまう人には見えない。ここは、聞いてみた方がいいかな。

「うん。シアさん、ミランさん、聞かせて？　ソフィーさん、ちょっと怖いけど、ソフィーさんのことを嫌いになりたくないから聞くの。その、怒って酷い事言っちゃったらごめんね？」

私だって怒る時には怒る、と思う。カッとなってソフィーさんに酷い事を言ってしまうかもしれないので、先に謝っておく。

「シラユキ様……。あの、私が、私からお聞かせします。いいでしょうか？」

いつものにこやかな表情とは違う、真剣な顔つきでシアさんにお願いをするソフィーさん。

自分でもいけないことをした、という自覚はあるみたいだね。さっきのお仕置きは逆に嬉しくてお仕置きになっていなかっただけで……。難しいなこの人は！

「ええ、覚悟の上でしたらどうぞ。ですが、私が止めたら即座に口を閉じること。これは約束してくださいね」

「はい、約束します。ありがとうございますバレンシアさん。……では、シラユキ様、お話しますね」

シアさんにお礼を言い、ソフィーさんは私の方へと向き直る。真剣な表情だ。私も真剣に聞かなければ……

さっきまでツンツンして楽しく遊んでいただけに、まだこの空気の変わりようについて行けてないんだけどね。

「実は、その……。少し前の、たった一晩だけの事なのですが……、今晩もエディ君にたっぷりと愛してもらおうと思って準備をしていたんです」

「いきなりアウトに近い！！　あ、ごめんなさい。つ、続けて……」

「アウト、ですか？　一体何が……。すみません、続けますね。ええと、そう、避妊薬の買い置きが無くなっていたことを思い出したんです。毎晩使っていますから消費も早く、つい買い足しを忘れてしまっていたんですね。ですが気付いたところでもう夜遅く、調薬ギルドも開いてはいない時間。でも、心と体の準備はできてしまっ

ていたんです。この疼きは指と舌くらいでは到底満足でき」

「はいそこは飛ばしましょう」

「？　は、はい。あ、回りくどかったからですね、分かりました。結果だけを言いますと、避妊をしなかった、のです。ええと、中に出された回数は……」

「そこまでー！！　あー、シラユキ様真っ赤……。だ、大丈夫ですか？　シラユキ様にお話しするにはやっぱり早過ぎますよこんな話。ええと、人間種族とエルフの間ではそう簡単には子供は出来ませんからね、つい軽く考えてしまったんだろうと思います。ですけど、だからと言って絶対出来ない訳じゃないんです。ソフィーさんはもっと、自分のことも、エディさんのことも、もし出来てしまって生まれてきてしまう子供のこともしっかりと考えないと。まだ若いからって軽く考えすぎよ、ホントにね」

「はい……。今は本当に反省しています……。あの、もしかしたら妊娠してしまうのでは、という状況で中に出される快感、まさに脳を焼くような」

「はいそこまで」

ススス凄い話を聞かされてしまった！！　ああ、もう！　恥ずかしい！！

これはミランさんが怒るのも、シアさんが、私がソフィーさんのことを嫌いになってしまうかも、と思うのも無理はないか。

私としては、ソフィーさんを嫌いになるほどでもないけど、やっぱりちょっと怒っちゃうね。寿命の違う種族の間で、さらに望まれ

ぬ子供が出来てしまったとしたらと考えると、怖いとかそういう次元の問題じゃない。ミランさんの言うように、ソフィーさんはもっとしっかりと考えなきゃ駄目だね。

エディさんとソフィーさんなら大丈夫、とも思えてしまうだけに、やはり嫌いにはなれない、が。結婚して子供が生まれて数十年後、残されたソフィーさんを襲う絶望を考えると涙が出て来てしまいそうだ。

ソフィーさんは本当に、心から反省しているみたいだから今回限り許してあげようと思う。知らない人から見たら、全然そう見えないところが悲しいね……

「どうやら姫様もそこまでお怒りになられていない様子。命拾いしましたね、ソフィーさん。姫様の一言で今日その命を終わらせる事ができる可能性もあっただけに、少し残念です」

「極刑!?　シアさん怖い言い方はやめて!!　私がそんな事言う訳無いからね!　ソフィーさんも、ええと、気をつけてね。何に、とは恥ずかしくて言えないけど……」

「はい、絶対に。シラユキ様のお言葉、心に刻みます。できる事ならきついお叱りを、激しい仕置きを頂きたいのですが。……やっぱり脱ぎますね」

「なんで脱ぐのよ!　本当になんで!?　シラユキ様に何させる気なのアンタは!　はぁ……、バレンシアさん、この変態が堪えるお仕置きって何か無いですか?　正座させて放置しても喜びますし、手が付けられないんですよ……」

「多少の痛みを快感に感じてしまうのなら、それ以上の苦痛を与えてみては？」

「だからシアさんは怖い言い方はやめてー！！」

「それも考えたんですけど、女性にそんな、傷を残すような怪我をさせる訳にはいかないですからね。エディさんならどうとでもできちゃうのに……」

「ミランさんはやはり怖い人だった！！　あ、エディさんで思いついたよ！　ソフィーさんはええと、一ヶ月でいいかな。今日から一ヶ月……、はっ！？　言えないぃ……」

「一ヶ月、何ですか？　姫様。さあさあ続きをどうぞ」

「からかっちゃ駄目ですよバレンシアさん。シラユキ様、いい案だと思いますよ。ふふふ」

「お、お許しください！　それだけは、どうかそれだけは……。私の体でしたら好きにしてくださって結構ですから、あ」

「わあ！　泣かないで！　脱がないで！！　もう！　一週間、一週間禁欲生活ね！　もし破ったら嫌いになっちゃうんだから！　分かった？」

「い、一週間も……。シラユキ様は優しくも厳しいお方なのですね……。分かりました、必ず耐え切って見せます……！！」

「うん！　頑張ってねソフィーさん！！」

「でも、一週間後、エディさん干乾びちゃうんじゃないですか？」

「え……？　え？　……はっ！？」

「姫様、ただお預けさせてしまっただけかもしれませんよ。はたして干乾びるのはエディさんだけで済むのでしょうか。ふふふ、楽しみですね」

「どういう意、味？」

もしかしたら私は、とんでもない事をしてしまったんじゃないだろうか……

一週間後に解き放たれる、この優しくて綺麗な野獣の牙にかかる人たちのご冥福を心からお祈りしたいと思う。

その１３７（後書き）

嬉しい…！　やっぱり…感じちゃう！　ビクンビクン！！

なにそれこわい。

今回も短めにと思っていたら、いつの間にか結構長めな文章になってしまいました。
どうしてこうなった！！

その138

「シア姉様！　シラユキ様！　匿ってください！！」

談話室で読書をしていたらキャロルさんが部屋に飛び込んできた。
どうやら誰かに追われているようだ。

「先に姫様でなく私の名を出す辺りが許せませんね。即座に引き渡しましょう」

「シア細かいよ……。私たちは名前すら呼ばれなかったんだけどね。よし、捕まえておこうか」

「まあ、そんな事気にしないし、しなくてもいいんだけど……、とりあえず面白そうだから見物しよう。シラユキが本読んでる間は結構暇だからね」

三人とも冷たい！　フランさんに至ってはいい暇つぶしが来たぞと嬉しそうだ。

「味方が誰一人いない！？　はっ！？　シラユキ様は……？」

「あ、うん、いいよいいよ。とりあえずテーブルの下にでも隠れててね。三人とも教えちゃ駄目だよ？」

ありがとうございますと一言、キャロルさんはテーブルの下、私の座っているすぐ前にしゃがみ込んで隠れた。
テーブルクロスで多少見えにくくはなるけど、さすがに完全にとはいかない。私の体と椅子の影に入る感じだね。

窓を開けるシアさんを横目に、キャロルさん小さくてよかったねと少し失礼な事を考えていたら……

「失礼します。……あら？　ええと……、姫様？　こ、こちらにキャロルが来ませんでした？　確か四階に上がって行ったと思うんですけど……、ああ、すみません、いないのでしたらそれでいいんです、お騒がせしました」

続いてカイナさんが部屋に入って来た。キャロルさんとは違い、落ち着いて、ゆったりと歩いてだけど。

カイナさんの手には薄いピンクの布が……、？　服？　ワンピースかなあれ。ああ、なるほど！

どうやらキャロルさんは、カイナさんに可愛らしい服を着せられそうになったから逃げて来たみたいだね。でもそれがどうして逃げる理由になるのかは私には分からない。

カイナさんは純粋にキャロルさんに可愛い服を着て貰いたいだけだ。シアさんみたいに、着替えさせられる事に恥ずかしがる私を見てニヤニヤする、といった変な趣味は持っていない筈。持ってないよね？

私ももう、下着から何から何まで着替えさせられる事には既に慣れてしまった。シアさんはちょっと残念そうだけど、それでも毎回楽しそうに、嬉しそうに私を着替えさせてくれている。

最近はそれが普通の事になりすぎてしまって、私は一人で着替え

ができないんじゃないか？　とちょっと不安になっている。お姫様だからいいよね？　……駄目だよ……

「入れ違いでしたね、一足遅かったです。キャロならついさっき、窓から飛び出して行きましたよ。随分と慌てていたようでしたが、なるほど、貴女のせいでしたか」

私がどう答えたものかと悩むよりも早く、シアさんが自然に答えてくれる。

「え？　あ、申し訳ありません姫様、私がキャロルを追い立ててしまったみたいですね。そんなに必死になって逃げなくても……」

おお、さすがシアさんだ、窓を開けたのもそのためだったんだね。何だかんだ文句を言いながらもきちんとフォローを

「入れ違いになってしまったものは仕方ありません。まあ、キャロもほとぼりが冷めたと感じたら姫様に謝りに戻って来るでしょうから、カイナもここで待ってみてはどうですか？」

「そう、ですね。お邪魔でなければ……。ふふふ」

入れる訳がなかった！！　やはりシアさんだった！！

シアさんは何食わぬ顔でカイナさんを引き止めてしまった。引き止められたカイナさんも何故か嬉しそうだからいいか……

なるほど、キャロルさんがテーブルの下にいるという事を、必死に隠そうとして慌てる私を見て楽しもうという魂胆だね。キャロル

さんもいつバレるか見つかるかとハラハラドキドキしている筈だ。私たち二人はシアさんにこうやって遊ばれる運命なんだね……。だがしかし！！

その挑戦……、受け取った！！

カイナさんが部屋を出て行くまで……、いつ？　とにかくその時までキャロルさんを隠し通して見せようじゃないか！！

部屋を出て行くようにやんわりと言ってみてもいいが、カイナさんは私に邪魔だと思われたと思って本気で泣いて落ち込みそうなのでやめた方がいいだろう。やはりタイムオーバーを待つしかないね。

「キャロルは見た目あんなでもカイナと同じくらいの年だよ？　可愛い服ならシラユキに着て貰えばいいじゃない。私も見てみたいし」

見た目あんなって……。まあ、キャロルさん見た目は子供だよね。でも中身はれっきとした大人なんだから、あんまり可愛らしい服ばかり着ていたくないんじゃないのかな？　あのフリフリメイド服にはすっかり慣れちゃったみたいなんだけどね。選んだ姉様も大喜びだ。

「うん、カイナさんの選んでくれた服なら喜んで着るよ。いつでも言ってね？」

「あ、ありがとうございます！　ああ、姫様はなんて可愛らしくてお優しい……。あ、すみません、これは少し、姫様にはサイズが大きめで……。そのー……、元は姫様に着て頂く予定だった物なのですが……」

うん？　元は私に？　それって前にも聞いたような覚えが……

「ああ、また少し大きめの買っちゃってたんだ？　姫って全然背伸びないからまた無駄にするところだったよね。そう考えると、キャロルが来てくれてホントによかったね。ねえシア、もうメイド服以外の私服は全部それに換えておいたら？」

ああ！　前にキャロルさんが家に遊びに来たときにそんな事あったね。あの時も確か、私が着る予定だった服を着替えとして渡したんだっけ。懐かしいな……

どうせ私は全然成長してないですよーだ……、！？

「ひゃっ」

「姫様？」

「ど、どうされました？　姫様？」

「な、なんでもないよ！　ちょっとくすぐっ、じゃなくて、ええと……」

「ん？　……ああ、なるほどね。ふふふ」

「あはは。姫、どうしたのかなー？」

もう！　くすぐったくて変な声が出ちゃったじゃない！

キャロルさんが私の足を、ひざの辺りをツンツンと突付いてきて

いる。多分私にメアさんの発言を注意してくれと言いたいんだろう。
乗りかかった船だ、今日はとことんキャロルさんの援護をしようじゃないか。

「あ、メアさんシアさん、人の服を勝手に交換しちゃ駄目だよ？カイナさんも、ええと……、キャロルさんは大人の人なんだから、多分もっと落ち着いた服が着たいんだと思うよわひゃあ！」

なんで足撫でるの！？　お礼のつもりなの！？　また変な声出しちゃったよ……

「ふふっ。あ、失礼しました。あの子ももう三百五十ですからね、私から見たらまだまだ子供なのですが……、？　誰の目から見ても子供でしたか」

「ふふふ。え、ええ、そうですよね。あんなに可愛いんですから、服装にももっと気を使うべきですよね。私なんてこの背のせいで可愛らしい服なんて絶対に似合わないのに……」

「確かにカイナは可愛い服って似合わなさそうだよね。でも、そんな事言ってると姫に怒られるよ？」

パルパル。
ちょっといじけた真似をしてみる。

「す、すみません！　そんなつもりでは……。ああ！　姫様に嫌われてしまう！？　どどど、どうしたら……！！」

「ふふふ、怒ってないから大丈夫。羨ましい悩みではあるけどね」

私やキャロルさんが、背が低い、胸が小さいと悩んでいるように、背の高い、胸の大きな人にもその人なりの悩みがあるものだ。

私たちから見れば本当に羨ましい悩みでしかないのだけれど、向こうからしてみれば私たちの悩みが羨ましい悩みに見えているのかもしれな……、それは無いか。なんか不公平だな……

ま、まあ、私はキャロルさんと違ってまだ今後の期待が残っているからね。……ごめんなさいキャロルさん。

心の中でキャロルさんに謝ったところで、さらに追撃のフォローを入れようか。

「ピンクじゃなくて、もっと落ち着いた色合いの服にしてみたらどうかな？　それならキャロルさんも着てくれるんじゃないかなーって私は思うよ。それでも駄目だったら、うん、諦めてね。嫌がってるのに無理に着せようとしちゃ駄目だよ？　もしそんな事しちゃったら……、シアさんにお願いして、カイナさんのメイド服もフリフリにしちゃうからね？　ふふふ。……ふふっ、ちょ、くすぐったいよ、ふふふふ」

またお礼のつもりなのかキャロルさんに太腿の辺りを撫でられまくってしまった。

ええい！　キャロルさんは隠れる気はあるのか無いのかどっちなの！？　多分今ので完全にバレちゃってるよ……。バレてないにしても、怪しまれてるのは確実だよね。

「は、はい。うう、申し訳ありませんでした姫様……。そうですよね、年相応の落ち着いた色合いなら多少フリルが付いた物でも着てくれるかもしれませんね。わ、私のメイド服の改造は絶対に似合いませんからやめてくださいね？」

「落ち着いた色合いなら多少フリフリヒラヒラでもいいんじゃなかったの？　まあ、確かにカイナにはそういうのは似合わないか……。あはは」

「私は似合うと思うんだけどなー。カイナさんは美人さんなんだから、きっと何を着ても似合うと思うよ！」

「あああ……、感激です……！！　ありがとうございます！」

「大袈裟な……。早速今改造して差し上げましょうか？　脱ぎなさい」

「ええ！？　せ、せめて部屋で！」

「はいはい、レン、嫉妬しないの。カイナもレンの言う事を一々真に受けない。ああ、落ち着いた色合いと言えば……、キャロルの下着って黒だよね。そこだけは年相応なんじゃない？」

「そういえば、前に干されているところを見ましたけど黒でしたね。キャロルには黒より……、姫様と同じ白か、水色辺りが似合うと思いません？」

「キャロルさんは大人なんだから黒でもうわあ！！　めめめ捲らないでキャロルさん！！　隠れる気あるの！？　無いの！？　まじま

じと見ないでー！！」

「え？　あ、すみません。つい白と言われて気になって見てみたくなってしまって……。か、可愛らしい下着ですね！」

「感想もやめて！！　はっ！？　この前の仕返しなんだね……！！　ううう、恥ずかしいけど我慢しよう……、！？　顔を寄せないで！！」

「手を放しなさいキャロ！！　姫様、こちらへ！　ああ、よかった……、もう少しで襲われてしまうところでした……。キャロが姫様の太腿と下着を見て発情しない訳がありませんからね、雷の魔法で撃退してもよかったのですよ？」

「しませんよ！　確かにちょっと、あまりにいい香りすぎてついフラッと、頬擦りをさせて貰おうと……、雷の魔法って即死魔法じゃなかったですか！？　ごごごごめんなさい！　すみません！！　申し訳ありません！！！」

「お優しい姫様がそんな危険な魔法を人に向けて撃てる訳が無いでしょう……。あ、姫様、キャロルには罰として、私の着せ替え人形になる事を命じてくださいませんか？」

「ちょっと怖かった……。う？　うん、いいよ。キャロルさんは今日一日カイナさんの選んだ服を全部着ること！　……？　なんでカイナさんはキャロルさんが急に出てきたのにそんな自然体なの？」

「え？　まさか本気で隠せているとお思いでした？　す、すみません！　驚けばよかったですね……」

「最初からバレてましたよ？　私が出て行かなかったのは、カイナが気づいていないフリをしていてくれたのと、ちょっと楽しかったからであって……」

「!?　が、頑張ってたのに！　私らしくなく精一杯頑張ってたのにー！！」

その１３８（後書き）

白と水色の縞模様なら……！！

もう暫くこんなお話を続けようかどうか悩みます。楽しすぎる……

その139

最大のチャンスがやって来た！！
何のチャンスかと言うと、キャロルさんから色々なお話を聞くチャンスだ。

キャロルさんはもう油断も少なく、シアさんの過去を口に出す事は殆どなくなってしまった、が、それ以外の質問なら大抵の事は答えてくれる。
冒険者時代についての事は血生臭い話も多く、子供の私には聞かせてはくれないだろうとは思う。けど、それ以外のこと、例えば他の冒険者のお友達の人はどんな人がいたか、竜人種族や珍しい種の獣人の人のお話などなど、私の興味は尽きない。
これならキャロルさんもお話してくれるんじゃないだろうか？
私に聞かせられないような事だったりしたら無理に聞き出すような真似はしないでおこう。キャロルさんを困らせたくは無い。

話をすぐいやらしい方面へと脱線させるフランさんは、メアさんと一緒におやつを作りに台所へ。そして、こういうお話の最大の障害であるシアさんは、先ほどクレアさんに呼び出され母様の執務室へと行ってしまった。その結果談話室に残されたのは、私とキャロルさんの二人きり。
兄様と姉様が乱入して来る可能性はそれなりにはあるが、そんないつ来るとも知れない物を警戒しても仕方が無い。今はキャロルさんとどんなお話をしようか、それだけを考えよう。

降って沸いた好機だが、急すぎて何を話せばいいのやら。こういう急な事態に弱い私には、このチャンス、活かせないかもしれない……

「あ、あの、シラユキ様？　どうされました？　あ、ああ……、シア姉様と離れちゃいましたからね、やっぱり寂しいですよね。こんなナリの私に、というのはは難しいかもしれませんが、甘えてくださってもいいんですよ？　ええと……、あ！　小さいですけど胸、触ります？　吸って貰っても」

自分の胸を寄せて上げて、どうぞと差し出してくるキャロルさん。勿論服は着たままだ。

「吸わないよ！　赤ん坊扱いはやめてよー……。ちょっと考え事しちゃってただけだから気にしないでいいよ？　それに、キャロルさんが一緒にいてくれてるのに寂しいなんて思う訳無いよ」

「は……、あ……、う、嬉しいです！　感激です！！　あ、あの！　少し、少しだけ撫でさせて頂いても……？」

キャロルさんは私の言葉に感動し、感極まってしまったようだ。

今の私のセリフのどこに感動する要素が……？　っとと、いけない。

「うん、いいよ。そんな事に断りなんて入れなくていいからね」

「ありがとうございます！　……うわぁ、柔らかい……、可愛いぃ……」

「ふふふ、ちょっとくすぐったいよ、ふふふふ。これからも気にしないでどんどん撫でてね？　キス、はちょっと恥ずかしいけど、頬っぺたにするくらいならそっちも断りなんていらないからね？　ふふ、ふふふ。嬉しいな」

「き、キスですか？　で、では、失礼して少しだけ……。んっ」

私の頬に軽くキスをするキャロルさん。ちょっと緊張気味で、こっちまで緊張して恥ずかしくなってしまう。

「や、柔らかっ、スベスベ！　あああああ、シラユキ様可愛いいいいいい！！」

「うわ！　ちょっ、キャロルさん落ち着いんんっ！　唇はやめて！　恥ずかしいよー！！」

「も、申し訳ありませんでした！　シラユキ様の可愛さに我慢ができなく……。あの、唇にしてしまったのはできたらシア姉様には内緒に……」

やっと落ち着いてくれたキャロルさんが、私に謝りつつシアさんへの口止めをお願いしてきた。

ああもう、恥ずかしかった……。なんでメイドさんはみんな私の唇を狙ってくるんだろう？　キャロルさんは女の人が好きな人でも、今のは私を可愛がって、という親愛のキスだからそこまで気にはならないんだけど、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしい。

エルフ生活ももう二十年以上だけど、これだけはどうしても慣れないね。頬へのキスならもう嬉しいだけなんだけどなー。

「謝らなくてもいいよ。うん、シアさんにも黙っておくから安心してね。あー、恥ずかしかった……」

「ううう、すみませんでした……。あの、恥ずかしいだけでした？　お嫌では？　私はその、アレですよ」

アレって……。まあ、その、アレな人だよね。

「大丈夫、嫌じゃないよ？　子供とかペットについついキスしちゃった感じでしょ？　変な言い方だけど、いやらしい感じはしなかったし。ほっぺにならホントにいつでもしてきても」

「すみません。ちょっと興奮しました」

「正直！！　キャロルさんは今後キスは禁止ね！！　撫でるのはいいけど……」

もしかして今の、危なかったのか！？　キャロルさんはシアさんと違って、本当の意味で危ない人なのか！？

「ふふふ、冗談ですよ。シラユキ様の可愛らしさについからかってしまうシア姉様の気持ちが分かりますね。シラユキ様くらいの小さな子供にはさすがに性的興奮は覚えません。ご安心ください」

にこやかに、優しい笑顔で言うキャロルさん。

つ、ついにキャロルさんにもからかわれてしまう日が来てしまっ

た……

いいもんいいもん。それだけ私のことを可愛がってくれてるって証拠だもん。まあ、実際ちょっと嬉しかったりするんだけど、ね？

ふふふ。

メイドさんズ三人に加えて、さらにもう一人お姉さん的な存在が増えたんだ、これは純粋に喜ぶべき事だね。

「キャロルさんもやっぱりシアさんにからかわれ続ける毎日だったの？　あ、シアさんのことは聞いちゃ駄目だった……。ごめんね？」

「いえいえ！　これくらいなら問題は無いと思いますよ。そうですね……、からかわれる事は確かに多かったと思いますが、私たちは冒険者でしたからね。修行と依頼をこなす毎日で、そこまで頻繁に、という事は無かったですね。まあ、私はシア姉様のみならず、行く先々で背の小ささについてからかわれていましたが……」

そう言われてみれば、確かにそうだ。今日は一日お休みの日、とかなら問題は無いんだろうけど、修行や依頼達成の妨げになるような事はいくら人をからかうのが生きがいなシアさんでもしないよね。

なるほどなるほどこれは為になる事を聞いた。私が集中してなにかのお勉強でも始めれば、シアさんもからかう事を多少は控えるんじゃないだろうか？

勉強か……、何の？　歴史？　数学？　そういえば私ってお勉強って全くしてないな……。だ、大丈夫なのかな？　数学は知識として残っているからいいとしても、歴史かー……。戦争の歴史とかもあるからそういう関係の本は全く読ませて貰えないんだよね。これは今はどうにもならないか……

しかし、いい話の流れなんじゃないか？　これは。冒険者時代のお話に上手く繋げられそうだね。からかわれた甲斐もあったというものだ。

「キャロルさんは冒険者で仲のいいお友達とかいなかったの？　エルフの人ならギルドを通して呼んじゃってもいいんだよ？」

「え？　友人、ですか？　知り合いは多いんですが、友人と呼べるような仲の者は少ないですね。シア姉様を探し回る事と、リズを育て上げる事で精一杯でしたから」

や、やっぱりキャロルさんは苦労人だね……。でも、この国に来て沢山お友達ができたんじゃないかな？　それは嬉しいな。自分の事じゃないけど凄く嬉しいな。

「シアさんってSランクだったんだし、有名人だったんじゃないのかな？　それでも百年以上見つからなかったんだよね……。理由や経緯は全く話してくれないんだけど、キャロルさんは何か聞いてない？」

「いいえ？　私は何も聞いてませんよ。シア姉様がご無事だったのならそれで満足です。気にならないと言えば嘘になってしまうんですけどね。うーん……、これくらいならいいかな？　当時は確かに有名でしたよ。あの美しさと強さに、弟子入りと結婚の申し出は本当に毎日のようにありましたからね。それを蹴散らすのも私の修行の一つだったんです。あ、話しすぎちゃったかな……、シア姉様には内密にお願いします。話を戻しますね。いくら有名と言ったところでも、姿を見なくなってから十年も経つと噂を拾う事すら難しく

なってしまうんですよ。本当に他種族の時の流れは早いですよね……」

うん？　あ、ああ、そういう事ね。十年も経てば他種族の冒険者は様変わりしちゃうんだね。シアさんを全く見たことすら、噂を聞いたことすら無い人ばかりになっちゃうのか……

たった十年程度でそれだ、二十年三十年、五十年百年と時間が流れてしまえば、私たちエルフでもそれは例外では無さそうだね。

キャロルさんは本当に、本当に大変な苦労をしてきたんだね……。再会した時のあの大泣きも、少し前までの、シアさんがすぐ側にいるという安心のぬるま湯生活に気が抜けて、腑抜けてしまったのも頷ける。

「それでも大陸中を回れば極稀に噂程度は拾えるもので、ああ、後、シア姉様のお知り合いや友人の方にも出会えたりもしましたね。ライナーもそのうちの一人なんですよ」

「ライナーさん懐かしい！　また会いたいなー。折角お友達になれたのにすぐお別れしちゃったんだよねー、うん？　そ、そういえばライナーさんとシアさんの関係は聞いてなかったよ……」

シアさんは確か、ええと……。ああ！　馴れ馴れしいだけのただの子供？　とか言ってたような気がする。あれだけ大きなライナーさんが子供扱い……。キャロルさんより年下だったんだよね確か。結局幾つかまでは聞いてなかったんだけど。

「ライナーは一時期シア姉様と行動を共にしていたらしいですね、私が独り立ちした後の話です。正確には、シア姉様が行動を共にしていたのは『閃光』で、ライナーはその弟子だったんですよ」

「へー、そんな繋がりが……、『閃光』さん？　それって確か……、？　誰だっけ？」

「ふふふ、あ、失礼しました。今の首をかしげる仕草！　可愛すぎ！！　っと、さらに失礼を……。ええと、リズが言ってませんでした？　現在最強と呼ばれている冒険者ですよ。竜人の女性で……、と、ここまでですね」

そう言うとキャロルさんは数歩だけ後ろに下がる。

う？　いきなりどうしたんだろキャロルさん。あ、私が聞くにはまだ早い内容だったのかな？　……まさか、ソフィーさんみたいに私の教育に悪そうな人なのか！？

シアさんのお友達、かは分からないけど、シアさんとライナーさん関係の人だ、生半可な存在ではない筈だね。

話が途切れてしまったのは残念だけど、今日は色々と聞かせてもらえて大満足だ。また次のチャンスまでに、今度はちゃんと質問を纏めておこうかな？　ふふふ。

「ただいま戻りました、姫様。キャロに苛められてなどいませんでしたか？　ああ、ご安心くださいね、告げ口をしたら……、と脅されていましてもお気になさらず。今この場で」

「苛めませんよ！　シラユキ様を苛めるくらいなら死を選びます！！」

「なんでみんなすぐ死のうとするの!?　シアさんはもっとキャロルさんを信じて、もっと労わってあげなきゃ駄目だよ？　キャロルさんはシアさんのためにすっごく苦労してきてるんだからね！　分かった？」

「え……、あの……。も、申し訳ありません、決してそんなつもりでは……。しかし、キャロを労われと命じられましても……、ええと、抱けと仰られるのですか？　それはさすがに……。しかし、姫様直々の命、背くわけには……！！」

「!?　シラユキ様！　ありがとうございます！！　シア姉様……、今夜は沢山、沢山甘えさせてくださいね……。明日はお休みを頂いて、その分たっぷりと」

「違うよ！！　もっと、こう……、撫でてあげるとか、好きな物を作ってあげるとか、だよ！」

「ええ!?　その程度だったら今でもたまには……。ううう、分かりました、まだ暫くは匂いだけで我慢します……」

「匂い？　シアさんの？　我慢ってどういう……」

「さすがに焦りました……、ふう。まだ暫くは、ではなく一生我慢するか、諦めて恋人を作りなさい。カイナにメアにコーラスさんにと、一人身で私より美人の方はいくらでも周りにいるのですよ？　そういえばミランさんも恋人募集中でしたね、あの方も可愛らしい方ですね。ああ、ソフィーさんもいいのでは？　ソフィーさんでしたらお互い満足できるのではないですか？」

「ま、満足？　シアさんシアさん、自分を好きって言ってくれてる

人に他の女性(ひと)を紹介するのはちょっと酷いよ……。キャロルさん大丈夫？」

「え？　あ、はい、お心遣いありがとうございます。これもいつもの事ですからね、ご安心ください。そんな私の事なんかより……、シア姉様より美人の人なんて、そんな簡単に見つかる訳無いじゃないですか！」

「えっ？　私程度の方でしたらそれこそ掃いて捨てるほど……」

「シアさんって自分がどれだけ美人か全然分かって無いよね……」

「あれ？　シラユキ様がそれを言っちゃいます？」

「えっ？　私くらいの子供ならそれこそそこかしこに……」

「ふふふ。お二人ともそっくりな反応で、まるで仲の良い姉妹のようですね。本当にそっくりな……、！？　シラユキ様は将来……、ごくり」

「キャロルさん！？　その獲物を見るような目はやめて！！」

「あはは、冗談であいたっ！　シア姉様……？　ごごごめんなさい！！！」

私から見たら、この二人こそ本当に仲の良い姉妹に見えるんだけどね。たまにちょっと羨ましく感じてしまうのは贅沢なんだろう。

そういえば、急に話をやめたのはシアさんの気配に気付いたからなんだね。キャロルさんもどんどんメイドスキルを上げていってるなー……。ん？

メイドさんに気配察知能力は必須なんだろうか……？　ま、まあいいか……

その１３９（後書き）

それこそそこかしこに……

舌を噛みそうなセリフですね。シラユキのセリフとしてはちょっと違和感があるかもしれません。

しかし、他にいい表現が見つからず……

その１４０

うーん……、あの人は一体何を……、本当に何をしてるんだか……。そんなにちょこちょこと出て来ていい人じゃない筈だよね……ん？　そういえば特に決まりとかは無いって言ってたような？　でも、それにしたってフリーダムすぎるよ。普通あんな人があんな事で人を呼び出す？

まあ、実害は無いどころか私としては嬉しいからいいんだけど……、複雑な気分だなー……

！？　実害！？

まさか、シアさん作のクッキー他おやつがたまに無くなるのはあの人のせいなのか！？　そういえばおやつが美味しいとか楽しみとか言っていたような……？　ありえる！！

し、しまったな……、兄様とメアさんとキャロルさんを疑っちゃったよ。でも、まあ、私が真っ先に疑われたし、それはいいよね。よくないか……、今度さりげなく謝ろう。

今度出て来たときはしっかりと問いただして、もしそうだったのなら三人の代わりに私が怒っておかないとね！！　後……、感想も聞かなきゃ！

「フラン、今朝は姫様のご気分が少々優れない様なのですが、何か知りませんか？　お着替えをさせて頂いてる間も何やら考え事をされていた様子でしたし……。まさか、お眠りになられている姫様に

何か悪戯でもしたのではないでしょうね」

「ないない、レンじゃあるまいし。いつもみたいに揉まれたり吸われたりで幸せだったよ、キスはしてるけど舌を入れたりはまだしてないし。ええとね、今日は、ん？　昨日？　どっちでもいいか……。ちょっと夢見が悪かったみたいなのよね。目が覚めた後何か不機嫌そうにブツブツ言ってたし」

「夢？　珍しいね。姫って夢を見る事自体少ないみたいなんだよね。見ても内容を覚えて無いだけなんだろうけどさ……、まだ！？　駄目だよフラン！」

「私もシラユキ様と一緒に寝てみたいなあ……。是非私の胸も揉んで大きくして貰いたい！！」

む？　なにやらメイドさんズが騒がしいな……。あ、心配させちゃったかな？　そんなに不機嫌そうな顔してたかなあ……？

「な、何でもないよー？　機嫌が悪い訳じゃないから安心してね。ちょっと、ね、こう、何と言うか……、そうだ、納得だ！　ちょっと納得がいかなかっただけだから」

本当に色々な意味で、多方面から見て納得できない夢だったんだよ……

「まあ、そういうのを機嫌が悪いって言うんだけど、シラユキがこう言ってることだし、いいかな？」

「そう、ですね。少し気になるところではありますが……。姫様、無理に、とは言いません。姫様さえ宜しければ、お聞かせして頂いても構いませんか？」

フランさんはそうでもなさそうだが、他の三人は私がどんな夢を見たのか気になっている様だ。

でもなー、さすがにあの夢の内容は話せないなー……。話したところで、信じてはくれるだろうけど、理解はできないと思うし。うん、内緒にしておこうかな。

「うーん、ごめんね。ちょっと話せない、かな？　悪い夢じゃなかった事は確かだから気にしないでいいよ」

「そう言われると逆に気になっちゃうんだけどなあ……。ねえねえ、姫、教えてよー」

「うにゅにゅ……」

「ちょ、やめなよメアリー。悪い夢じゃなかったってシラユキ様も仰ってるんだから、それで納得しときなさいって」

私の頬をグニグニとしながらせがんでくるメアさんを、キャロルさんが呆れながら窘める。

「キャロの言う通りですよ、メア。私もかなり気になってきてしまいましたが、今は、諦めましょう」

「う、うん。ごめんね姫。今は、諦めるね」

「今、を強調して言わないで！　話さないよ！　話せないんだからね！」

もう！　諦める気ゼロだよこの二人は！

さてさて、今日の予定はーっと……。うん、今日も特に何も無いね。いくらお姫様で、さらに子供とは言え、毎日読書ばかりで遊んで暮らしていてもいいのかな。

毎日頑張ってるキャロルさんを見ていると、お仕事は無理としても、何かお勉強くらいはするべきなんじゃないかなと最近思ってしまう。別に夢で言われたからじゃないよ？　ホントダヨ？

あれ？　読書はお勉強じゃね？　趣味も兼ねていると言うか、九割くらい趣味に寄ってはいるが、実はちゃんとお勉強になっているのではないだろうか？　ううん、知らないけど絶対そう。

前にも少し疑問に思ったことなんだけど、この世界で言う勉強とはどんな事を指すんだろう？　やっぱり歴史と数学、と言うか算数かな？　それくらいしか思い浮かばないね。道徳なんて親から教えてもらう事だろうし……、うん？　久しぶりに前世の考えをしちゃった気がする。この世界にはこの世界のお勉強がある筈だよね。

「ねえねえシアさん。学校、ってあるんだよね？　確か、えーっと、文字と簡単な計算を教えてるって前に言ってたような……」

「え？　ええ。ああ、以前皆様に、庶民の生活についてのご質問に私がお答えしていた……。よく覚えていましたね、さすがは姫様です」

シアさんにいい子いい子と撫でられる。

「ふふ、ありがとシアさん。ふふふ」

シアさんに褒められると嬉しいなー。

キャロルさんの気持ちが分かるね、これは。次も頑張ろう！　って気にさせられちゃうよね。でも、今のは何を褒められたのかよく分からないんだけど……。記憶力？　さ、さすがにこれは誰だって忘れないんじゃないかな……

「し、シラユキ様可愛いいぃ……。あ、私も撫でさせてください！」

「それじゃ私も。ほーら、姫、偉い偉い」

キャロルさんとメアさんにも撫でられまくってしまった。あまりの嬉しさ心地よさに、さっき思った疑問が頭から飛んで出て行ってしまったね。

「ああ、ちょっと！　私が撫でるスペースが……。くう、いつも三人だったからこんな事は無かったのに……」

フランさんが悔しそうにしている。どうしたんだろう？　私を撫でるのに人数制限なんて……、あ。

私は今テーブルに着いてたね。私の右にはシアさんが、左にはメアさん、後にはキャロルさんがいて私を撫でてくれている。前は勿論テーブルだ、まさかこの上に乗ってまで私を撫でようとは誰も考えない。

なるほど、いつもは三人だったから気付かなかったけど、この座り方だと人数制限ができてしまうのか。納得納得、面白いね。

「まあ、キャロルは小さいし、その上から手を出せばいいか……。ふふふ、やっぱりシラユキは可愛すぎるね。こんな簡単に誤魔化されて……、あ」

「フラン！　ふう……、まったく、どうして言ってしまうのですか。折角上手くお忘れして頂いていたところだったというのに……。もげなさい」

う？　誤魔化され？　忘れて？　何が……？

「あはは、ごめんごめん、レンはちょっと気にしすぎだって。シラユキだってただ興味があるだけだと思うよ？　だよね、シラユキ？」

「え？　あ、うん！」

何だっけ！？

「学校ねえ……、姫には必要ないよね。文字も五歳頃にあっさり覚えちゃったし、計算は誰に教わるでもなく自然にやってのけてたし……。うん、天才だよね」

！？

「ああ、うん！！　学校、学校ね！　覚えてたよ！」

「完全に忘れてましたね？　ふふふ、可愛らしい……。ええ、今メアの言った通り、姫様は学校などに通われる必要はありません！」

「言い切られた！　もう、違うよ……。私はただ、文字と計算以外に何を教えてるのかな？　って気になっただけだからね？」

日本の学校で言う他の教科に当たる物が何かしらあるんじゃないかな、と思う。

「文字と数学以外、ですか？　それは、専門的な教育についての事でしょうか？　な、なるほど、失礼しました。姫様は何についてお知りになりたいので？」

「へ？　何かについて、じゃなくて……、他にどういう事を教えてるかを知りたかったんだけど……」

何かシアさんと私とで、会話が食い違ってしまっているね。シアさんらしくないと言うか……、珍しいね。

「学校で教えてる事って、文字と計算だよね。姫はそれ以外にも何か教えてるんじゃないか、って聞いてるんだよね？」

うんうん、そうそう。

メアさんの言葉にコクコクと頷いて答える。

「学校で文字と計算以外に何を……？　あ、魔法とか？　さ、さすがに魔法は普通の学校じゃ教えて無いよ……」

「だよね。あの、シラユキ様？　普通の、って言うのもちょっとお

かしいですけど、庶民の子供が通う学校では文字と、本当に簡単な、足し引き程度の計算のみしか教えてませんよ？　フランが言った魔法を教えるような学校もあるにはあるんですが、裕福な家庭の子供や特別な家柄の生まれ、くらいしか通う事はできないと思います。学費も結構しますよね、多分。シラユキ様はどちらにも当て嵌まりますから問題無い、んですけど……。シラユキ様って別段改めて教わるような魔法って、もう無いんじゃないですか？」

またちょっと話がずれちゃってきているような……。でも、今のも興味深いお話ではあったね。それに、そんなつもりではなかったんだろうとは思うけど、答えもちゃんと言ってくれたしね。

確かに言い方はちょっと変だけど、普通の学校で教えているのは文字と計算のみ、みたいだね。勿論他にもあるにはあるんだと思う。でも多分、さっきも考えたように両親から教わる道徳的な物の延長と、一般常識くらいだろう。

魔法は誰もが自由に教わる事ができる訳じゃないんだね。裕福な家庭や特別な家柄？　貴族とか？　そういった人向けの、所謂名門進学校、或いはステータスか。うちの子はどこどこの学校の出身なんですよー、とかよくあるものだ。

そうなると、また別の疑問が出て来ちゃうね。

「冒険者の人も、もちろん町で普通に暮らしてる人達だって魔法は使ってるよね？　あれはどうして？」

「あ、姫の好奇心に火を点けちゃったみたいだね。また面白く無さそうな話になりそうだし、うーん……、フラン、どうする？」

「うん？　ああ、私らは役に立たなそうだね。それじゃ……、ちょっと早いけどお昼とおやつを作っちゃおうか？　ふふ、手の込んだ物が作れそうだね。メア、手伝って」

「りょうかーい！　ごめんね姫。シア、キャロル、後はお願いねー」

「え？　あ……」

「ええ、分かりました」

「うん、任せて。楽しみにしてるよ」

フランさんとメアさんは、そう言い残すと部屋から出て行ってしまった。

あー、うー、ちょっと悪い事しちゃったかな……。いつもの読書の間も暇そうにしてることが多いし、もっとフランさんとメアさんも話に参加できるような話題にするべきだったか……

毎日シアさんとキャロルさんをお相手に読書ばかりで、二人ともつまんないよね……。あれ？　何か、急に悲しくなって……

「ふえ……。ううぅ……」

「姫様！？」

「ええ！？　ちょ、シラユキ様！？　え？　ええ！？　いきなり何が……」

「ごめんなさ……、ううっ、……っすん。メアさぁん、フランさぁ

ん……」

「キャロ！　すぐに二人を！！」

「はい！！」

「うわ！　ホントに泣いてる！！　姫、どうしたの？　姫？」

「シラユキ？　シラユキー？　な、何があったの？　レン」

「恐らく、ですが、自分のせいで二人を追い出してしまったと思われたのではないかと……。ですが」

「うん、私らが途中でおやつ作りに行くなんてよくある事だよね？　ねえ、シラユキ？　ほらほら、私の膝においで？」

「フランさぁん……、ごめんっ、ね……、メアさ、ううぅ……」

「あああ、泣かないで！　シア、これってやっぱ、私たちが泣かせちゃったのかな？」

「ええ……、あ、いえ、それは無い、と、思うのですが……。姫様……」

「あ、シア姉様、私には何となく分かりますよ。シラユキ様は、ふと悲しくなってしまっただけなんだと思います。私も子供の頃、そ

の、シア姉様は実は私なんかに興味は無く、嫌々付き合ってくれているのではないか？　とか、不出来な自分のせいでシア姉様に負担を掛けてしまっているのではないか？　なんて悲しくなって泣いていましたからね」

「あ、ああ、言われてみれば……、キャロも理由も無く急に泣き出してしまったりしていましたね。そんな理由だったのですか」

「はい。子供の頃はなんでそんなに、泣くほど悲しくなるのかが自分でも分からなかったんですけどね。大人になった今、その時の事を思い返すとそうだったのではないかなー、と思うんですよ」

「それじゃ、シラユキは、うーん……？　あ！　私とメアがが自分を置いて料理に行っちゃったって寂しく思って……、それで悲しくなっちゃったって事？　シラユキ？　そうなの？」

「わかん、ない……。でも、……っすん、急にっ、涙が……」

「あらら……、それっぽいね。どうしよっか？　エネフェア様の所、行く？」

「ううん……。落ち、着くまで、このままがいい……」

「ふふふ。それじゃあ、落ち着くまで私に抱きついてなさい？　ふふ、泣かれちゃったのはショックだけど、なんか……、嬉しいね」

「ちょっと、フラン？　まあ、私もちょっと嬉しかったりするんだけどさ。裏を返せばそれだけ私たちのことが大好きだってことなんだよね。でもさ、やっぱり姫の泣き顔は見てて辛いなあ……。あ、もうちょっとしたら代わってよ？」

「はいはい、この子がもう少し落ち着いたらね。んー、シラユキ、急に出て行っちゃってごめんね？　でもね、大丈夫！　私は、私もメアも、勿論他の皆も……、シラユキの事本当に大好きなんだから、ね？」

「そうだよ？　姫を置いてどこかへ行っちゃったりなんて絶対にしないからさ、安心していいんだよ？　ほーら、キスしてあげるからね、ふふふ」

「キャロ、あなたは私の大切な弟子である前に、妹のような、娘のような、本当に大切な存在……、でしたよ」

「シア姉さ……過去形！？　あ、照れ隠しですね？　ふふ、ふふふふ」

「えっ？」

「シア姉様！？」

その１４０（後書き）

前半の夢の内容は『裏話』で書く予定です。遅い１００話記念のような？
もう１４０話でしたね……。しかもいつになるか分かりません……

後半は今回こんな話になる予定はありませんでした。
実は、書いている自分でもシラユキの心境が今ひとつ理解できてません。

本当にどうしてこうなった！！

じ、次回に続きます。

その１４１

涙も止まり、自分でも理解できない悲しさも消え、フランさんとメアさんに普通に甘えだしたところで、二人は少し心配しながらも昼食とおやつの準備へと行ってしまった。

私としてはもう少し甘えていたい気分だったのだけど、もうすっかり気持ちが落ち着いたし、手の込んだ料理というのが楽しみでもある。それに、シアさんとキャロルさんが側にいてくれているんだから、今度はこちらの二人に甘えればいいよね。

何か……、久しぶりに泣いて困らせちゃったね。自分でも本当に、どうしてあそこまで悲しくなってしまったのかは分からない。フランさんとメアさんが私の事を嫌いになるなんて考えられないのにね。もしかしたら、みんなが優しすぎるのが逆に不安に思っちゃったのかもしれない。

キャロルさんが子供の頃に感じていた不安とはとは違って、その優しい人たちが私から離れて、いなくなってしまったら……、という不安に襲われたのかもね。

「ええと……、どこまで話しましたっけ？　魔法を教えている学校……、ああ！　冒険者や一般の町の人たちは学校で習ってもいないのにどうして魔法を使う事ができるのかー？　でしたよね？」

「う？　あ、うん。ふふ、ごめんね？　そういえばそんな話をしようとしてたんだったね」

いやあ、忘れてた忘れてた。

これも多分、町の人や冒険者の人達には常識なんだろうけど、私にはさっぱり予想もつかないね。強いて予想を上げるのなら、両親や冒険者の師匠に教わるのかな？　あれ？　それが答えじゃないか！？

「どうしましょう？　落ち着かれたようですが、姫様はもう少し甘えていたいご様子。今度は私の膝の上に……、む？　しかし、そうなると……、私は姫様を甘やかし、可愛がる事に全精力を注がねばなりません、説明ができなくなってしまいますね。……ああ、こうしましょう」

シアさんは意味不明な事を悩み、わざとらしくポンと手を叩き、何かを思いついたようだ。

「こう？　シア姉様は何を……」

疑問に思うキャロルさんを無視しながらも、私を軽く持ち上げ、そのまま一緒に椅子へと座るシアさん。

説明は今度で今日は私を可愛がる事を優先するのかな？　まあ、私としては大歓迎だ、が、もうちょっとキャロルさんの相手もしてあげてください……

「ふう……、やはりこの状態での説明は無理ですね。姫様を可愛がりつつも他の事に手を割くなどという事は、私程度には到底できそうにありません。キャロ、姫様を可愛がるお仕事は私に任せ、あなたは説明をして差し上げなさい。これが役割分担というものですね」

「シア姉様ずるいです！！　私もシラユキ様を膝に乗せて可愛がりたいですよう！！　いいなぁ、シラユキ様可愛いなぁ……」

指を咥え、私を膝の上に座らせているシアさんを羨ましそうに見つめるキャロルさん。あまりの子供っぽい行動が微笑を誘う。

「早く見習いを卒業しなさい。ふふ、姫様……。はっ！？　じょ、冗談半分のつもりでしたが、本当に説明に集中できそうにありませんねこれは……。恐るべき姫様の魅力、いえ、これはまさに魔性の魅力、魔力ですね。魔力といえば魔法、さ、キャロ、説明を」

な、何か今日のシアさんは面白いな……。泣いちゃった私を元気付けようとちょっとおどけて見せてくれてるのかもしれないね。……いや、いつもと同じか？

「こうして目の前で見せつけられると俄然やる気が沸いてきますね。早く一人前のメイドになってシラユキ様を膝の上に……、ごくり」

「その獲物を見る目はやめなさい……」

「あはは。頑張ってねキャロルさん！　それじゃ、お話聞かせて？」

「はい！　ああ、久しぶりに頼りにされるこの感覚……。ホントに久しぶりだわ……」

三百五十歳以上の大人、そして、元Ａランクの冒険者で、リズさんの先生で、さらには説明大好きなシアさんのお弟子さんでもあったキャロルさんだ。きっと上手く、分かり易く説明をしてくれると思う。……元？　ま、まあ、いいよね？

「まずはどこから説明したものか……、まずは大雑把にいきますか。冒険者も特に事情が無ければ元は一般人ですからね、一纏めにしちゃいましょう。一般の街の子供達、って言うのもおかしいですね……。まあ、子供達でいいですか、その子供達が魔法を教わるのは主に両親や近所の大人、後は親しくなった冒険者から、ですね。シラユキ様はシア姉様から教わっていたんでした？」

「私の場合は家族みんなかな？　うーん？　主に兄様とシアさんかも。えーと、それは、エルフの話？　エルフと他の種族の人達って、うーんと、魔法の使い方？　が何となく違ってきてるよね？」

エルフは基本詠唱無しの魔法名のみでの発動、魔法名もその場その場でまちまちだ。でも、他の種族の人達の主な使い方は、決まった詠唱、決まった魔法名、それで効果も完全に固定されちゃってるんだよね。

これは魔法に対するイメージの仕方の違い、と言うか、イメージする能力の違いなんだろうと思う。やっぱり種族が違うとそういう違いが大きく出て来てしまうのかな？　の、脳の作りが違うのか？

それはちょっと怖い考えになりそうだからやめておこう。

「ああ、すみません、どちらにも当て嵌まる感じですね。結局は使い方が違うだけでやっていることは同じですから。ここまではいいですね？　両親や大人達から習う魔法は精々小さな火を灯す程度の簡単な魔法です。爆発させる、風で切り裂く、等の攻撃魔法はさすがに教えられないと言うか、一般の町の住人には早々使える物じゃありませんよね。……ふふふ、シラユキ様？　では何故、小さな火を灯す、軽い風を吹かす、といった、言うならば、簡単な魔法は代

々教え続けていけると思いますか？」

「え？　あ、うん？　簡単だからじゃないの？」

キャロルさんの急な質問に、まったくそのまま答えてしまった。

でも、簡単だからだよね？

「姫様？　どうしてそれが簡単だと思われました？　ふふ、キャロ、中々いい質問の仕方でしたよ」

今まで私の頬をグニったり頬擦りしたりで黙っていたシアさんが急に口を開き、私へ質問しつつ、キャロルさんを軽く褒める。

「ふふ、ありがとうございます。指先程度の火を点ける、髪を揺らす程度の風を起こす、簡単ですよね？　シラユキ様は何故それが簡単だと思ったのですか？」

な、何故ってそれは……、なんでだろう……？

むう！　やっぱりキャロルさんはシアさんそっくりなお弟子さんだよ！！　二人してニヤニヤしてー！！　もう！　簡単なものは簡単なんだから簡単なのであって……、あ、それだ！

「簡単だから、簡単なんだよね！」

「か、可愛らしい……！」「可愛いいい！！」

またそれか！！　この似た者師弟め……

「大満足です！　キャロ、よくやりました、褒めてあげましょう。まあ、簡単に纏めてしまいますか、そう、簡単に……、ふふっ。し、失礼っ。……ふう。姫様が、ああ、いえ、一般の方々がそれを簡単に思えてしまうのは、日常的にその魔法、あ、魔法は違いますね、失礼しました。ふう……、今度こそ落ち着きました。日常的にその物に接しているからですね。火は明かりや料理など様々に、風などちょっと外に出てみれば、いつでもどれだけでも感じる事ができますからね。まあ、ありえない話になるのですが、子供の頃から日常的に攻撃魔法を身に受けて生活してきていれば、攻撃魔法も簡単に使えてしまうのかもしれませんよ？」

「攻撃魔法はやっぱり、冒険者になってから師匠に、ですね。私もシア姉様に色々と見せて頂いて……、たまに実際当てられて……、ふう。まあ、そうして使える様になっていくものですね」

「勿論例外もいくらでもありますよ？　あくまで一般的にはこうである、というだけでありますから。キャロも例外と言えば例外ですね」

キャロルさんは子供の頃から、自分と同じくらいの大きさの岩を投げて遊んでたんだっけ？　未だに想像すらできないよ……

私なりに簡単に纏めると、日常使う、当たり前に使ってしまっている物は、イメージが完全に頭の中に入ってしまっているんだね。なるほどなるほど……

つまり、私が火を灯す魔法を中々使える様にならなかったのは、料理をさせてもらえないからだったのか！？　ふう、それもあるにはあるけど、部屋の明かりはランプの花と魔法、前世では勿論電気だったから、火から遠ざかって生活をしていたからだね。

「ふふふ、ありがとうキャロルさん、それに、シアさんも！　久しぶりに魔法の練習でもしようかな？」

「シラユキ様の場合は、通常の魔法より能力の練習をするといいですね。攻撃魔法は危険ですし、まだまだ早いと思いますよ」

「能力かー……。何か作ってみんっ！」

いきなりシアさんに口を塞がれてしまった。もちろん手で、だ。

「シラユキ様は本当に凄いですよね。いや、凄いなんて言葉じゃ表せないんですけど。この可愛らしさで天才的な魔法の習得速度、そして極めつけには能力が二つ！　一つ持っていれば人生が、世界が変わると言われる能力を二つです……よ？　どうしました？」

「いいえ？　特に何も？　姫様の可愛らしい唇の動きを肌で感じてみたかっただけです。癒しの能力の練習は怪我人がいなければできませんからね、難しいです。手荒れを綺麗に治す程度で練習を繰り返すのがいいとは思うのですが……、やはりどうしても不安が残ってしまうんですよね……」

「あー。三日も目覚められなかったんでしたっけ？　それは確かに不安と言うか……、怖いですよね……」

あ、ああ！　急にどうしたんだろうと思ってたら……。そういえば、キャロルさんには私の生まれ変わりの事も、能力の事も秘密だったね。

……うん、完全に忘れちゃってた！　さ、さすがはシアさんだ……

「癒しの能力を持った心優しく可愛らしい姫君として町では評判ですよ。シラユキ様は次にいつ町に見えるんだ？　とよく聞かれますからね」

「できたら姫様をそんな、観衆の好奇の目に晒したくはありませんが、ね。ああ、キャロ、怪しきは消しなさい」

「ええ、既に何人か……」

「んんん！！？」

「勿論冗談です、ふふふ。あ、あのー、シア姉様？　そろそろ放して差し上げても……」

「あ、ああ、そうでしたね。姫様の柔らかい唇が動く度に得も言えぬ快感が……、こほん。失礼をしました、姫様」

「ふう……。うん、いいよ、気にして無いから大丈夫……、そっちはね！　何？　私って町で有名なの！？」

「え？　シラユキ様？　さ、さすがにそれは当たり前で……、え？」

「姫様？　姫様は、姫様なのですよ？」

「うん？　私は私で……、あ……。私ってお姫様だったね……、どうしていつも忘れちゃうんだろう？　不思議ー」

「かかかか可愛い！！　シラユキ様可愛らしいいいい！」

「なっ！？　この位置からは今の仕草を確認できませんでした！ふ、不覚！！」

「もう！　二人とも大袈裟なんだから！！　ふふ、ふふふ」

久しぶりに、本当に久しぶりにちょっとお勉強した感じがするね！　これでまた当分は遊んで暮らし……ちゃ駄目だよ私！！でもでも、こんなに楽しいお勉強なら毎日でも歓迎だね！　ふふふ。

「失礼しま、なんて可愛らしい笑顔！！　あ、本当に失礼しました」

「うゅ？　カイナさん？」

「うゅ！？　あ、すみません。ええと、バレンシア？　今週中に、後数日中には着くそうですよ。私はそれだけを伝えに……、バレンシア羨ましい……」

「着く？　何か注文でもしたんですか？」

「ええ、まあ、そんなところです。ありがとうございます、カイナ。ああ、一応私からもエネフェア様に……、ふむ。カイナ、その間姫様の椅子になりませんか？」

「え？　なるなるなります！！　はああ……、まさかこんな役得が……」

「カイナさんも私なんかより、シラユキ様をもっと可愛がればいいのに。忙しいか……」

「あああ……、幸せ……。生きててよかった……」

「大袈裟すぎるよ！！　……ふふふ」

「姫様が笑顔でしたら何も問題はありませんね。では、少しだけ失礼します」

その１４１（後書き）

うーん、こういう説明回は久しぶりですね。

その142

「キャロ、今日は冒険者ギルドへ行きますよ、あなたも付き合いなさい。姫様、当日いきなりで申し訳ありませんが、今日はお休みを頂きたいのです。宜しいでしょうか？」

「へ？　行きますよって……。普通はシラユキ様に許可を取るのが先じゃ……」

「ああ、うん、いいよ？　ふふ、気にしないでキャロルさん、私がシアさんのお願いを断る訳無いからね。シアさんもそれは分かってるけど、一応念のため聞いてみただけだから」

「つ、通じ合っているんですね……。シア姉様も、シラユキ様に対しても……、羨ましい！！」

朝食を食べ終わった後、シアさんが急に休暇の願いを申し出てきた。シアさんがお休みを欲しがる事なんて本当に滅多に無い事なのと、許可を出さない理由もある訳が無いので二つ返事で了承する。

たまには纏まった、一週間くらいお休みを取って貰って、ゆっくりと体を休めて貰いたいところなのだけど、シアさんはお仕事が無いと何をしたらいいのか逆に悩んでしまうらしい。メイドさんの鑑だね。

私のお世話が一週間もできなくなるのはまさに死と同等の苦痛だ云々言い出したので、諦めることにしたのだ。私としてもシアさんが一週間も側にいないのは正直耐えられそうに無いので、内心ほっとしていたのは勿論内緒にしている。が、あの後やけに嬉しそうにニヤニヤしてた気がする、多分バレているだろう。

しかし、シアさんがお休みを取ってまで冒険者ギルドに何の用事が……？　気になるところではあるね。多分数日中に着くと言っていた何かが届いたんだろうとは思うけど、なんで冒険者ギルドに？

まあ、多分普通の商品じゃないんだろう。

ん？　カイナさんは着くとしか言ってなかったね確か。商品や荷物が、とは一言も言っていなかった筈。となると、冒険者ギルドに着く、と言ったら……、それは冒険者の人になるのではないだろうか？　ふむふむ。

なるほどね、シアさんのお知り合いかお友達が訪ねに来るのか……、ふむふむふむ。

「シーアさん？」

「駄目です」

「やはり駄目だった！！　やっぱり誰かに会いに行くんだ？」

予想通り！　かはまだ分からないけど、少なくとも私には会わせたくない、見せたくない何かが到着したんだろうね。むう、気になるわー。

「ああ、カイナさんがちょっと前に言っていた……。誰が来るんです？　シア姉様」

「会えば分かりますよ、あなたも面識がある筈ですからね」

シアさんはキャロルさんの質問には答えないが、誰かが来る、という事は否定はしなかった。やっぱり誰かが冒険者ギルドへとやって来るようだ。

「私とシア姉様の共通の友人、ですか？　誰だろ……。まあ、確かに会えば分かりますよね。あ、服は着替えてもいいんですよね？」

「そのままに決まっているでしょう。あなたはもっと、最早自分は冒険者では無く王家に仕えるメイド、の見習いであることを自覚しなさい」

「そ、そうですよね……。あれ？　私服くらいは自由にさせてもらっ、えっ？　私ってもう冒険者じゃないんですか！？」

「？　何を今更……、既に登録は抹消済みですよ」

「ちょっ、え、ええ！？　さ、さすがにそれは……。え、ええー……」

シアさんのいきなりな冷たい一言にがっくりと肩を落とすキャロルさん。

まさか冒険者登録まで抹消されていたとは……。冒険者を続けたい場合は再登録になるのかな？　折角Ａランクの最上位にまで上り詰めたのに、またＣランクから出直しになるんだろうか？

これはもう諦めて、リーフエンドに骨を埋めるつもりでメイドさんをやっていくしかないね！　うんうん。

冗談はこのくらいにしておいて、と。

「シアさん、それはちょっと、どころじゃなくかなり酷いんじゃないかな？　いくらキャロルさんの師匠だからってそんな勝手に……、？　あ、ユー姉様がやったの！？」

キャロルさんから冒険者の権利を剥奪したのは姉様だった！

「おっと、冗談です、ご安心ください。どちらにしてもユーフェネリア様のお許しが無ければ冒険者に戻る事は叶いませんよ？　まあ、特に何かギルドへ通達を入れた訳では無いので普通に依頼も受けられるのですが……、まさかユーフェネリア様のお言葉を無視する様な真似は」

「しません！　ありえません！！　あー、焦ったわ……。シア姉様、ちょっと人が悪いですよ今のは」

「確かに少し冗談が過ぎましたか。ユーフェネリア様に有らぬ疑いを掛けてしまうところでしたし、反省しなければ。姫様、申し訳ありませんでした」

シアさんもさすがにやり過ぎたと思ったのか、深々と頭を下げて私に謝る。

そこはキャロルさんに謝ろうよ……

「なるほどな、それで拗ねてるのかコイツは。まったく、可愛いやつめ、ほれほれ」

「うにゅにゅにゅにゅ……」

別に拗ねてなんかないもーんだ！　ちょっと寂しいだけだもーん……

あの後何度かお願いしてはみたのだけれど、最後までシアさんが聞き入れてくれることは無かった。キャロルさんも加勢してはくれてはいたが、シアさんのあなたも置いて行きますよ、の一言であっさり掌を返し、あちらへと付いてしまった。ぐぬぬ、裏切り者め……

あまり我侭を言って困らせるのも嫌だったし、しつこ過ぎるくらいお願いした訳じゃないんだけどね、ちょっと残念だ。

あそこまで私のお願いを断るところを見ると、多分本当に私には会わせ難い人なのかもしれないね。……でも、危険です、とかは一切言ってなかったな……。ソフィーさんの様な別の意味で危険な人なんだろうか？　それなら納得だ。

「ま、いつも一緒にいるお姉ちゃんに置いて行かれちゃった気分なのかもね、今日は私たちとルーディン様に甘えるといいよ」

「レンも何か考えがあって連れて行かなかったんだと思うし……、あ、自分の冒険者時代の話を聞かれたくないだけなんじゃないの？　なんで隠すんだか……」

「うん、色々とお話聞きたいのになー。シアさんのお友達ならきっといい人だよね？　誰なんだろ」

シアさんとキャロルさんの共通のお知り合い、お友達の筈。どう考えても悪い人？　怖い人には思えないね。

「誰って、『閃光』とかいう冒険者だろ？　俺もどんな奴かまでは知らんが……」

「へー、『閃光』、さん？　最近よく聞く気がするね、その名前。あれ？　二つ名？　どこで聞いたんだったかな……」

うーん、どこでだっけ……？　つい最近も聞いたような……

「二つ名なのそれ。何？　光るの？　冒険者の二つ名って見た目とか戦い方から付くのよね確か。それで閃光ねえ……」

「やっぱ光るんじゃないの？　ちょっと見てみたいねそれ……。まさか、禿げてるとか？　ふふっ」

フランさんとメアさんも興味津々の様だね。メアさんはちょっと失礼な事を考えちゃってるけど、私もそれをまず考え付いてしまったので文句は言えない。

うーん、確か女性だったっていう記憶が、あ！　キャロルさんに聞いたんだった！　あー、そうだったそうだった……、え？

「せ、『閃光』さんって、現在最強の冒険者の人じゃなかった？　シアさんはそんな凄い人と……、あ」

シアさんがその前の最強の人だった！！　うわあ、す、凄い人には凄いお友達がいるんだね……

確かキャロルさんから聞いたのは、現在最強の冒険者。竜人の女の人で、ライナーさんのお師匠さん。後は、シアさんと一時期一緒に行動していた、くらいだね。そういえばシアさんが戻って来ちゃって話が途切れてしまったんだった。

一体どんな人なんだろう……？　ライナーさんみたいに筋骨隆々の女の人だったら……、ちょっと怖いかも。

「どうした？　不安か？　大丈夫だって、昔の友達に会いに行っただけなんだろ？　んー……、よし、シラユキ」

考え込んだ私が不安がっている様に見えたのか、兄様は私を横抱きに座らせ直し、顔を近付け、私の名前を呼ぶ。

「うん？　何？　ルー兄様。あ、キスしたいの？」

「違うわっ。まあ、キスもするか。なあシラユキ、バレンシアは連れて行ってくれなかっただけだろ？」

「うん。理由も、誰に会いに行くかも教えてくれなかったけど、今日は連れて行けませんよーって」

「そう、連れて行けないだけで……、来るなとは言って無い、という訳だ。どうだ、行きたいか？　連れてってやるぞ？」

ニカッと素敵な笑顔で言う兄様。

え？　だから行っちゃ駄目なんじゃ……、ああ！　確かに連れて行けないって言ってただけで、私が自分から行っちゃ駄目、来るなとは言われて無いね。

さ、さすが兄様！　人の揚げ足取りとか、そういうズル賢い事は得意なんだね！！　全然褒めてる様に聞こえないね、不思議！！

「うん！！　行きたい！　ありがとうルー兄様！　だーい好き！！」

「ははははっ。シラユキはもっと我侭言っていいんだぜ？　もっと強く言えばバレンシアだって連れてってくれたろ、多分だけどな。う

ーん、やっぱシラユキの笑顔はいつ見ても、何回見ても飽きない可愛さだな……。よーし、キスしてやろう」

「わっ、んっ、ちょっ、もう！　恥ずかしいよルー兄様！　ふふふ」

頬に額に唇に、顔中キスされてしまった。

恥ずかしいけどとっても嬉しいね。兄様は男の人だけど、やっぱり兄様だからキスも普通にできちゃうね。ふふふ、兄様大好きすぎる！

「ホント姫ってルーディン様には素直に甘えるよね。私も飛びついて抱きつかれたりしてみたいよ」

「ま、三人、っと、今は四人か。四人もいるんだし、誰か一人に甘えすぎるっていうのも悪い気がするんじゃない？　でも、二人っきりになったら凄く甘えてくるでしょこの子」

「あ、そうかも。二人きりになるとすぐに擦り寄ってくるよね。あ、それはアレかな。でも、無意識だよね多分」

「私らとしては嬉しいんだけどね、ちょっと不安でもあるかな。子供のうちだけだとは思うけど……、気をつけてあげなくちゃね」

「フラニーとメアリーはどうする、俺たちと一緒に行くか？　抱えて飛べる奴呼んでやるぞ？」

「フランさんもメアさんも一緒に行こー？」

「うわ、嬉しさのあまりふにゃけちゃってるわ、可愛い……。あ、っと、私はいいよ、町に行くのはちょっとメンドクサイし、レンの友達には興味あるけど冒険者ギルドにはあんまり行きたく無いかな。ありがと、ルーディン様」

「ふふふ、姫可愛いなあ……。あ、私も遠慮しておきますね。姫とルーディン様だけで……、はちょっと問題ありません？　できたら護衛を誰か一人……」

「そうか？　んじゃクレアでも引っ張って来るか。二人はシラユキの着替えを頼む」

「シラユキの着替え!?　分かりました！　任せて!!」

「あ、ちょっ、フランずるい!!　私も手伝うからね！　あー！　何着せよう！　あ、ルーディン様、すみません。少し長めにお時間を頂いても……？」

「おいおい……。はあ、分かった、昼から行くか。入れ違いになっても知らないからな俺は」

「なんか嬉しすぎて、今日は別に会えなくてもいいかな？　って思えちゃうからそれでもいいよ。ふふふ、可愛い服選んでね？」

「ななな、何この子可愛すぎ!!　ルーディン様シラユキ貸して、……んふふ、キスさせてシラユキー」

「私も私も！　シアのいない間に思いっきり可愛がっちゃおっと」

「おお……、素晴らしい胸の二人に挟まれる最高に可愛い妹……。
ふむ……、これは中々……」

その１４２（後書き）

やっぱり０時投稿はできませんでした……、すみません。
でも一応一日一話は続けていけそうです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3316v/

異世界転生の現実

2011年12月4日02時44分発行